富士市埋蔵文化財調査報告　第 71 集

静岡県　富士市

宇東川遺跡 F 地区

2021 年 3 月

富士市教育委員会

出土遺物集合（古代）

巻頭図版 2

調査地全景（北東側調査区、南から）

例　言

1　本書は、静岡県富士市宇東川西町 544 外において実施した宇東川遺跡 F 地区の発掘調査にかかわる報告である。
発掘調査は公共事業に係る代替地確保のための宅地造成事業に先立つ事前調査として、富士市教育委員会が実施した。

2　発掘調査は、確認調査（1 次調査）を平成 7 年（1995 年）2 月 6 日から 2 月 24 日にかけて、本発掘調査（2 次調査）を平成 7 年 2 月 22 日から 3 月 23 日（平成 6 年度分）と平成 7 年 4 月 14 日から平成 8 年 3 月 28 日（平成 7 年度分）にかけて実施した。
対象面積は 2,000 ㎡、調査面積は確認調査が 266.10 ㎡、本発掘調査が 1344.10 ㎡である。

3　本報告書刊行に向けた整理作業は、令和 2 年（2020 年）4 月 1 日に開始し、本書の刊行をもって終了した。

4　本書の編集は藤村　翔（市民部文化振興課主査）・若林 美希（市民部文化振興課発掘調査員）がおこなった。
執筆は、第 1 章を藤村・小島 利史（市民部文化振興課発掘調査員）、第 2 章を志崎 江莉子（市民部文化振興課発掘調査員）、第 3 章のトレンチ及び遺構を小島、遺物を藤村・志崎、第 4 章第 1 節を志崎、第 2 節を藤村、第 5 章を藤村が担当した。

5　現地調査における記録写真撮影は調査担当者による。
整理作業における遺物写真は志崎が撮影し、遺物単体写真を佐藤祐樹（市民部文化振興課主査）、集合写真を藤村が補佐した。

6　本書で報告した調査に関わる記録図面・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会で保管している。
今後、富士山かぐや姫ミュージアム（富士市立博物館）に移管する予定でいる。

7　本書の作成にあたり、次の方々にご協力とご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。（敬称略、五十音順）
小田 裕樹　木ノ内 義昭　桐井 理揮　櫛原 功一　小泉 祐紀　小崎　晋　篠原 和大　清水　哲
田尾 誠敏　名村 威彦　馬場　基　原　正人　平野　修　廣瀬　覚　堀口 智彦　前嶋 秀張
道上 祥武　渡井 英誉

凡　例

1　座標は任意座標を使用した調査であるが、全体図等は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、世界測地系（平成 14 年 4 月施行）を使用している。

2　挿図の縮尺は、各図に添付したスケールで示す。写真図版の縮尺はすべて任意である。

3　土器の実測図では、断面を以下のように表現することで種類の違いを示した。

縄文土器・弥生土器・土師器　　須恵器　　灰釉陶器・陶器

4　土層・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。

5　遺構･遺物ともに、法量の（　）は残存値、〔　〕は推定値である。また、土器の残存率は図示中での残存率を示した。

6　遺構の略記号は以下の通りである。

SB：竪穴建物　　SH：掘立柱建物　　SD：溝状遺構　　SK：土坑　　Pit：小穴

7　遺構図は、以下の基準に則り記載した。

《平面図》

〈線〉

	線幅	線色
遺構上端	0.2 ㎜	K100%
遺構中端	0.15 ㎜	K100%
遺構下端	0.1 ㎜	K100%
掘立柱復元線（すべて、推定部分は破線 1 ㎜ -1 ㎜）	0.1 ㎜	K100%
調査区	0.15 ㎜	K30%
切りあう遺構	0.1 ㎜	K30%
カクラン（破線 2 ㎜ -0.8 ㎜ -0.5 ㎜ -0.8 ㎜）	0.1 ㎜	K30%
引出し線	0.05 ㎜	K100%

〈土器〉

外形線 0.1 ㎜
稜線 0.05 ㎜
塗り K10%

〈石・金属など〉

外形線 0.1 ㎜
稜線 0.05 ㎜
塗り なし

〈トーン〉

硬化面 K5%　　粘土 K40%　　焼土・炭化物 K20%

《断面図》

〈線〉

	線幅	線色
地表面	0.15 ㎜	K100%
遺構外形線	0.2 ㎜	K100%
分層線	0.1 ㎜	K100%
カクラン（破線 2 ㎜ -0.8 ㎜ -0.5 ㎜ -0.8 ㎜）	0.1 ㎜	K100%
掘削停止面（破線 1 ㎜ -0.5 ㎜）	0.1 ㎜	K100%

〈土器〉

外形線 0.1 ㎜
塗り なし

〈石〉

外形線 0.1 ㎜
塗り 斜線
（線幅 0.4 ㎜ 間隔 1 ㎜ 斜度 45°）

〈トーン〉

掘方埋土 K10%　　地山 K30%　　焼土・炭化物 K20%　　粘土 K40%

8　出土遺物の評価については、主として次の文献に基づいて検討した。

池谷初恵　2019「富士市内出土の中世陶磁器の様相」『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成 29 年度―』富士市教育委員会

櫛原功一　2008「曽利式土器」『総覧　縄文土器』アム・プロモーション

佐藤祐樹　2021「東駿河における古墳時代の土器様相」『向坂鋼二先生米寿記念論集―地域と考古学Ⅱ』向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会

鈴木敏則　1998「古墳時代土器編年の概要」『梶子北遺跡』遺物編（本文）㈶浜松市文化協会

鈴木敏則　2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会

関　義則　2002「埼玉県内出土の火打金」『埼玉考古』第 37 号　埼玉考古学会

藤村　翔　2021「駿河国富士郡における土器様相」『向坂鋼二先生米寿記念論集―地域と考古学Ⅱ』向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会

山 梨 県　1999『山梨県史』資料編 2　原始・古代 2　考古（遺構・遺物）

9　古代の遺構については、上記佐藤・藤村による土師器編年を参考とした時期区分を基に記述した。本文中の□□Ⅰ期とは、□□Ⅰ式併行期を意味する。以下の表は、本書の時期区分と遠江編年（鈴木 1998・2004）および陶邑編年、宮都編年、灰釉陶器編年とのおおよその対応関係を示している。

年代	450	500	550	600	650	700	750	800	850	900	950	1000
時期区分	安久Ⅰ	安久Ⅱ	安久Ⅲ	安久Ⅳ	沢東Ⅰ	沢東Ⅱ	富士Ⅰ	富士Ⅱ	富士Ⅲ	富士Ⅳ	富士Ⅴ	富士Ⅵ	富士Ⅶ	富士Ⅷ
遠江	Ⅰ中	Ⅰ後	Ⅱ	Ⅲ前・中	Ⅲ後・末	Ⅳ前 - 末	Ⅴ前・後		Ⅵ前・後					
陶邑	TK208	TK23・47	MT15	TK10・43	TK209	（TK217・46）								
宮都					飛鳥Ⅰ	飛鳥Ⅱ - Ⅴ	平城Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ							
灰釉陶器									K-14	K-90	O-53	H-72	百代寺	

目　次

例　言

凡　例

目　次

第 1 章　調査の経緯と経過

第 1 節　発掘作業の経緯と経過 …… 1

第 2 節　整理作業の経緯と経過 …… 2

第 3 節　調査の体制 …… 2

第 4 節　調査の方法と概要 …… 3

第 2 章　宇東川遺跡の概要

第 1 節　地理的環境 …… 5

第 2 節　歴史的環境 …… 6

第 3 節　調査履歴 …… 8

第 3 章　遺構と遺物

第 1 節　確認調査 …… 11

第 2 節　竪穴建物 …… 16

第 3 節　その他の遺構 …… 121

第 4 節　遺構外出土遺物 …… 135

第 4 章　まとめ

第 1 節　縄文時代・弥生時代の概略 …… 141

第 2 節　古墳時代から平安時代の遺構・遺物と集落の性格 …… 143

第 5 章　総括 …… 163

付表　遺構一覧表

出土遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 章　調査の経緯と経過
第 1 節　発掘作業の経緯と経過
第 1 図　発掘調査の様子 …… 1
第 2 図　宇東川遺跡 F 地区　位置図 …… 1
第 4 節　調査の方法と概要
第 3 図　確認調査トレンチ及び本調査区配置図 …… 3
第 4 図　基本土層図 …… 4
第 5 図　本調査全体図 …… 4
第 2 章　宇東川遺跡の概要
第 1 節　地理的環境
第 6 図　静岡県富士市の位置 …… 5
第 7 図　周辺地形 …… 6
第 2 節　歴史的環境
第 8 図　遺跡分布図 …… 7
第 3 節　調査履歴
第 9 図　調査履歴図 …… 10
第 3 章　遺構と遺物
第 1 節　確認調査
第 10 図　確認調査 2Tr（南から）…… 11
第 11 図　確認調査トレンチ配置図 …… 11
第 12 図　出土遺物実測図 …… 13
第 13 図　竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑　全体図（西側部分）… 14
第 14 図　竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑　全体図（東側部分）… 15
第 2 節　竪穴建物
第 15 図　SB01・SB02　平面図・断面図 …… 16
第 16 図　SB02　カマド平面図・断面図…… 17
第 17 図　SB01・SB02　出土遺物実測図 …… 17
第 18 図　SB03・SB04　平面図・断面図 …… 18
第 19 図　SB04　カマド平面図・断面図…… 19
第 20 図　SB03　出土遺物実測図…… 19
第 21 図　SB04　出土遺物実測図…… 20
第 22 図　SB05・SB06　平面図・断面図 …… 20
第 23 図　SB05　出土遺物実測図…… 21
第 24 図　SB06　出土遺物実測図…… 21
第 25 図　SB08　平面図・断面図…… 22
第 26 図　SB08　カマド平面図・断面図…… 22
第 27 図　SB08　出土遺物実測図…… 23
第 28 図　SB09　平面図・断面図…… 23
第 29 図　SB09　出土遺物実測図…… 23
第 30 図　SB09　カマド平面図・断面図…… 24
第 31 図　SB10　平面図・断面図…… 24
第 32 図　SB10　カマド平面図・断面図…… 25
第 33 図　SB10　出土遺物実測図…… 25
第 34 図　SB11　平面図・断面図…… 26
第 35 図　SB11　カマド平面図・断面図…… 26
第 36 図　SB11　出土遺物実測図…… 26
第 37 図　SB12・SB13　平面図・断面図 …… 28
第 38 図　SB12　カマド平面図・断面図…… 28
第 39 図　SB13　カマド平面図・断面図…… 28
第 40 図　SB12　出土遺物実測図…… 29
第 41 図　SB13　出土遺物実測図…… 29
第 42 図　SB14　平面図・断面図…… 29
第 43 図　SB14　カマド平面図・断面図…… 30
第 44 図　SB14　出土遺物実測図…… 30
第 45 図　SB15　平面図・断面図…… 30
第 46 図　SB15　カマド平面図・断面図…… 31
第 47 図　SB15　出土遺物実測図…… 31
第 48 図　SB16　平面図・断面図…… 32
第 49 図　SB16　出土遺物実測図…… 32
第 50 図　SB17　平面図・断面図…… 33
第 51 図　SB17　カマド平面図・断面図…… 33
第 52 図　SB17 カマド（南西から）…… 34
第 53 図　SB17　出土遺物実測図…… 34
第 54 図　SB18・SB30　平面図・断面図 …… 35
第 55 図　SB18　出土遺物実測図…… 35
第 56 図　SB30　出土遺物実測図…… 36
第 57 図　SB19　平面図・断面図…… 37
第 58 図　SB19　カマド平面図・断面図…… 37
第 59 図　SB19　出土遺物実測図…… 38
第 60 図　SB20　平面図・断面図…… 38
第 61 図　SB21　平面図・断面図…… 39
第 62 図　SB21　出土遺物実測図…… 39
第 63 図　SB24・SB25・SB27　平面図・断面図 …… 40
第 64 図　SB24　カマド平面図・断面図…… 40
第 65 図　SB24　出土遺物実測図…… 41
第 66 図　SB25　カマド平面図・断面図…… 41
第 67 図　SB25　出土遺物実測図…… 41
第 68 図　SB27　出土遺物実測図…… 41
第 69 図　SB26　平面図・断面図…… 42
第 70 図　SB26　出土遺物実測図…… 42
第 71 図　SB28　平面図・断面図…… 43
第 72 図　SB28　カマド平面図・断面図…… 43
第 73 図　SB28　出土遺物実測図…… 44
第 74 図　SB29　平面図・断面図…… 45
第 75 図　SB29　カマド平面図・断面図…… 46
第 76 図　SB29　出土遺物実測図…… 46
第 77 図　SB31・SB43　平面図・断面図 …… 47
第 78 図　SB31　出土遺物実測図…… 47
第 79 図　SB31　カマド平面図・断面図…… 48
第 80 図　SB43　カマド平面図・断面図…… 48
第 81 図　SB32　平面図・断面図…… 49
第 82 図　SB32　出土遺物実測図…… 49
第 83 図　SB33　平面図・断面図…… 50
第 84 図　SB35　平面図・断面図…… 50
第 85 図　SB35　出土遺物実測図…… 51
第 86 図　SB36　出土遺物実測図…… 51
第 87 図　SB36　平面図・断面図…… 52
第 88 図　SB36　カマド平面図・断面図…… 52
第 89 図　SB38　平面図・断面図…… 53
第 90 図　SB38　出土遺物実測図…… 53
第 91 図　SB39　平面図・断面図…… 54
第 92 図　SB39　カマド平面図・断面図…… 54
第 93 図　SB39　出土遺物実測図…… 55
第 94 図　SB40　平面図・断面図…… 55
第 95 図　SB40　カマド平面図・断面図…… 56
第 96 図　SB40　出土遺物実測図…… 56
第 97 図　SB41　平面図・断面図…… 56
第 98 図　SB41　カマド平面図・断面図…… 57
第 99 図　SB41　出土遺物実測図…… 57
第 100 図　SB42　平面図・断面図 …… 58
第 101 図　SB42　出土遺物実測図 …… 58
第 102 図　SB44　平面図・断面図 …… 59
第 103 図　SB44　カマド平面図・断面図 …… 59
第 104 図　SB44　出土遺物実測図 …… 60

第 105 図　SB45・SB47　平面図・断面図 …… 61
第 106 図　SB45　カマド平面図・断面図 …… 61
第 107 図　SB45　出土遺物実測図 …… 62
第 108 図　SB47　出土遺物実測図 …… 62
第 109 図　SB46　平面図・断面図 …… 63
第 110 図　SB46　カマド平面図・断面図 …… 63
第 111 図　SB46　出土遺物実測図 …… 64
第 112 図　SB48　平面図・断面図 …… 64
第 113 図　SB48　カマド平面図・断面図 …… 64
第 114 図　SB48　出土遺物実測図 …… 65
第 115 図　SB49　平面図・断面図 …… 65
第 116 図　SB49　出土遺物実測図 …… 66
第 117 図　SB49　カマド平面図・断面図 …… 66
第 118 図　SB50　平面図・断面図 …… 67
第 119 図　SB50　カマド平面図・断面図 …… 67
第 120 図　SB50　出土遺物実測図 …… 67
第 121 図　SB51　平面図・断面図 …… 68
第 122 図　SB51　出土遺物実測図 …… 68
第 123 図　SB51　カマド平面図・断面図 …… 69
第 124 図　SB52 カマド …… 70
第 125 図　SB52　平面図・断面図 …… 70
第 126 図　SB52　カマド平面図・断面図 …… 70
第 127 図　SB52　出土遺物実測図 …… 71
第 128 図　SB53　平面図・断面図 …… 71
第 129 図　SB53　カマド平面図・断面図 …… 72
第 130 図　SB53　出土遺物実測図 …… 73
第 131 図　SB54　平面図・断面図 …… 73
第 132 図　SB54　カマド平面図・断面図 …… 74
第 133 図　SB54　出土遺物実測図 …… 74
第 134 図　SB55　平面図・断面図 …… 75
第 135 図　SB55　カマド平面図・断面図 …… 75
第 136 図　SB55　出土遺物実測図 …… 75
第 137 図　SB56　平面図・断面図 …… 76
第 138 図　SB56　カマド平面図・断面図 …… 76
第 139 図　SB56・SB57　出土遺物実測図 …… 76
第 140 図　SB57　平面図・断面図 …… 77
第 141 図　SB57　カマド平面図・断面図 …… 77
第 142 図　SB57　出土遺物実測図 …… 78
第 143 図　SB58　出土遺物実測図 …… 78
第 144 図　SB58　平面図・断面図 …… 78
第 145 図　SB59　平面図・断面図 …… 79
第 146 図　SB59　出土遺物実測図 …… 79
第 147 図　SB60　平面図・断面図 …… 80
第 148 図　SB60　カマド平面図・断面図 …… 80
第 149 図　SB60-06 …… 81
第 150 図　SB60　出土遺物実測図 …… 81
第 151 図　SB61・SB62　平面図・断面図 …… 82
第 152 図　SB61　カマド平面図・断面図 …… 83
第 153 図　SB61　出土遺物実測図 …… 83
第 154 図　SB62　出土遺物実測図 …… 84
第 155 図　SB63　平面図・断面図 …… 84
第 156 図　SB63　カマド平面図・断面図 …… 85
第 157 図　SB63　出土遺物実測図 …… 85
第 158 図　SB63-13 …… 86
第 159 図　SB64　平面図・断面図 …… 87
第 160 図　SB64　カマド平面図・断面図 …… 88
第 161 図　SB64　出土遺物実測図 …… 88
第 162 図　SB65　平面図・断面図 …… 89
第 163 図　SB65　カマド平面図・断面図 …… 90
第 164 図　SB65　出土遺物実測図 …… 91
第 165 図　SB66　平面図・断面図 …… 92
第 166 図　SB66　カマド平面図・断面図 …… 92
第 167 図　SB66　出土遺物実測図 …… 93
第 168 図　SB67　平面図・断面図 …… 93
第 169 図　SB67　カマド平面図・断面図 …… 94
第 170 図　SB67　出土遺物実測図 …… 94
第 171 図　SB68　平面図・断面図 …… 95
第 172 図　SB68　カマド平面図・断面図 …… 95
第 173 図　SB68　出土遺物実測図 …… 95
第 174 図　SB69　平面図・断面図 …… 96
第 175 図　SB69　出土遺物実測図 …… 96
第 176 図　SB70・SB71　平面図・断面図 …… 97
第 177 図　SB70　出土遺物実測図 …… 98
第 178 図　SB71　出土遺物実測図 …… 98
第 179 図　SB72　平面図・断面図 …… 99
第 180 図　SB72　カマド平面図・断面図 …… 99
第 181 図　SB72　出土遺物実測図 …… 99
第 182 図　SB73　平面図・断面図 …… 100
第 183 図　SB73　出土遺物実測図 …… 101
第 184 図　SB74　平面図・断面図 …… 101
第 185 図　SB74　出土遺物実測図 …… 101
第 186 図　SB75　平面図・断面図 …… 102
第 187 図　SB75　カマド平面図・断面図 …… 102
第 188 図　SB75　出土遺物実測図 …… 102
第 189 図　SB76　平面図・断面図 …… 103
第 190 図　SB76　カマド平面図・断面図 …… 104
第 191 図　SB76　出土遺物実測図 …… 104
第 192 図　SB77　平面図・断面図 …… 105
第 193 図　SB77　カマド平面図・断面図 …… 106
第 194 図　SB77　出土遺物実測図 …… 106
第 195 図　SB78　平面図・断面図 …… 107
第 196 図　SB78　出土遺物実測図 …… 107
第 197 図　SB80　平面図・断面図 …… 108
第 198 図　SB80　出土遺物実測図 …… 108
第 199 図　SB81・SB82　平面図・断面図 …… 109
第 200 図　SB81　カマド平面図・断面図 …… 109
第 201 図　SB81　出土遺物実測図 …… 110
第 202 図　SB82　出土遺物実測図 …… 110
第 203 図　SB83・SB84　平面図・断面図 …… 111
第 204 図　SB83　出土遺物実測図 …… 111
第 205 図　SB87　平面図・断面図 …… 112
第 206 図　SB87　出土遺物実測図 …… 112
第 207 図　SB88　平面図・断面図 …… 113
第 208 図　SB88　カマド平面図・断面図 …… 113
第 209 図　SB88　出土遺物実測図 …… 114
第 210 図　SB89・SB90　平面図・断面図 …… 114
第 211 図　SB89　出土遺物実測図 …… 115
第 212 図　SB90　カマド平面図・断面図 …… 116
第 213 図　SB90　出土遺物実測図 …… 116
第 214 図　SB91　平面図・断面図 …… 117
第 215 図　SB91 カマド（東から） …… 118
第 216 図　SB91　カマド平面図・断面図 …… 118
第 217 図　SB91　出土遺物実測図 …… 118
第 218 図　SB92　平面図・断面図 …… 119

第 219 図　SB92 カマド（南から） …… 120
第 220 図　SB92　カマド平面図・断面図 …… 120
第 221 図　SB92　出土遺物実測図 …… 120
第 3 節　その他の遺構
第 222 図　SH01　平面図・断面図 …… 121
第 223 図　SH02　平面図・断面図 …… 122
第 224 図　SH02 出土遺物実測図…… 122
第 225 図　SD01　平面図・断面図 …… 123
第 226 図　SK　平面図・断面図① …… 124
第 227 図　SK　平面図・断面図② …… 125
第 228 図　SK04 出土遺物実測図…… 127
第 229 図　SK09 出土遺物実測図…… 129
第 230 図　SK12 出土遺物実測図…… 129
第 231 図　SK13 出土遺物実測図…… 131
第 232 図　SK20 出土遺物実測図…… 131
第 233 図　SK21 出土遺物実測図…… 131
第 234 図　SK25 出土遺物実測図…… 131
第 235 図　ピット　全体図（西側部分）…… 132
第 236 図　ピット　全体図（東側部分）…… 133
第 237 図　SK25　遺物出土状況 …… 134
第 238 図　Pit10　出土遺物実測図 …… 134
第 4 節　遺構外出土遺物
第 239 図　遺構外　出土遺物実測図① …… 136
第 240 図　遺構外　出土遺物実測図② …… 137
第 241 図　遺構外　出土遺物実測図③ …… 138
第 242 図　遺構外　出土遺物実測図④ …… 139
第 243 図　遺構外　出土遺物実測図⑤ …… 140
第 4 章　まとめ
第 1 節　縄文時代・弥生時代の概略
第 244 図　松原川氾濫推定域図（縄文時代中・後期）…… 141
第 245 図　浮島ヶ原低地周辺の主要遺跡（弥生時代中・後期）…… 142
第 2 節　古墳時代から平安時代の遺構・遺物と集落の性格
第 246 図　宇東川遺跡 F 地区における古代遺物の変遷① …… 144・145
第 247 図　宇東川遺跡 F 地区における古代遺物の変遷② …… 146・147
第 248 図　宇東川遺跡の墨書・刻書土器と関連資料 …… 149
第 249 図　竪穴建物　面積ヒストグラム比較 …… 153
第 250 図　宇東川遺跡 F 地区における遺構の変遷
（古代～中近世）…… 154・155
第 251 図　一色古墳群および比奈・富士岡古墳群　横穴式石室 … 158
第 252 図　6・7 世紀の浮島沼北西岸の集落と古墳群 …… 159
第 253 図　8～10 世紀の浮島沼北西岸の集落 …… 161
第 5 章　総括
第 254 図　宇東川遺跡 F 地区における遺構・遺物の変遷 …… 164

挿 表 目 次

第 2 章　宇東川遺跡の概要
第 3 節　調査履歴
第 1 表　宇東川遺跡調査履歴一覧 …… 8
第 4 章　まとめ
第 2 節　古墳時代から平安時代の遺構・遺物と集落の性格
第 2 表　宇東川遺跡 F 地区　竪穴建物時期別一覧表 …… 152

巻頭図版目次

巻頭図版 1
　出土遺物集合（古代）
巻頭図版 2
　調査地全景（北東側調査区、南から）

写真図版目次

表紙
　律令官人の装身具と筆記具・墨書土器
PL.1
　1. 調査地遠景（南から）
　2. 調査地遠景（東から）
PL.2
　1. 調査地全景（北東側調査区、南から）
　2. 調査地全景（北東側調査区、東から）
PL.3
　1. L- Ⅰ・M- Ⅰグリッド全景
　　（SB51・SB74・SB76・SB77・
　　SB81 ～ 84・SB88 ～ 92、南から）
　2. L- Ⅱグリッド全景
　　（SB04・SB10・SB17 ～ 19・SB30・
　　SB31・SB36・SB43・SH01、南から）
PL.4
　1. SB01・SB02（東から）
　2. SB02 カマド（東から）
　3. SB03（南から）
　4. SB04（南から）
　5. SB04 カマド（南から）
PL.5
　1. SB05（北東から）
　2. SB06（北東から）
　3. SB08（南西から）
　4. SB08 カマド（南西から）
　5. SB12（西から）
　6. SB12 カマド（西から）
　7. SB13（西から）
　8. SB13 カマド（西から）
PL.6
　1. SB10（南から）
　2. SB10 カマド（南から）
PL.7
　1. SB11（南から）
　2. SB11 カマド（南から）
PL.8
　1. SB14（南西から）
　2. SB14 カマド（南西から）
PL.9
　1. SB15（西から）
　2. SB18（南東から）
　3. SB21（南から）
　4. SB19（東から）
　5. SB19 カマド（東から）
PL.10
　1. SB17（南西から）
　2. SB17 カマド（南西から）
PL.11
　1. SB24 カマド（西から）
　2. SB25（西から）
　3. SB25 カマド（北西から）
　4. SB26（西から）
　5. SB27（西から）
　6. SB28（東から）
　7. SB28 カマド（東から）
PL.12
　1. SB29（南西から）
　2. SB29 カマド（南西から）
　3. SB32（東から）
　4. SB35（西から）
　5. SB35 カマド（西から）
PL.13
　1. SB31・SB43（南から）
　2. SB31 カマド（南から）
PL.14
　1. SB36（南西から）
　2. SB36 カマド（南西から）
PL.15
　1. SB39（南西から）
　2. SB39 カマド（南西から）
PL.16
　1. SB40（東から）
　2. SB40 カマド（東から）
PL.17
　1. SB41（東から）
　2. SB41 カマド（東から）
　3. SB42 紡錘車（SB42-01）出土状況（東から）
　4. SB44 カマド検出状況（南西から）
　5. SB44 カマド（南西から）
PL.18
　1. SB45（南西から）
　2. SB45 カマド（南西から）
PL.19
　1. SB48（南西から）
　2. SB48 カマド（南西から）
　3. SB49（南西から）
　4. SB50 カマド（南西から）
　5. SB51 カマド（南から）
PL.20
　1. SB52（西から）
　2. SB52 カマド（西から）
PL.21
　1. SB53（南から）
　2. SB53 カマド（南から）
PL.22
　1. SB53 掘方（南から）
　2. SB54（西から）
　3. SB54 カマド（南から）
　4. SB56 カマド（西から）
　5. SB56・SB57・SB60・SB61・SB62（南から）
PL.23
　1. SB60（南から）
　2. SB57・SB61・SB62（南から）
PL.24
　1. SB63（南西から）
　2. SB63 カマド（北西から）
PL.25
　1. SB64（南から）
　2. SB64 カマド（南から）
PL.26
　1. SB65（東から）
　2. SB65 カマド（東から）

PL.27
1. SB66（北東から）
2. SB66 カマド（南東から）
PL.28
1. SB67（東から）
2. SB71（南西から）
3. SB73（南西から）
PL.29
1. SB72 カマド（南西から）
2. SB77 カマド（南西から）
3. SB76 カマド検出状況（南から）
4. SB76 カマド（南から）
5. SB78・SB80（南から）
6. SB81・SB82（南から）
7. SB83 遺物検出状況（南から）
PL.30
1. SB88（北西から）
2. SH01（南西から）
3. SH02（南東から）
4. SD01（南東から）
PL.31
1. SK09（南西から）
2. SK12（南から）
3. SK13（南東から）
4. 中近世土坑墓群完掘全景（北東から）
5. SK20（南西から）
6. SK25 縄文土器（SK25-01）
出土状況（南東から）
PL.32
出土遺物集合（5・6 世紀）
PL.33
出土遺物集合（7 世紀）
PL.34
出土遺物集合（8 世紀）
PL.35
出土遺物集合（9・10 世紀）
PL.36
出土遺物集合（縄文時代）
PL.37
確認調査　出土遺物
PL.38
確認調査　出土遺物
SB03　出土遺物
PL.39
SB04　出土遺物
SB05　出土遺物
SB06　出土遺物
SB08　出土遺物
SB10　出土遺物
PL.40
SB10　出土遺物
SB12　出土遺物
SB13　出土遺物
SB16　出土遺物
PL.41
SB15　出土遺物
SB17　出土遺物
SB18　出土遺物
PL.42
SB19　出土遺物
PL.43
SB21　出土遺物
SB24　出土遺物
SB25　出土遺物
SB26　出土遺物
SB28　出土遺物
PL.44
SB29　出土遺物
PL.45
SB30　出土遺物
SB31　出土遺物
SB32　出土遺物
SB36　出土遺物
SB38　出土遺物
PL.46
SB39　出土遺物
SB41　出土遺物
SB42　出土遺物
SB44　出土遺物
PL.47
SB40　出土遺物
SB45　出土遺物
SB50　出土遺物
SB51　出土遺物
PL.48
SB51　出土遺物
SB52　出土遺物
SB53　出土遺物
SB54　出土遺物
SB55　出土遺物
SB57　出土遺物
PL.49
SB60　出土遺物
PL.50
SB60　出土遺物
SB61　出土遺物
SB62　出土遺物
PL.51
SB63　出土遺物
SB64　出土遺物
PL.52
SB64　出土遺物
SB65　出土遺物
PL.53
SB66　出土遺物
SB67　出土遺物
SB69　出土遺物
SB70　出土遺物
SB71　出土遺物
PL.54
SB72　出土遺物
SB73　出土遺物
SB74　出土遺物
SB76　出土遺物
PL.55
SB77　出土遺物
SB78　出土遺物
SB83　出土遺物
SB87　出土遺物
PL.56
SB89　出土遺物
SB90　出土遺物
SB91　出土遺物
SH02　出土遺物
SK04　出土遺物
SK20　出土遺物
SK25　出土遺物
PL.57
SK09　出土遺物
SK12　出土遺物
SK13　出土遺物
SK21　出土遺物
PL.58 ～ 62
遺構外　出土遺物

第１章　調査の経緯と経過

第１節　発掘作業の経緯と経過

調査の経緯

富士市土地開発公社理事長　矢部良雄（以下、事業者）は周知の埋蔵文化財包蔵地「宇東川遺跡」の範囲に該当する富士市宇東川西町 544 他（2,000 ㎡）において、公共事業に係る代替地確保のための宅地造成事業を計画した。

平成７年１月５日、事業者から文化財保護法 57 条の２第１項の規定による「埋蔵文化財発掘の届出」があり、富士市教育委員会（教育長　山本厚）は静岡県教育委員会を経由して、これを文化庁長官に提出した（平成７年１月 13 日付富教文第 238 号）。静岡県教育委員会は文化庁の指導により富士市教育委員会と協議の上、着手前に発掘調査を実施すべき旨を事業者に通知した（平成７年２月６日付教文第 3-127 号）。平成７年２月１日、事業者は富士市教育委員会と協議の上、発掘調査承諾書を提出した。

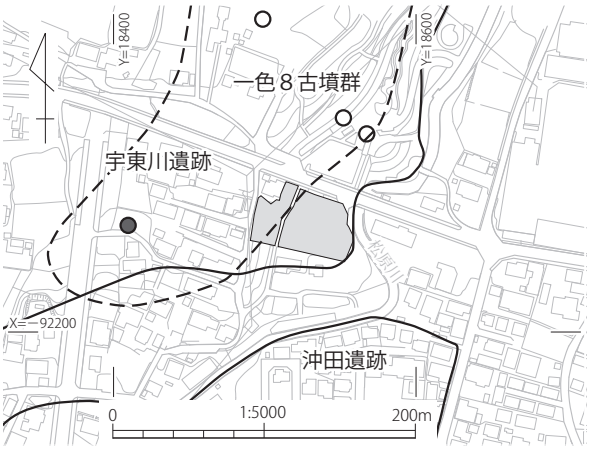
平成６年度の調査

平成７年２月３日、富士市教育委員会は確認調査を計画し、文化財保護法 98 条の２第１項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の通知」を文化庁長官に提出した（平成７年２月３日付富教文第 255 号）。確認調査は、平成７年２月６日から２月 24 日にかけて実施することとした。平成７年２月 13 日、確認調査の結果、遺構や遺物が多数検出されたことから、急遽、本発掘調査を計画した（平成６年度分本調査）。調査は、平成７年２月 22 日から平成７年３月 23 日まで行った。この調査の後、富士市教育委員会は富士警察署および静岡県教育委員会に対して埋蔵文化財発見届及び保管証（コンテナ４箱）を提出し（平成７年３月 29 日付富教文第 317・318 号）、さらに静岡県教育委員会に対して、確認調査及び本発掘調査（平成６年度分）終了報告を提出した（平成７年４月３日付富教文第１号）。

平成７年度の調査

平成７年４月、富士市教育委員会は、前年度に引き続いて本発掘調査（平成７年度分）を計画し、文化財保護法 98 条の２第１項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の通知」を文化庁長官に提出した（平成７年４月 18 日付富教文第 16 号）。調査は、平成７年４月 14 日から平成８年３月 28 日まで行った。この調査の後、富士市教育委員会は静岡県教育委員会に本発掘調査（平成７年度分）終了報告を提出し（平成８年３月 29 日付富教文第 297 号）、富士警察署および静岡県教育委員会に対して埋蔵文化財発見届及び保管証（コンテナ 30 箱）を提出した（平成８年３月 29 日付富教文第 298・299 号）。

第１図　発掘調査の様子



第２図　宇東川遺跡Ｆ地区　位置図

第2節　整理作業の経緯と経過

発掘調査報告書（本書）刊行のための整理作業は、発掘調査終了後、土器の洗浄・注記、一部の資料については接合までが富士市教育委員会により進められていたが、開発等の対応のため、長らく中断されていた。そのような状況のなか、整理作業再開の目途が立ったことから、令和2年4月より再開することとなった。

その後、出土遺物の接合の再検討、復原、図化、写真撮影、発掘記録図面類・観察表等の整理、遺構図・遺物図のトレース作業、報告原稿の執筆等を行い、これらを編集して報告書を作成した。

令和3年3月31日、宇東川遺跡F地区の埋蔵文化財発掘調査に関わる一連の作業は、本書の刊行をもって終了した。

第3節　調査の体制

宇東川遺跡F地区に関する一連の調査は、以下の体制で実施した。

平成6年度（確認調査・本発掘調査）

〔調査主体〕

富士市教育委員会	教育長	山本　厚
	教育次長	影島英三
文化振興課	課　長	立田守彦
	課長補佐	若林富彦
	係　長	池田晴夫
調査担当者	主　査	渡井義彦
	主　事	久保田伸彦

平成7年度（本発掘調査）

〔調査主体〕

富士市教育委員会	教育長	山本　厚（平成7年12月まで）
		太田　均（平成8年1月より）
	教育次長	影島英三
文化振興課	課　長	立田守彦
	課長補佐	平澤信子
	係　長	池田晴夫
調査担当者	指導主事	前嶋秀張
	主　事	前田勝己
	臨時職員	石川武男

令和2年度（整理作業）

〔調査主体〕

富士市教育委員会	教育長	森田嘉幸

〔担当機関〕

富士市役所市民部	部　長	高野浩一
文化振興課	課　長	久保田伸彦
文化財担当	統括主幹	植松良夫
	参事補	石川武男
調査担当者	主　査	佐藤祐樹
	主　査	藤村　翔
	調査員	小島利史
		若林美希
		志崎江莉子
整理作業員	事務補助	井上尚子
		金田純子
		小田貴子
		伊藤純子
	報告書事務補助	渡辺美規子

第4節　調査の方法と概要

確認調査

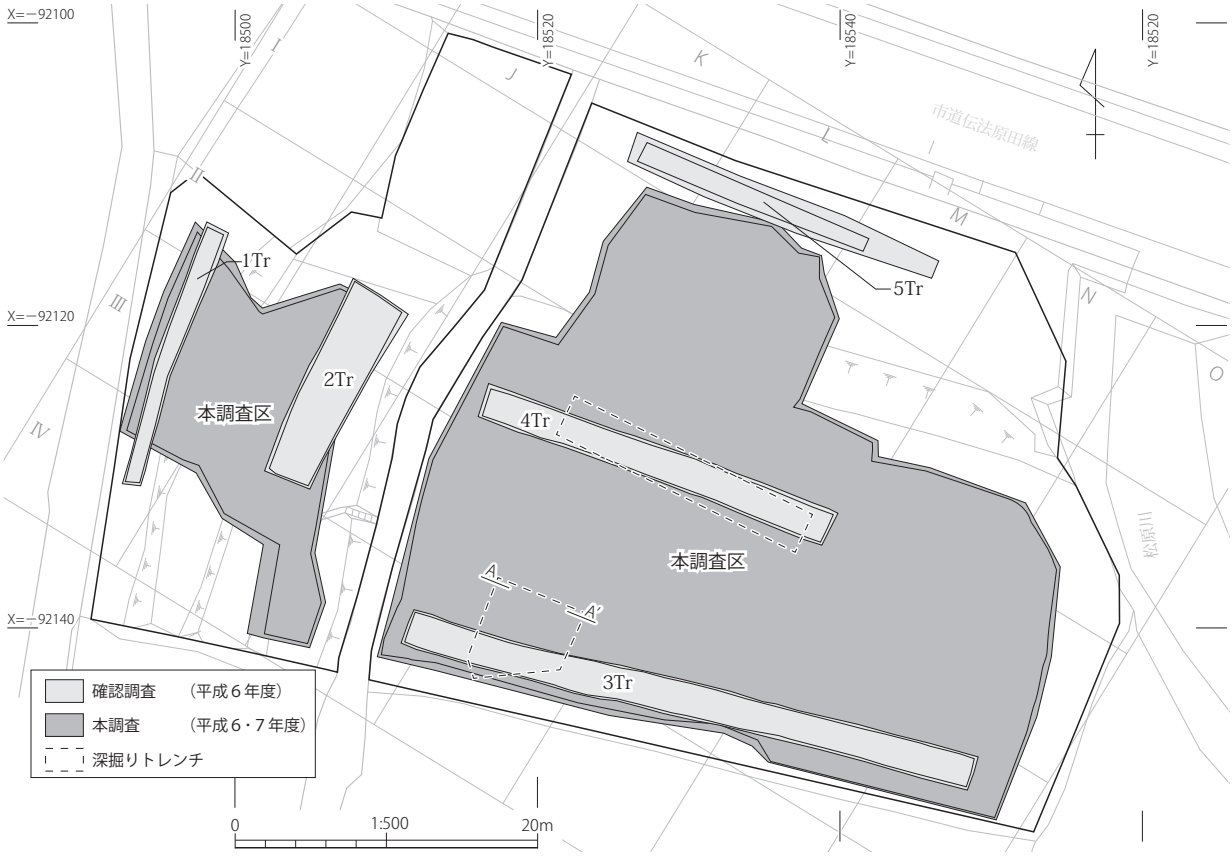
確認調査は平成7年2月6日から2月24日の期間で実施した。調査では、敷地内に5ヶ所のトレンチを設定し、重機による表土除去の後、人力による遺構精査につとめた。その結果、特に2Tr～4Trを中心に竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑等が検出され、灰釉陶器、須恵器、土師器等の遺物も出土した。

本発掘調査

本発掘調査は平成7年2月22日から平成7年3月23日（平成6年度分）、平成7年4月14日から平成8年3月28日（平成7年度分）の期間で実施した。確認調査の成果から敷地内に調査区を設定し、調査を実施した。なお、敷地は南北方向の道路により分断されるため調査区も2ヶ所に分けることとした。調査区には以前の宇東川遺跡内の調査事例を踏まえて、東方向に31.5度傾けた10mグリッドを設定し、グリッド番号は北西端を起点に敷地内において東西方向にI～O、南北方向に0～Ⅳの番号を付した。

調査工程は、排土を敷地内で処理する必要があったため、最初に確認調査3Tr、4Trで遺構が検出された東側調査区の南西部分の調査を行い、次に西側調査区、そして調査が終了した東側調査区の南西部分を排土置き場として、東側調査区の南東部分と北側部分の調査を実施した。

調査は表土直下を遺構確認面とし重機による表土除去の後、人力による遺構精査につとめた。その結果、縄文時代および古墳時代から平安時代にかけての竪穴建物84棟、掘立柱建物2棟、溝1条、土坑20基、ピット144基を検出し、完掘した。また工事によって削平される西側調査区全体及び東側調査区の一部については遺構の完掘後、深掘りトレンチを設定し、縄文遺物包含層の掘削を実施した。



第3図　確認調査トレンチ及び本調査区配置図

基本土層（第４図）

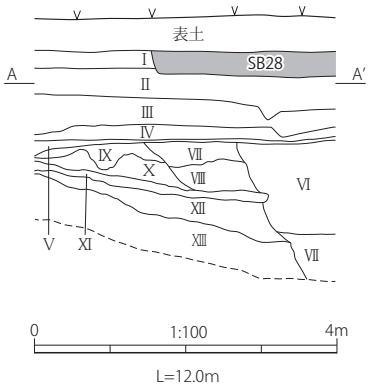
基本土層として縄文遺物包含層の確認のため地表下 3.5m まで掘削した東側調査区深掘りトレンチの土層堆積状況を記載する。この地点においては地表下 0.4m、標高 12.5m で古墳時代から平安時代の遺構検出面であるⅠ層の上面が確認できる。なお遺構検出面はこの地点から北側は緩やかに上がり、東側調査区北端で標高 13.2m、また東側は緩やかに下がり、東側調査区東端で標高 11.5m となる。

西側調査区の遺構検出面は標高 15.2m となる。遺構検出面とされるⅠ層は、その土層中からも古代の遺物が出土する遺物包含層として認識される。

縄文遺物包含層はⅡ層、Ⅴ層、ⅩⅢ層の 3 層が認識され、無遺物層を挟んで堆積している状況が確認された。

深掘りトレンチの土層からは埋没した河道（旧河道）の存在も確認でき、堆積状況から縄文時代中期に埋没したことが認識される。

（藤村　翔・小島 利史）



Ⅰ	黒色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。	古代遺物包含層
Ⅱ	褐色	しまり強、粘性なし。溶岩礫少量。	縄文遺物包含層
Ⅲ	暗褐色	しまり強、粘性なし。溶岩礫多量。	
Ⅳ	暗褐色	しまり強、粘性なし。	
Ⅴ	褐色	しまり強、粘性なし。	縄文遺物包含層
Ⅵ	暗褐色	しまり強、粘性なし。黄褐色シルト、礫混入。	旧河道
Ⅶ	黄褐色	しまり強、粘性なし。黄褐色シルト、砂混入。	旧河道
Ⅷ	黄褐色	しまり強、粘性なし。溶岩礫微量。	
Ⅸ	暗褐色	しまり強、粘性なし。溶岩礫多量。	
Ⅹ	暗黄色	しまり強、粘性なし。	
Ⅺ	黒褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫微量。大沢スコリア極微量。	
Ⅻ	暗褐色	しまり強、粘性なし。溶岩礫少量。黄褐色土混入。	
ⅩⅢ	黒褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫多量。大沢スコリア極微量。	縄文遺物包含層

第４図　基本土層図

第５図　本調査全体図

第 2 章　宇東川遺跡の概要

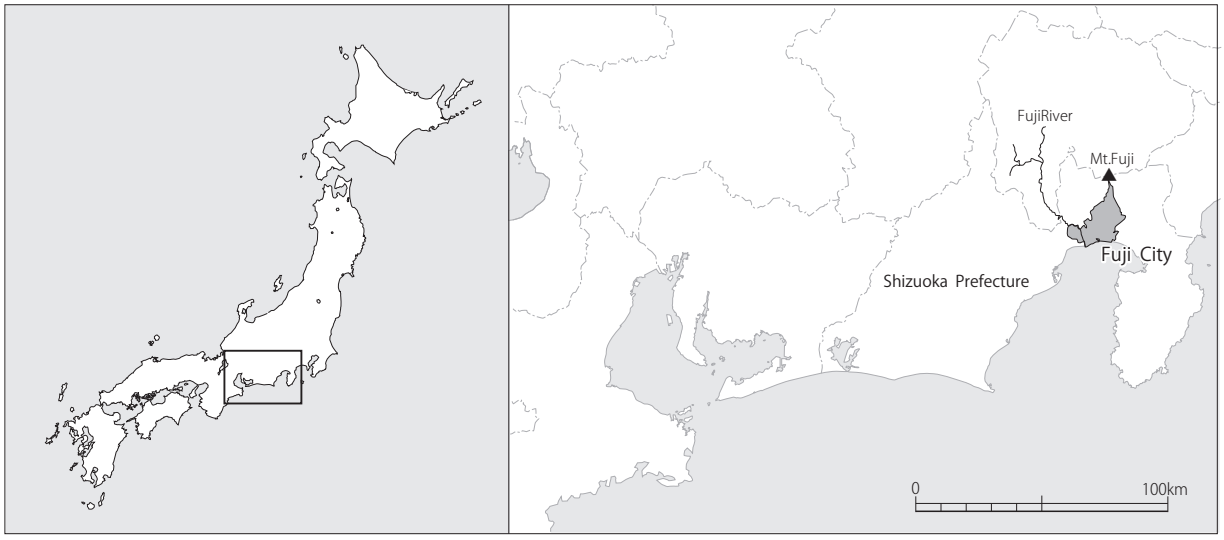
第 1 節　地理的環境

宇東川遺跡が所在する富士市は、静岡県の東部、富士山南麓に位置する。平成 20 年 11 月、富士川を挟んで東西に位置していた旧富士市と旧富士川町が合併し、新たに富士市となった（第 6 図）。

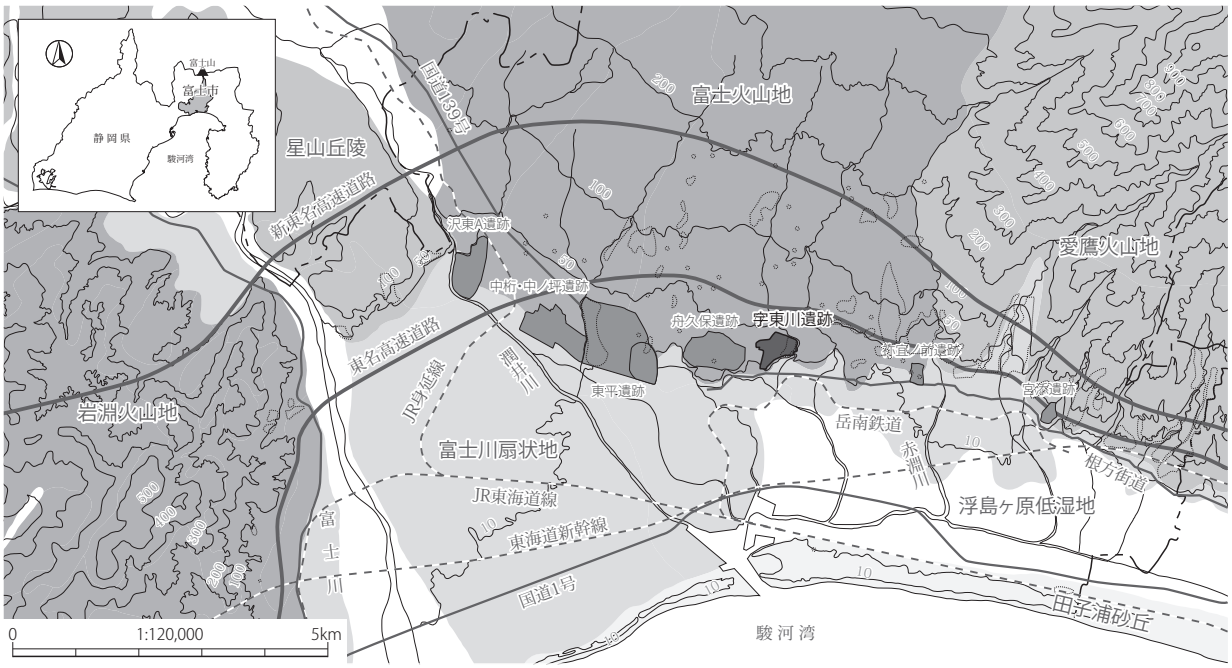
地理的環境を概観すると、駿河湾を南に臨み、北にそびえる富士山は次第に傾斜を緩めながら、山裾を南西に広げている。西には岩本山を有する星山丘陵が、東には約 8 万年前を最後に噴火活動を休止している火山である愛鷹山が存在する。また、西方には北から流下した富士川が駿河湾に注ぎ、富士山西麓から流れる潤井川、愛鷹山に源流をもつ須津川や赤淵川など、多数の河川が流れる（第 7 図）。

こうした環境にある富士市域の地形は、富士山や愛鷹山の新旧火山活動により形成された丘陵地、富士川や潤井川が運搬した土砂の堆積により形成された沖積平野、河川の放出砂礫が駿河湾の沿岸流や波浪によって運搬され形成された田子浦砂丘、砂丘の内側につくられた湖沼に沖積層が堆積して発達した浮島ヶ原低湿地（旧浮島沼）など、変化に富んだ様相をみせている。

地形の基盤のひとつである富士山の噴火活動は、小御岳火山の噴火（数十万年前）に始まり、古富士火山（8 万年～ 1 万 6 千年前）、新富士火山（1 万 4 千年前～現在）と大きく 3 期に分けられる。不透水性の古富士泥流の上に、透水性の新富士火山溶岩流が広がるため、新富士火山溶岩流の末端には数多くの湧水地が存在する。宇東川遺跡 F 地区は、富士山南麓に約 1 万年前に流下した曽比奈溶岩流によって形成された丘陵の南端、松原川西岸の標高約 15m に位置しており、河川や湧水地といった水場へのアクセスが比較的容易な立地環境といえる。また、遺跡の南側に広がる浮島ヶ原低湿地は稲作の適地として、古代より、富士山南麓では限られた農業生産基盤であったとみられる。さらに、富士山南麓から浮島ヶ原低湿地の北縁を通り、沼津市を経て三島市へ至る静岡県道 22 号三島富士線は、通称「根方街道」とも呼ばれる古道で、現在も東西をつなぐ主要な道として残っている。本遺跡をはじめ、この道に沿うようにして、市内では重要な遺跡が数多く確認されており、水と土地、交通に恵まれたこの地域が、古来より人々の営みの地であったことが見て取れる。



第 6 図　静岡県富士市の位置



第７図　周辺地形

第２節　歴史的環境

宇東川遺跡が立地する富士山南麓は、新富士火山の活動により噴出した溶岩流が広がるため、旧石器時代の空白域となっており、人々の生活の痕跡は、縄文時代から確認されている。

宇東川遺跡では、縄文時代中期後葉～後期前葉（曽利Ⅳ式期～堀之内１式期）の建物跡が検出されている。出土する遺物も概ね同時期のもので、早期（押型文）・前期（諸磯ｂ式期）・後期中葉（加曽利Ｂ式期）も少量出土する。松原川を挟んで宇東川遺跡の対岸に位置する中島遺跡では、過去の調査で、配石遺構（環状列石）や竪穴建物跡と思われる落ち込みを検出しており、出土遺物からは後期初頭～中葉（称名寺式期～加曽利Ｂ式期）を中心とした遺跡と考えられる。また、宇東川遺跡・中島遺跡の東には、縄文土器が検出される斉藤上遺跡（中期～後期）・赫夜姫遺跡（後期）が、西には早期の押型文土器が出土した舟久保遺跡が立地する。

弥生時代前期は空白域となる。宇東川遺跡では弥生時代後期から再び建物跡が認められるようになり、立地を変えながら、平安時代まで居住域として継続している様子を見て取ることができる。浮島ヶ原低湿地では、縁辺部や河川の自然堤防上に立地する沖田遺跡・花守遺跡で、矢板や木製品、土器が出土しており、弥生時代中期から古墳時代にかけての、水田耕作に関わる遺跡として位置づけられている。また、沖田遺跡では平安時代の条里型畦畔も検出されており、弥生時代以降、周辺に営まれた集落の生産拠点として重要な地であったことが推定される。

古墳時代になると祢宜ノ前遺跡（前期）、東平遺跡（中期）などで、集落が営まれるようになる。祢宜ノ前遺跡の北西 750m ほどの丘陵先端部には東坂古墳（前期末～中期初頭・前方後円墳）が築かれる。東坂古墳は、約 2.7 ㎞東に立地する浅間古墳（前期後半・前方後方墳）に続く首長墓級の古墳であると考えられている。しかし、これ以降、首長墓級の古墳は、愛鷹山麓（天神塚古墳など）、田子浦砂丘上（庚申塚古墳・山の神古墳）、富士山南麓扇状地（伊勢塚古墳）などに占地するようになる。

宇東川遺跡と包蔵地範囲が重なる一色８古墳群では、飯森東第１号墳・飯森東第２号墳が発掘調査さ

1 宇東川遺跡
2 東平遺跡
3 三日市廃寺跡
4 出口遺跡
5 滝下遺跡
6 国久保遺跡
7 舟久保遺跡
8 善得寺城跡・東泉院跡
9 和田町遺跡
10 新吉原宿遺跡
11 中吉原宿遺跡
12 善得寺廃寺跡
13 沖田遺跡
14 水神堂遺跡
15 中島遺跡
16 三ッ沢遺跡
17 木の宮遺跡
18 斉藤上遺跡
19 赫夜姫遺跡
20 祢宜ノ前遺跡
21 花守遺跡
22 田子浦港遺跡
A 一色8古墳群
B 高山古墳群
C 滝川2古墳群
D 滝川4古墳群
E 比奈1古墳群
F 比奈3古墳群
G 比奈4古墳群
H 富士岡1古墳群
ア 横沢古墳
イ 東平1号墳
ウ 国久保古墳
エ 一色D-第35号墳
オ 実円寺西第1号墳
カ 赫夜姫第1号墳
キ 大坂上古墳
ク 東坂古墳
ケ 間門松沢第1号墳
遺跡の範囲
古墳群の範囲
0
1:30000
1km
田子の浦港
滝川
沼川

第8図　遺跡分布図

れており、古墳時代後期から飛鳥時代に位置づけられている。周辺に立地する高山古墳群（高山第1号墳）、比奈古墳群（大坂上古墳・赫夜姫古墳など）、富士岡1古墳群（花川戸第1～4号墳）、滝川4古墳群（斉藤上古墳など）なども6～7世紀の古墳を擁する古墳群である。

奈良～平安時代には、富士山南麓の扇状地末端部に遺跡が集中し、古代富士郡域における中心地であったと考えられる。天間代山遺跡、沢東A遺跡、沢東B遺跡、川窪遺跡、中桁・中ノ坪遺跡、東平遺跡、滝下遺跡、国久保遺跡、舟久保遺跡、宇東川遺跡、祢宜ノ前遺跡と、集落跡が帯状に広がる。中でも、東平遺跡は富士郡家に関わる遺跡と考えられており、大規模な計画村落といえる集落跡、寺院の存在をうかがわせる大型掘立柱建物跡と大量の布目瓦、郡名を示す「布自」や施設を示す「寺」「厨」などの書かれた墨書土器が出土している。

第3節　調査履歴

これまでに宇東川遺跡では、隣接地を含め33ヶ所58回の発掘調査が行われ（令和3年3月現在）、縄文時代から中近世に至るまで多くの遺構・遺物が検出されている（第9図・第1表）。

宇東川遺跡では、それぞれの調査地区をA～Zのアルファベットで呼称しており、Z地区以降に調査した地区に関しては、27から番号を付与している。

第1表　宇東川遺跡調査履歴一覧

地区	調査の契機	次	調査種類	開始日	終了日	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
A	原田公園造成工事	1	試掘調査	19890925	19891101	縄文 古墳～律令	柄鏡形敷石住居　2軒 竪穴建物跡　84軒	縄文土器・石器 土師器・須恵器	1
		2	本調査	19891201	19901026				
		3	試掘調査	20061010	20061030	縄文 古墳～平安	集石 竪穴建物跡・ピット	縄文土器・石器 土師器・須恵器・灰釉陶器	2・4
		4	試掘調査	20071105	20071203				3・4
		5	本調査	20080618	20090325	縄文 古墳前期 ～平安	埋甕土坑　3基・集石 竪穴建物跡　55軒	縄文土器・石器 土師器・須恵器 灰釉陶器・緑釉陶器・鉄器	4
		6	本調査	20090709	20091030	縄文 奈良・平安	建物跡　2軒 埋甕土坑　1基 竪穴建物跡　2軒 ピット	縄文土器・石器 土師器・須恵器 灰釉陶器	
B	個人住宅建設	1	本調査	19900425	19900520	奈良・平安	竪穴建物跡　11基	土師器・須恵器・鉄器	1
C	原田公園造成工事	1	試掘調査	19890925	19891101	古墳後期	横穴式石室　1基 （飯森東第1号墳） 竪穴建物跡　2軒	土師器・須恵器	1
		2	本調査	19891201	19901026				
D	原田公園造成工事	1	試掘調査	19890925	19891101	平安	竪穴建物跡　2軒	土師器・須恵器	
		2	本調査	19920212	19920309				
E	原田公園造成工事	1	試掘調査	19930913	19930927	弥生～古墳	竪穴建物跡　5軒	土師器・須恵器	
		2	本調査	19931006	19940131	古墳～平安 中近世	竪穴建物跡　20軒 掘立柱建物跡　5軒 横穴式石室　1基 （飯森東第2号墳） 土坑	鉄器	
		3	本調査	19950201	19950315	縄文	竪穴建物跡　2軒 配石土坑・埋甕	縄文土器・石器	
		4	本調査	19950411	19950630				
F	公共用地に係わる代替地造成	1	試掘調査	19950206	19950221	縄文 奈良・平安 中近世	竪穴建物跡 掘立柱建物跡・土坑 土坑	縄文土器 土師器・須恵器・灰釉陶器 石帯・鉄器 銭貨・火打ち鎌	本書
		2	本調査	19950222	19950323				本書
		3	本調査	19950414	19960328				本書
G	原田公園造成工事	1	試掘調査	19970804	19970826	縄文 奈良	竪穴建物跡　5軒	縄文土器・石器 土師器・須恵器	
		2	本調査	19970904	19971031				
H	原田公園造成工事	1	試掘調査	19970327					

地区	調査の契機	次	調査種類	開始日	終了日	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
I	店舗建設	1	試掘調査	19921217	19921221	縄文 奈良・平安	竪穴建物跡　3 軒 溝状遺構・柵列	縄文土器 土師器・須恵器	
		2	本調査	19930105	19930206				
J	宅地造成	1	試掘調査	19940601	19940608		なし	なし	
K	左富士臨港線改良	1	試掘調査	19990318	19990326		なし	なし	
L	宅地造成	1	試掘調査	20000615	20000622	縄文 奈良・平安 中近世	土坑 竪穴建物跡　9 軒・土坑 溝状遺構・土坑・ピット	縄文土器・石器 土師器・須恵器・灰釉陶器 銭貨（元豊通宝）	5
		2	本調査	20000703	20000724				
		3	試掘調査	20000724	20000731				
		4	本調査	20000803	20000821				
M	遺跡確認依頼	1	試掘調査	20041209	20041224	縄文 奈良・平安 中近世	竪穴住居跡（カマド） 礎石跡（寺院？）	縄文土器 土師器・須恵器 陶磁器	6
	宅地造成	2	確認調査	20140603	20140612	縄文	なし	縄文土器	7
N	駐車場建設	1	試掘調査	20060523	20060529	縄文 奈良・平安	竪穴住居跡　1 軒	縄文土器 土師器	2
O	共同住宅建設	1	試掘調査	20070226	20070227		なし	なし	2
P	左富士臨港線建設	1	試掘調査	20070724	20070731	縄文 奈良・平安	土坑 竪穴建物跡　3 軒	縄文土器・石器 土師器・須恵器・鉄器	3
		2	本調査	20080121	20080327				8
		3	試掘調査	20080731			なし	なし	9
Q	宅地造成	1	試掘調査	20080729			なし	なし	9
R	不動産売買	1	試掘調査	20130220	20130220	縄文	なし	縄文土器	10
S	集合住宅建設	1	確認調査	20150203		縄文・平安	なし	縄文土器・土師器	11
T	宅地造成	1	確認調査	20150216	20150219	縄文	なし	縄文土器・石器	11
U	介護施設新築	1	確認調査	20150805	20150806	縄文 古墳 奈良・平安	竪穴建物跡　3 軒	縄文土器 土師器・須恵器	11
	介護施設新築	2	本調査	20150928	20151028	縄文 平安	竪穴建物跡　16 軒 ピット　2 基	縄文土器・石器 土師器・須恵器 灰釉陶器・鉄器	11
V	宅地分譲地造成		確認調査	20160308			なし	土師器・須恵器	11
W	特定有料 老人ホーム新築	1	確認調査	20160411	20160413	縄文 弥生 奈良・平安	ピット・竪穴建物跡	縄文土器・石器 弥生土器 土師器・須恵器・灰釉陶器	12
	特定有料 老人ホーム新築	2	本調査	20160719	20160818	縄文 奈良・平安	竪穴建物跡　10 軒	縄文土器・石器 土師器・須恵器・灰釉陶器	12
X	社宅新築	1	確認調査	20171003		奈良・平安	なし	土師器	13
Y	宅地分譲	1	試掘調査	20171107		縄文 奈良・平安	ピット 3 基 不明遺構	縄文土器 土師器	13
Z	不動産売買	1	確認調査	20180926	20180927	縄文	ピット	土器	15
	不動産売買	2	本調査	20190207	20190322	縄文	埋甕・土坑・ピット	縄文土器	15
	不動産売買	3	本調査	20190408	20190422	縄文	自然流路	縄文土器・石器	15
	個人住宅新築	4	確認調査	20191211		縄文	なし	縄文土器	16
27	不動産売買	1	確認調査	20181217	20181220	縄文	ピット	縄文土器・土師器	14
28	集合住宅新築	1	確認調査	20190925	20190926		なし	なし	16
29	公園整備	1	確認調査	20191031		縄文 古墳～平安	土坑・竪穴建物跡	縄文土器 須恵器・土師器・灰釉陶器	16
30	不動産売買	1	確認調査	20201027	20201028	縄文 古墳～平安	土坑・竪穴建物跡	縄文土器 須恵器・土師器・灰釉陶器	
31	不動産売買	1	確認調査	20210208			なし	なし	
隣接地	左富士臨港線改良	1	試掘調査	19970818	19970819		なし	なし	
隣接地	保育園園庭造成	1	試掘調査	20070731			なし	なし	3

報告書　※全て富士市教育委員会による編集・発行である。

1.『宇東川遺跡 A・B・C 地区発掘調査概報　- 平成 2 年度 -』(1991)
2.『平成 17・18 年度　富士市内遺跡発掘調査報告書』(2008)
3.『平成 15・19 年度　富士市内遺跡発掘調査報告書』(2009)
4.『宇東川遺跡 A 地区　原田公園造成整備事業に伴う 3 ～ 6 次埋蔵文化財調査報告書』(2012)
5.『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 6 集　宇東川遺跡 L 地区』(2001)
6.『平成 16 年度　富士市内遺跡発掘調査報告書』(2006)　※ 26 地区として報告
7.『平成 26・27 年度富士市内遺跡発掘調査報告書』(2017)
8.『宇東川遺跡　平成 19 年度左富士臨港線街路築造工事に伴う宇東川遺跡 P 地区埋蔵文化財発掘調査報告書』(2009)
9.『平成 14・20 年度富士市内遺跡発掘調査報告書』(2010)
10.『富士市内遺跡発掘調査報告書　- 平成 24・25 年度 -』富士市埋蔵文化財調査報告　第 57 集 (2015)
11.『富士市内遺跡発掘調査報告書　- 平成 26・27 年度 -』富士市埋蔵文化財調査報告　第 60 集 (2017)
12.『富士市内遺跡発掘調査報告書　- 平成 28 年度 -』富士市埋蔵文化財調査報告　第 62 集 (2017)
13.『富士市内遺跡発掘調査報告書　- 平成 29 年度 -』富士市埋蔵文化財調査報告　第 66 集 (2019)
14.『富士市内遺跡発掘調査報告書　- 平成 30 年度 -』富士市埋蔵文化財調査報告　第 67 集 (2019)
15.『宇東川遺跡 Z 地区』富士市埋蔵文化財調査報告　第 69 集 (2020)
16.『富士市内遺跡発掘調査報告書　- 令和元年度 -』富士市埋蔵文化財調査報告　第 70 集 (2021)

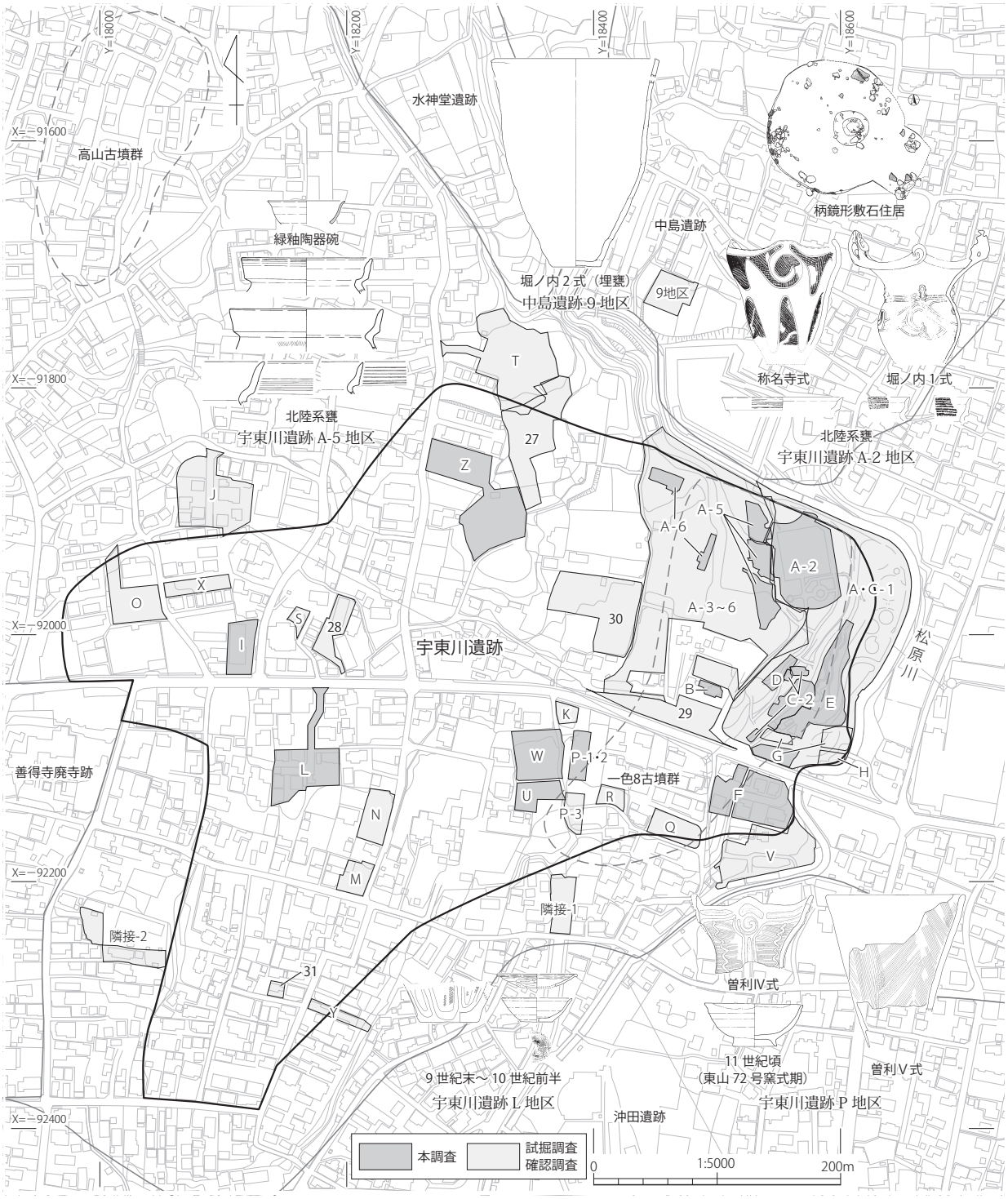
これまでの調査結果を概観すると、縄文時代の遺構・遺物は18ヶ所の地区から検出されており、その内のA・E地区では建物跡が確認された。弥生時代の痕跡があった地区はE･W地区の2ヶ所のみで、E地区では建物跡が確認されている。

古墳時代の遺構･遺物は6ヶ所の地区で確認され、A･C･E･29地区から建物跡が検出された。また、C･E地区からは横穴式石室を主体部とする古墳時代後期～飛鳥時代の古墳2基（飯森東第1号墳・飯森東第2号墳）を検出している。

A～G・I・L・N・P・U・W・29・30地区では律令時代の建物跡が確認された。

松原川の河岸段丘面から、時代を追って西へ、居住域が移動・拡大していくようである。

（志崎 江莉子）



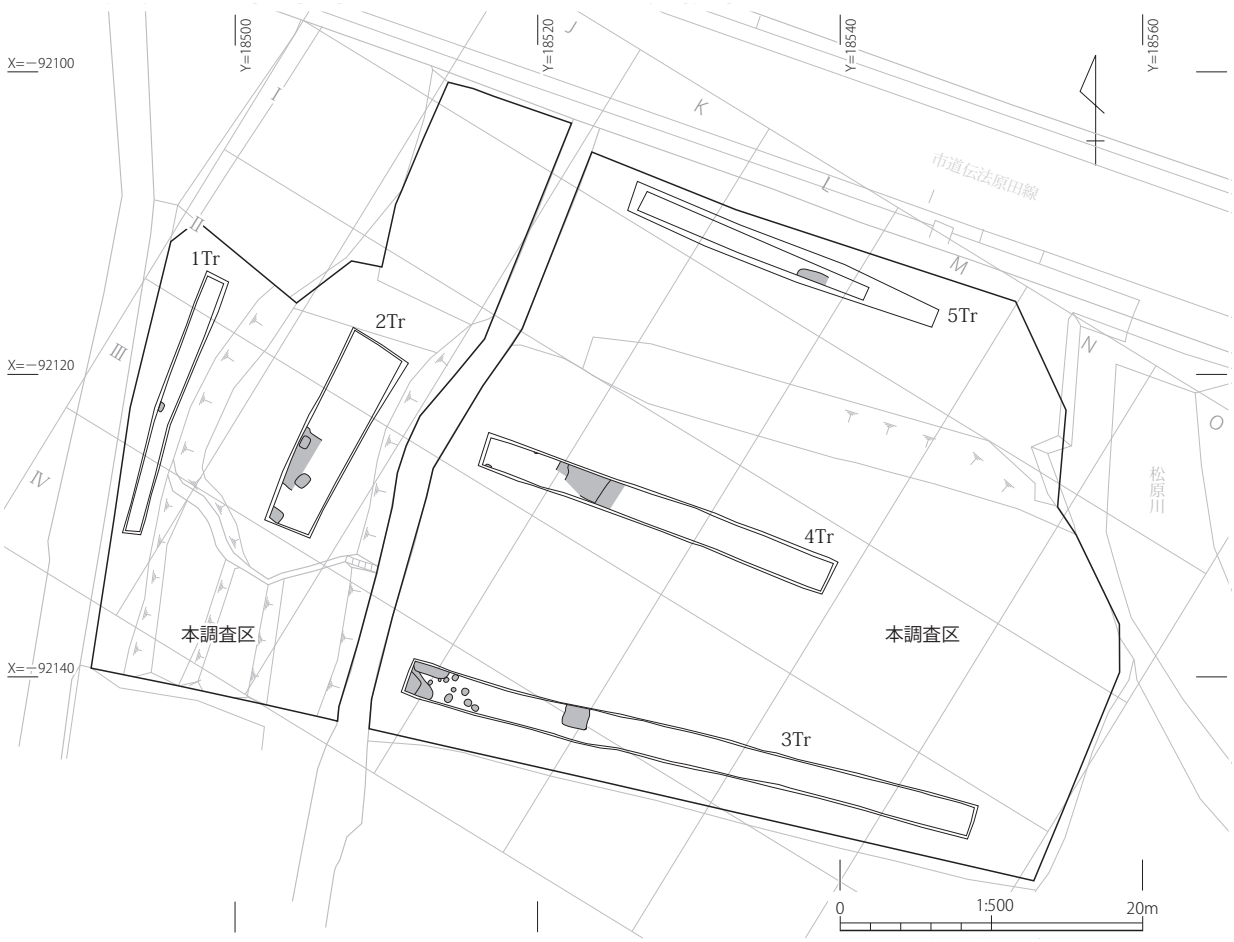
第9図　調査履歴図

第 3 章　遺構と遺物

第 1 節　確認調査

確認調査（第 11 図）では、敷地内に 5 ヶ所のトレンチを設定し調査を実施した。1Tr は地形的に高い位置に設定した南北方向のトレンチであるが、遺構・遺物ともに希薄でピットが 1 基検出されたのみである。1Tr の東側で地形的に一段下がった場所に設定した 2Tr では竪穴建物、土坑等が検出されている。敷地南東部の比較的平坦な場所に設定した東西トレンチの 3Tr・4Tr では、複数の竪穴建物や掘立柱建物が比較的密集して検出された。敷地の北端で地形的に高い位置に設定した東西トレンチである 5Tr は、遺構・遺物ともに希薄であり、南東部に竪穴建物と考えられる遺構が検出されたのみである。

第 10 図　確認調査 2Tr（南から）



第 11 図　確認調査トレンチ配置図

出土遺物（第12図）

確認調査で出土した遺物の内、42点を図示した。

縄文土器　1～23は縄文土器で、曽利Ⅳ式に帰属する。1～6は深鉢の口縁部である。1は横位低隆帯の両脇を指ナデし、下部に櫛歯状工具による斜位の条線を施す。2は横位低隆帯が巡り、その両脇は丸棒状工具による沈線を施す。下部には蛇行沈線文の端部が確認できる。

3は、綾杉状沈線と蛇行沈線文を土器片下部に施し、上部には浅く幅広い2条の沈線が巡る。4は横位沈線と、湾曲する2条の沈線を施文する。5は横位隆帯が巡り、隆帯脇は指ナデし、口縁端部は肥厚する。6は波状口縁である。渦巻文を施し、口縁端部が肥厚する。

7・8は深鉢の胴部片である。7は、土器片中央部に低く幅広い隆帯を貼り付け、隆帯の両脇と上面に沈線を施す。隆帯の両側には湾曲する沈線と、櫛歯状工具による条線を施文する。8は沈線区画内に斜位と縦位の条線を充填する。

9は縦位沈線と斜位の短沈線を施文し、10は綾杉状沈線と、湾曲した沈線を施文する。11は沈線による区画や、渦巻文を施す。沈線区画内には綾杉状沈線を充填する。12は綾杉状沈線と蛇行沈線を施す。13・14は深鉢の胴部片である。いずれも地紋に斜位の条線を施し、縦位隆帯の脇は丸棒状工具による沈線を有する。15は横位沈線とハの字状の沈線を施文する。16・17は隆帯を施した土器で、16の隆帯は渦巻文を呈し、17は内外面共に磨いた痕が確認できる。

18～21は深鉢の胴部片である。18は2条の沈線と綾杉状沈線、蛇行沈線文を施文する。19・20は櫛歯状工具による条線と、蛇行沈線文を施す。21は隆帯を施しており、隆帯脇は指ナデの痕がみとめられる。指ナデ部分は、櫛歯状工具による施文が確認できる。

22・23は深鉢の底部である。22は底部に網代痕がみとめられる。23は縄文を地紋とし、2条の縦位沈線により区画する。

24は土製円盤で、縄文土器の破片を丸く調整した物であると考えられる。器面には櫛歯状工具による条線を施文する。

灰釉陶器　25～29は灰釉陶器の碗である。25は内外面に釉が残る。高台は直線的に開き、底部には糸切り痕が認められる。26はハケにより内外面に釉を施し、高台は低い三日月高台である。27は高台が直線的に開き、内面には磨り痕がみとめられる。28は内外面に釉を施す。高台はやや内湾する高い三日月高台で、底部には回転ヘラケズリがみとめられる。29は外面には釉だれの痕が残り、高台は直線的に開く。高台は貼り付け高台だが、貼付部分の調整は粗い。

須恵器　30は須恵器の坏である。断面四角形の低い高台を有し、底部は回転ヘラケズリの痕を有する。31は須恵器の高坏である。内面に自然釉がみとめられる。口縁端部は面を有し、器面は丁寧な調整を施す。32は須恵器の甕の頸部と考えられる。外面には櫛描波状文と、横位の隆線を施す。33は須恵器の長頸壺で、肩部付近に自然釉が付着している。肩部が強く屈曲することから、遠江Ⅴ期のものだと考えられる。

土師器　34～39は土師器である。34は坏蓋で、摘みは一部破損しているが宝珠形であると想定される。内外面に磨きを施す。

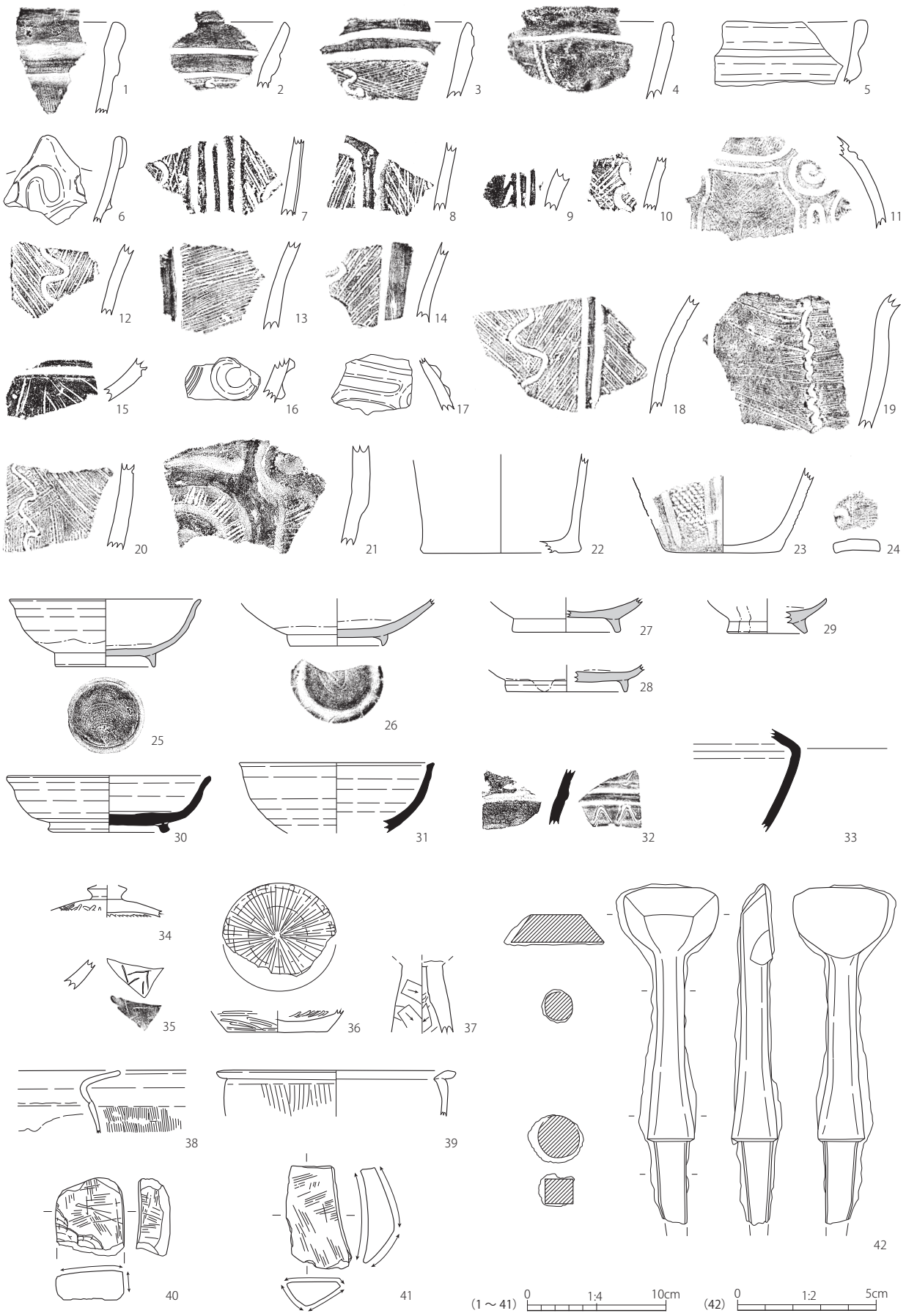
35・36は坏である。35は表面に線刻があり、刻書の可能性がある。36は坏の底部で、底部内面には放射状の磨きを施し、底部外面は篦切り後にナデ調整を施す。器壁外面にはヨコミガキが確認できる。駿東型坏であると考えられる。

37は高坏脚部で、内外面共にヘラケズリによって調整しているが、外面は磨滅により痕が消えている。内面には、成形時に脚部を絞った痕が残る。38は遠江系水平口縁甕の口縁部である。頸部が強く屈曲し、外面はタテハケメ後にヨコナデ、内面はヨコナデを施す。胎土は白みがかったにぶい橙色で、金雲母を含む。39は甲斐型の小型甕の口縁部である。口縁端部に面を有し、外面にはタテハケメが施される。胎土には金雲母を多く含む。

石製品　40・41は凝灰岩を用いた砥石である。40は2面、41は3面に使用痕がみとめられる。

金属製品　42は時期不明の鉄製のノミである。穂長2.4cm、頸部長6.7cm、茎部長2.95cmを測る。

（小島 利史・志崎 江莉子）



第 12 図　出土遺物実測図

第 13 図　竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑　全体図（西側部分）

第 14 図　竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑　全体図（東側部分）

第2節　竪穴建物

SB01

遺構（第15図）

位置　L-Ⅲグリッド

重複関係（古）SB02 → SB01（新）

主軸方位　N-10.0°-E

残存状況　建物全体の範囲は検出されているものの残存状況は良好ではなくカマドの有無等不明である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は主軸（南北）2.68m、直交（東西）2.52m、深さ14cmを測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

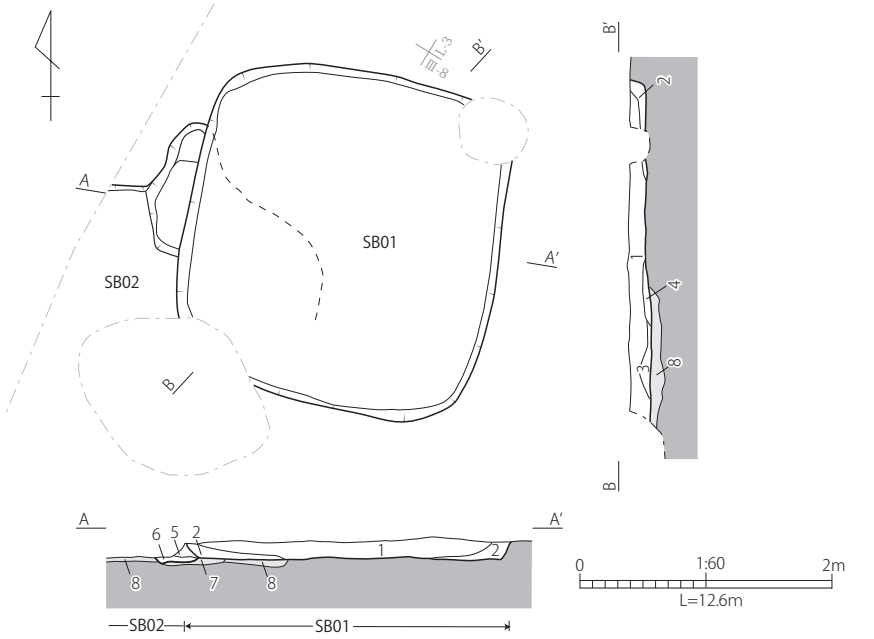
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

出土遺物（第17図）

SB01・SB02のいずれかに伴う遺物として、6点を図示した。1～2は灰釉陶器碗である。1は内面のみ施釉がみとめられる。2の高台は三角高台である。3・4は須恵器で、3が壺の高台部、4は色調が褐色～褐灰色で外面に黄土が塗布される甕である。5は内黒の土師器坏で、底部に回転糸切り痕が残る。6は土師器の小型甕であるが、口縁部は上方に立ち上がるもので、作りもやや繊細さを欠いている。

時期　確実に本建物に伴う遺物は不明瞭であるが、灰釉陶器や土師器の特徴から、富士Ⅵ～Ⅶ期（9世紀後葉～10世紀前半頃）の間におさまるものと考えられる。



1	黒褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア多量。	SB01覆土
2	黒色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大沢スコリア少量。	SB01覆土
3	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア多量。	SB01覆土
4	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫多量。大淵スコリア微量。大沢スコリア多量。	SB01覆土
5	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。大沢スコリア少量。焼土多量。炭化物多量。	SB02覆土
6	暗褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。焼土多量。炭化物多量。	SB02カマド燃焼室
7	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。大沢スコリア多量。焼土少量。	SB02カマド掘方
8	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア多量。褐色ブロック多量。	SB02掘方埋土

第15図　SB01・SB02　平面図・断面図

SB02

遺構（第 15・16 図）

位置　L- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB02 → SB01（新）

主軸方位　N-0.5° -W

残存状況　建物跡の北東部分のみ残存し、床面は撹乱と SB01 により削平されており、掘方のみ検出された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）0.88m、直交（東西）1.78m を測る。

覆土　確認されない。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 8cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

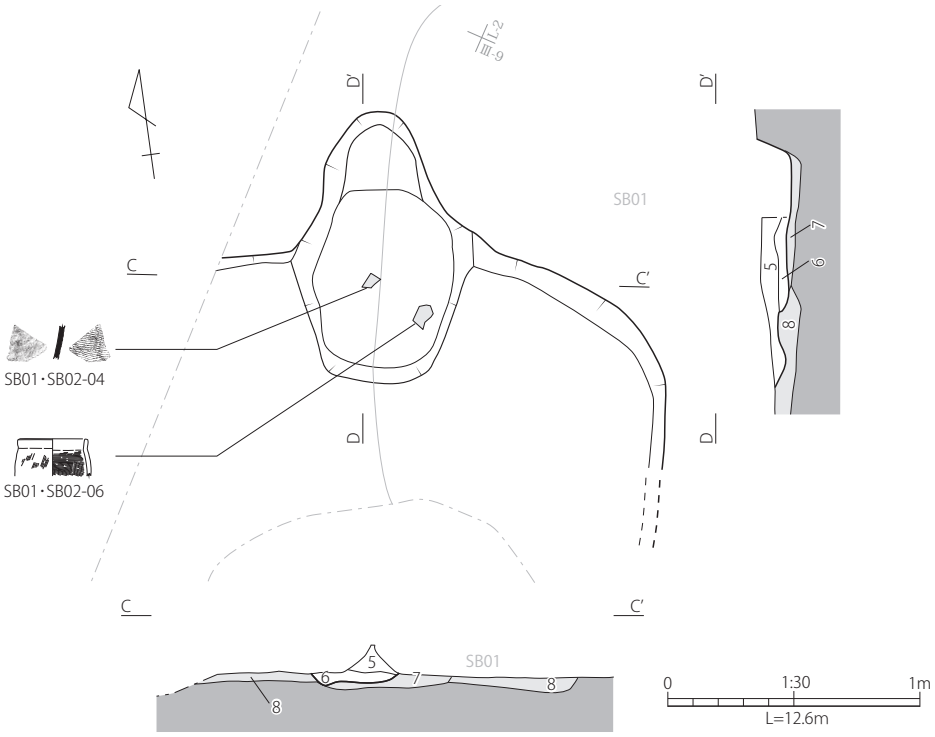
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁。東側が SB01 により削平されている。袖は残存せず燃焼室のみ検出される。全長 108cm、燃焼室幅 73cm を測る。

出土遺物（第 17 図）

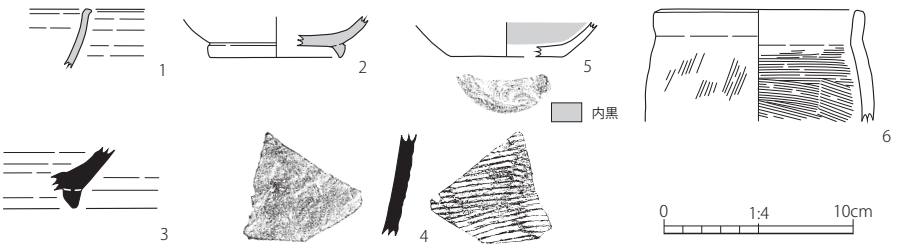
前掲 SB01 を参照。4・6 は本建物のカマドに伴う可能性がある。

時期　確実に本建物に伴う遺物は不明瞭であるが、灰釉陶器や土師器の特徴から、富士Ⅵ～Ⅶ期（9 世紀後葉～ 10 世紀前半頃）の間におさまるものと考えられる。



5	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。大沢スコリア少量。焼土多量。炭化物多量。	SB02覆土
6	暗褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。焼土多量。炭化物多量。	SB02カマド燃焼室
7	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。大沢スコリア多量。焼土少量。	SB02カマド掘方
8	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア多量。褐色ブロック多量。	SB02掘方埋土

第 16 図　SB02　カマド平面図・断面図



第 17 図　SB01・SB02　出土遺物実測図

SB03

遺構（第 18 図）

位置　L- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB04 → SB03 → SH01（新）

主軸方位　N-10.5° -E

残存状況　建物跡の南側は削平されていて北側部分のみ残存する。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）1.76m、直交（東西）2.98m、深さ 10 cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。袖は残存せず燃焼室のみ検出される。全長 70cm、燃焼室幅 37cm を測る。

出土遺物（第 20 図）

1 ～ 3 は須恵器の坏蓋である。1 は口径が 17.4cm を測る摘蓋で、頂部には外面からの穿孔によるものとみられる幅 0.7cm 程の小孔がある。遠江Ⅳ期末～Ⅴ期前（7 世紀後半～ 8 世紀前半頃）か。3 の摘蓋は内面に朱の痕跡があり、また内外面とも磨り痕が顕著であることから、転用硯とみられる。4 は灰釉陶器の皿で、底部は回転ヘラケズリがみとめられる。5・6 は土師器坏で、ロクロナデ主体の調整となる段階のものである。7 は土師器の壺で、口縁部はやや分厚い折り返し口縁となる。8 は鉄鏃の茎部としたが、やや大きいので、鉈などの工具の可能性も残る破片である。一部に樹皮巻きが残る。9 は鉄鍋とみられる破片であり、外面には方形状の把手が取り付く。

時期　カマド周辺から出土した 4 ～ 6 の年代観から、富士Ⅵ期（9 世紀後葉頃）の建物跡と考えられる。

SB04

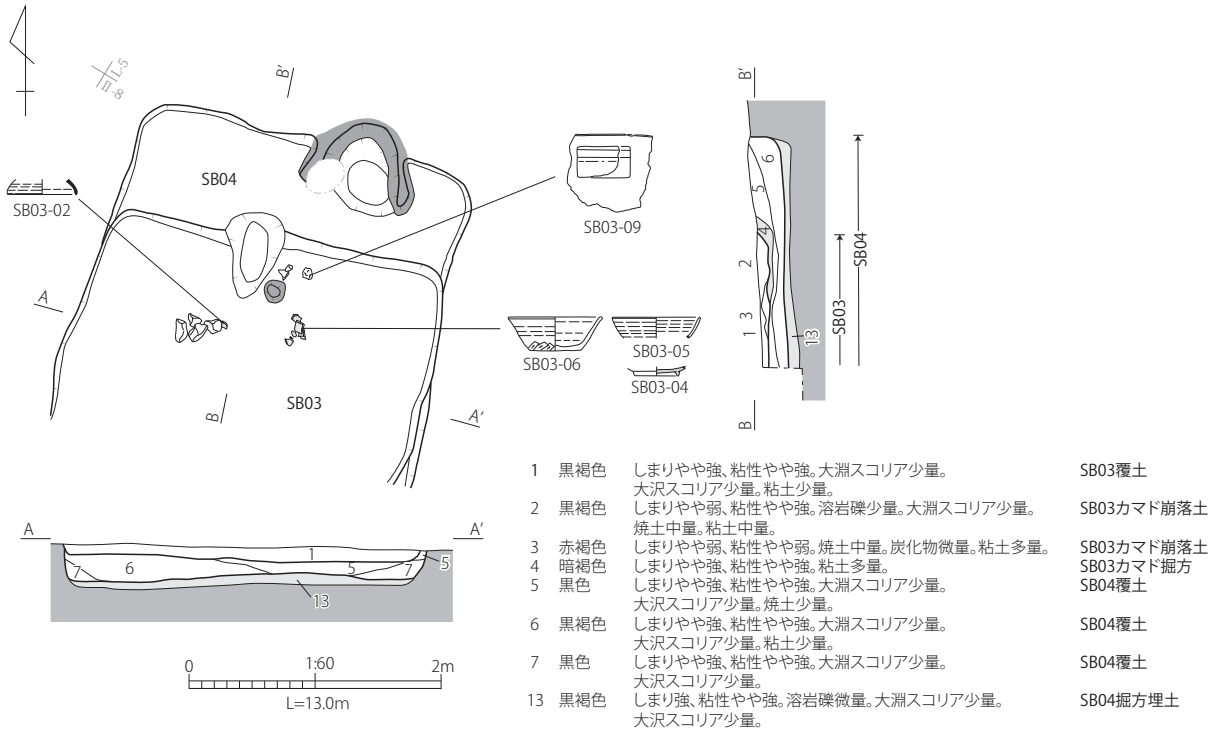
遺構（第 18・19 図）

位置　L- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB31 → SB04 → SB03 → SH01（新）

主軸方位　N-15.0° -E

残存状況　建物跡の南側が SB03 により削平されていて北側部分のみ残存する。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.80m、直交（東西）2.72m、深さ 29 cm を測る。



1	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土少量。	SB03覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。焼土中量。粘土中量。	SB03カマド崩落土
3	赤褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。焼土中量。炭化物微量。粘土多量。	SB03カマド崩落土
4	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。粘土多量。	SB03カマド掘方
5	黒色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。焼土少量。	SB04覆土
6	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土少量。	SB04覆土
7	黒色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB04覆土
13	黒褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB04掘方埋土

第 18 図　SB03・SB04　平面図・断面図

覆土　大淵スコリアを含む黒色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 10cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

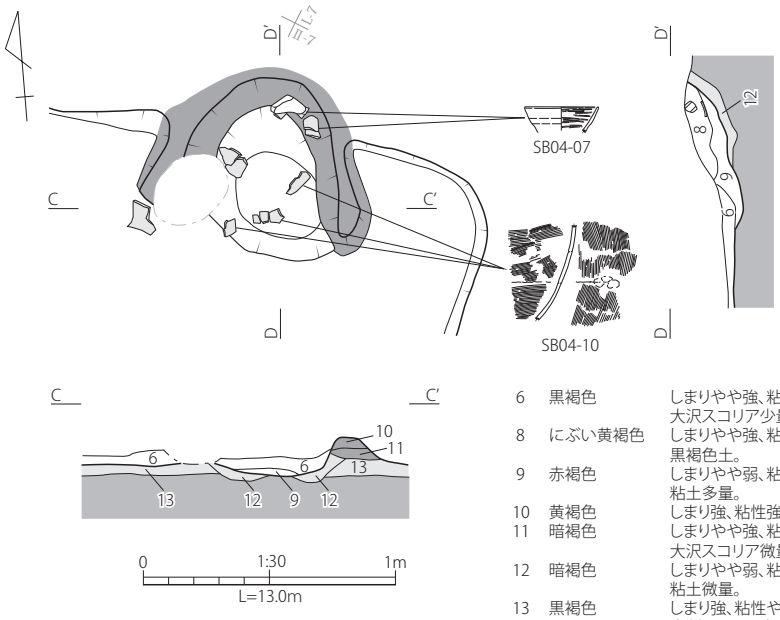
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁東寄り。部分的に撹乱の影響を受けているが両袖とも残存し比較的良好な状態で検出される。全長 69cm、幅 92cm、燃焼室幅 40cm を測る。

出土遺物（第 21 図）

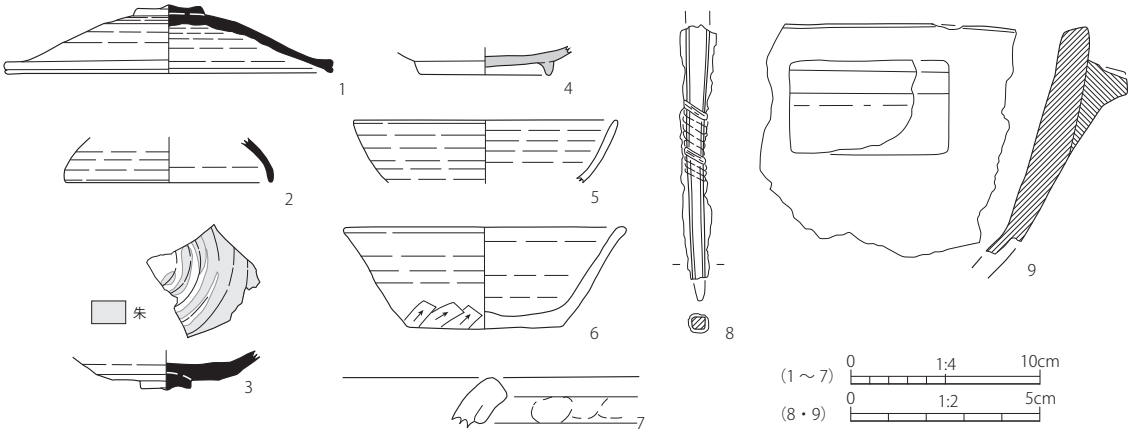
1 ～ 6 が須恵器、7 ～ 11 が土師器である。1 は坏蓋としたが、復原口径が 14.2cm とやや大きく、返りも扁平なため埦形の無蓋高坏の可能性もある。3 はフラスコ瓶の肩部、4 は提瓶またはフラスコ瓶の体部で、粘土板による閉塞痕がみとめられる。7 は坏で内面に横ミガキが施される。8 は坏で、底部に回転糸切り痕が残る。10 は在地の長胴甕、11 は小型甕である。

時期　カマド周辺から出土した 10 と同時期とみられる 7・8・11 の共伴を重視すれば、富士Ⅴ期（9 世紀中葉頃）の建物跡と考えられる。

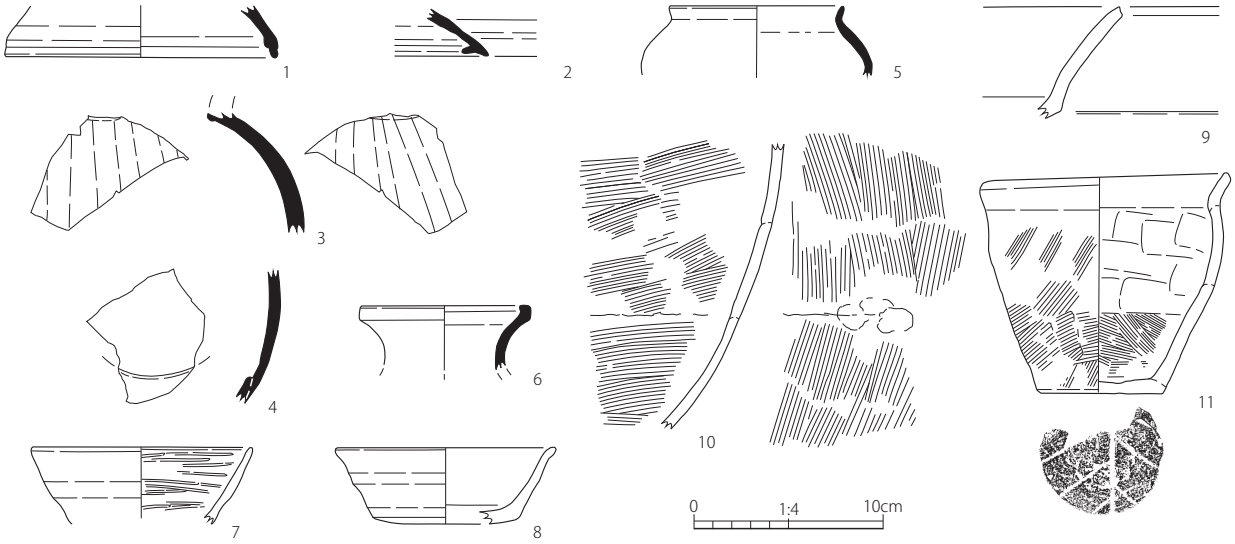


6	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土少量。	SB04覆土
8	にぶい黄褐色	しまりやや強、粘性やや強。粘土多量。黒褐色土。	SB04カマド崩落土
9	赤褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。焼土多量。粘土多量。	SB04カマド燃焼室
10	黄褐色	しまり強、粘性強。黒色土微量。	SB04カマド袖
11	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。粘土少量。	SB04カマド袖
12	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや強。焼土微量。粘土微量。	SB04カマド掘方
13	黒褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB04掘方埋土

第 19 図　SB04　カマド平面図・断面図



第 20 図　SB03　出土遺物実測図



第 21 図　SB04　出土遺物実測図

SB05

遺構（第 22 図）

位置　L- Ⅳグリッド

重複関係（古）SB05 → SB06（新）

主軸方位　N-36.0° -W

残存状況　建物跡の西側及び南側は調査区域外となり検出できない。部分的に覆土の上層が SB06 により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）3.39m、直交（東西）1.76m、深さ 24cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含まない黒色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 11cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

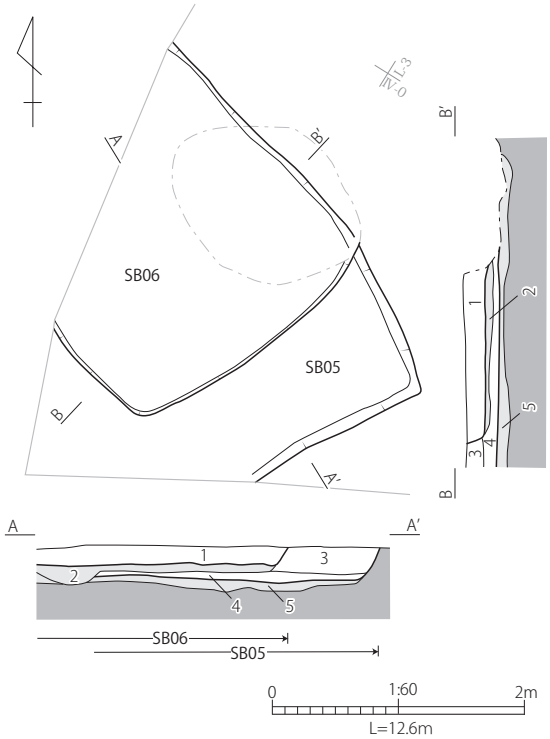
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

出土遺物（第 23 図）

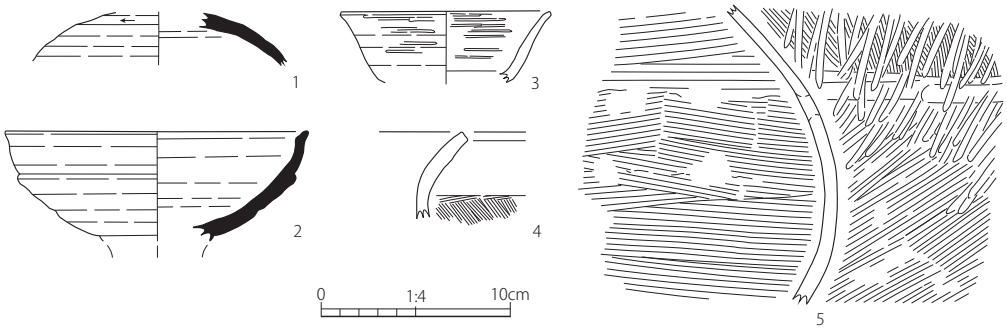
1 は須恵器の坏蓋である。2 は須恵器の無蓋高坏（半球形高坏）の坏部片である。口唇部に緩やかな面を有し、外面の口縁部と体部の境界は緩い突帯状の稜線がめぐるものの、体部はやや浅い。3 は土師器坏で、内外面に若干のヨコミガキが入る。4 ～ 5 は土師器の甕で、5 はいわゆる球胴甕の体部であり、肩部にミガキが施される。

時期　2・5 を重視すれば、沢東Ⅱ期（7 世紀中葉～後葉頃）の建物跡と考えられる。



1	黒褐色	しまりやや弱、粘性なし。溶岩礫少量。大沢スコリア少量。	SB06覆土
2	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大沢スコリア中量。	SB06掘方埋土
3	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大沢スコリア少量。	SB05覆土
4	黒色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫微量。大沢スコリア少量。	SB05覆土
5	黒褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大沢スコリア中量。	SB05掘方埋土

第 22 図　SB05・SB06　平面図・断面図



第 23 図　SB05　出土遺物実測図

SB06

遺構（第 22 図）

位置　L- Ⅳグリッド

重複関係　（古）SB05 → SB06（新）

主軸方位　N-47.0° -E

残存状況　建物跡の西側は調査区域外となり検出できず、北側は撹乱により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.28m、直交（東西）2.30m、深さ 16cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含まない黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 7cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

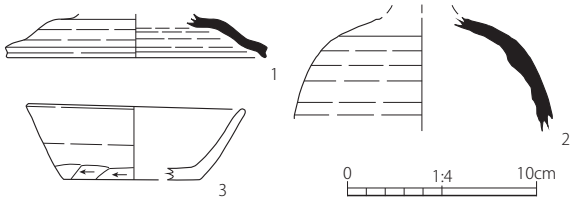
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

出土遺物（第 24 図）

1 は須恵器の摘蓋で、頂部に回転ヘラケズリがみとめられる。2 は須恵器壺の肩部か。3 は土師器の坏であり、内外面はともにロクロナデで、外面の底部付近にケズリが施される。

時期　2 を重視すれば、富士Ⅵ期（9 世紀後葉頃）の建物跡と考えられる。



第 24 図　SB06　出土遺物実測図

SB08

遺構（第 25・26 図）

位置　M- Ⅲグリッド

重複関係　なし

主軸方位　N-37.0° -E

残存状況　建物跡全体が残存し比較的良好な状態で検出される。平面形は隅丸方形を呈し、規模は主軸（南北）2.89m、直交（東西）2.95m、深さ 10cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 9cm の貼り床が施される。

柱穴　2 基のピットが検出される。規模は長軸 26 ～ 35cm、短軸 20 ～ 35cm、床面からの深さ 13 ～ 20cm を測る。

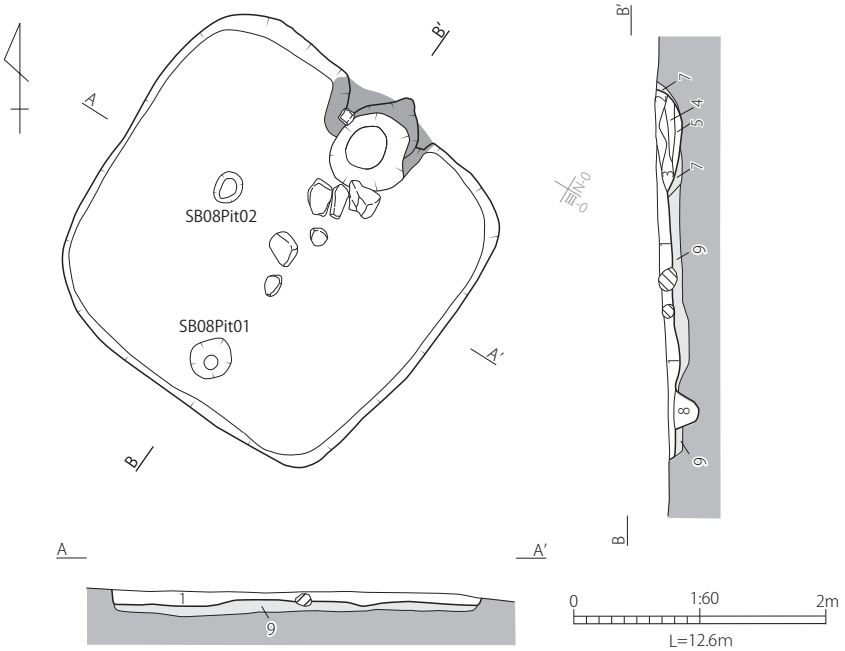
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。両袖とも残存し比較的良好な状態で検出される。左袖端部には芯材となる石材が検出され、またカマドの前側の床面にも数個の石材（20 ～ 30cm）が検出される。規模は全長 86cm、幅 89cm、燃焼室幅 57cm を測る。

出土遺物（第 27 図）

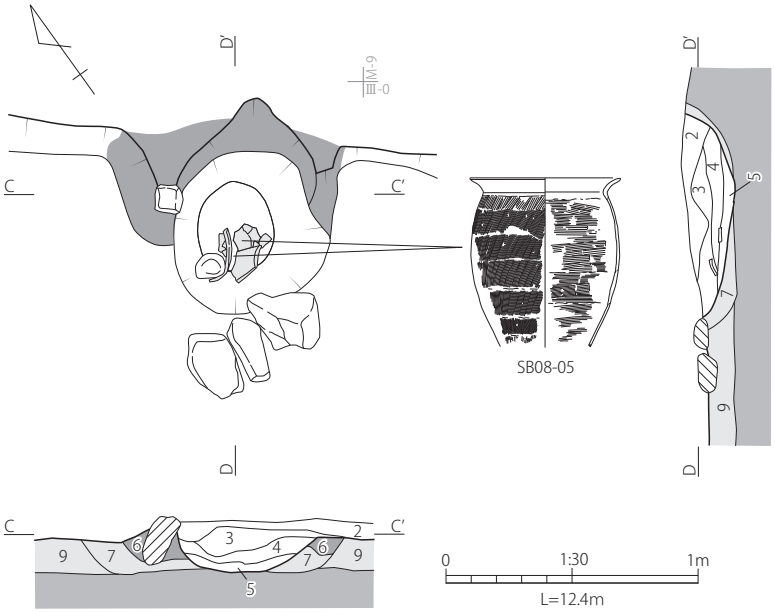
1 は須恵器甕の体部片である。2 ～ 5 は土師器で、2 は底部外面にヘラケズリを施す坏である。内面に暗文やミガキはみとめられないが、甲斐型坏の模倣品と考えられる。3･4 は小型甕、5 は長胴甕であり、肩～口縁部の形状は大型・小型を問わず共通している。6 は石英粒子を多く含む凝灰岩製の砥石である。

時期　カマド付近出土の 4・5 に 2 が共伴すると考えれば、富士Ⅳ期（9 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



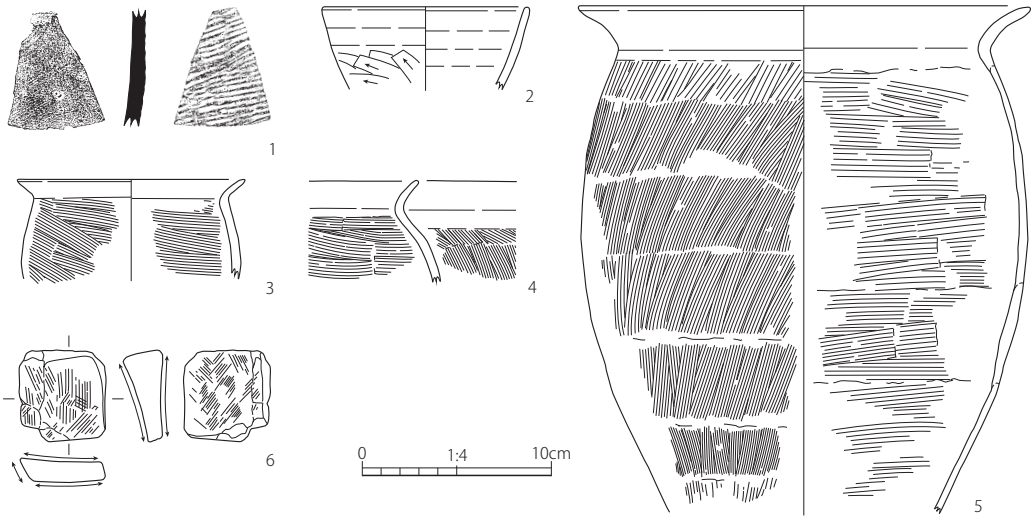
1	黒褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB08覆土
2	黒褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。	SB08覆土
3	黄褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。粘土多量。	SB08カマド崩落土
4	黄褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土多量。粘土多量。	SB08カマド燃焼室
5	赤褐色	しまり強、粘性やや強。焼土多量。粘土少量。	SB08カマド燃焼室
7	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB08カマド掘方
8	黒褐色	しまり弱。、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB08Pit01覆土
9	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫多量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB08掘方埋土

第 25 図　SB08　平面図・断面図



2	黒褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。	SB08覆土
3	黄褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。粘土多量。	SB08カマド崩落土
4	黄褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土多量。粘土多量。	SB08カマド燃焼室
5	赤褐色	しまり強、粘性やや強。焼土多量。粘土少量。	SB08カマド燃焼室
6	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫微量。大沢スコリア微量。粘土多量。	SB08カマド袖
7	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB08カマド掘方
9	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫多量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB08掘方埋土

第 26 図　SB08　カマド平面図・断面図



第 27 図　SB08　出土遺物実測図

SB09

遺構（第 28・30 図）

位置　L- Ⅱグリッド

重複関係

（古）SB43→SB30→SB18→SB11→SB09（新）

（古）SB36 → SB18 → SB31 → SB09（新）

（古）SB19 → SB20 → SB11 → SB09（新）

主軸方位　N-120.5° -E

残存状況　建物跡全体が検出されるものの上層は削平されていて覆土は浅い。平面形は方形を呈し、主軸（東西）3.52m、直交（南北）3.03m、深さ 8cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

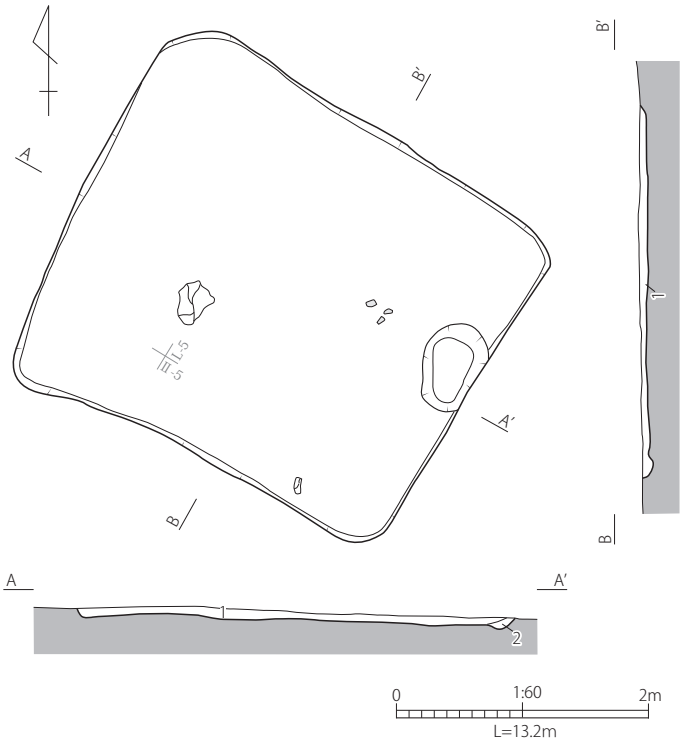
その他の遺構　確認されない。

カマド　東壁中央。両袖とも残存せず燃焼室のみ検出される。規模は全長 47cm、燃焼室幅 72cm を測る。

出土遺物（第 29 図）

1 は土師器長胴甕である。口縁部の作りはやや厚く、口唇部に緩い面を有する。

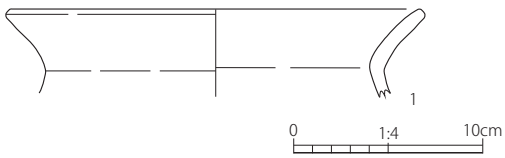
時期　1 の特徴から、富士Ⅴ～Ⅵ期（9 世紀中葉～後葉頃）の建物跡と考えられる。



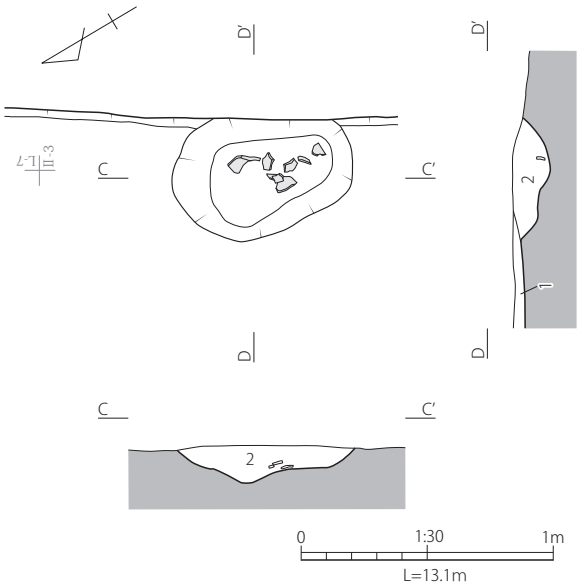
1　黒褐色　しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。　SB09覆土

2　赤褐色　しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア少量。焼土多量。粘土中量。　SB09カマド燃焼室

第 28 図　SB09　平面図・断面図



第 29 図　SB09　出土遺物実測図



1	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB09覆土
2	赤褐色	しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア少量。焼土多量。粘土中量。	SB09カマド燃焼室

第 30 図　SB09　カマド平面図・断面図

SB10

遺構（第 31・32 図）

位置　L- Ⅱ グリッド

重複関係

（古）SB43 → SB30 → SB18 → SB11 → SB10（新）

（古）SB19 → SB20 → SB11 → SB10（新）

主軸方位　N-6.0° -W

残存状況　建物跡全体が残存し比較的良好な状態で検出される。平面形は長方形を呈し、規模は主軸（南北）3.02m、直交（東西）2.57m、深さ 10cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

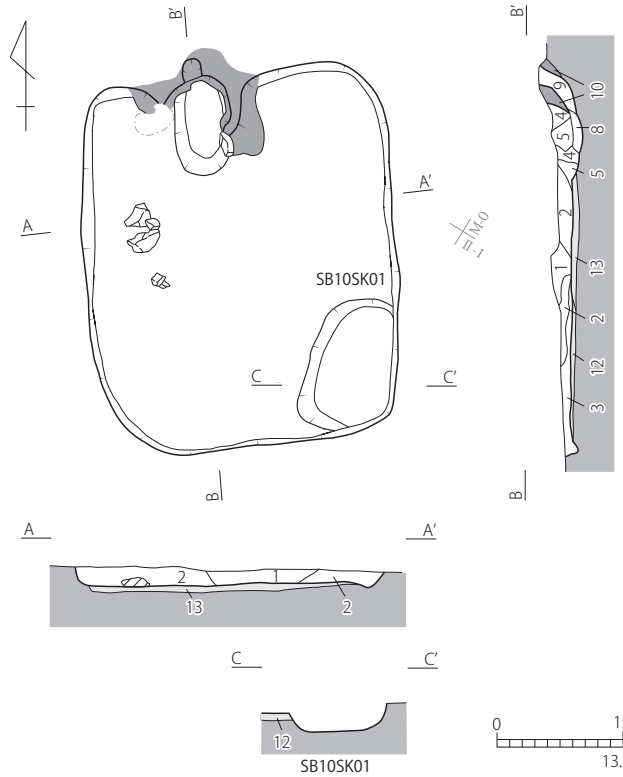
壁溝　確認されない。

床　厚さ 7cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　建物跡南東端に土坑 1 基が検出される。規模は長軸 105cm、短軸 74cm、床面からの深さ 10cm を測る。

カマド　北壁西寄り。両袖とも残存し右袖端部に芯材となる石材が検出される。規模は全長 93cm、幅 87cm、燃焼室幅 39cm を測る。



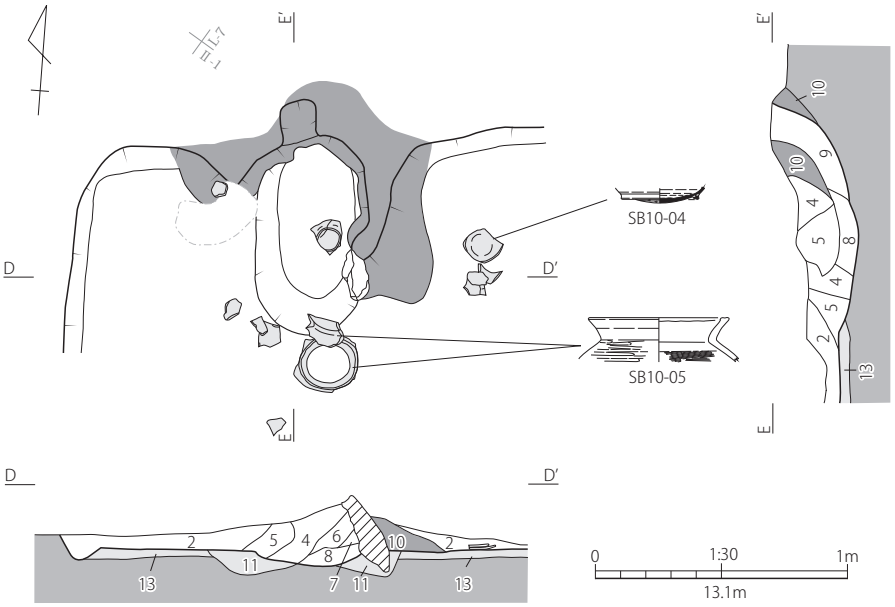
1	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB10覆土
2	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫多量。大淵スコリア多量。大沢スコリア少量。	SB10覆土
4	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。焼土中量。粘土中量。	SB10覆土
5	灰黄色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB10カマド崩落土
8	赤褐色	しまり弱、粘性弱。焼土多量。	SB10カマド燃焼室
9	赤褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土多量。粘土中量。黒色土微量。	SB10カマド煙道
10	灰黄褐色	しまり強、粘性強。大淵スコリア少量。粘土多量。	SB10カマド袖
12	褐色	しまりやや強、粘性強。溶岩礫多量。	SB10掘方埋土
13	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。焼土少量。粘土少量。	SB10掘方埋土

第 31 図　SB10　平面図・断面図

出土遺物（第 33 図）

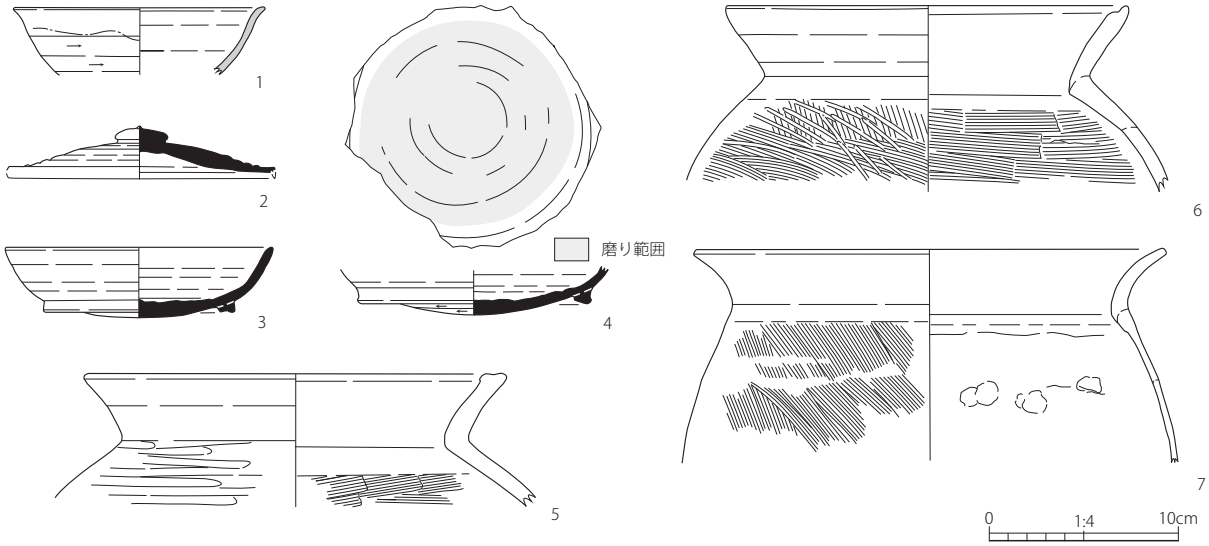
1 は灰釉陶器の碗で、体部内面から口縁部外面にかけて施釉される。2 ～ 4 は須恵器で、2 の摘蓋は、やや幅広な摘みを有する。3・4 は坏身で、丸底の底部が高台下端よりも突出する。4 の見込み部には磨り痕がみとめられることから、転用硯の可能性もある。5・6 が土師器の球胴甕、7 は長胴甕である。

時期　カマド付近出土の 4・5 を含めた 2 ～ 6 の共伴を重視しつつも、7 の長胴甕が入り始める時期と考えれば、富士Ⅱ期（8 世紀中葉頃）の建物跡と判断される。

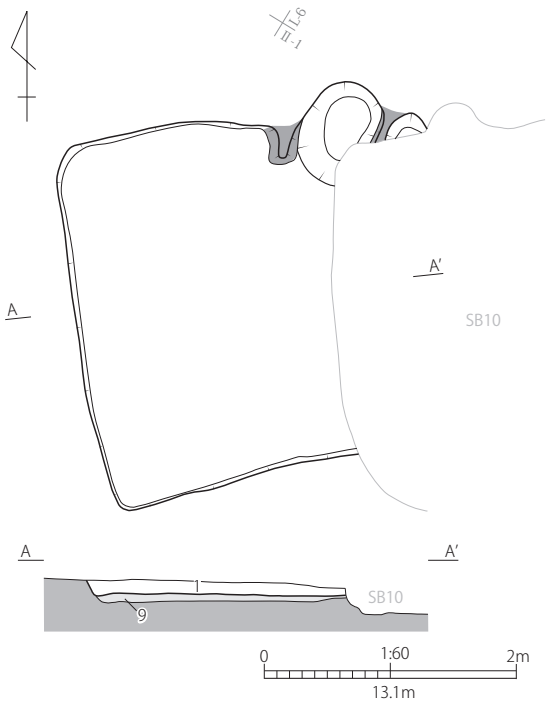


2	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫多量。大淵スコリア多量。大沢スコリア少量。	SB10覆土
4	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。焼土中量。粘土中量。	SB10覆土
5	灰黄色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB10カマド崩落土
6	灰黄色	しまり強、粘性強。大淵スコリア少量。粘土多量。黒色土混入。	SB10カマド崩落土
7	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア微量。焼土少量。粘土少量。	SB10カマド燃焼室
8	赤褐色	しまり弱、粘性弱。焼土多量。	SB10カマド燃焼室
9	赤褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土多量。粘土中量。黒色土微量。	SB10カマド煙道
10	灰黄褐色	しまり強、粘性強。大淵スコリア少量。粘土多量。	SB10カマド袖
11	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア少量。	SB10カマド掘方
13	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。焼土少量。粘土少量。	SB10掘方埋土

第 32 図　SB10　カマド平面図・断面図

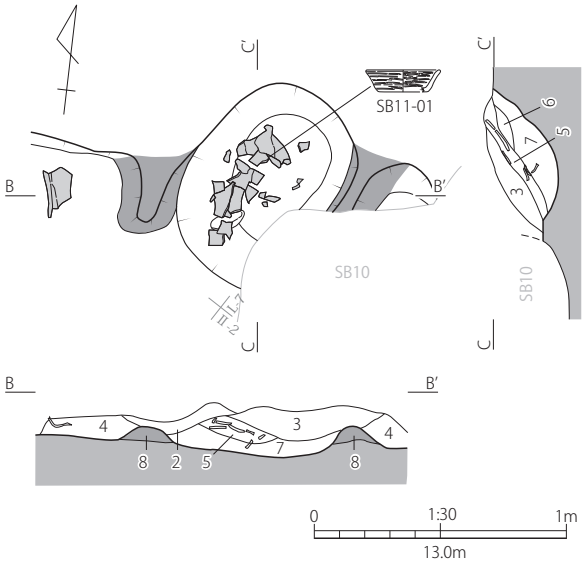


第 33 図　SB10　出土遺物実測図



1	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。	SB11覆土
9	暗褐色	しまりやや強、粘性強。溶岩礫少量。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。	SB11掘方埋土

第 34 図　SB11　平面図・断面図



2	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB11覆土
3	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB11覆土
4	暗褐色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB11カマド崩落土
5	赤褐色	しまり弱、粘性弱。焼土多量。粘土多量。	SB11カマド燃焼室
6	暗褐色	しまりやや弱、粘性強。粘土多量。	SB11カマド燃焼室
7	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。焼土少量。粘土多量。	SB11カマド燃焼室
8	暗褐色	しまり強、粘性やや強。粘土多量。	SB11カマド袖

第 35 図　SB11　カマド平面図・断面図

SB11

遺構（第 34・35 図）

位置　L- Ⅱグリッド

重複関係　（古）SB19 → SB20 → SB11 → SB10（新）
（古）SB43 → SB30 → SB18 → SB11 → SB09（新）

主軸方位　N-10.0° -W

残存状況　建物跡の東側は SB10 により削平されている。方形を呈し、検出範囲内で主軸（南北）2.98m、直交（東西）3.00m、深さ 8cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

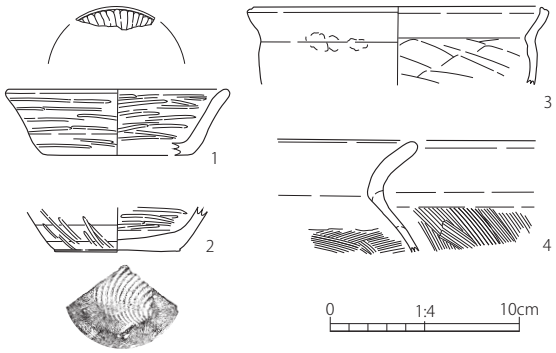
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁東端。カマドの東側は SB10 により削平されており、左袖のみ残存する。規模は全長 83cm、幅 99cm、燃焼室幅 56cm を測る。

出土遺物（第 36 図）

1 ～ 4 は土師器である。1・2 は坏で、1 は体部内外面ヨコミガキ、見込み部に放射状ミガキが施される。2 は底部がハケメ状のケズリによって調整される。3 は小型甕で、口縁部が内湾する形態のものである。4 は長胴甕である。

時期　カマド付近から出土した 1 は富士Ⅲ期（8 世紀後葉頃）相当ではあるものの、切り合い関係を重視すれば富士Ⅰ～Ⅱ期（8 世紀前葉～中葉頃）の建物跡と判断される。



第 36 図　SB11　出土遺物実測図

SB12

遺構（第 37・38 図）

位置　M- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB14 → SB13 → SB12 → SK17（新）
（古）SH02 → SB12（新）

主軸方位　N-88.0° -E

残存状況　建物跡の南側は調査区域外となり検出できない。平面形は不整形な方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（東西）2.30m、直交（南北）2.59m、深さ 18cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 5cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　東壁中央。両袖とも残存し比較的良好な状態で検出される。規模は全長 80cm、幅 80cm、燃焼室幅 39cm を測る。

出土遺物（第 40 図）

1 は緑釉陶器の碗である。内外面に緑釉が施される。口縁端部は一部欠損するが、緩やかに外反するものと判断される。2・3 は灰釉陶器の碗である。2 は三日月高台で見込み部に炭化物が付着する。3 は三角高台で底部に回転糸切り痕がみとめられる。4 は須恵器の甑とみられる破片である。5 ～ 9 は土師器の坏である。5 は体部内外面がロクロナデ、底部に回転糸切り痕が残る坏であり、調整の粗雑化・法量の小型化が最も進行した段階のものと考えられる。6 ～ 9 も同時期のものとして差し支えない。10 は高脚高台の皿や埦に伴う高台部である。11 は土師器の鉢で、全体的に器壁が厚く、内外面とも摩滅が著しいが、体部はロクロナデ、底部に回転糸切り痕が残る。12 は長胴甕の口縁部である。

時期　カマド付近から出土した 1 ～ 3・5・10・11 を重視すれば、富士Ⅷ期（10 世紀後半頃）の建物跡と判断される。

SB13

遺構（第 37・39 図）

位置　M- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB14 → SB13 → SB12、SK19（新）

主軸方位　N-83.0° -E

残存状況　建物跡の南側は調査区域外となり検出できない。また SB12 により削平されていてカマドが位置する東側部分のみ検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（東西）1.01m、直交（南北）2.10m、深さ 13cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

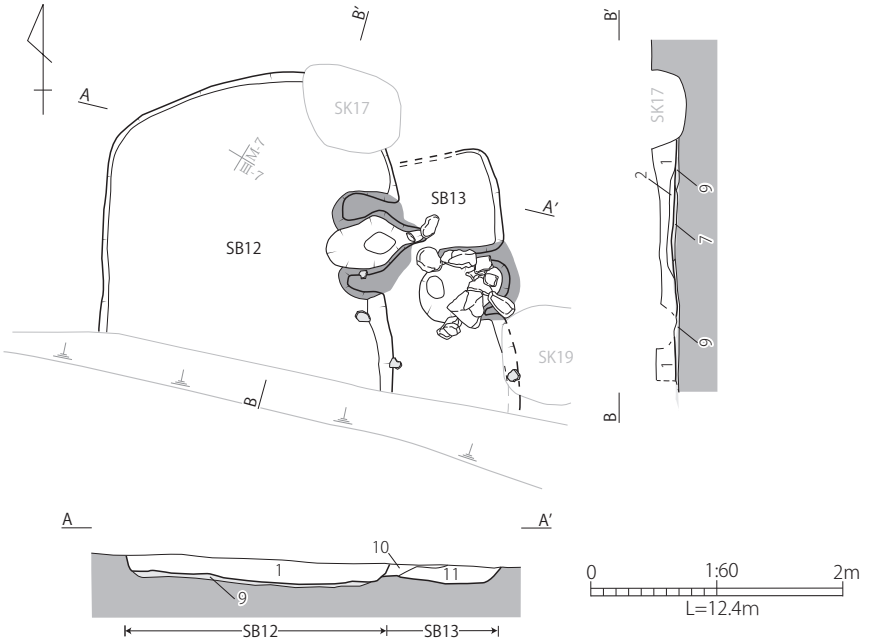
その他の遺構　確認されない。

カマド　東壁中央。両袖とも残存し比較的良好な状態で検出され、燃焼室を囲むように芯材となる石材が多数検出される。規模は全長 73cm、幅 60cm、燃焼室幅 41cm を測る。

出土遺物（第 41 図）

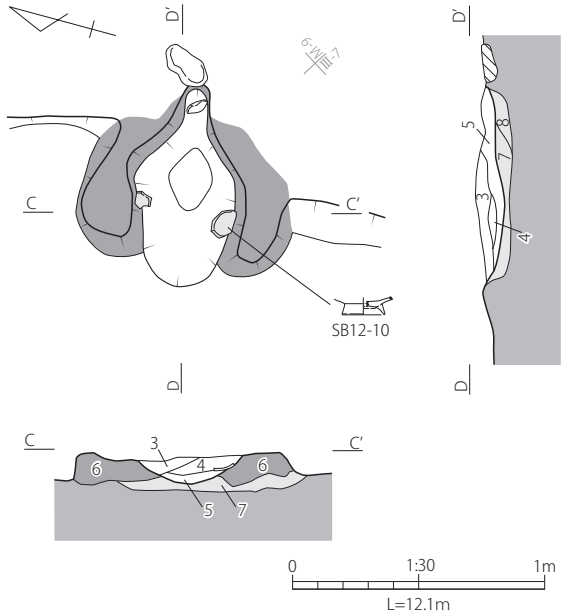
1 ～ 3 は須恵器で、1 が壺の肩部、2 が大型の甕の口縁部、3 が高坏の脚部である。4 は灰釉陶器の碗で、底部に回転糸切り痕がみとめられる。5 ～ 8 は土師器坏で、5 は内外面に粗いロクロナデが施され、底部には回転糸切り痕が残る。8 は見込み部に「#」字状の刻書がみえる。8 にも底部回転糸切り痕が残る。

時期　カマド付近から出土した 5 ～ 8 を重視すれば、富士Ⅶ期（10 世紀前半頃）の建物跡と判断される。



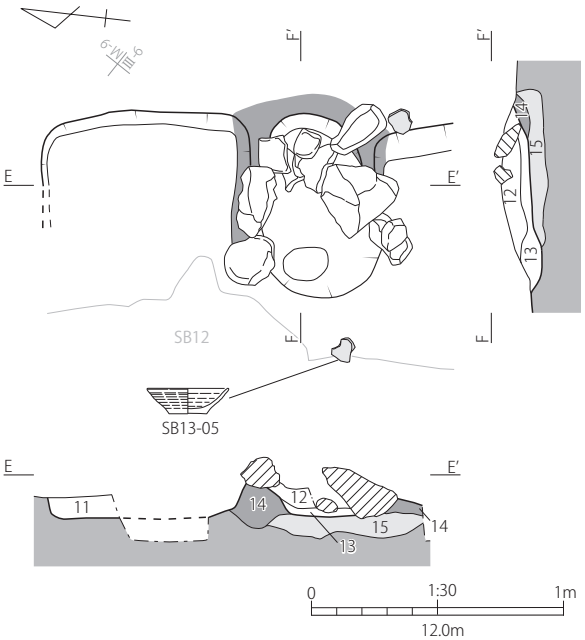
1	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫微量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB12覆土
2	褐色	しまり弱、粘性弱。粘土少量。	SB12カマド崩落土
7	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。	SB12カマド掘方
9	暗褐色	しまりやや強、粘性強。大沢スコリア微量。	SB12掘方埋土
10	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。	SB13覆土
11	黄褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。	SB13覆土

第 37 図　SB12・SB13　平面図・断面図



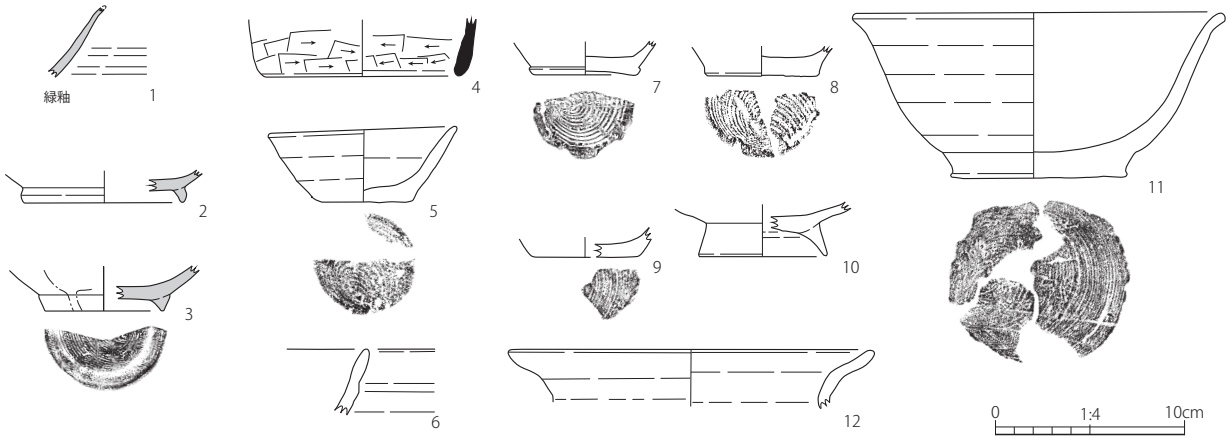
3	赤褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土多量。炭化物微量。	SB12カマド燃焼室
4	灰褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。焼土中量。炭化物多量。	SB12カマド燃焼室
5	灰褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。焼土中量。粘土中量。	SB12カマド燃焼室
6	暗褐色	しまり弱、粘性弱。大沢スコリア微量。粘土多量。	SB12カマド袖
7	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。	SB12カマド掘方
8	黒褐色	しまり弱、粘性強。溶岩礫少量。大沢スコリア微量。	SB12カマド掘方

第 38 図　SB12　カマド平面図・断面図

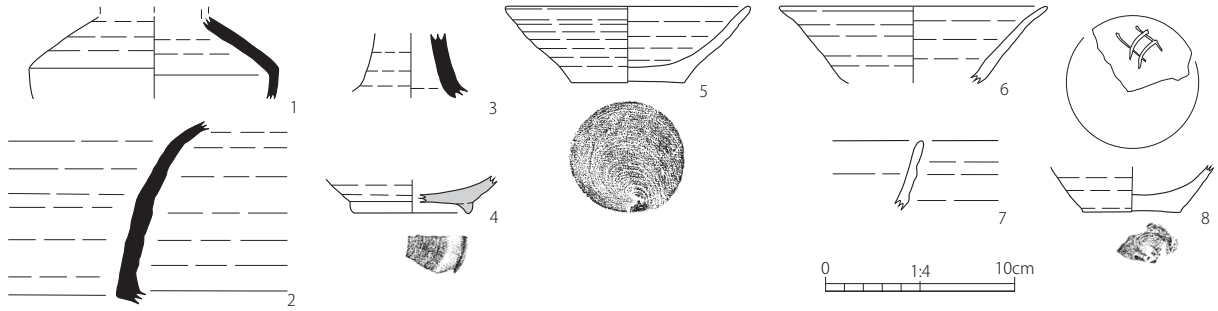


11	黄褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。	SB13覆土
12	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。	SB13カマド燃焼室
13	赤褐色	しまり弱、粘性弱。焼土多量。	SB13カマド燃焼室
14	黄褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫微量。粘土多量。	SB13カマド袖
15	暗褐色	しまり強、粘性弱。大沢スコリア微量。	SB13カマド掘方

第 39 図　SB13　カマド平面図・断面図



第 40 図　SB12　出土遺物実測図



第 41 図　SB13　出土遺物実測図

SB14

遺構（第 42・43 図）

位置　M- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB15 → SB14 → SB13 → SB12（新）
（古）SB14 → SK17、SK18、SK19（新）

主軸方位　N-30.0° -E

残存状況　重複する遺構（SB13、SB12、SK17、SK18、SK19）により削平されていて建物跡の北側のみ検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.22m、直交（東西）3.14m、深さ 9cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含まない黒褐色土。

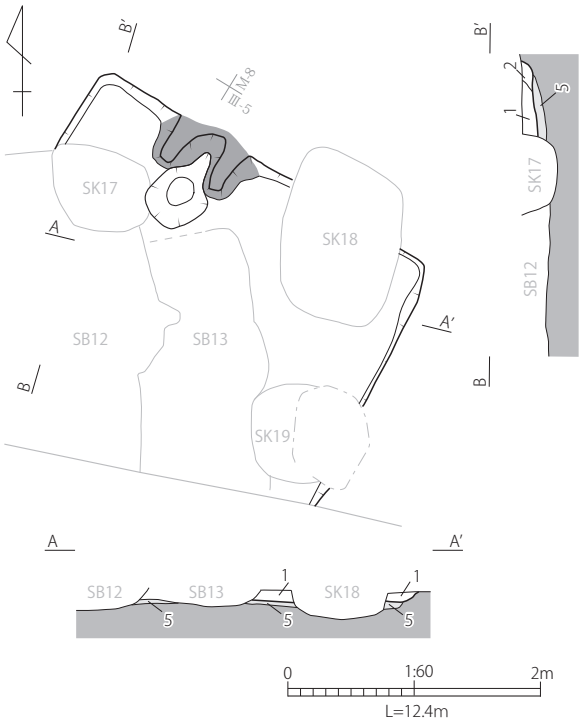
壁溝　確認されない。

床　厚さ 3cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

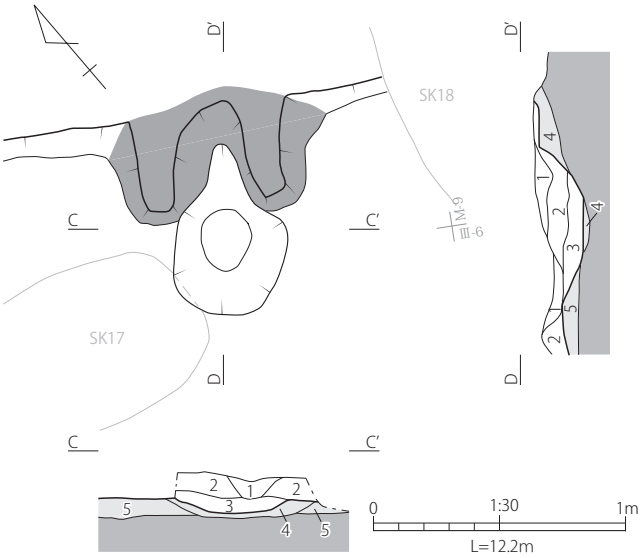
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁西寄り。両袖とも端部が残存しない状態で検出される。規模は全長 84cm、幅 75cm、燃焼室幅 44cm を測る。



1　黒褐色　しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。　SB14覆土
2　黄褐色　しまり弱、粘性弱。溶岩礫微量。粘土多量　SB14カマド崩落土
5　暗褐色　しまり強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア少量。　SB14掘方埋土

第 42 図　SB14　平面図・断面図



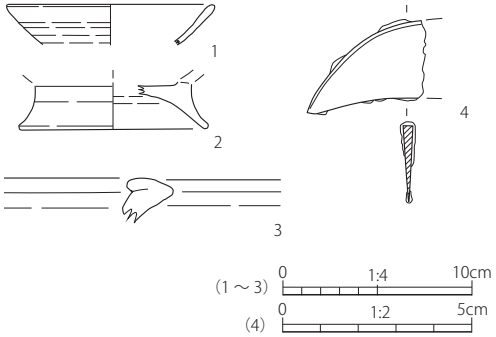
1	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。	SB14覆土
2	黄褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫微量。粘土多量。	SB14カマド崩落土
3	赤褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫微量。焼土多量。粘土多量。	SB14カマド燃焼室
4	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。焼土微量。粘土微量	SB14カマド掘方
5	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア少量。	SB14掘方埋土

第 43 図　SB14　カマド平面図・断面図

出土遺物（第 44 図）

1～3は土師器で、1がロクロ成形坏の口縁部、2が高脚高台埦や皿に伴う高台部、3は堝の口縁部である。3は奈良時代の混入遺物とみられる。4は鉄製鎌の刃部である。

時期　切り合い関係及びカマド付近から出土した1･4を重視すれば、富士Ⅶ期（10 世紀前半頃）の建物跡と判断される。



第 44 図　SB14　出土遺物実測図

SB15

遺構（第 45・46 図）

位置　N- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB15 → SB14 → SK18、SK19（新）

主軸方位　N-15.0° -E

残存状況　建物跡の南側は調査区域外となり、西側は重複する遺構（SB14、SK18、SK19）により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.16m、直交（東西）3.34m、深さ 7cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

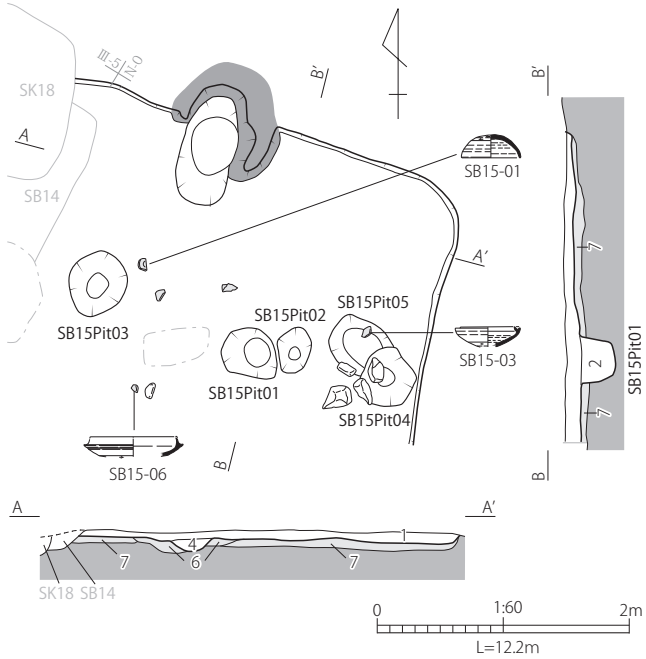
壁溝　確認されない。

床　厚さ 5cm の貼り床が施される。

柱穴　5 基のピットが検出される。規模は長軸 41 ～ 49cm、短軸 29 ～ 53cm、床面からの深さ 10 ～ 31cm を測る。

その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。左袖は残存せず右袖のみ検出される。規模は全長 95cm、幅 94cm、燃焼室幅 43cm を測る。



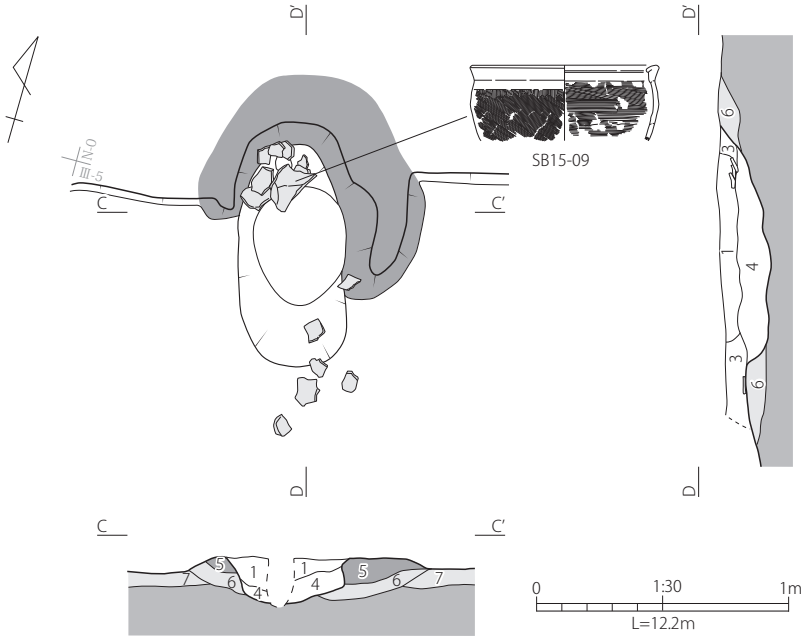
1	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。	SB15覆土
2	黒褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア微量。	SB15Pit01覆土
4	赤褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。焼土多量。	SB15カマド燃焼室
6	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。	SB15カマド掘方
7	暗褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB15掘方埋土

第 45 図　SB15　平面図・断面図

出土遺物（第 47 図）

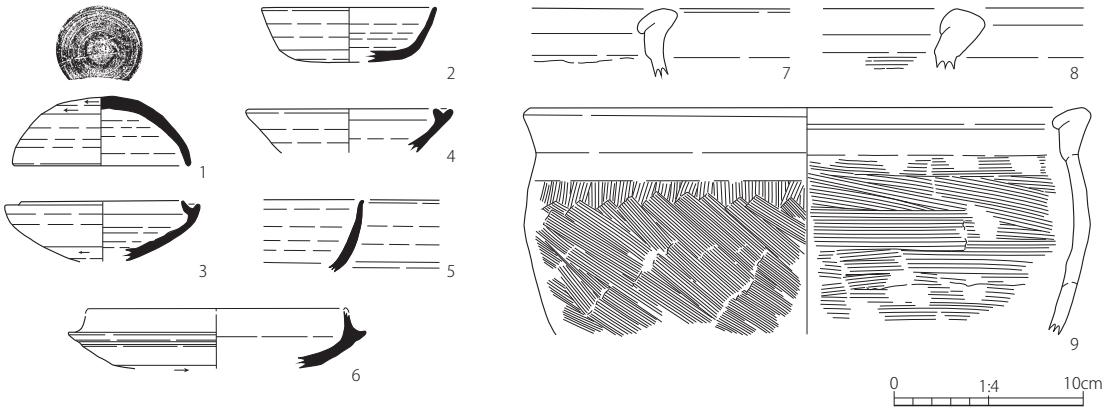
1 ～ 6 は須恵器で、1 が坏蓋、2 ～ 6 が坏身とみられる。1 の頂部には浅い 2 条の刻線があり、窯記号の可能性がある。1･3 はセットになると考えられ、3 の坏身は口縁部に短い立ち上がりを有するものである。2 はやや平底の坏身であり、本地域では類例が少ないものの、いわゆる「杯 G」とみられる。自然釉が底部に付着しており、逆位で焼成されたようである。4 は口縁部の立ち上がりと受け部がほぼ同じ高さとなるものであり、坏蓋の可能性も残る。6 は復原口径が 13.8cm を測る大型化の進行した坏身であり、混入遺物とみられる。7 ～ 9 は土師器の鍋である。

時期　1 ～ 6 はいずれも床面やカマド付近から出土しているが、1 ～ 4・7・9 を共伴と考えれば、沢東Ⅱ期（7 世紀中葉～後葉頃）の建物跡と考えられる。



1	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。	SB15覆土
3	黄褐色	しまり強、粘性強。溶岩礫多量。粘土多量。	SB15カマド崩落土
4	赤褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。焼土多量。	SB15カマド燃焼室
5	黄褐色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB15カマド袖
6	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫多量。大渕スコリア少量。	SB15カマド掘方
7	暗褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB15掘方埋土

第 46 図　SB15　カマド平面図・断面図



第 47 図　SB15　出土遺物実測図

SB16

遺構（第 48 図）

位置　M- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB87 → SB16 → SH02（新）

主軸方位　N-124.0° -E

残存状況　建物跡の上層は削平されていて覆土は浅い。平面形は方形を呈し、主軸（東西）3.13m、直交（南北）2.61m、深さ 11cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　1 基のピットが検出される。規模は長軸 50cm、短軸 44cm、床面からの深さ 25cm を測る。

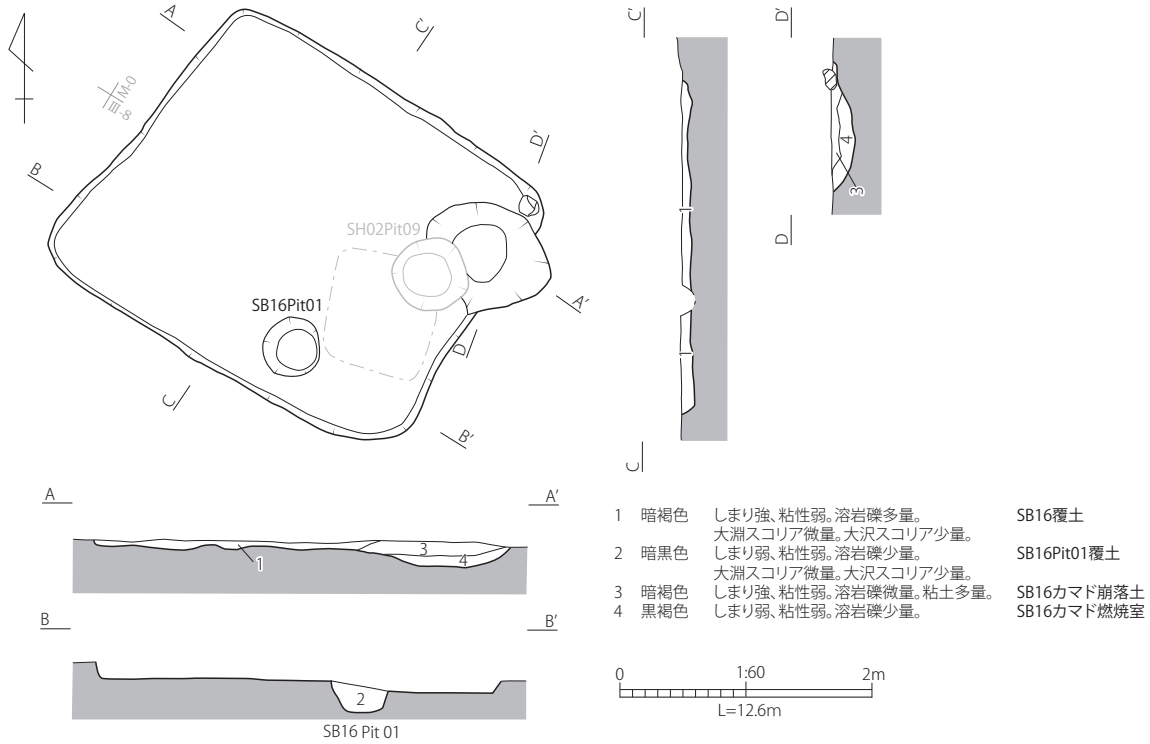
その他の遺構　確認されない。

カマド　東壁北寄り。両袖とも残存せず燃焼室のみ検出される。規模は全長 104cm、燃焼室幅 79cm を測る。

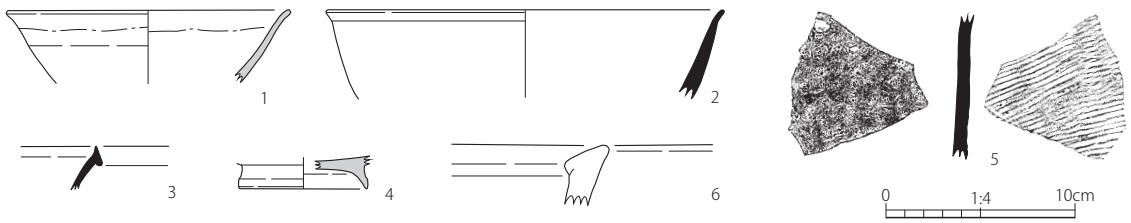
出土遺物（第 49 図）

1・4 は灰釉陶器で、1 の碗は口唇部内外面に刷毛塗りによる灰釉がみられる。4 は碗等の高台である。2・3・5 は須恵器で、2 は埦としたが、自然釉が底部側から被さっており、器種については検討の余地もある。内部のみ酸化焔気味の焼成のため、断面色調が暗褐色を呈する。3 は長頸壺の口縁部、5 は大型の甕である。5 は外面のみ酸化焔気味の焼成で仕上げられ、色調が赤黒色を呈する。6 は土師器の鍋である。

時期　切り合い関係と 1・4・5 を重視すれば、富士Ⅵ～Ⅶ期（9 世紀後葉～ 10 世紀前半）頃の建物跡と考えられる。



第 48 図　SB16　平面図・断面図



第 49 図　SB16　出土遺物実測図

SB17

遺構（第 50・51 図）

位置　L- Ⅱグリッド

重複関係

（古）SB36→SB18→SB31→SB17→SK01、SK02（新）

主軸方位　N-24.5°-E

残存状況　南側は調査できなかったため建物跡の北側のみ検出される。平面形は隅丸方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.24m、直交（東西）2.95m、深さ 11cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

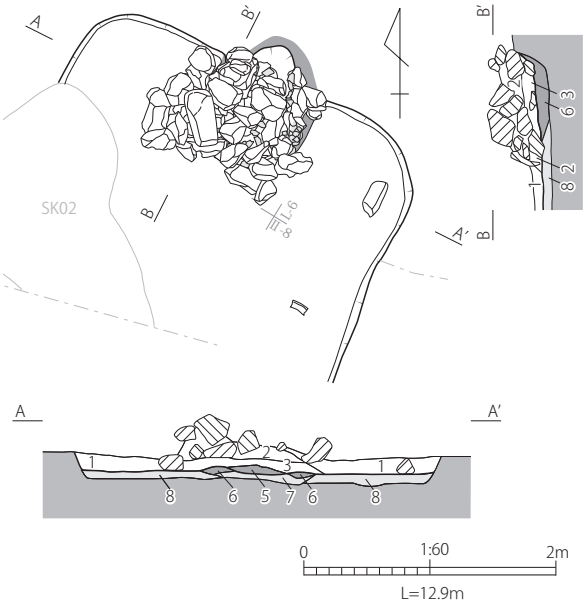
壁溝　確認されない。

床　厚さ 8cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

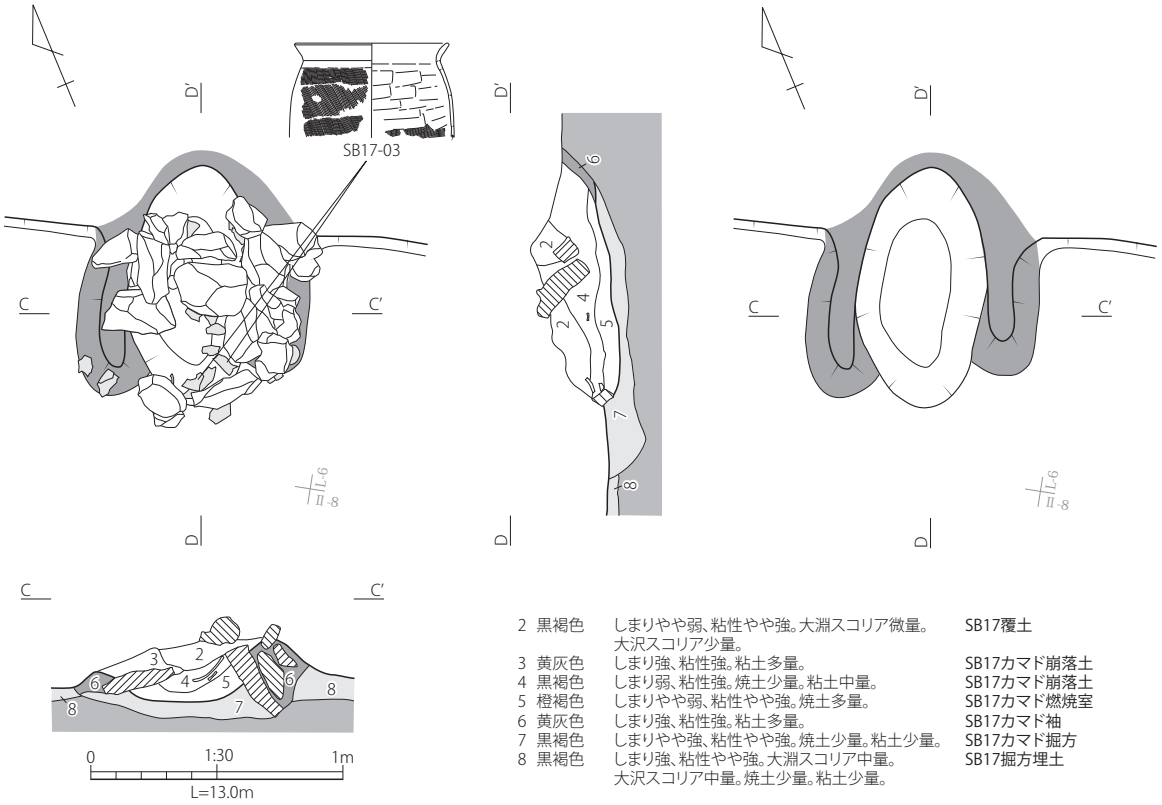
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。カマドの上面は多数の石（20～40cm）で覆われた状態で検出される。両袖とも残存し、各々の袖内からは芯材となる石材が複数検出される。規模は全長 92cm、幅 92cm、燃焼室幅 49cm を測る。



1	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア中量。大沢スコリア中量。粘土微量。	SB17覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB17覆土
3	黄灰色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB17カマド崩落土
5	橙褐色	しまりやや弱、粘性やや強。焼土多量。	SB17カマド燃焼室
6	黄灰色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB17カマド袖
7	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土少量。粘土少量。	SB17カマド掘方
8	黒褐色	しまり強、粘性やや強。大淵スコリア中量。大沢スコリア中量。焼土少量。粘土少量。	SB17掘方埋土

第 50 図　SB17　平面図・断面図



2	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB17覆土
3	黄灰色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB17カマド崩落土
4	黒褐色	しまり弱、粘性強。焼土少量。粘土中量。	SB17カマド崩落土
5	橙褐色	しまりやや弱、粘性やや強。焼土多量。	SB17カマド燃焼室
6	黄灰色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB17カマド袖
7	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土少量。粘土少量。	SB17カマド掘方
8	黒褐色	しまり強、粘性やや強。大淵スコリア中量。大沢スコリア中量。焼土少量。粘土少量。	SB17掘方埋土

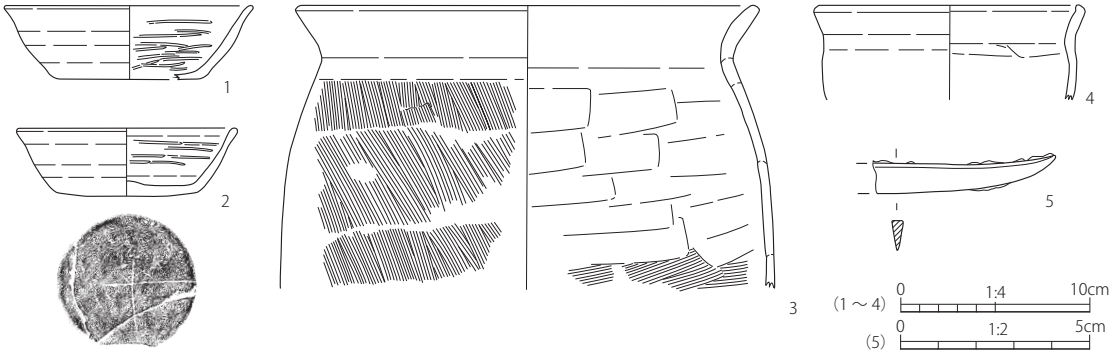
第 51 図　SB17　カマド平面図・断面図

出土遺物（第 53 図）

1・2 は土師器坏で、ともに外面がヨコナデ、内面が軽いヨコミガキで仕上げられる。2 は底部に「+」状の線刻がみられる。3 は土師器の長胴甕で、体部外面の調整はタテハケであるが、肩部から口縁部のくびれは緩く、プロポーションは後出的な特徴を有する。4 は口縁部が内湾気味に立ち上がる小型甕である。5 は鉄製刀子の刃部である。

時期　カマド付近から出土した 1・2・3 を重視し、4 もその共伴と考えれば、富士Ⅴ期（9 世紀中葉頃）の建物跡と考えられる。

第 52 図　SB17 カマド（南西から）



第 53 図　SB17　出土遺物実測図

SB18

遺構（第 54 図）

位置　L-Ⅱグリッド

重複関係

（古）SB43 → SB30 → SB18 → SB11 → SB09（新）

（古）SB36 → SB18 → SB31 → SB17 → SK01（新）

主軸方位　N-27.0°-W

残存状況　SB11、SB17 及び撹乱により部分的に削平されているが、全体的な形状は検出される。平面形は方形を呈し、規模は主軸（南北）3.40m、直交（東西）3.59m、深さ 24cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

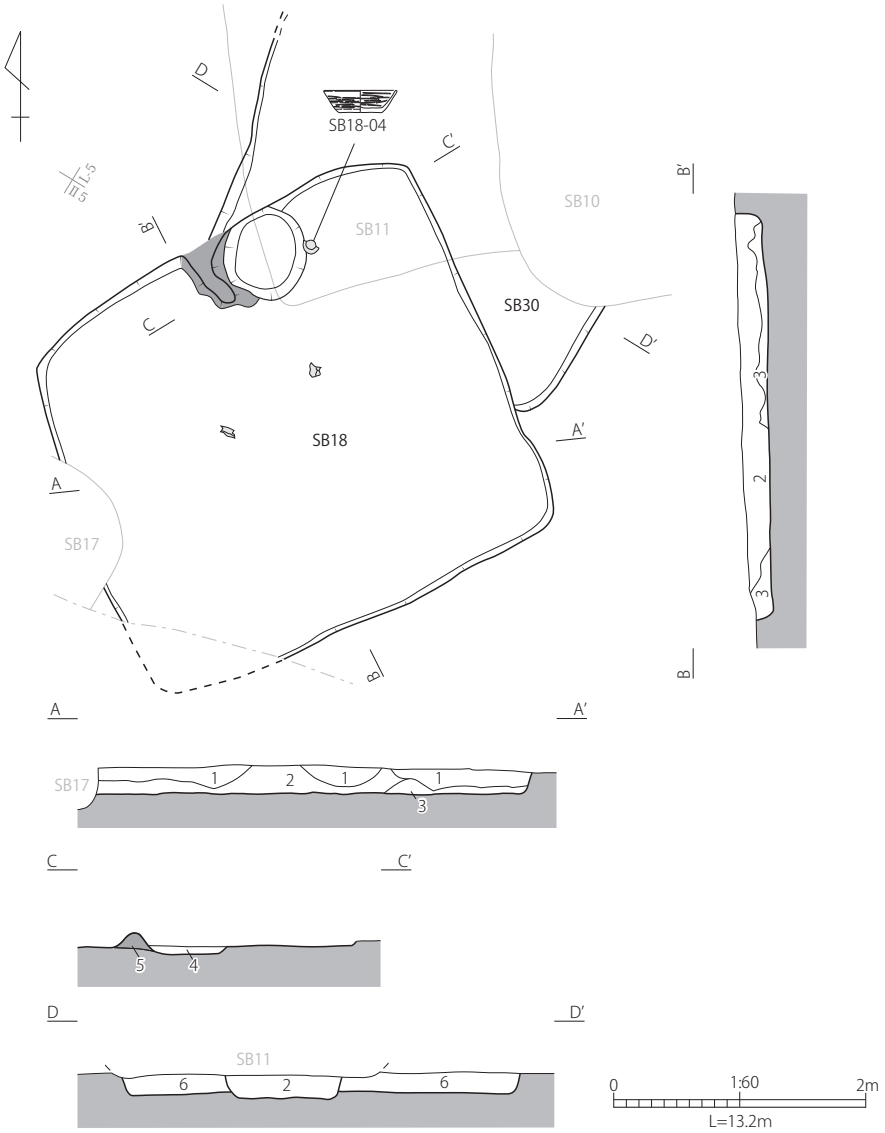
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。SB11 により右袖は削平され残存しない。規模は検出範囲内で全長 67cm、幅 94cm、燃焼室幅 67cm を測る。

出土遺物（第 55 図）

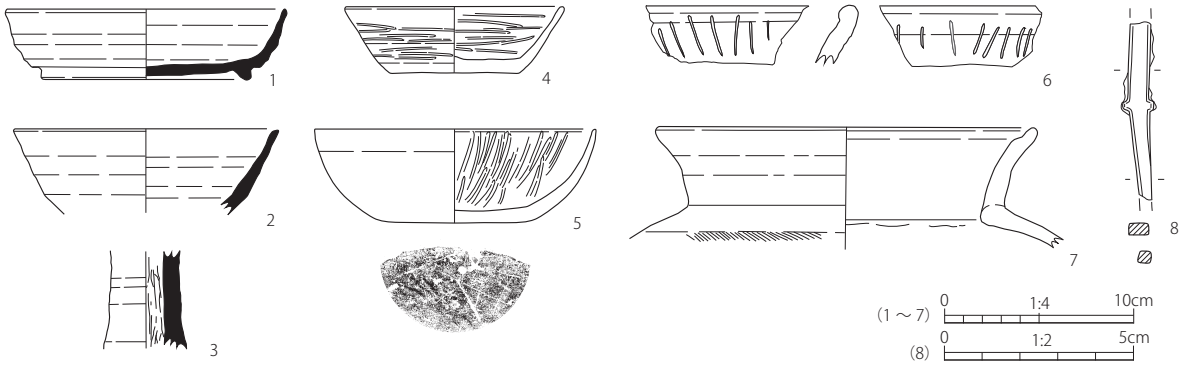
1 ～ 3 が須恵器である。1 は有台の坏身で、底部は回転ヘラケズリ後にナデによって仕上げられる。2 の坏身は埦形か。3 は高坏脚部である。4 ～ 7 は土師器で、4 は内外面に粗いヨコミガキが施される坏である。底部は手持ちヘラケズリにて調整される。5 は埦形の坏で、器壁の摩耗が著しいものの、内面にミガキが施される。6・7 は球胴甕である。6 は口縁部内外面にタテミガキがなされる球胴甕であり、磨かれた部分が黒色を呈することで、装飾効果を狙ったものと推定される。口縁部のタテミガキは、7 世紀代の球胴甕に稀にみられるものである。7 の球胴甕は、口唇部を上方に緩く摘み上げることで、蓋受けのような造作をなしている。8 は鉄鏃の頸部～茎部片であり、棘関が残る。

時期　床面出土の 4 は富士Ⅳ期相当であるものの、切り合い関係や 1 を重視すれば、富士Ⅰ～Ⅱ期（8 世紀前葉～中葉頃）の建物跡と考えられる。



1	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。	SB18覆土
2	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土多量。	SB18覆土
3	黒色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。粘土少量。	SB18覆土
4	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。焼土中量。粘土多量。	SB18カマド燃焼室
5	灰黄色	しまり強、粘性強。焼土少量。粘土多量。	SB18カマド袖
6	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB30覆土

第 54 図　SB18・SB30　平面図・断面図



第 55 図　SB18　出土遺物実測図

SB30

遺構（第 54 図）

位置　L- Ⅱグリッド

重複関係

（古）SB43 → SB30 → SB18 → SB11 → SB09、SB10（新）

主軸方位　N-27.0° -E

残存状況　重複する遺構（SB09、SB10、SB11、SB18）により削平されていて建物跡の南側が部分的に検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）1.68m、直交（東西）3.26m、深さ 17cm を測る。

覆土　大洲スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

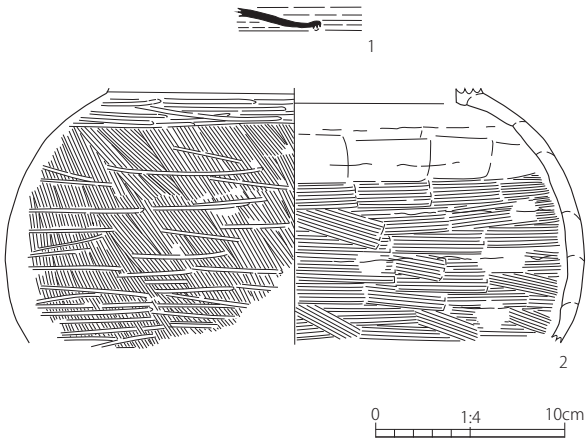
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

出土遺物（第 56 図）

1 は須恵器の坏蓋である。頂部と端部が欠損するが、扁平化した摘蓋と考えられる。2 は土師器の球胴甕であり、特に肩部や底部付近の外面に入念なヨコミガキが施される。

時期　1・2 の共伴を重視すれば、富士 I 期（8 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



第 56 図　SB30　出土遺物実測図

SB19

遺構（第 57・58 図）

位置　L- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB19 → SB20 → SB11 → SB10（新）

主軸方位　N-70.5° -W

残存状況　建物跡の北側は撹乱により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（東西）4.62m、直交（南北）2.65m、深さ 18cm を測る。

覆土　大洲スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　主柱穴と考えられる 2 基のピットが検出される。規模は長軸 67 ～ 77cm、短軸 60 ～ 62cm、床面からの深さ 30 ～ 34cm を測る。

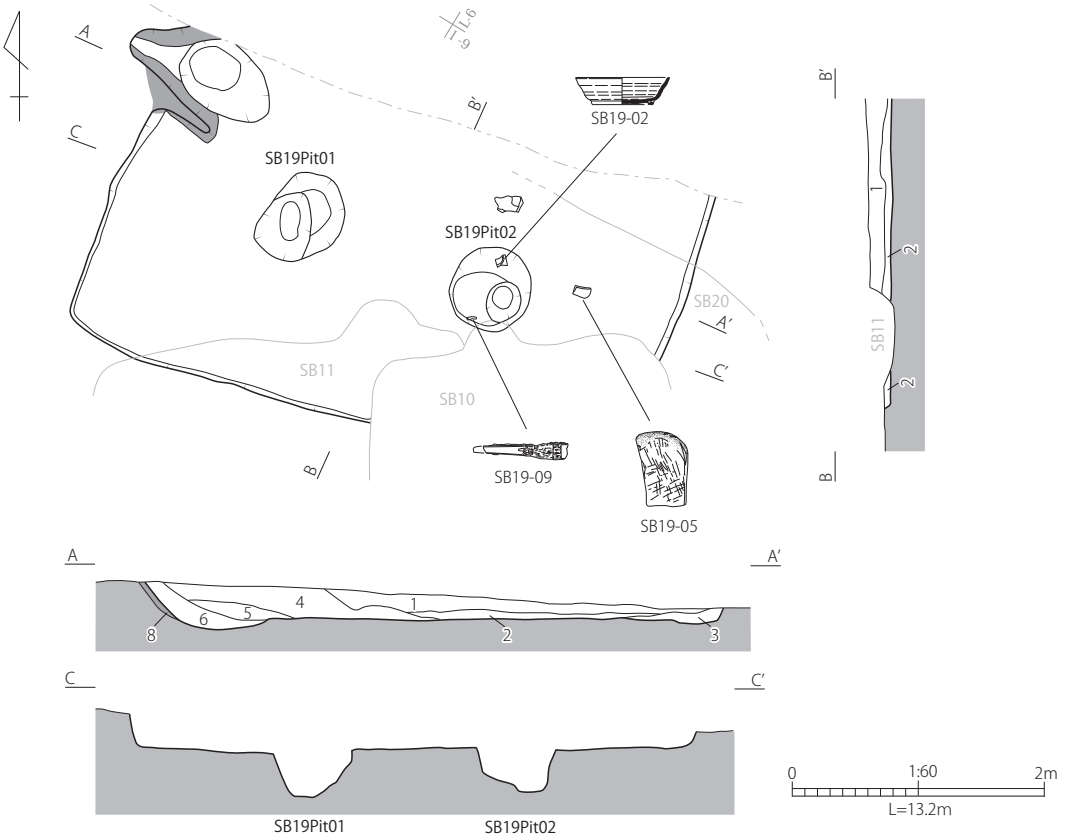
その他の遺構　確認されない。

カマド　西壁。右袖は撹乱により削平されている。規模は検出範囲内で全長 123cm、幅 77cm、燃焼室幅 50cm を測る。

出土遺物（第 59 図）

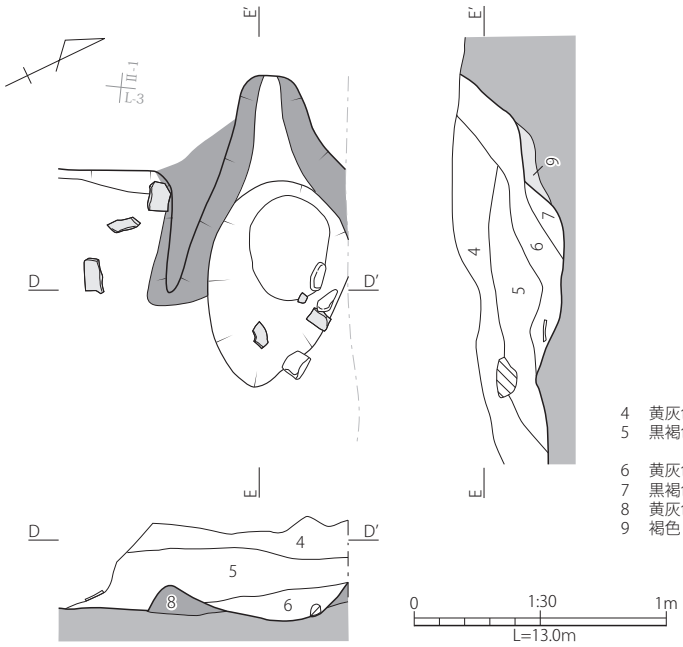
1 は須恵器の坏蓋、2 は有台の坏身である。2 の底部は回転ヘラケズリ後にナデによって仕上げられる。3・4 は土師器の球胴甕である。3 はやや肩部が張る形態を有し、肩部から体部まで密にヨコミガキが施される。4 は体部外面が細かいハケメである一方、内面は粗いハケメとなっており、意図的に工具が使い分けられていた状況が推察される。5 ～ 7 は砥石で、5・6 が砂岩製、7 が凝灰岩製である。6 は一部に被熱痕がみとめられる。8 は石錘であり、打ち欠かれた端部に紐ずれ痕がみられることから、緊縛して使用されたことは明瞭である。縄文時代の混入物の可能性もあるが、カマド周辺から出土したことから、古代の編み物石（菰石）として捉えた。9 は鉄製刀子の刃部～茎部片である。茎部には柄の木質が遺存しており、柄縁金具（鏂）を嵌め込んだ痕跡が観察できる。

時期　床面出土の 2 を重視し、3・4 をその共伴と考えれば、富士 I 期（8 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



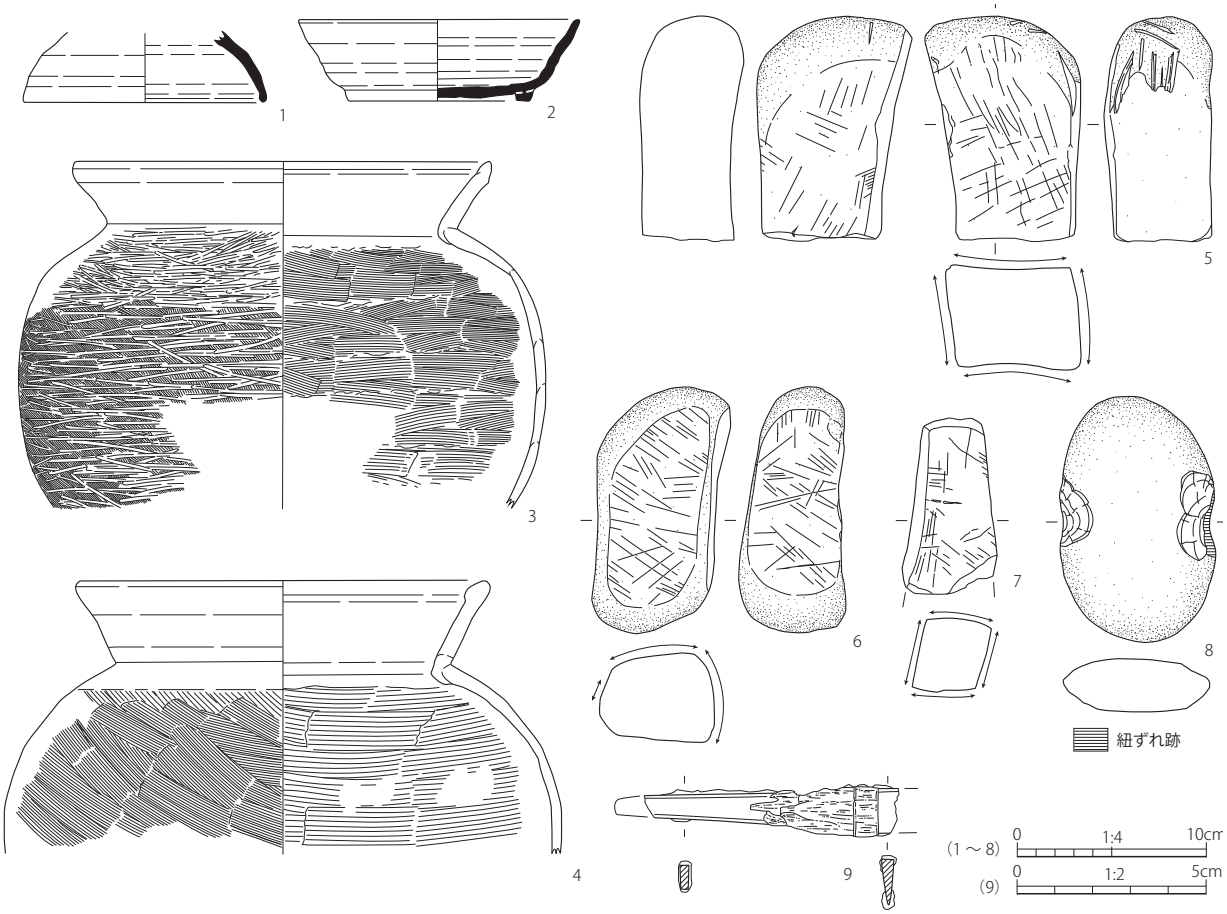
1	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土微量。	SB19覆土
2	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB19覆土
3	褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。砂多量。	SB19覆土
4	黄灰色	しまりやや強、粘性強。粘土多量。黒色土中量。	SB19カマド崩落土
5	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。焼土少量。粘土少量。	SB19覆土
6	黄灰色	しまりやや強、粘性やや強。焼土中量。粘土多量。	SB19カマド燃焼室
8	黄灰色	しまりやや強、粘性やや強。粘土多量。砂少量。	SB19カマド袖

第 57 図　SB19　平面図・断面図



4	黄灰色	しまりやや強、粘性強。粘土多量。黒色土中量。	SB19カマド崩落土
5	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。焼土少量。粘土少量。	SB19覆土
6	黄灰色	しまりやや強、粘性やや強。焼土中量。粘土多量。	SB19カマド燃焼室
7	黒褐色	しまり弱、粘性弱。焼土少量。	SB19カマド燃焼室
8	黄灰色	しまりやや強、粘性やや強。粘土多量。砂少量。	SB19カマド袖
9	褐色	しまりやや強、粘性やや弱。焼土少量。粘土少量。砂多量。	SB19カマド掘方

第 58 図　SB19　カマド平面図・断面図



第 59 図　SB19　出土遺物実測図

SB20

遺構（第 60 図）

位置　L- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB19 → SB20 → SB11 → SB10（新）

主軸方位　N-27.0° -E

残存状況　建物跡の北壁の一部のみが検出され、北壁が直線的であることから平面形は方形を呈するものと考えられる。規模は検出範囲内で主軸（南北）1.15m、直交（東西）1.85m、深さ 10cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

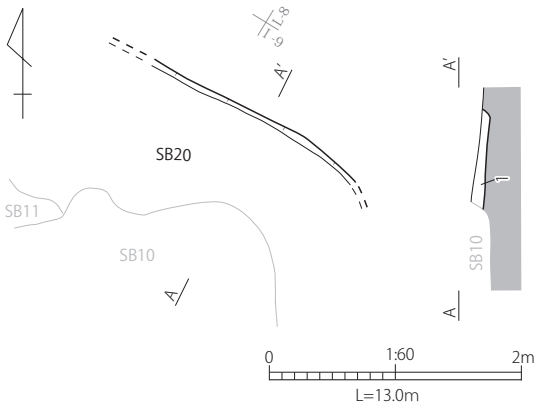
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

出土遺物

図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、富士Ⅰ～Ⅱ期（8 世紀前葉～中葉頃）の建物跡と考えられる。



1　暗褐色　しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫多量。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。　SB20覆土

第 60 図　SB20　平面図・断面図

SB21

遺構（第 61 図）

位置　M- Ⅲグリッド

重複関係　なし

主軸方位　N-0.0°

残存状況　建物跡の南側は調査区域外となり北側のみ検出される。平面形は隅丸方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）1.19m、直交（東西）2.08m、深さ 24cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 3cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

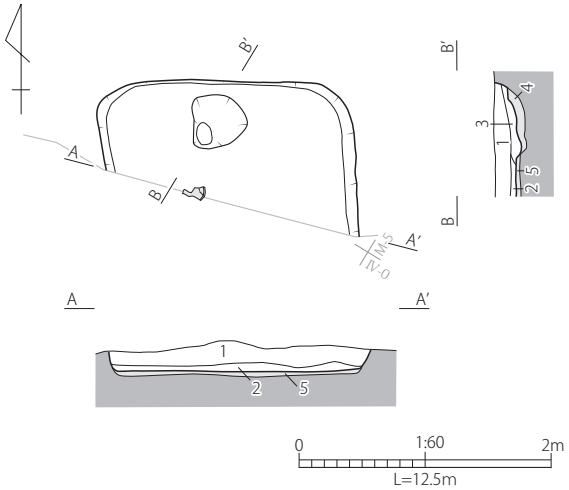
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。両袖とも残存せず燃焼室のみ検出される。規模は全長 47cm、燃焼室幅 48cm を測る。

出土遺物（第 62 図）

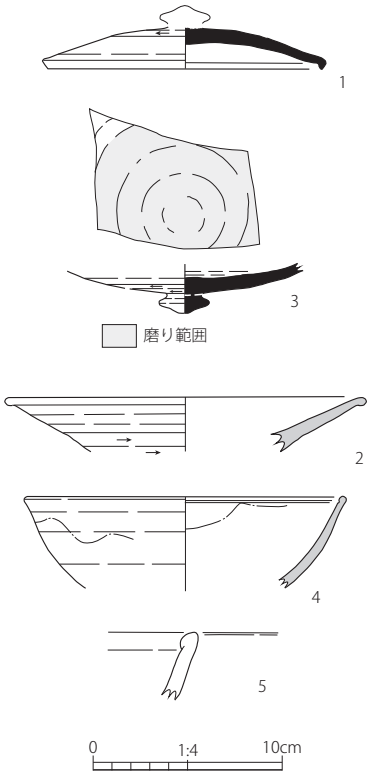
1・3 は須恵器の坏蓋である。1 は摘蓋で、摘み部が剥離・欠損する。3 は内面に磨り痕が顕著なことから、転用硯と考えられる。2 は灰釉陶器の皿とみられる。下部の器壁が厚く、ほぼ底部に近い位置まで残存しているものと判断される。4 は灰釉陶器の碗であり、口唇部の内外面に灰釉が施される。5 は土師器甕の口縁部である。

時期　床面出土の 1・3 を重視すれば、富士Ⅱ～Ⅲ期（8 世紀中～後葉頃）の建物跡と考えられる。



1	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB21覆土
2	暗褐色	しまりやや強、粘性強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア多量。	SB21覆土
3	暗褐色	しまり弱、粘性強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。焼土少量。粘土多量。	SB21カマド崩落土
4	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。粘土少量。	SB21カマド掘方
5	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。黄褐色土多量。	SB21掘方埋土

第 61 図　SB21　平面図・断面図



第 62 図　SB21　出土遺物実測図

SB24

遺構（第 63・64 図）

位置　L- Ⅲグリッド

重複関係

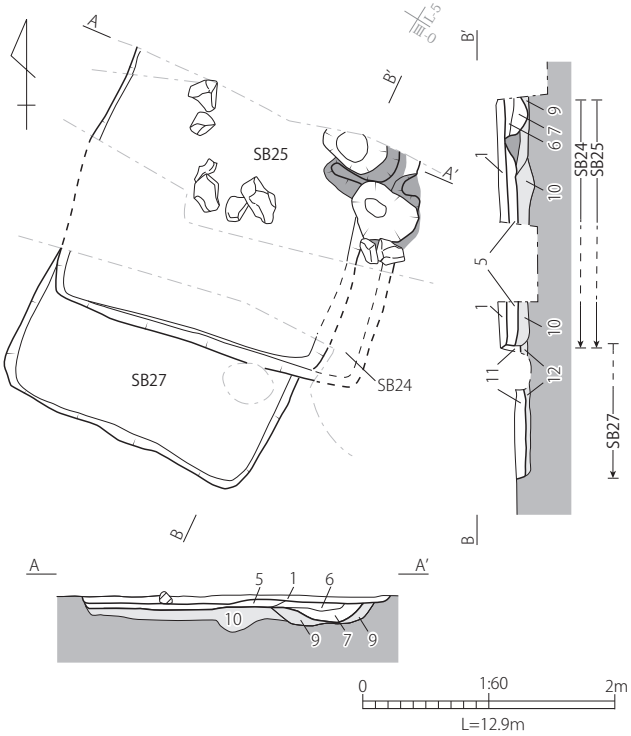
（古）SB33 → SB35 → SB28 → SB27 → SB25 → SB24（新）

（古）SB33 → SB35 → SB28 → SB26 → SB24（新）

主軸方位　N-108.0°-E

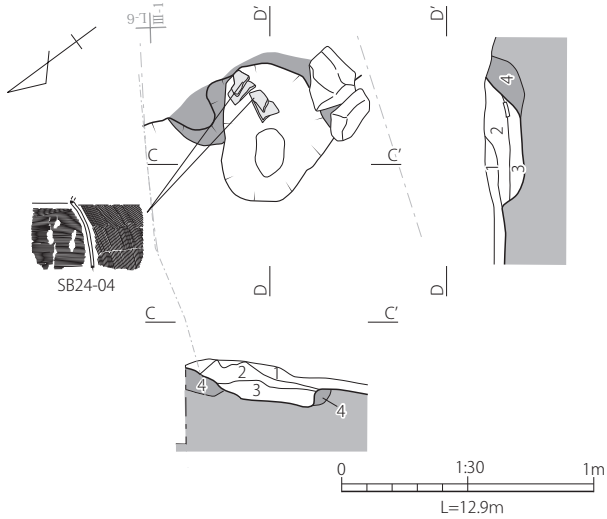
残存状況　建物跡の北側は撹乱により削平されている。また上層も削平されていて覆土は浅い。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（東西）2.57m、直交（南北）2.09m、深さ 6cm を測る。建物跡中央付近の床面からは数個の石（20 ～ 30cm）がまとまって検出される。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。



1	暗褐色	しまり弱、粘性やや弱。溶岩礫少量。 大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。焼土少量。	SB24覆土
5	暗褐色	しまりやや強、粘性強。大淵スコリア微量。 大沢スコリア少量。焼土微量。粘土微量。	SB25覆土
6	黄褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土少量。粘土多量。	SB25カマド崩落土
7	赤褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。焼土多量。	SB25カマド燃焼室
8	黄褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土少量。粘土多量。	SB25カマド袖
9	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。大沢スコリア微量。	SB25カマド掘方
10	暗褐色	しまりやや強、粘性強。溶岩礫微量。 大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。焼土微量。 粘土微量。	SB25掘方埋土
11	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。 大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB27覆土
12	黒褐色	しまりやや強、粘性強。溶岩礫少量。 大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB27掘方埋土

第 63 図　SB24・SB25・SB27　平面図・断面図



1	暗褐色	しまり弱。粘性やや弱。溶岩礫少量。 大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。焼土少量。	SB24覆土
2	黄褐色	しまり強。粘性弱。粘土多量。	SB24カマド崩落土
3	橙色	しまり弱。粘性弱。焼土多量。	SB24カマド燃焼室
4	黄褐色	しまり強。粘性弱。焼土微量。粘土多量。	SB24カマド袖

第 64 図　SB24　カマド平面図・断面図

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　東壁。両袖とも端部がない状態で検出され、右袖には芯材となる石材が残存する。規模は全長 55cm、幅 80cm、燃焼室幅 44cm を測る。

出土遺物（第 65 図）

1 ～ 3 は須恵器である。1 は返蓋で頂部に回転ヘラケズリが施される。2 はハソウとみられる壺類の肩部であり、肩部に粗雑な波状文とその下部に沈線がめぐる。3 は壺の底部であり、いわゆる「壺 G」とみられる。断面はその外周部分だけ焼成が甘く、暗赤褐色を呈する。4 は土師器の長胴甕である。

時期　切り合い関係とカマド出土の 3・4 を重視すれば、富士Ⅴ期（9 世紀中葉頃）の建物跡と考えられる。

SB25

遺構（第 63・66 図）

位置　L- Ⅲグリッド

重複関係

（古）SB33 → SB35 → SB28 →
SB27 → SB25 → SB24（新）

主軸方位　N-105.0° -E

残存状況　建物跡の北側は撹乱により削平されている。また覆土の上層は SB24 に削平されているものの床面は検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（東西）2.10m、直交（南北）2.09m、深さ 10cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

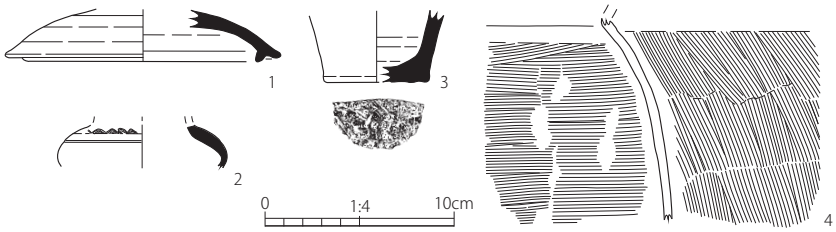
壁溝　確認されない。

床　厚さ 10cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　東壁。北側半分は撹乱により削平されていて左袖のみ検出される。規模は検出範囲内で全長 64cm、幅 52cm、燃焼室幅 30cm を測る。



第 65 図　SB24　出土遺物実測図

出土遺物（第 67 図）

1・2 は土師器の小型甕である。1 は肩が張り、底部に向かって窄まる形態の小型甕であり、同時期の長胴甕の影響を受けたものと判断される。2 は肩が張らない形態であり、体部外面がタテハケ、内面がヨコハケ調整される。

時期　1・2 はいずれも床下やカマド掘方出土であるが、これらを重視し、切り合い関係も勘案すれば富士Ⅴ期（9 世紀中葉頃）の建物跡と考えられる。

SB27

遺構（第 63 図）

位置　L- Ⅲグリッド

重複関係

（古）SB33 → SB35 → SB28 → SB27 → SB25 → SB24（新）

主軸方位　N-24.0° -E

残存状況　建物跡の北側は SB24、SB25 により削平されていて南側のみ検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）1.10m、直交（東西）2.23m、深さ 9cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 4cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

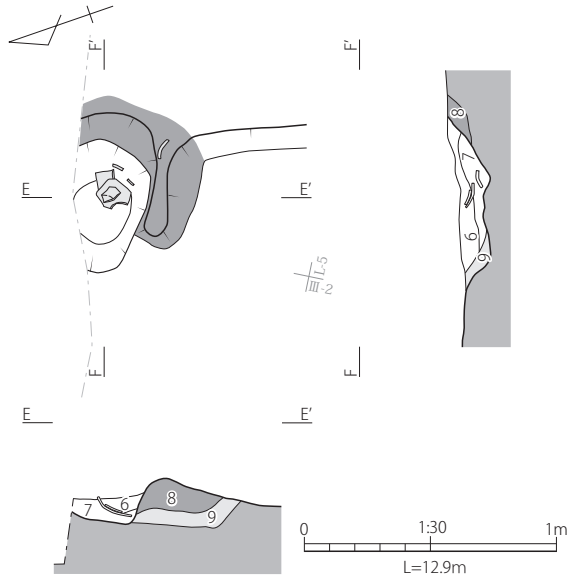
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

出土遺物（第 68 図）

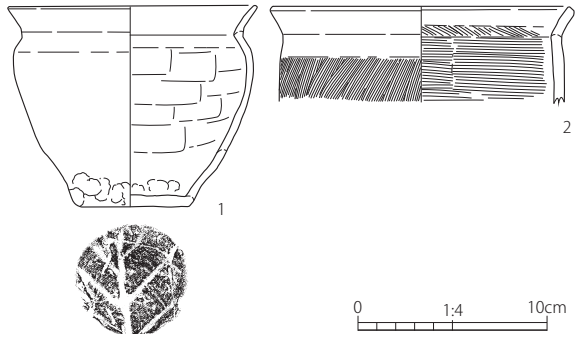
1 は土師器の坏である。須恵器坏蓋の模倣土師器とみられるが、口縁部の立ち上がりは低く、ミガキのない簡素な作りである。

時期　1 を重視すれば、沢東Ⅱ期（7 世紀中葉～後葉頃）の建物跡と考えられる。

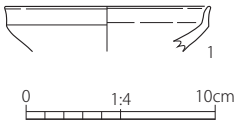


6	黄褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土少量。粘土多量。	SB25カマド崩落土
7	赤褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。焼土多量。	SB25カマド燃焼室
8	黄褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土少量。粘土多量。	SB25カマド袖
9	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。大沢スコリア微量。	SB25カマド掘方

第 66 図　SB25　カマド平面図・断面図



第 67 図　SB25　出土遺物実測図



第 68 図　SB27　出土遺物実測図

SB26

遺構（第 69 図）

位置　L- Ⅲグリッド

重複関係

（古）SB33 → SB35 → SB28、SB32 → SB26 → SB24（新）

主軸方位　N-22.0° -E

残存状況　建物の北側が部分的に撹乱により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は主軸（南北）2.69m、直交（東西）2.58m、深さ 22cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

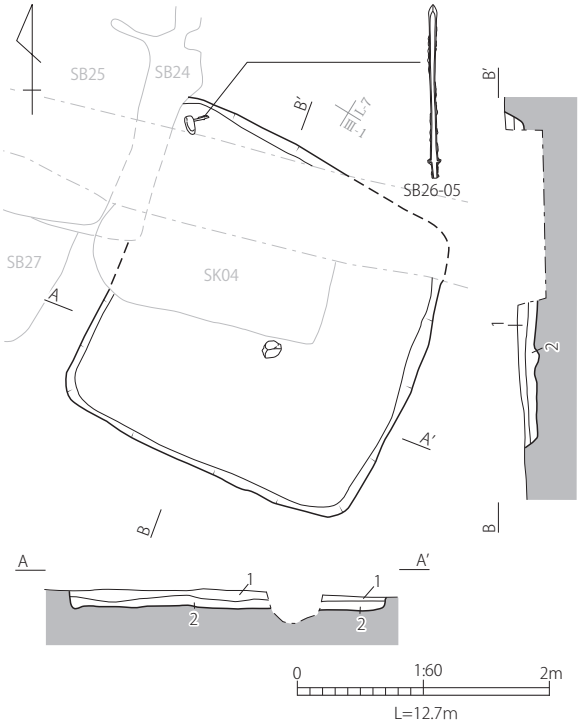
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

出土遺物（第 70 図）

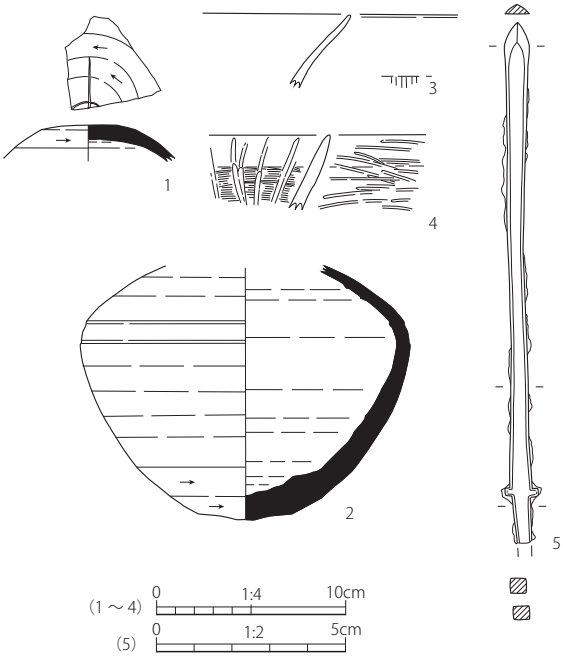
1･2 は須恵器である。1 は坏蓋で頂部に窯記号「－」がみられる。2 は肩が張る形態から、広口短頸壺と判断される。肩部と胴部の境に 2 条の浅い沈線をめぐらせる。底部は回転ヘラケズリが施される。3・4 は土師器で、3 は長胴甕の口縁部、4 は高坏の坏部とみられる。5 は鉄鏃であり、尖根鑿箭式である。鏃身部には鎬が作り出され、頸部と茎部の境に棘関がみとめられる。

時期　掘方出土とされる 2 は、当該建物自体に掘方埋土がないことから、本来は下層の SB28 に伴う可能性がある。確実に床面出土とされる 5 を定点として、1 をその共伴と考えれば、沢東 I 期（6 世紀末～ 7 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



1	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB26覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB26覆土

第 69 図　SB26　平面図・断面図



第 70 図　SB26　出土遺物実測図

SB28

遺構（第 71・72 図）

位置　L- Ⅲグリッド

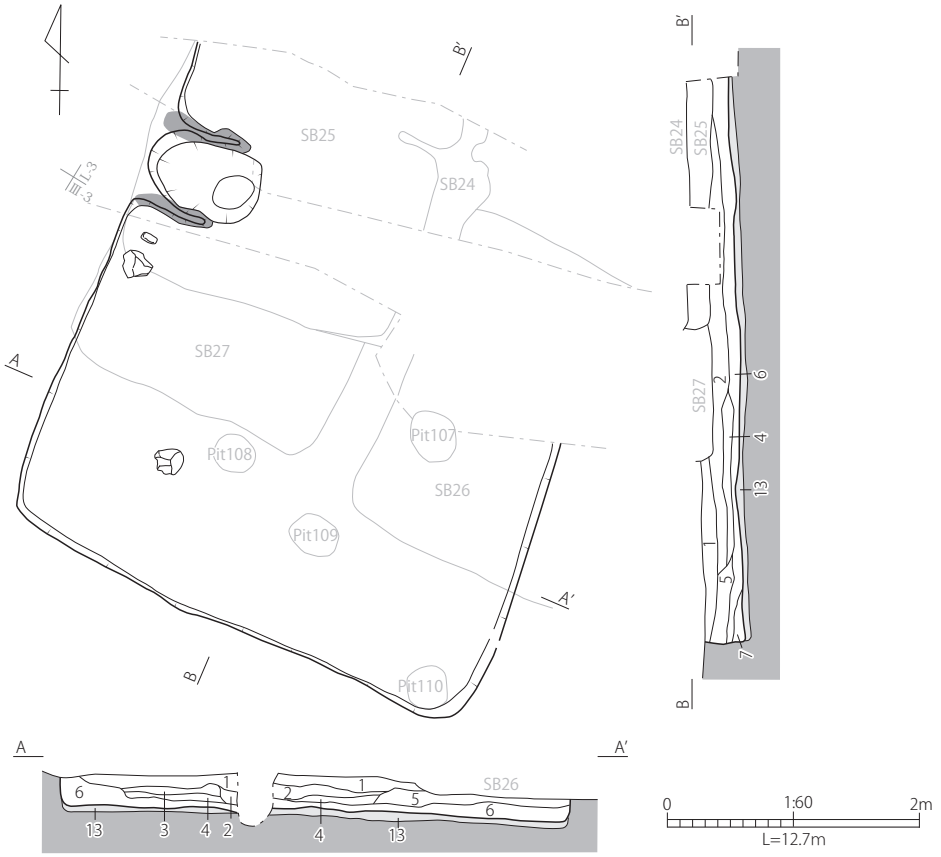
重複関係

（古）SB33 → SB35 → SB28 → SB27 → SB25 → SB24（新）

（古）SB33 → SB35 → SB28 → SB26（新）

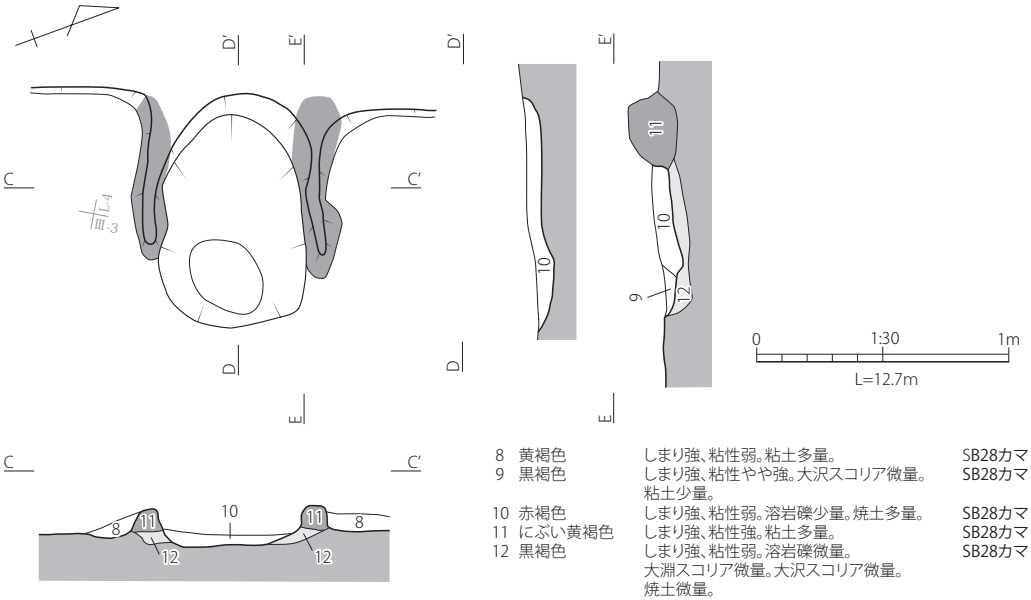
主軸方位　N-67.0° -W

残存状況　建物跡の北側は撹乱により削平されていて検出されない。また重複する遺構（SB24 ～ SB27）により覆土の上層は部分的に削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸



1	黒褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB28覆土
2	黒色	しまり弱、粘性強。溶岩礫少量。大沢スコリア少量。褐色ブロック微量。	SB28覆土
3	黒褐色	しまり強、粘性やや弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB28覆土
4	黒褐色	しまりやや強、粘性強。溶岩礫微量。大沢スコリア少量。カワゴ平P少量。褐色粒子微量。	SB28覆土
5	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB28覆土
6	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB28覆土
7	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。黄褐色土含。	SB28覆土
13	黒褐色	しまり強、粘性やや弱。溶岩礫少量。大沢スコリア少量。	SB28掘方埋土

第 71 図　SB28　平面図・断面図



8	黄褐色	しまり強、粘性弱。粘土多量。	SB28カマド崩落土
9	黒褐色	しまり強、粘性やや強。大沢スコリア微量。粘土少量。	SB28カマド燃焼室
10	赤褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。焼土多量。	SB28カマド燃焼室
11	にぶい黄褐色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB28カマド袖
12	黒褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。焼土微量。	SB28カマド掘方

第 72 図　SB28　カマド平面図・断面図

（東西）4.02m、直交（南北）4.49m、深さ 31cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 5cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　西壁北寄り。上層は削平されているものの両袖とも検出される。規模は全長 93cm、幅 84cm、燃焼室幅 55cm を測る。

出土遺物（第 73 図）

1 は灰釉陶器の碗である。内外面に灰釉が施される。2 ～ 4 は須恵器で、2 はハソウとみられる肩部片である。3 は坏蓋で、頂部に窯記号「－」の一部が残る。4 も坏蓋であるが、口唇部はシャープな作りで、内側に内傾面を有する。4 は遠江 I ～ II 期（5 世紀後半～ 6 世紀前葉）の須恵器とみられる。5 ～ 8 は土師器である。5 は底部に回転糸切り痕を残す坏で、内外面ともヨコナデが施される。口縁部内面の一部に煤の付着がみられ、灯明皿に使用された可能性がある。6 は鉢で、短く外反して立ち上がる口縁部を有する。当該地域ではあまり一般的ではない器種である。7･8 は 7 世紀以前の甕の口縁部である。

時期　複数時期の土器が出土しているが、切り合い関係から 5・6 は後世の混入とみられる。3・7・8 および本来は当該建物跡に伴うと考えられる SB26-02 を重視し、沢東 I 期（6 世紀末～ 7 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。

SB29

遺構（第 74・75 図）

位置　M- I 、M- II グリッド

重複関係（古）SB44 → SB29（新）

主軸方位　N-34.0° -E

残存状況　建物跡の北西コーナーが撹乱により削平されているものの、比較的良好な状態で検出される。床面中央付近からは炭化材が検出されており、焼失建物と考えられる。平面形はやや不整形な長方形を呈し、規模は主軸（南北）3.73m、直交（東西）3.46m、深さ 10cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土で多量の焼土、炭化物が混入する。

壁溝　建物跡の北西付近に幅 12cm、深さ 8cm の壁溝が部分的に検出される。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

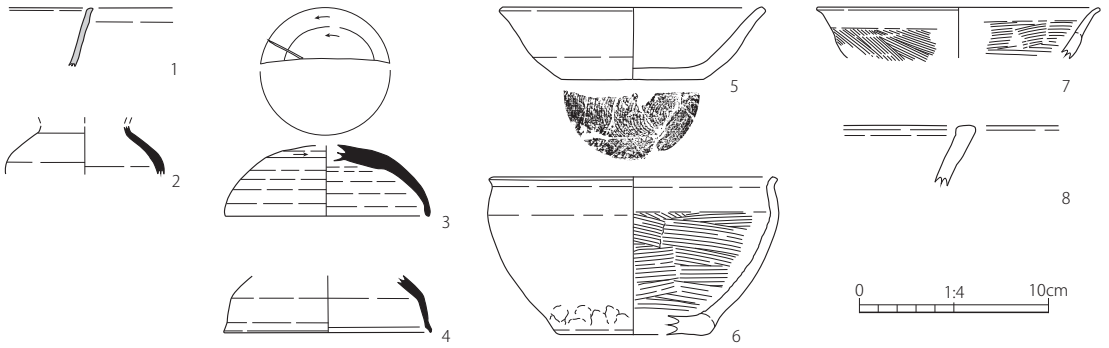
柱穴　4 基のピットが検出される。規模は長軸 35 ～ 54cm、短軸 33 ～ 52cm、床面からの深さ 14 ～ 40cm を測る。

その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁東寄り。両袖とも検出され、左袖の端部には芯材となる石材が検出される。規模は全長 76cm、幅 82cm、燃焼室幅 45cm を測る。

出土遺物（第 76 図）

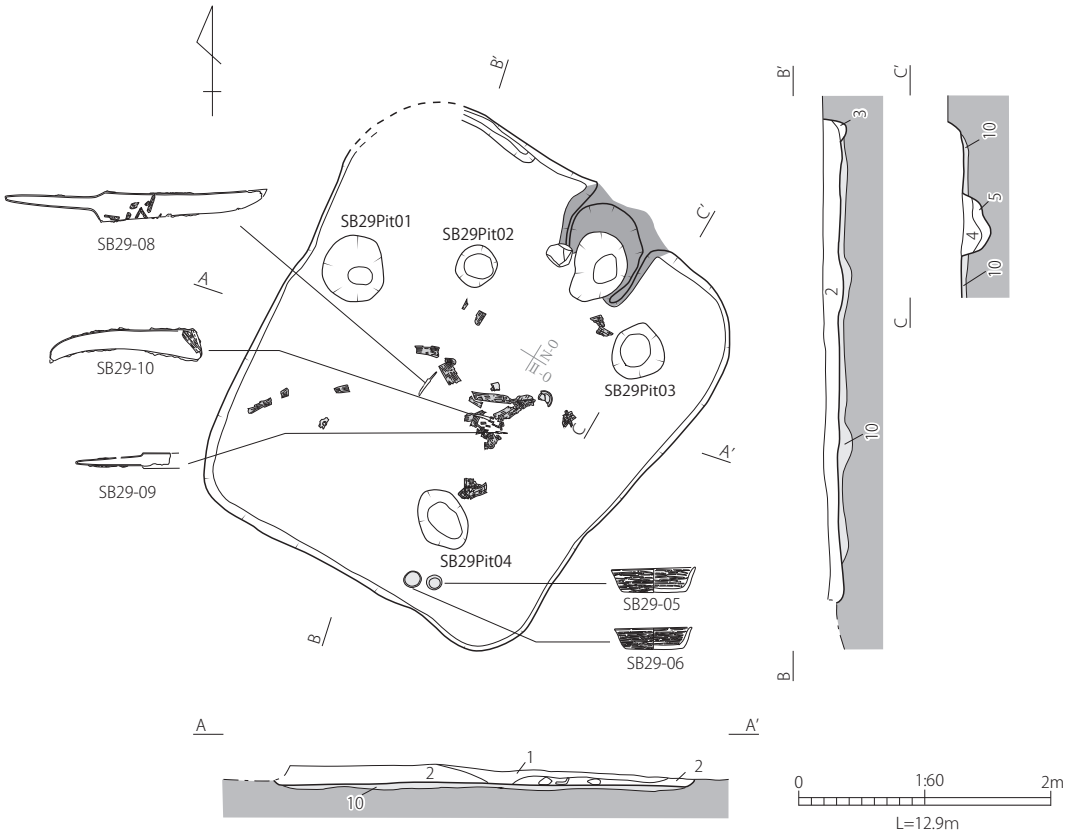
1・2 は須恵器で、1 は坏蓋（摘蓋）、2 は坏身（高台坏）である。2 は底部を回転糸切り後、低い高台を貼り付けているとみられる。3 ～ 6 は土師器の坏で、3 は内外面が黒色処理される。4 は甲斐型坏で、口唇部が玉縁状で、底部は手持ちヘラケズリが施さ



第 73 図　SB28　出土遺物実測図

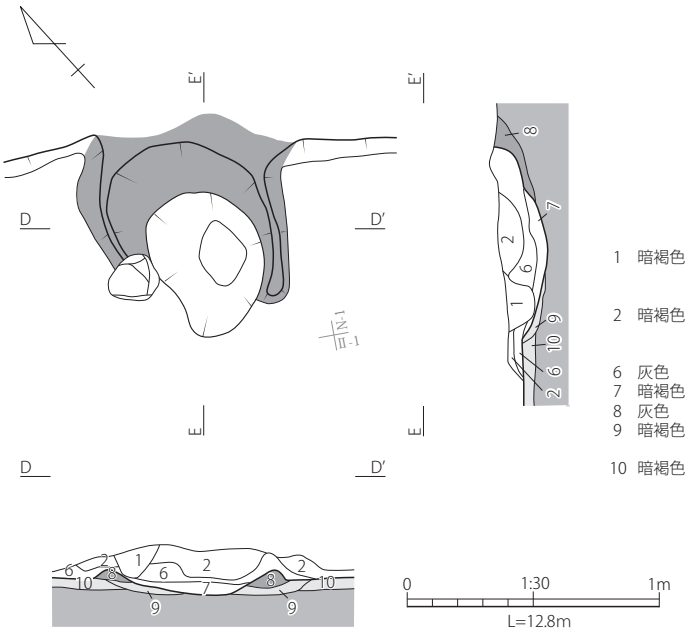
れるものである。3 は 7 世紀、4 は 10 世紀の混入物とみられる。5・6 は箱形の坏であり、体部内外面にヨコミガキ、見込み部に放射状ミガキがそれぞれ入念に施される時期のものである。器高に対して底径が大きく、いわゆる駿東型坏の成立期のものとみてよい。なお、5 は口縁部内面の一部から見込み部にかけて煤が付着する部分があり、灯明皿として使用された可能性が考えられるが、SB29 が焼失建物ということもあり、火災の影響によるものかもしれない。7 は土師器の長胴甕で、緩やかに外反する口縁部形態をとる在地の甕である。蓋受部を作り出すかのように口唇部を上方にやや摘み上げる点は、比較的古相の長胴甕の特徴とみられる。8・9 は鉄製刀子で、8 は切先が、9 は切先から刃部と茎部の一部が欠損する。8 は残存長が 23.4cm を測る大型の刀子であり、関は刃側が深い両撫関である。なお、刃部には炭化した木材が付着している。9 も関は両撫関とみられ、茎部の柄材が炭化している。10 は鉄製の曲刃鎌であり、身基端部の角を折り曲げて木柄に装着するものである。身基端部に炭化した木質が付着する。11 は不明鉄製品であるが、断面が逆台形であり、刀子の茎部を折り曲げたものの可能性がある。12 も種別不明の鉄製品であるが、鉄鏃の茎部にしてはやや太く、錐の茎部の可能性がある。13・14 は小型の耳環とみられるが、ともに銅地金銅張で径が 1.1cm 前後を非常に小さいことから、別の用途の金具の可能性もある。

時期　床面出土の 1・5・6 を重視し、2 をその共伴と考えれば、富士Ⅲ期（8 世紀後葉頃）の建物跡と考えられる。



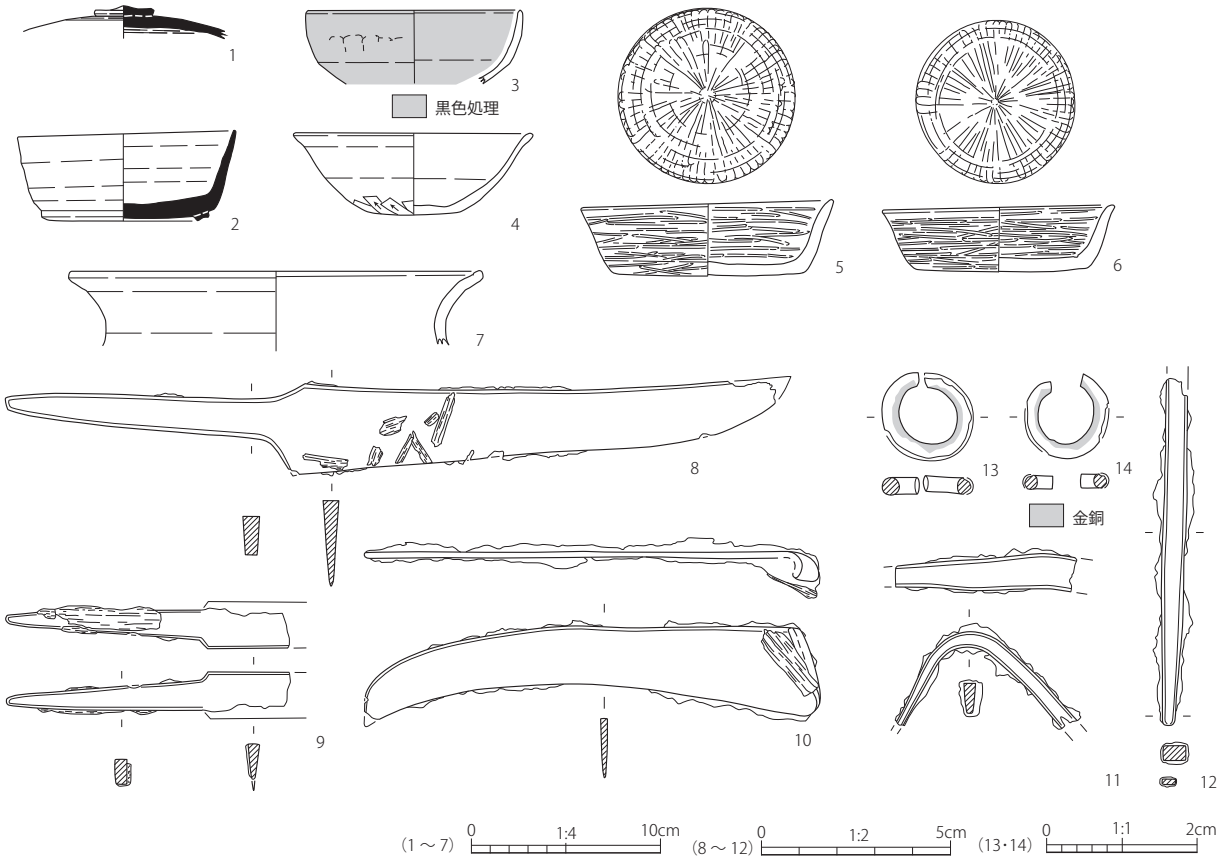
1	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。焼土多量。炭化物多量。	SB29覆土
2	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫多量。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。焼土少量。炭化物多量。	SB29覆土
3	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫中量。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。	SB29覆土
4	灰褐色	しまりやや強、粘性強。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。粘土多量。	SB29Pit覆土
5	黄灰色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB29Pit覆土
10	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫多量。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。黄褐色ブロック中量。	SB29掘方埋土

第 74 図　SB29　平面図・断面図



1	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。焼土多量。炭化物多量。	SB29覆土
2	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫多量。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。焼土少量。炭化物多量。	SB29覆土
6	灰色	しまりやや強、粘性やや強。焼土少量。粘土多量。	SB29カマド崩落土
7	暗褐色	しまり強、粘性やや弱。焼土中量。粘土中量。	SB29カマド燃焼室
8	灰色	しまりやや強、粘性強。大淵スコリア少量。粘土多量。	SB29カマド袖
9	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫中量。大淵スコリア少量。	SB29カマド掘方
10	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫多量。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。黄褐色ブロック中量。	SB29掘方埋土

第 75 図　SB29　カマド平面図・断面図



第 76 図　SB29　出土遺物実測図

SB31

遺構（第 77・79 図）

位置　L- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB43 → SB30 → SB18 → SB31 → SB09、SB17（新）

（古）SB31 → SB04 → SB03 → SH01（新）

主軸方位　N-14.0° -E

残存状況　建物跡の南側は重複する遺構（SB04、SB17）により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.86m、直交（東西）3.18m、深さ 14cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 8cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

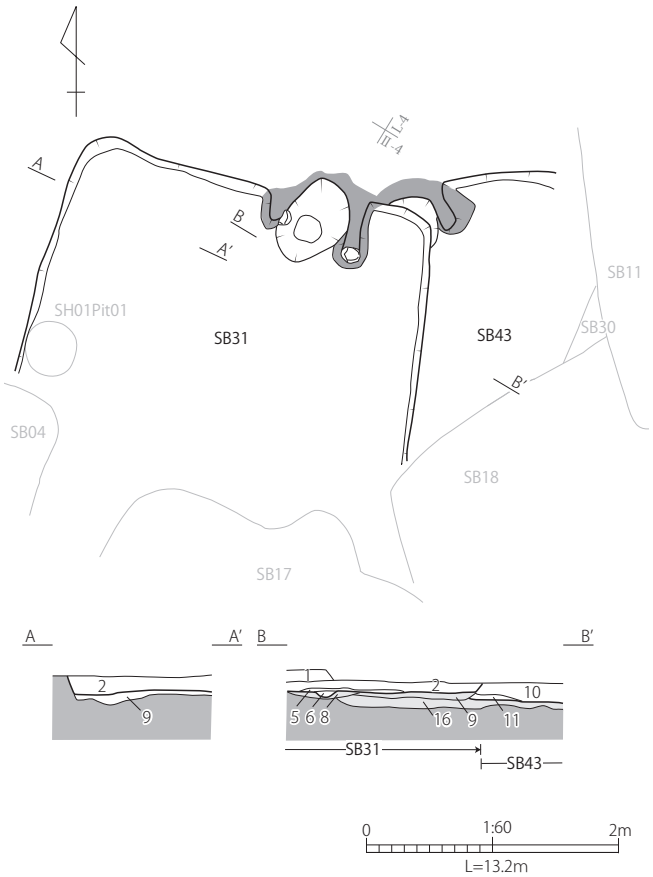
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁東寄り。両袖とも残存し、両袖の端部には芯材となる石材がある。規模は全長 71cm、幅 91cm、燃焼室幅 48cm を測る。

出土遺物（第 78 図）

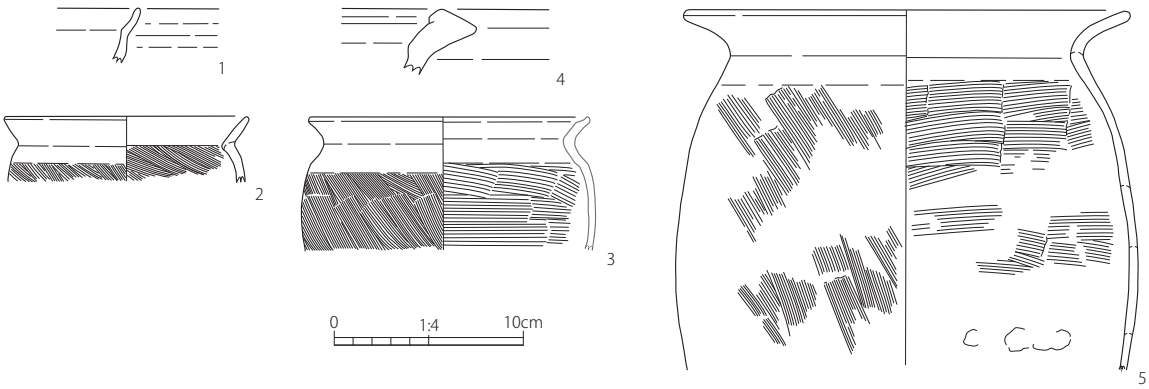
1 ～ 5 は土師器である。1 は坏で、口縁部が内湾して上方に立ち上がる。2・3 は小型甕で、ともにくの字形の口縁部を有するが、3 は頸部が若干存在しており、長胴甕の形状の影響が看取される。4 は塝の口縁部、5 は長胴甕である。

時期　カマド出土の 2・5 を重視し、3 をその共伴と考えれば、富士Ⅳ期（9 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。

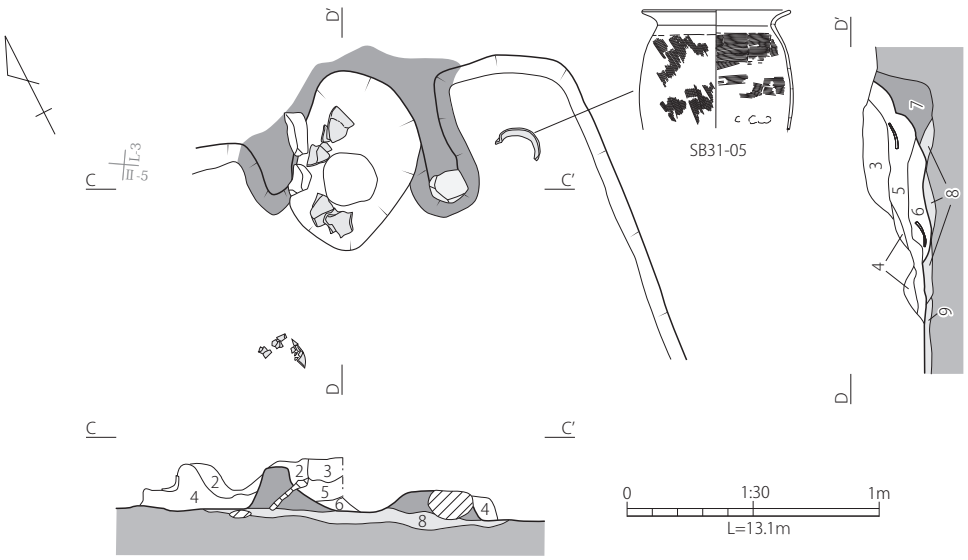


1	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土微量。	SB31覆土
2	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土少量。	SB31覆土
5	黒色	しまり弱、粘性やや弱。焼土中量。粘土少量。	SB31カマド燃焼室
6	赤褐色	しまり弱、粘性弱。焼土多量。炭化物中量。	SB31カマド燃焼室
8	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。粘土少量。	SB31カマド掘方
9	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB31掘方埋土
10	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。焼土少量。	SB43覆土
11	褐灰色	しまり弱、粘性弱。炭化物多量。	SB43覆土
16	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。炭化物微量。	SB43掘方埋土

第 77 図　SB31・SB43　平面図・断面図

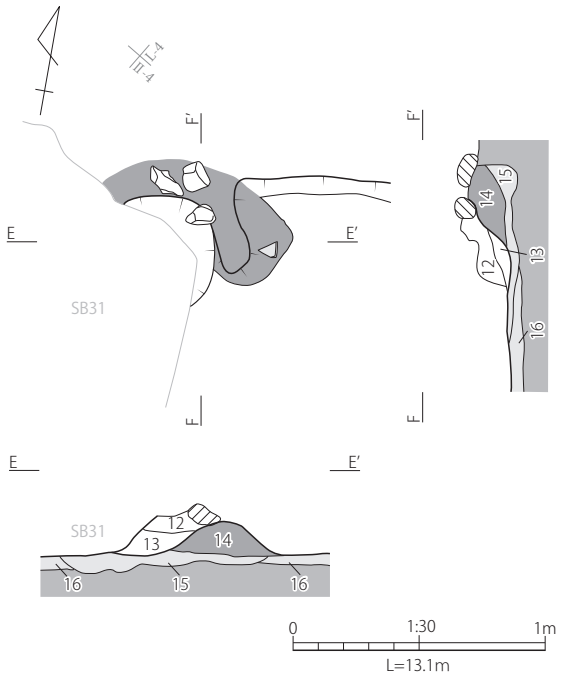


第 78 図　SB31　出土遺物実測図



2	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土少量。	SB31覆土
3	黒褐色	しまり弱、粘性強。粘土多量。	SB31覆土
4	黄灰色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB31カマド崩落土
5	黒色	しまり弱、粘性やや弱。焼土中量。粘土少量。	SB31カマド燃焼室
6	赤褐色	しまり弱、粘性弱。焼土多量。炭化物中量。	SB31カマド燃焼室
7	褐灰色	しまり強、粘性強。黒色土少量。	SB31カマド袖
8	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。粘土少量。	SB31カマド掘方
9	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB31掘方埋土

第 79 図　SB31　カマド平面図・断面図



12	褐灰色	しまりやや弱、粘性強。粘土多量。黒色土多量。	SB43カマド崩落土
13	褐灰色	しまりやや強、粘性弱。焼土多量。	SB43カマド燃焼室
14	黄灰色	しまりやや強、粘性強。焼土少量。粘土多量。黒色土多量。	SB43カマド袖
15	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。焼土少量。	SB43カマド掘方
16	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。炭化物微量。	SB43掘方埋土

第 80 図　SB43　カマド平面図・断面図

SB43

遺構（第 77・80 図）

位置　L- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB43 → SB30 → SB18 → SB11 → SB10 → SB31 → SB09（新）

主軸方位　N-9.5° -W

残存状況　重複する遺構（SB11、SB18、SB31 など）により削平され、北壁の一部のみが検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.21m、直交（東西）1.56m、深さ 13cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 7cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁。西側は SB31 により削平されている。規模は検出範囲内で全長 45cm、幅 64cm、燃焼室幅 31cm を測る。

出土遺物

図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、富士 I 期（8 世紀前葉頃）以前の建物跡と考えられる。

SB32

遺構（第 81 図）

位置　L- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB32 → SB26（新）

主軸方位　N-11.0° -E

残存状況　北側は撹乱、西側は SB26 により削平されているため建物跡の南東部のみ検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）1.06m、直交（東西）1.79m、深さ 25cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

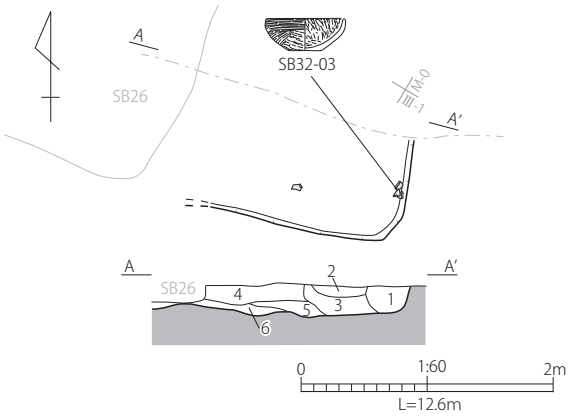
壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

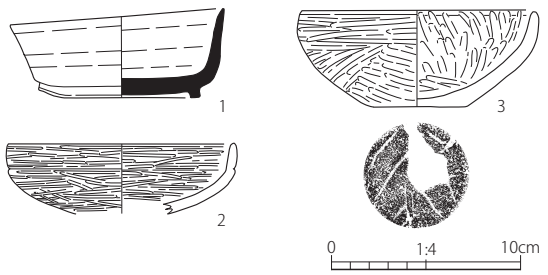
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。



1	暗褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB32覆土
2	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB32覆土
3	黒褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大沢スコリア微量。	SB32覆土
4	黒褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。	SB32覆土
5	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。大沢スコリア少量。	SB32覆土
6	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。炭化物少量。	SB32覆土

第 81 図　SB32　平面図・断面図



第 82 図　SB32　出土遺物実測図

出土遺物（第 82 図）

1 は須恵器の坏身（高台坏）で、焼き歪みのため口縁部が傾いた形状となっており、焼成もやや甘い。底部は回転ヘラケズリ後に低い高台が貼り付けられている。2・3 は土師器の坏で、2 は須恵器坏蓋を模倣した形態であり、底部は手持ちヘラケズリ後に入念なミガキが施されている。3 は木葉痕の残る小さな平底から体部が内湾しながら立ち上がる形態の坏である。外面には広く煤が付着しており、黒色処理の可能性もある。

時期　床面出土の 3 を重視し、2 をその共伴と考えれば、安久Ⅳ期（6 世紀後半頃）の建物跡と考えられる。

SB33

遺構（第 83 図）

位置　L- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB33 → SB35 → SB28（新）

主軸方位　N-74.5° -W

残存状況　覆土は浅く建物跡の南側は残存しない。重複する遺構（SB28、SB35）により削平されていて西壁の一部のみが検出される。西壁が直線的であることから平面形は方形を呈するものと考えられる。規模は検出範囲内で主軸（東西）2.50m、直交（南北）2.55m を測る。

覆土　確認されない。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

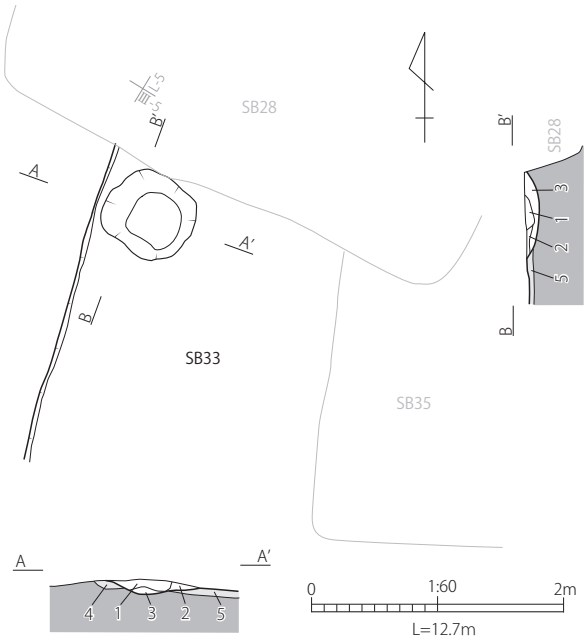
その他の遺構　確認されない。

カマド　西壁。両袖とも残存せず燃焼室のみ検出される。規模は全長 71cm、燃焼室幅 65cm を測る。

出土遺物

図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、沢東Ⅰ期（6 世紀末～ 7 世紀前葉頃）以前の建物跡と考えられる。



1	赤褐色	しまり弱、粘性弱。焼土多量。	SB33カマド燃焼室
2	黒褐色	しまり弱、粘性強。溶岩礫多量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB33カマド燃焼室
3	黒褐色	しまり弱、粘性強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB33カマド燃焼室
4	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB33カマド掘方
5	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB33掘方埋土

第 83 図　SB33　平面図・断面図

SB35

遺構（第 84 図）

位置　L- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB33 → SB35 → SB28（新）

主軸方位　N-93.0° -E

残存状況　北側は SB28 と撹乱により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（東西）3.54m、直交（南北）2.37m、深さ 4cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

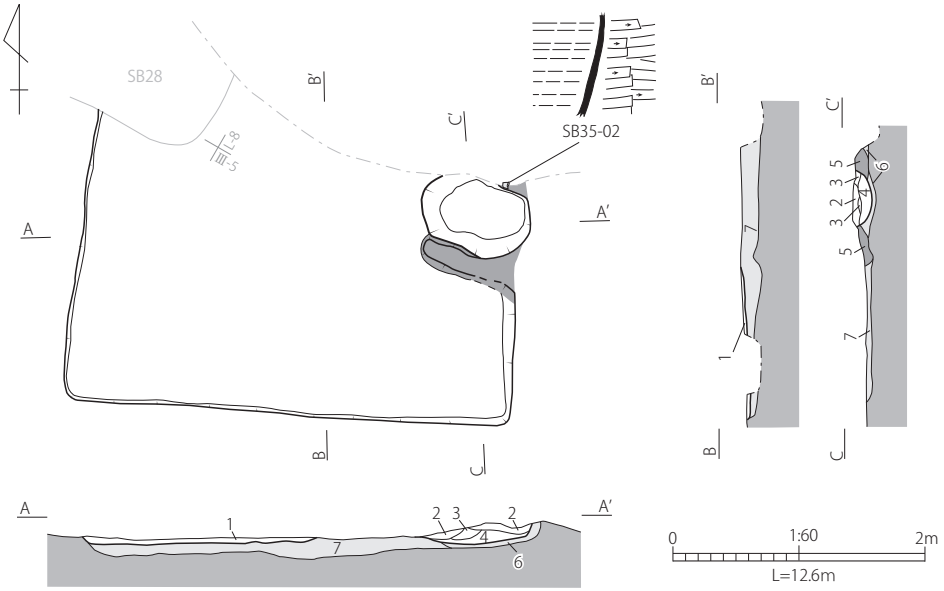
壁溝　確認されない。

床　厚さ 15cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　東壁中央。北側は撹乱により削平され右袖のみが検出される。規模は検出範囲内で全長 93cm、幅 80cm、燃焼室幅 57cm を測る。



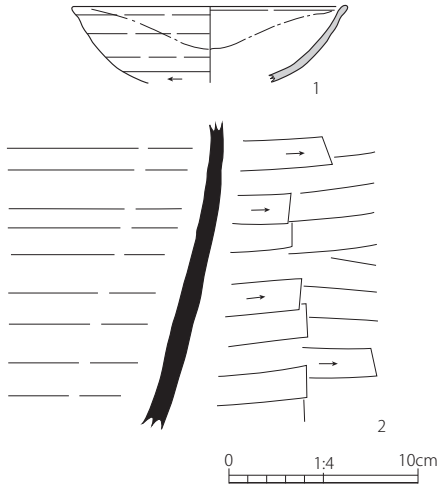
1	黒褐色	しまり強、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB35覆土
2	黄黒色	しまり強、粘性弱。焼土少量。粘土多量。	SB35カマド崩落土
3	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。焼土多量。	SB35カマド燃焼室
4	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。焼土多量。粘土中量。	SB35カマド燃焼室
5	黄褐色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB35カマド袖
6	黒褐色	しまり強、粘性弱。大淵SC多量。大沢スコリア微量。焼土少量。	SB35カマド掘方
7	黒褐色	しまり強、粘性弱。大淵SC多量。大沢スコリア微量。	SB35掘方埋土

第 84 図　SB35　平面図・断面図

出土遺物（第 85 図）

1 は灰釉陶器の碗である。体部内外面に漬け掛けによるものとみられる灰釉が施される。底部調整は回転ヘラケズリである。2 は須恵器の甕あるいは壺類とみられる体部片であり、外面は横方向の板ナデあるいはケズリによって整形される。

時期　切り合い関係から、沢東 I 期（6 世紀末～ 7 世紀前葉頃）以前の建物跡と考えられる。



第 85 図　SB35　出土遺物実測図

SB36

遺構（第 87・88 図）

位置　L- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB36 → SB18 → SB31 → SB17（新）

主軸方位　N-16.0° -E

残存状況　建物跡の南側と西壁の一部を撹乱により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）3.95m、直交（東西）4.31m、深さ 34cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　幅 22cm、深さ 9cm の壁溝が西壁沿いに検出される。

床　掘方を床面としている。

柱穴　6 基のピットを検出し、その内 4 基（SB36Pit02、SB36Pit03、SB36Pit05、SB36Pit06）は主柱穴と考えられる。規模は長軸 40 ～ 52cm、短軸 38 ～ 48cm、床面からの深さ 12 ～ 44cm を測る。

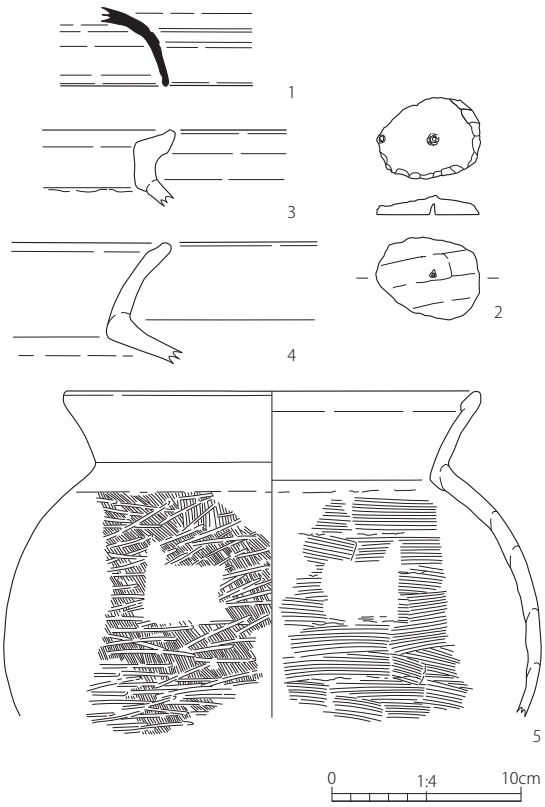
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁東寄り。両袖とも残存し比較的良好な状態で検出される。規模は全長 79cm、幅 97cm、燃焼室幅 50cm を測る。

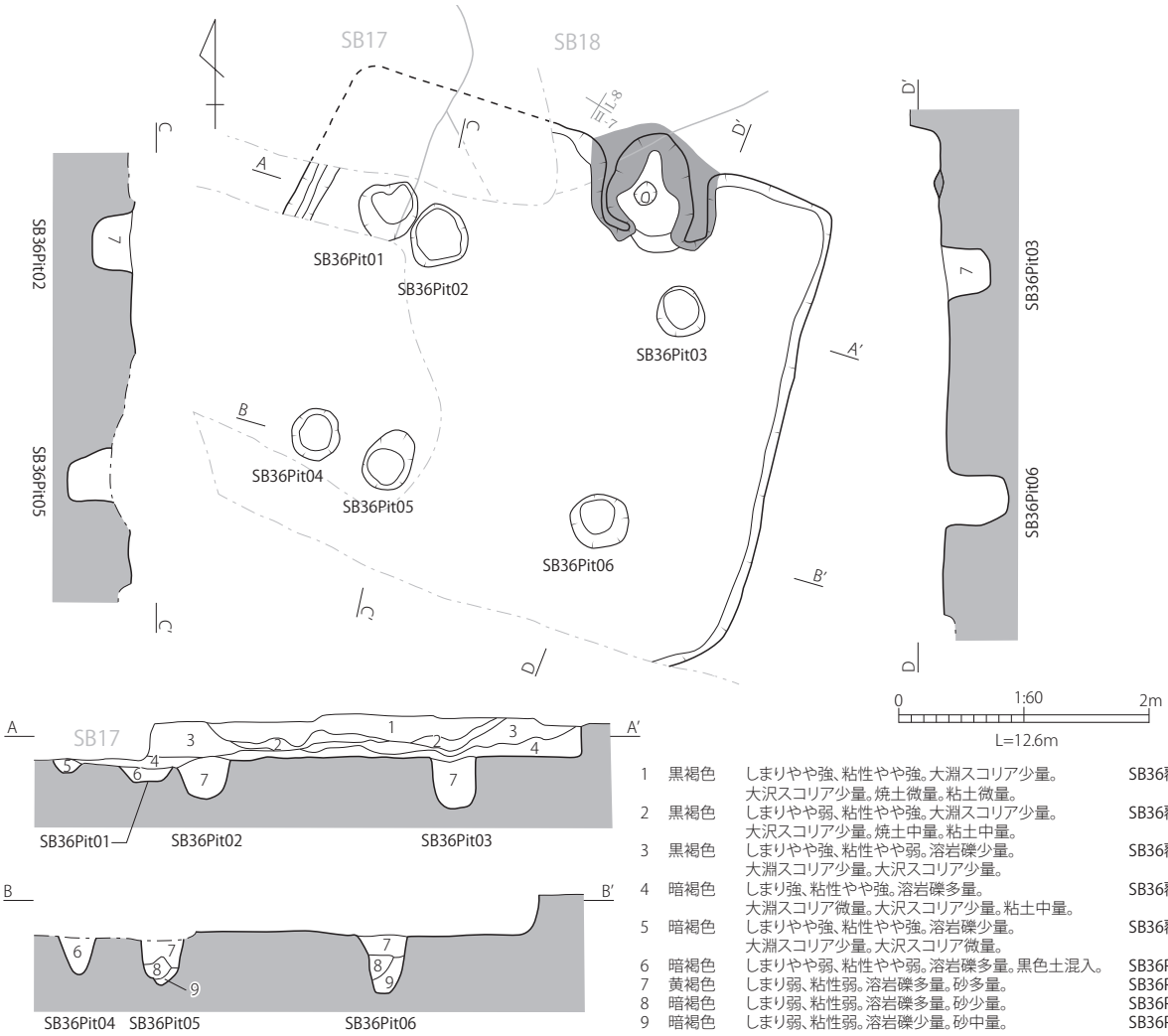
出土遺物（第 86 図）

1 は須恵器の坏蓋で、天井部と口縁部の境界に 2 条の緩い沈線がめぐる。2 は器種不明の土師器の破片とみられ、底面から穿孔されているが、貫通していない。3 は土師器の堝とみられるが、垂直に立ち上げる短い頸部を有するものは珍しい。4・5 は土師器の甕であり、5 は球胴形の体部に入念なミガキが施される。

時期　カマド出土の 5 を重視すれば、富士 I 期（8 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。

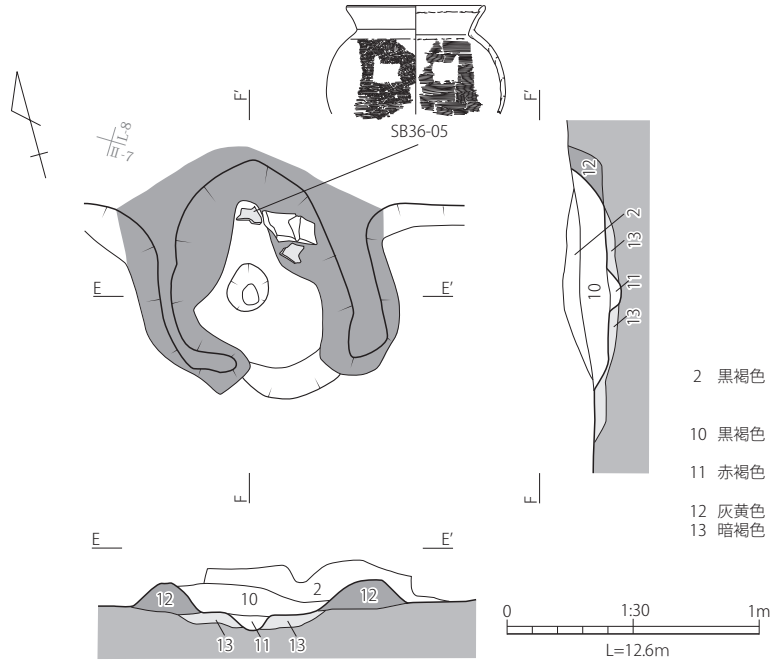


第 86 図　SB36　出土遺物実測図



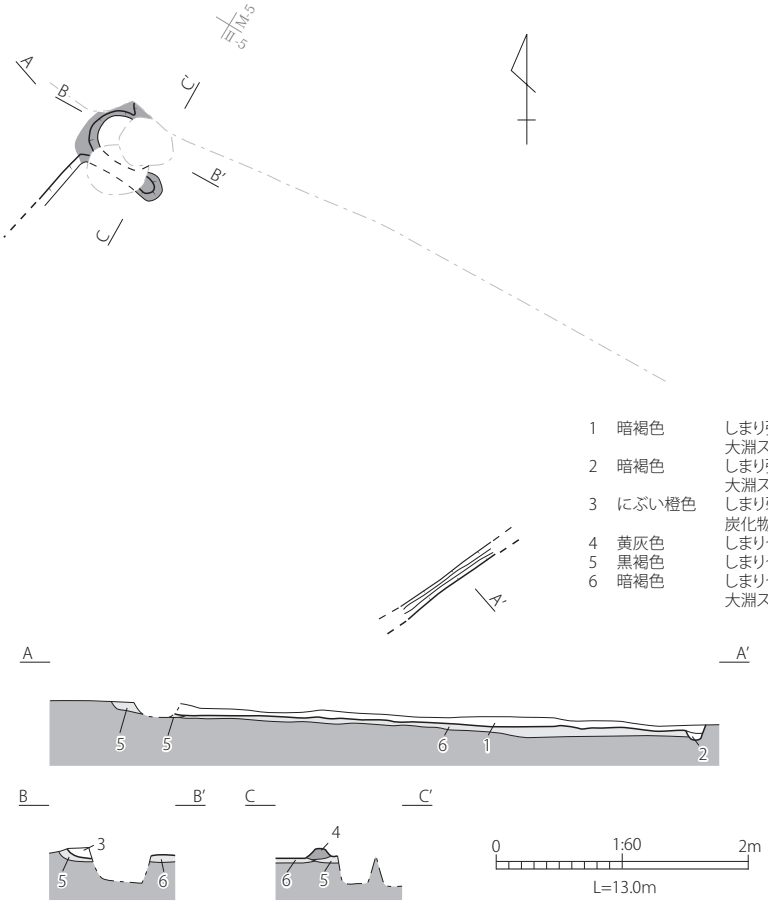
1	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。焼土微量。粘土微量。	SB36覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。焼土中量。粘土中量。	SB36覆土
3	黒褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB36覆土
4	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫多量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。粘土中量。	SB36覆土
5	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB36覆土
6	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫多量。黒色土混入。	SB36Pit覆土
7	黄褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫多量。砂多量。	SB36Pit覆土
8	暗褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫多量。砂少量。	SB36Pit覆土
9	暗褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。砂中量。	SB36Pit覆土

第 87 図　SB36　平面図・断面図



2	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。焼土中量。粘土中量。	SB36覆土
10	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。粘土中量。	SB36カマド燃焼室
11	赤褐色	しまり強、粘性強。焼土多量。炭化物少量。粘土多量。	SB36カマド燃焼室
12	灰黄色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB36カマド袖
13	暗褐色	しまり強、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB36カマド掘方

第 88 図　SB36　カマド平面図・断面図



第 89 図　SB38　平面図・断面図

SB38

遺構（第 89 図）

位置　M- Ⅱグリッド

重複関係　（古）SB47 → SB45 → SB38（新）

主軸方位　N-48.0° -W

残存状況　覆土は浅く南側は残存せず、北側も撹乱により削平され、西壁と東壁の一部が検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（東西）4.54m、直交（南北）2.83m、深さ 6cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　幅 76cm、深さ 8cm の壁溝が東壁沿いに検出される。

床　厚さ 4cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

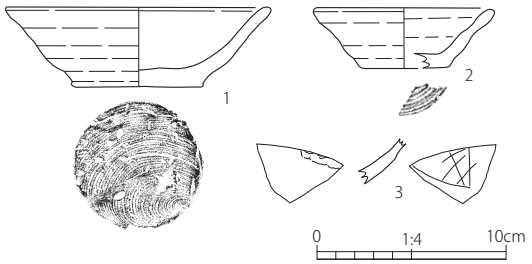
その他の遺構　確認されない。

カマド　西壁。北側が撹乱により削平されていて左袖のみ検出される。規模は検出範囲内で全長 52cm、幅 58cm、燃焼室幅 34cm を測る。

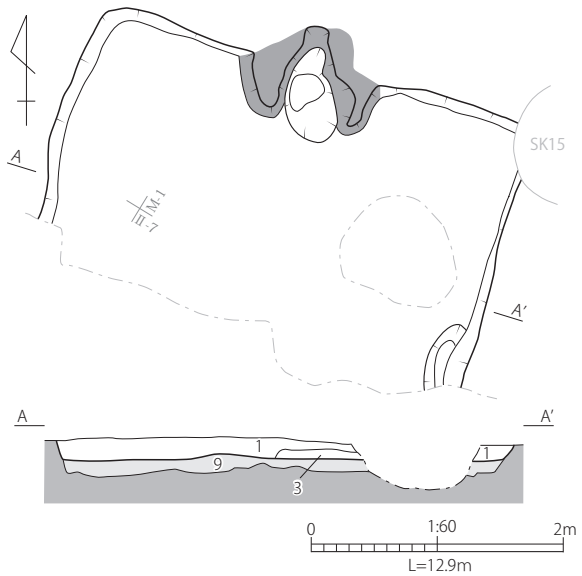
出土遺物（第 90 図）

1 ～ 3 は土師器の坏である。1・2 はともに体部ロクロナデ、底部に回転糸切り痕が残るものであるが、復原口径は 1 が 14.0cm、2 が 9.0cm を測り、明確な法量分化がみとめられる。3 は体部外面に細い線刻がみられるが、その内容は不明である。

時期　カマド出土の 1・2 を重視すれば、富士Ⅶ期（10 世紀前半頃）の建物跡と考えられる。

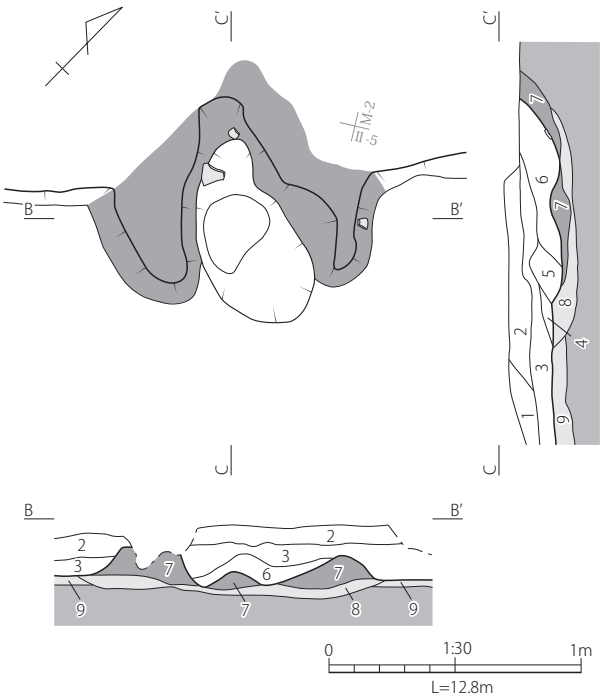


第 90 図　SB38　出土遺物実測図



1	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB39覆土
2	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。焼土少量。粘土少量。	SB39覆土
3	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土多量。粘土中量。	SB39カマド崩落土
9	黒褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫中量。大沢スコリア少量。褐色粒子多量。	SB39掘方埋土

第91図　SB39　平面図・断面図



2	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。焼土少量。粘土少量。	SB39覆土
3	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土多量。粘土中量。	SB39カマド崩落土
4	黄灰色	しまりやや強、粘性やや強。粘土多量。黒色土中量。	SB39カマド崩落土
5	赤褐色	しまり弱、粘性弱。焼土多量。	SB39カマド燃焼室
6	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土多量。粘土中量。	SB39カマド燃焼室
7	黄灰色	しまり強、粘性やや強。粘土多量。	SB39カマド袖
8	黒褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫少量。	SB39カマド掘方
9	黒褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫中量。大沢スコリア少量。褐色粒子多量。	SB39掘方埋土

第92図　SB39　カマド平面図・断面図

SB39

遺構（第91・92図）

位置　M-Ⅱグリッド

重複関係（古）SB39 → SK15（新）

主軸方位　N-14.0°-E

残存状況　建物跡南側は撹乱により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.38m、直交（東西）3.65m、深さ16cmを測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　幅27cm、深さ10cmの壁溝が東壁の一部に施されている。

床　厚さ10cmの貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

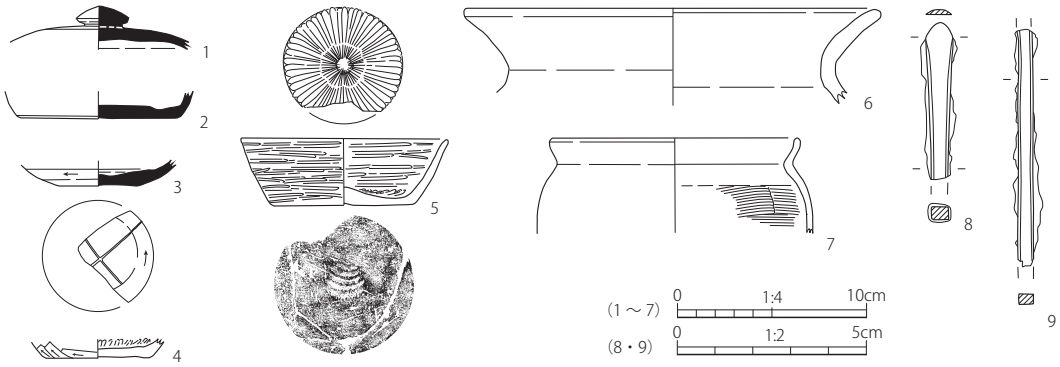
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。両袖とも残存し比較的良好な状態で検出される。規模は全長92cm、幅114cm、燃焼室幅38cmを測る。

出土遺物（第93図）

1～3は須恵器で、1は坏蓋（摘み蓋）である。2は箱形の坏身で、底部は回転ヘラケズリが施される。3は坏身で、底部に「×」とみられる窯記号がある。4～7は土師器で、4の坏は底部付近に手持ちヘラケズリ、体部内面に放射状ミガキが施されることから、甲斐型坏と考えられる。5は箱形の坏で、体部内外面ヨコミガキ、見込み部に放射状ミガキが施される。底部中央のハケメ痕は、板状工具によって余分な粘土を削り取った形跡とみられる。6は長胴甕の口縁部、7は小型甕である。8・9は鉄鏃で、8は尖根鑿箭式であるが鏃身部先端に鎬はみられない。

時期　カマド出土の1・4～6を重視し、2をその共伴と考えれば、富士Ⅲ期（8世紀後葉頃）の建物跡と考えられる。



第 93 図　SB39　出土遺物実測図

SB40

遺構（第 94・95 図）

位置　M- Ⅰ、M- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB40 → SB42、SB46（新）

主軸方位　N-83.0° -W

残存状況　重複する遺構（SB42 、SB46）により削平され南壁と東壁が残存しない。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（東西）3.46m、直交（南北）3.16m、深さ 5cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

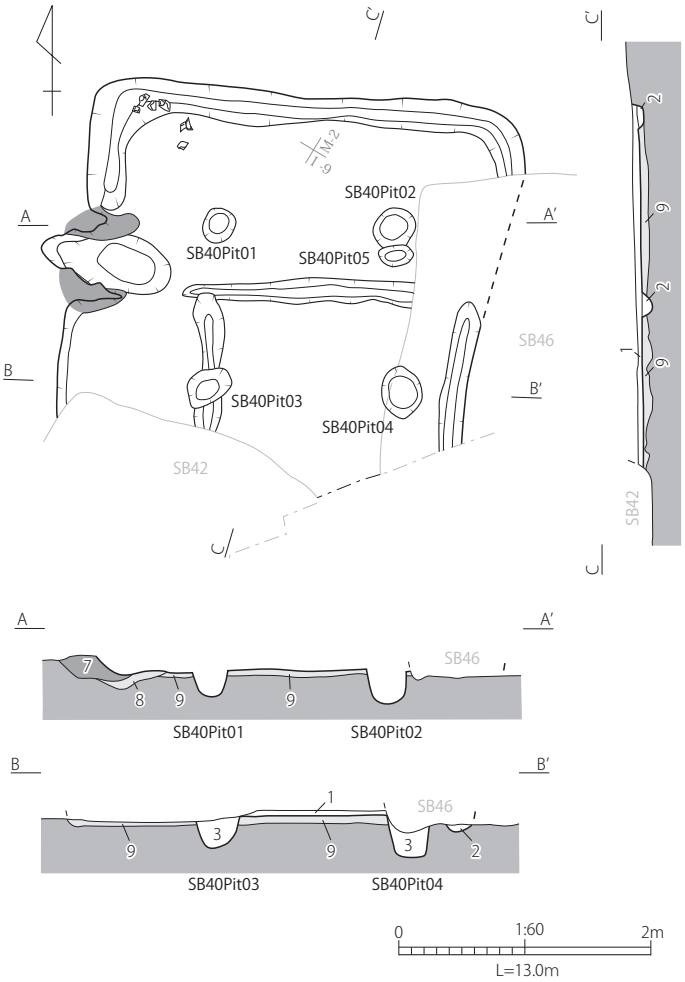
壁溝　幅 20 ～ 28cm、深さ 10cm の壁溝が西壁のカマド北側から東壁まで施されている。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

柱穴　5 基のピットを検出し、その内の 4 基（SB40Pit01 ～ SB40Pit04）は主柱穴と考えられる。規模は長軸 28 ～ 38cm、短軸 24 ～ 30cm、床面からの深さ 19 ～ 36cm を測る。

その他の遺構　仕切り溝 2 条が検出される。幅 18cm、深さ 10cm で床面中央から東西方向に延びる溝とこれに直行する南北方向に延びる溝が検出される。

カマド　西壁中央。両袖とも残存し比較的良好な状態で検出される。全長 106cm、幅 80cm、燃焼室幅 43cm を測る。



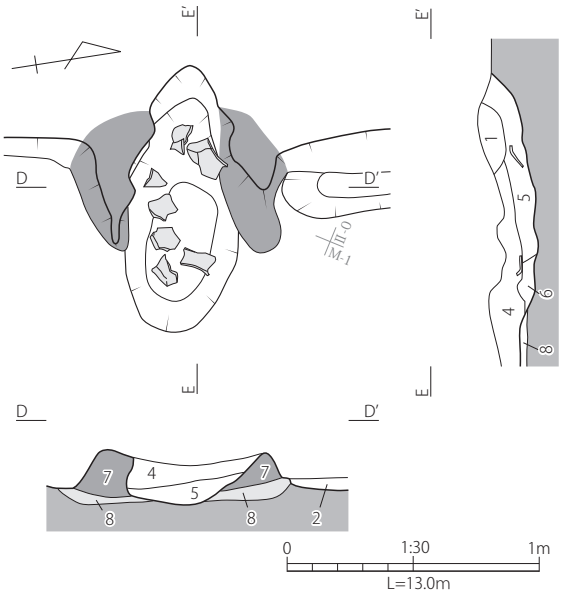
1	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫中量。大淵スコリア少量。	SB40覆土
2	黄褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫多量。	SB40覆土
3	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。	SB40Pit覆土
7	灰黄色	しまりやや強、粘性強。粘土多量。	SB40カマド袖
8	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。粘土少量。	SB40カマド掘方
9	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫中量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB40掘方埋土

第 94 図　SB40　平面図・断面図

出土遺物（第 96 図）

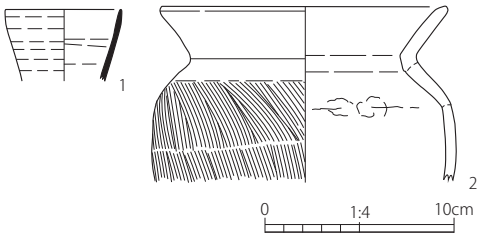
1 は須恵器瓶類の横瓶とみられる口縁部片である。2 は土師器の長胴甕で、くの字形の口縁部で肩部が張る形態を有する。体部外面が目の粗いハケメ調整で終わっている点も、その後さらに細かいハケメを施す定型化した在地の長胴甕とは異なる特徴である。

時期　カマド出土の 2 を在地系長胴甕の導入期の資料とみなせば、富士Ⅱ期（8 世紀中葉頃）の建物跡と考えられる。



1	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫中量。大淵スコリア少量。	SB40覆土
2	黄褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫多量。	SB40覆土
4	灰黄色	しまり弱、粘性弱。粘土多量。	SB40カマド崩落土
5	にぶい黄橙色	しまりやや弱、粘性やや弱。焼土多量。粘土多量。	SB40カマド燃焼室
6	黒色	しまり弱、粘性やや弱。焼土少量。粘土少量。	SB40カマド燃焼室
7	灰黄色	しまりやや強、粘性強。粘土多量。	SB40カマド袖
8	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。粘土少量。	SB40カマド掘方

第 95 図　SB40　カマド平面図・断面図



第 96 図　SB40　出土遺物実測図

SB41

遺構（第 97・98 図）

位置　M- Ⅲグリッド

重複関係　なし

主軸方位　N-70.5°-W

残存状況　建物跡の北壁及び東壁は撹乱により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（東西）3.23m、直交（南北）3.59m、深さ 6cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

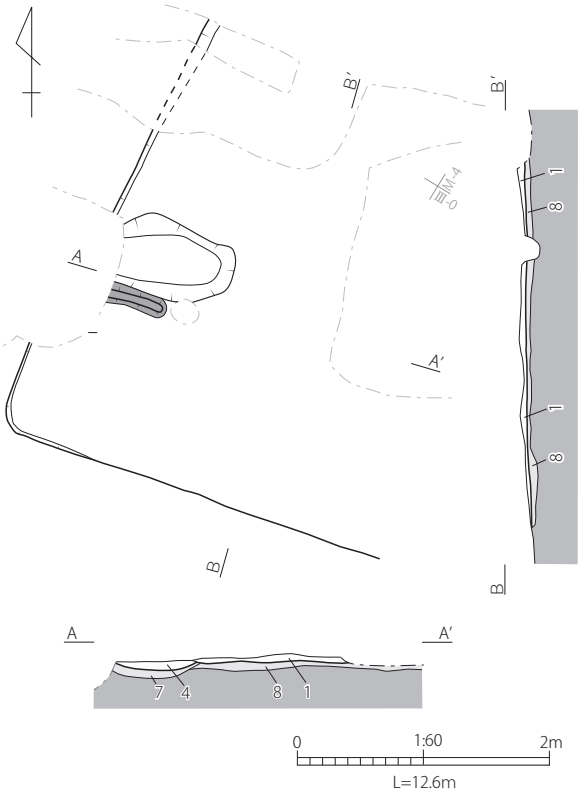
壁溝　確認されない。

床　厚さ 8cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　西壁南寄り。左袖のみ残存し、燃焼室には支脚石が確認される。規模は検出範囲内で全長 89cm、幅 78cm、燃焼室幅 68cm を測る。



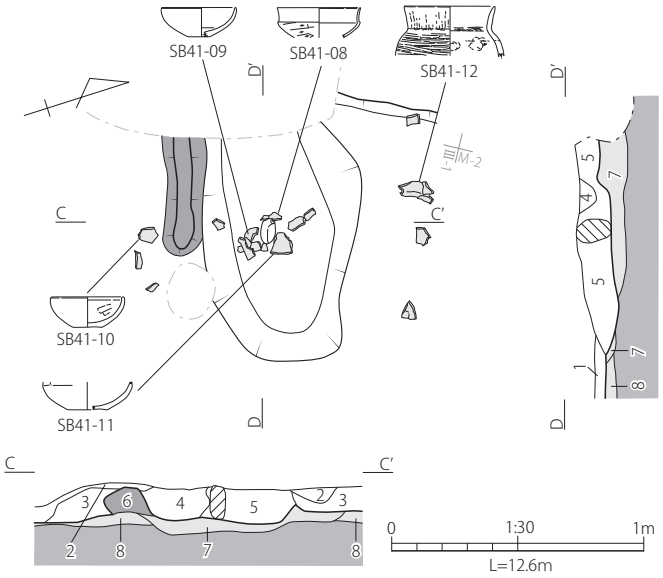
1	黒褐色	しまりやや強、粘性なし。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア多量。	SB41覆土
4	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大沢スコリア微量。焼土微量。粘土少量。	SB41カマド燃焼室
7	暗褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。粘土少量。	SB41カマド掘方
8	黒褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア多量。焼土少量。粘土少量。	SB41掘方埋土

第 97 図　SB41　平面図・断面図

出土遺物（第 99 図）

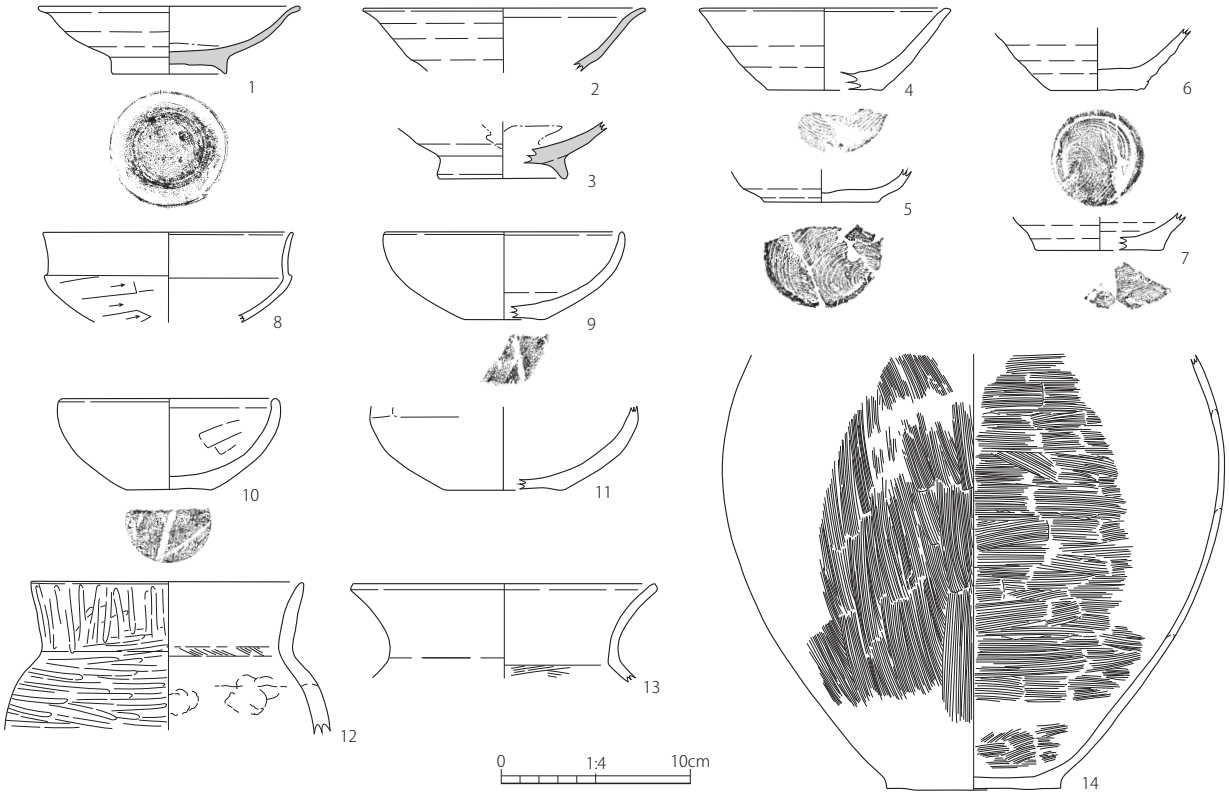
1 ～ 3 は灰釉陶器碗で、1 は三角高台で底部回転糸切り、体部内面に灰釉がみとめられる。2 は体部内外面に、3 は体部内外面と見込み部の一部に施釉がみられる。4 ～ 14 は土師器である。4 ～ 7 は底部に回転糸切り痕が残るロクロ成形の坏である。上記の遺物は、平安時代の混入物と判断される。8 は須恵器坏蓋模倣の坏で、口縁部と底部の境界に稜をめぐらせるシャープな形態である。体部内面はハケ後にヨコナデによって仕上げられている。9 ～ 11 は平底で体部から口縁部が内湾する坏であるが、表面が摩耗しているため調整が不明瞭である。12 は口縁部が垂直気味に立ち上がる壺である。13・14 はくの字形の口縁部を有する甕である。14 は底部に木葉痕が残る。

時期　カマドや床面出土の 8 ～ 14 を重視すれば、安久Ⅲ期（6 世紀前半頃）の建物跡と考えられる。



1	黒褐色	しまりやや強、粘性なし。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア多量。	SB41覆土
2	黒色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大沢スコリア多量。	SB41覆土
3	黄褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫微量。焼土少量。粘土多量。	SB41カマド崩落土
4	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大沢スコリア微量。焼土微量。粘土少量。	SB41カマド燃焼室
5	赤褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土多量。粘土少量。	SB41カマド燃焼室
6	にぶい黄褐色	しまり強、粘性やや強。焼土多量。粘土多量。	SB41カマド袖
7	暗褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。粘土少量。	SB41カマド掘方
8	黒褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア多量。焼土少量。粘土少量。	SB41掘方埋土

第 98 図　SB41　カマド平面図・断面図



第 99 図　SB41　出土遺物実測図

SB42

遺構（第 100 図）

位置　M- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB40 → SB42（新）

主軸方位　N-23.0° -E

残存状況　建物跡の北東部分は撹乱により削平されている。平面形は不整形な方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.82m、直交（東西）3.49m、深さ 8cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　南西付近にまとまって 5 基検出。規模は長軸 28 ～ 50cm、短軸 22 ～ 42cm、床面からの深さ 5 ～ 12cm を測る。

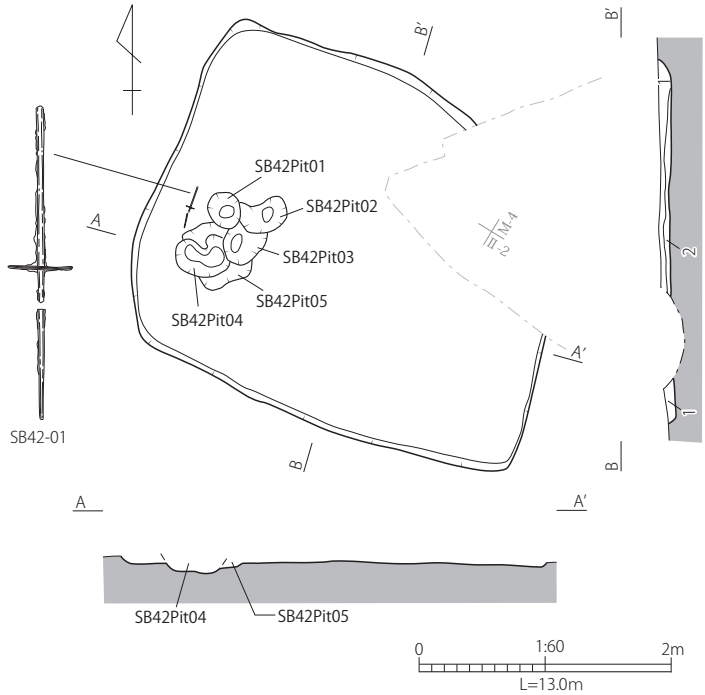
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

出土遺物（第 101 図）

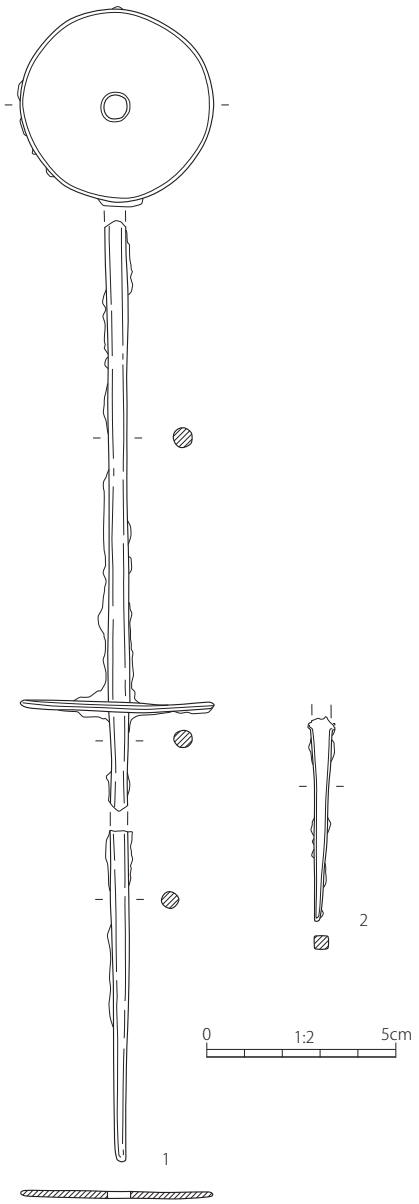
1 は鉄製紡錘車であり、鉄製の紡輪は直径 5.1cm を測る円形で、扁平な板状を呈する。紡茎長は 24.5cm 以上で、断面形は円形である。市内では、東平遺跡 3 地区第 125 号住居址、赫夜姫第 1 号墳などに類例がある。2 は鉄鏃の頸部から茎部片であり、関の形態は刺関である。

時期　土器の出土がないため時期決定に不安が残るが、切り合い関係のほか、床面出土の 1 と同形の鉄製紡錘車が出土した東平遺跡 3 地区第 125 号住居址が富士Ⅲ期（8 世紀後葉頃）の基準資料である点を重視し、本建物跡も同時期のものと捉えたい。



1　暗褐色　しまりやや強、粘性強。大淵スコリア微量。焼土少量。粘土微量。　SB42覆土
2　暗褐色　しまり強、粘性やや弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。　SB42覆土

第 100 図　SB42　平面図・断面図



第 101 図　SB42　出土遺物実測図

SB44

遺構（第 102・103 図）

位置　M- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB44 → SB29 → SK16、SK06（新）

主軸方位　N-3.0° -E

残存状況　覆土が浅く建物跡の南側は残存しない。また SB29、SK16 などにより削平され、建物の北西部のみ検出される。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.83m、直交（東西）3.24m、深さ 10cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

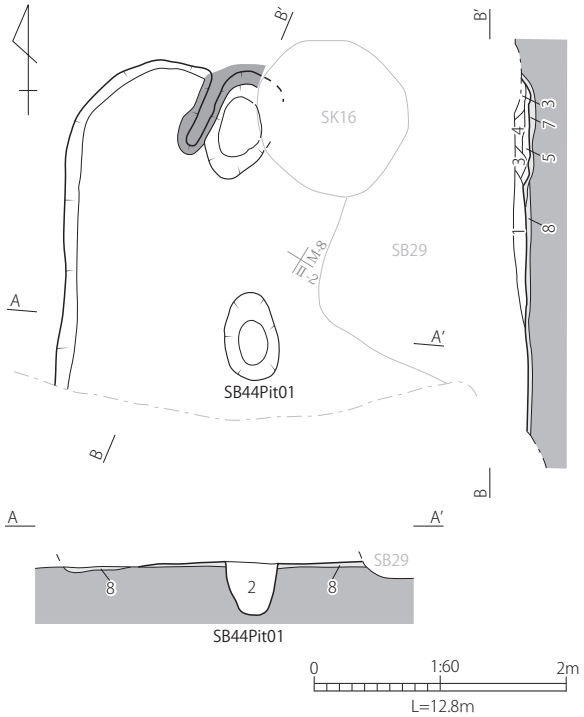
壁溝　確認されない。

床　厚さ 5cm の貼り床が施される。

柱穴　1 基検出。規模は長軸 68cm、短軸 42cm、床面からの深さ 31cm を測る。

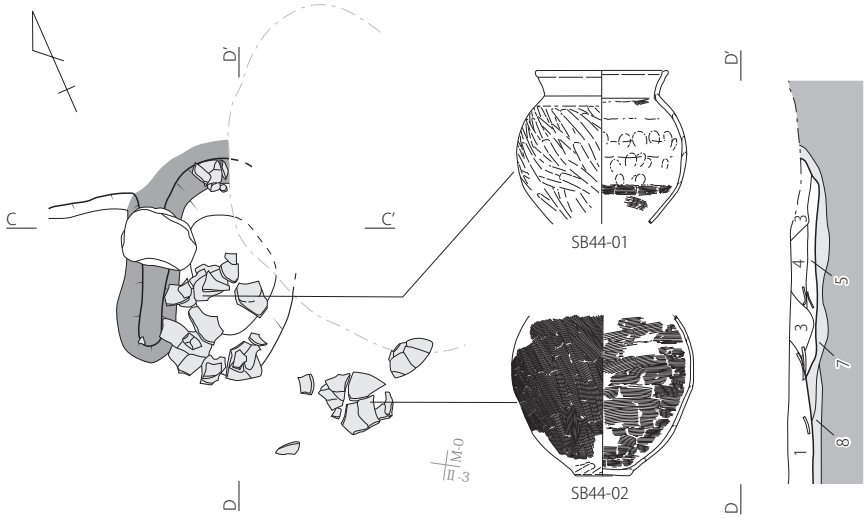
その他の遺構　確認されない。

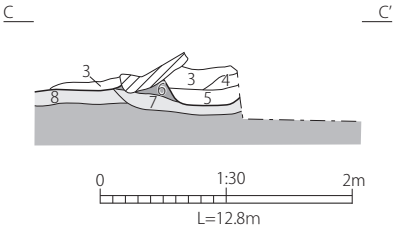
カマド　北壁。右袖は SK16 により削平され左袖のみ検出される。左袖奥部には芯材となる扁平な石材が残存する。規模は検出範囲内で全長 97cm、幅 68cm、燃焼室幅 45cm を測る。



1	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB44覆土
2	黒褐色	しまり弱、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB44Pit覆土
3	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。粘土多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB44カマド崩落土
4	黄灰色	しまり強、粘性強。焼土微量。粘土多量。	SB44カマド崩落土
5	にぶい橙色	しまり弱、粘性やや弱。溶岩礫中量。焼土多量。	SB44カマド燃焼室
7	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫中量。大淵スコリア少量。焼土少量。	SB44カマド掘方
8	黒褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫中量。大淵スコリア少量。	SB44掘方埋土

第 102 図　SB44　平面図・断面図





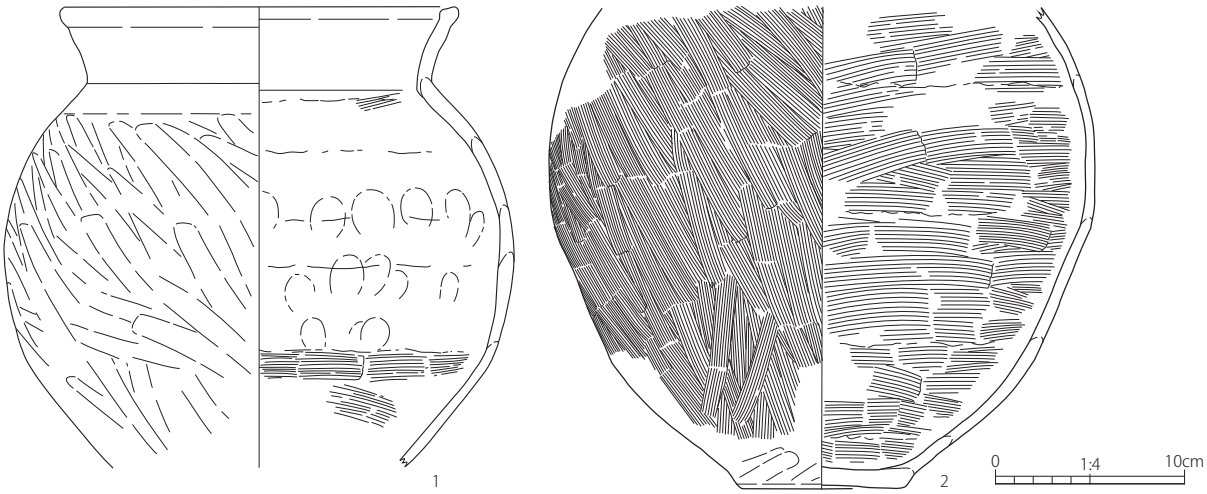
1	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB44覆土
3	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土多量。	SB44カマド崩落土
4	黄灰色	しまり強、粘性強。焼土微量。粘土多量。	SB44カマド崩落土
5	にぶい橙色	しまり弱、粘性やや弱。溶岩礫中量。焼土多量。	SB44カマド燃焼室
6	にぶい黄灰色	しまり強、粘性強。焼土微量。粘土多量。	SB44カマド袖
7	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫中量。大淵スコリア少量。焼土少量。	SB44カマド掘方
8	黒褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫中量。大淵スコリア少量。	SB44掘方埋土

第 103 図　SB44　カマド平面図・断面図

出土遺物（第 104 図）

1・2 は土師器の甕である。1 は体部がやや球胴形となる甕であるが、体部内外面に目の粗いハケメが行われた後、外面はヘラナデ、内面はユビナデによって円滑に整えられ、最後に口縁部をヨコナデして仕上げられている。2 は外面に二次調整とみられる目の細かいハケメ、内面に目の粗いハケメがみとめられる。こちらの体部は 1 ほどに球胴化していない。底部には木葉痕が残る。

時期　カマド出土の 1･2 を重視すれば、沢東Ⅱ期（7 世紀中葉～後葉頃）の建物跡と考えられる。



第 104 図　SB44　出土遺物実測図

SB45

遺構（第 105・106 図）

位置　M- Ⅱ、N- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB47 → SB45 → SB38（新）

主軸方位　N-30.0° -E

残存状況　ほぼ建物跡全体が検出される。平面形は隅丸方形を呈し、規模は主軸（南北）3.56m、直交（東西）3.61m、深さ 15cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　幅 27cm、深さ 12cm の壁溝が、建物跡の北東部分以外の壁沿いに検出される。

床　厚さ 8cm の貼り床が施される。

柱穴　3 基のピットが建物の北東、北西、南西の隅に検出される。規模は長軸 42 ～ 46cm、短軸 29 ～ 36cm、床面からの深さ 10 ～ 19cm を測る。

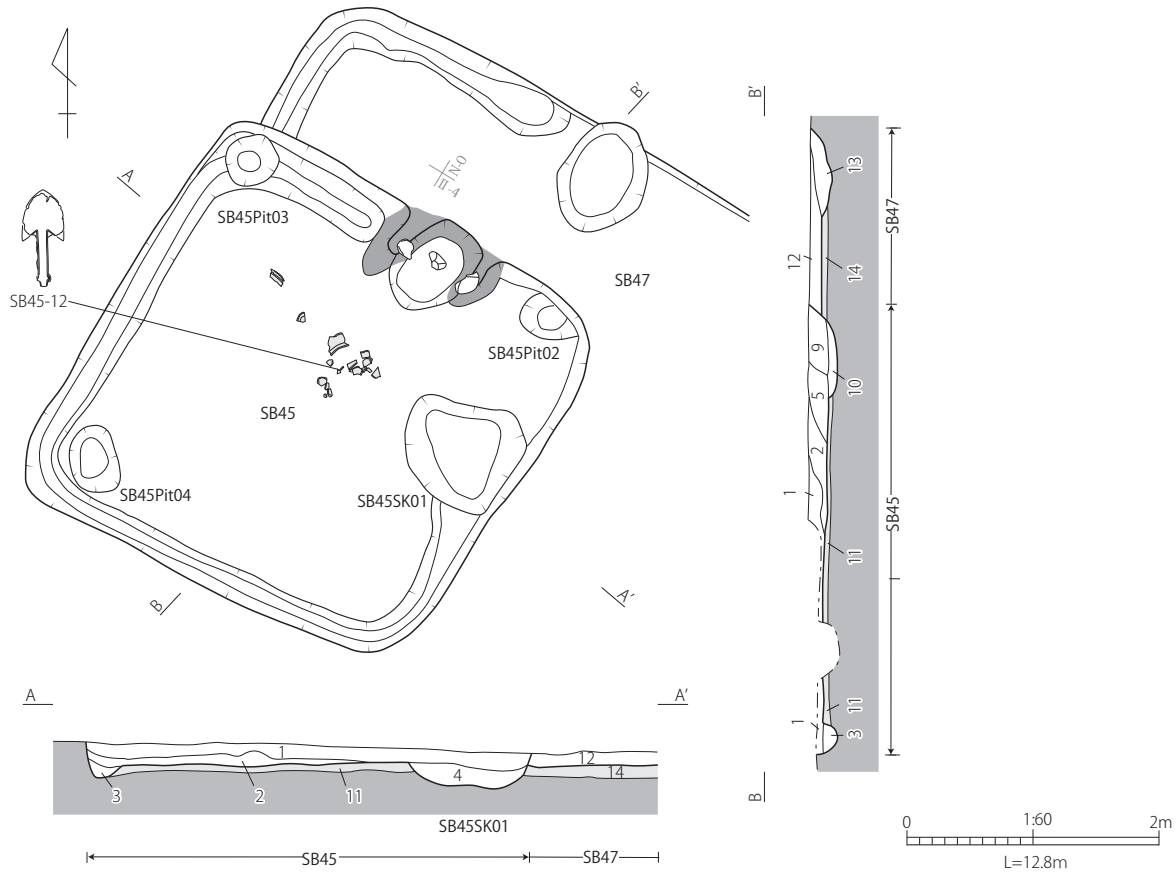
その他の遺構　東壁中央付近に土坑 1 基検出。規模は長軸 94cm、短軸 86cm、床面からの深さ 16cm を測る。

カマド　北壁東寄り。両袖には芯材となる石材を検出し、燃焼室には支脚石が残存する。規模は全長 78cm、幅 98cm、燃焼室幅 40cm を測る。

出土遺物（第 107 図）

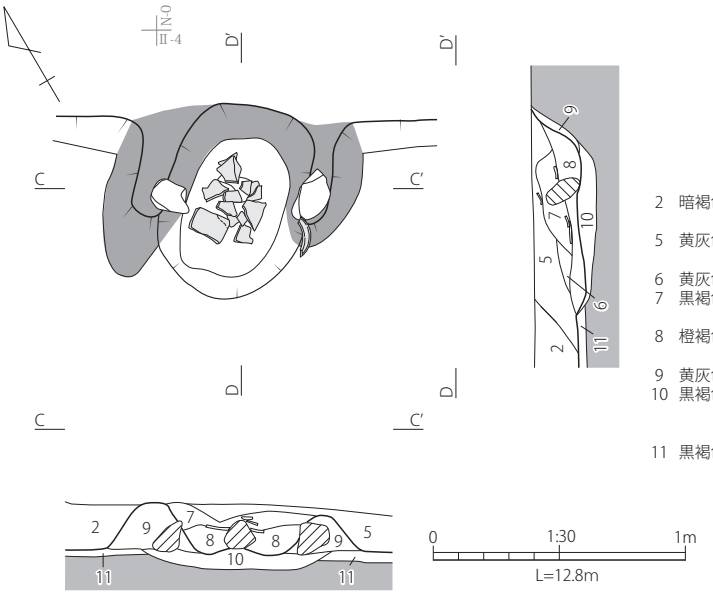
1 は須恵器の坏蓋である。2 ～ 11 は土師器で、2 はロクロ成形で底部に回転糸切り痕が残る坏である。3 ～ 5 は須恵器坏蓋模倣の坏であるが、3 は口縁部が垂直気味に立ち上がる形態なのに対し、4 は体部から口縁部が内湾する形態、5 は口縁部が内湾する形態となる。いずれもヨコミガキが密に施された精製品であるが、3･4 は黒色処理もなされている。一方、6 はあまり類例をみない坏であるが、調整も独特で、口縁部ヨコナデ後に目の粗いタテハケがなされ、最後に体部下半に目の粗いハケメが施されている。1 ～ 6 の土器は古墳時代や平安時代の混入であろう。7・8・10・11 は長胴甕である。7・8 は比較的高い口縁部を有する初期の長胴甕の形態に近いものであり、一次調整の目の粗いハケメを肩部にわずかに残す特徴が共通する。9 は小型甕であり、7・8 を小型化したプロポーションになるものと推定される。12 は平根腸抉三角形式の鉄鏃である。関の形態は刺関である。

時期　カマドや床面出土の 7・8・11 を重視すれば、富士Ⅱ期（8 世紀中葉頃）の建物跡と考えられる。



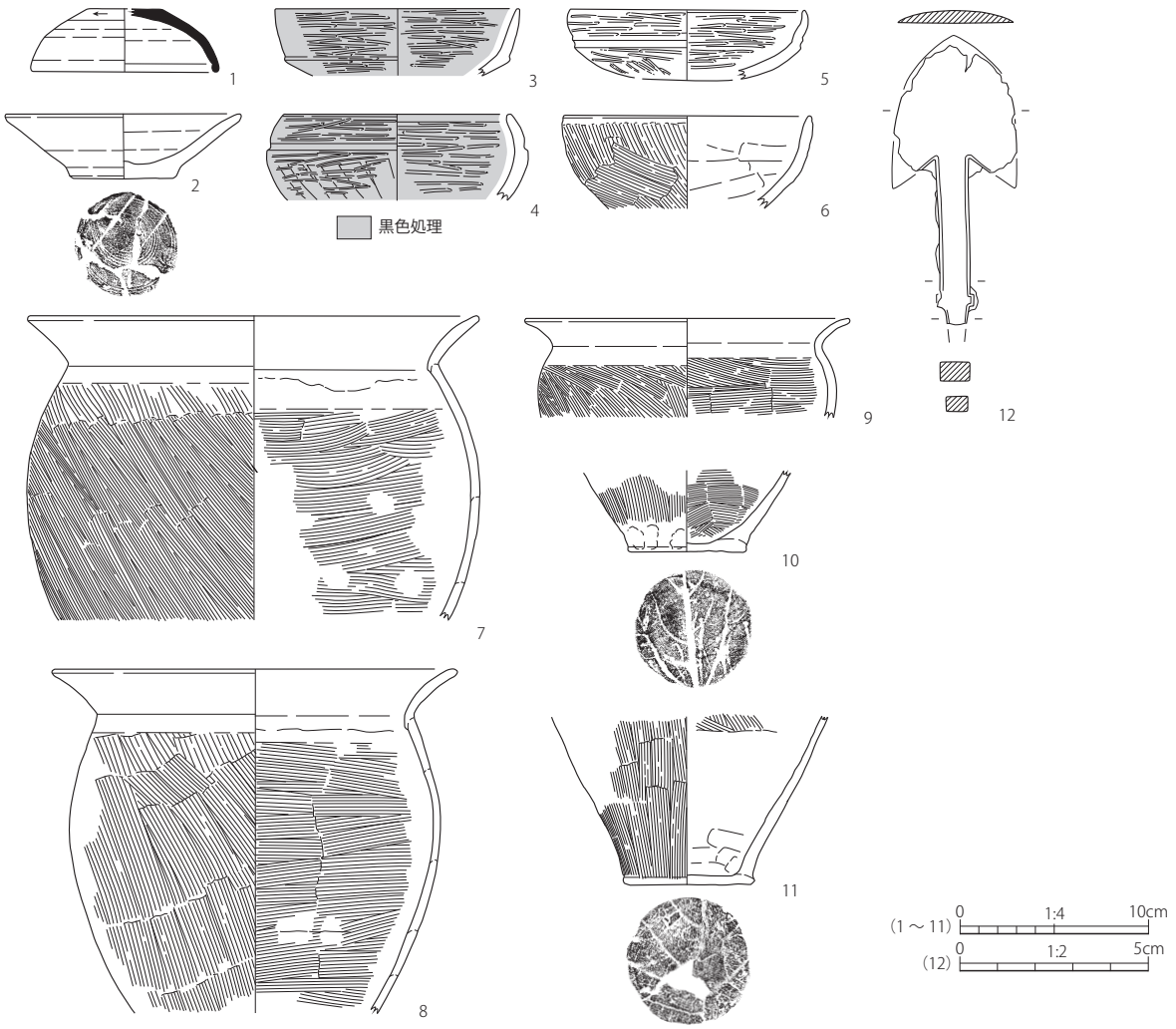
1	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強弱。溶岩礫中量。大淵スコリア中量。大沢スコリア中量。焼土少量。粘土少量。	SB45覆土
2	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB45覆土
3	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB45覆土
4	黒色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。	SB45SK01覆土
5	黄灰色	しまり強、粘性強。溶岩礫少量。粘土多量。黒色土中量。	SB45カマド崩落土
9	黄灰色	しまり強、粘性強。焼土少量。粘土多量。	SB45カマド袖
10	黒褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土少量。	SB45カマド掘方
11	黒褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB45掘方埋土
12	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫中量。大淵スコリア中量。粘土少量。	SB47覆土
13	灰褐色	しまり強、粘性弱。焼土少量。粘土少量。	SB47カマド燃焼室
14	暗褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。	SB47掘方埋土

第 105 図　SB45・SB47　平面図・断面図



2	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB45覆土
5	黄灰色	しまり強、粘性強。溶岩礫少量。粘土多量。黒色土中量。	SB45カマド崩落土
6	黄灰色	しまり強、粘性強。焼土少量。粘土多量。	SB45カマド崩落土
7	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫少量。焼土多量。粘土微量。	SB45カマド燃焼室
8	橙褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫多量。焼土多量。粘土微量。	SB45カマド燃焼室
9	黄灰色	しまり強、粘性強。焼土少量。粘土多量。	SB45カマド袖
10	黒褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土少量。	SB45カマド掘方
11	黒褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB45掘方埋土

第 106 図　SB45　カマド平面図・断面図



第 107 図　SB45　出土遺物実測図

SB47

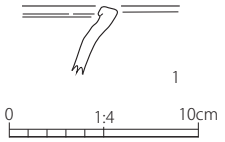
遺構（第 105 図）

位置　M- Ⅱ、N- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB47 → SB45 → SB38（新）

主軸方位　N-29.0° -E

残存状況　建物跡の南西部分は SB45 により削平される。また東側は調査ができなかったため北西部分のみ検出される。平面形は隅丸方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）1.51m、直交（東西）3.74m、深さ 9cm を測る。



第 108 図　SB47　出土遺物実測図

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　幅 28cm、深さ 5cm の壁溝が、建物跡の北西部においてのみ検出される。

床　厚さ 4cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

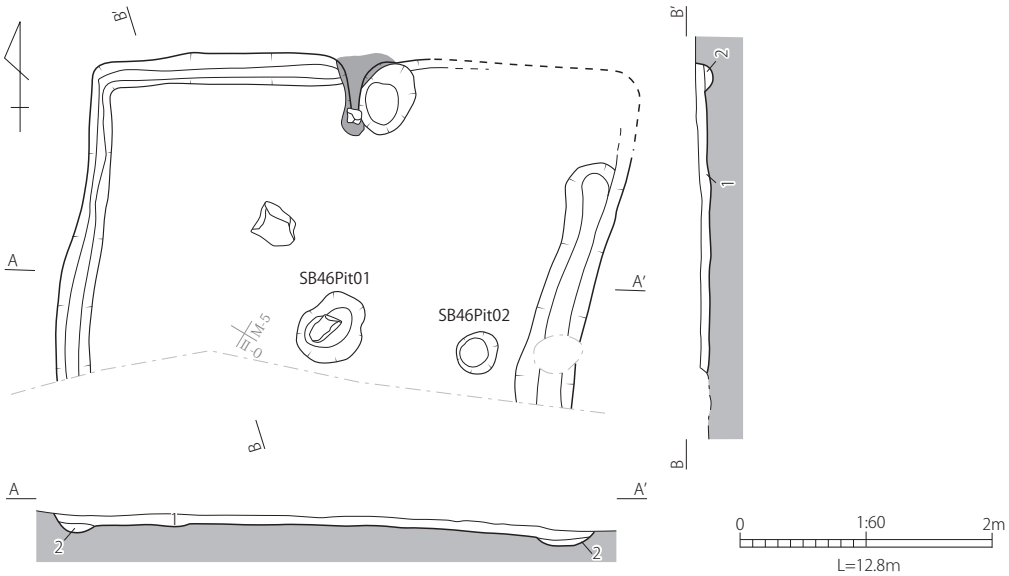
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁。両袖は残存せず燃焼室のみ検出される。規模は全長 90cm、燃焼室幅 69cm を測る。

出土遺物（第 108 図）

1 は土師器の甕で、口縁端部内面をわずかに肥厚させるが、奈良時代の球胴甕と比べるとその形状や厚みが異なる。胎土も 7 世紀以前の土器と共通する薄い橙色のものである。

時期　切り合い関係と 1 を重視すれば、沢東Ⅰ～Ⅱ期（7 世紀頃）の建物跡と考えられる。



1	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア中量。	SB46覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。粘土少量。	SB46覆土

第 109 図　SB46　平面図・断面図

SB46

遺構（第 109・110 図）

位置　M- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB40 → SB46（新）

主軸方位　N-2.5° -E

残存状況　覆土は比較的浅く建物跡の南側及び北東部分は削平されている。平面形は不整形な方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.79m、直交（東西）4.42m、深さ 6cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

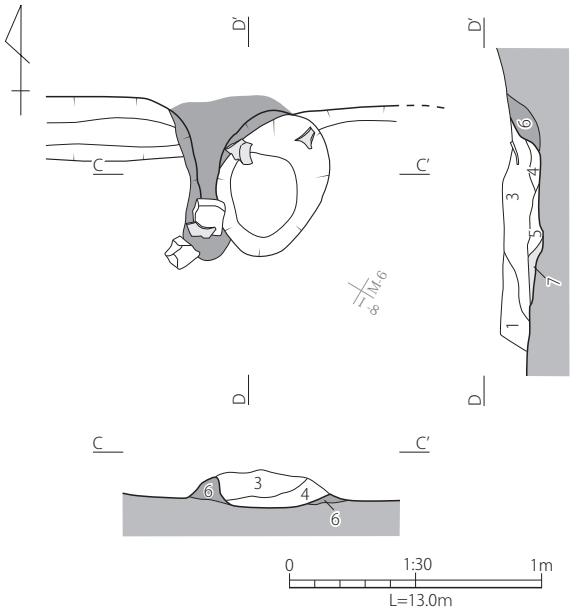
壁溝　幅 28cm、深さ 7cm の壁溝が検出範囲内で全体に検出される。

床　掘方を床面としている。

柱穴　2 基のピットが検出される。規模は長軸 34 ～ 60cm、短軸 32 ～ 51cm、床面からの深さ 21 ～ 23cm を測る。

その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。右袖は残存せず左袖のみ検出され、左袖端部には芯材となる石材が検出される。規模は検出範囲内で全長 56cm、幅 59cm、燃焼室幅 46cm を測る。



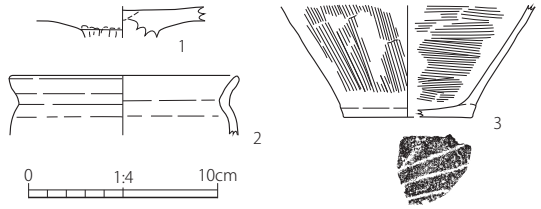
1	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア中量。	SB46覆土
3	黄灰色	しまり強、粘性強。粘土多量。黒色土少量。	SB46カマド崩落土
4	にぶい黄橙色	しまり弱、粘性弱。焼土多量。黒色土少量。	SB46カマド燃焼室
5	黒褐色	しまり弱、粘性弱。焼土多量。粘土少量。	SB46カマド燃焼室
6	黄灰色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB46カマド袖
7	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫少量。粘土少量。	SB46カマド掘方

第 110 図　SB46　カマド平面図・断面図

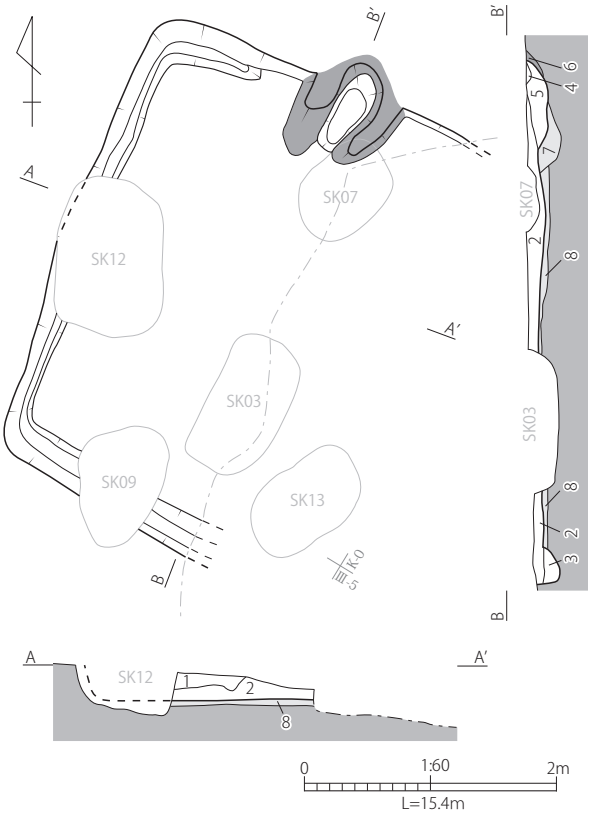
出土遺物（第 111 図）

1 ～ 3 は土師器で、1 は古墳時代の高坏である。脚部から坏部は輪積みによって成形され、坏底部分は坏側から粘土で塞がれる。2 はくの字形口縁の小型甕である。3 は長胴甕で、底部に木葉痕が残る。

時期　切り合い関係とカマド出土の 2・3 を重視すれば、富士Ⅱ期（8 世紀中葉頃）の建物跡と考えられる。



第 111 図　SB46　出土遺物実測図



1	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。	SB48覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア中量。大沢スコリア微量。	SB48覆土
3	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。	SB48覆土
4	黒褐色	しまり弱、粘性強。焼土少量。粘土多量。	SB48カマド崩落土
5	黒褐色	しまり弱、粘性弱。焼土多量。粘土少量。	SB48カマド燃焼室
6	黄灰色	しまりやや強、粘性強。焼土少量。粘土多量。	SB48カマド袖
7	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア中量。粘土少量。	SB48カマド掘方
8	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア多量。大沢スコリア少量。	SB48掘方埋土

第 112 図　SB48　平面図・断面図

SB48

遺構（第 112・113 図）

位置　J- Ⅲグリッド

重複関係

（古）SB48 → SK03、SK07、SK09、SK12、SK13（新）

主軸方位　N-22.0° -E

残存状況　建物跡の東側は撹乱により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）3.95m、直交（東西）2.78m、深さ 8cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

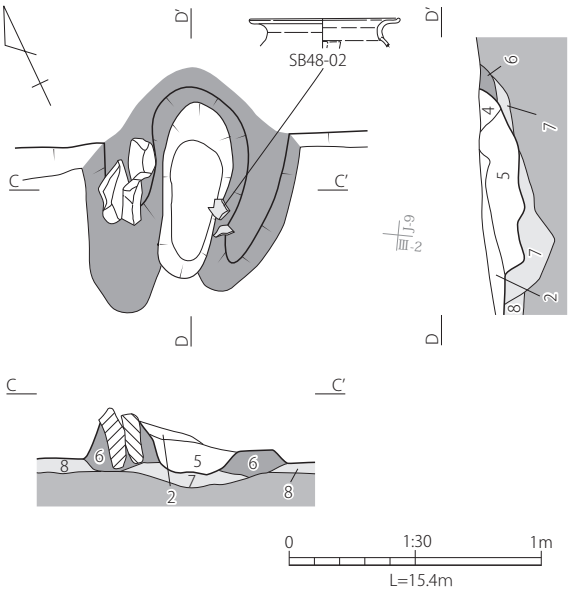
壁溝　幅 30cm、深さ 12cm の壁溝が建物跡の西側に検出される。

床　厚さ 5cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁。両袖とも残存し比較的良好な状態で検出される。左袖においてのみ芯材となる石材が検出される。規模は全長 74cm、幅 83cm、燃焼室幅 26cm を測る。



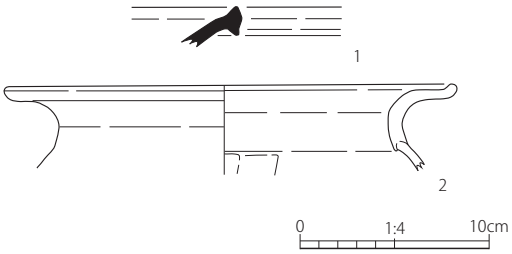
1	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。	SB48覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア中量。大沢スコリア微量。	SB48覆土
4	黒褐色	しまり弱、粘性強。焼土少量。粘土多量。	SB48カマド崩落土
5	黒褐色	しまり弱、粘性弱。焼土多量。粘土少量。	SB48カマド燃焼室
6	黄灰色	しまりやや強、粘性強。焼土少量。粘土多量。	SB48カマド袖
7	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア中量。粘土少量。	SB48カマド掘方
8	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア多量。大沢スコリア少量。	SB48掘方埋土

第 113 図　SB48　カマド平面図・断面図

出土遺物（第 114 図）

1 は須恵器長頸壺の口縁部である。2 は土師器の甕であり、水平口縁の端部がわずかに上方に摘み上げられる形態をとる。胎土は在地的な橙色を呈し、遠江産の水平口縁甕の胎土とは異なる。

時期　カマド出土の 2 を重視し、1 をその共伴と考えれば、富士Ⅱ期（8 世紀中葉頃）の建物跡と考えられる。



第 114 図　SB48　出土遺物実測図

SB49

遺構（第 115・117 図）

位置　N- Ⅲグリッド

重複関係　なし

主軸方位　N-20.0° -E

残存状況　覆土は浅く建物跡の南側は床面まで削平されていて掘方のみ検出される。平面形は方形を呈し、規模は主軸（南北）3.79m、直交（東西）3.98m、深さ 4cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

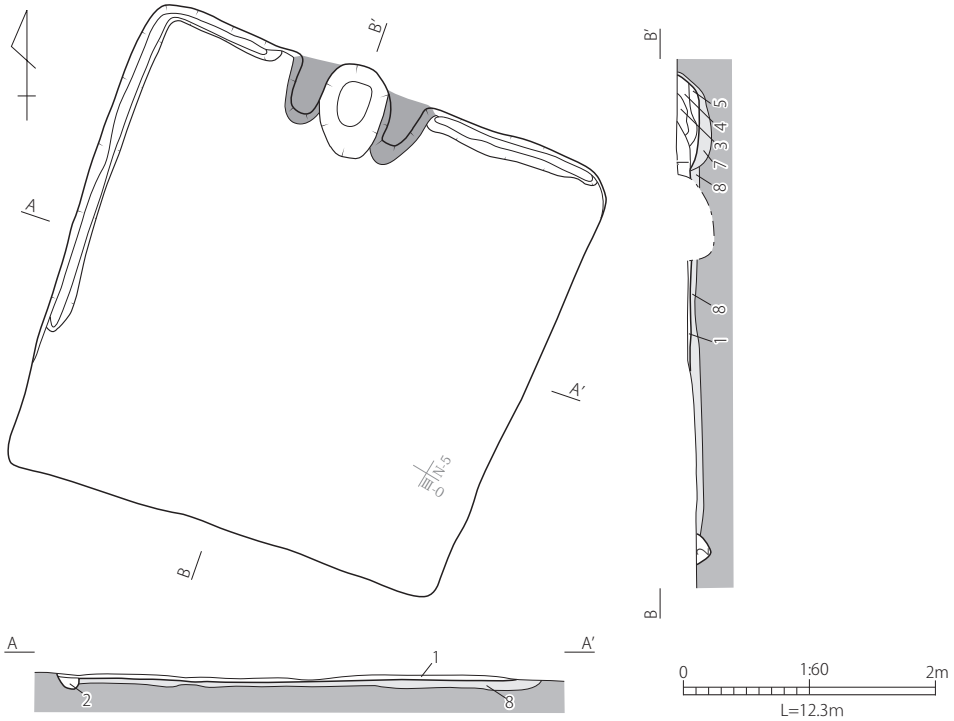
壁溝　幅 18cm、深さ 8cm の壁溝が検出される。

床　厚さ 4cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。両袖とも残存し、規模は全長 73cm、幅 110cm、燃焼室幅 52cm を測る。



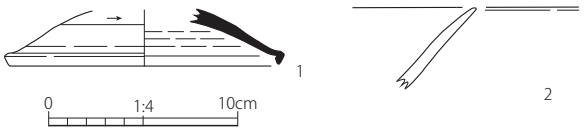
1	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB49覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB49覆土
3	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫微量。粘土多量。	SB49カマド崩落土
4	灰褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土少量。粘土多量。	SB49カマド燃焼室
5	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土少量。粘土少量。	SB49カマド燃焼室
7	暗褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。焼土微量。粘土微量。	SB49カマド掘方
8	暗褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB49掘方埋土

第 115 図　SB49　平面図・断面図

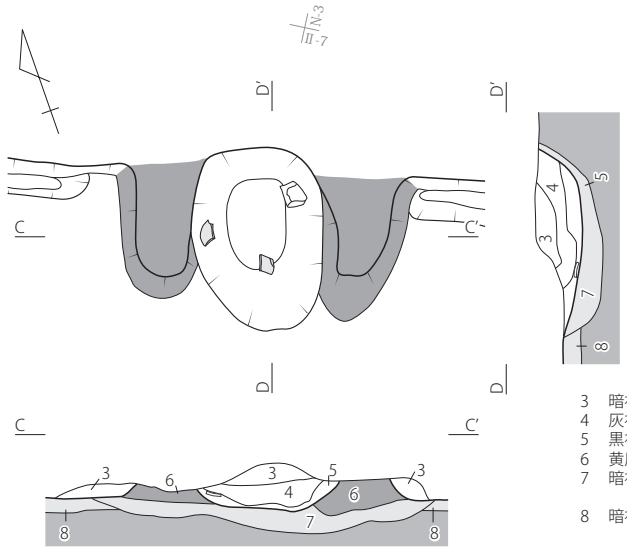
出土遺物（第 116 図）

1 は須恵器の坏蓋である。口縁部の返りは断面三角形状に作り出される。2 は土師器の高坏であり、体部外面はタテハケ後にヨコナデが施される。

時期　いずれも破片資料のため時期決定に不安が残るものの、1 を重視すれば、富士Ⅰ～Ⅱ期（8 世紀前～中葉頃）の建物跡と考えられる。



第 116 図　SB49　出土遺物実測図



3	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫微量。粘土多量。	SB49カマド崩落土
4	灰褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土少量。粘土多量。	SB49カマド燃焼室
5	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土少量。粘土少量。	SB49カマド燃焼室
6	黄灰色	しまり強、粘性弱。溶岩礫多量。粘土多量。	SB49カマド袖
7	暗褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。焼土微量。粘土微量。	SB49カマド掘方
8	暗褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB49掘方埋土

第 117 図　SB49　カマド平面図・断面図

SB50

遺構（第 118・119 図）

位置　N- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB73 → SB50（新）

主軸方位　N-30.0° -E

残存状況　建物跡全体が残存し比較的良好な状態で検出される。平面形は方形を呈し、規模は主軸（南北）2.98m、直交（東西）2.64m、深さ 9cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　幅 16 ～ 32cm、深さ 8cm の壁溝が検出される。壁溝は建物跡の北側には検出されず建物跡中央から南側の壁沿いにおいてのみ施されている。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

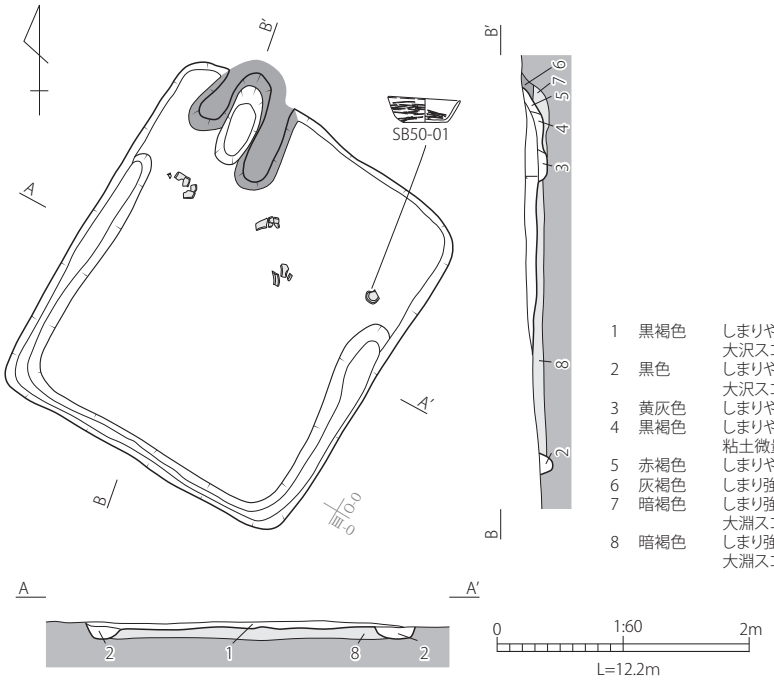
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁西端。両袖とも残存し、右袖端部には芯材となる石材が検出される。規模は全長 77cm、幅 80cm、燃焼室幅 25cm を測る。

出土遺物（第 120 図）

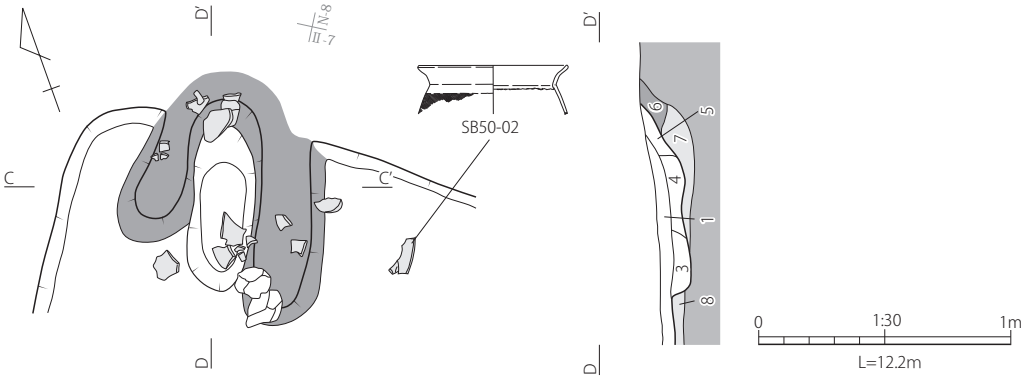
1 ～ 3 は土師器である。1 は坏で、体部内外面にヨコミガキ、見込み部に同心円状のミガキ、そして底部には格子状のヘラ描きが施されている。2 は長胴甕であり、やや屈曲する口縁部を有し、肩部はあまり張らない。3 も長胴甕の底部であり、木葉痕が残る。

時期　床面およびカマド出土の 1・2 を重視し、3 もその共伴と考えれば、富士Ⅳ期（9 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



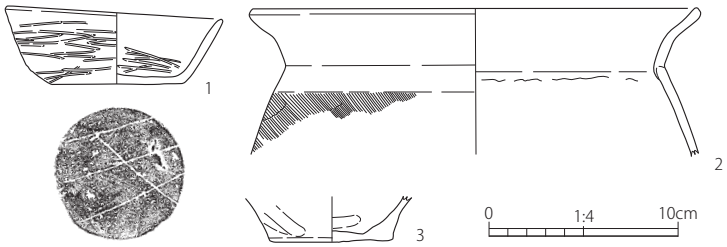
1	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB50覆土
2	黒色	しまりやや弱、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB50覆土
3	黄灰色	しまりやや強、粘性強。粘土多量。	SB50カマド崩落土
4	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土少量。炭化物微量。粘土微量。	SB50カマド燃焼室
5	赤褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土多量。粘土少量。	SB50カマド燃焼室
6	灰褐色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB50カマド袖
7	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。粘土少量。	SB50カマド掘方
8	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB50掘方埋土

第 118 図　SB50　平面図・断面図



1	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB50覆土
3	黄灰色	しまりやや強、粘性強。粘土多量。	SB50カマド崩落土
4	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土少量。炭化物微量。粘土微量。	SB50カマド燃焼室
5	赤褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土多量。粘土少量。	SB50カマド燃焼室
6	灰褐色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB50カマド袖
7	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。粘土少量。	SB50カマド掘方
8	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB50掘方埋土

第 119 図　SB50　カマド平面図・断面図



第 120 図　SB50　出土遺物実測図

SB51

遺構（第 121・123 図）

位置　L-0 グリッド

重複関係（古）SB88 → SB51（新）

（古）SB84 → SB91 → SB51（新）

主軸方位　N-14.0° -E

残存状況　比較的良好な状態で検出される。平面形は方形を呈し、規模は主軸（南北）3.50m、直交（東西）3.52m、深さ 24cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

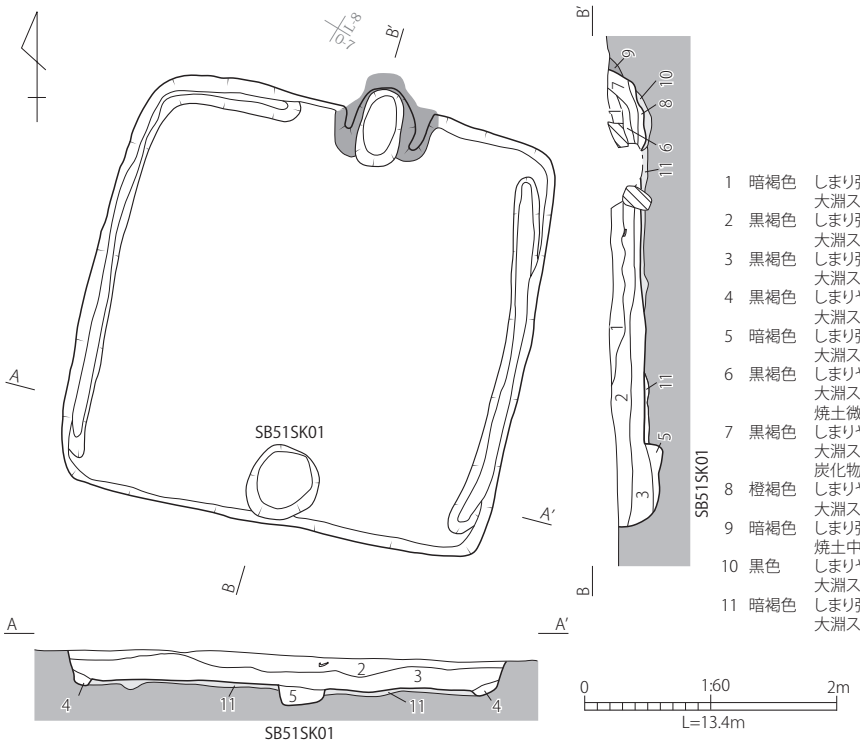
壁溝　幅 22cm、深さ 7cm の壁溝が北壁のカマド西側から西壁及び東壁に施されている。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

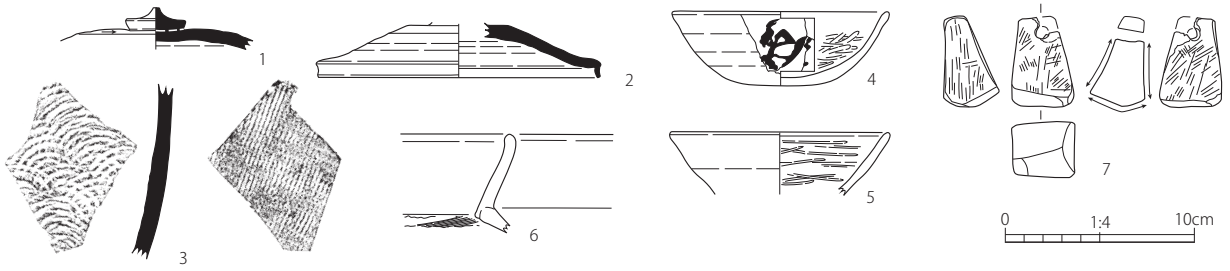
その他の遺構　南壁中央に土坑 1 基が検出される。規模は長軸 62cm、短軸 56cm、床面からの深さ 12cm を測る。

カマド　北壁中央。比較的良好な状態で検出される。両袖には芯材となる石材が検出され、焚口周辺の上層にも石材が確認される。燃焼室内には支脚石が残存し北側に倒れた状態で検出される。規模は全長 64cm、幅 76cm、燃焼室幅 30cm を測る。



1	暗褐色	しまり強、粘性やや強。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB51覆土
2	黒褐色	しまり強、粘性強。溶岩礫中量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB51覆土
3	黒褐色	しまり強、粘性強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB51覆土
4	黒褐色	しまりやや弱、粘性強。溶岩礫中量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB51覆土
5	暗褐色	しまり強、粘性強。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB51土坑覆土
6	黒褐色	しまりやや弱、粘性強。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。焼土微量。粘土多量。	SB51カマド崩落土
7	黒褐色	しまりやや強、粘性強。焼土中量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。炭化物微量。粘土少量。	SB51カマド燃焼室
8	橙褐色	しまりやや弱、粘性弱。大淵スコリア少量。焼土多量。	SB51カマド燃焼室
9	暗褐色	しまり強、粘性強。大沢スコリア微量。焼土中量。粘土多量。	SB51カマド袖
10	黒色	しまりやや強、粘性やや強。粘土微量。大淵スコリア少量。焼土微量。	SB51カマド掘方
11	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB51掘方埋土

第 121 図　SB51　平面図・断面図

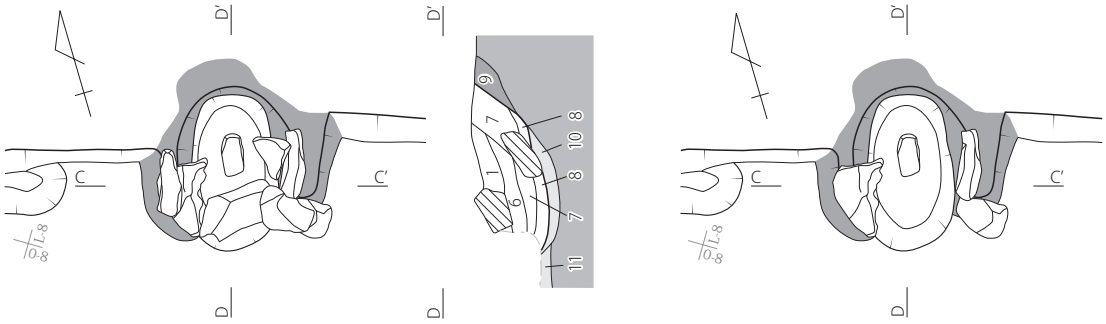


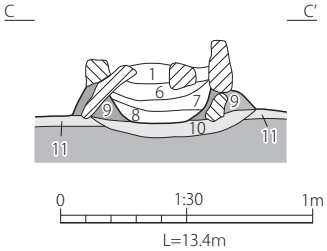
第 122 図　SB51　出土遺物実測図

出土遺物（第 122 図）

1 ～ 3 は須恵器である。1･2 は坏蓋で、1 は径 3.05cm の摘みが付く。3 は甕の体部片であり、内面に同心円文タタキが残る。内部は酸化焔気味の焼成のため、断面色調が暗赤褐色を呈する。4・5 は土師器の坏である。4 は体部外面に判読不明の墨書がなされ、底部には回転糸切り痕が残る。6 は土師器の甕であり、白色粒子を含む粗い胎土で、くの字形の口縁部形態をとるものである。7 は凝灰岩製の提砥で、上部に径 0.7cm の円形の孔が穿たれている。

時期　床面出土の 2 を重視し、1 をその共伴と考えれば、富士Ⅰ～Ⅱ期（8 世紀前～中葉頃）の建物跡と考えられる。





1	暗褐色	しまり強、粘性やや強。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB51覆土
6	黒褐色	しまりやや弱、粘性強。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。焼土微量。粘土多量。	SB51カマド崩落土
7	黒褐色	しまりやや強、粘性強。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。焼土中量。炭化物微量。粘土少量。	SB51カマド燃焼室
8	橙褐色	しまりやや弱、粘性弱。大淵スコリア少量。焼土多量。	SB51カマド燃焼室
9	暗褐色	しまり強、粘性強。大沢スコリア微量。焼土中量。粘土多量。	SB51カマド袖
10	黒色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア少量。焼土微量。粘土微量。	SB51カマド掘方
11	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB51掘方埋土

第 123 図　SB51　カマド平面図・断面図

SB52

遺構（第 125・126 図）

位置　N- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB58、SB73 → SB52（新）

主軸方位　N-93.5° -E

残存状況　比較的良好な状態で検出される。平面形は方形を呈し、規模は主軸（東西）3.08m、直交（南北）3.12m、深さ 12cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　幅 15cm、深さ 6cm の壁溝が建物跡の北側及び南壁の一部に施される。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

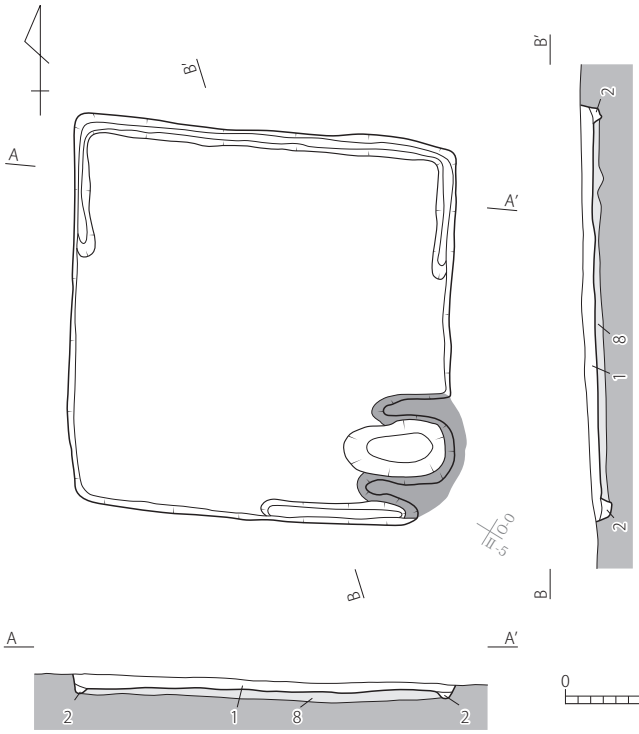
その他の遺構　確認されない。

カマド　東壁南端。比較的良好な状態で検出される。右袖端部には芯材となる石材が検出される。燃焼室内には支脚石が残存する。規模は全長 87cm、幅 90cm、燃焼室幅 45cm を測る。

出土遺物（第 127 図）

1 は須恵器の坏蓋である。口縁部には短い返りが付く。2 ～ 8 は土師器である。2 は口縁部が玉縁状となる甲斐型坏で、体部外面に判読不明の墨書が残る。3 は高台部片で、坏や埦に取り付くものとみられる。4・5 は坏で、ともに体部内面のみヨコミガキが施される。5 の底部中央には板状工具によって余分な粘土を削り取った際に生じたハケメが残る。6 ～ 8 はいずれも長胴甕の破片であり、7・8 の底部には木葉痕が残る。

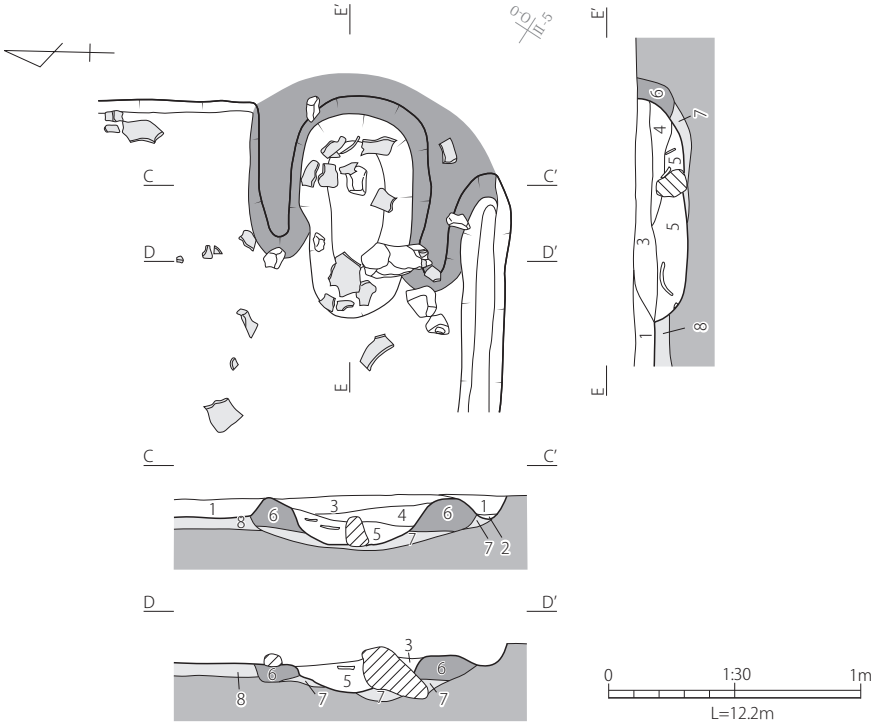
時期　明確な床面出土遺物はないものの、切り合い関係と 2 ～ 8 を重視すれば、富士Ⅴ期（9 世紀中葉頃）の建物跡と考えられる。



第 124 図　SB52 カマド

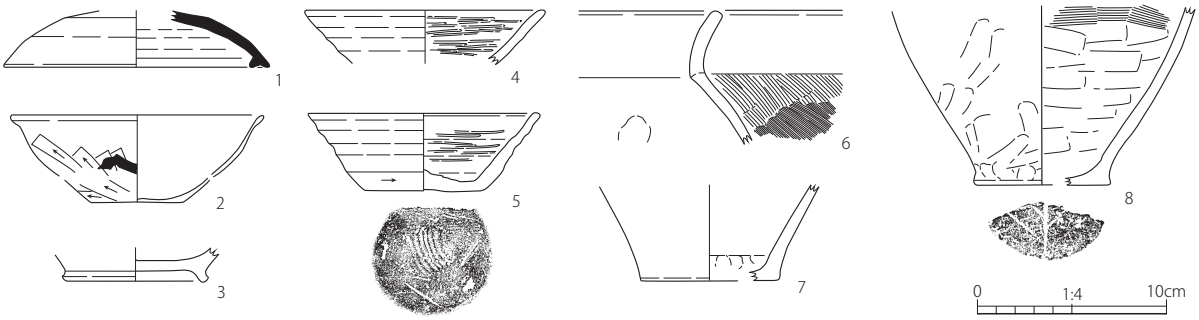
1	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB52覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB52覆土
8	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB52掘方埋土

第 125 図　SB52　平面図・断面図

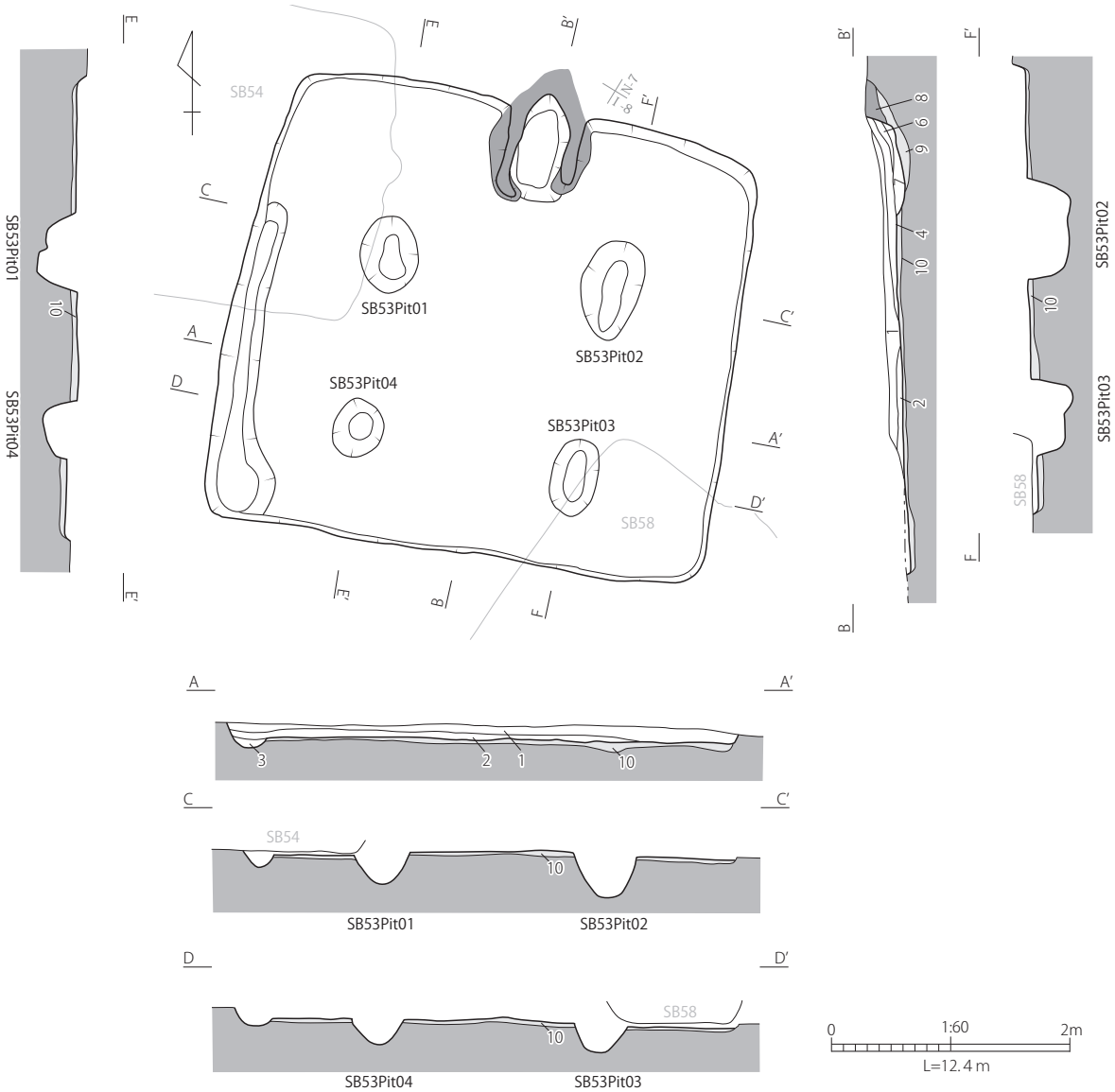


1	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB52覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB52覆土
3	黄灰色	しまりやや弱、粘性強。粘土多量。	SB52カマド崩落土
4	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫少量。焼土微量。炭化物微量。粘土少量。	SB52カマド燃焼室
5	赤褐色	しまりやや弱、粘性やや強。焼土多量。炭化物微量。粘土微量。	SB52カマド燃焼室
6	黄灰色	しまりやや強、粘性やや強。焼土微量。粘土多量。	SB52カマド袖
7	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大沢スコリア微量。	SB52カマド掘方
8	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB52掘方埋土

第 126 図　SB52　カマド平面図・断面図



第 127 図　SB52　出土遺物実測図



1	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB53覆土
2	黒褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土少量。	SB53覆土
3	黒褐色	しまり弱、粘性強。溶岩礫微量。	SB53覆土
4	黄褐色	しまりやや強、粘性強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土多量。	SB53カマド崩落土
6	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土多量。	SB53カマド燃焼室
7	赤褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土多量。炭化物少量。	SB53カマド燃焼室
8	黄褐色	しまり強、粘性やや強。粘土多量。	SB53カマド袖
9	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB53カマド掘方
10	暗褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB53掘方埋土

第 128 図　SB53　平面図・断面図

SB53

遺構（第 128・129 図）

位置　N- Ⅰ、N- Ⅱグリッド

重複関係

（古）SB68、SB75 → SB53 → SB54、SB58（新）

主軸方位　N-10.0°-E

残存状況　比較的良好な状態で検出される。平面形は方形を呈し、規模は主軸（南北）3.94m、直交（東西）4.26m、深さ 12cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　幅 34cm、深さ 7cm の壁溝が西壁南側のみ検出される。

床　厚さ 5cm の貼り床が施される。

柱穴　主柱穴と考えられる 4 基のピットが検出される。規模は長軸 51 ～ 87cm、短軸 38 ～ 55cm、床面からの深さ 19 ～ 37cm を測る。

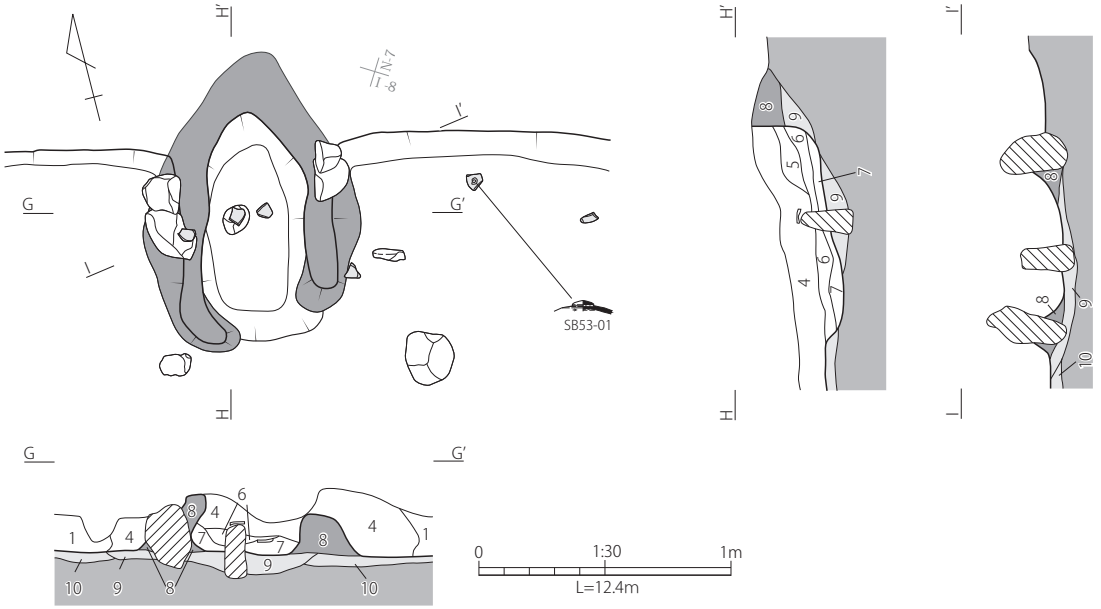
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。比較的良好な状態で検出される。両袖奥部には芯材となる石材が検出される。燃焼室内には支脚石が残存する。規模は全長 90cm、幅 86cm、燃焼室幅 39cm を測る。

出土遺物（第 130 図）

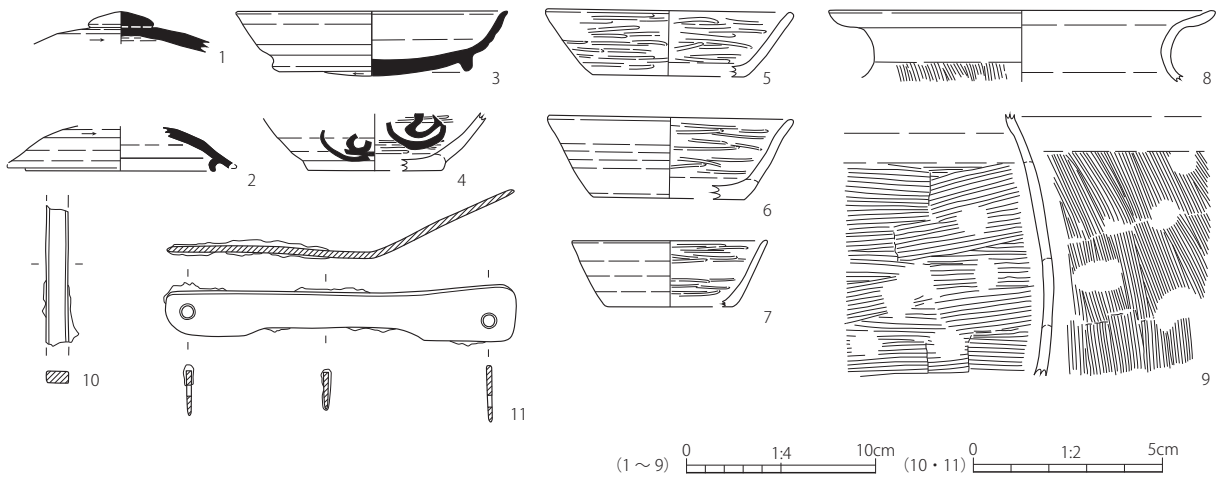
1 ～ 3 は須恵器である。1・2 は坏蓋で、1 は摘み蓋、2 は返り蓋である。3 は坏身（高台坏）で、底部が高台よりも突出する。見込み部に磨り痕が顕著であることから、転用硯として使用された可能性もある。4 ～ 7 は土師器の坏で、4 は体部内外面に判読不明の墨書が残る。5 ～ 7 はいずれも器高に対して底径が大きい坏であり、5 は体部内外面ともにヨコミガキが施される。8 は水平口縁の長胴甕であり、胎土・色調から遠江産と考えられる。9 も長胴甕の体部であるが、胎土・色調から在地のものと判断される。10 は鉄鏃の頸部片である。11 は不明鉄製品で、下辺中央に浅い抉りを有する細い板状を呈し、左右両端部に円形の孔が穿たれる。途中で屈曲しているが、それが本来の形状かどうかは定かではない。

時期　床面出土の 1・3・8 を重視しつつも、切り合い関係と 5 ～ 7・9 が共伴することを考えれば、富士Ⅲ期（8 世紀後葉頃）の建物跡と考えられる。



1	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB53覆土
2	黒褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土少量。	SB53覆土
3	黒褐色	しまり弱、粘性強。溶岩礫微量。	SB53覆土
4	黄褐色	しまりやや強、粘性強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。粘土多量。	SB53カマド崩落土
5	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。焼土多量。粘土多量。	SB53カマド崩落土
6	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土多量。	SB53カマド燃焼室
7	赤褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土多量。炭化物少量。	SB53カマド燃焼室
8	黄褐色	しまり強、粘性やや強。粘土多量。	SB53カマド袖
9	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB53カマド掘方
10	暗褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB53掘方埋土

第 129 図　SB53　カマド平面図・断面図



第 130 図　SB53　出土遺物実測図

SB54

遺構（第 131・132 図）

位置　N- Ⅰ、N- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB68 → SB53 → SB54 → SB72（新）

主軸方位　N-98.5° -E

残存状況　建物跡の南西部分を SB72 により削平されているが全体的には検出される。平面形は方形を呈し、規模は主軸（東西）2.82m、直交（南北）2.75m、深さ 17cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

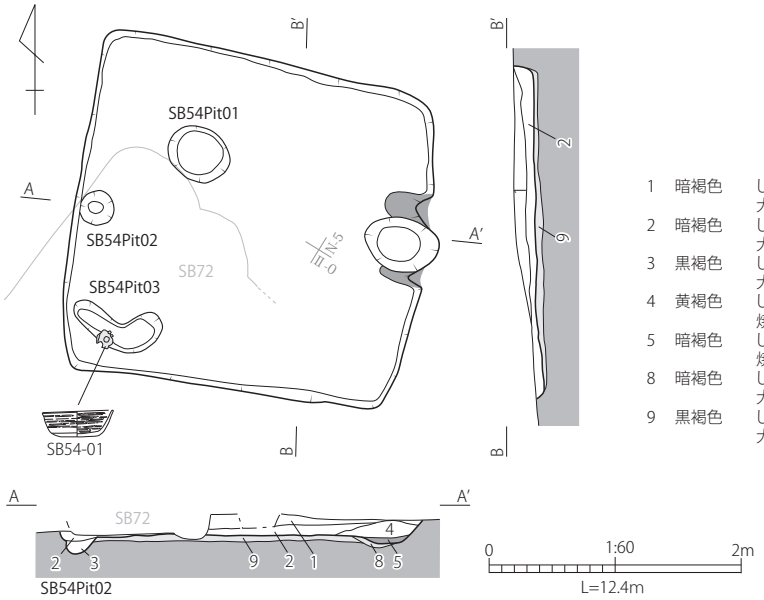
壁溝　確認されていない。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

柱穴　3 基のピットが検出される。規模は長軸 28 ～ 72cm、短軸 22 ～ 43cm、床面からの深さ 6 ～ 12cm を測る。

その他の遺構　確認されない。

カマド　東壁北寄り。両袖とも残存し比較的良好な状態で検出される。規模は全長 68cm、幅 70cm、燃焼室幅 43cm を測る。



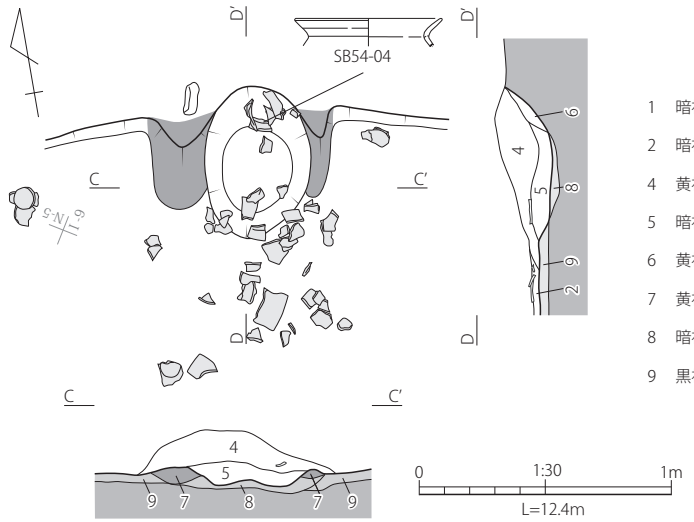
1	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB54覆土
2	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫微量。大沢スコリア微量。	SB54覆土
3	黒褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB54Pit覆土
4	黄褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫微量。焼土微量。粘土多量。	SB54カマド崩落土
5	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや強。焼土多量。粘土中量。	SB54カマド燃焼室
8	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB54カマド掘方
9	黒褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB54掘方埋土

第 131 図　SB54　平面図・断面図

出土遺物（第 133 図）

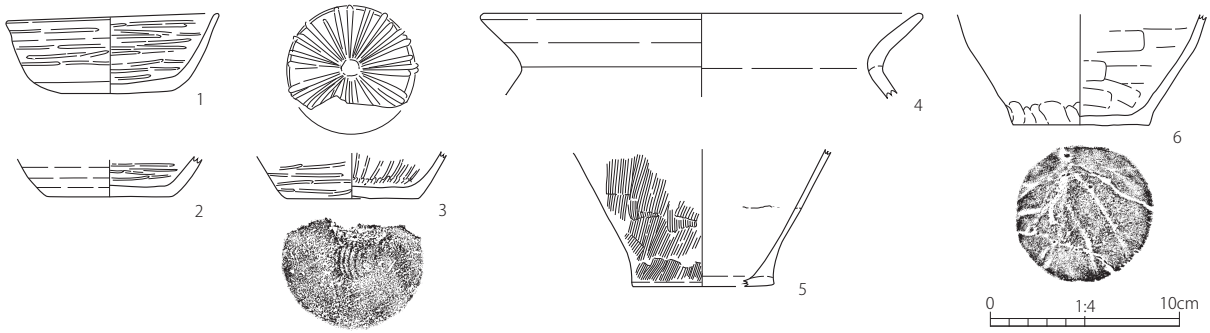
1 ～ 6 は土師器である。1 ～ 3 は坏で、1 は体部内外面にヨコミガキ、3 は見込み部から体部内面まで放射状ミガキが施される。2 の底部は不定方向の手持ちヘラケズリによって仕上げられる。3 の底部中央には板状工具によって余分な粘土を削り取った際に生じたハケメが残る。4・5 は長胴甕、6 は小型甕であり、6 の底部には木葉痕が残る。

時期　床面およびカマド出土の 1・4 を重視し、他の遺物もその共伴と考えれば、富士Ⅳ期（9 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



1	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB54覆土
2	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫微量。大沢スコリア微量。	SB54覆土
4	黄褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫微量。焼土微量。粘土多量。	SB54カマド崩落土
5	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや強。焼土多量。粘土中量。	SB54カマド燃焼室
6	黄褐色	しまり強、粘性弱。焼土中量。炭化物中量。粘土多量。	SB54カマド燃焼室
7	黄褐色	しまり強、粘性やや強。焼土少量。粘土多量。	SB54カマド袖
8	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB54カマド掘方
9	黒褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB54掘方埋土

第 132 図　SB54　カマド平面図・断面図



第 133 図　SB54　出土遺物実測図

SB55

遺構（第 134・135 図）

位置　N- Ⅰグリッド

重複関係　なし

主軸方位　N-99.0°-E

残存状況　北側は調査区域外となり検出できない。また覆土が浅く建物跡の西側は残存しない。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（東西）2.10m、直交（南北）2.02m、深さ 7cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

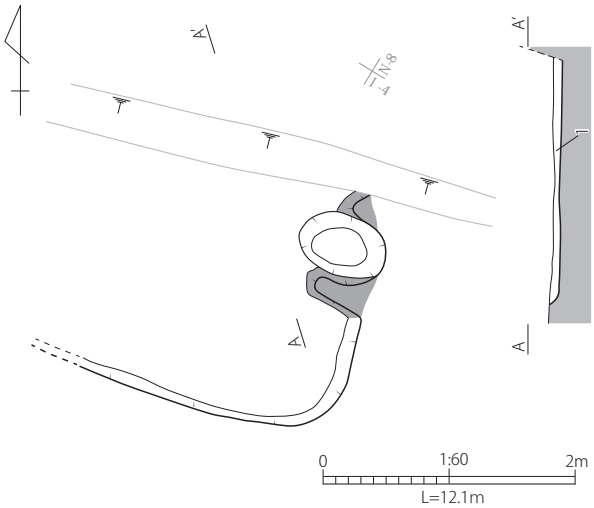
その他の遺構　確認されない。

カマド　東壁。両袖とも残存し、右袖には芯材となる石材が検出される。規模は全長 71cm、幅 102cm、燃焼室幅 50cm を測る。

出土遺物（第 136 図）

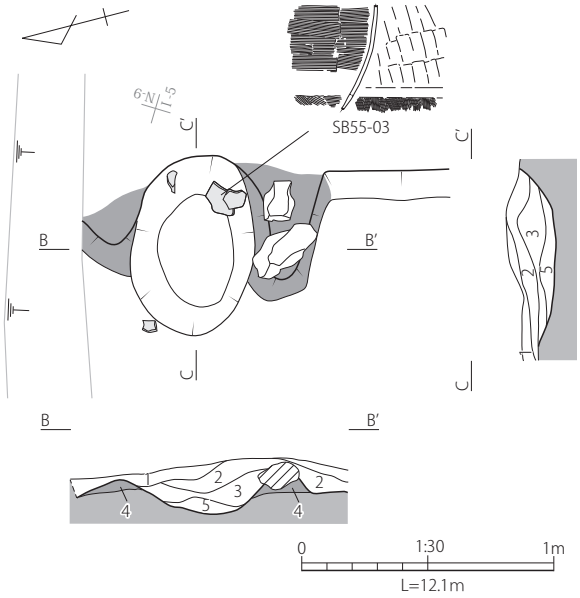
1 は須恵器の皿である。復原口径 16.3cm を測り、底部と体部の境は角をなす。底部は回転ヘラケズリ調整である。2 は土師器の坏で、体部外面は手持ちヘラケズリ後にヨコミガキによって仕上げられる。3 は土師器の長胴甕で、体部外面上部は二次調整として板ナデが施される。

時期　カマド周辺出土の 1・3 を重視すれば、富士Ⅱ～Ⅲ期（9 世紀中～後葉頃）の建物跡と考えられる。



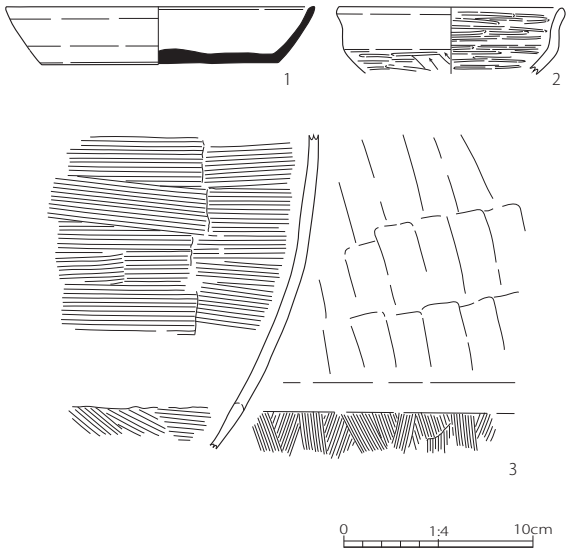
1　暗褐色　しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア少量。　SB55覆土

第 134 図　SB55　平面図・断面図



1	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア少量。	SB55覆土
2	灰褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫微量。粘土多量。	SB55カマド崩落土
3	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。焼土少量。	SB55カマド燃焼室
4	灰色	しまり強、粘性強。焼土微量。粘土多量。	SB55カマド袖
5	暗褐色	しまり強、粘性強。溶岩礫微量。	SBカマド掘方

第 135 図　SB55　カマド平面図・断面図



第 136 図　SB55　出土遺物実測図

SB56

遺構（第 137・138 図）

位置　O- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB56 → SB57（新）

主軸方位　N-5.0° -W

残存状況　建物跡の南側は SB57 により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）1.34m、直交（東西）2.58m、深さ 15cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

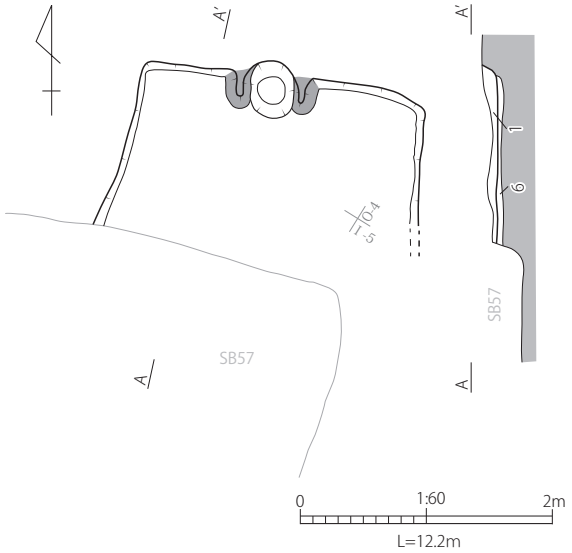
壁溝　確認されない。

床　厚さ 5cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。両袖とも残存し比較的良好な状態で検出される。規模は全長 40cm、幅 74cm、燃焼室幅 34cm を測る。



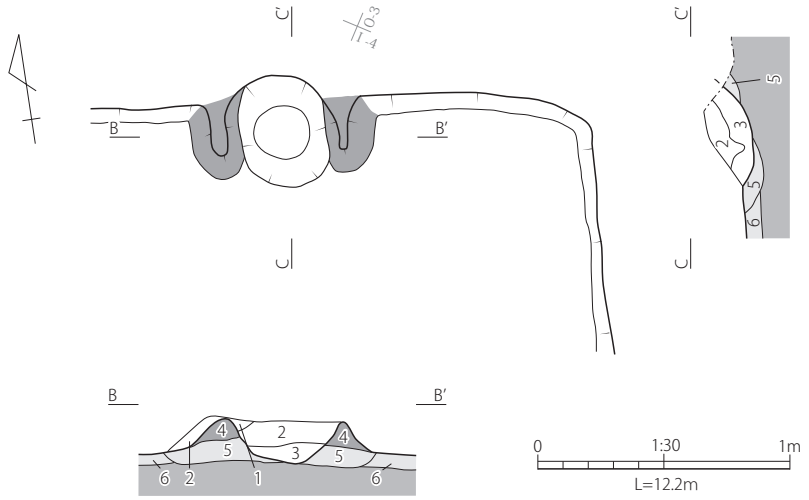
1	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。粘土微量。	SB56覆土
6	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。	SB56掘方埋土

第 137 図　SB56　平面図・断面図

出土遺物（第 139 図）

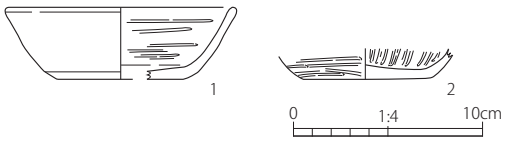
SB56・SB57 のいずれかに伴う遺物として 2 点を図示した。1 ～ 2 は土師器の坏で、1 は体部内面のみヨコミガキが、2 は体部外面ヨコミガキ、内面放射状ミガキ、見込み部はナデ調整が施される。古相の駿東型坏（箱坏）は見込み部のみに放射状ミガキ、体部内外面にヨコミガキを施すのが通有の調整であるため、2 の体部内面にみられる放射状ミガキは、甲斐型坏の影響による可能性がある。

時期　SB56・57 出土遺物に明確な時期差はなく、富士Ⅳ期（9 世紀前葉頃）の範囲におさまるものである。本建物を切る SB57 が後述するように富士Ⅳ期の建物であるため、これらの遺物がすべて SB57 に伴うものである可能性を残すものの、ここでは両建物にあまり時期差を想定しない立場をとり、SB56 を富士Ⅲ～Ⅳ期（8 世紀後葉～ 9 世紀前葉頃）の建物跡と考えておく。



1	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。粘土微量。	SB56覆土
2	灰色	しまり強、粘性強。焼土中量。炭化物少量。粘土多量。	SB56カマド崩落土
3	褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土多量。粘土少量。	SB56カマド燃焼室
4	灰色	しまり強、粘性やや強。焼土微量。粘土多量。	SB56カマド袖
5	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。粘土少量。	SB56カマド掘方
6	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。	SB56掘方埋土

第 138 図　SB56　カマド平面図・断面図



第 139 図　SB56・SB57　出土遺物実測図

SB57

遺構（第 140・141 図）

位置　O- Ⅰグリッド

重複関係

（古）SB56、SB61 → SB57 → SB59（新）

主軸方位　N-100.0° -E

残存状況　覆土は浅いが全体的には検出される。平面形は不整形な方形を呈し、規模は主軸（南北）3.74m、直交（東西）4.13m、深さ 9cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 5cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

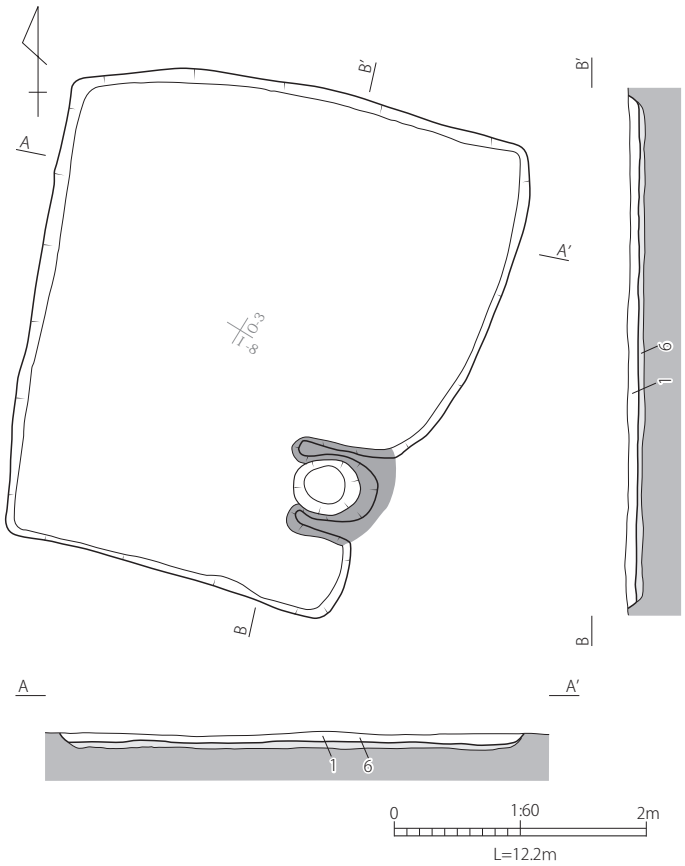
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁東寄り。両袖とも残存し比較的良好な状態で検出される。規模は全長 67cm、幅 77cm、燃焼室幅 45cm を測る。

出土遺物（第 142 図）

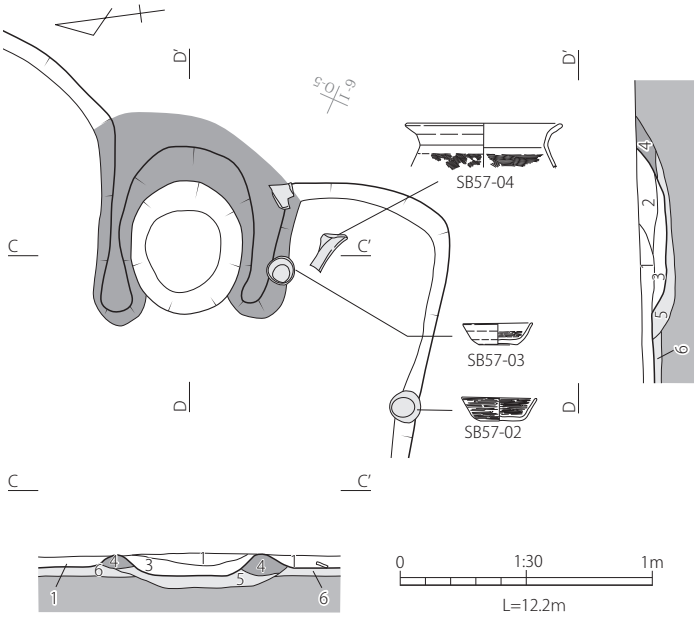
確実に SB57 に伴う遺物として、4 点を図示した。1 ～ 3 は土師器の坏で、1・2 は体部内外面ともにヨコミガキが、3 は内面のみにヨコミガキが施される。1 は体部外面に「己」とみられる刻書がある。また、1・2 の底部中央には板状工具によって余分な粘土を削り取った際に生じたハケメが残る。4 は土師器の長胴甕で、頸部から口縁部の境界で外側に屈曲し、肩部があまり張らない形態のものである。

時期　カマド周辺出土の 1 ～ 4 を重視すれば、富士Ⅳ期（9 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



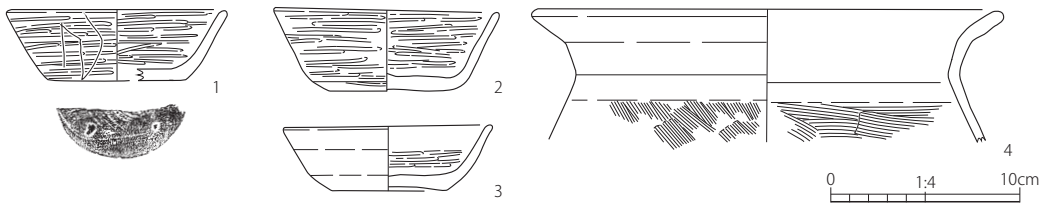
1	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB57覆土
6	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB57掘方埋土

第 140 図　SB57　平面図・断面図



1	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB57覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土少量。粘土少量。	SB57カマド燃焼室
3	赤褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土多量。粘土少量。	SB57カマド燃焼室
4	黄褐色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB57カマド袖
5	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。粘土微量。	SB57カマド掘方
6	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB57掘方埋土

第 141 図　SB57　カマド平面図・断面図



第 142 図　SB57　出土遺物実測図

SB58

遺構（第 144 図）

位置　N- Ⅱ、O- Ⅱグリッド

重複関係

（古）SB75 → SB53 → SB58 → SB52（新）

主軸方位　N-36.5°-E

残存状況　建物跡の北東部は撹乱により削平されている。平面形はやや不整形な長方形を呈し、規模は主軸（南北）2.96m、直交（東西）2.45m、深さ 10cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 8cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

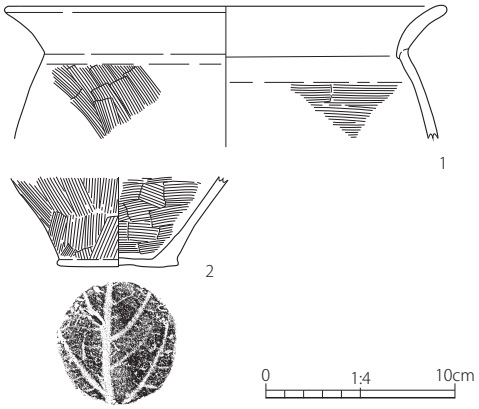
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。両袖とも端部が失われていて奥部のみ残存する。規模は全長 42cm、燃焼室幅 28cm を測る。

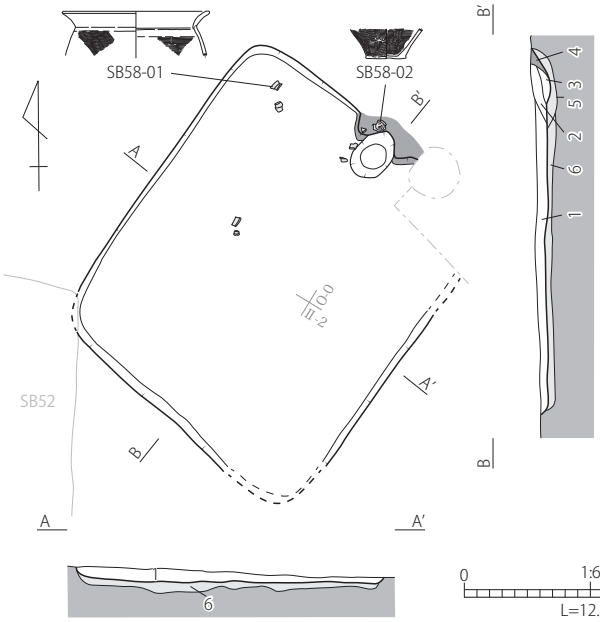
出土遺物（第 143 図）

1・2 は土師器の長胴甕で、1 は緩やかに外反する口縁部に、なで肩気味の形態をとるものである。

時期　カマド周辺出土の 1・2 を重視すれば、富士Ⅲ～Ⅳ期（8 世紀後葉～ 9 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



第 143 図　SB58　出土遺物実測図



1	黒褐色	しまり弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB58覆土
2	黄褐色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB58カマド崩落土
3	橙褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土中量。粘土多量。	SB58カマド燃焼室
4	黄褐色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB58カマド袖
5	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。粘土少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB58カマド掘方
6	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア微量。大沢スコリア多量。	SB58掘方埋土

第 144 図　SB58　平面図・断面図

SB59

遺構（第 145 図）

位置　O- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB57 → SB59 → SB60 → SB63（新）

主軸方位　N-27.0° -W

残存状況　覆土が浅く床面まで削平されていて北壁の一部のみが検出される。平面形は北壁が直線的であることから方形を呈するものと考えられ、規模は検出範囲内で主軸（南北）0.62m、直交（東西）1.78m、深さ 5cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 4cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

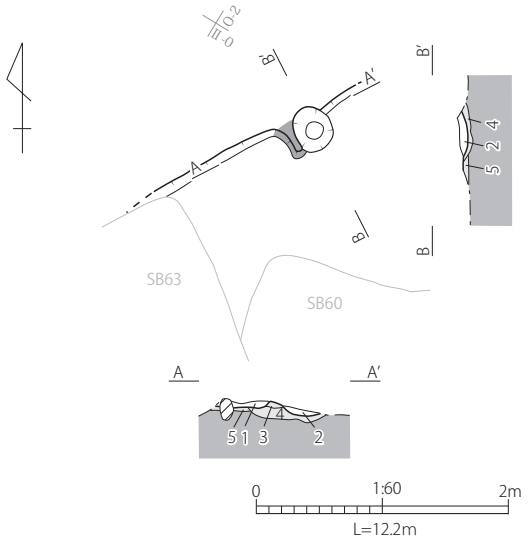
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

出土遺物（第 146 図）

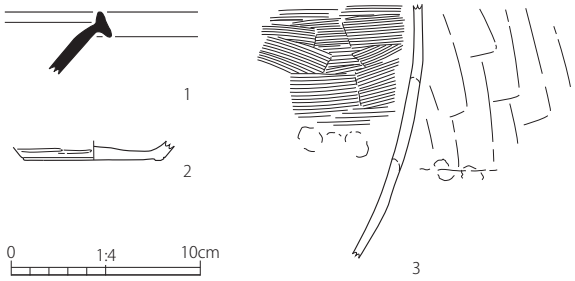
1 は須恵器の長頸壺とみられる口縁部片である。2 は土師器の坏で、底部に低い高台が貼りつけられる。底部は手持ちヘラケズリ調整である。3 は土師器長胴甕で、体部外面上半が板ナデによって仕上げられるものである。

時期　切り合い関係とカマド周辺出土の 1 などを重視すれば、富士Ⅳ期（9 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



1	黒褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。粘土少量。	SB59覆土
2	赤褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。焼土多量。	SB59カマド燃焼室
3	灰褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。粘土多量。	SB59カマド袖
4	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。焼土微量。	SB59カマド掘方
5	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。	SB59掘方埋土

第 145 図　SB59　平面図・断面図



第 146 図　SB59　出土遺物実測図

SB60

遺構（第 147・148 図）

位置　O- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB59 → SB60 → SB63（新）

主軸方位　N-6.5° -E

残存状況　建物跡の南西部分が SB63 により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は主軸（南北）3.30m、直交（東西）2.90m、深さ 12cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

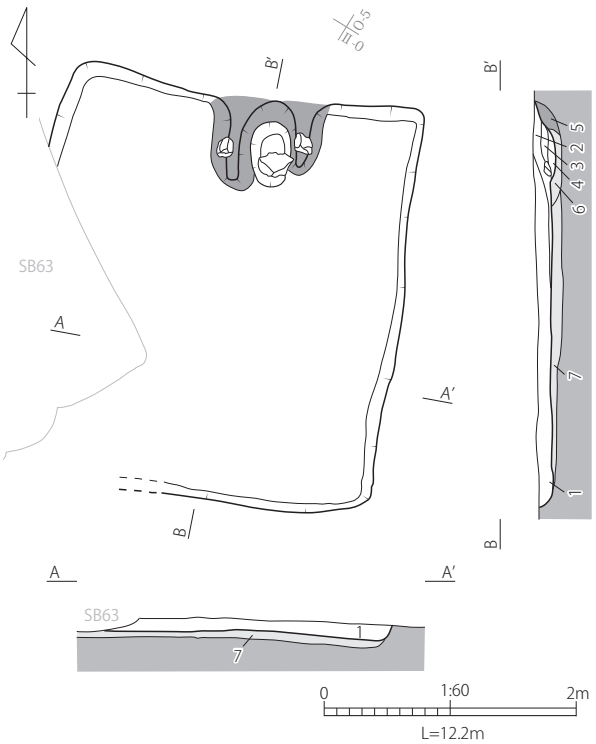
壁溝　確認されない。

床　厚さ 9cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。両袖とも残存し比較的良好な状態で検出される。両袖には芯材となる石材が検出される。規模は全長 69cm、幅 88cm、燃焼室幅 30cm を測る。



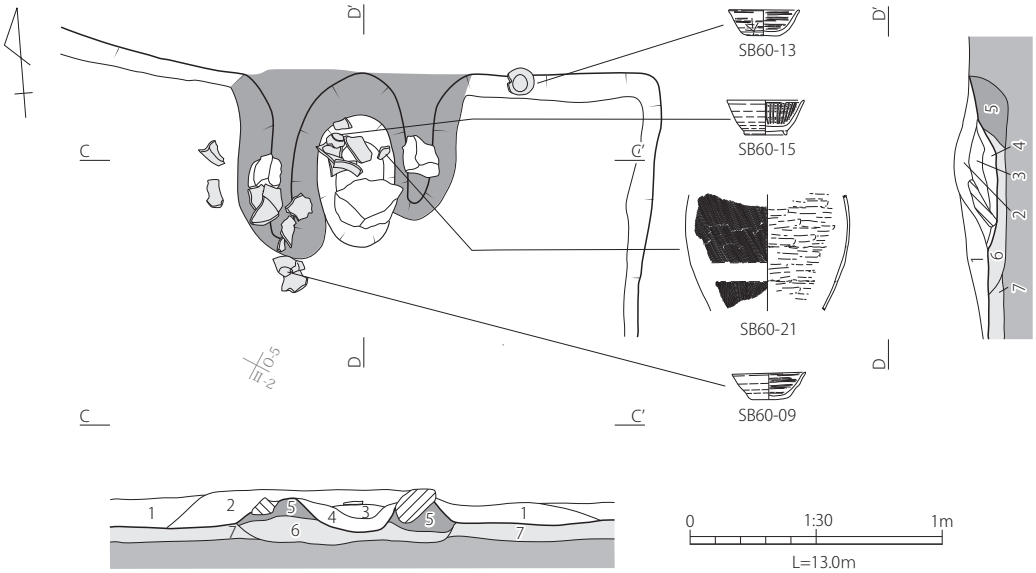
1	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB60覆土
2	灰黄色	しまりやや弱、粘性弱。焼土少量。炭化物少量。粘土多量。	SB60カマド崩落土
3	赤褐色	しまり強、粘性弱。焼土中量。粘土微量。	SB60カマド燃焼室
4	赤褐色	しまり強、粘性弱。焼土多量。粘土少量。	SB60カマド燃焼室
5	灰黄色	しまり強、粘性やや強。焼土少量。炭化物少量。粘土多量。	SB60カマド袖
6	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。	SB60カマド掘方
7	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。	SB60掘方埋土

第 147 図　SB60　平面図・断面図

出土遺物（第 150 図）

1・2 は灰釉陶器であり、1 の碗は内面に灰釉がみとめられる。2 は瓶類の底部とみられるものであり、底部には回転糸切り痕が残る。3 ～ 6 は須恵器である。3・4 は甕で、4 は内面に磨り痕と一部墨痕のような黒色部分がみられることから、転用硯と判断される。5 は坏身であり、復原口径 8.0cm の小型化が進行した段階のものである。6 は坏蓋の転用硯で、内外面に墨痕および磨り痕がみとめられる。7 ～ 21 は土師器で、7 ～ 15 は坏である。7 はロクロ成形で体部外面に判読不明の墨書がある。9 ～ 13 は体部内外面のヨコミガキの有無に細かな差異がみられるものの、おおよそ同時期のまとまりをもった坏群とみられる。13 は体部外面に逆位で「奉」とみられる刻書がある。14 の坏は底部に木葉痕が残るものであり、7 世紀～ 8 世紀前葉頃の混入品であろう。15 は高台坏で、体部内面にヨコミガキおよび放射状ミガキが施される。

16 は小型甕としたが、体部内面にヨコミガキがあり、通有の小型甕とは異なる特徴を有する。17 はロクロ成形の小型甕である。18 ～ 21 は甕で、



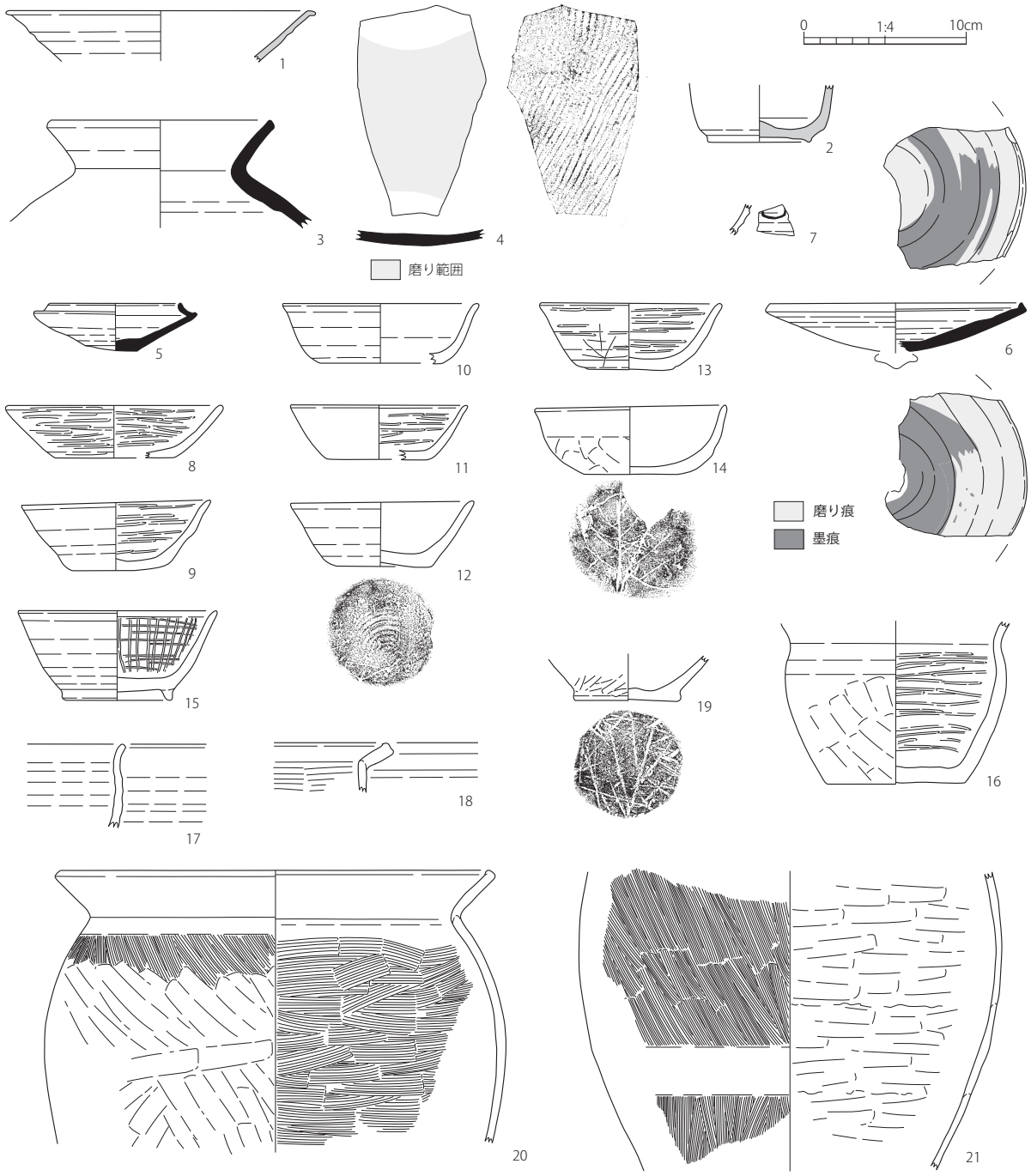
1	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB60覆土
2	灰黄色	しまりやや弱、粘性弱。焼土少量。炭化物少量。粘土多量。	SB60カマド崩落土
3	赤褐色	しまり強、粘性弱。焼土中量。粘土微量。	SB60カマド燃焼室
4	赤褐色	しまり強、粘性弱。焼土多量。粘土少量。	SB60カマド燃焼室
5	灰黄色	しまり強、粘性やや強。焼土少量。炭化物少量。粘土多量。	SB60カマド袖
6	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。	SB60カマド掘方
7	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。	SB60掘方埋土

第 148 図　SB60　カマド平面図・断面図

18 は甲斐型甕である。20・21 は長胴甕であり、20 の体部外面はタテハケ後に板ナデが施される。21 は外面が目の細かいタテハケによって仕上げられるが、内面が板ナデとなっている。

時期　カマド周辺出土の 9・13・15・21 を重視し、10 ～ 12、17・18・20 などをその共伴と考えれば、富士VI期（9 世紀後葉頃）の建物跡と考えられる。

第 149 図　SB60-06



第 150 図　SB60　出土遺物実測図

SB61

遺構（第 151・152 図）

位置　O- I グリッド

重複関係（古）SB62 → SB61 → SB57（新）

主軸方位　N-11.0° -E

残存状況　覆土は浅く建物跡の南側は床面まで削平されている。平面形は方形を呈し、主軸（南北）2.69m、直交（東西）3.25m、深さ 7cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含まない黒褐色土。

壁溝　幅 14cm、深さ 9cm の壁溝が建物跡の南東コーナーにのみ検出される。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

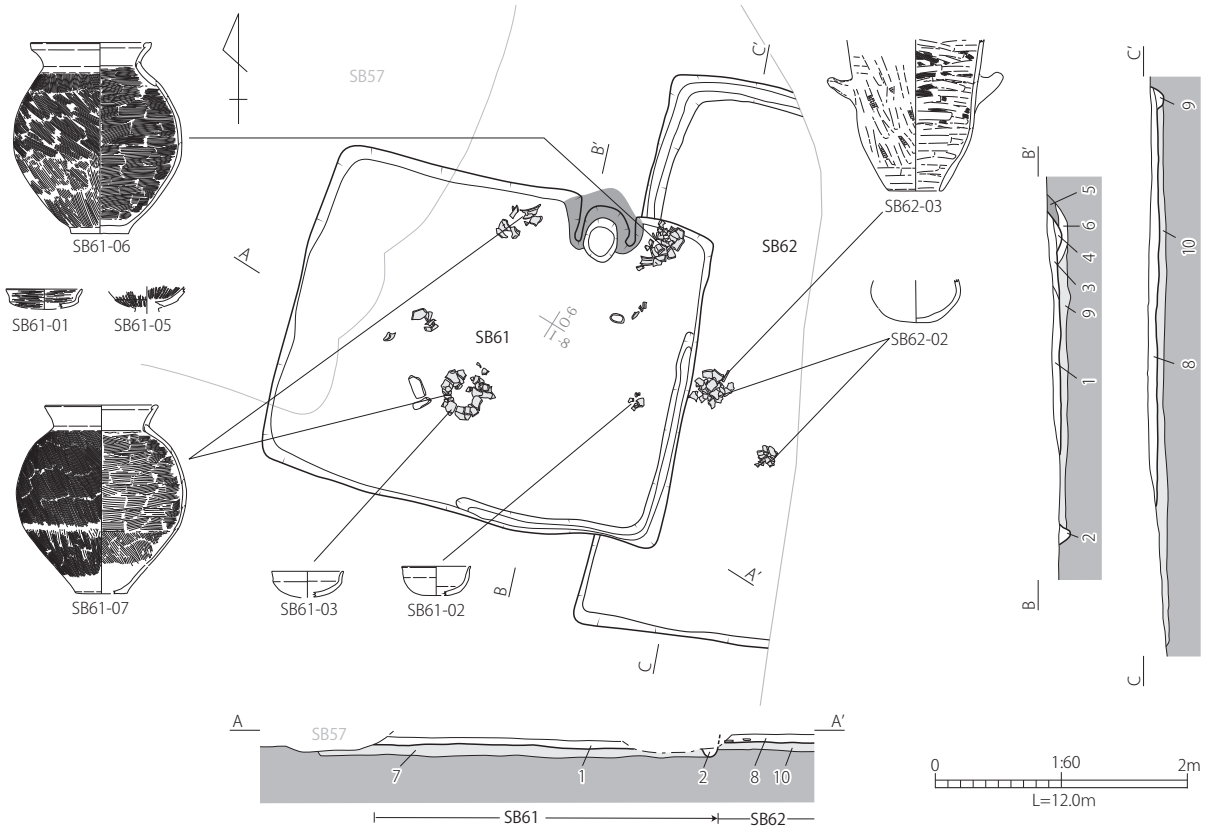
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁東寄り。両袖とも残存し比較的良好な状態で検出される。規模は全長 45cm、幅 64cm、燃焼室幅 26cm を測る。

出土遺物（第 153 図）

1 ～ 7 は土師器である。1 ～ 4 は坏で、1 は口縁部が緩やかに外反し、口縁部と体部の境界には稜線を施すものである。2 ～ 4 は体部内外面ともにナデ主体の坏であり、短く緩やかに外反する口縁部を有する。3・4 は底部に木葉痕が残る。5 は高坏であり、坏部外面の口縁部と体部の境界には稜線をめぐらせ、内外面ともにタテミガキによって仕上げられる。6・7 はくの字形の口縁部を有する甕であるが、体部は 6 が楕円形なのに対し、7 はやや球胴化が進行した形態となっている。体部外面は目の細かなタテハケによって仕上げられている。

時期　床面周辺出土の 1 ～ 4・6・7 を重視すれば、沢東 I 期（6 世紀末～ 7 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



1	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。	SB61覆土
2	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。粘土微量。	SB61覆土
3	灰黄色	しまり強。粘性やや強。溶岩礫微量。焼土微量。炭化物微量。粘土多量。	SB61カマド崩落土
4	赤褐色	しまり強、粘性弱。焼土多量。炭化物微量。粘土微量。	SB61カマド燃焼室
5	黄橙色	しまり強、粘性やや強。焼土中量。粘土多量。	SB61カマド袖
6	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB61カマド掘方
7	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。粘土微量。	SB61掘方埋土
8	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。	SB62覆土
9	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。	SB62覆土
10	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。	SB62掘方埋土

第 151 図　SB61・SB62　平面図・断面図

SB62

遺構（第 151 図）

位置　O- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB62 → SB61（新）

主軸方位　N-8.0° -E

残存状況　東側は調査区域外となり検出できない。西壁が部分的に SB61 により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）4.45m、直交（東西）1.58m、深さ 8cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含まない黒褐色土。

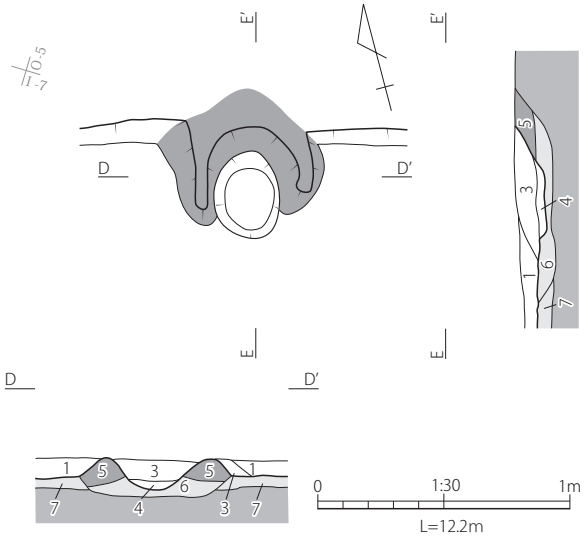
壁溝　幅 20cm、深さ 7cm の壁溝が北西コーナーに施されている。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

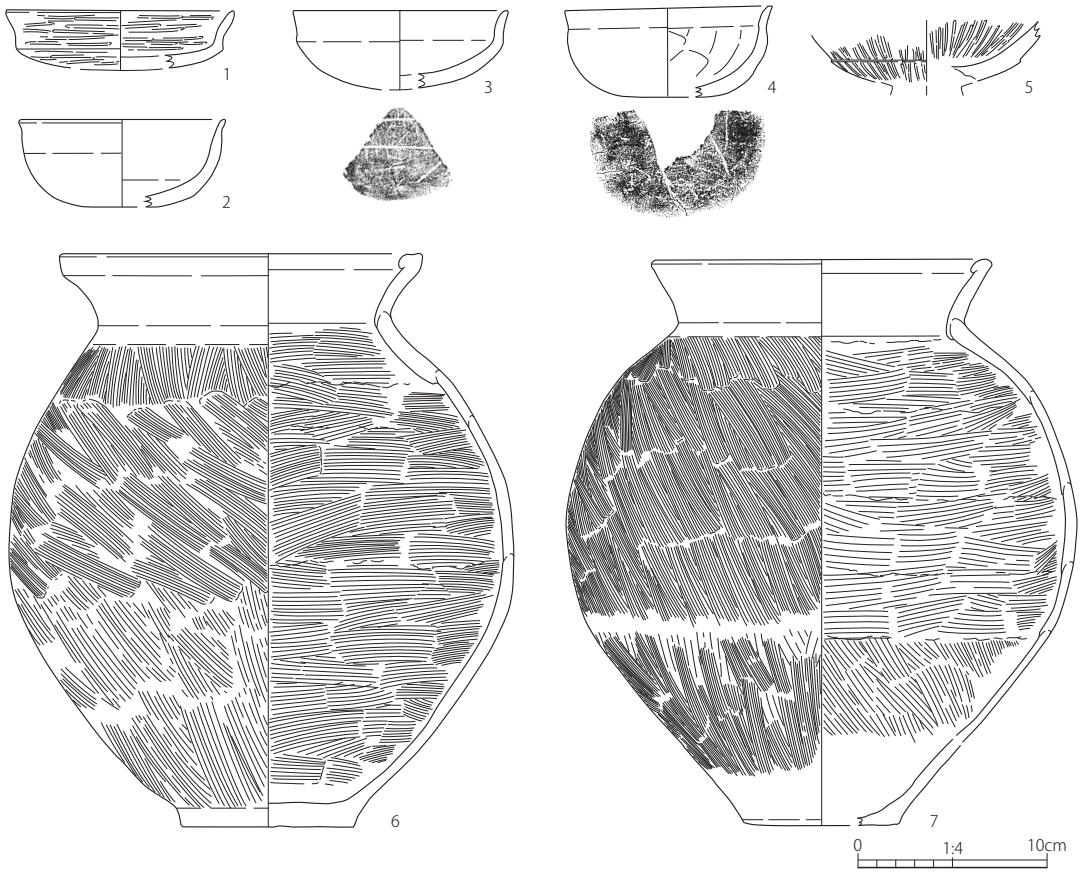
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。



1	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。	SB61覆土
3	灰黄色	しまり強。粘性やや強。溶岩礫微量。焼土微量。炭化物微量。粘土多量。	SB61カマド崩落土
4	赤褐色	しまり強、粘性弱。焼土多量。炭化物微量。粘土微量。	SB61カマド燃焼室
5	黄橙色	しまり強、粘性やや強。焼土中量。粘土多量。	SB61カマド袖
6	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB61カマド掘方
7	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。粘土微量。	SB61掘方埋土

第 152 図　SB61　カマド平面図・断面図

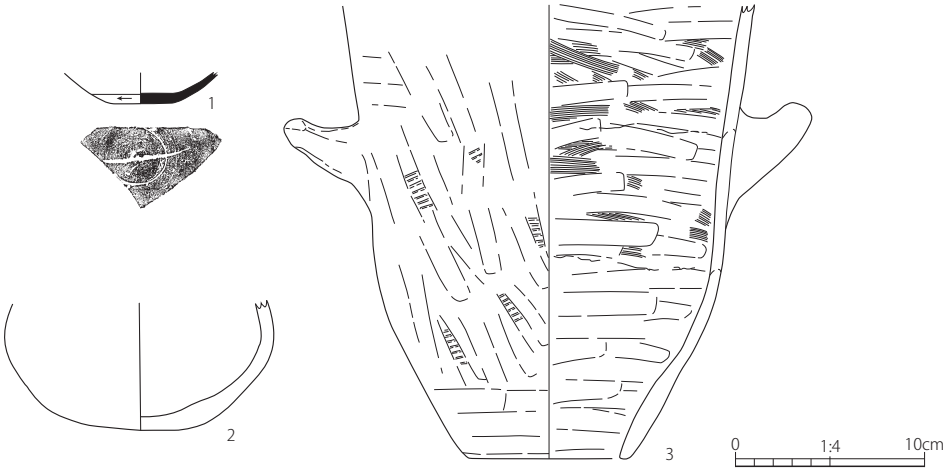


第 153 図　SB61　出土遺物実測図

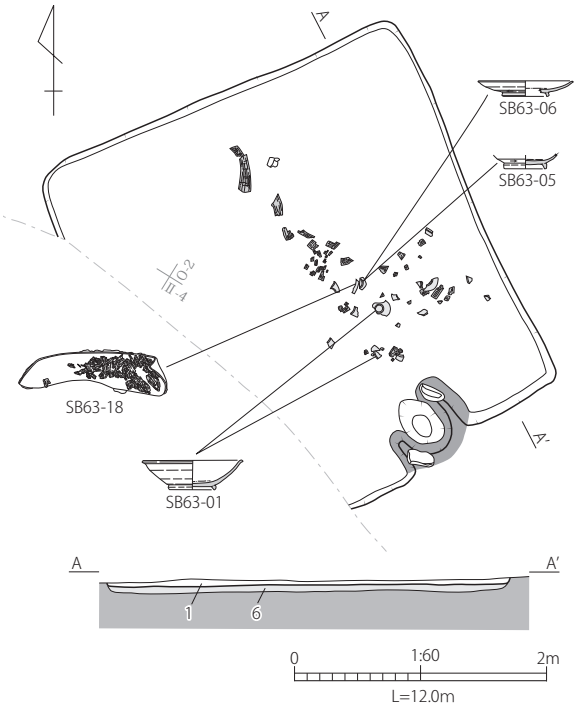
出土遺物（第 154 図）

1 は須恵器の坏身とみられる底部片で、底部に窯記号の「－」がヘラ描きされる。2・3 は土師器で、2 は球形の体部を有する埦とみられる。3 は甑で、砲弾形の体部に一対の角状の把手がつく。底部の孔は一つで、形状は円形である。体部外面は平行タタキ後にヘラナデによって円滑に仕上げられている。体部内面はハケメ後にヘラナデが施される。内外面には煮炊き時のものとみられる煤が付着する。当該地域では把手のない甑の方が趨勢であり、本例のような把手付でほぼ全体の形態がわかるものはめずらしい。

時期　床面周辺出土の 2・3 を重視すれば、安久Ⅳ期（6 世紀後半頃）の建物跡と考えられる。



第 154 図　SB62　出土遺物実測図



1　黒褐色　しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫微量。　SB63覆土
　　大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。
　　焼土多量。炭化物中量。
6　暗褐色　しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫微量。　SB63掘方埋土
　　大沢スコリア微量。粘土微量。

第 155 図　SB63　平面図・断面図

SB63

遺構（第 155・156 図）

位置　O- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB59 → SB60 → SB63（新）

主軸方位　N-155.0° -E

残存状況　建物跡の南西部分は撹乱により削平されている。床面中央付近からは多数の炭化材が検出され焼失建物と考えられる。平面形は方形を呈し、規模は主軸（東西）3.44m、直交（南北）3.18m。深さ 5cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

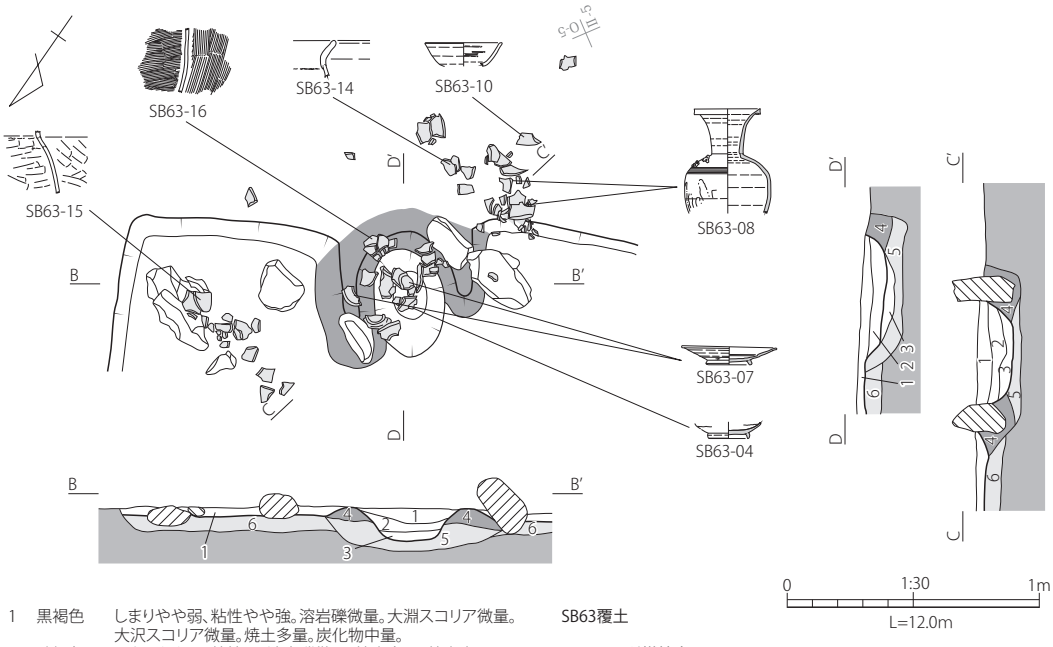
壁溝　確認されない。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

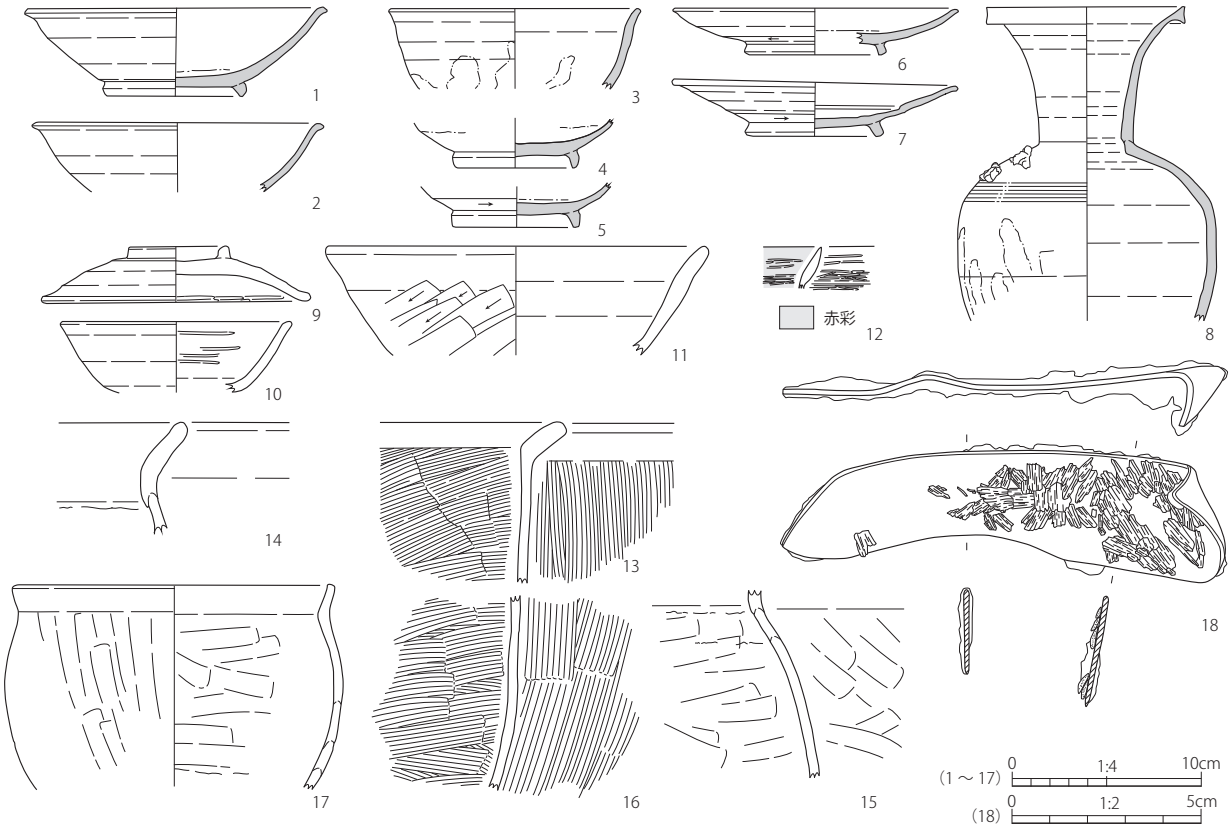
その他の遺構　確認されない。

カマド　東壁北寄り。比較的良好な状態で検出される。両袖には芯材となる石材が残存し、またカマド周辺からも多数の石材が検出されている。規模は、全長 50cm、幅 66cm、燃焼室幅 30cm を測る。



1	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。焼土多量。炭化物中量。	SB63覆土
2	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。焼土多量。粘土少量。	SB63カマド燃焼室
3	赤褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫微量。焼土多量。粘土少量。	SB63カマド燃焼室
4	黄褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土多量。粘土多量。	SB63カマド袖
5	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。焼土少量。粘土微量。	SB63カマド掘方
6	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫微量。大沢スコリア微量。粘土微量。	SB63掘方埋土

第 156 図　SB63　カマド平面図・断面図



第 157 図　SB63　出土遺物実測図

出土遺物（第 157 図）

1 ～ 8 は灰釉陶器で、1 ～ 5 は碗である。1・4・5 はいずれも三日月高台で、体部内面に灰釉がみとめられる。なお、1・2 は同一個体の可能性がある。6 は皿で、やや高い角高台、底部回転ヘラケズリ調整となり、体部外面から内面、一部見込み部までに灰釉が施される。7 は段皿で、やや高い角高台、底部回転ヘラケズリ調整で内外面に灰釉が施される。8 は壺で、断面三角形に肥厚させた口縁部と肩部に緩い沈線を有する。なお、肩部には焼成の際の融着物が残る。9 ～ 16 は土師器で、9 は環状紐付の蓋である。口唇部内面のみヨコミガキが施される。10 は坏で、体部内面にわずかにヨコミガキが施される。11 は大型坏または鉢であり、体部外面下半を手持ちヘラケズリ調整される。12 は内面赤彩の坩であり、古墳時代の混入品である。13 ～ 16 は甕であり、13・16 は雲母の多い胎土とその形態、外面に目の粗いハケメを多用する調整から、甲斐型と判断される。14・15 は在地系の長胴甕で、15 は体部内外面が板ナデによって仕上げられる。17 は小型甕であり、内湾気味に上方へ立ち上がる口縁部を有する。18 は鉄製の曲刃鎌であり、身基端部の角を折り曲げて木柄に装着するものである。刃先および刃縁に研ぎ減りがみとめられる。身基端部から刃部にかけて、炭化した多量の木質が付着する。

時期　カマドや床面出土の 4 ～ 7・10・14・15・17 を重視し、12 を除く遺物をその共伴と考えれば、富士Ⅵ期（9 世紀後葉頃）の建物跡と考えられる。

第 158 図　SB63-13

SB64

遺構（第 159・160 図）

位置　O-Ⅱ、O-Ⅲグリッド

重複関係（古）SB69 → SB70 → SB64 → SB67（新）
（古）SB65 → SB64（新）

主軸方位　N-9.0° -E

残存状況　建物跡の南側は SB67 により削平されている。平面形はやや不整形な方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）4.72m、直交（東西）4.86m、深さ 13cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　幅 25cm、深さ 9cm の壁溝が東壁の一部を除いて施されている。

床　厚さ 8cm の貼り床が施される。

柱穴　主柱穴と考えられる 4 基のピットが検出される。規模は長軸 34 ～ 78cm、短軸 32 ～ 54cm、床面からの深さ 38 ～ 42cm を測る。

その他の遺構　確認されない。

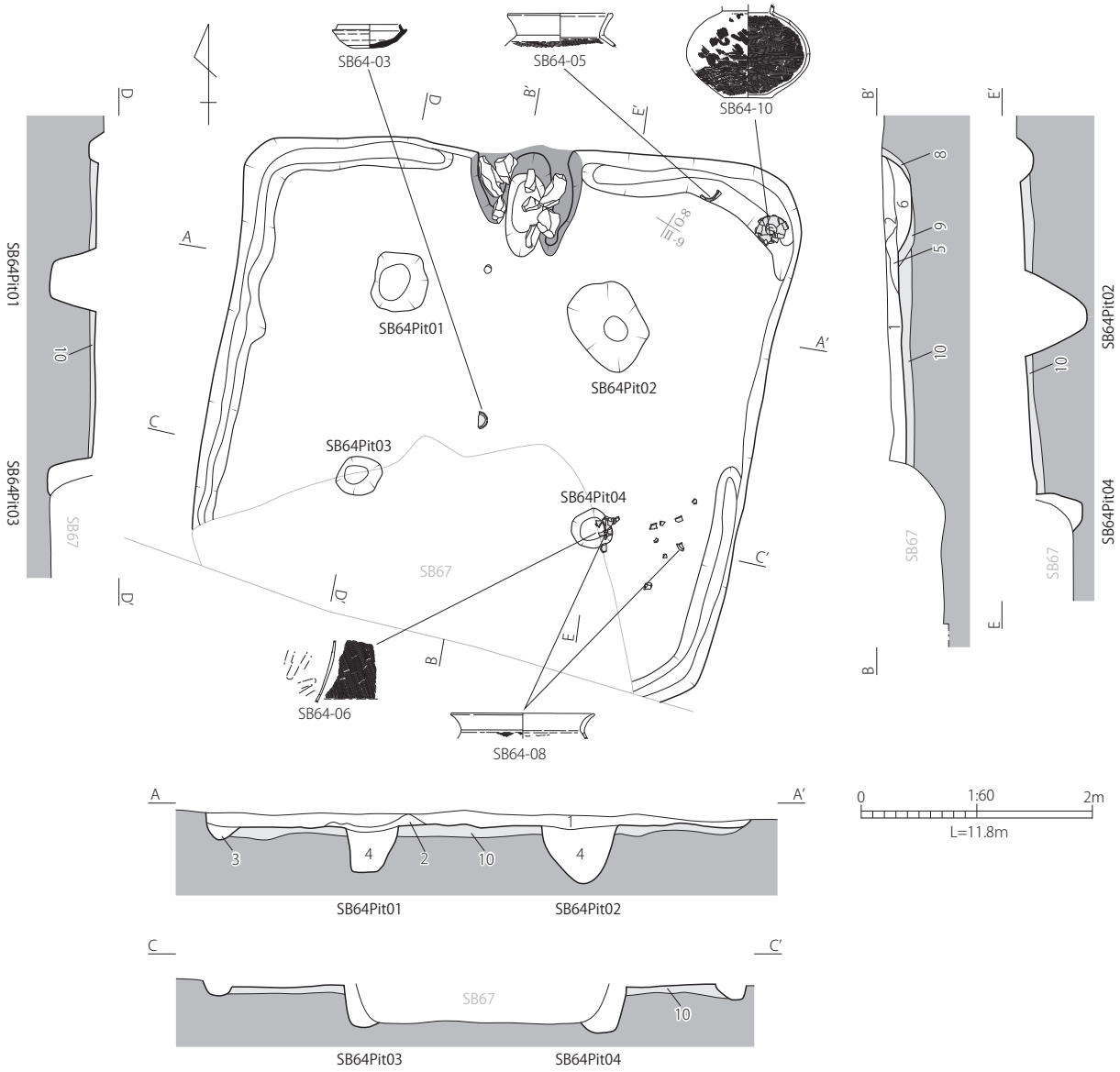
カマド　北壁中央。比較的良好な状態で検出される。両袖には芯材となる石材が検出され、燃焼室内には支脚石が残存する。規模は全長 90cm、幅 96cm、燃焼室幅 34cm を測る。

出土遺物（第 161 図）

1 ～ 3 は須恵器である。1・2 は坏蓋で、ともに口唇部は内傾面を有し、頂部と口縁部の境界には突帯状の稜を有するが、1 の方がより鋭い。1 は残存率が 20% 弱ではあるが、印象としては器径（最大径）が 14cm 前後の大型品になるとみられる。1・2 は 6 世紀前半の混入品とみられる。床面出土の 3 は器径が 12.9cm を測る坏身であり、口縁部の立ち上がりは内傾して短く、端部は丸く収めている。遠江Ⅲ期後葉相当と考えられる。4 ～ 9 は土師器で、4 は須恵器坏蓋模倣の坏である。口縁部と体部の境界の稜は鋭く、内外面には密にヘラケズリが施される。5 ～ 9 は甕である。5 はくの字形の口縁部を有し、口唇部はわずかに肥厚させている。7 は球胴化が進んだ甕の底部である。8 の長胴甕は外反する口縁部にあまり張らない肩部が接続する形態とみられる。出土状況や胎土の特徴から 8 は 6 に伴う蓋然性が高く、8 世紀中葉以降の混入品と考えられる。9 は楕円形の体部を有する甕とみられ、3 や 5 の時期とも比較

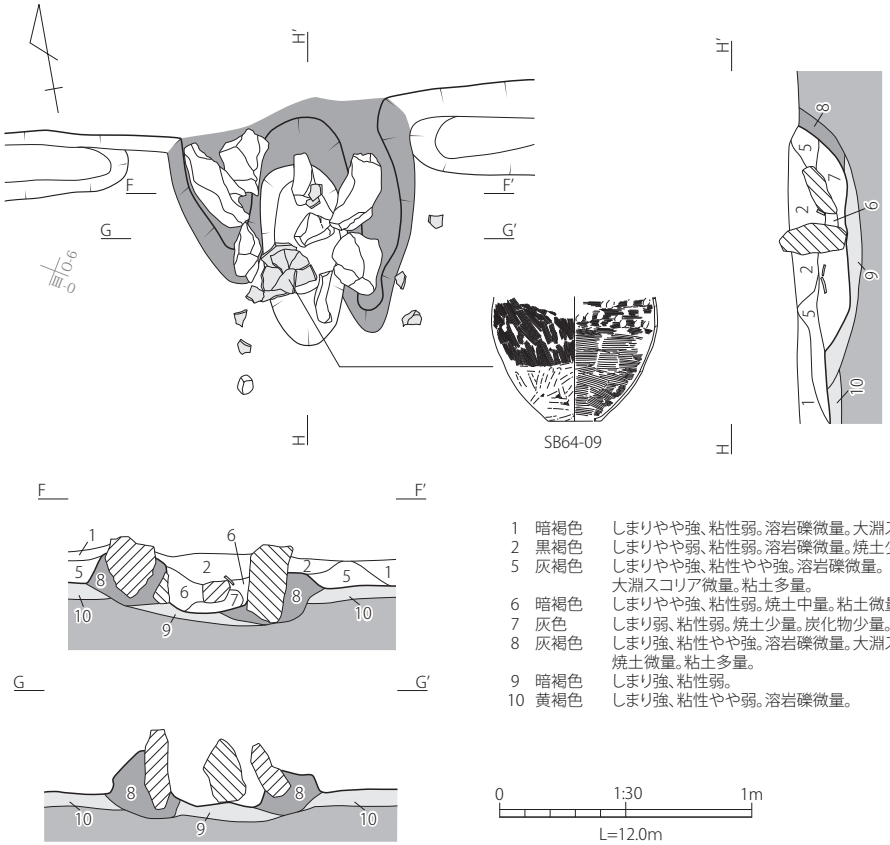
的合致する。10 は平底で下膨れ気味の体部とほぼ垂直に立ち上がる頸部を有し、口縁部が欠損する。当該期ではあまり類例のない形態ではあるが、壺と判断した。体部外面はハケ後に密なヘラミガキによって仕上げられており、全体的な調整は定型化後の球胴甕と類似する。肩部外面は摩耗が著しく、本来はミガキがあった可能性も十分にあり得る。

時期　切り合い関係とカマドや床面出土の 3・5・9・10 を重視すれば、沢東 I 期（6 世紀末～ 7 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



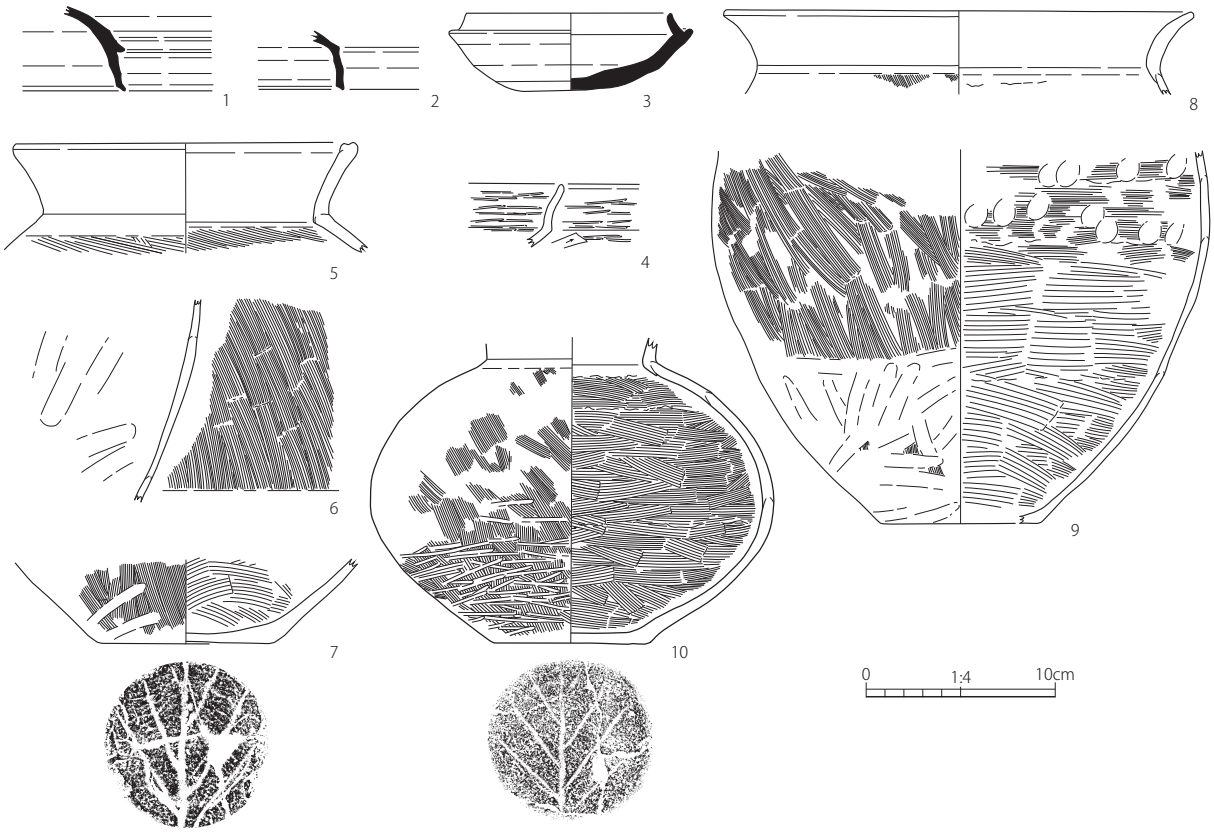
1	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。	SB64覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。焼土少量。粘土微量。	SB64覆土
3	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。	SB64覆土
4	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大渕スコリア微量。	SB64Pit覆土
5	灰褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。粘土多量。	SB64カマド崩落土
6	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土中量。粘土微量。	SB64カマド燃焼室
7	灰色	しまり弱、粘性弱。焼土少量。炭化物少量。粘土少量。	SB64カマド燃焼室
8	灰褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア少量。焼土微量。粘土多量。	SB64カマド袖
9	暗褐色	しまり強、粘性弱。	SB64カマド掘方
10	黄褐色	しまり強、粘性やや弱。溶岩礫微量。	SB64掘方埋土

第 159 図　SB64　平面図・断面図



1	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。	SB64覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。焼土少量。粘土微量。	SB64覆土
5	灰褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。粘土多量。	SB64カマド崩落土
6	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土中量。粘土微量。	SB64カマド燃焼室
7	灰色	しまり弱、粘性弱。焼土少量。炭化物少量。粘土少量。	SB64カマド燃焼室
8	灰褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア少量。焼土微量。粘土多量。	SB64カマド袖
9	暗褐色	しまり強、粘性弱。	SB64カマド掘方
10	黄褐色	しまり強、粘性やや弱。溶岩礫微量。	SB64掘方埋土

第 160 図　SB64　カマド平面図・断面図



第 161 図　SB64　出土遺物実測図

SB65

遺構（第 162・163 図）

位置　O- Ⅱ、O- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB65 → SB64 → SB67（新）

主軸方位　N-87.5° -W

残存状況　建物跡の大半は重複する遺構（SB64、SB67）に削平されていて西壁と北壁周辺のみ検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（東西）5.28m、直交（南北）5.10m、深さ 10cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含まない暗褐色土。

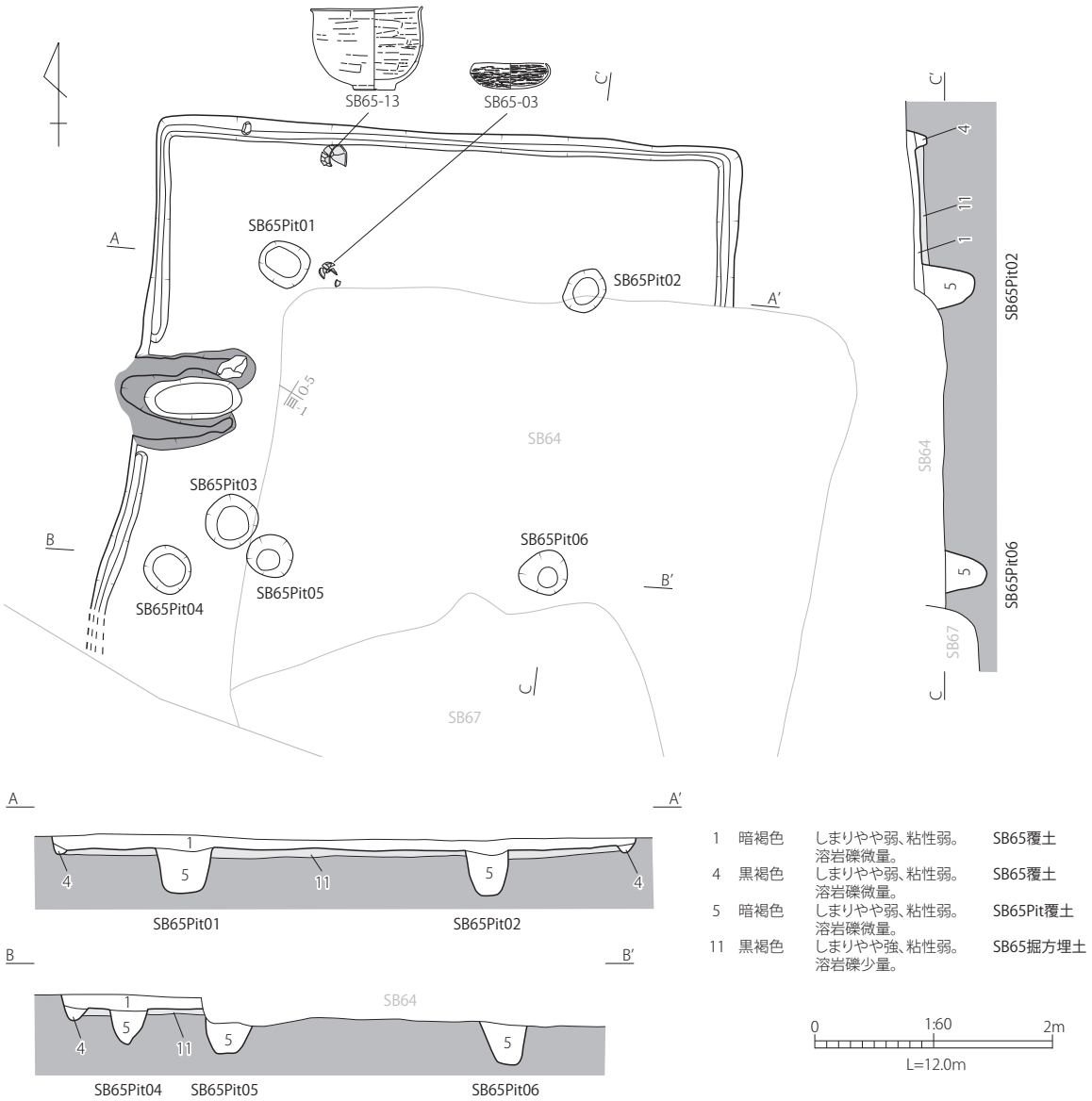
壁溝　幅 16cm、深さ 10cm の壁溝が検出範囲全体に施されている。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

柱穴　6 基のピットが検出され、その内 4 基は主柱穴と考えられる（SB65Pit01、SB65Pit02、SB65Pit05、SB65Pit06）。規模は長軸 39 ～ 44cm、短軸 32 ～ 44cm、床面からの深さは 21 ～ 35cm を測る。

その他の遺構　確認されない。

カマド　西壁中央。比較的良好な状態で検出される。右袖には芯材となる石材が検出され、燃焼室内には支脚石が残存する。全長 101cm、幅 82cm、燃焼室幅 36cm を測る。

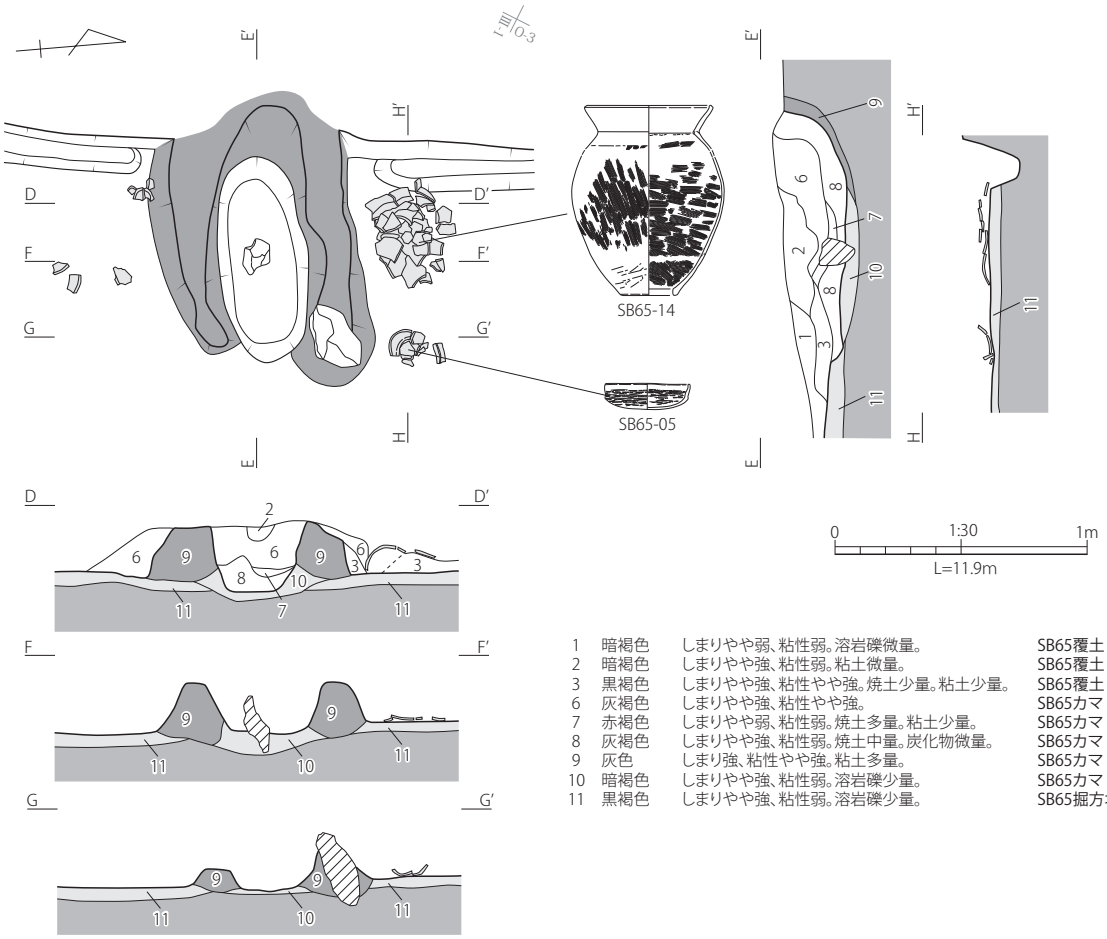


第 162 図　SB65　平面図・断面図

出土遺物（第 164 図）

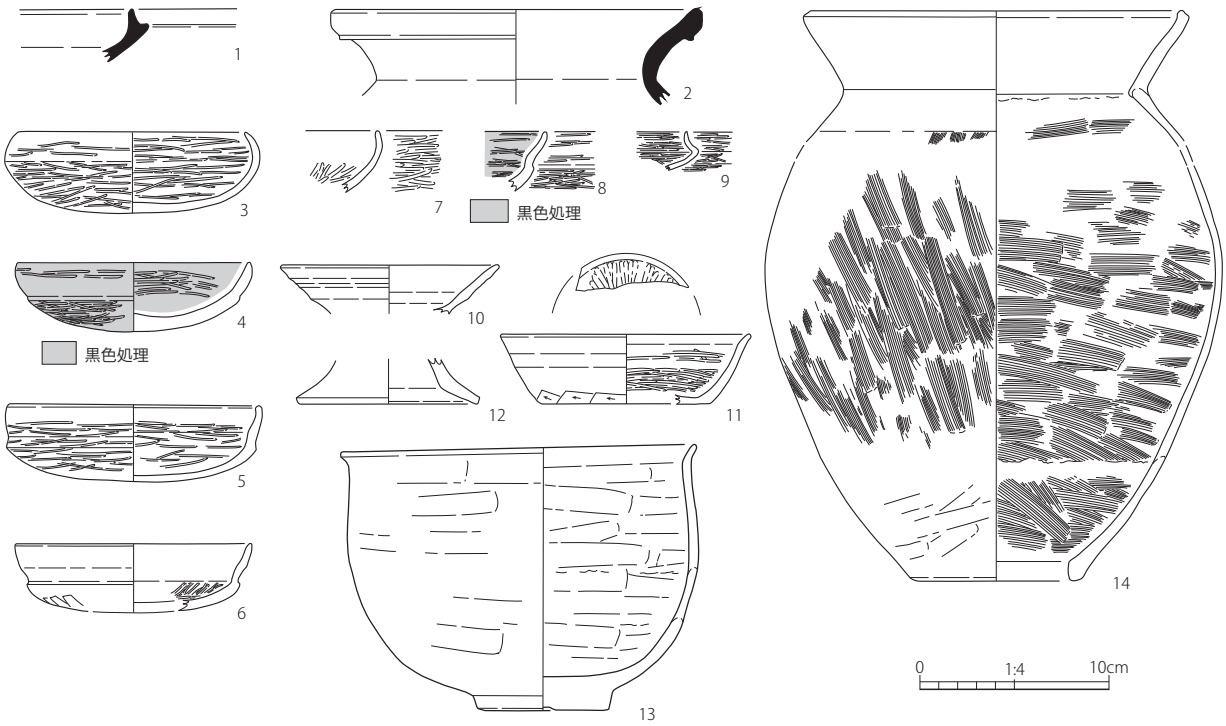
1・2 は須恵器で、1 は須恵器の坏身である。受け部の立ち上がりは低いものの、端部内面には緩い稜線がめぐる。2 は広口短頸壺で、内部のみ酸化焔気味の焼成であり、断面色調が暗赤褐色を呈する。口縁部外面の肥厚帯は下端部が鋭く形作られている。3 ～ 14 は土師器で、3・7 は体部から口縁部が内湾する形態の坏である。体部外面はヘラケズリ後に密なヘラミガキが施される。4 ～ 6・8 は須恵器坏蓋模倣の坏であり、4・8 は口縁部が内湾する形態で、黒色処理されるものである。9 は須恵器坏身模倣の坏で、内外面ともに密なヘラミガキが施されている。10 はロクロ成形の坏、11 はいわゆる駿東型坏で、器高に対して底径の大きい特徴から、奈良時代のものである。12 は高坏の脚部である。10・12 は平安時代の混入品とみられる。13 はあまり類例のない形態であるが、鉢とした。厚さ 1.0cm 程の底部と短く外反する口縁部が特徴であり、内外面ともに板ナデによって仕上げられている。厚みのある底部の特徴から古墳時代初頭以前のものである可能性も想定されるが、床面出土である点を重視し、本建物に伴う時期のものと考えておきたい。14 は大きく孔の開いた底部の形状から甑としているが、くの字形の口縁部や楕円形の体部の特徴は、通有の甕と変わらない。口縁端部はわずかに上方に摘み上げられた形態となっている。

時期　切り合い関係とカマドや床面周辺出土の 3・5・7・13・14 などを重視し、1・2・4・6・8・9 をその共伴と考えれば、安久Ⅳ期（6 世紀後半頃）の建物跡と考えられる。



1	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。	SB65覆土
2	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。粘土微量。	SB65覆土
3	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土少量。粘土少量。	SB65覆土
6	灰褐色	しまりやや強、粘性やや強。	SB65カマド崩落土
7	赤褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土多量。粘土少量。	SB65カマド燃焼室
8	灰褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土中量。炭化物微量。	SB65カマド燃焼室
9	灰色	しまり強、粘性やや強。粘土多量。	SB65カマド袖
10	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。	SB65カマド掘方
11	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。	SB65掘方埋土

第 163 図　SB65　カマド平面図・断面図



第 164 図　SB65　出土遺物実測図

SB66

遺構（第 165・166 図）

位置　N- Ⅲ、O- Ⅲグリッド

重複関係　なし

主軸方位　N-23.0° -W

残存状況　南側は調査区域外となる。平面形は方形を呈し、規模は主軸（南北）4.35m、直交（東西）4.20m、深さ 12cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　幅 22cm、深さ 8cm の壁溝が検出されるが、北壁には施されていない。

床　厚さ 9cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

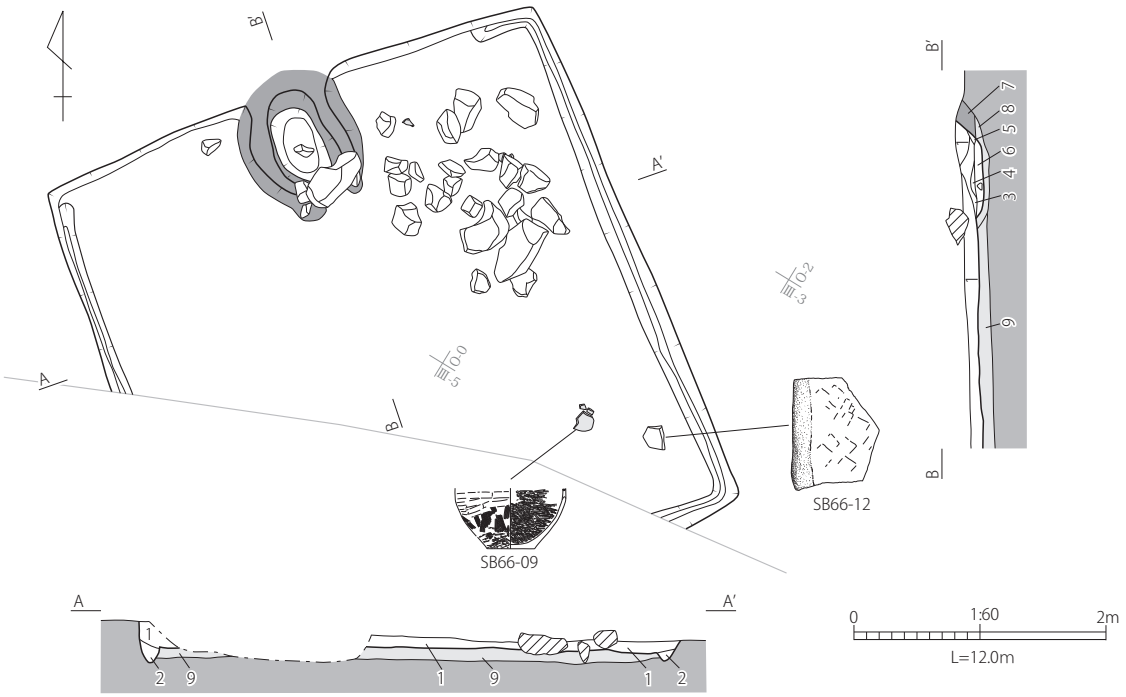
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。比較的良好な状態で検出される。焚口では両袖端部に配置された石材に扁平な石材が高架された状態が検出される。燃焼室内には支脚石が残存する。規模は全長 75cm、幅 94cm、燃焼室幅 36cm を測る。

出土遺物（第 167 図）

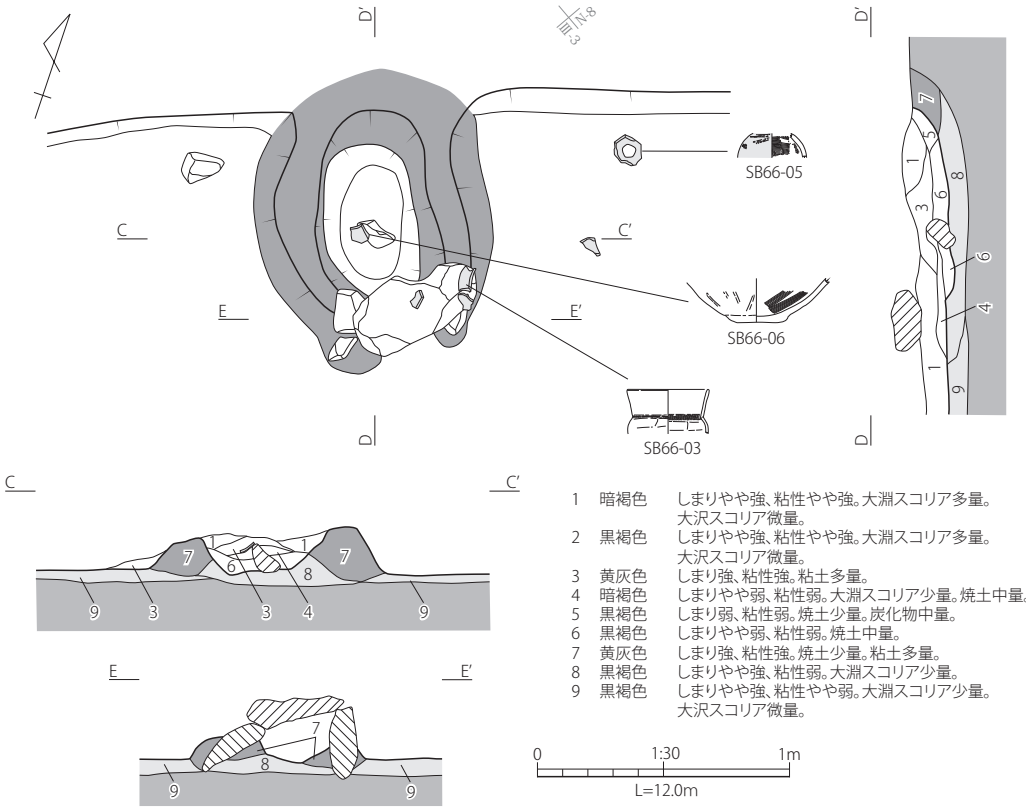
1・2 は須恵器の甕で、1 は頸部外面を突帯状の 2 条の稜線によって上下に区画するものであり、上段には波状文が施される。2 は体部片であり、外面は平行タタキ、内面は同心円文の当て具痕が残る。3 ～ 11 は土師器である。3・5 は小型壺で、3 は上方に立ち上がる口縁部と丸形の体部を有し、底部は平底になるものと推定される。外面は板ナデによって仕上げられている。5 は口縁部が外側に開く形態の小型壺であり、外面に赤彩がみとめられる。4 は高坏あるいは壺の口縁部片である。6 は甕あるいは壺の底部片であり、底部には木葉痕が残る。7・8 は高坏で、7 はハケ後にヘラナデ、8 はミガキによって仕上げられている。9 は壺とみられ、平底で内面にミガキ、外面にヘラナデやミガキが施される。底部には木葉痕が残る。10・11 は甕の底部片であり、いずれも木葉痕が残る。12 は砂岩製の砥石である。

時期　破片資料が多く根拠に欠けるものの、カマドや床面周辺出土の 3・5・6・9 などを重視し、7・8 をその共伴と考えれば、安久Ⅱ期（5 世紀末頃）の建物跡と考えられる。



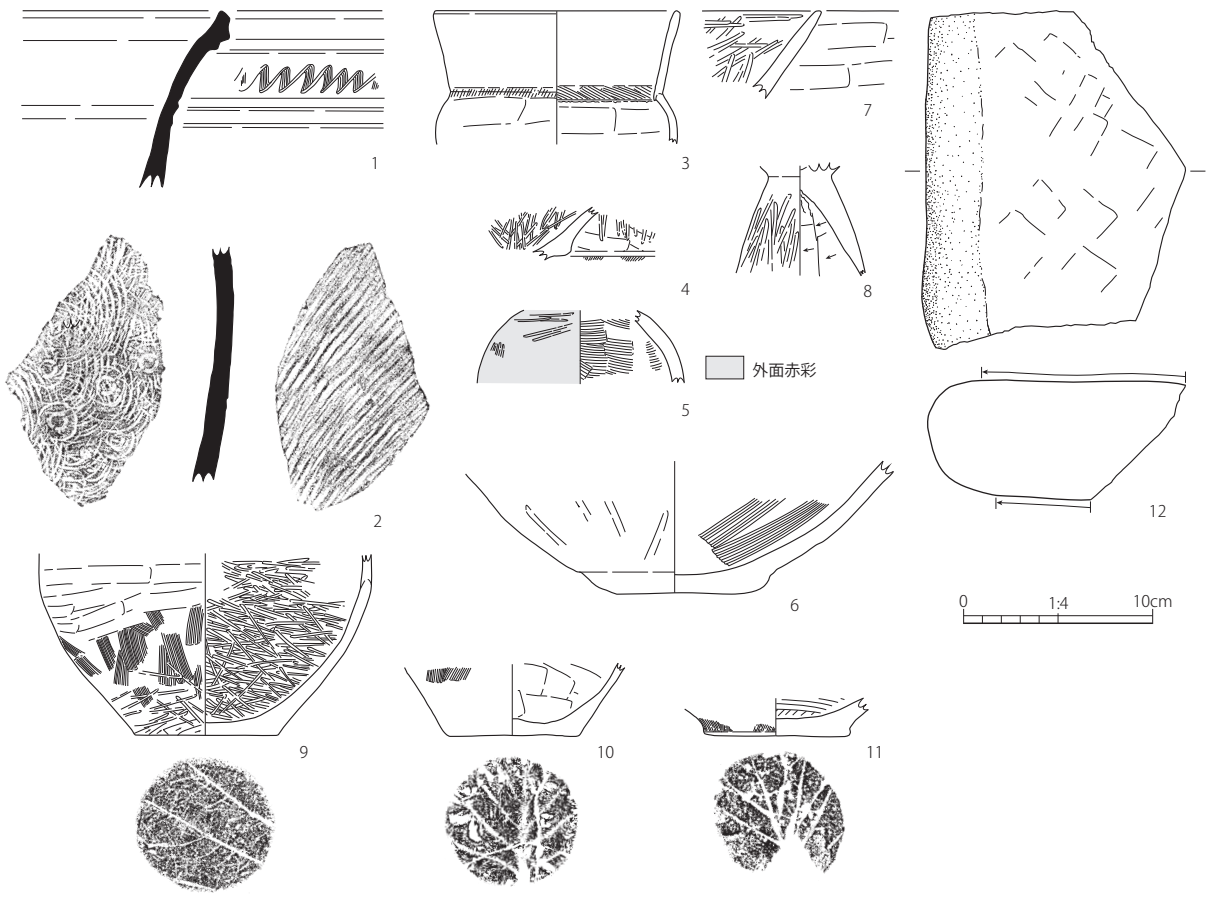
1	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア多量。大沢スコリア微量。	SB66覆土
2	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア多量。大沢スコリア微量。	SB66覆土
3	黄灰色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB66カマド崩落土
4	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。大淵スコリア少量。焼土中量。	SB66カマド燃焼室
5	黒褐色	しまり弱、粘性弱。焼土少量。炭化物中量。	SB66カマド煙道
6	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土中量。	SB66カマド燃焼室
7	黄灰色	しまり強、粘性強。焼土少量。粘土多量。	SB66カマド袖
8	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。大淵スコリア少量。	SB66カマド掘方
9	黒褐色	しまりやや強、粘性やや弱。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB66掘方埋土

第 165 図　SB66　平面図・断面図



1	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア多量。大沢スコリア微量。	SB66覆土
2	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア多量。大沢スコリア微量。	SB66覆土
3	黄灰色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB66カマド崩落土
4	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。大淵スコリア少量。焼土中量。	SB66カマド燃焼室
5	黒褐色	しまり弱、粘性弱。焼土少量。炭化物中量。	SB66カマド煙道
6	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土中量。	SB66カマド燃焼室
7	黄灰色	しまり強、粘性強。焼土少量。粘土多量。	SB66カマド袖
8	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。大淵スコリア少量。	SB66カマド掘方
9	黒褐色	しまりやや強、粘性やや弱。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB66掘方埋土

第 166 図　SB66　カマド平面図・断面図



第 167 図　SB66　出土遺物実測図

SB67

遺構（第 168・169 図）

位置　O- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB65 → SB64 → SB67（新）

主軸方位　N-15.0° -W

残存状況　南側は調査区域外となる。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.46m、直交（東西）3.43m、深さ 22cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

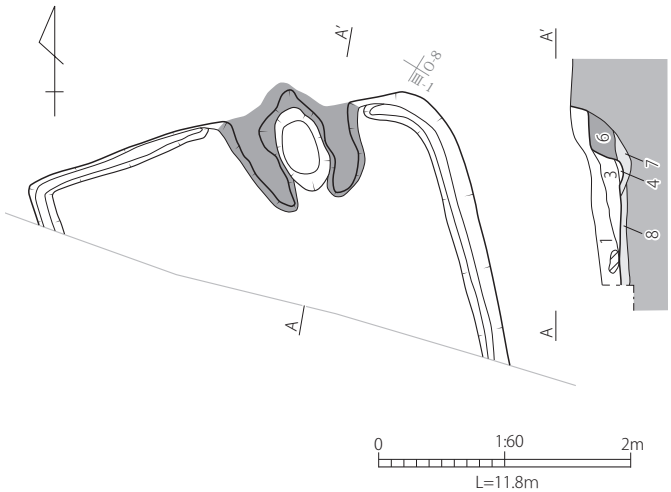
壁溝　幅 23cm、深さ 8cm の壁溝が検出範囲内全体に施される。

床　厚さ 8cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

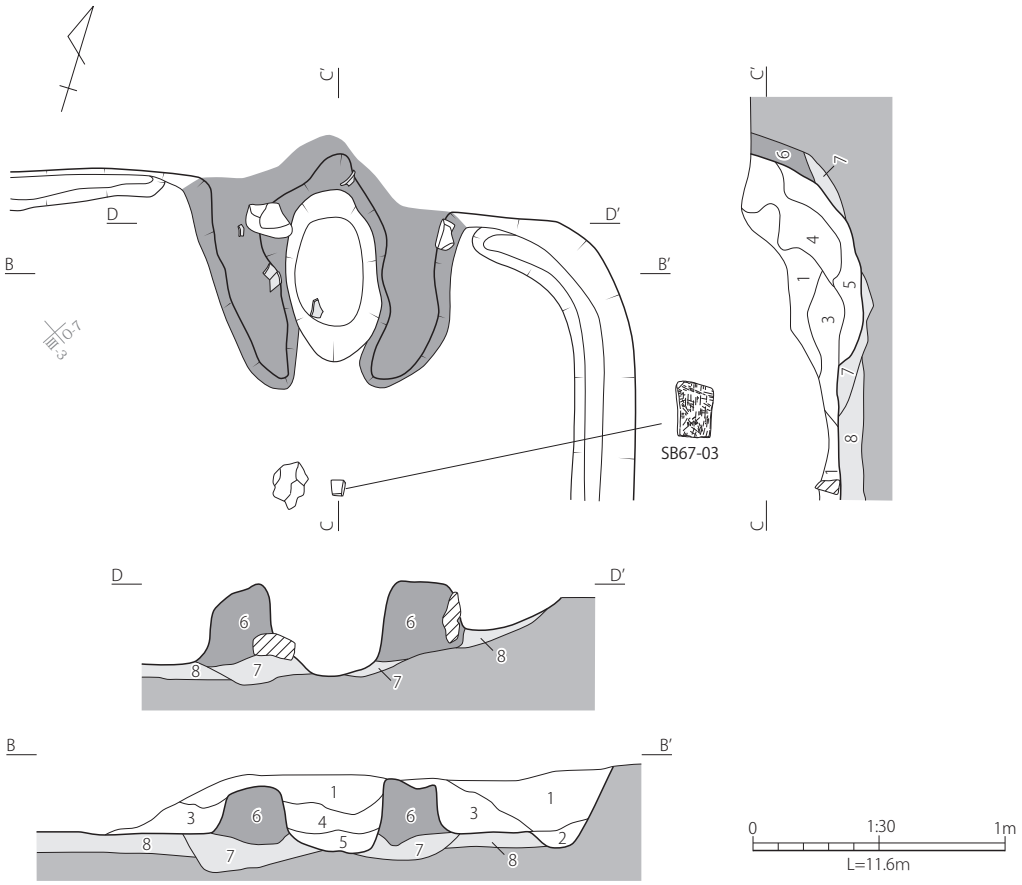
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁東寄り。比較的良好な状態で検出され、両袖奥部には芯材となる石材が残存する。規模は全長 84cm、幅 97cm、燃焼室幅 42cm を測る。



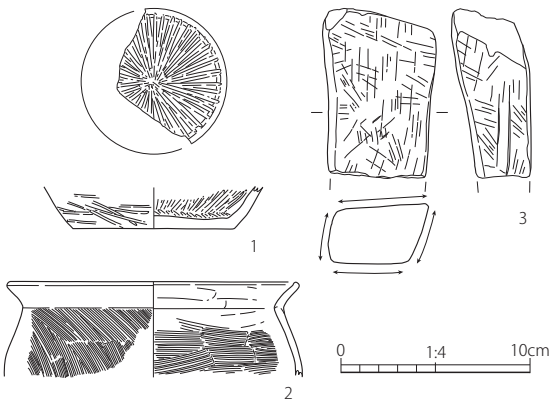
1	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア中量。	SB67覆土
3	黄褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土微量。粘土多量。	SB67カマド崩落土
4	黄橙色	しまり強、粘性やや強。	SB67カマド燃焼室
6	黄褐色	しまり強、粘性やや強。	SB67カマド袖
7	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土少量。粘土少量。褐色砂混入。	SB67カマド掘方
8	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。粘土微量。褐色砂混入。	SB67掘方埋土

第 168 図　SB67　平面図・断面図



1	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア中量。	SB67覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。	SB67覆土
3	黄褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土微量。粘土多量。	SB67カマド崩落土
4	黄橙色	しまり強、粘性やや強。	SB67カマド燃焼室
5	赤褐色	しまりやや強、粘性強。	SB67カマド燃焼室
6	黄褐色	しまり強、粘性やや強。	SB67カマド袖
7	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土少量。粘土少量。褐色砂混入。	SB67カマド掘方
8	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。粘土微量。褐色砂混入。	SB67掘方埋土

第 169 図　SB67　カマド平面図・断面図



第 170 図　SB67　出土遺物実測図

出土遺物（第 170 図）

1・2 は土師器である。1 は坏で、体部外面はヘラミガキ、見込み部から体部内面にかけて放射状ヘラミガキが施される。底部は手持ちヘラケズリによって仕上げられている。復原底径が 8.4cm とやや大きく、いわゆる駿東型坏のなかでも初期のものと推定される。2 はくの字形の口縁部を有する小型甕であり、口唇部はわずかに上方に摘み上げられる。3 は砂岩製の砥石である。右側面に鉄製品の刃部を研いだ際に生じたとみられる 2 条の擦痕が残る。

時期　カマド出土の 2 を重視し、1 をその共伴と考えれば、富士Ⅲ期（8 世紀後葉頃）の建物跡と考えられる。

SB68

遺構（第 171・172 図）

位置　N- I グリッド

重複関係（古）SB68 → SB53 → SB54（新）

主軸方位　N-10.5° -E

残存状況　覆土は浅く南側は重複する遺構（SB53、SB54）に削平されているため北壁の一部とカマド燃焼室の掘り込みのみ検出される。北壁が直線的であることから平面形は方形を呈するものと考えられ、規模は検出範囲内で主軸（南北）0.83m、直交（東西）1.30m を測る。

覆土　確認されない。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　カマドに隣接したピット（SB68Pit01）1 基を検出し、規模は長軸 39cm、短軸 27cm、床面からの深さ 8cm を測る。SB68Pit01 内からは 20cm 大の礫が検出される。

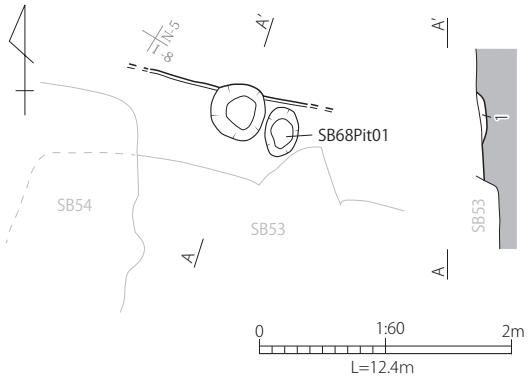
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁。燃焼室の掘り込みのみ検出され、規模は全長 40cm、燃焼室幅 44cm を測る。

出土遺物（第 173 図）

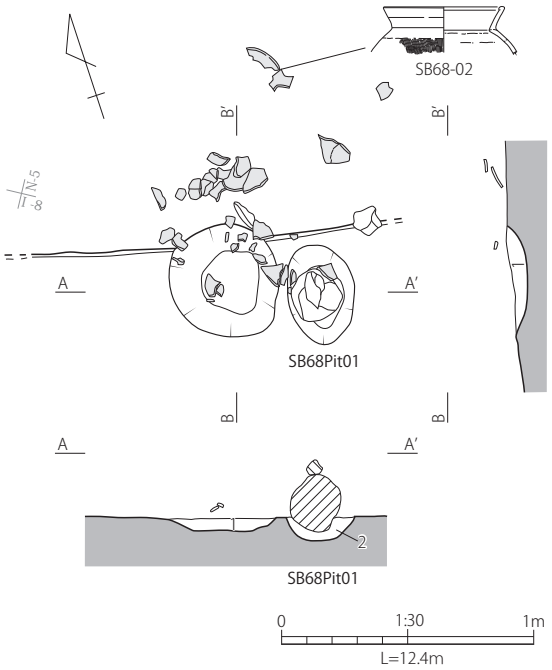
1・2 は土師器である。1 は坏で、体部内外面はヨコヘラミガキが施される。底部中央には板状工具によって余分な粘土を削り取った際に生じたハケメが残る。なお、1 はカマドから 1.8m 程北西から出土したものであり、本来的には SB68 に伴わない遺物と考えられる。2 はくの字形の口縁部を有する球胴甕であり、口唇部はわずかに肥厚される。

時期　カマド周辺出土の 2 を重視すれば、富士 I 期（8 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



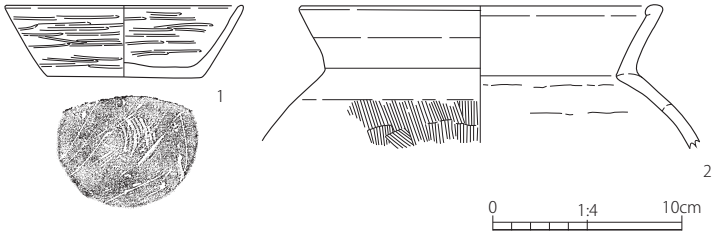
1　赤褐色　しまり強、粘性弱。焼土多量。　SB68カマド燃焼室

第 171 図　SB68　平面図・断面図



1　赤褐色　しまり強、粘性弱。焼土多量。　SB68カマド燃焼室
2　暗褐色　しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。　SB68Pit覆土

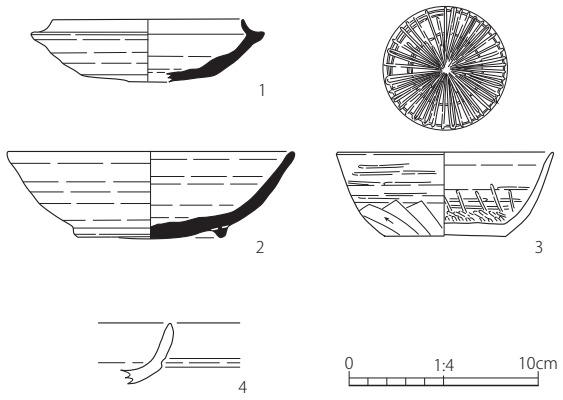
第 172 図　SB68　カマド平面図・断面図



第 173 図　SB68　出土遺物実測図

1	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB69覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB69覆土
3	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB69掘方埋土

第 174 図　SB69　平面図・断面図



第 175 図　SB69　出土遺物実測図

SB69

遺構（第 174 図）

位置　O- Ⅱ、P- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB69 → SB80 → SB78（新）

（古）SB69 → SB70 → SB64、SB71（新）

主軸方位　N-6.0° -E

残存状況　東側は調査区域外となり、また重複する遺構（SB64、SB70、SB71、SB78、SB80）により削平されているため、建物跡の北西コーナーから西側のみが検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）4.64m、直交（東西）3.44m、深さ 12cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　幅 27cm、深さ 9cm の壁溝が検出範囲内全体に施されている。

床　厚さ 9cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

出土遺物（第 175 図）

1・2 は須恵器の坏身である。1 は受け部の立ち上がりが低く、復原口径が 10.1cm（最大径 12.3cm）とやや小型化が進んだ段階のものであり、遠江Ⅲ期末葉に位置づけられる。2 は高台坏で、高台下端より 1mm 程突出する底部を有する。底部は回転ヘラケズリ調整である。見込み部に磨り痕がみとめられるが、転用硯かどうかは定かではない。3・4 は土師器で、3 は甲斐型坏である。体部外面下半部は手持ちヘラケズリ、上半部はヨコミガキ、見込み部は同心円文ヘラミガキ後、放射状ヘラミガキが体部下半まで施される。底部中央には板状工具によって余分な粘土を削り取った際に生じたハケメが残る。4 は須恵器坏蓋模倣の坏であり、口縁部と体部の境には緩い突帯状の稜がめぐる。

時期　詳細な遺物出土状況が不明であるが、切り合い関係から 1・4 を重視すれば、沢東Ⅰ期（6 世紀末～ 7 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。

SB70

遺構（第 176 図）

位置　P- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB69 → SB70 → SB64、SB71（新）

主軸方位　N-6.0° -E

残存状況　東側及び南側は調査区域外となり、また重複する遺構（SB64、SB71）によって削平されているため、建物跡の北壁の一部のみが検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）3.24m、直交（東西）2.51m、深さ 21cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 12cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

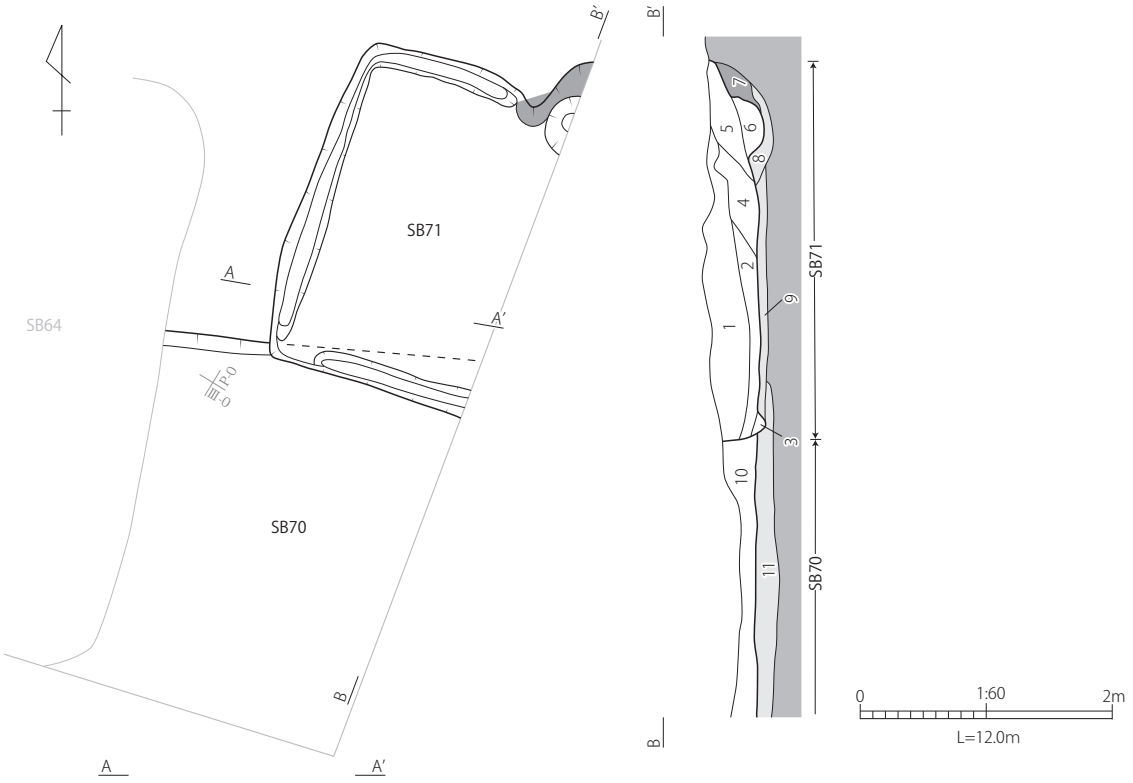
カマド　確認されない。

出土遺物（第 177 図）

1 は土師器の坏である。体部外面は回転ナデ調整、内面はヨコヘラミガキ調整が施される。体部外面に「万」と墨書される。平安時代（9 世紀頃）の混入遺物とみられる。

2 は鉄製刀子で、関は峰側が角関になるとみられるが、刃側は研ぎ減りが著しく、本来の形状は定かでない。

時期　詳細な遺物出土状況が不明であり、SB70 に確実に伴うと判断できるものはない。切り合い関係を重視すれば、沢東 I 期（6 世紀末～ 7 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



1	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB71覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。	SB71覆土
3	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB71覆土
4	灰色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。粘土多量。	SB71カマド崩落土
5	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB71カマド燃焼室
6	赤褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土多量。粘土中量。	SB71カマド燃焼室
7	灰褐色	しまりやや強、粘性やや強。粘土多量。	SB71カマド袖
8	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。	SB71カマド掘方
9	黒褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫微量。砂少量。	SB71掘方埋土
10	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫中量。大淵スコリア中量。大沢スコリア微量。	SB70覆土
11	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。	SB70掘方埋土

第 176 図　SB70・SB71　平面図・断面図

SB71

遺構（第 176 図）

位置　P- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB69 → SB70 → SB71（新）

主軸方位　N-16.5° -E

残存状況　東側は調査区域外となる。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.64m、直交（東西）1.96m、深さ 44cm を測る。

覆土　大洲スコリアを含む黒褐色土。

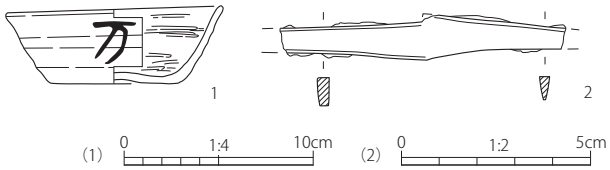
壁溝　幅 26cm、深さ 8cm の壁溝が検出範囲内全体に施されている。

床　厚さ 8cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁。東側は調査区域外となるため、左袖と燃焼室の一部のみ検出される。規模は検出範囲内で全長 79cm、幅 47cm、燃焼室幅 19cm を測る。

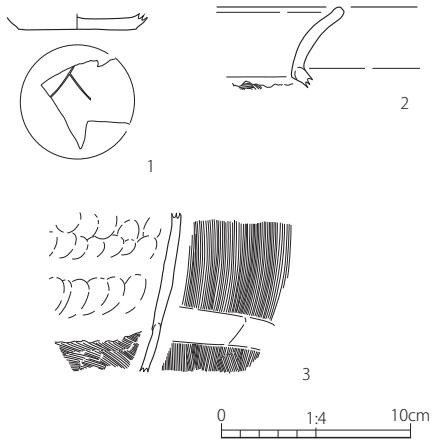


第 177 図　SB70　出土遺物実測図

出土遺物（第 178 図）

1 ～ 3 は土師器である。1 は坏で、底部に「人」とみられる刻書が残る。復原底径は 5.85cm を測り、底径の縮小化が進んだ段階の坏と判断される。2・3 は長胴甕で、2 は口唇部がわずかに上方に摘み上げられた形態をとる。

時期　カマド出土の 3 を重視し、1・2 をその共伴と考えれば、富士Ⅴ期（9 世紀中葉頃）の建物跡と考えられる。



第 178 図　SB71　出土遺物実測図

SB72

遺構（第 179・180 図）

位置　N- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB53 → SB54 → SB72（新）

主軸方位　N-38.0° -E

残存状況　覆土が浅く建物跡の東側及び南側は削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.18m、直交（東西）2.88m、深さ 7cm を測る。

覆土　大洲スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

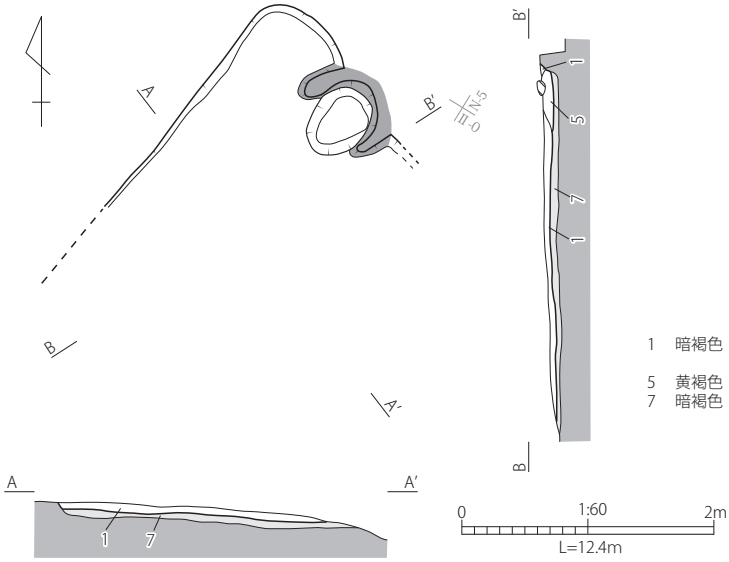
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁西寄り。比較的良好な状態で検出される。両袖端部には芯材となる石材が検出される。規模は全長 64cm、幅 77cm、燃焼室幅 46cm を測る。

出土遺物（第 181 図）

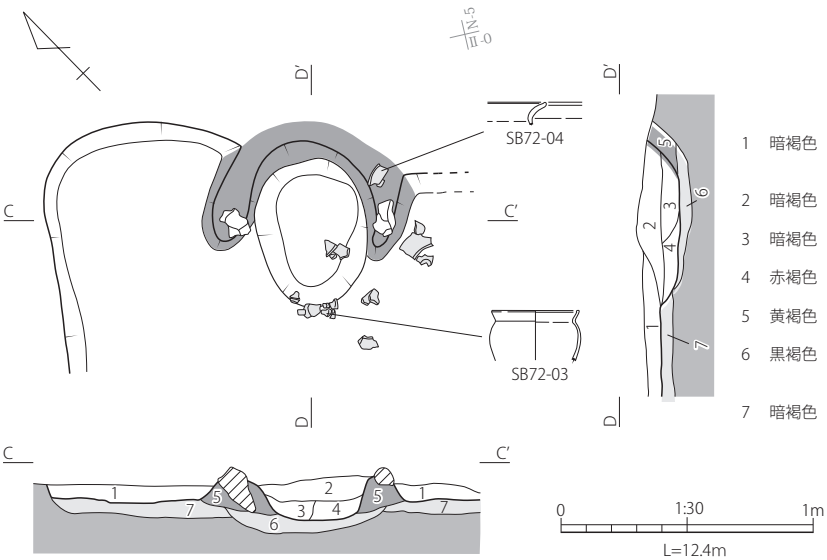
1 は須恵器の坏身である。受け部立ち上がりの端部は丸くおさめられる。2 ～ 6 は土師器である。2 は蓋とみられ、外面はハケ後回転ナデ、仕上げに波状暗文が施される。3 は小型甕で、くの字形の口縁部を有し、口唇部を丸く肥厚させている。外面調整は摩滅により不明瞭である。4 ～ 6 は甕で、4 は長胴甕、5 は球胴甕の口縁部である。1・5 は混入遺物とみられる。7 は鉄製紡錘車であり、鉄製の紡輪は直径 5.2cm を測る円形で、扁平な板状を呈する。紡茎は大部分を欠損し、断面形は方形とみられる。

時期　切り合い関係とカマド出土の 3・4 を重視すれば、富士Ⅳ期（9 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。



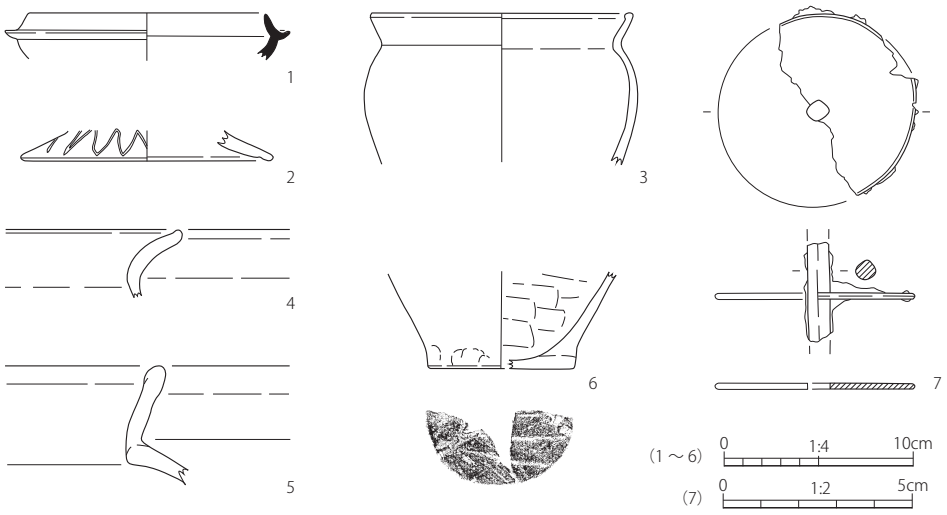
1	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB72覆土
5	黄褐色	しまり強、粘性強。焼土中量。粘土多量。	SB72カマド袖
7	暗褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB72掘方埋土

第 179 図　SB72　平面図・断面図



1	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB72覆土
2	暗褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。粘土多量。	SB72カマド崩落土
3	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫多量。焼土多量。	SB72カマド燃焼室
4	赤褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫多量。焼土多量。	SB72カマド燃焼室
5	黄褐色	しまり強、粘性強。焼土中量。粘土多量。	SB72カマド袖
6	黒褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB72カマド掘方
7	暗褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB72掘方埋土

第 180 図　SB72　カマド平面図・断面図



第 181 図　SB72　出土遺物実測図

SB73

遺構（第 182 図）

位置　N- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB73 → SB50、SB52（新）

主軸方位　不明

残存状況　覆土はなく床面のみが検出される。建物跡の壁も残存しないため平面形は不明である。ただし床面上からは炭化材、遺物、礫等が検出される。規模は検出範囲内で主軸（南北）4.90m、直交（東西）5.50m を測る。

覆土　確認されない。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

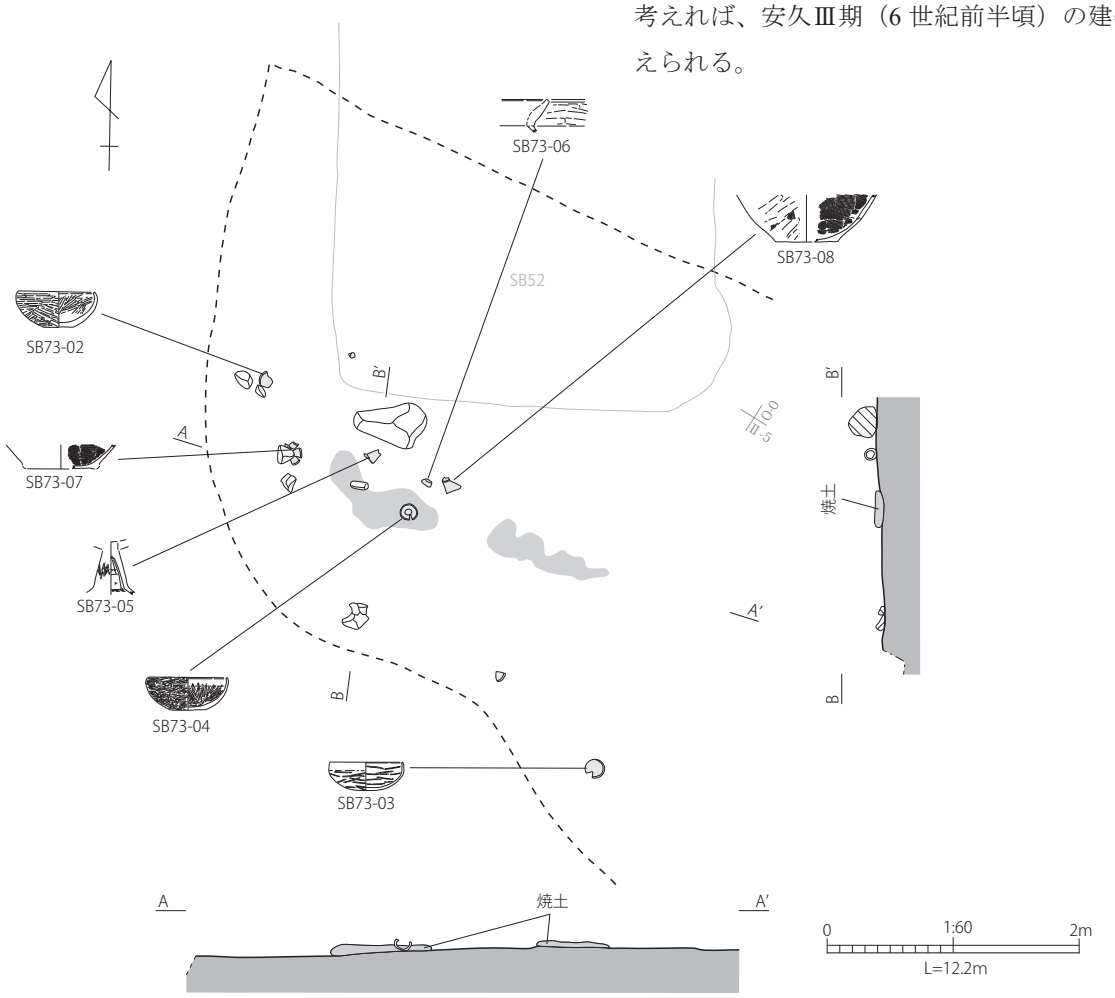
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

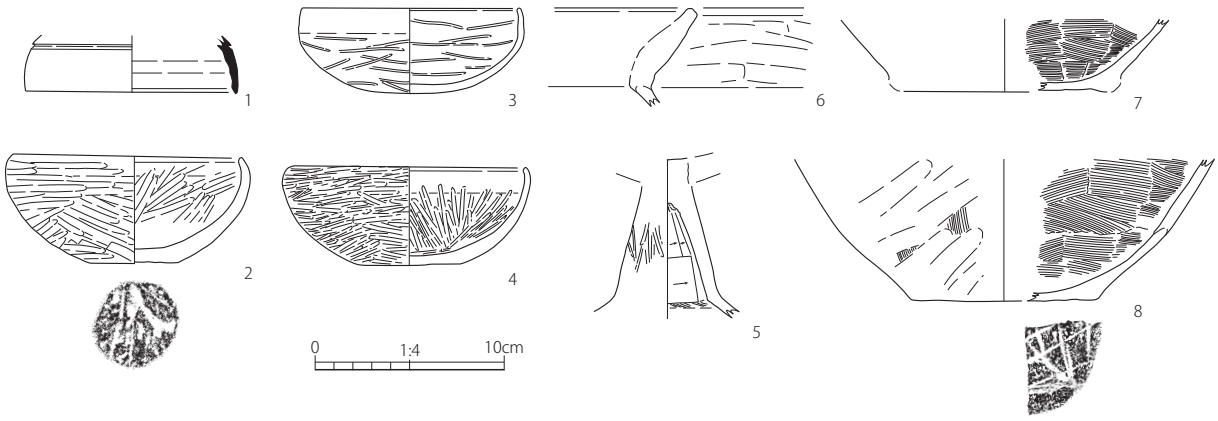
出土遺物（第 183 図）

1 は須恵器の坏蓋で、口縁部と頂部の境界には緩い突帯状の稜と凹線がめぐる。口唇部は端面を有する。2 ～ 8 は土師器で、2 ～ 4 は坏である。2・4 は体部から口縁部が内湾する形態の平底の坏であり、体部内外面にヘラミガキが施される。底部には木葉痕が残る。3 は須恵器坏蓋模倣の坏とみられるが、口縁部と体部の境界に稜はみられない。体部外面を手持ちヘラケズリ後、内外面を回転ナデ、さらに細いヘラミガキによって仕上げられる。特に内面は非常に円滑な作りとなっている。5 は高坏の脚部で、坏部が剥離する。脚部外面はヘラミガキ、内面は裾部のみハケ後にヨコナデによって整形される。6 ～ 8 は甕である。6 はくの字形の口縁部で、外面は板ナデによって仕上げられる。7・8 の底部には木葉痕が残る。

時期　床面出土の 2 ～ 8 を重視し、1 をその共伴と考えれば、安久Ⅲ期（6 世紀前半頃）の建物跡と考えられる。



第 182 図　SB73　平面図・断面図



第 183 図　SB73　出土遺物実測図

SB74

遺構（第 184 図）

位置　M-0、M- Ⅰグリッド

重複関係　（古）SB91 → SB74（新）

主軸方位　N-36.5° -E

残存状況　東側は調査区域外となり建物跡の南側は撹乱により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.83m、直交（東西）2.25m、深さ 21cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　幅 22cm、深さ 8cm の壁溝が検出範囲全体に施されている。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

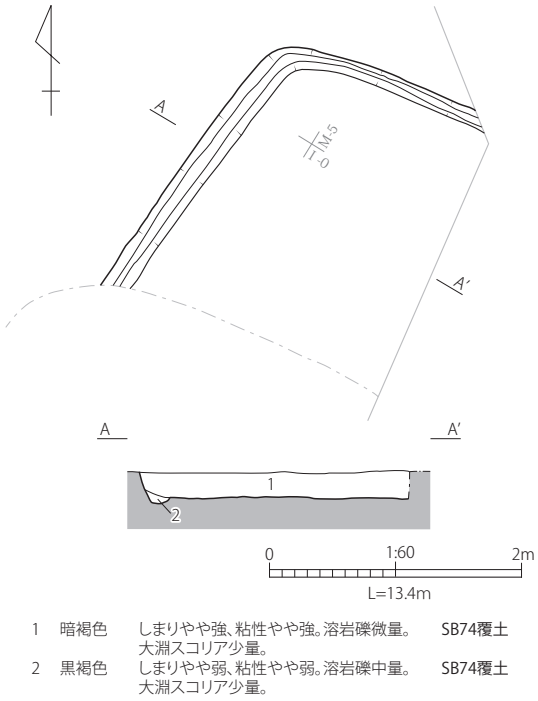
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

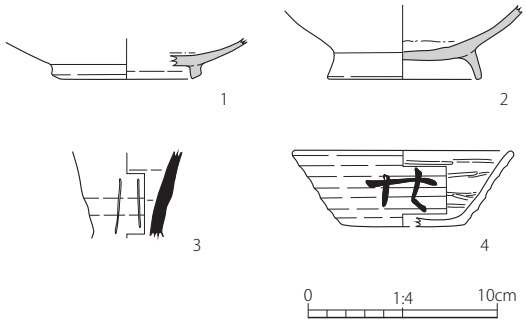
出土遺物（第 185 図）

1・2 は灰釉陶器の碗である。1 は角高台で、底部回転ヘラケズリ、体部内外面に灰釉が施される。2 は深碗とみられ、ハの字状に開く高い高台を有する。3 は須恵器瓶類の頸部であり、窯記号とみられる 2 条のヘラ描き線が残る。4 は土師器の坏で、ロクロ成形後、体部内面に粗いヨコミガキが施される。体部外面に「廿」とみられる墨書が残る。

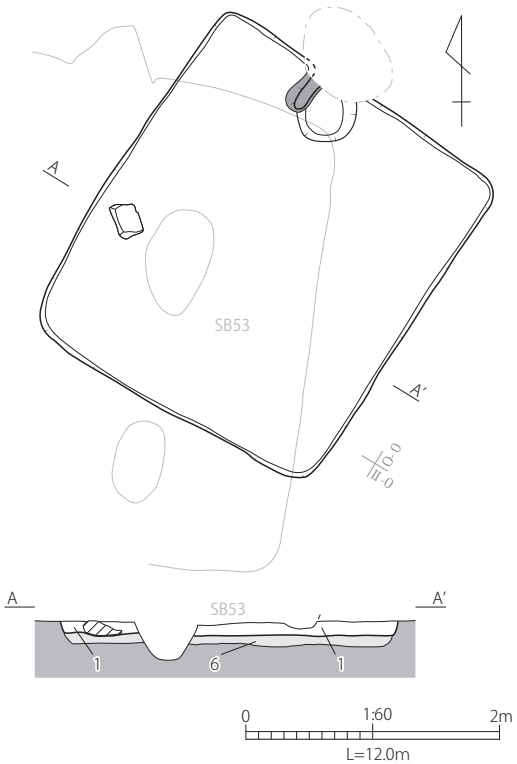
時期　いずれの遺物も出土状況が不明であるものの、残存率の高い 2・4 を重視すれば、富士Ⅵ～Ⅷ期（9 世紀後葉～ 10 世紀後半頃）のいずれかの時期の建物跡と考えられる。



第 184 図　SB74　平面図・断面図

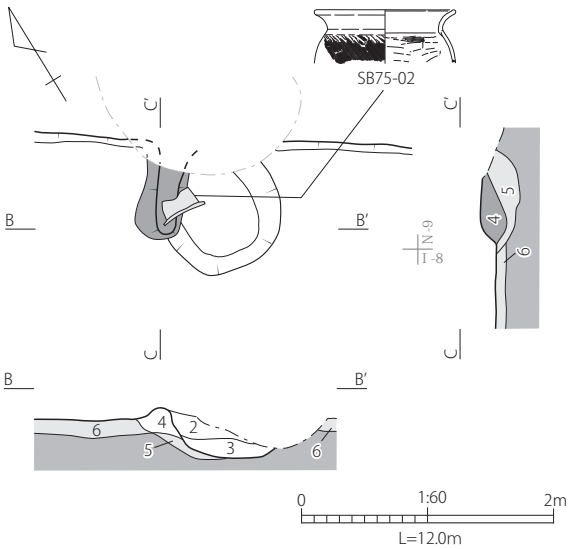


第 185 図　SB74　出土遺物実測図



1	黒褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SB75覆土
6	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量	SB75掘方埋土

第 186 図　SB75　平面図・断面図



2	黄褐色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB75カマド崩落土
3	黄橙色	しまりやや弱、粘性やや弱。焼土少量。粘土中量。	SB75カマド燃焼室
4	黄褐色	しまり強、粘性強。焼土少量。粘土多量。	SB75カマド袖
5	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。炭化物少量。粘土少量。	SB75カマド掘方
6	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB75掘方埋土

第 187 図　SB75　カマド平面図・断面図

SB75

遺構（第 186・187 図）

位置　N- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB75 → SB53 → SB58（新）

主軸方位　N-33.0° -E

残存状況　建物跡の南西部の上層が SB53 により削平されているものの、床面は全体的に検出される。平面形は方形を呈し、規模は主軸（南北）2.98m、直交（東西）2.64m、深さ 12cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 7cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

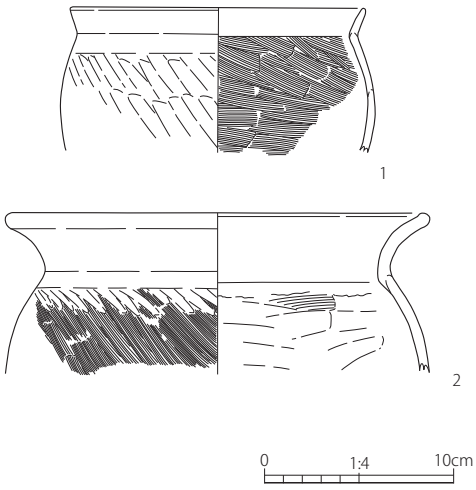
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁西寄り。撹乱によりカマドの北側及び右袖が削平されている。規模は検出範囲内で全長 39cm、幅 58cm、燃焼室幅 31cm を測る。

出土遺物（第 188 図）

1 は土師器の小型甕で、くの字形のやや短い口縁部を有するものである。体部外面はヘラナデ、内面はハケによって整形される。2 は土師器の甕であり、緩やかに外反する高さのある口縁部に、あまり肩が張らない体部が取り付く形態のものとみられる。在地の長胴甕のなかでも古相の特徴を有するものと判断される。

時期　切り合い関係とカマド出土の 2 を重視し、1 をその共伴と考えれば、富士Ⅱ期（8 世紀中葉頃）の建物跡と考えられる。



第 188 図　SB75　出土遺物実測図

SB76

遺構（第 189・190 図）

位置　L- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB88 → SB76 → SB92 → SB77（新）

主軸方位　N-12.5° -E

残存状況　建物跡の南側は SB77、SB92 により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.83m、直交（東西）4.34m、深さ 23cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　幅 18 ～ 40cm、深さ 16cm の壁溝が検出範囲全体に施されている。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

柱穴　主柱穴と考えられる 4 基のピットが検出される。規模は長軸 31 ～ 47cm、短軸 23 ～ 44cm、床面からの深さ 22 ～ 42cm を測る。

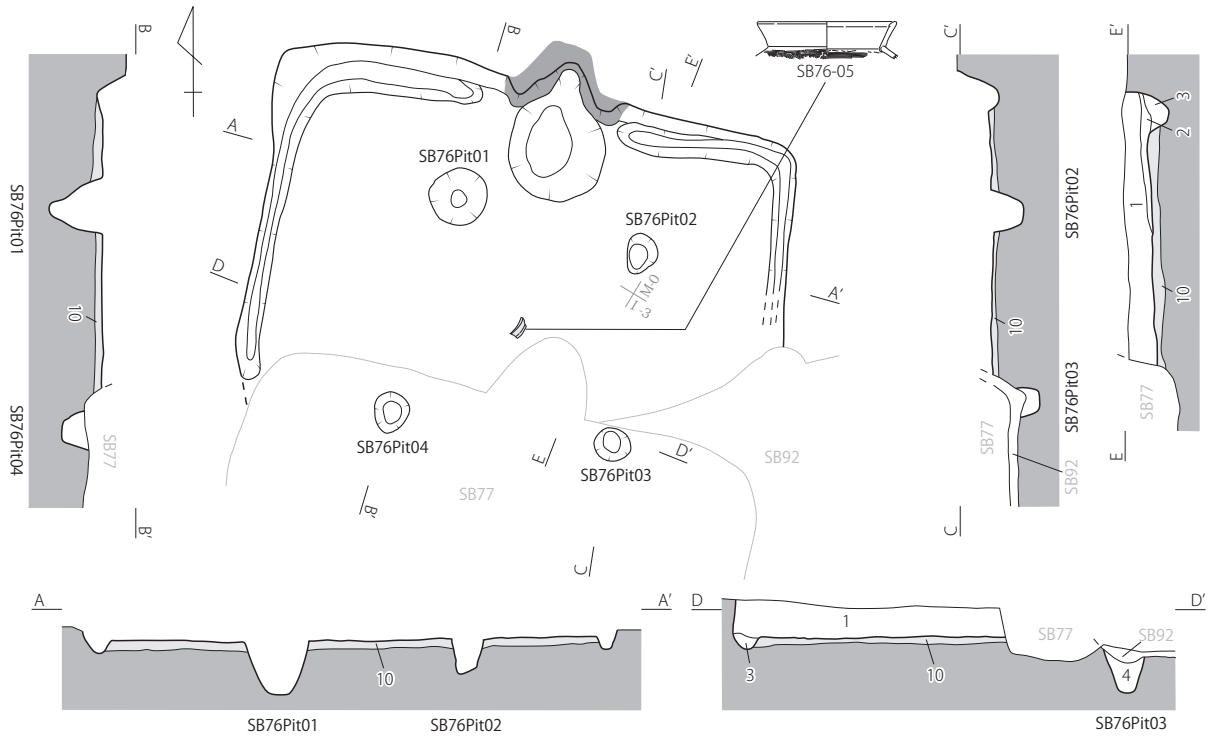
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。両袖とも失われて奥部のみが検出される。規模は全長 110cm、燃焼室幅 74cm を測る。

出土遺物（第 191 図）

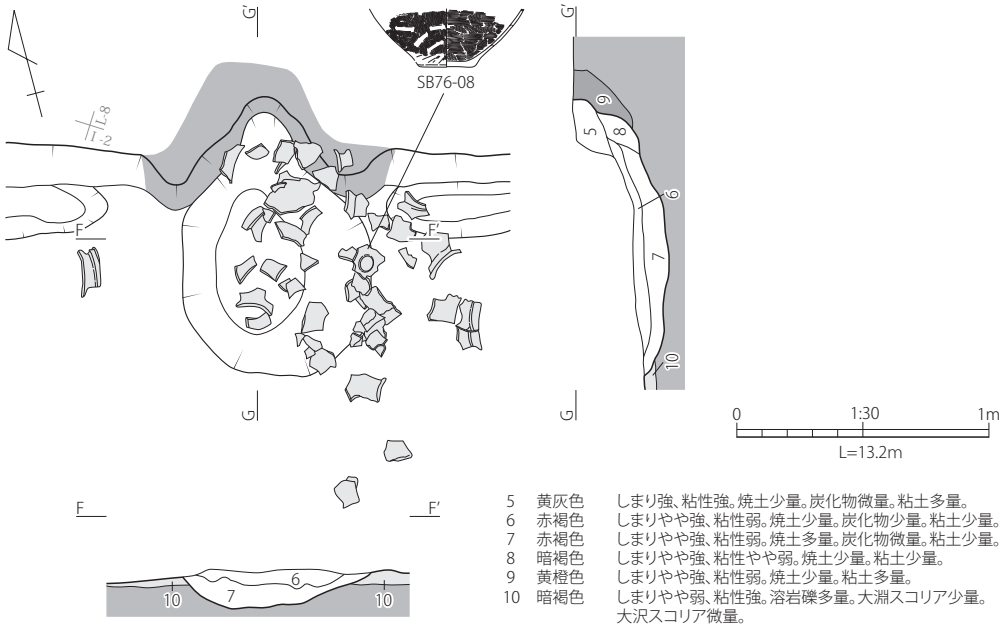
1・2 は土師器のロクロ成形坏で、ともに底部に回転糸切り痕が残る。3 は須恵器甕の口縁部で、内部のみ酸化焔気味の焼成であり、断面色調は暗褐色を呈する。以上の遺物は混入品とみられる。4 ～ 8 は土師器の球胴甕である。いずれも口唇部を肥厚させているが、体部外面にミガキはない。7 は体部外面を目の粗いハケ後、目の細かいハケによって仕上げられる。8 の底部には木葉痕が残る。9 は鉄鏃の頸部片で、頸部幅は 0.54cm を測る。

時期　切り合い関係とカマドや床面出土の 5・8 を重視し、4･6･7 をその共伴と考えれば、沢東Ⅱ期（7 世紀中葉～後葉頃）の建物跡と考えられる。



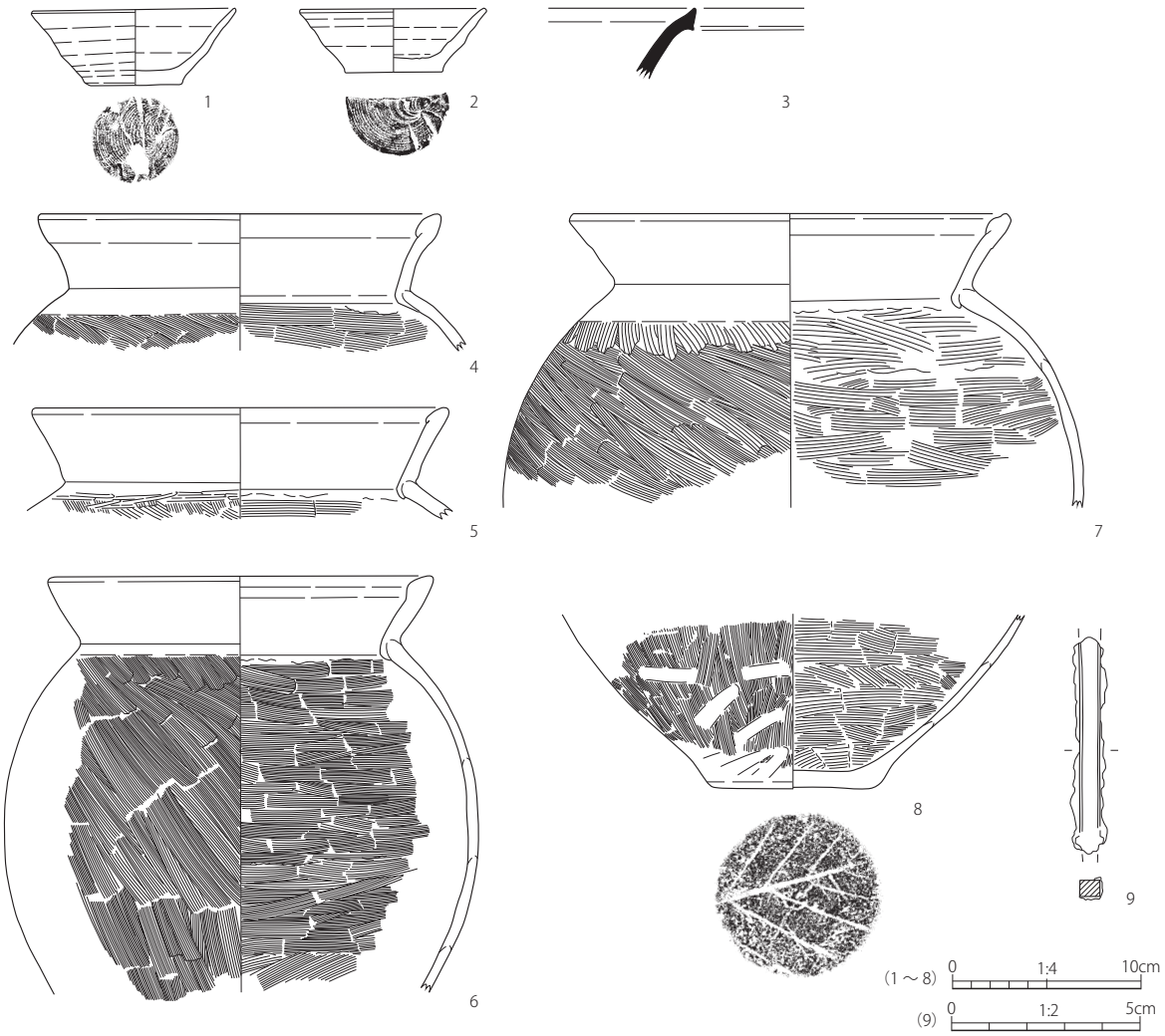
1　黒褐色　しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫多量。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。　SB76覆土
2　黒褐色　しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。粘土中量。　SB76覆土
3　黒褐色　しまり弱、粘性強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。　SB76覆土
4　黒褐色　しまりやや弱、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。　SB76Pit覆土
10　暗褐色　しまりやや弱、粘性強。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。　SB76掘方埋土

第 189 図　SB76　平面図・断面図



5	黄灰色	しまり強、粘性強。焼土少量。炭化物微量。粘土多量。	SB76崩落土
6	赤褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土少量。炭化物少量。粘土少量。	SB76燃焼室
7	赤褐色	しまりやや強、粘性弱。焼土多量。炭化物微量。粘土少量。	SB76燃焼室
8	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。焼土少量。粘土少量。	SB76燃焼室
9	黄橙色	しまりやや強、粘性弱。焼土少量。粘土多量。	SB76カマド袖
10	暗褐色	しまりやや弱、粘性強。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB76掘方埋土

第 190 図　SB76　カマド平面図・断面図



第 191 図　SB76　出土遺物実測図

SB77

遺構（第 192・193 図）

位置　L- Ⅰ、M- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB76 → SB92 → SB77（新）

主軸方位　N-12.0° -E

残存状況　比較的良好な状態で検出される。平面形は方形を呈し、規模は主軸（南北）4.30m、直交（東西）4.40m、深さ 25cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

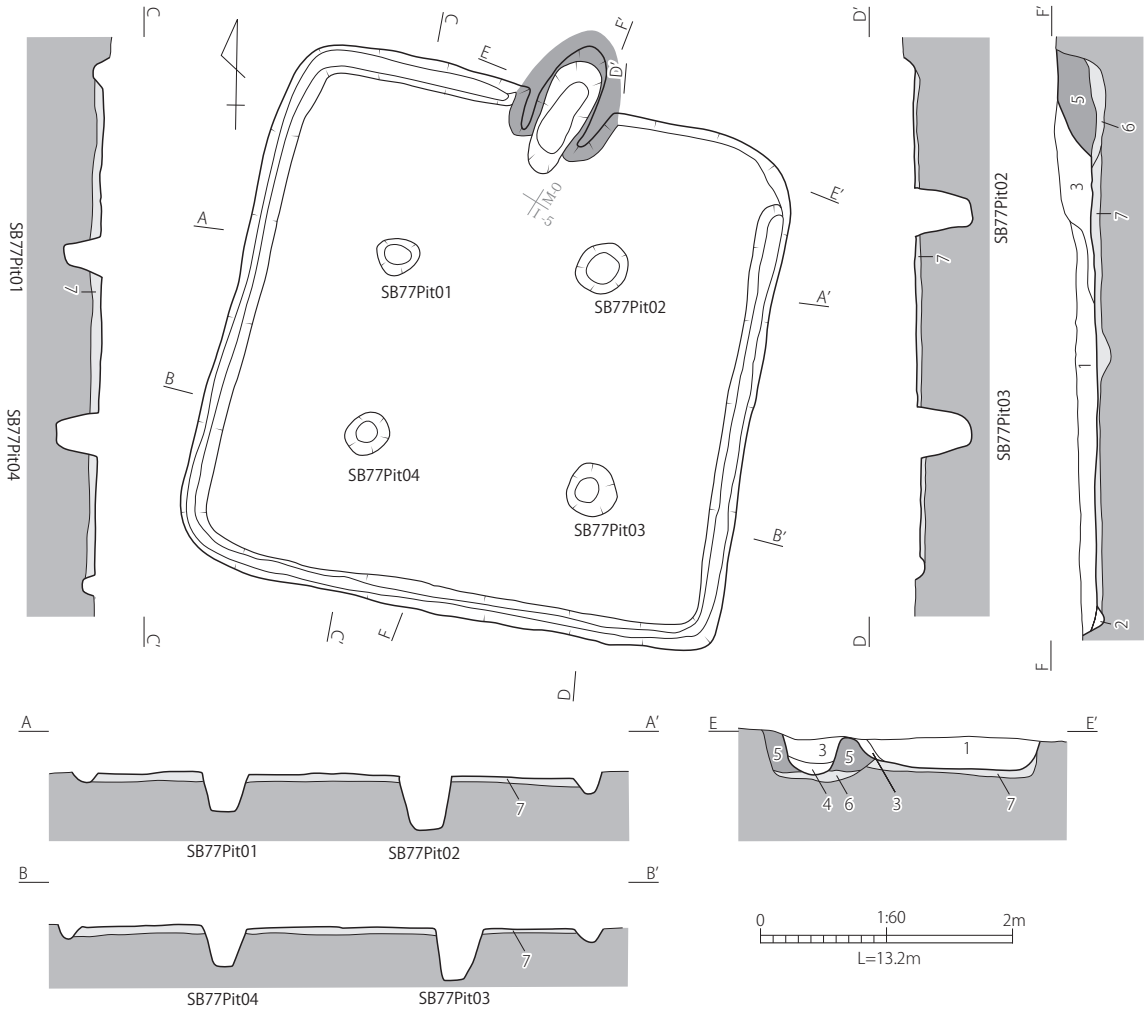
壁溝　幅 23cm、深さ 10cm の壁溝が北東部を除く部分に施されている。

床　厚さ 7cm の貼り床が施される。

柱穴　主柱穴と考えられる 4 基のピットが検出される。規模は長軸 32 ～ 42cm、短軸 31 ～ 40cm、床面からの深さ 32 ～ 46cm を測る。

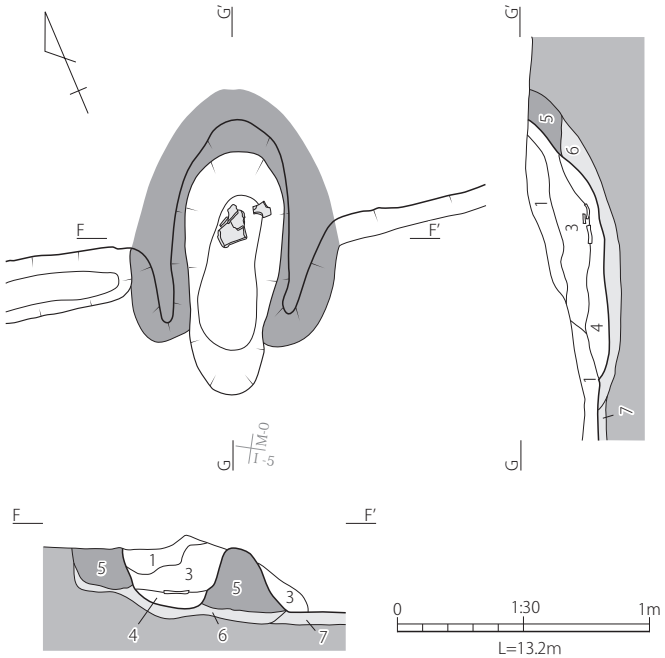
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁中央。比較的良好な状態で検出される。規模は全長 108cm、幅 86cm、燃焼室幅 38cm を測る。



1	黒褐色	しまりやや強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア中量。大沢スコリア中量。	SB77覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。焼土少量。粘土少量。	SB77覆土
3	黄灰色	しまりやや強、粘性やや強。焼土中量。粘土多量。黒色土少量。	SB77カマド崩落土
4	橙褐色	しまりやや弱、粘性やや強。焼土多量。粘土少量。	SB77カマド燃焼室
5	黄灰色	しまり強、粘性強。焼土多量。粘土中量。黒色土ブロック混入。	SB77カマド袖
6	黒褐色	しまり強、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB77カマド掘方
7	黒色	しまり強、粘性やや強。大淵スコリア中量。大沢スコリア中量。	SB77掘方埋土

第 192 図　SB77　平面図・断面図



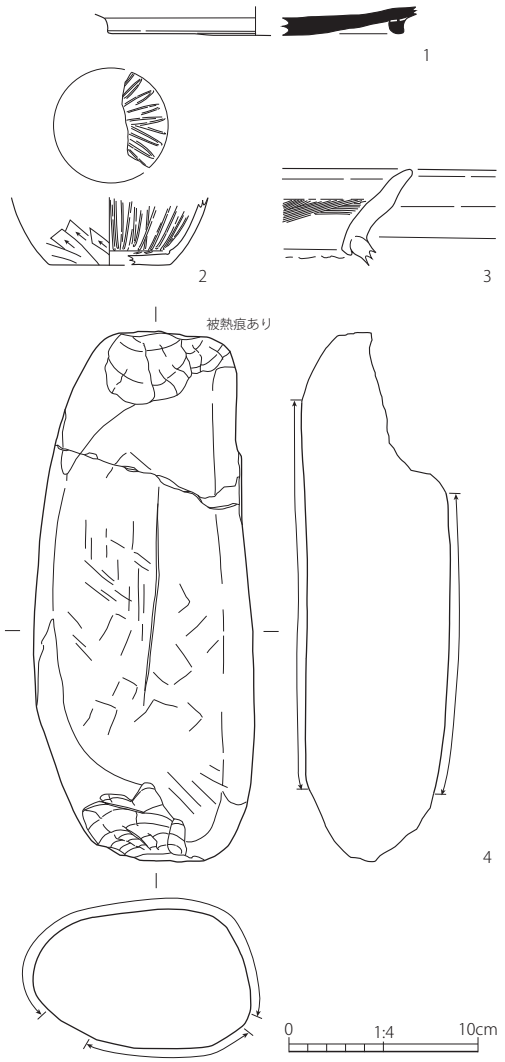
1	黒褐色	しまりやや強、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア中量。大沢スコリア中量。	SB77覆土
3	黄灰色	しまりやや強、粘性やや強。焼土中量。粘土多量。黒色土少量。	SB77カマド崩落土
4	橙褐色	しまりやや弱、粘性やや強。焼土多量。粘土少量。	SB77カマド燃焼室
5	黄灰色	しまり強、粘性強。焼土多量。粘土中量。黒色土ブロック混入。	SB77カマド袖
6	黒褐色	しまり強、粘性やや強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB77カマド掘方
7	黒色	しまり強、粘性やや強。大淵スコリア中量。大沢スコリア中量。	SB77掘方埋土

第 193 図　SB77　カマド平面図・断面図

出土遺物（第 194 図）

1 は須恵器の有台皿もしくは大型の高台坏とみられ、底部は高台よりも 1mm 程突出する。当地域では珍しい器種である。2 は土師器の甲斐型坏である。体部外面下半をヘラケズリ、見込み部および体部内面に放射状暗文が施される。3 は土師器甕の口縁部である。焼成・色調から球胴甕とみられるが、口唇部の肥厚はなく、先細りとなっている。4 は砂岩製の砥石である。全長 28.1cm、重量が 3,740g を測るやや大型の製品であり、表面に被熱痕がみとめられることから、カマド部材などに転用された可能性がある。

時期　いずれの遺物も出土状況が不明であるものの、切り合い関係と残存率の高い 1 を重視し、3 をその共伴と考えれば、富士Ⅰ～Ⅱ期（8 世紀前葉～中葉頃）の建物跡と考えられる。



第 194 図　SB77　出土遺物実測図

SB78

遺構（第 195 図）

位置　O- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB69 → SB80 → SB78（新）

主軸方位　N-6.0° -E

残存状況　東側は調査区域外となり検出できない。平面形は不整形な方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）3.75m、直交（東西）2.28m、深さ 28cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　幅 34cm、深さ 7cm の壁溝が北壁及び西壁に施される。

床　厚さ 7cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

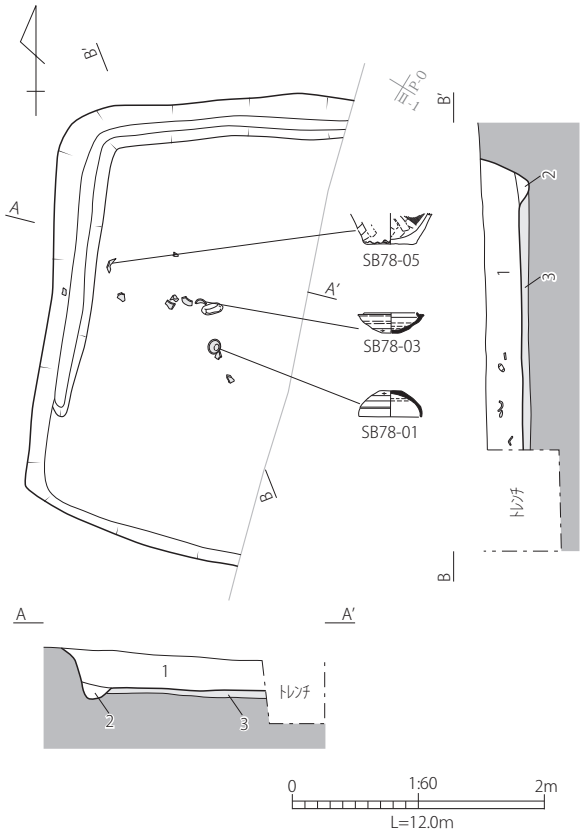
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

出土遺物（第 196 図）

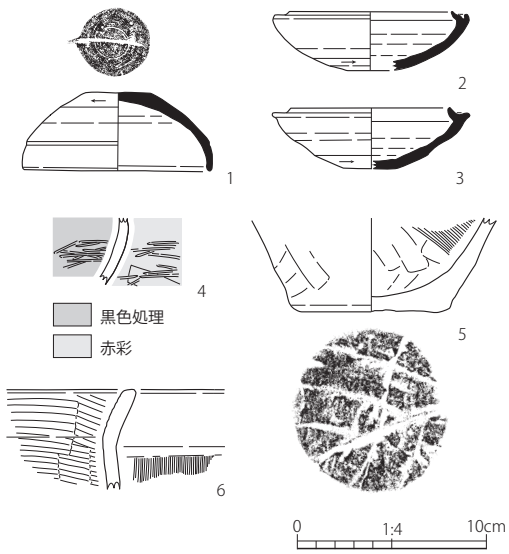
1 ～ 3 は須恵器である。1 は坏蓋で、口縁部と頂部の境界は緩い段がめぐる。口径は 9.8cm であり、小型化が進行した段階のものである。頂部には窯記号「－」が残る。2・3 は坏身で、いずれも器径（最大径）が 10cm 程の小型のものであり、口縁部の立ち上がりは短く、受け部の高さよりわずかに出る程度である。法量や焼成雰囲気、調整の共通点から、1 と 3 がセットになるとみられる。4 ～ 6 は土師器で、4 は小型壺とみられる。内面黒色処理、外面赤彩がみとめられる。5 は甕であり、底部に木葉痕が残る。6 は甑の可能性がある口縁部片であり、くの字形の口縁部に肩が全く張らない体部形態を有する。内面は目の粗いヨコハケが施される。甑であれば、5 世紀後半頃の混入品とみられる。

時期　切り合い関係と床面付近出土の 1・3・5 を重視し、2 をその共伴と考えれば、沢東Ⅱ期（7 世紀中葉～後葉頃）の建物跡と考えられる。



1	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。 溶岩礫少量。大淵スコリア少量。	SB78覆土
2	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。 溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB78覆土
3	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。 溶岩礫少量。黄褐色土少量。	SB78掘方埋土

第 195 図　SB78　平面図・断面図



第 196 図　SB78　出土遺物実測図

SB80

遺構（第 197 図）

位置　O- Ⅱ、P- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB69 → SB80 → SB78（新）

主軸方位　N-11.5° -E

残存状況　東側は調査区域外となり検出できない。また覆土の上層は SB78 により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）3.14m、直交（東西）1.02m、深さ 8cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

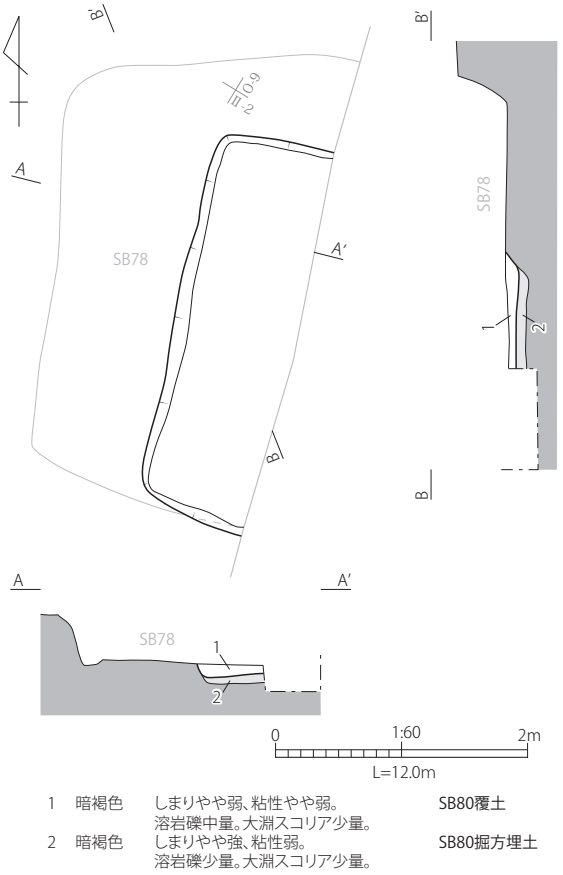
壁溝　確認されない。

床　厚さ 6cm の貼り床が施される。

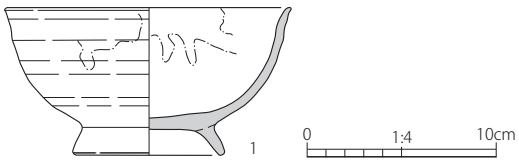
柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。



第 197 図　SB80　平面図・断面図



第 198 図　SB80　出土遺物実測図

出土遺物（第 198 図）

1 は灰釉陶器の碗（深碗）である。口縁部外面から内面にかけて、漬け掛けによる灰釉が施される。底部には回転糸切り痕が残り、ハの字状に開く高い高台を有する。

時期　遺物の出土状況が不明であるものの、切り合い関係から、1 は平安時代の混入品と判断せざるをえない。沢東Ⅱ期（7 世紀中葉～後葉頃）以前の建物跡と考えられる。

SB81

遺構（第 199・200 図）

位置　M- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB92 → SB82 → SB81（新）

主軸方位　N-4.0° -E

残存状況　東側及び南側は調査区域外となり検出できない。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）0.91m、直交（東西）1.67m、深さ 14cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 8cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁。東側は撹乱により削平されており、左袖のみ残存する。左袖には芯材となる石材が検出される。規模は検出範囲内で全長 135cm、幅 80cm、燃焼室幅 25cm を測る。

出土遺物（第 201 図）

1 は土師器高坏の脚部である。外面はタテ方向のヘラケズリ後、密なヨコヘラミガキによって仕上げられる。また、外面は黒色処理が施される。

時期　切り合い関係とカマド出土の 1 を重視すれば、沢東Ⅱ期（7 世紀中葉～後葉頃）の建物跡と考えられる。

SB82

遺構（第 199 図）

位置　M- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB92 → SB82 → SB81（新）

主軸方位　N-10.0° -E

残存状況　東側及び南側は調査区域外となり検出できない。また SB81 により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）1.97m、直交（東西）2.56m、深さ 13cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

壁溝　幅 22cm、深さ 7cm。

床　厚さ 7cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

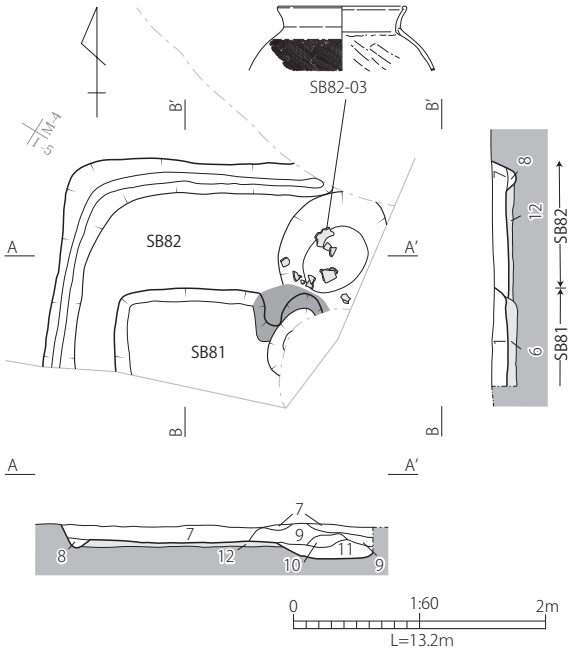
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁。両袖とも残存せず燃焼室のみ検出される。規模は検出範囲内で全長 84cm、燃焼室幅 72cm を測る。

出土遺物（第 202 図）

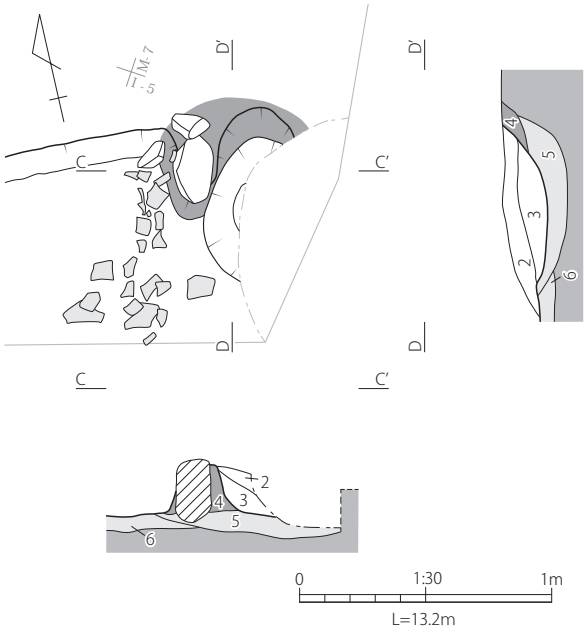
1 は須恵器甕の頸部片である。頸部外面を 2 条の突帯によって上下に区画するものであり、区画内には波状文が施される。突帯や波状文は比較的シャープな作りである。内部のみ酸化焔気味の焼成であり、断面色調は暗褐色を呈する。2・3 は土師器の球胴甕である。2 は体部外面に目の細かいハケの後、肩部のみ目の粗いハケを施す。一般的に目の粗いハケは一次調整に行う場合が多いが、この甕は肩部のみ仕上げに粗いハケが行われている。3 はくの字形の口縁部を有し、端部は丸く肥厚させている。胴部最大径は 30cm 以上となることが確実であり、球胴化がかなり進行した段階のものと判断されるが、体部外面のヨコミガキはみられない。

時期　切り合い関係とカマド出土の 2・3 を重視すれば、沢東Ⅱ期（7 世紀中葉～後葉頃）の建物跡と考えられる。



1	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB81覆土
6	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB81掘方埋土
7	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。粘土微量。	SB82覆土
8	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫中量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB82覆土
9	灰黄色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。粘土多量。	SB82カマド崩落土
10	暗褐色	しまり強、粘性やや弱。溶岩礫微量。焼土少量。粘土少量。	SB82カマド燃焼室
11	暗褐色	しまりやや弱、粘性やや強。焼土中量。粘土微量。	SB82カマド燃焼室
12	暗褐色	しまりやや強、粘性強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB82掘方埋土

第 199 図　SB81・SB82　平面図・断面図



2	灰褐色	しまり弱、粘性やや強。焼土微量。粘土多量。	SB81カマド崩落土
3	赤褐色	しまり強、粘性やや強。焼土多量。粘土微量。	SB81カマド燃焼室
4	灰褐色	しまり強、粘性やや弱。溶岩礫微量。焼土微量。粘土多量。	SB81カマド袖
5	暗褐色	しまり強、粘性やや弱。溶岩礫少量。焼土微量。炭化物微量。	SB81カマド掘方
6	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB81掘方埋土

第 200 図　SB81　カマド平面図・断面図

SB83

遺構（第 203 図）

位置　M-0 グリッド

重複関係（古）SB84 → SB91 → SB83（新）

主軸方位　N-3.0° -E

残存状況　東側及び北側は調査区域外となり検出できない。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）1.47m、直交（東西）1.55m、深さ 12cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

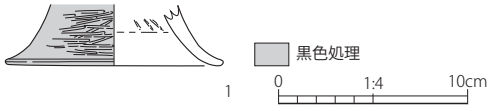
壁溝　幅 19cm、深さ 6cm の壁溝が検出範囲全体に施されている。

床　掘方を床面としている。

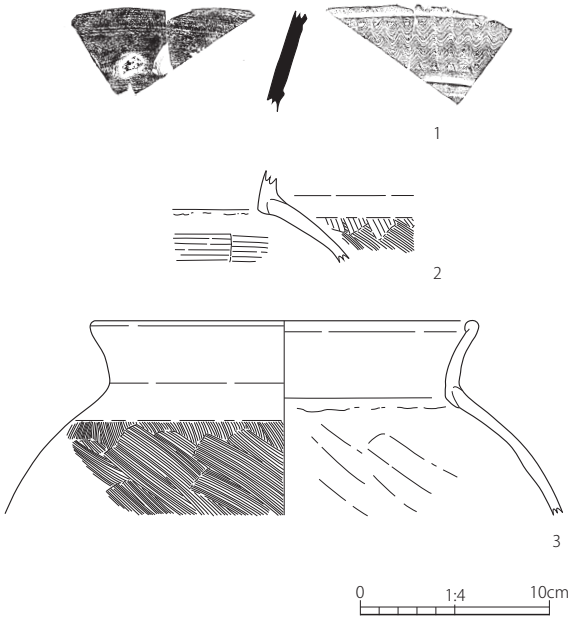
柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。



第 201 図　SB81　出土遺物実測図



第 202 図　SB82　出土遺物実測図

出土遺物（第 204 図）

1 は須恵器甕の体部片である。外面は格子目タタキ、内面は同心円文の当て具痕が残る。内部の一部が酸化焔気味の焼成であり、断面色調が暗褐色を呈する。古墳時代の混入品とみられる。2 ～ 6 は土師器であり、2 は坏である。器高に対して底径が大きい段階の駿東型坏であり、底径は 7.3cm を測る。体部は内外面とも密なヨコヘラミガキが施され、底部中央には板状工具によって余分な粘土を削り取った際に生じたハケメ（木口痕）が残るが、その外周はドーナツ状にヘラケズリされている。見込み部と底部には「#」字状の刻書が残る。3 ～ 6 は長胴甕で、3・4 は高さのある口縁部に肩の張らない体部が取り付く形態のものとみられ、口唇部は若干肥厚させることで受口状を呈する。7 は小型甕で、くの字形の口縁部に、わずかに上方に摘み上げたような口唇部を有する。

時期　切り合い関係と床面出土の 2 ～ 7 を重視すれば、富士Ⅳ期（9 世紀前葉頃）の建物跡と考えられる。

SB84

遺構（第 203 図）

位置　M-0 グリッド

重複関係（古）SB84 → SB91 → SB51、SB83（新）

主軸方位　N-23.0° -W

残存状況　重複する遺構（SB51、SB83 、SB91）に削平され北東コーナー付近のみ検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）0.97m、直交（東西）2.23m、深さ 16cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　1 基のピットが検出され、規模は長軸 38 cm、短軸 36 cm、床面からの深さ 61 cm を測る。

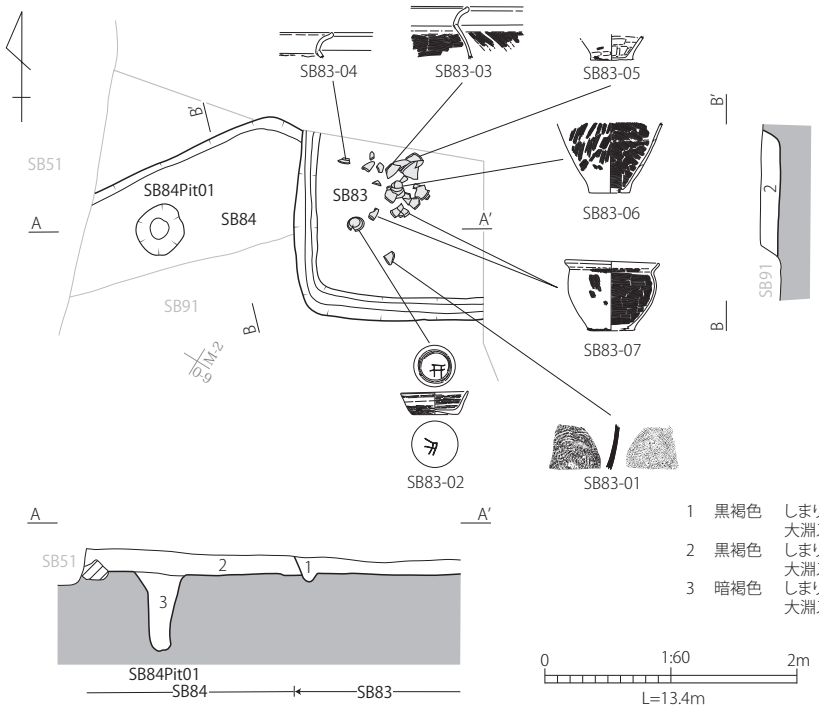
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

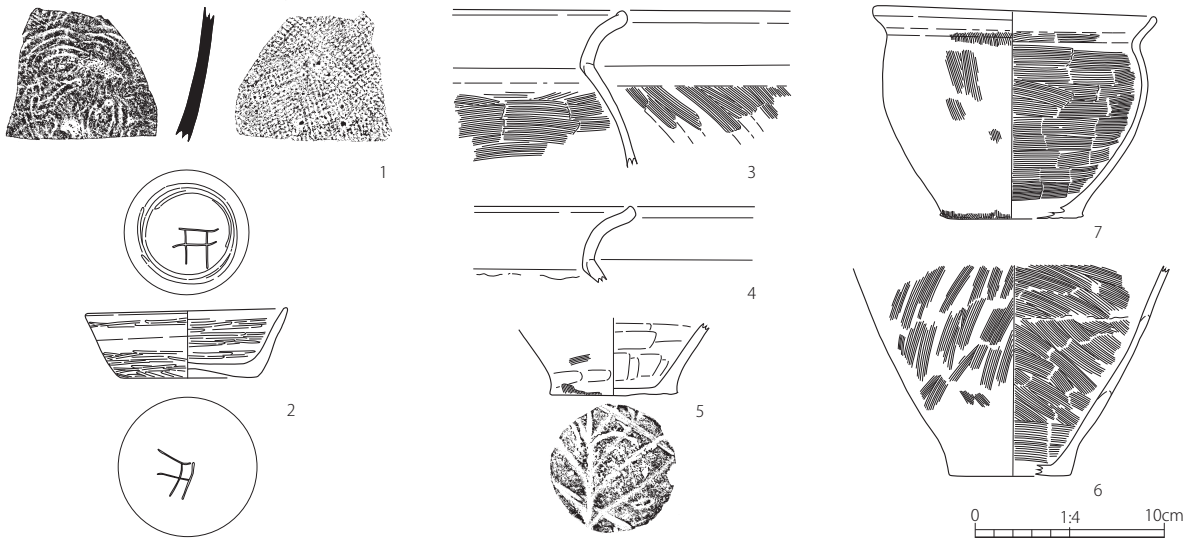
出土遺物

図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、安久Ⅲ期（6 世紀前半頃）以前の建物跡と考えられる。



第 203 図　SB83・SB84　平面図・断面図



第 204 図　SB83　出土遺物実測図

SB87

遺構（第 205 図）

位置　L- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB87 → SB16（新）

主軸方位　N-11.5° -E

残存状況　覆土が浅く建物跡の北側は検出できない。また東側は SB16 により削平されている。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）3.03m、直交（東西）3.04m、深さ 11cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含まない黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　掘方を床面としている。

柱穴　確認されない。

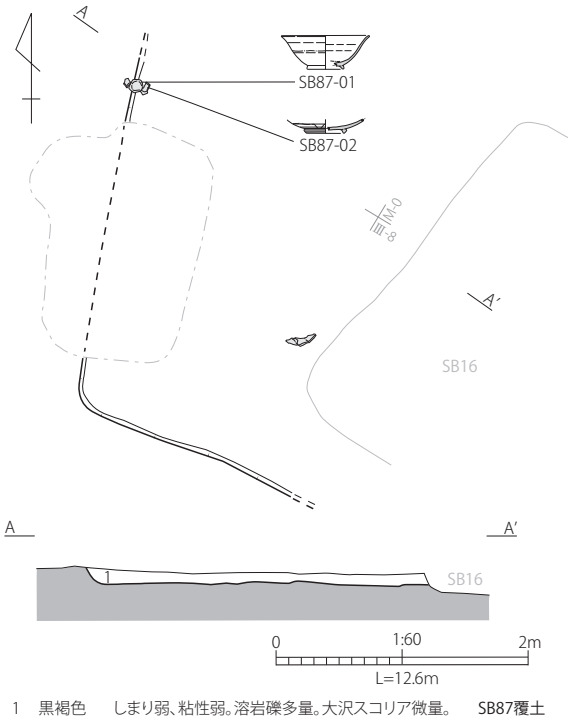
その他の遺構　確認されない。

カマド　確認されない。

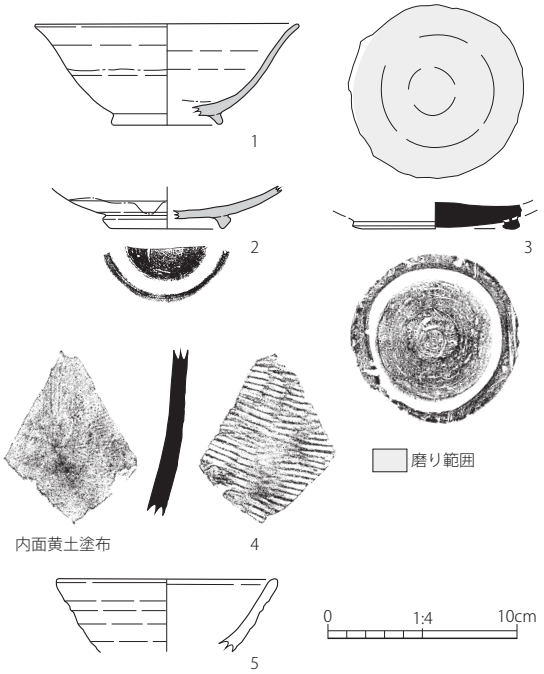
出土遺物（第 206 図）

1 ～ 2 は灰釉陶器である。1 は碗であり、体部外面上半から内面下部まで刷毛塗りによる灰釉が施される。高台は角高台である。2 は皿とみられ、底部回転ヘラケズリ、体部外面から見込み部にかけて灰釉がみとめられる。高台は低平な三日月高台である。3・4 は須恵器である。3 は瓶類または壺類の底部であり、見込み部に磨り痕がみとめられることから、転用硯の可能性がある。高台よりも外周側を打ち欠くことで、円形に整えられている。4 は甕の体部片であり、内外表面だけ酸化焔気味に焼成されたことで、暗赤褐色を呈する。内面には黄土がハケ塗りされる。5 は土師器のロクロ成形坏である。

時期　床面出土の 1・2 を重視し、4・5 をその共伴と考えれば、富士Ⅵ期（9 世紀後葉頃）の建物跡と考えられる。



第 205 図　SB87　平面図・断面図



第 206 図　SB87　出土遺物実測図

SB88

遺構（第 207・208 図）

位置　L- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB89 → SB88 → SB51、SB76、SB90（新）

主軸方位　N-109.0° -E

残存状況　重複する遺構（SB51、SB76 、SB90）に部分的に削平されているものの、全体的に検出される。床面上には広い範囲で焼土が検出され、炭化材等も確認できることから焼失建物と考えられる。平面形は方形を呈し、規模は主軸（東西）4.95m、直交（南北）4.88m、深さ 8cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 3cm の貼り床が施される。

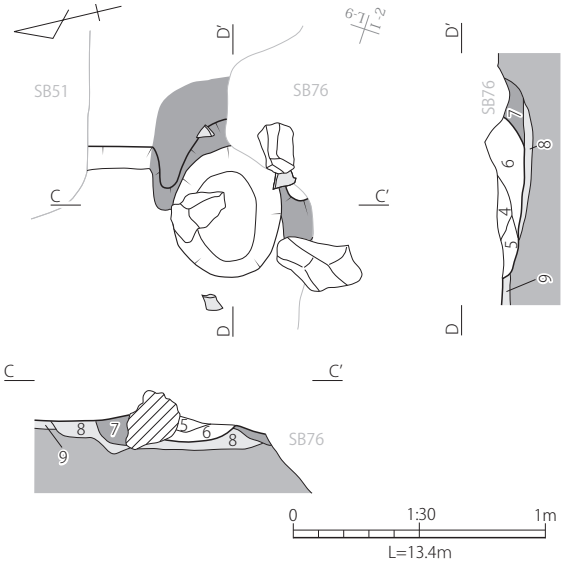
柱穴　確認されない。

その他の遺構　確認されない。

カマド　東壁南寄り。南側は SB76 により削平されている。カマド内には芯材として使用されていたと考えられる石材が検出される。規模は全長 62cm、幅 70cm、燃焼室幅 44cm を測る。

1	黒褐色	しまり弱、粘性強。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB88覆土
2	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。大沢スコリア少量。焼土多量。	SB88覆土
3	暗褐色	しまり強、粘性弱。焼土極多量。炭化物少量。	SB88覆土
9	暗褐色	しまり強、粘性強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB88掘方埋土

第 207 図　SB88　平面図・断面図



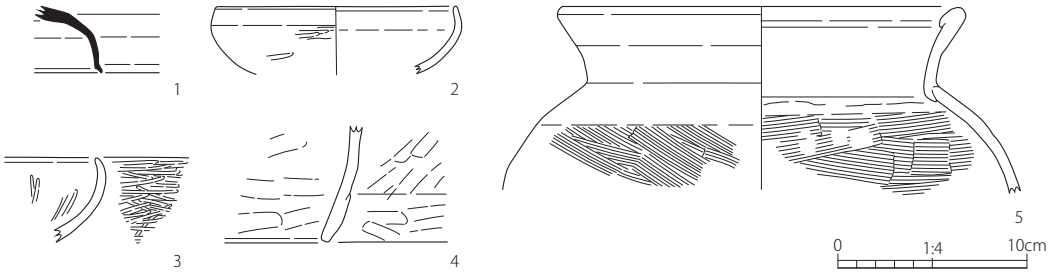
4	暗褐色	しまりやや強、粘性強。粘土多量。	SB88カマド崩落土
5	暗褐色	しまりやや強、粘性強。焼土少量。粘土微量。	SB88カマド燃焼室
6	暗褐色	しまりやや強、粘性強。焼土多量。粘土多量。	SB88カマド燃焼室
7	暗褐色	しまりやや強、粘性強。焼土微量。粘土多量。	SB88カマド袖
8	暗褐色	しまりやや強、粘性強。溶岩礫微量。 大沢スコリア微量。	SB88カマド掘方
9	暗褐色	しまり強、粘性強。溶岩礫微量。 大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB88掘方埋土

第 208 図　SB88　カマド平面図・断面図

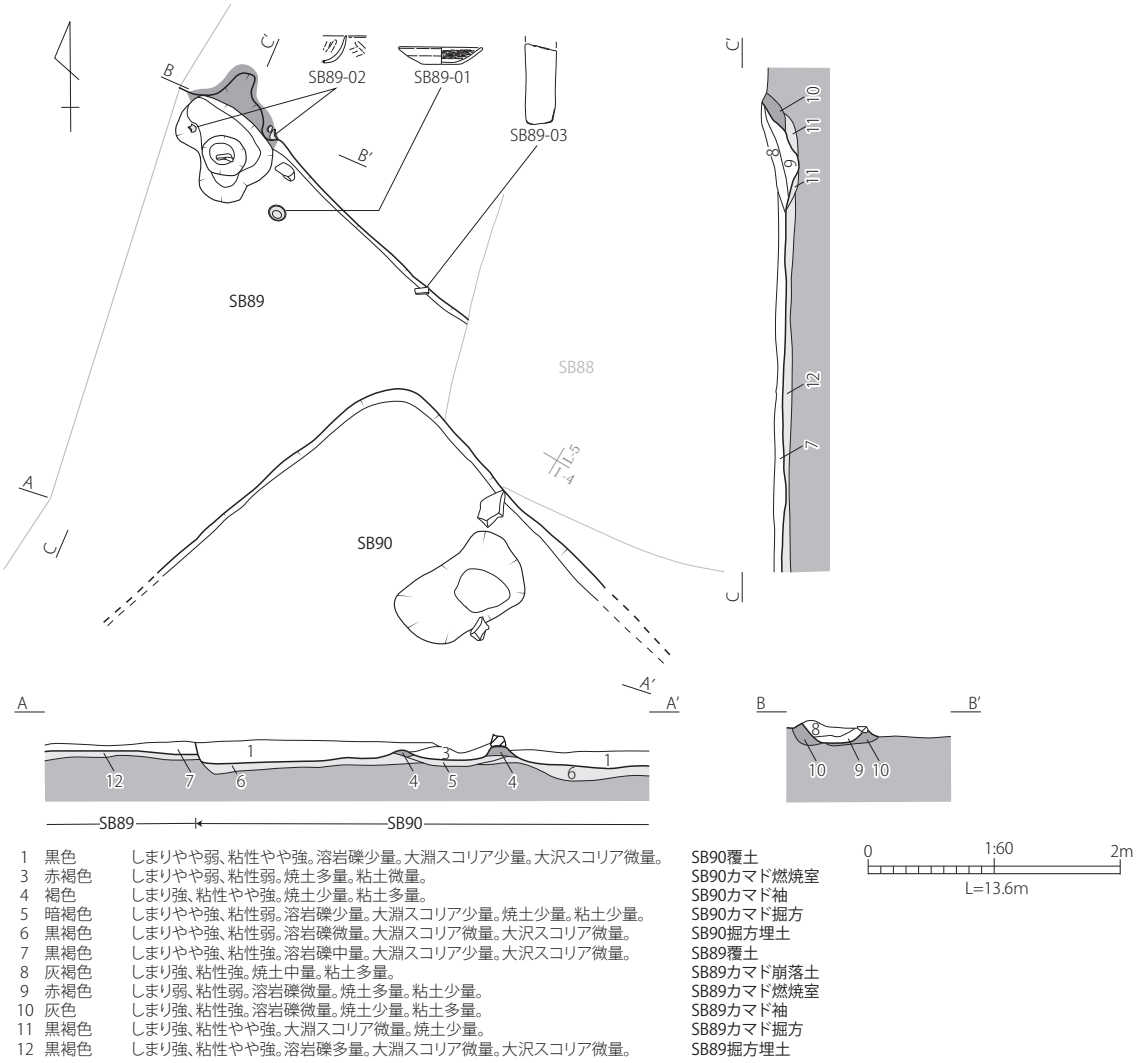
出土遺物（第 209 図）

1 は須恵器の坏蓋である。口縁部と頂部の境界に稜などはみられない。口唇部には内傾面と稜線がめぐる。復原口径は 12.0cm 前後になると推定される。2 ～ 5 は土師器で、2・3 は体部が内湾する形態の坏である。体部外面にはいずれも密なヨコミガキが施されていたものと考えられる。4 は甑の底部片で、内外面ともに板ナデによって仕上げられている。5 は球胴甕で、口唇部は丸く肥厚される。5 は 7 世紀後半以降の混入品であろう。

時期　切り合い関係とカマド周辺出土の 1・2・4 を重視し、3 をその共伴と考えれば、安久Ⅱ～Ⅲ期（5 世紀末～ 6 世紀前半頃）の建物跡と考えられる。



第 209 図　SB88　出土遺物実測図



1	黒色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB90覆土
3	赤褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土多量。粘土微量。	SB90カマド燃焼室
4	褐色	しまり強、粘性やや強。焼土少量。粘土多量。	SB90カマド袖
5	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。焼土少量。粘土少量。	SB90カマド掘方
6	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB90掘方埋土
7	黒褐色	しまりやや強、粘性強。溶岩礫中量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB89覆土
8	灰褐色	しまり強、粘性強。焼土中量。粘土多量。	SB89カマド崩落土
9	赤褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫微量。焼土多量。粘土少量。	SB89カマド燃焼室
10	灰色	しまり強、粘性強。溶岩礫微量。焼土少量。粘土多量。	SB89カマド袖
11	黒褐色	しまり強、粘性やや強。大淵スコリア微量。焼土少量。	SB89カマド掘方
12	黒褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫多量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB89掘方埋土

第 210 図　SB89・SB90　平面図・断面図

SB89

遺構（第 210 図）

位置　L- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB89 → SB88 → SB90（新）

主軸方位　N-41.5° -E

残存状況　西側は調査区域外となり東側は SB88、SB90 により削平されているため、北壁のみ検出される。北壁が直線的であることから、平面形は方形を呈するものと考えられる。規模は検出範囲内で主軸（南北）3.78m、直交（東西）3.00m、深さ 8cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 5cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

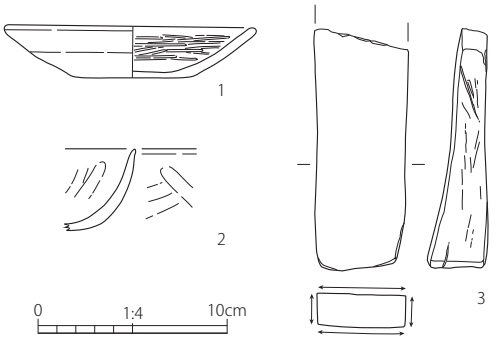
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁。両袖とも失われており、袖の奥部と燃焼室のみが検出される。全長 102cm、燃焼室幅 80cm を測る。

出土遺物（第 211 図）

1 ～ 2 は土師器で、1 は皿である。体部内面は密なヨコミガキが施されるが、底部調整は摩耗のため判別できない。床面出土ではあるものの、9 世紀以降の混入品と判断される。2 は口縁部が短く外反する形態の坏であり、底部は木葉痕の一部が残る。体部内外面はヘラナデ調整である。3 は凝灰岩製の砥石である。

時期　切り合い関係とカマド出土の 2 を重視すれば、安久Ⅰ～Ⅱ期（5 世紀後半～末頃）の建物跡と考えられる。



第 211 図　SB89　出土遺物実測図

SB90

遺構（第 210・212 図）

位置　L- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB89 → SB88 → SB90（新）

主軸方位　N-47.0° -E

残存状況　覆土が浅く削平されているため、北西コーナー付近のみが検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（南北）2.47m、直交（東西）2.54m、深さ 19cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

壁溝　確認されない。

床　厚さ 8cm の貼り床が施される。

柱穴　確認されない。

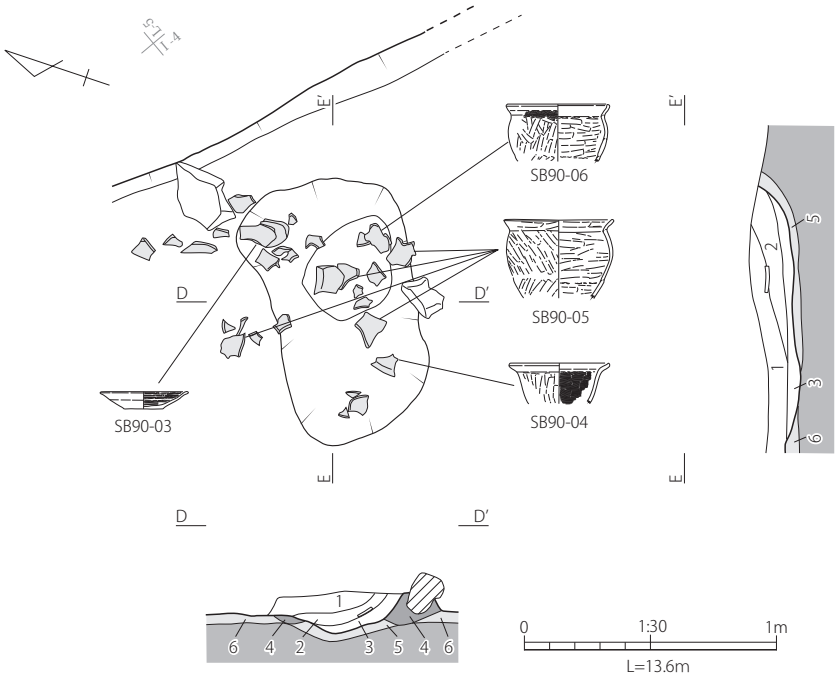
その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁。両袖とも残存せず燃焼室のみ検出される。規模は全長 104cm、燃焼室幅 48cm を測る。

出土遺物（第 213 図）

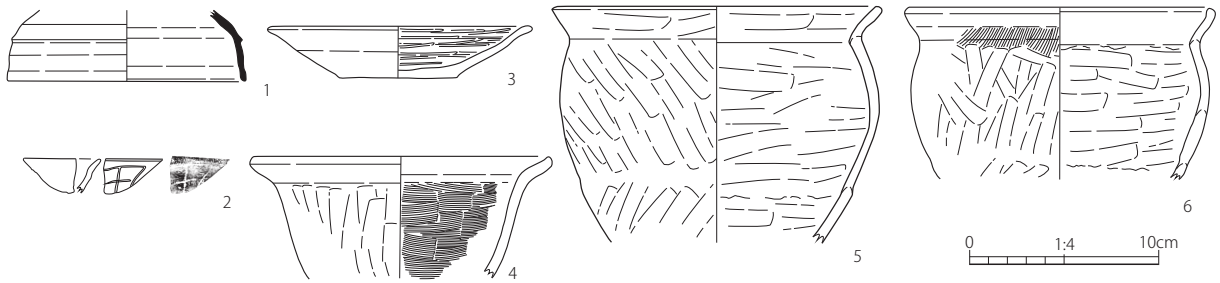
1 は須恵器の坏蓋で、口縁部と頂部の境界は緩い突帯状の稜がめぐる。口唇部は緩い内傾面を有する。復原口径は 12.0cm であり、遠江Ⅰ～Ⅱ期頃に比定されることから、SB88 や SB89 からの混入品と考えられる。2 ～ 6 は土師器である。2 は坏の口縁部であり、内面に煤が付着する。外面に刻書が残っており、「孔」あるいは「田」の一部のようにもみえるが、確定はできない。3 は皿で、体部内面は密なヨコヘラミガキが施される。口縁部内面から見込み部にかけて広く煤が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。4 は甲斐型土器の鉢である。外反して立ち上がる体部に、大きく開いた口縁部を有する。外面はヘラナデ、内面はヨコハケ調整である。5・6 は小型甕で、5 はくの字形の口縁部、6 は内湾する口縁部を有する。いずれも内外面とも板ナデによって仕上げられている。

時期　切り合い関係とカマドや床面出土の 3 ～ 6 を重視し、2 をその共伴と考えれば、富士Ⅵ期（9 世紀後葉頃）の建物跡と考えられる。



1	黒色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SB90覆土
2	赤褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。焼土少量。粘土少量。	SB90カマド燃焼室
3	赤褐色	しまりやや弱、粘性弱。焼土多量。粘土微量。	SB90カマド燃焼室
4	褐色	しまり強、粘性やや強。焼土少量。粘土多量。	SB90カマド袖
5	暗褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。焼土少量。粘土少量。	SB90カマド掘方
6	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB90掘方埋土

第 212 図　SB90　カマド平面図・断面図



第 213 図　SB90　出土遺物実測図

SB91

遺構（第 214・216 図）

位置　M-0、M- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB84 → SB91 →
SB51、SB74、SB83、SB92、SK20（新）

主軸方位　N-103.5° -W

残存状況　東側は調査区域外となる。重複する遺構（SB51、SB74、SB83、SB92、SK20）により削平されており、西壁と北壁のみが検出される。平面形は方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸（東西）4.30m、直交（南北）5.09m、深さ 10cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

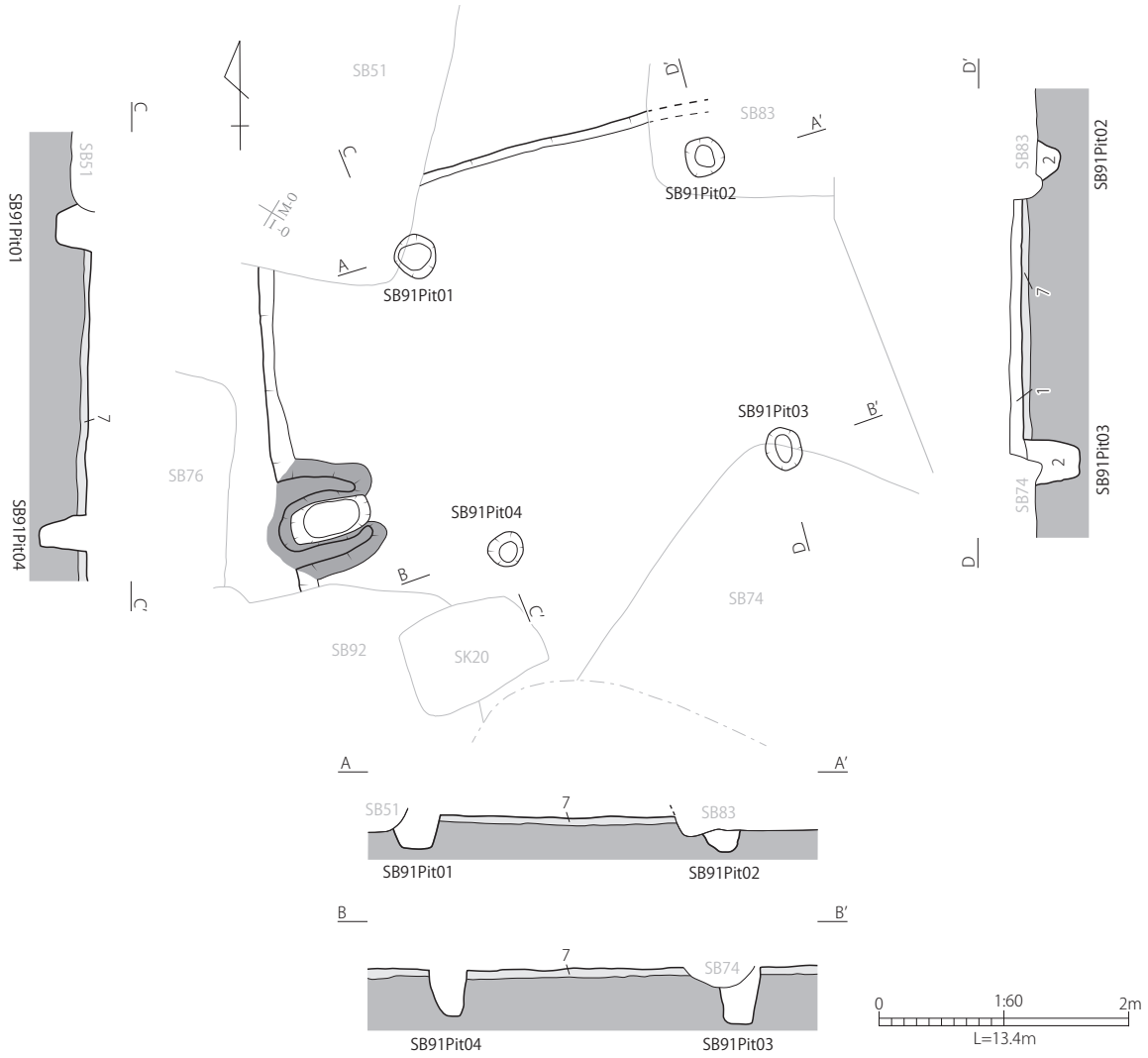
壁溝　確認されない。

床　厚さ 8cm の貼り床が施される。

柱穴　主柱穴と考えられる 4 基のピットが検出される。規模は長軸 30 ～ 36cm、短軸 27 ～ 35cm、床面からの深さ 28 ～ 45cm を測る。

その他の遺構　確認されない。

カマド　西壁。比較的良好な状態で検出される。燃焼室内には 25cm 程の大きさの扁平な石材が検出される。規模は全長 74cm、幅 96cm、燃焼室幅 30cm を測る。



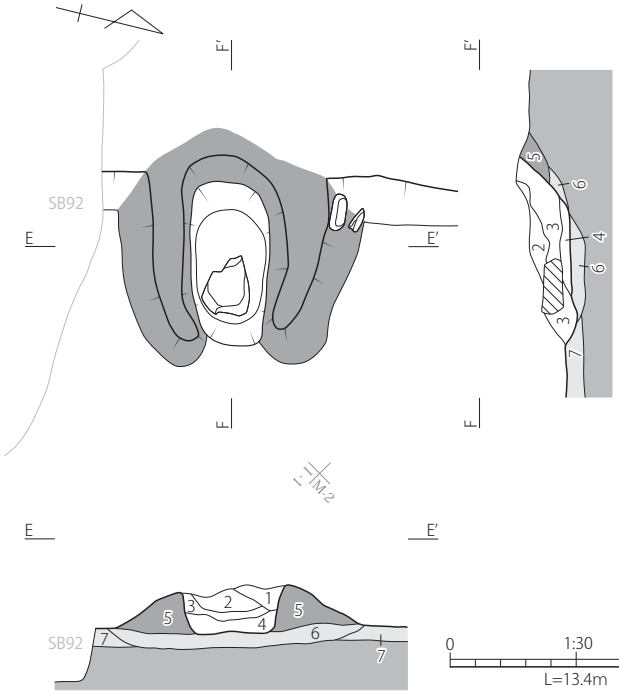
1	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。	SB91覆土
2	灰褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア少量。焼土少量。粘土多量。	SB91カマド崩落土
7	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB91掘方埋土

第 214 図　SB91　平面図・断面図

出土遺物（第 217 図）

1 ～ 7 は土師器で、1 ～ 4 が坏である。1・2 は体部から口縁部が内湾する形態の坏であり、1 は平底の底部に木葉痕がみとめられる。体部は内外面とも密なヘラミガキが施される。3・4 は須恵器坏蓋模倣の坏であるが、3 が垂直に高く立ち上がる口縁部であるのに対し、4 は短い口縁部である。口縁部と体部の境界は、ともに緩い稜線がめぐる。5 は高坏の脚部とみられるが、内面に格子目状の線刻が残る。6 は甕で、やや外反するくの字形の口縁部に、楕円形の体部が付く形態と推定される。また、口縁部外面には 2 条の沈線が水平にめぐっている。摩耗によって不鮮明な箇所もあるため即断はできないものの、須恵器の甕などにみられる沈線を意識した装飾的要素の可能性もある。7 は甕の底部で、木葉痕がみとめられるが、6 とは色調などが異なり、別個体と判断される。8・9 は灰釉陶器の碗である。8 は三角高台で底部に回転糸切り痕が残る。9 は三日月高台で、底部は回転ヘラケズリ調整である。8・9 は 9 世紀以降の混入品であろう。

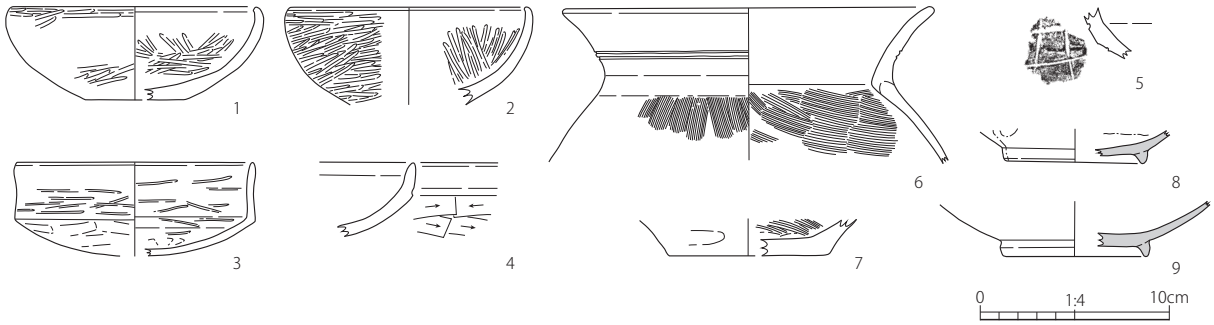
時期　遺物の出土状況が不明であるものの、切り合い関係及び 1 ～ 3・6 の共伴を重視すれば、安久Ⅲ期（6 世紀前半頃）の建物跡と考えられる。



第 215 図　SB91 カマド（東から）

1	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。	SB91覆土
2	灰褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫微量。大淵スコリア少量。焼土少量。粘土多量。	SB91カマド崩落土
3	橙褐色	しまり強、粘性やや弱。焼土多量。粘土微量。	SB91カマド燃焼室
4	暗褐色	しまり強、粘性やや強。焼土少量。炭化物微量。粘土少量。	SB91カマド燃焼室
5	灰褐色	しまり強、粘性やや強。焼土少量。粘土多量。	SB91カマド袖
6	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。粘土微量。	SB91カマド掘方
7	暗褐色	しまり強、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SB91掘方埋土

第 216 図　SB91　カマド平面図・断面図



第 217 図　SB91　出土遺物実測図

SB92

遺構（第 218・220 図）

位置　M- I グリッド

重複関係

（古）SB76、SB91 → SB92 → SB77、SB82、SK20（新）

主軸方位　N-8.5° -W

残存状況　重複する遺構（SB77 、SB82 、SK20）により削平されており、南東及び南西コーナーは検出できない。平面形は方形を呈し、規模は主軸（南北）4.62m、直交（東西）5.13m、深さ 25cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む暗褐色土。

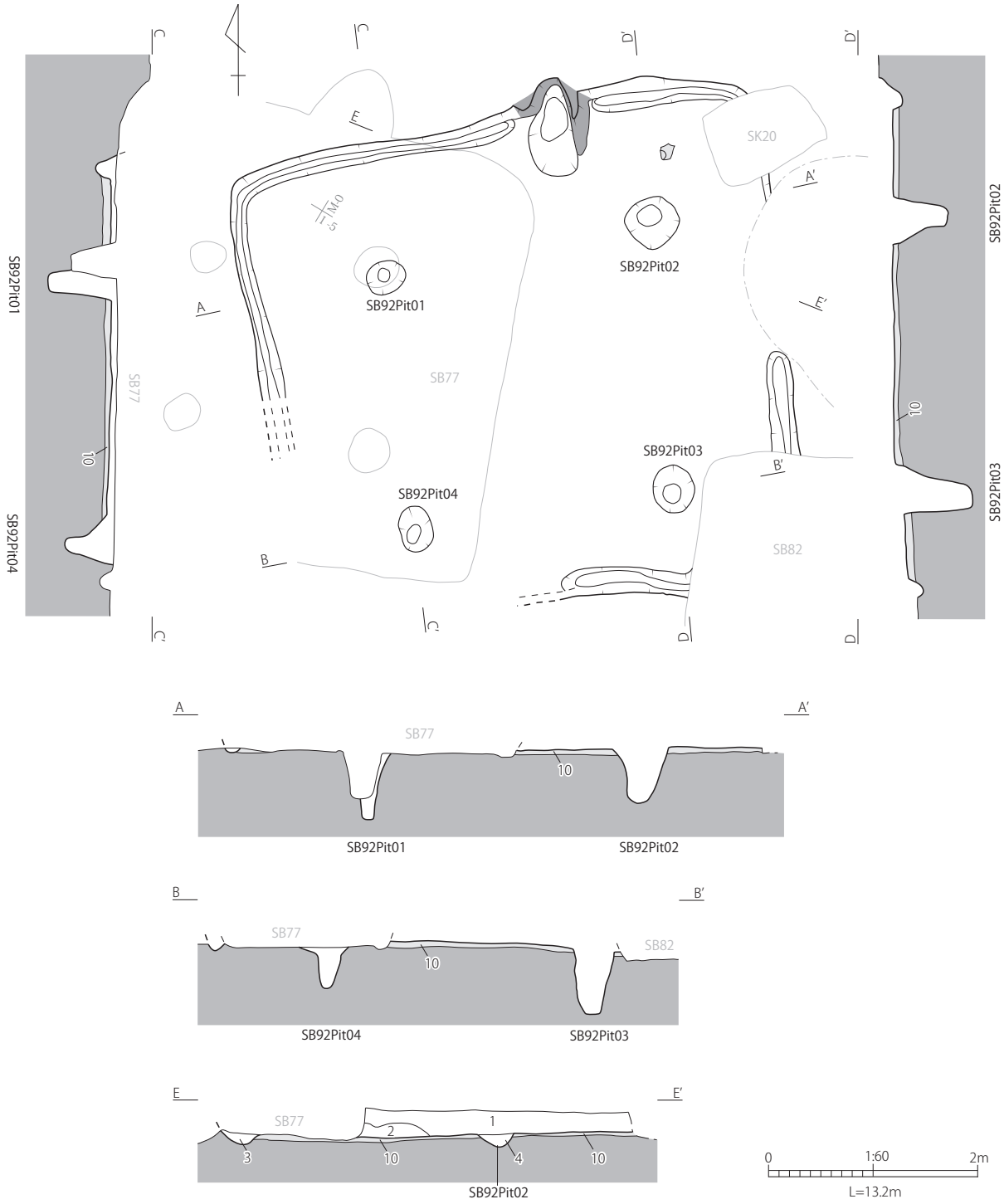
壁溝　幅 26cm、深さ 14cm の壁溝が全体的に施される。

床　厚さ 5cm の貼り床が施される。

柱穴　主柱穴と考えられる 4 基のピットが検出される。規模は長軸 36 ～ 48cm、短軸 30 ～ 48cm、床面からの深さ 42 ～ 68cm を測る。

その他の遺構　確認されない。

カマド　北壁東寄り。左袖は失われており、右袖のみ検出される。燃焼室内には支脚石が残存する。規模は検出範囲内で全長 126cm、幅 78cm、燃焼室幅 54cm を測る。



1	暗褐色	しまり弱、粘性やや弱。溶岩礫少量。大淵スコリア中量。大沢スコリア少量。	SB92覆土
2	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア微量。焼土少量。粘土中量。	SB92覆土
3	暗褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB92覆土
4	黒褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SB92Pit覆土
10	暗褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB92掘方埋土

第 218 図　SB92　平面図・断面図

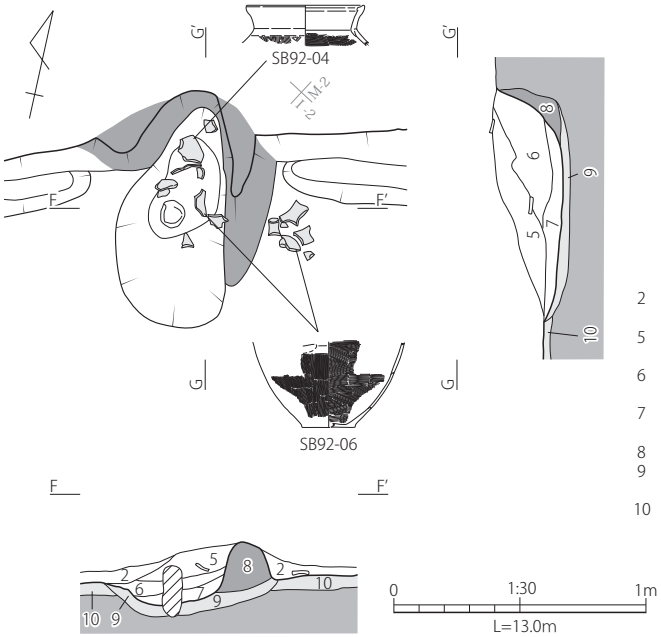
出土遺物（第 221 図）

1 は須恵器の脚部である。方形の透が四方に入り、透のすぐ下に緩い段、透の上方に沈線がめぐる。高坏というよりは、短脚や透、沈線などの特徴から、脚付長頸壺や脚付盌類などの可能性がある。内部のみ酸化焔気味の焼成のため、断面色調は暗褐色を呈する。2・3 はともに須恵器坏蓋模倣の坏であり、口縁部の内外面は回転ナデによって仕上げられている。3 の底部には木葉痕が残る。4 ～ 6 は甕である。4 はくの字形の口縁部であるが、口唇部はやや外側に開き、内側を肥厚させる。5 は球胴形の体部に伴う底部片であり、木葉痕が残る。6 は楕円形の体部と考えられ、底部に木葉痕が残る。

時期　切り合い関係及びカマド出土の 4・6 を重視し、1 ～ 3・5 をその共伴と考えれば、沢東Ⅱ期（7 世紀中葉～後葉）の建物跡と考えられる。

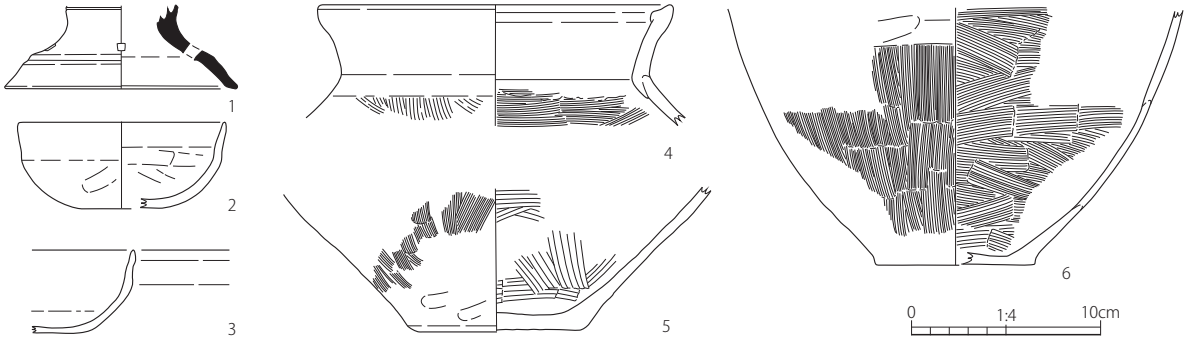
（小島 利史・藤村　翔）

第 219 図　SB92 カマド（南から）



2	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。大淵スコリア微量。焼土少量。粘土中量。	SB92覆土
5	黄灰色	しまりやや強、粘性やや強。焼土少量。粘土多量。	SB92カマド崩落土
6	暗褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土中量。炭化物少量。	SB92カマド燃焼室
7	赤褐色	しまりやや強、粘性やや強。焼土多量。粘土少量。	SB92カマド燃焼室
8	黄灰色	しまり強、粘性強。粘土多量。	SB92カマド袖
9	暗褐色	しまりやや強、粘性やや弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。粘土少量。	SB92カマド掘方
10	暗褐色	しまり強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SB92掘方埋土

第 220 図　SB92　カマド平面図・断面図



第 221 図　SB92　出土遺物実測図

第 3 節　その他の遺構

掘立柱建物

SH01

遺構（第 222 図）

位置　L- Ⅱ、L- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB31 → SB04 → SB03 → SH01（新）

主軸方位　N-30.0° -E

残存状況　南東部分の柱穴は確認されないものの、9 基の柱穴が検出され、検出範囲内で南北 3 間×東西 2 間の総柱建物となると認識される。規模は検出範囲内で南北 5.3m、東西 2.8m を測り、芯々での柱穴間は南北 1.60 ～ 2.00m、東西 1.40m を測る。

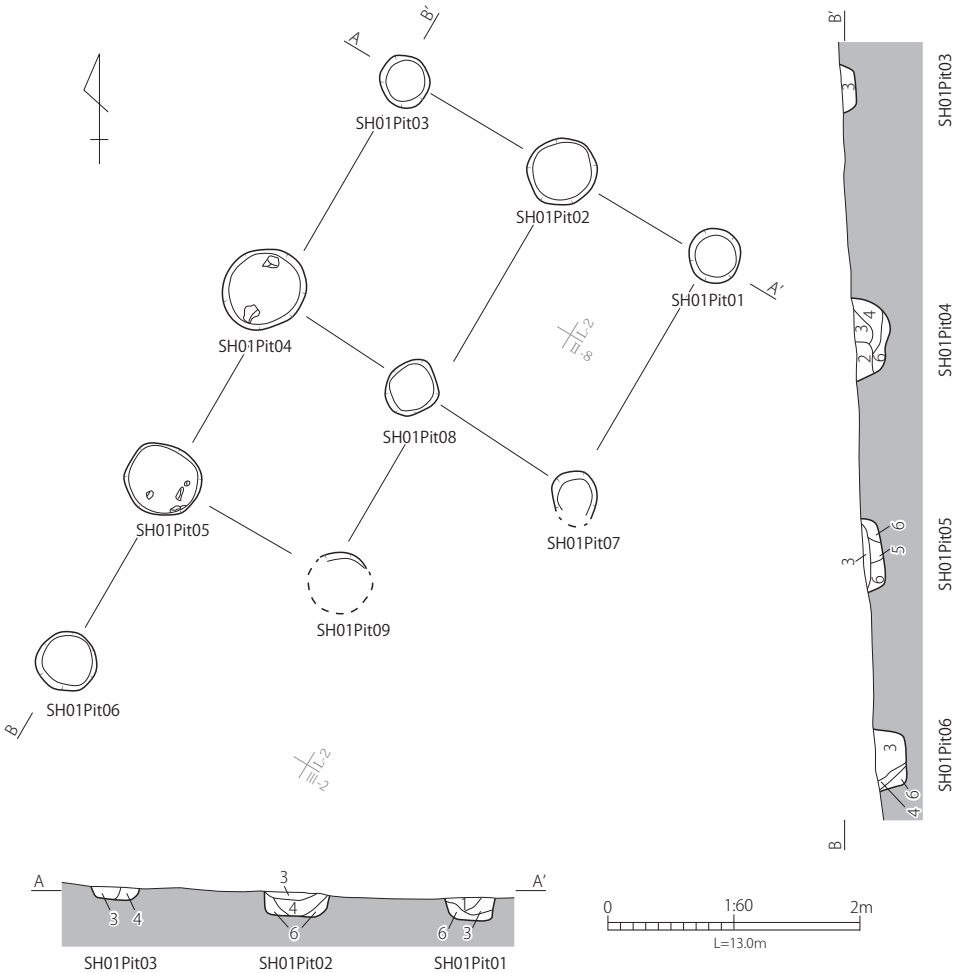
覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

柱穴　構成する柱穴の形状はほとんどが円形となる。柱穴の規模は長軸 42 ～ 68cm、短軸 40 ～ 63cm、検出面からの深さは 11 ～ 25cm である。

出土遺物

図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、富士Ⅵ期（9 世紀後葉頃）以降の建物跡と考えられる。



1	黒色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。粘土微量。	SH01覆土
2	黒褐色	しまり弱、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SH01覆土
3	黒色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SH01覆土
4	黒色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SH01覆土
5	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SH01覆土
6	黒色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫微量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SH01覆土

第 222 図　SH01　平面図・断面図

SH02

遺構（第 223 図）

位置　M- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB16 → SH02 → SB14 → SB12（新）

主軸方位　N-12.5° -E

残存状況　10 基の柱穴が検出され、南北 2 間×東西 3 間の側柱建物となる。規模は南北 3.9m、東西 4.8m を測り、芯々での柱穴間は南北 1.90 ～ 2.00m、東西 1.45 ～ 1.70m を測る。

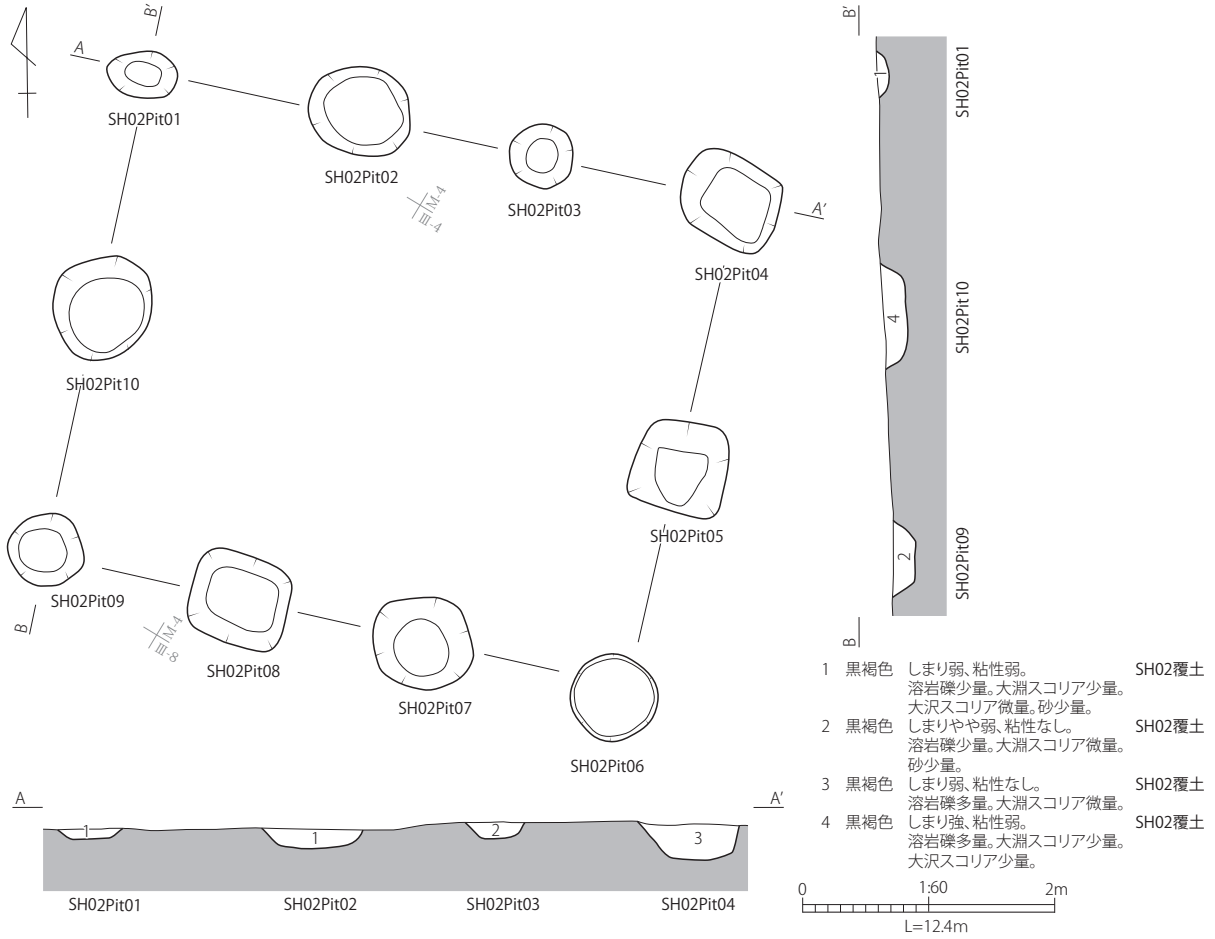
覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

柱穴　構成する柱穴の形状は円形と長方形のものが混じる。柱穴の規模は長軸 50 ～ 87cm、短軸 39 ～ 81cm、検出面からの深さは 7 ～ 20cm である。

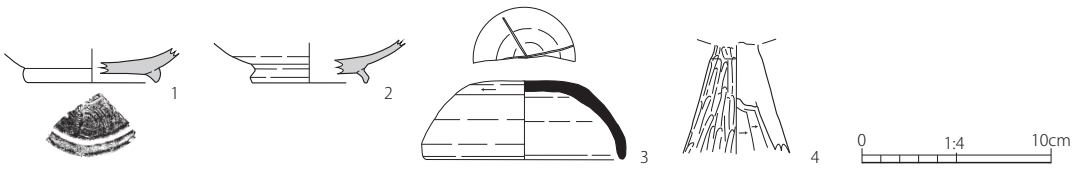
出土遺物（第 224 図）

1 ～ 2 は灰釉陶器碗である。1 は三角高台で底部に回転糸切り痕が残る。3 は須恵器坏蓋で、頂部には「×」とみられる窯記号がある。口径 10.7cm と小型化が進んでおり、遠江Ⅳ期前～後葉と考えられる。4 は土師器高坏の脚部で、古墳時代とみられる。

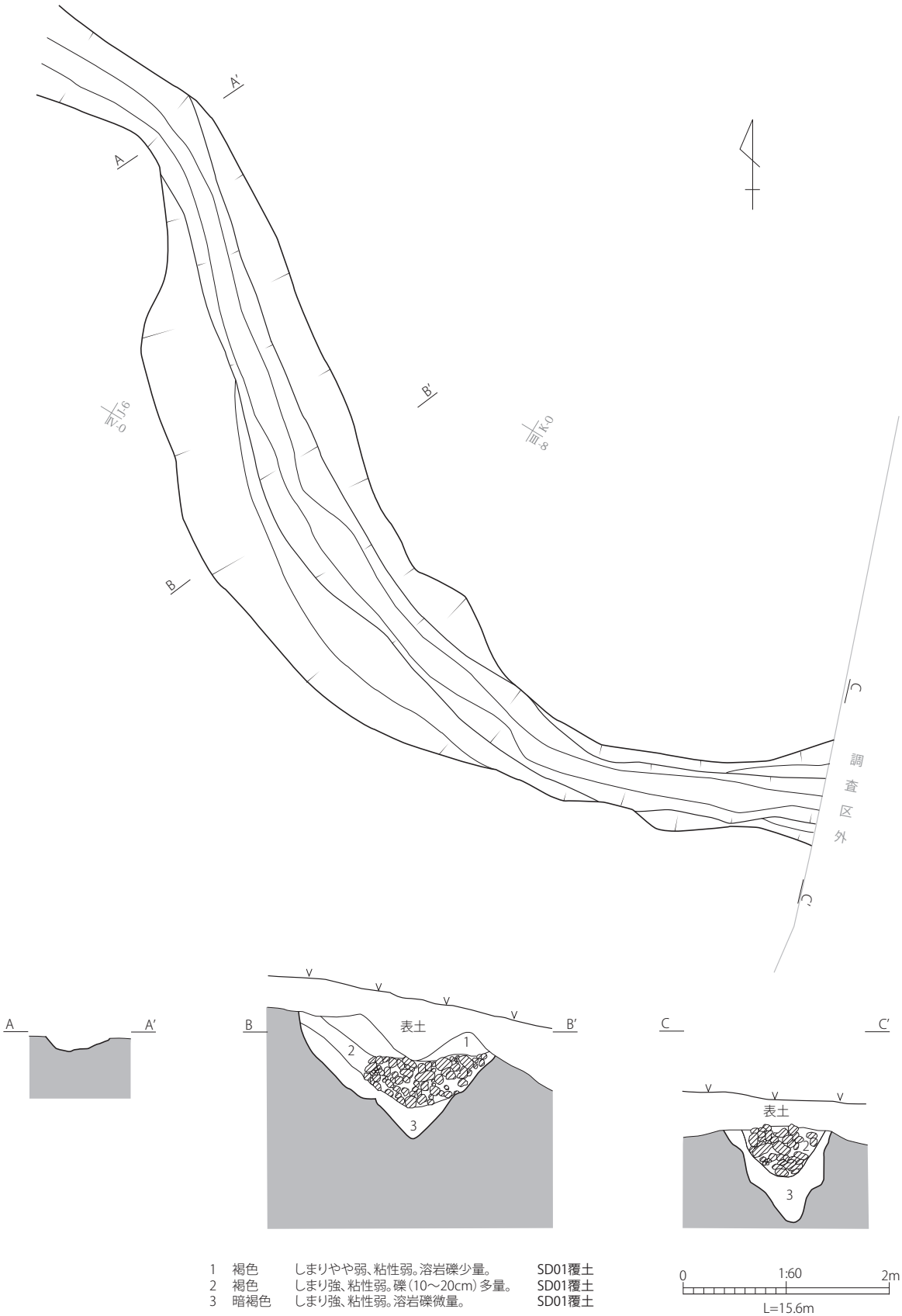
時期　切り合い関係と柱穴内出土の 2 ～ 4 の下限を重視すれば、富士Ⅶ～Ⅷ期（10 世紀前半～後半頃）の建物跡と考えられる。



第 223 図　SH02　平面図・断面図

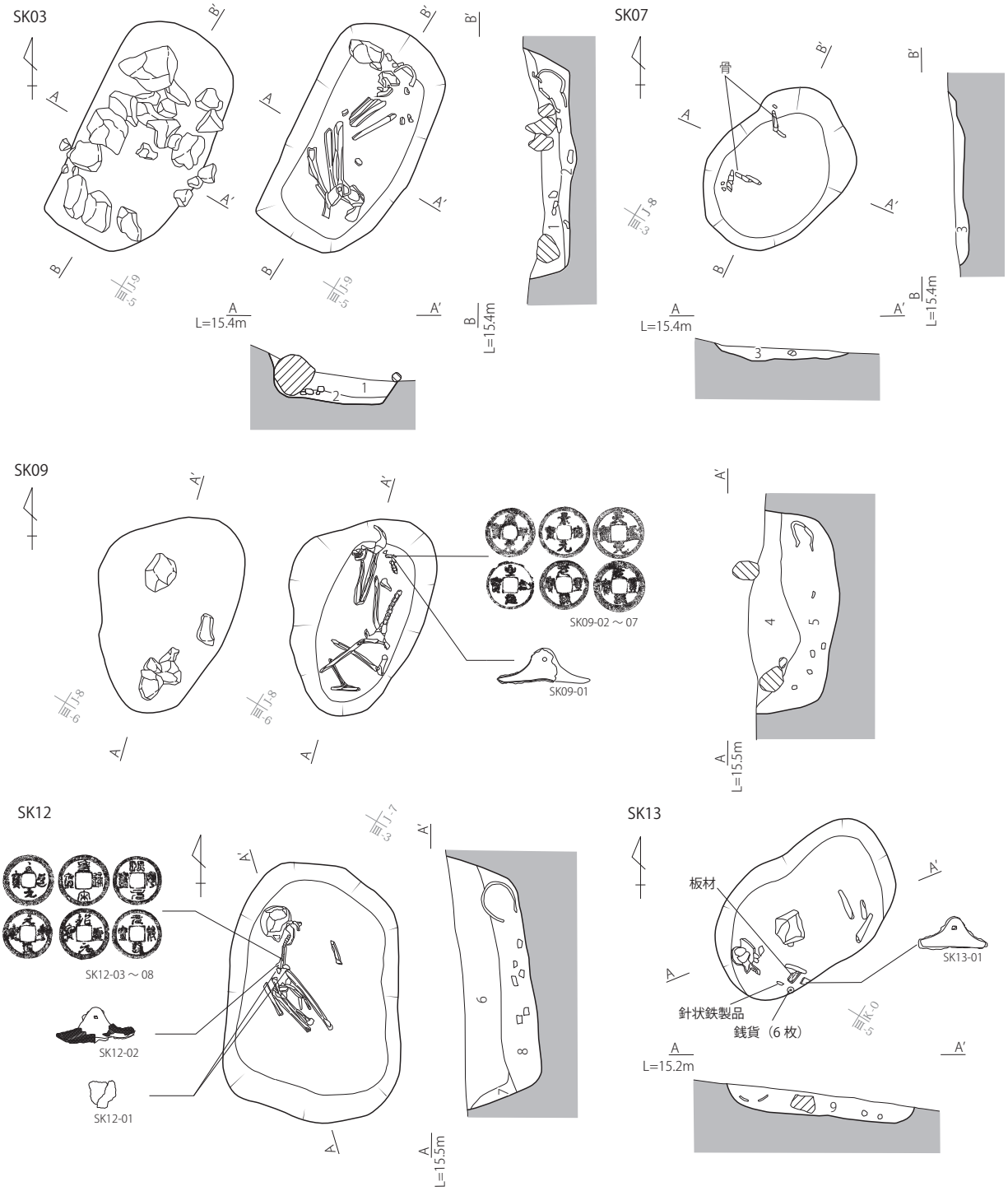


第 224 図　SH02 出土遺物実測図



1	褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。	SD01覆土
2	褐色	しまり強、粘性弱。礫（10～20cm）多量。	SD01覆土
3	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫微量。	SD01覆土

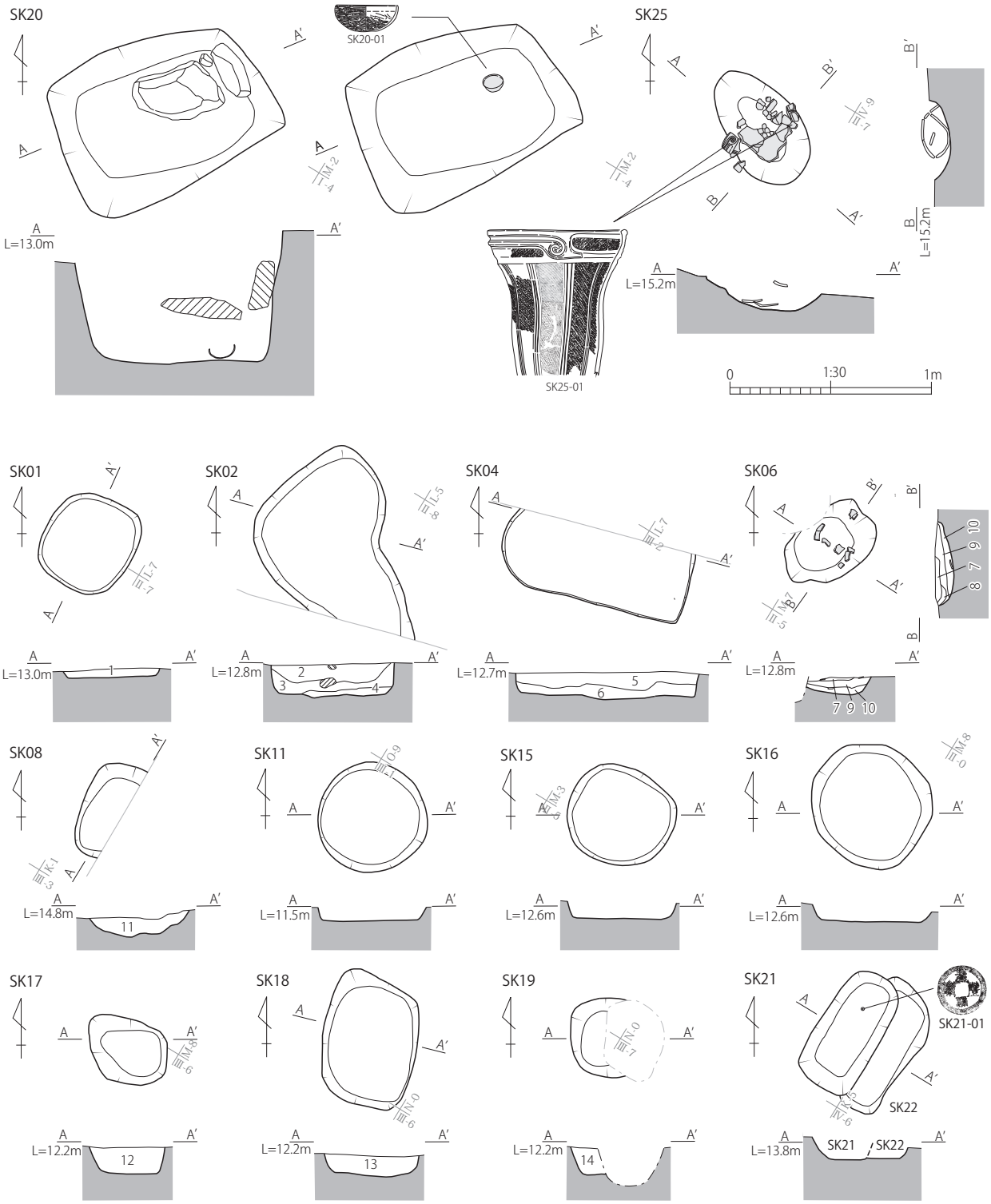
第 225 図　SD01　平面図・断面図



1	暗褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。粘土少量。	SK03覆土
2	黒褐色	しまり弱、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SK03覆土
3	褐色	しまりやや弱、粘性やや強。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。炭化物微量。	SK07覆土
4	褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。大沢スコリア微量。	SK09覆土
5	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫多量。	SK09覆土
6	黒褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。褐色ブロック混入。	SK12覆土
7	暗褐色	しまり強、粘性弱。溶岩礫少量。大沢スコリア微量。褐色ブロック混入。	SK12覆土
8	黒褐色	しまり弱。粘性やや弱。溶岩礫少量。	SK12覆土
9	黒褐色	しまり弱、粘性弱。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SK13覆土

0 1:30 1m

第 226 図　SK　平面図・断面図①



1	暗灰黄色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア少量。	SK01覆土
2	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫中量。大淵スコリア少量。大沢スコリア中量。	SK02覆土
3	黒褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫中量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SK02覆土
4	暗褐色	しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。大沢スコリア少量。	SK02覆土
5	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫多量。	SK04覆土
6	黒褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫少量。	SK04覆土
7	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。大淵スコリア少量。大沢スコリア微量。	SK06覆土
8	黒褐色	しまりやや弱、粘性弱。大淵スコリア少量。焼土多量。	SK06覆土
9	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。大淵スコリア少量。焼土少量。粘土少量。	SK06覆土
10	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや弱。粘土微量。	SK06覆土
11	黒褐色	しまりやや弱、粘性やや強。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。	SK08覆土
12	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SK17覆土
13	黒褐色	しまり弱、粘性弱。溶岩礫多量。大淵スコリア少量。	SK18覆土
14	黒褐色	しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。	SK19覆土

第227図　SK　平面図・断面図②

溝

SD01

遺構（第 225 図）

位置　J- Ⅲ、J- Ⅳ、K- Ⅲ、K- Ⅳグリッド

重複関係　なし　　**主軸方位**　不明

残存状況　東西方向の溝で、両端は調査区域外となる。規模は検出範囲内で全長 11.4m、幅 58 ～ 188cm を測る。断面形は V 字形を呈し、検出面からの深さ 116cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含まない褐色土で、中層には多量の礫（20 ～ 30 cm）が堆積している。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　覆土から、中近世の溝と考えられる。

土坑

SK01

遺構（第 227 図）

位置　L- Ⅱグリッド

重複関係　（古）SB17 → SK01（新）

主軸方位　N-32.0° -E

残存状況　平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸 98cm、短軸 90cm を測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さ 8cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、富士Ⅴ期（9 世紀中葉頃）以降の遺構と考えられる。

SK02

遺構（第 227 図）

位置　L- Ⅱグリッド

重複関係　（古）SB17 → SK02（新）

主軸方位　N-41.0° -W

残存状況　平面形は不定形で、南側は撹乱により削平されている。規模は検出範囲内で長軸 210cm、短軸 147cm を測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さ 31cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、富士Ⅴ期（9 世紀中葉頃）以降の遺構と考えられる。

SK03

遺構（第 226 図）

位置　J- Ⅲグリッド

重複関係　（古）SB48 → SK03（新）

主軸方位　N-30.0° -E

残存状況　西側の調査区に位置し、人骨が埋納された墓坑である。隣接する複数の土坑からも人骨が検出されていることから、この付近が中近世の墓地であったことが認識される。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 114cm、短軸 64cm を測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さ 19cm を測る。人骨は比較的良好に残存し、頭蓋骨を含めほぼ 1 体分が検出される。人骨の上層には、10 ～ 30cm 程の礫が多数検出されている。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係や他の土坑墓との類似性から、中近世の土坑墓と考えられる。

参考までに、出口遺跡では同種の土坑墓が多数検出されており、なかでも中国銭をおさめた ST21 では、大窯 3 後段階併行（16 世紀後半）の初山産天目茶碗が出土している（池谷 2019）。本遺跡の土坑墓群の年代観を探る上で、定点となるだろう。

SK04

遺構（第 227 図）

位置　L- Ⅲグリッド

重複関係　（古）SB26 → SB24 → SK04（新）

主軸方位　N-75.0° -W

残存状況　北側は撹乱により削平されている。平面形は不整形な長方形を呈し、規模は検出範囲内で主軸 191cm、短軸 74cm を測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さ 28cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

出土遺物（第 228 図）

1 は土師器の坩である。体部外面はハケ後にナデや指オサエにて仕上げられている。

時期　切り合い関係から、富士Ⅴ期（9 世紀中葉頃）以降の遺構と考えられる。

SK06

遺構（第 227 図）

位置　M- Ⅱグリッド

重複関係　（古）SB44 → SK06（新）

主軸方位　N-48.0° -E

残存状況　西側の一部を撹乱により削平されている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 99cm、短軸 64cm を測る。断面形は浅鉢形を呈し、検出面からの深さ 18cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、沢東Ⅱ期（7 世紀中葉～後葉頃）以降の遺構と考えられる。

SK07

遺構（第 226 図）

位置　J- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB48 → SK07（新）

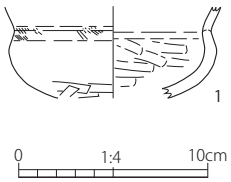
主軸方位　N-43.0° -E

残存状況　西側の調査区に位置し、少量ではあるが人骨が検出されることから墓坑として認識される。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 84cm、短軸 59cm を測る。断面形は浅鉢形を呈し、検出面から深さ 7cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係や他の土坑墓との類似性から、中近世の土坑墓と考えられる。



第 228 図　SK04 出土遺物実測図

SK08

遺構（第 227 図）

位置　K- Ⅲグリッド

重複関係　なし

主軸方位　N-19.0° -E

残存状況　西側の調査区に位置し、東側は調査区域外となり検出できない。人骨が埋納された土坑と隣接するものの人骨の検出はなく、墓坑であるかは不明である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は検出範囲内で長軸 99cm、短軸 52cm を測る。断面形は浅鉢形を呈し、検出面からの深さ 19cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　不明

SK09

遺構（第 226 図）

位置　J- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB48 → SK09（新）

主軸方位　N-21.0° -E

残存状況　西側の調査区に位置し、人骨が埋納された墓坑である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 101cm、短軸 70cm を測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さ 44cm を測る。人骨は比較的良好に残存し、頭蓋骨を含めほぼ 1 体分が検出される。さらにその上層には 15cm 程の大きさの石が数個検出されている。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

出土遺物（第 229 図）

1 は鉄製火打金である。平面形は山形で、中央部が半球状に突出するもので、そこに小孔が穿たれているものと推定される。打撃面である下端部は肥厚させる。2 ～ 7 は銭貨である。初鋳年代は 2 の威平元寶が 998 年、3 の景徳元寶が 1004 年、4 の天聖元寶が 1023 年、5 の至和元寶は 1054-1055 年、6・7 の元豊通寶は 1078 年となる。

時期　中央部が半球状に突出しつつ、端部が若干反る火打金の形態（関 2002）や銭貨から、中近世の土坑墓と考えられる。

SK11

遺構（第 227 図）

位置　O- Ⅲグリッド

重複関係　（古）SB67 → SK11（新）

主軸方位　N-30.0° -E

残存状況　平面形は円形を呈し、規模は長軸 110cm、短軸 109cm を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 12cm を測る。

覆土　不明。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、富士Ⅲ期（8 世紀後葉頃）以降の遺構と考えられる。

SK12

遺構（第 226 図）

位置　J- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB48 → SK12（新）

主軸方位　N-0.5° -W

残存状況　西側の調査区に位置し、人骨が埋納された墓坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 125cm、短軸 85cm を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 37cm を測る。人骨は比較的良好に残存し、頭蓋骨を含めほぼ 1 体分が検出される。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

出土遺物（第 230 図）

1 は火打石で、白色の石英製とみられるが、石材の透明度は低い。稜線部の一部に若干のツブレ痕がみとめられる。2 は鉄製火打金で、平面形は山形、中央部が半球状に突出するものであり、そこに幅 0.3cm の方形の小孔が穿たれている。また、打撃面である下端部を肥厚させる。打撃面の左右の一部には、同一とみられる布が付着しており、布でくるまれた状態で副葬されたものとみられる。3 ～ 8 は銭貨である。初鋳年代は 3 の至道元寶が 995 年、4 の皇宋通寶が 1039 年、5 の熙寧元寶が 1068 年、6 の元豊通寶は 1078 年、7 の紹聖元寶が 1094 年、8 の元符通寶が 1098 年となる。

時期　先述した火打金の形態や銭貨から、中近世の土坑墓と考えられる

SK13

遺構（第 226 図）

位置　J- Ⅲグリッド

重複関係　なし

主軸方位　N-58.0° -E

残存状況　西側の調査区に位置し、少量ではあるが頭蓋骨等の人骨が検出されることから、墓坑として認識される。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 97cm、短軸 60cm を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 12cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

出土遺物（第 231 図）

1 は鉄製火打金である。平面形は山形、中央部が半球状に突出するもので、そこに幅 0.4mm 程の方形の小孔が穿たれている。打撃面である下端部は肥厚させる。2 ～ 12 は銭貨である。初鋳年代は 2 の開元通寶が 621 年または 845 年、3 の皇宋通寶が 1039 年、4・5 の熙寧元寶が 1068 年、6 ～ 9 の元豊通寶は 1078 年、10 の嘉定通寶 1208 年、11 の洪武通寶が 1368 年である。11 は背面に「一銭」とある。12 は種類の判別ができなかった。

時期　先述した火打金の形態や銭貨から、中近世の土坑墓と考えられる。

SK15

遺構（第 227 図）

位置　M- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB39 → SK15（新）

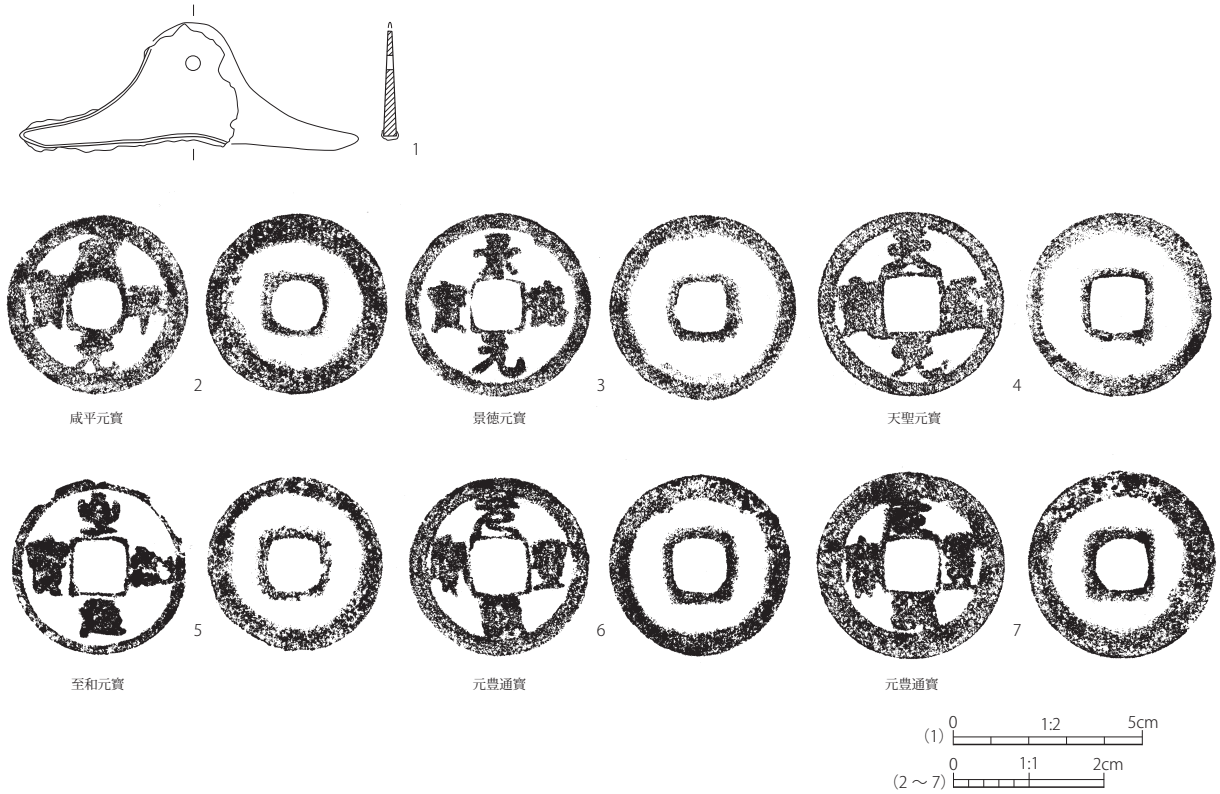
主軸方位　N-59.0° -W

残存状況　平面形は円形を呈し、規模は長軸 106cm、短軸 98cm を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 14cm を測る。

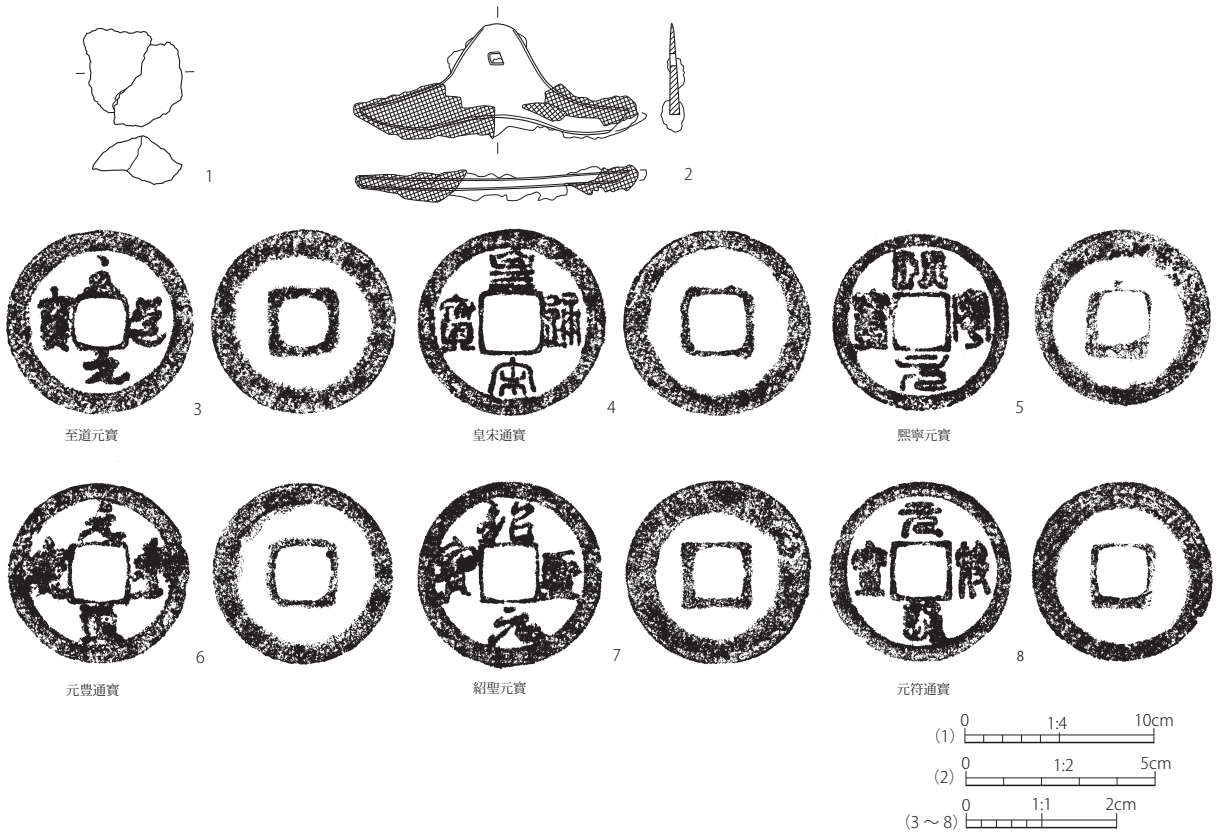
覆土　不明。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、富士Ⅲ期（8 世紀後葉頃）以降の遺構と考えられる。



第 229 図　SK09 出土遺物実測図



第 230 図　SK12 出土遺物実測図

SK16

遺構（第 227 図）

位置　M- Ⅱグリッド

重複関係（古）SB44 → SB29 → SK16（新）

主軸方位　N-50.0° -W

残存状況　平面形は円形を呈し、規模は長軸 121cm、短軸 116cm を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 16cm を測る。

覆土　不明。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、富士Ⅲ期（8 世紀後葉頃）以降の遺構と考えられる。

SK17

遺構（第 227 図）

位置　M- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB14 → SB12 → SK17（新）

主軸方位　N-54.0° -W

残存状況　平面形は不整形な楕円形を呈し、規模は長軸 92cm、短軸 69cm を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 16cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、富士Ⅷ期（10 世紀後半～ 11 世紀頃）以降の遺構と考えられる。

SK18

遺構（第 227 図）

位置　M- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB15 → SB14 → SK18（新）

主軸方位　N-13.5° -E

残存状況　平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 132cm、短軸 96cm を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 20cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、富士Ⅶ期（10 世紀前半頃）以降の遺構と考えられる。

SK19

遺構（第 227 図）

位置　M- Ⅲグリッド

重複関係（古）SB15 → SB14 → SB13 → SK19（新）

主軸方位　N-5.0° -W

残存状況　平面形は楕円形を呈し、規模は検出範囲内で長軸 79cm、短軸 55cm を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 27cm を測る。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係から、富士Ⅶ期（10 世紀前半頃）以降の遺構と考えられる。

SK20

遺構（第 227 図）

位置　M- Ⅰグリッド

重複関係（古）SB91 → SB92 → SK20（新）

主軸方位　N-65.0° -E

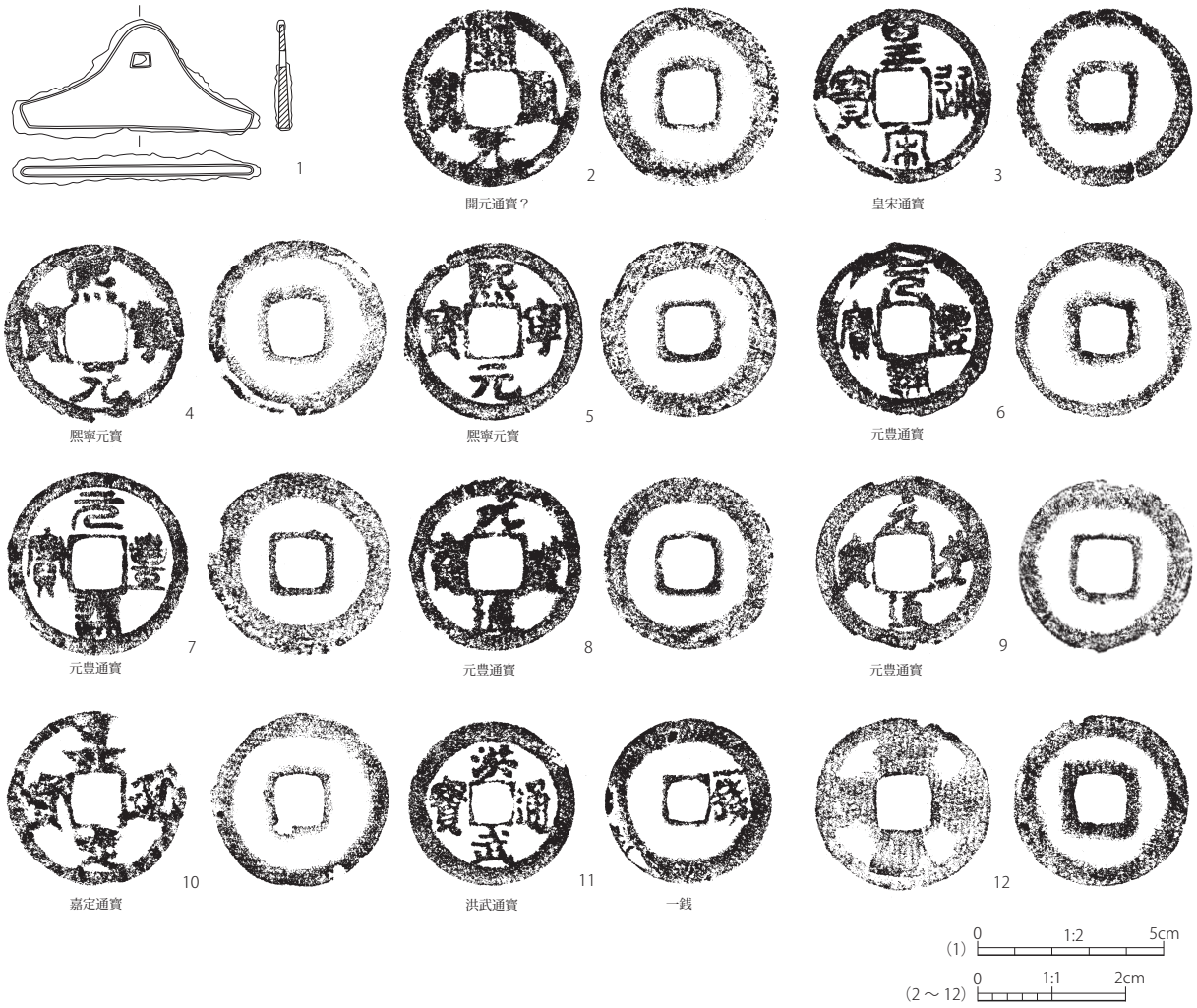
残存状況　平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 108cm、短軸 80cm を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 65cm を測る。覆土中層には 25cm 程の扁平な石が北壁に面して垂直に据えられており、この下端に合わせて水平方向に 40cm 程の扁平な石が据えられている。扁平な石材の下部、土坑底面には完形の土師器坏が正位置で置かれており、土坑墓の可能性もある。

覆土　大淵スコリアを含む黒褐色土。

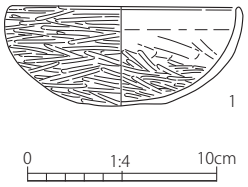
出土遺物（第 232 図）

1 は土師器の坏である。底部は丸底で内湾しながら口縁部に至る器種であり、内外面ともに密なヘラミガキによって仕上げられる。

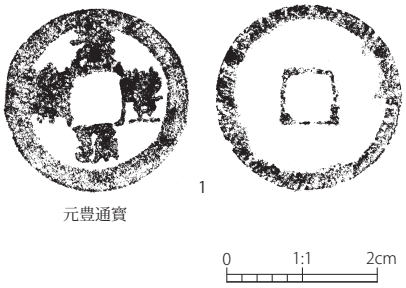
時期　1 を重視すれば、安久Ⅰ～Ⅱ期（5 世紀後半～末頃）の遺構と考えられる。調査時には SB92 を切る遺構として認識されているが、実際には SB92 よりも古く、SB91 と前後する時期の遺構と考えられる。



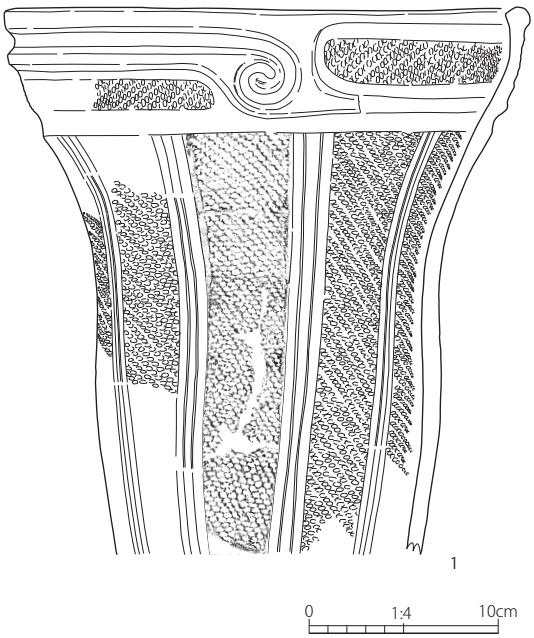
第 231 図　SK13 出土遺物実測図



第 232 図　SK20 出土遺物実測図

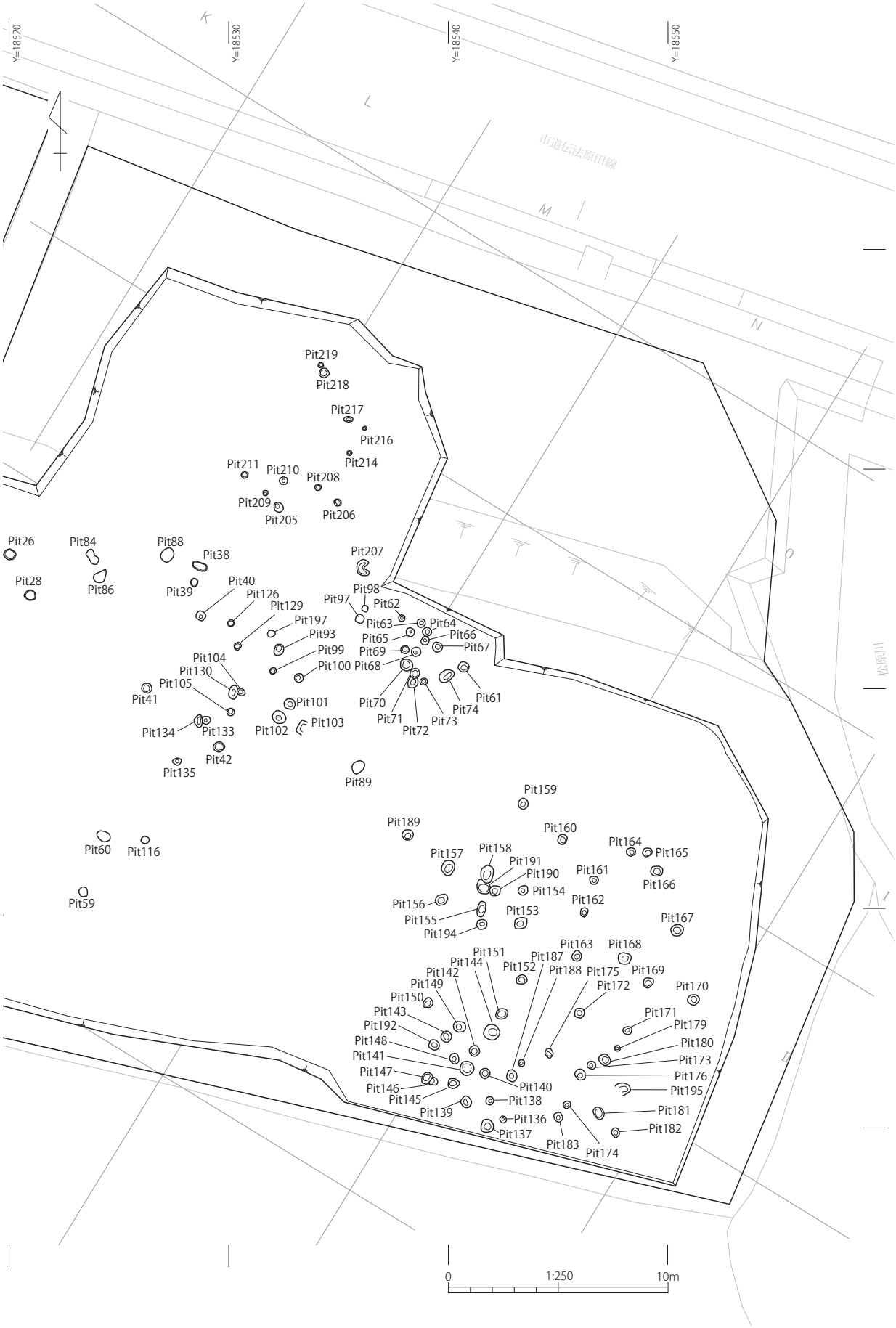


第 233 図　SK21 出土遺物実測図



第 234 図　SK25 出土遺物実測図

第 235 図　ピット　全体図（西側部分）



第 236 図　ピット　全体図（東側部分）

SK21

遺構（第 227 図）

位置　K- Ⅳグリッド

重複関係（古）SK22 → SK21（新）

主軸方位　N-33.0° -E

残存状況　平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 127cm、短軸 64cm を測る。断面形は U 字形を呈し、深さ 24cm を測る。

覆土　不明。

出土遺物（第 233 図）

1 は銭貨で、6 枚が固着している。表面のものは、初鋳年代が 1078 年の元豊通寶である。他の 5 枚の詳細は不明である。

時期　1 や他の土坑墓との類似性から、中近世の土坑墓と考えられる。

SK22

遺構（第 227 図）

位置　K- Ⅳグリッド

重複関係（古）SK22 → SK21（新）

主軸方位　N-33.0° -E

残存状況　SK21 により南西部は削平されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は検出範囲内で長軸 135cm、短軸 67cm を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 12cm を測る。

覆土　不明。

出土遺物　図化できる遺物はない。

時期　切り合い関係や他の土坑墓との類似性から、中近世の土坑墓と考えられる。

第 237 図　SK25　遺物出土状況

SK25

遺構（第 227 図）

位置　J- Ⅱグリッド

重複関係　なし

主軸方位　N-35.0° -W

残存状況　平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 64cm、短軸 38cm を測る。断面形は浅鉢形を呈し、深さ 13cm を測る。SK25 の底面には底部が確認できない縄文土器の深鉢が倒された状態で検出されており、埋甕の可能性も考えられる。

覆土　不明。

出土遺物（第 234 図）

1 は縄文土器の深鉢で、曽利Ⅳ式に帰属する。地紋に縄文を施し、口縁部から底部にかけて 2 条 1 単位の縦位沈線が垂下する。また、口縁端部には横位沈線と渦巻き文が巡る。底部は欠損しており、胎土には多量の金雲母がみとめられた。

時期　1 から、曽利Ⅳ式期（縄文時代中期後半）の土坑と考えられる。

ピット

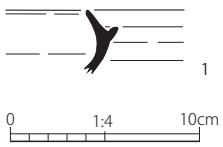
遺構（第 235・236 図）

残存状況　調査区域内で 144 基検出され、その多くは径 30 ～ 50cm 程度の円形のピットである。この中には竪穴建物や掘立柱建物の柱穴が含まれる可能性もあるが、検出状況からは判断できない。

出土遺物（第 238 図）

Pit10-1 は須恵器坏身で、口唇部に緩い面を有する。遠江Ⅲ期中葉（6 世紀後葉頃）と考えられる。

（小島 利史・藤村　翔・志崎 江莉子）



第 238 図　Pit10　出土遺物実測図

第4節　遺構外出土遺物

包含層や表採等、遺構外から出土した遺物の内、108点を図示した（第239図～第243図）。

縄文土器　1～18は縄文土器で、その内の14は加曽利EⅣ式で、それ以外の土器は全て曽利Ⅳ式に帰属する。

1～8は口縁部である。1は隆帯により区画がされ、区画内を斜位の条線で充填する。また、2条の横位沈線が巡り、沈線の間には刻み目を施す。2は沈線による渦巻文を有する。棒状工具によりはっきりと施文し、沈線の深さは3mmを測る。3は浅い沈線により区画し、区画内に斜位の条線を充填する。口縁端部は横位沈線が巡る。4は横位沈線を施し、5は沈線区画内に蛇行沈線文と斜位の沈線を施文する。6は波状口縁である。口縁端部の傾きに沿った沈線と、横位の条線を施す。7は隆帯により区画をし、隆帯の内側には縄文を充填する。8は口縁端部が肥厚しており、断面四角形の横位隆帯が巡る。

9は、隆帯により区画し、区画内には綾杉状沈線を充填する。10は深鉢の胴部で、縦位の低隆帯と斜位の条線を施文する。低隆帯両脇は指ナデを施す。11は深鉢の肩部である。把手を有し、隆帯により施文がされており、渦巻き文がみとめられる。12は縦位の隆帯を施し、地紋として櫛歯状工具により横位の条線を施文する。13は沈線区画内に綾杉状沈線を充填し、中央に蛇行沈線文を施す。

14は加曽利EⅣ式に帰属する胴部の土器片である。沈線区画内に縄文を充填する。

15は隆帯による渦巻文を施し、土器片の下部に刻み目が確認できる。16は2条の縦位沈線と、斜位の条線を施す。17は深鉢の底部で、2条の低隆帯により等間隔に区画をし、区画内には綾杉状沈線と蛇行沈線文を施す。18は無紋の土器底部である。

弥生土器　19・20は弥生土器の壺の頸部である。文様帯はハケメ調整後に羽状文を施しており、横位沈線により区画する。また、軽微ではあるがミガキが確認できる。これらの特徴から有東式Ⅱ～Ⅳ期（弥生時代中期後葉）に相当すると考えられる。

石　器　21～27は砂岩を用いた打製石斧である。21・23・24・25・26は短冊形で、26は製作時に剥離した剥片が伴う。22は打製石斧の一部が破損したもので、27は分銅形である。

28・29は砂岩を用いた磨敲石で、いずれも表裏2面を磨面としている。28は端部に敲打痕を有し、29は長軸方向の片端に軽微な敲打痕が認められる。30は砂岩を用いた石皿で、1面のみ磨面とする。

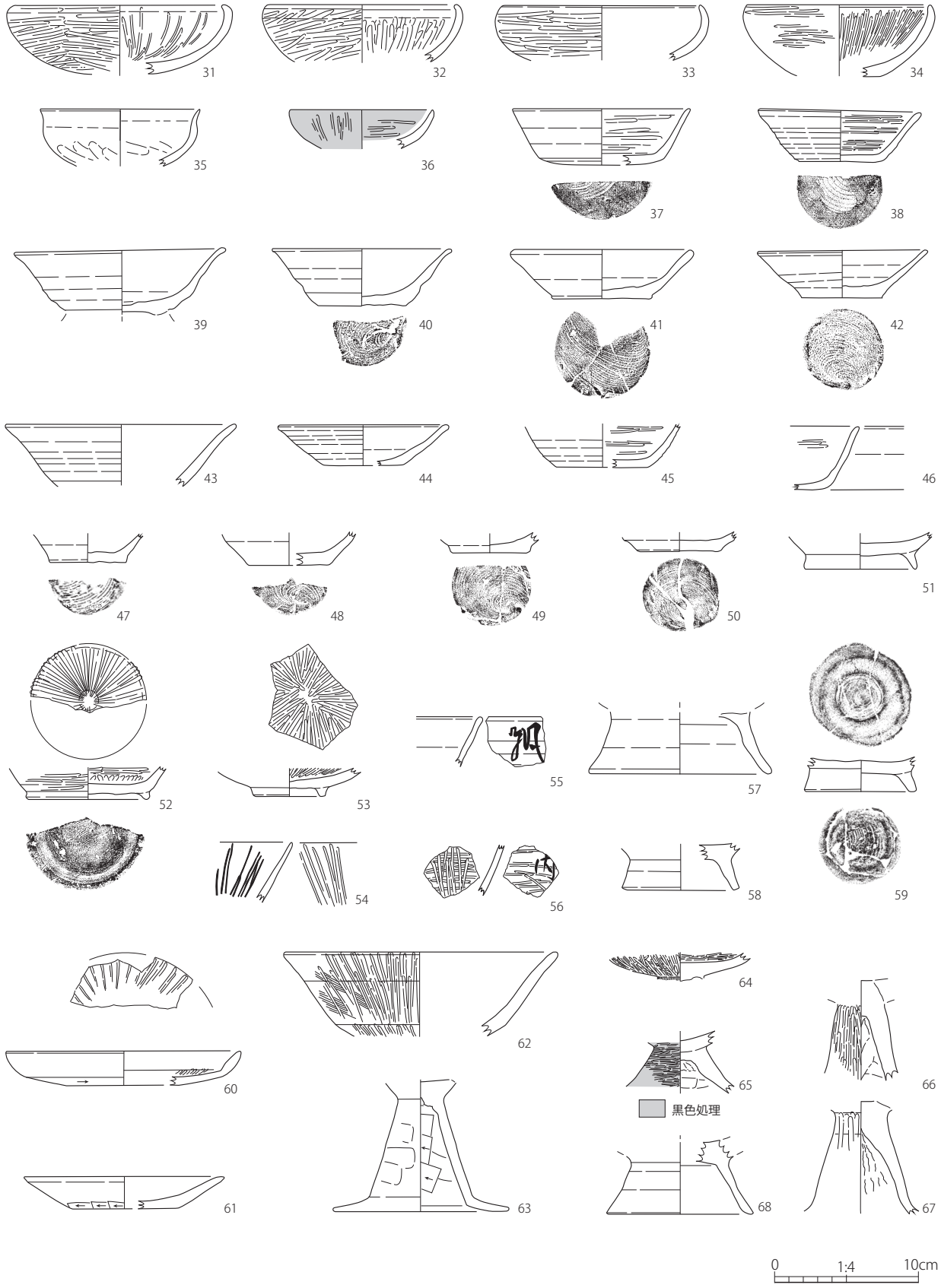
土師器　31～79は土師器で、31～34は口縁部が内湾する坏である。31は丸底で、外面にヨコミガキ、内面にタテミガキを施す。32も同様の調整をし、器形も31と似ているが、調整がやや粗い。33は器高が低く、外面にヨコミガキ、内面にヨコナデを施す。34は平底で、外面にはヨコミガキ、内面にはタテミガキを施す。

35は須恵器坏蓋模倣の坏である。内外面に指ナデがみとめられ、口縁部は回転ナデにより外反する。粗雑な作りで、焼成も甘い。36は小型の坏で、黒色処理を施す。内外面共にヨコナデの後、外面はヨコミガキ、内面はタテミガキを施す。

37・38・40～50は平底の坏である。37は底部の縁をヘラケズリし、底面にはヘラ切り痕が残る。外面にはヨコナデ、内面にはヨコミガキを施す。38は底面にヘラ切り痕が認められ、内面にはヨコミガキを施す。40～45はいずれも内外面共にヨコナデを施し、40～42は底部に糸切り痕が残る。40は口縁端部が外反する。41は焼成が甘く、口縁部はやや肥厚する。42は器壁がやや薄い。43は口縁部が外側に開き、44は器高が低く小型である。45は内面のみ細くヨコミガキの痕が確認できる。46は全体的に磨滅しているため不明瞭であるが、内面にはヨコヘラミガキの痕が残る。

47～50は坏の底部である。いずれも底径が5cm程で、内外面共にヨコナデを施し、糸切り痕がみとめられる。48のみ体部下部がわずかに屈曲し、稜を有する。50は外面全体が黒く、煤が付着したものと考えられる。53は高台を有する坏で底部内面に放射状のミガキを施す。高台は直径4.4cmと小

第 239 図　遺構外　出土遺物実測図①



第 240 図　遺構外　出土遺物実測図②

型である。54 は坏の口縁部で、外面にタテミガキ、内面には黒い放射状のミガキがみとめられる。口縁部は直線的に立ち上がる。

55・56 は墨書が記された土師器の坏である。55 は口縁部で、外面に墨書が記されているが、文字は判別困難であった。56 は外面に「内」と記されているとみられる。外面はヨコヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキ後にタテヘラミガキを施す。

39 は高台をもつ埦であるが、高台部は欠損している。内外面共にナデ調整がされ、焼成は甘く、やや粗雑な作りである。腰部がくびれており、口縁部は外反しながら立ち上がる。51 は埦か皿の高台で、高台部は直線的に開く。52 は埦で、底部内面に放射状のミガキを施す。底部外面にはヘラ切り痕が残っており、低い高台を有する。残存する器壁の内外面にヨコミガキがみとめられる。

57 ～ 59・68 は高台である。57 は足高高台で、端部がやや肥厚しており、内外面ともにナデ調整を施す。58 は断面長方形のやや高い高台で、内外面にナデ調整がみとめられる。59 の高台はやや厚く、底面に糸切り痕を有する。68 は埦の高台である。脚部は低く、直線的に広がるが、裾部分でわずかに屈曲する。

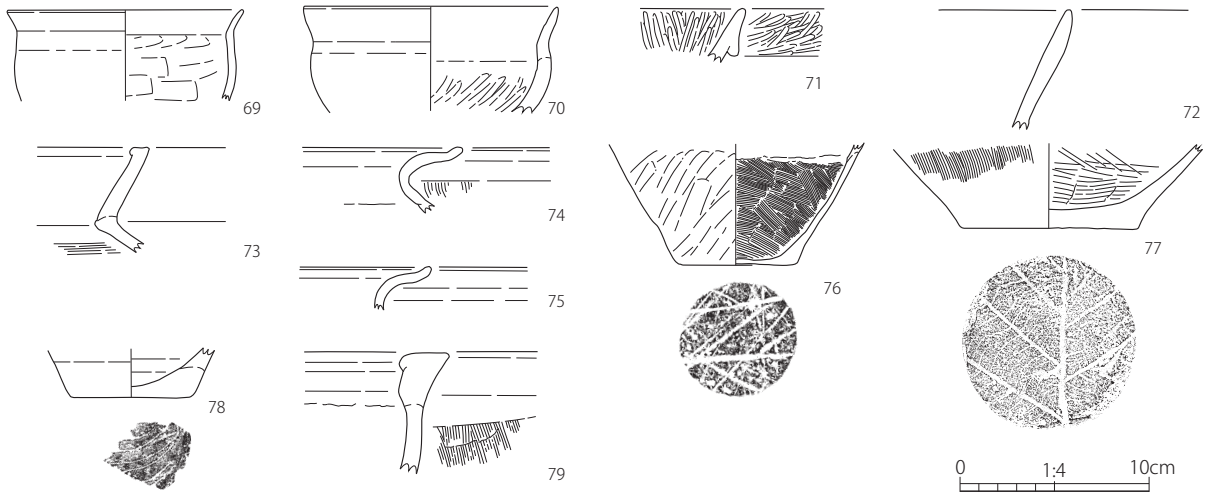
60・61 は皿である。60 は甲斐型皿で、底部外面に回転ヘラ削りを施し口縁部は肥厚する。底部内面には放射状のミガキを施す。61 は口縁が直線的に立ち上がり、体部内外面はヨコナデ、体部外面下部はヘラケズリを施す。

62 ～ 67 は高坏である。62・64 は高坏の坏部である。62 は外面にタテミガキを施し、内面も磨滅しているがわずかにタテミガキの痕が確認できる。坏部下方に明確な稜を有する。64 は外面にタテハケ後タテヘラミガキ、内面にヨコヘラミガキを施す。

63・65・66・67 は高坏の脚部である。63 は外面はタテハケ後にヨコヘラミガキを施し、内面はヨコヘラナデを施す。65 は外面を黒色処理し、また、密なヨコヘラミガキがみとめられる。内面はヨコヘラナデとしぼり痕が確認できる。66 の脚部は垂直気味に立ち上がる。脚部外面には密なタテヘラミガキがみとめられ、内面にはしぼり痕とヘラナデの痕を有する。坏部の底部内面が一部残存しており、ミガキが確認できる。67 は内外面共に磨滅しているため不明瞭だが、外面全体にタテハケを施した後、坏部との接合部分をヨコナデし、タテミガキによって仕上げていると推察する。内面にはしぼり痕がみとめられ、器壁は裾部になるにつれて薄くなる。

69 は小型の甕である。内外面ヨコハケの後ヨコナデを施し、口縁部は直線的に立ち上がる。70 は鉢である。口縁部はヨコナデ、内面には一部ミガキがみとめられる。71 は壺の口縁部である。内外面共にヘラミガキが施されており、複合口縁であると考えられる。

72 ～ 78 は土師器の甕である。72・73 は口縁部で、72 は内外面共にヨコナデがされ、やや肥厚しながら立ち上がる。73 は口唇部に面を有し、頸部はくの字形に屈曲する。内面の一部にヨコハケメが



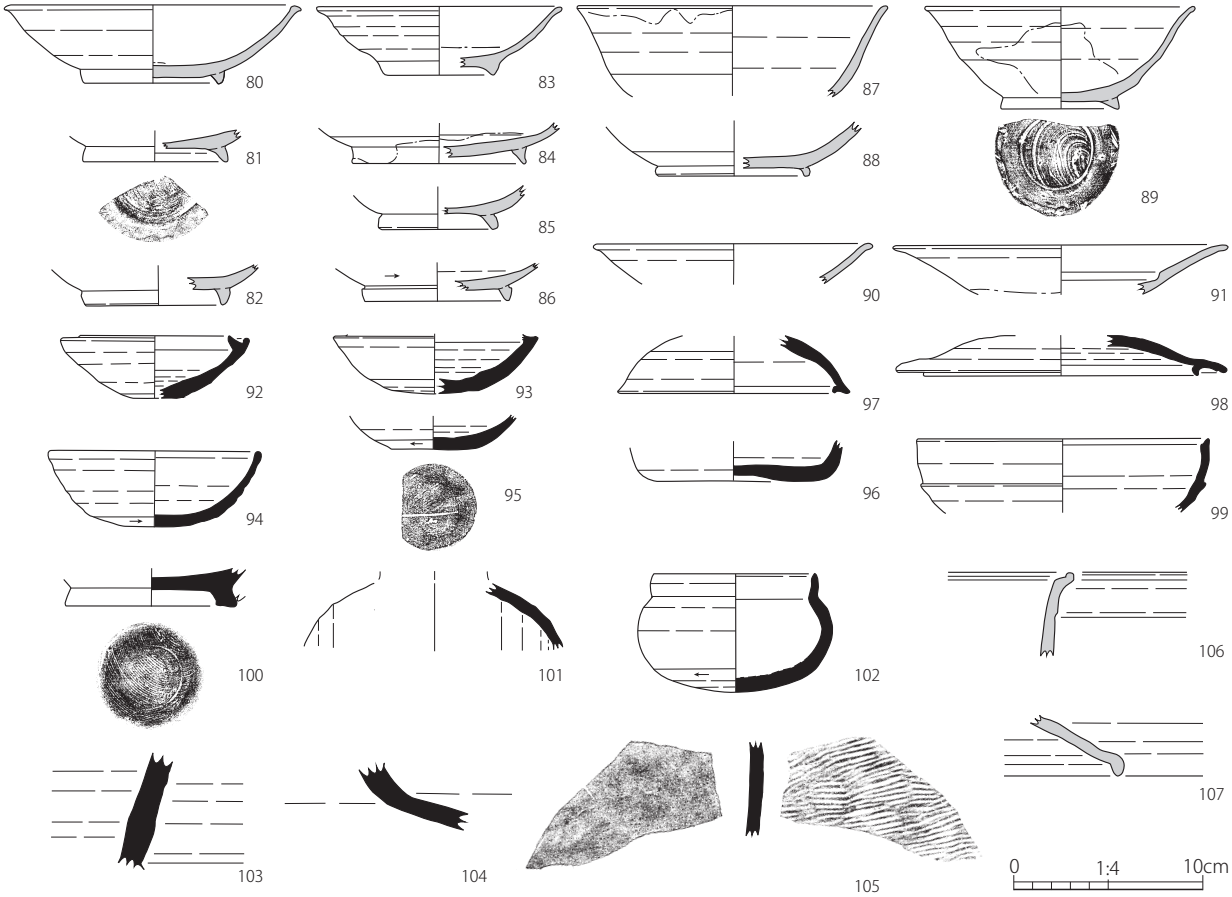
第 241 図　遺構外　出土遺物実測図③

みとめられる。74・75 は遠江系水平口縁甕で、胎土に金雲母を多く含む。74 は頸部が強く曲がるが、75 は 74 と比べて頸部の屈曲がやや緩やかである。76 は長胴甕の底部である。外面にナナメヘラナデ、内面にナナメハケメを施す。内面のハケメは底部付近がやや粗く、上部になるにつれて細かくなる。77 は甕の底部で、底部外面には木葉痕を有する。体部の外面にはタテハケメ、内面には目の粗いナナメハケメを施し、内面下部のハケメ調整は調整工具の始点の痕が明瞭に残る。78 は小型の甕の底部である。底部外面には糸切り痕に似たヘラ描文を施す。79 は堝の口縁部である。内面はヨコハケ後にタテナデ、外面はタテハケの後にヨコナデを施す。

灰釉陶器　80 ～ 89 は灰釉陶器の碗である。80 は三日月高台を有し、底部にはヘラケズリの痕が残る。磨滅しているが、内面に釉の痕が認められた。81 は高台がやや内湾し、底部は糸切り後にナデ調整を施す。内外面に釉を施し、内面には重ね焼の痕が残る。82 は、強く内湾する三日月高台を有し、内面には磨痕がみとめられる。83 は、端部が尖った低い高台を有する。外面は磨滅しているが、内面は施釉が確認できる。84 は端部が尖った外反する高台を有する。内外面共に施釉し、内面には重ね焼き痕が残る。また、内面には磨り痕が確認できるため、転用硯として使用されていた可能性も考えられる。85 は内面が磨滅しており、断面長方形の高台を有する。86 は断面三角形の高台をもつ。底部、体部外面に回転ヘラケズリの痕が残り、高台の根本に面を有する。見込み部のみ施釉が確認できる。87 は、ハケによる施釉を内面と外面端部に施す。88 は体部外面下部にヘラケズリを施し、内面に施釉が認められる。小型の角高台を有す。89 は高台が直線的に開き、底部には糸切り痕を有する。内外面の一部に、漬け掛けによる施釉が確認できる。

90・91 は灰釉陶器の皿である。90 は、釉は確認できないが、口縁端部が玉縁状で器壁が薄いことなどから灰釉陶器と判断した。91 は段皿で、内外面に施釉が確認できる。

須恵器・陶器　92 ～ 105 は須恵器で、 その内の 92 ～ 96 は坏身である。92･93 は受け部を有する。



第 242 図　遺構外　出土遺物実測図④

92は口唇部が立ち上がり、受け部よりもわずかに高い。93は受け部が短く、口唇部は一部欠損している。94は内面に自然釉が付着し、底部はヘラ切りの痕が確認できる。95の体部外面下部は回転ヘラ削りを施し、底部外面には窯記号「－」がみとめられる。96は箱形を呈する。底部中央は内側に向かって盛り上がっている。

97・98は坏蓋である。97は口縁部に返りを有し、98は返りと口縁端部が1.5cm程離れている。外面に自然釉が付着する。

99は高坏で、突帯状の稜線が巡り、口縁端部は内傾面を有する。坏蓋の可能性も考えられる。100は須恵器の底部で、瓶、もしくは壺の一部であると考えられる。底部は糸切りの後に高台を貼付し、底部内面には自然釉が認められる。101はフラスコ瓶である。風船技法で作られたと推定され、外面には自然釉が付着する。102は短頸壺である。103は甕であると考えられる。器壁は厚く、下部の割れ口から外側に向かって広がると思われる。

104・105は外面のみ酸化焔気味の焼成により灰赤色の色調を呈する。104は甕の肩部であると考えられる。105は甕の体部で、外面にはタタキ目がみとめられる。

106は近世の陶器である。内外面共に赤灰色で、口縁部の形から角丸形の鉢であると考えられる。107は陶器の蓋で、内外面に鉄釉が施される。外面は釉を一部擦り取った痕が見られる。

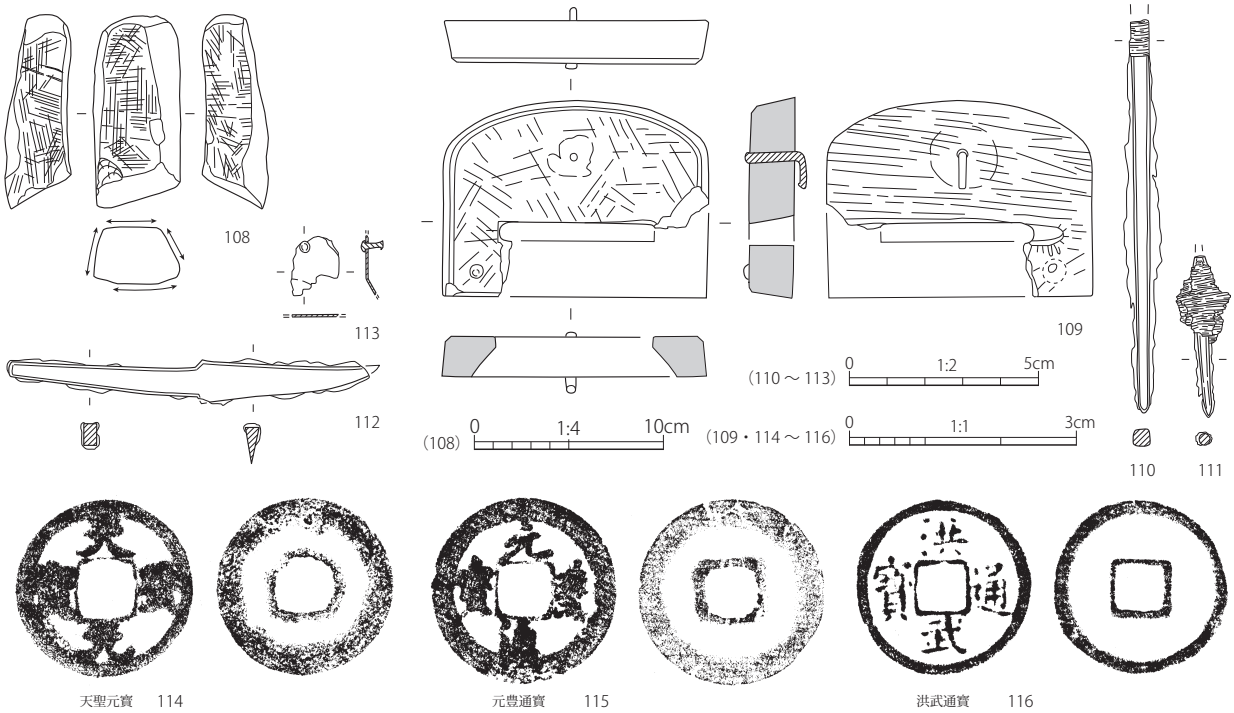
石製品　108は砥石である。断面四角形で、4面に磨痕が認められる。特に上面は縦方向に磨った痕が明瞭に残る。

109は石製の腰帯具である。上面の角は面取りされ、全体的に円滑で精緻な作りで、中央部、左下部に鋲のための穿孔がみとめられる。欠損している右下部にも同じような加工を施していたと考えられる。上部中央部の孔には鋲が残っており、左下の孔にもサビ痕が残る。恐らく鉄地銀張りの鋲であると考えられる。

金属製品　110・111は鉄釘である。110は断面四角形で端部に少量の木質がみとめられる。111は断面が丸い。両面に木質が残っており、木目の様子から板目面であると推察する。112は刀子で、背の部分がやや湾曲する。

113は種別不明の銅製品である。欠損が著しく形状は不明だが、鋲が残る。端部が屈折しており、不明瞭ではあるが鋲の周辺に有機質が付着しているとみられる。114～116は銭貨である。114は天聖元寶、115は元豊通寶、116は洪武通寶である。

（志崎 江莉子）



第243図　遺構外　出土遺物実測図⑤

第 4 章　まとめ

第 1 節　縄文時代・弥生時代の概略

縄文時代　宇東川遺跡 F 地区では縄文包含層まで調査区全体を掘り下げることはかったが、少なくない量の遺物を確認することができた。

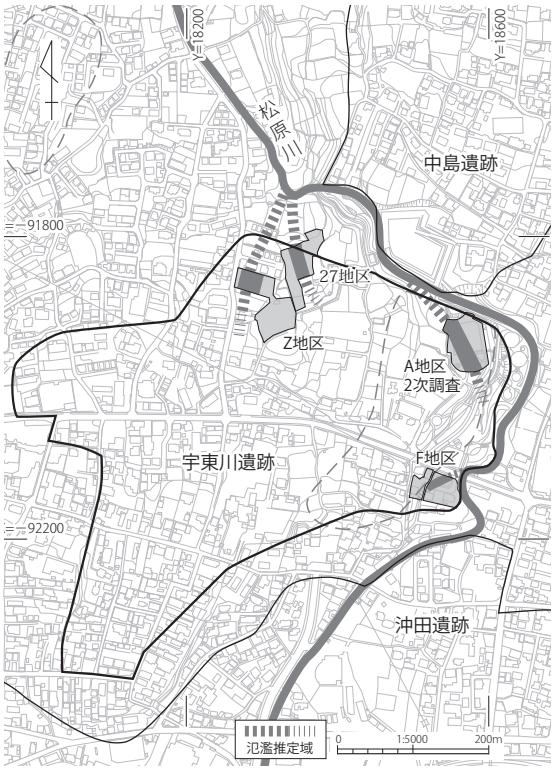
調査結果を概観すると、確認調査では、設置した 5 箇所のトレンチの内、1Tr ～ 4Tr より縄文時代の遺物が出土した。本調査では、調査区東側に設定した深掘りトレンチと調査区西側全体を縄文包含層まで掘り下げた。調査全体を通して検出された遺構は SK25 のみであった。

本書では縄文土器を 41 点図示しており、内訳は曽利Ⅳ式 40 点、加曽利 E Ⅳ式 1 点である。掘削範囲が狭小であったため断定はできないが、出土した土器から、縄文時代中期後半の限られた期間の居住地であると考えられる。

また、当調査区の縄文遺物包含層は 3 層に分かれており、間に挟まる無遺物層には埋没した旧河道の層が含まれる（第 4 図、p.4）。出土土器の年代が限定的であることを踏まえると、F 地区は度々水害に見舞われていた可能性があり、長期的な居住には適さなかったと考えられる。

一方、F 地区より北側では縄文時代中期～後期中葉にかけて集落が築かれる。宇東川遺跡 A 地区の集落は中期後半～後期前半に盛期を迎えており（若林編 2012）、また、松原川の左岸に位置する中島遺跡では、後期初頭～後期中葉の遺構・遺物が検出されている。縄文時代中・後期には、松原川の湾曲部周辺に住居が集中していたと考えられる。

また、A 地区 3 ～ 6 次調査地点では、F 地区とは異なる安定した土層堆積が確認されたが、一方で A 地区 2 次調査地点の一部では、河川の氾濫による自破砕溶岩角礫が縄文遺物包含層に含まれており、同じ A 地区内でも様相が異なる（久松 1991）。加えて A 地区の西側に位置する Z 地区や 27 地区でも自破砕溶岩角礫を含む層から縄文土器が出土しており、河川の氾濫があったと推察される（志崎 2020）。



第 244 図　松原川氾濫推定域図（縄文時代中・後期）

このように、宇東川遺跡内には氾濫に見舞われた居住地が多数存在する。河川の氾濫は生活に影響を及ぼす災害であり、集落の様相も水害の有無によって違いがあっただろう。今後の調査の累積によって松原川の影響がより明確になることが望まれる。

弥生時代　F 地区の調査では包含層から 2 点の弥生土器が出土しており、これらは有東式のⅡ～Ⅳ期（中期後葉）に帰属すると考えられる。これまで宇東川遺跡内では、弥生時代前期・中期の痕跡が確認されていなかったため、中期後葉の土器を F 地区内で確認できたことは大変意義深い。

当遺跡の南には、愛鷹山麓丘陵末端部から浮島ヶ原低地の西北端にかけて広がる沖田遺跡がある。弥生時代になると、小規模水田での稲作が浮島ヶ原低地で始まったと考えられており、沖田遺跡内でも稲作が開始したと評価されている（藤村 2017）。

また、浮島ヶ原低地周辺の中期後葉の遺跡は微高地上に分布する傾向があり、微高地を居住域としながら低地部で稲作を行う集団が存在していたと考えられる（近藤 2000）。宇東川遺跡の南端、F 地区周辺を拠点としながら低地内で稲作を行う集団が存在したとしても不自然ではなく、宇東川遺跡と沖田遺跡の関連性は注視していく必要があるだろう。

浮島ヶ原低地周辺の遺跡で確認された弥生時代前期・中期の痕跡は不明な点が多い。しかし後期になると、浮島ヶ原低地を取り囲む微高地上に明確な生活域がみとめられるようになり、愛鷹山麓に位置する的場遺跡や宮添遺跡、沼津市の雌鹿塚遺跡などでは集落が形成される。また、弥生時代後期には宇東川遺跡でも住居がみとめられるようになり、その後古墳時代から律令期にかけて集落が営まれていく。当調査区で出土した弥生土器は宇東川遺跡の空白期を埋める重要な資料であり、今回の結果が今後の調査に繋がることが期待される。

（志崎 江莉子）

参考文献

石川治夫　1990『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅱ　遺物編』沼津市教育委員会

近藤　舞　2000「駿豆地方の弥生時代中期後半の遺跡群」『静岡県考古学研究』静岡県考古学協会

佐藤祐樹・若林美希　2020『沖田遺跡第 155 次調査地点』富士市教育委員会

志崎江莉子　2020『宇都川遺跡 Z 地区』富士市教育委員会

志村　博　1986『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』富士市教育委員会

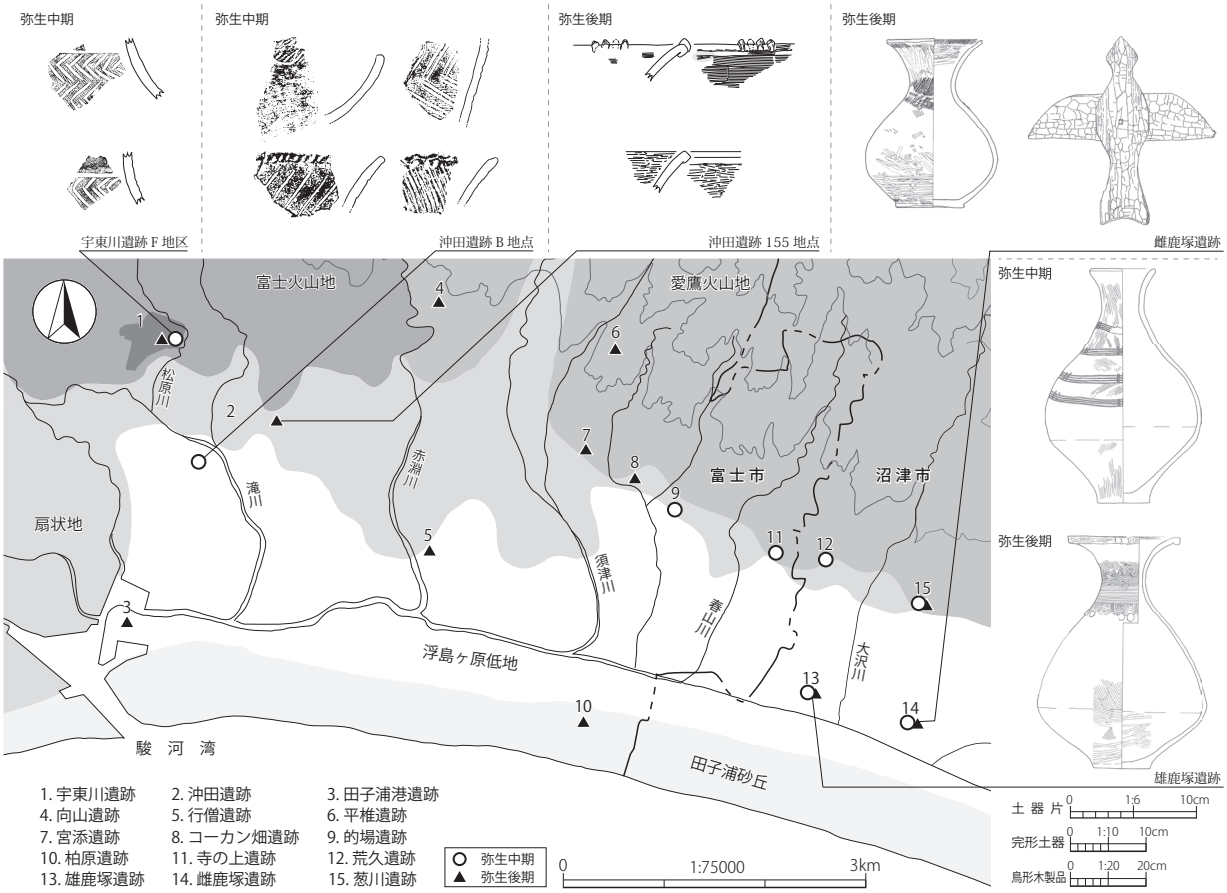
鈴木裕篤　1989『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』 沼津市教育委員会

沼津市　2002『沼津市史　資料編　考古』

久松義昭　1991『宇東川遺跡 A・B・C 地区発掘調査概報―平成 2 年度―』富士市教育委員会

藤村　翔　2017「浮島沼西岸・沖田遺跡の調査からみた湖沼利用の推移」『富士山かぐや姫ミュージアム　館報』第 32 号　富士山かぐや姫ミュージアム

若林美希編　2012『宇東川遺跡 A 地区』富士市教育委員会



第 245 図　浮島ヶ原低地周辺の主要遺跡（弥生時代中・後期）

第2節　古墳時代から平安時代の遺構・遺物と集落の性格

1　土器の変遷と遺物の特徴

(1) 竪穴建物出土土器の変遷と時期区分

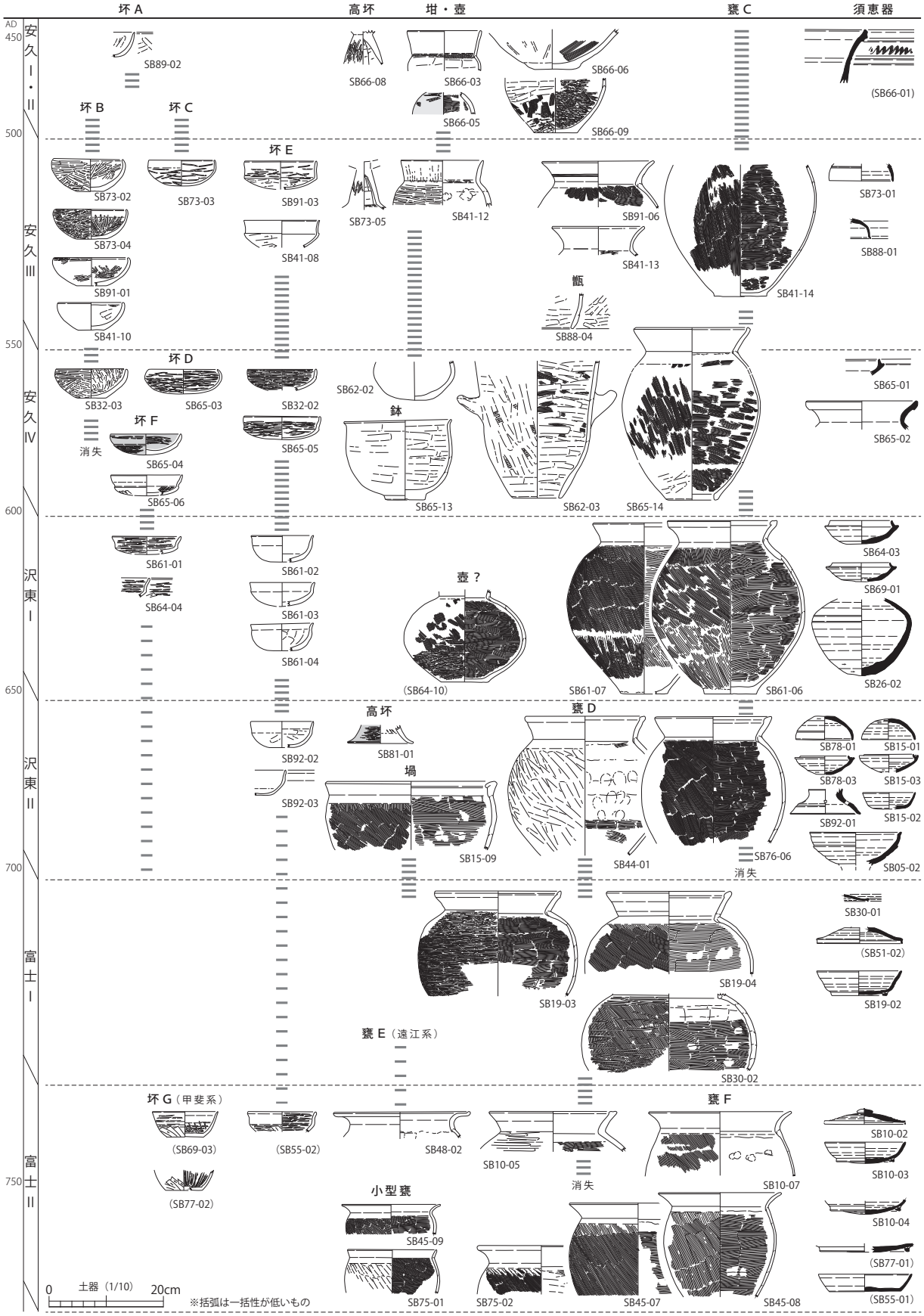
宇東川遺跡F地区の本発掘調査では、合計84棟の竪穴建物が調査され、いずれも出土土器から古墳時代中期から平安時代（5世紀後半から11世紀頃）に帰属すると判断される。駿河東部地域における当該期の土器編年については、山本恵一（山本1995・1999）や池谷初恵（池谷1995・1999）、渡井英誉（渡井1999）、木ノ内義昭（木ノ内2002）、佐野五十三（佐野2008）、植松章八（植松2008）、佐藤祐樹（佐藤2016b）らによって研究が進められてきているが、ここでは先行研究を参考に佐藤および筆者によって近年整理された富士地域の土師器編年（佐藤2021、藤村2021）を軸に、当遺跡の遺構出土土器を中心とした様相を確認しておきたい（第246・247図）。

安久Ⅰ・Ⅱ期　駿河東部地域において須恵器の導入が一般化する段階にあたり、安久Ⅰ期がTK216・208型式併行期、安久Ⅱ期がTK23・47型式併行期（いずれも遠江Ⅰ期）に比定されることから、5世紀後半から6世紀初頭頃の年代が与えられる。「駿豆型坏」とも呼ばれる平底で体部から口縁部にかけて内湾する坏Bが定型化を迎える一方で、口縁部が短く外反する坏Aが残存する。宇東川遺跡F地区では、当該期の坏Bはみられないが、坏Aや口縁部が高く立ち上がる壺などの存在から、SB89・66が該当する。甕類の様相は不明であるが、SB78-6は甑の口縁部の可能性がある。須恵器はSB66で頸部突帯をシャープに作り出す甕の破片が出土しており、当該期のものとなる可能性がある。

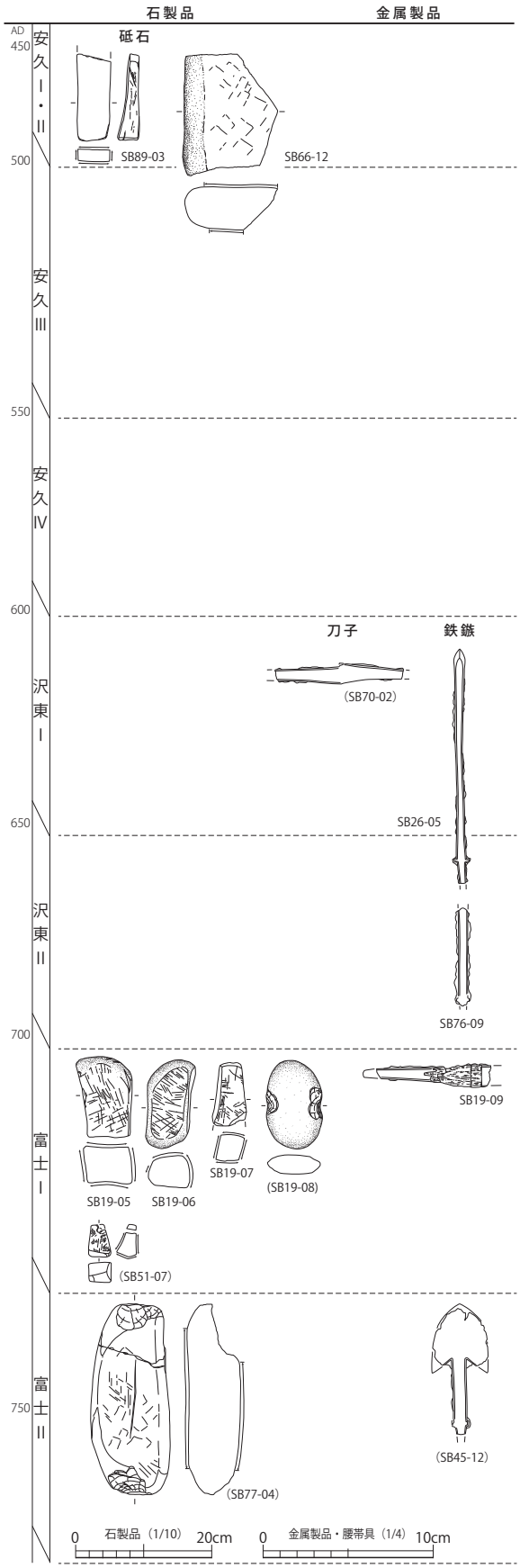
安久Ⅲ期　須恵器坏蓋を模倣した坏Eが登場する段階にあたり、遠江Ⅱ期（MT15型式併行期）に比定されることから、6世紀前葉頃の年代が与えられる。宇東川遺跡F地区では口縁部の立ち上がりの高い坏Eが登場するほか、平底の坏Bや丸底の坏Cが顕在化する段階にあたり、SB41・73・91・88などが該当する。須恵器は、口唇部に端面や内傾面を有する坏蓋があるものの、数量は多くない。坏蓋SB73-01の復原径は11.0cmである。混入品であるが、SB64-01・02の坏蓋も当該期のものである蓋然性が高い。甕は口縁部がくの字形、体部が楕円形で平底の甕Cが確認できるほか、甑（SB88-04）もみられるようである。当該期は須恵器導入の本格化を受け、その先進的形態が在地の土師器の精製品を中心に積極的に模倣された段階として捉えることができる。そのなかで、SB91-06の甕は口縁部外面に平行する2条の沈線が巡っており、これを装飾的意図によるものとみるならば、坏以外の器形においても、一部で須恵器風の装飾が試行された可能性も考えられる。

安久Ⅳ期　比較的広い平底で器高が低く、口径の大きい坏Dが登場する段階であり、遠江Ⅲ期前～中葉（TK10～TK43型式併行期）に比定されることから、6世紀中葉から後葉頃の年代が与えられる。宇東川遺跡F地区では坏Eの口縁部の立ち上がりが低く、坏D・Eのなかに口径13cm前後まで大型化したものがみられるようになる段階であり、SB32・62・65などが該当する。須恵器坏蓋模倣の内湾口縁で、黒色処理が施されることも多い坏Fが、この段階から登場する。また、角状の把手が付く甑（SB62-03）がみられる一方で、甕Cの形態をとる甑（SB65-14）や、異形の鉢（SB65-13）、粗雑な壺？（SB62-02）など、特殊な器種の目立つ時期でもある。須恵器は坏類や壺類もみられるが、数量は少ない。

沢東Ⅰ期　坏Fと坏E、甕Cが主体となる段階であり、遠江Ⅲ期後葉～末葉（TK209型式併行期・飛鳥Ⅰ）に比定されることから、6世紀末から7世紀前葉頃の年代が与えられる。次の沢東Ⅱ期も同様であるが、宇東川遺跡F地区では、潤井川流域の沢東A遺跡や東平遺跡と比べて坏E・Fの精製器種が少なく、粗製の坏E（SB61-02～04）が目立つ傾向にあるが、SB26・61・64・69などが該当する。壺としたSB64-10は類例のない形態であるが、ミガキを多用する特徴から、奈良時代まで降る可能性もある。須恵器は依然として坏類や壺類中心であるが、前代までと比べて僅かに数量が増加している。



第246図　宇東川遺跡F地区における古代遺物の変遷①



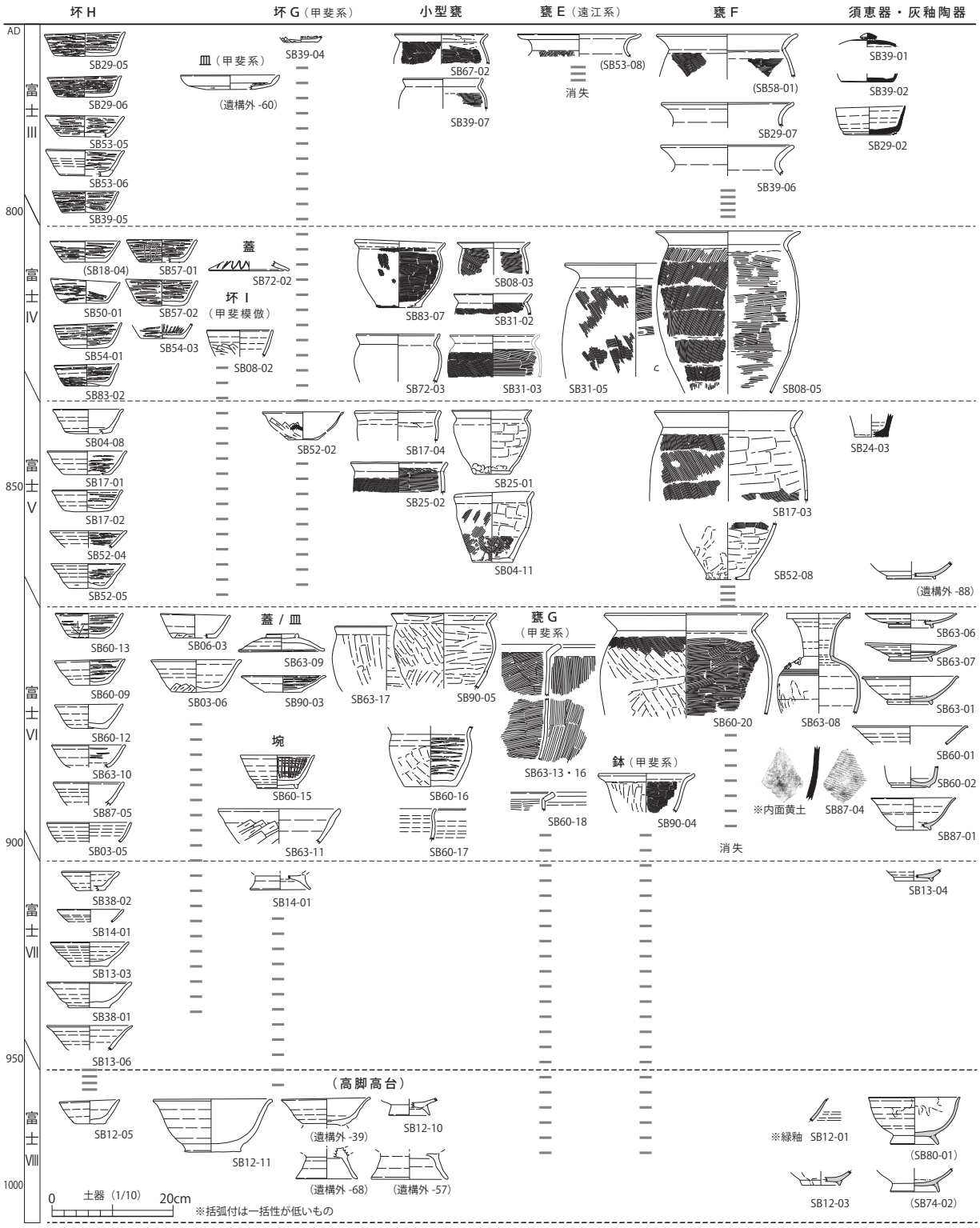
第 246 図　宇東川遺跡 F 地区における古代遺物の変遷①

沢東Ⅱ期　坏 F と坏 E、甕 C に加え、甕 D が登場する段階であり、遠江Ⅳ期前葉～末葉（飛鳥Ⅱ～Ⅴ）に比定されることから、7 世紀中葉から後葉頃の年代が与えられる。宇東川遺跡 F 地区では明確な坏 F がみられないものの、坏 E や甕 C に加え、体部の球胴化が進んだ甕 D のほか、黒色処理された高坏などもみられる。須恵器は坏類の増加が著しく、口縁部の立ち上がりが低く小型化した坏身（都城の杯 H）が主体となるが、受け部のない坏身や返りのある坏蓋（同杯 G・杯 B）が SB15-02 のほか、混入品ではあるが SB04-01・02、SB24-01、SB52-01、SB53-02 などに少量みられる。また半球形の椀形高坏（SB05-02）や脚付壺類とみられる脚部（SB92-01）など、多様性に富んだ器種がみられるようになる。7 世紀後半においても器径 10cm 前後のいわゆる須恵器杯 H が主体となることについては、都城周辺でさえも集落の地域性や階層性の程度により飛鳥Ⅱの様相である杯 H が 7 世紀後半まで残存するとした小田裕樹の指摘にもある通り（小田 2020）、駿河東部地域の一般的な集落においては極めて普遍的な現象であると考えられる。

富士Ⅰ期　甕 D に加え、湖西産須恵器の有台坏身や返りのない摘蓋が主体化する段階であり、遠江Ⅴ期前半（平城Ⅰ）に比定されることから、8 世紀前葉頃の年代が与えられる。土師器では遠江系の甕 E がこの時期に増加するほか、粗製の坏 E も東平遺跡などではみられるが、宇東川遺跡 F 地区ではこの時期の明確な類例がない。古墳時代以来の土師器の坏類が、ほぼ湖西産の有台坏身と返りのない摘蓋に置き換わった段階として捉えられ、SB19・30・36 などが該当する。

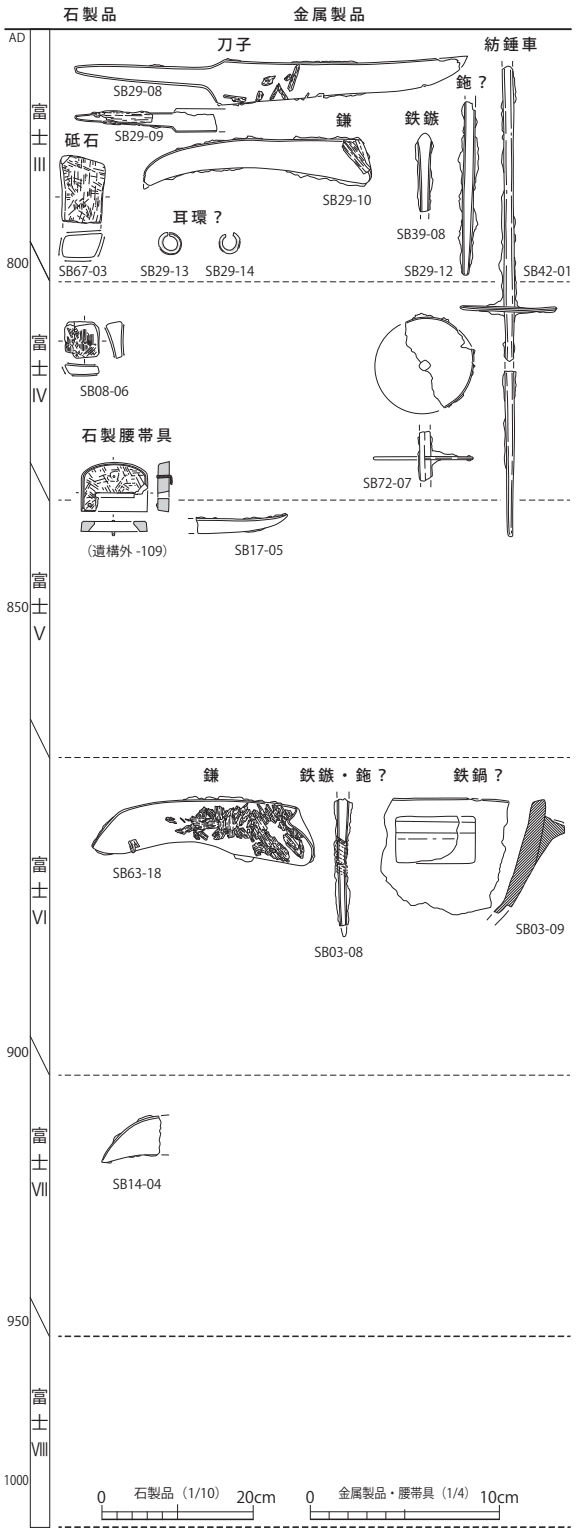
富士Ⅱ期　甕 D が大きく減少する一方で、長胴甕である甕 F が主体となる段階であり、8 世紀中葉頃の年代が想定される。土師器ではいわゆる甲斐型坏（坏 G）が登場するほか、甕 E や小型甕が前段階より増加する。須恵器は依然湖西産の蓋坏が多い一方で、東平遺跡などでは助宗産の坏類が登場する段階でもあるが、宇東川遺跡 F 地区では明確な例がみられない。SB10・45・48・75 などが該当する。

富士Ⅲ期　主体化した甕Fに加え、箱形でミガキを多用する坏Hが登場する段階であり、8世紀後葉頃の年代が想定される。土師器坏の復活に伴い、須恵器坏類の割合が大きく減少するが、助宗産を中心に少量存在する。当該期の坏Hは体部内外面にヨコミガキ、見込み部に放射状ミガキを施すものが多く、器高に対して底径が大きい形態のものが主体となる点に特色がある。煮炊具は小型甕や甕Fが中心であり、甕Eはこの段階までしかみられない。SB29・39・53などが該当する。



第247図　宇東川遺跡F地区における古代遺物の変遷②

富士Ⅳ期　坏Hの底径の縮小化が始まり、甲斐型坏の影響で外面にケズリを多用する坏Iが登場する段階であり、9世紀前葉頃の年代が想定される。坏Hは器高に対して底径が縮小した形態のものが増加し、東平遺跡などでは外面のヨコミガキを省略するものも現れ始める。小型甕や甕Fが煮炊具の主体となることは前段階と変わらない。SB08・31・54・57・83などが該当する。なお、宇東川遺跡ではこの段階の前後も含めて東平遺跡などの郡家周辺集落よりも甲斐型の坏Gやその影響の強い坏Iが少ない（久松1992）。



第247図　宇東川遺跡F地区における古代遺物の変遷②

富士Ⅴ期　椀形の坏Hが主体となるほか、灰釉陶器の導入が始まる段階であり、9世紀中葉頃の年代が与えられる。坏Hは底径が小さく器高の高い椀形のものとなり、体部外面がナデ調整で仕上げられるものが大半となる一方で、内面のヨコミガキは残る。口唇部をわずかに内湾させる小型甕が増加するのもこの段階である。SB17・24・25・52などが該当する。東平遺跡や三新田遺跡では、富士Ⅳ～Ⅴ期にK-14段階の灰釉陶器が伴うようになる。宇東川遺跡F地区では、共伴資料はないものの、遺構外-88が当該期の可能性がある。

富士Ⅵ期　調整の粗雑化した椀形の坏Hと外面ナデ調整の甕Fが主体となる段階であり、9世紀後葉頃の年代が想定される。坏Hは内外面ともにナデ調整のものが増加する。また、坏Gはもとより、甕Gや小型甕、鉢などの大型器種にも甲斐系の器種が目立つようになるのがこの段階の大きな特色である。一方、在来系の甕Fは外面板ナデ調整のものが主体となる。灰釉陶器もこの段階に出土量が大きく増加しており、主としてK-90段階から一部O-53段階のものが入っている。宇東川遺跡F地区においても、甲斐系の器種や灰釉陶器がこの段階に増加する。SB03・60・63・90などが該当する。

富士Ⅶ期　底部糸切りの坏Hと高台埦が主体となる段階であり、10世紀前半頃の年代が想定される。坏Hは内外面ナデ調整で底部に回転糸切り痕を残すものが多数となるほか、灰釉陶器碗の体部や高台形態を模倣した土師器の高台埦が登場する。煮炊具の甕Fは前段階までに消失し、甲斐系の甕Dや鉢、清郷系堝が増加する。灰釉陶器は一部K-90段階から主としてO-53段階のものが入っている。宇東川遺跡F地区では煮炊具の様相が不明である。SB13・14・38などが該当する。

富士Ⅷ期　底部糸切りの坏Hのほか、高脚高台の埦や皿が増加する段階であり、10世紀後半から11世紀の年代が想定される。なお、灰釉陶器はH-72段階から百代寺段階を含むとみられる。この段階については細分の余地があるものの（植松2008）、現状では資料が少なく、さらなる類例の増加を待ちたい。宇東川遺跡F地区ではやはり煮炊具の様相が不明であるが、遺構外出土遺物も含めると、高脚高台の破片や当該期の灰釉陶器が一定量存在する。SB12などが該当する。

(2) 石製品・金属製品の概要と生業

宇東川遺跡F地区では、一部の竪穴建物から生活用具や祭祀等に使用された可能性のある石製品や金属製品も出土している。ここではまず、時期別にその概要を確認したのち、そこから推定される集落の特徴的な生業についても言及したい(第246･247図)。

安久～沢東期　5世紀後半から6世紀代では、資料が少ないものの、安久Ⅰ・Ⅱ期において凝灰岩製の砥石（SB89-03）と砂岩製の大型砥石（SB66-12）の存在が確認される一方で､金属製品はみられない。7世紀代では、鉄製の刀子や鉄鏃がみられるが、石製品に良好な資料がない。沢東Ⅰ期のSB26-05は刺関を有する尖根鑿箭式であり、当該期の古墳の副葬品によくみられるものである。

富士Ⅰ～Ⅲ期　8世紀代は資料が増加し、砥石では砂岩製の大・中型品や凝灰岩製の小型品がみられる。また、上部に孔のある提砥（SB51-07）が富士Ⅰ期に確認される。前代に続き刀子や鉄鏃がみられる一方で、富士Ⅲ期の焼失住居であるSB29からは大小の刀子や曲刃鎌のほか、鉋の可能性のある鉄製品、小型の耳環などが出土している。また鉄製紡錘車（SB42-01）もこの時期から登場する。

富士Ⅳ期以降　9世紀以降では、富士Ⅳ・Ⅴ期に凝灰岩製の小型の砥石や石製腰帯具（遺構外109）、刀子、鉄製紡錘車（SB72-07）、富士Ⅵ・Ⅶ期に曲刃鎌（SB63-18、SB14-04）、鉄鏃または鉋（SB03-08）、鉄鍋の可能性のある鉄製品（SB03-09）がみられる。石製腰帯具については後述する。

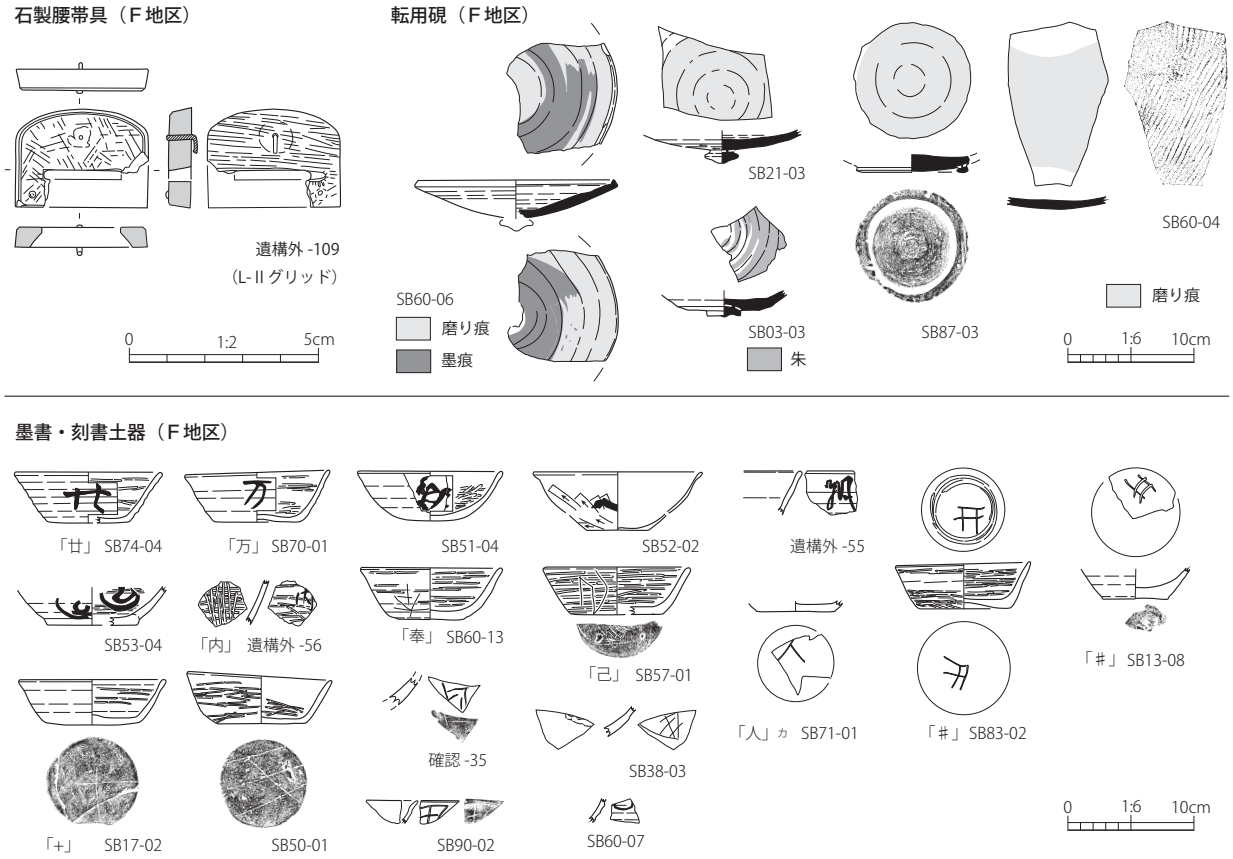
宇東川遺跡の生業の特徴　宇東川遺跡F地区では鉄器の研磨や補修に用いたとみられる砥石が比較的長期間にわたって出土しているが、潤井川流域の沢東A遺跡や田子浦砂丘上の中原遺跡における出土量と比べると、6・7世紀の資料が少ない印象を受ける。宇東川遺跡F地区では8世紀以降に増加する傾向がみられ、集落における生業や鉄器の普及過程にかかわる問題と考えられる。

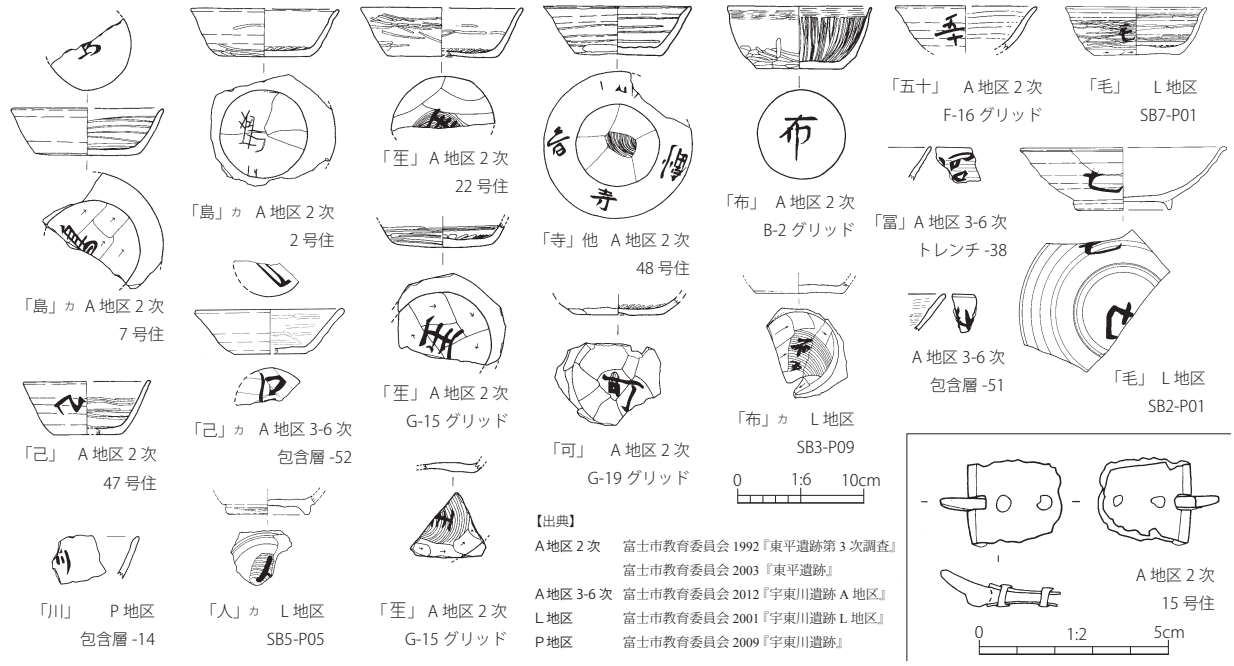
一方で、本遺跡においては8世紀後葉以降とみられる鉄製紡錘車が複数例出土している点は注目される。富士市域では郡家中枢の東平遺跡3・20地区や西部の天間代山遺跡で富士Ⅱ～Ⅵ期の例が確認されるほか（佐藤2018a・b）、宇東川遺跡とも近い比奈古墳群の赫夜姫1号墳から出土している。赫夜姫1号墳は7世紀中頃築造の横穴式石室墳であるが、石室覆土上層から石室外にかけて富士Ⅶ期の土師器や灰釉陶器がまとまって出土しており（中野1968）、トレンチ出土とされる問題の紡錘車は後者の時期に伴う蓋然性が高い。富士Ⅰ期の宇東川遺跡A地区SB5023で石製紡錘車に鉄製紡茎が組み合うものが出土したことも勘案すれば（佐藤2018a・b）、8～10世紀に、宇東川遺跡周辺において金属製の紡錘車を用いた製糸生産が広く展開したことが窺える。

佐藤祐樹は東平遺跡における製織生産と、周辺集落も含めた製糸生産の分業体制を想定するが（佐藤2018a）、そうした体制が8世紀代に富士郡家と交通路で直結する宇東川遺跡や天間代山遺跡などを含めたネットワークの中で急速に整備された一方で、郡家の求心性が薄れた9・10世紀においても、集落の生業として定着した製糸生産が継続されていたことが推察されよう。

(3) 石製腰帯具について

出土遺構の推定　本報告で遺構外出土として報告した石製腰帯具（遺構外-109、第248図）は、確認調査から本発掘調査へと随時移行していた平成7年2月14日出土の遺物であり、遺物台帳や先行研究（植松2003）から､「L-Ⅱグリッド竪穴住居址」から出土したことが判明する。その「住居址」が本発掘調査時のいずれの建物にあたるか、残念ながら記録類が残されておらず、本書ではやむをえず「遺構外」として報告するに至ったが、出土建物の候補をある程度まで絞り込むことは可能である。





第248図　宇東川遺跡の墨書・刻書土器と関連資料

問題のL-Ⅱグリッドは確認調査4Trの西半部に相当しており、確認調査段階から本発掘調査初期段階に掘削を開始していた可能性のある建物は、SB18（富士Ⅰ～Ⅱ期）・SB10（富士Ⅱ期）・SB31（富士Ⅳ期）・SB09（富士Ⅴ～Ⅵ期）に絞ることが可能である。したがって、出土状況からは富士Ⅰ～Ⅵ期（8世紀前葉から9世紀後葉頃）の時期が想定される。

腰帯具の特徴　続いて腰帯具の特徴を詳しくみると、本例は横幅が3.50cm、縦幅が2.55cmを測る山形丸鞆で、鉄地銀張の鋲による3点留めにて革帯に装着されるものである。石材は蛇紋岩あるいは滑石とみられ、緑灰色から緑黒色を呈し、垂孔の形態は横幅2.0cm、縦幅0.28cmの細長孔である。静岡県域の類例を検討した植松章八の研究を参考にすれば（植松2003）、上記の特徴を有する腰帯具は8世紀第4四半期から9世紀前半代に相当するとみられるが、石製腰帯具については9世紀以降に増加する傾向にあることも加味すれば、おおよそ9世紀前半代の資料として評価できる。

小　結　出土遺構および資料の検討から、本例が出土した「L-Ⅱグリッド竪穴住居址」はSB31・SB09のいずれかと考えるのが妥当である。したがって、資料の帰属時期も富士Ⅳ～Ⅴ期（9世紀前葉から中葉）頃に求めておきたい。宇東川遺跡では本例のほかにも、A地区2次調査第15号住居跡において銅製鉸具の出土が報告されており（第248図）、竪穴建物における祭祀利用の可能性も考慮される（植松2003）。いずれにしても、律令官人層や律令的祭祀に関わる人物が当該集落に居住していた可能性を示す資料として評価しておきたい。

（4）文字・筆記具関連資料

宇東川遺跡F地区では、墨書土器や刻書土器、転用硯といった文字・筆記具関連資料も一定量出土している（第248図）。ここではその概要を示しておきたい。

転用硯　須恵器を転用した硯、またはその蓋然性の高い資料が5例みられる。須恵器坏蓋を転用したものは3例あり、いずれも富士Ⅰ～Ⅲ期（8世紀代）のものと考えられる。SB60-06は筆による明瞭な墨痕と磨り痕が内外面ともにみとめられる。SB03-03は蓋内面に筆による朱がみとめられる。一方、瓶類または壺類の底部や甕の胴部を転用したものが2例あり、こちらは共伴資料から富士Ⅵ期（9世紀後葉頃）のものと考えられる。

墨書・刻書土器　墨書土器が8例、刻書土器が10例みられ、すべて土師器坏である。判読できた文字は、墨書が「廿」、「万」、「内」、刻書が「奉」、「己」、「人」ヵ、「+」、「#」である。「#」はいわゆる格子形（ドーマン、道満）印で、祭祀記号である。いずれも一文字墨書（刻書）で、数字や吉祥句、祭祀などを示すものが多いとみられる。坏の形態から、富士Ⅳ期（SB57-01、SB83-02）、富士Ⅴ～Ⅵ期（SB70-01、SB52-02、SB74-04）、富士Ⅶ期（SB51-04）に帰属すると判断されることから、9世紀前葉から10世紀前半頃のものと考えられる。

また、宇東川遺跡A・L・P地区でこれまでに報告されている墨書・刻書土器についてみると（佐藤2018b）、「島」（「鳥」の可能性あり）や「寺」、「己」、「川」、「人」、「一生（則天文字）」、「布」、「五十」、「毛」、「冨」、「町」があり、L地区SB3-P09だけやや字形が小さく「布□」と二文字以上見えるが、多くは一文字墨書（刻書）といえそうである。土器の形態も富士Ⅳ～Ⅶ期（9世紀前葉から10世紀前半）までにはおさまり、9世紀前葉以降に増加する点は宇東川遺跡で広く共通する現象と考えられる。

小　結　以上の分析から、宇東川遺跡F地区では8世紀代から転用硯を用いた筆記などが行われていたとみられるが、祭祀や識別のために墨書・刻書土器が広く用いられるようになるのは、9世紀前葉以降のことと考えられる。

墨書・刻書土器の出土数については、今回の報告によって宇東川遺跡全体で37点を数えるようになった。ただ、郡家中枢の東平遺跡・三日市廃寺跡では171点、西部・潤井川流域の中桁・中ノ坪遺跡で70点、東部・須津川流域の宮添遺跡で61点発見されているので（佐藤2018b）、調査面積の多寡による部分は大きいものの、富士郡内の主要集落と比べると少ない。それでも、浮島沼北西岸の松原川・滝川から赤淵川までのエリアでは最も出土数が多く、奈良・平安時代を通じて同地域の中心的な集落としての機能を保有していたことが窺われる。

2　集落構造の変遷とその特徴

(1) 集落構造の変遷

前項（1）の分析を基に、宇東川遺跡F地区で検出された竪穴建物84棟を時期別に整理し、各建物の推定面積（主軸幅×直交幅）や主軸方位などの情報をまとめた（第2表）。さらに建物面積のヒストグラムを作成し、時期別に整理した（第249図）。竪穴建物の規模は市内他遺跡の状況と比較できるよう、20㎡以下を小型、20～40㎡以下を中型、40～60㎡以下を大型、60～90㎡以下を超大型として便宜上区分している（藤村2020b）。以上の図表から作成した時期別の遺構全体図（第250図）を基礎として、ここでは宇東川遺跡F地区の集落構造の変遷について整理しておく。

安久Ⅰ・Ⅱ期　カマドのある竪穴建物2～3棟と墓の可能性のある土坑1基が存在する。建物面積は18～25㎡程の小型から中型、主軸方位は北西～南東まで様々である。SB88・89は同時存在ではないので、各建物が散在的な立地をしていたことがわかる。SK20は主軸幅1.08m、直交幅0.8mの土坑で、完形の土師器坏と覆土上部に蓋石のような石材を伴うことから、土坑墓の可能性がある。

安久Ⅲ・Ⅳ期　カマドのある竪穴建物6～8棟が存在する。建物面積は12～30㎡程の小型から中型がみられるが、主体は中型建物である。主軸方位は西と北にまとまりがみられるが、カマド位置が判明する例からみれば、松原川方面からの進入路が想定される東向きの建物が目立つ。細別時期からはSB73からSB65、SB41からSB32と、近接する位置への建替も充分想定されるが、同時期の建物間の距離は10～15m程度となっており、前段階に比べて建物密度が高くなっている。

沢東Ⅰ期　カマドのある竪穴建物6～9棟が存在する。建物面積は6～24㎡程の小型から中型で、10㎡未満の建物が初めて登場しており、小型建物が主体となっている。主軸方位は北北東にまとまりがみられるが、カマド位置が判明する例からみれば、前段階を踏襲した東西方位のものと、新出の北北東方位のものがみられる。SB28やSB64はそれぞれ2～3回の建替によるものなので、同時期に存在した建物は2～4棟程度となり、建物間の距離は10m程と考えられる。

沢東Ⅱ期　カマドのある竪穴建物9～11棟が存在する。建物面積は5～24㎡程の小型から中型で、10㎡台の小型建物が主体となっている。主軸方位は北北東にまとまりがみられ、カマド位置が判明する例からみても南向きの建物でほぼ占められるようになっている。SB76・92周辺は建替が著しいので、同時期に存在した建物は3～5棟程度となり、建物間の距離は5～20m程と考えられる。

富士Ⅰ期　カマドのある竪穴建物4～11棟が存在する。建物面積は9～21㎡程の小型から中型で、10㎡台の小型建物が主体である。主軸方位は北北東～北北西にまとまりがみられるが、一部に東向きの建物も存在する。SB19周辺は建替が著しいので、同時期に存在した建物は3～5棟程度となり、建物間の距離は5～10m程と考えられる。

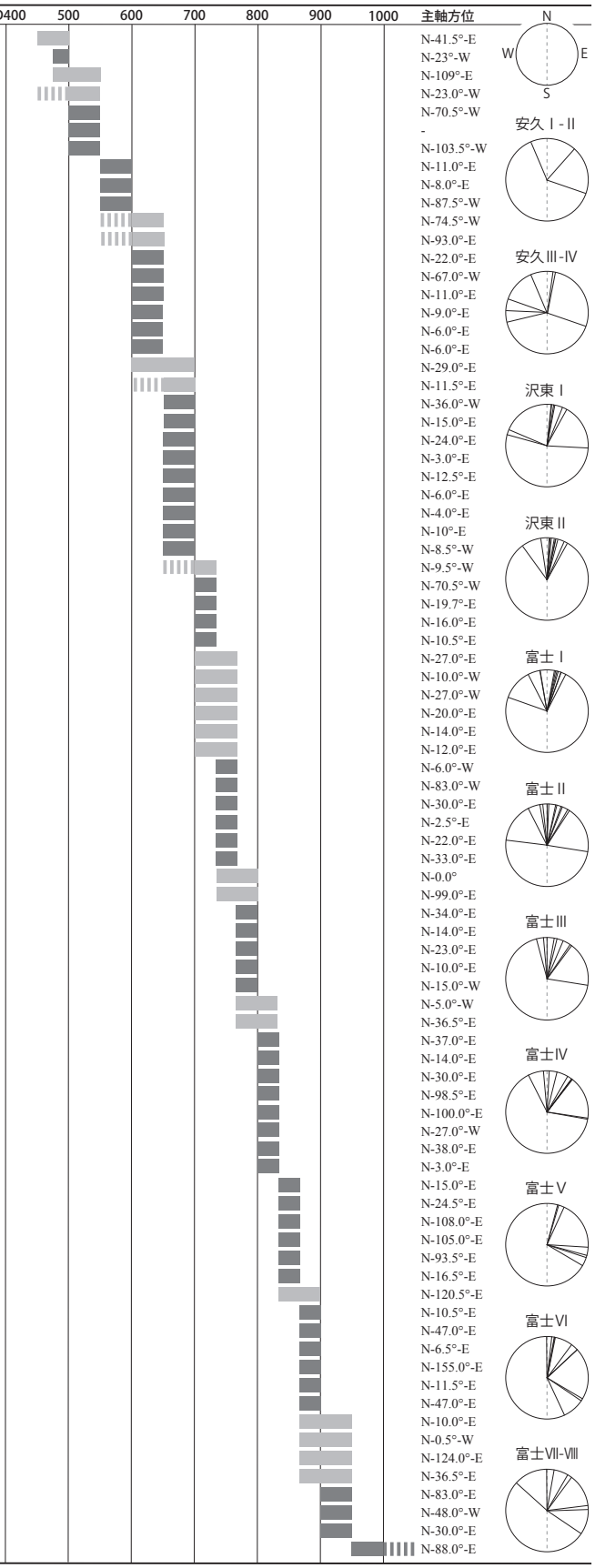
富士Ⅱ期　カマドのある竪穴建物6～14棟が存在する。建物面積は4～19㎡程の小型で占められ、10㎡台の小型建物がかろうじて主体となるが、10㎡未満の建物も増加する。主軸方位は北北東～北北西の南向きの建物が多勢であるが、一部に東向きや西向きの建物も存在する。SB46など隣接建物からの建替が想定される例があるため、同時期に存在した建物は5～8棟程度となり、建物間の距離は5～10m程と考えられる。

富士Ⅲ期　カマドのある竪穴建物5～9棟が存在する。建物面積は4～17㎡程の小型で占められ、10㎡台と10㎡未満の建物数が拮抗する。主軸方位は北北東～北北西の南向きの建物が多勢であるが、一部に西向きの建物も存在する。SB53は隣接建物への建替が想定されることから、同時期に存在した建物は5～8棟程度となり、建物間の距離は3～10m程と考えられる。建物数の多さからみれば、奈良時代に相当する富士Ⅰ～Ⅲ期が、宇東川遺跡F地区の古代集落の最盛期として評価できる。

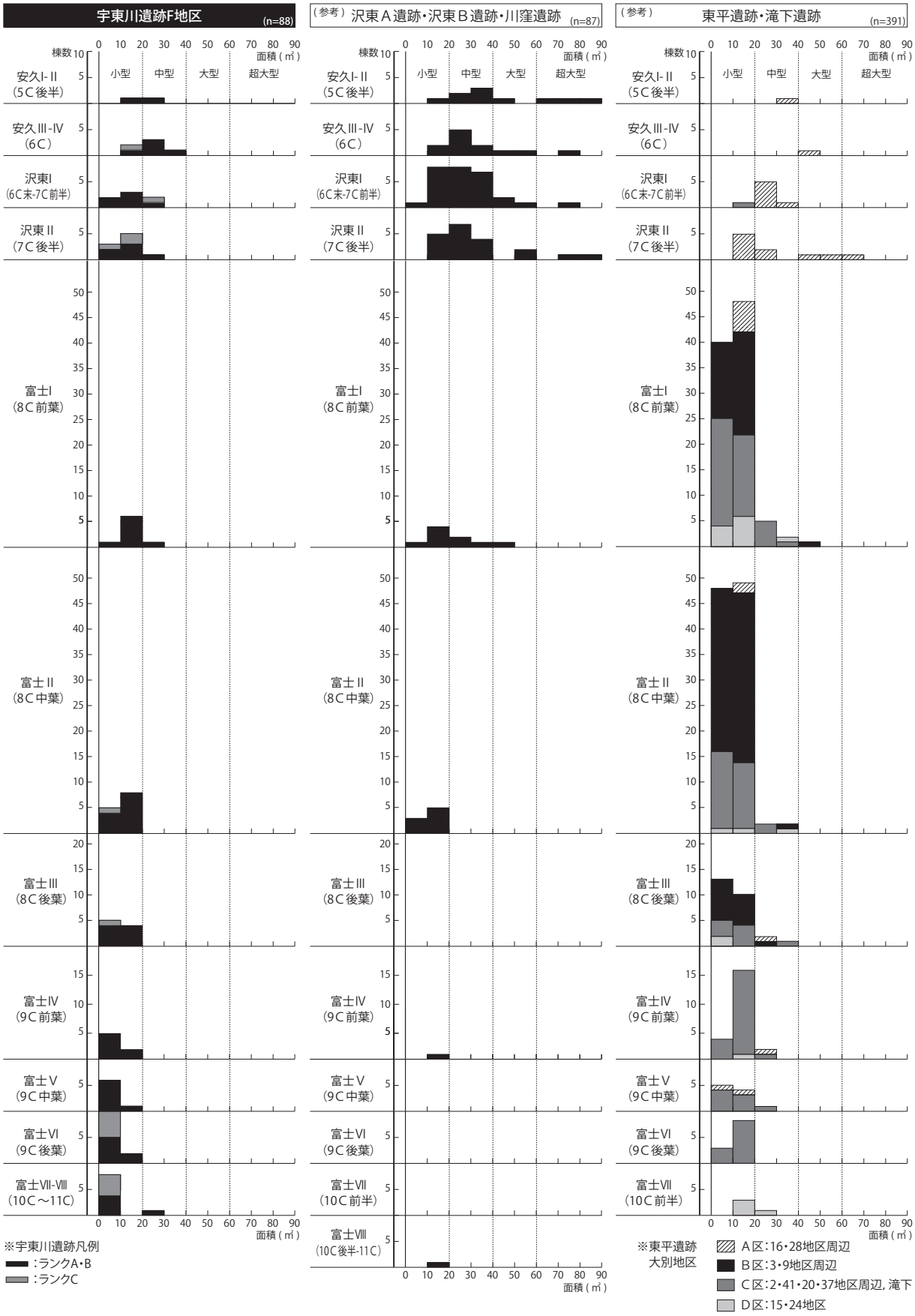
富士Ⅳ期　カマドのある竪穴建物8～10棟が存在する。建物面積は7～15㎡程の小型で占められ、10㎡未満の建物が主体となっている。主軸方位は北～北北東の南向きの建物が多勢であるが、西向きの建物も存在する。SB57は隣接建物からの建替が

第２表　宇東川遺跡Ｆ地区　竪穴建物時期別一覧表

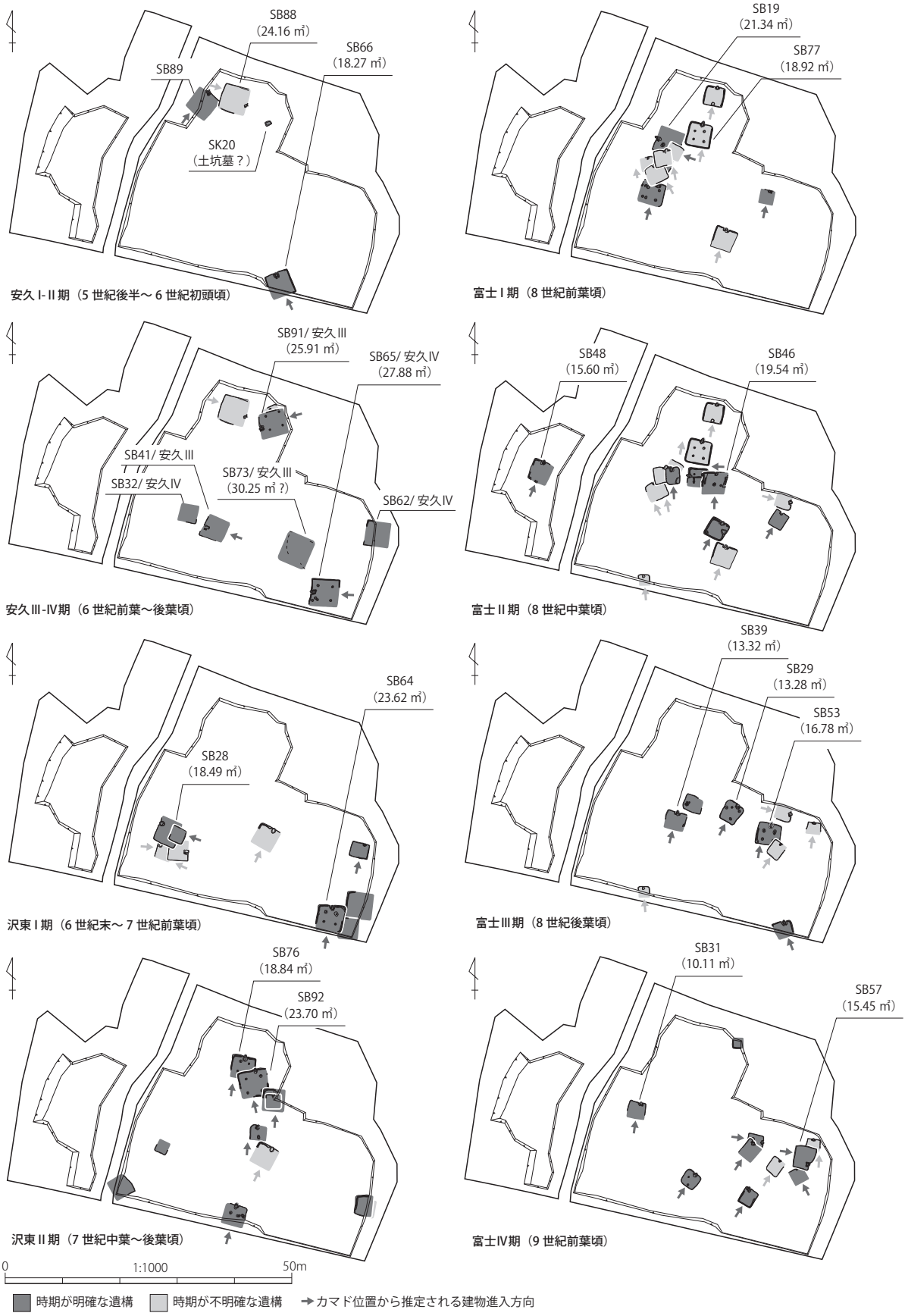
遺構名	グリッド	主軸幅	直交幅	面積	ランク	カマド位置	遺構の時期	主軸方位
SB89	L-Ⅰ	(3.78)	(3.00)	-	D	-	安久Ⅰ-Ⅱ	N-41.5°-E
SB66	N-Ⅲ,O-Ⅲ	4.35	4.20	18.27	A	北壁中央	安久Ⅱ	N-23°-W
SB88	L-Ⅰ	4.95	4.88	24.16	A	東壁南寄り	安久Ⅱ-Ⅲ	N-109°-E
SB84	M-0	(0.97)	(2.23)	-	D	-	安久Ⅲ以前	N-23.0°-W
SB41	M-Ⅲ	(3.23)	(3.59)	12.96	C	西壁南寄り	安久Ⅲ	N-70.5°-W
SB73	N-Ⅱ	(4.90)	(5.50)	30.25	B	-	安久Ⅲ	-
SB91	M-0,M-Ⅰ	(4.30)	(5.09)	25.91	B	西壁	安久Ⅲ	N-103.5°-W
SB32	L-Ⅲ	(1.06)	(1.79)	-	D	-	安久Ⅳ	N-11.0°-E
SB62	O-Ⅰ	4.45	(1.58)	19.80	B	-	安久Ⅳ	N-8.0°-E
SB65	O-Ⅱ,O-Ⅲ	5.28	(5.10)	27.88	B	西壁中央	安久Ⅳ	N-87.5°-W
SB33	L-Ⅲ	(2.50)	(2.55)	-	D	西壁	沢東Ⅰ以前	N-74.5°-W
SB35	L-Ⅲ	3.54	(2.37)	12.53	B	東壁中央	沢東Ⅰ以前	N-93.0°-E
SB26	L-Ⅲ	2.69	2.58	6.94	A	-	沢東Ⅰ	N-22.0°-E
SB28	L-Ⅲ	4.02	(4.49)	18.49	A	西壁北寄り	沢東Ⅰ	N-67.0°-W
SB61	O-Ⅰ	2.69	3.25	8.74	A	北壁東寄り	沢東Ⅰ	N-11.0°-E
SB64	O-Ⅱ,O-Ⅲ	(4.72)	4.86	23.62	B	北壁中央	沢東Ⅰ	N-9.0°-E
SB69	O-Ⅱ,P-Ⅱ	(4.64)	(3.44)	24.01	C	-	沢東Ⅰ	N-6.0°-E
SB70	P-Ⅲ	(3.24)	(2.51)	-	D	-	沢東Ⅰ	N-6.0°-E
SB47	M-Ⅱ,N-Ⅱ	(1.51)	3.74	13.99	B	北壁	沢東Ⅰ-Ⅱ	N-29.0°-E
SB80	O-Ⅱ,P-Ⅱ	3.14	(1.02)	9.86	B	-	沢東Ⅱ以前	N-11.5°-E
SB05	L-Ⅳ	(3.39)	(1.76)	-	D	-	沢東Ⅱ	N-36.0°-W
SB15	N-Ⅲ	(2.16)	(3.34)	12.25	C	北壁中央	沢東Ⅱ	N-15.0°-E
SB27	L-Ⅲ	(1.10)	2.23	4.97	B	-	沢東Ⅱ	N-24.0°-E
SB44	M-Ⅱ	(2.83)	(3.24)	10.50	B	北壁	沢東Ⅱ	N-3.0°-E
SB76	L-Ⅰ	(2.83)	4.34	18.84	B	北壁中央	沢東Ⅱ	N-12.5°-E
SB78	O-Ⅱ	3.75	(2.28)	14.06	B	-	沢東Ⅱ	N-6.0°-E
SB81	M-Ⅰ	(0.91)	(1.67)	7.84	C	北壁	沢東Ⅱ	N-4.0°-E
SB82	M-Ⅰ	(1.97)	(2.56)	19.36	C	北壁	沢東Ⅱ	N-10°-E
SB92	M-Ⅰ	4.62	5.13	23.70	A	北壁東寄り	沢東Ⅱ	N-8.5°-W
SB43	L-Ⅱ	(2.21)	(1.56)	-	D	北壁	富士Ⅰ以前	N-9.5°-W
SB19	L-Ⅱ	4.62	(2.65)	21.34	B	西壁	富士Ⅰ	N-70.5°-W
SB30	L-Ⅱ	(1.68)	3.26	10.63	B	-	富士Ⅰ	N-19.7°-E
SB36	L-Ⅱ	(3.95)	4.31	18.58	B	北壁東寄り	富士Ⅰ	N-16.0°-E
SB68	N-Ⅰ	(0.83)	(1.30)	-	D	北壁	富士Ⅰ	N-10.5°-E
SB20	L-Ⅰ	(1.15)	(1.85)	-	D	-	富士Ⅰ-Ⅱ	N-27.0°-E
SB11	L-Ⅱ	2.98	(3.00)	8.94	A	北壁東端	富士Ⅰ-Ⅱ	N-10.0°-W
SB18	L-Ⅱ	3.40	3.59	12.21	A	北壁中央	富士Ⅰ-Ⅱ	N-27.0°-W
SB49	N-Ⅲ	3.79	3.98	15.08	A	北壁中央	富士Ⅰ-Ⅱ	N-20.0°-E
SB51	L-0	3.50	3.52	12.32	A	北壁中央	富士Ⅰ-Ⅱ	N-14.0°-E
SB77	L-Ⅰ,M-Ⅰ	4.30	4.40	18.92	A	北壁中央	富士Ⅰ-Ⅱ	N-12.0°-E
SB10	L-Ⅱ	3.02	2.57	7.76	A	北壁中央	富士Ⅱ	N-6.0°-W
SB40	M-Ⅰ,M-Ⅱ	3.46	(3.16)	11.97	B	西壁中央	富士Ⅱ	N-83.0°-W
SB45	M-Ⅱ,N-Ⅱ	3.56	3.61	12.85	A	北壁東寄り	富士Ⅱ	N-30.0°-E
SB46	M-Ⅰ	(2.79)	4.42	19.54	B	北壁中央	富士Ⅱ	N-2.5°-E
SB48	J-Ⅲ	3.95	(2.78)	15.60	B	北壁	富士Ⅱ	N-22.0°-E
SB75	N-Ⅰ	2.98	2.64	7.87	A	北壁西寄り	富士Ⅱ	N-33.0°-E
SB21	M-Ⅲ	(1.19)	(2.08)	4.33	B	北壁中央	富士Ⅱ-Ⅲ	N-0.0°
SB55	N-Ⅰ	(2.10)	(2.02)	9.00	C	東壁	富士Ⅱ-Ⅲ	N-99.0°-E
SB29	M-Ⅰ,M-Ⅱ	3.73	3.46	12.91	A	北壁東寄り	富士Ⅲ	N-34.0°-E
SB39	M-Ⅱ	(2.38)	3.65	13.32	B	北壁中央	富士Ⅲ	N-14.0°-E
SB42	M-Ⅱ	(2.82)	3.49	9.84	A	-	富士Ⅲ	N-23.0°-E
SB53	N-Ⅰ,N-Ⅱ	3.94	4.26	16.78	A	北壁中央	富士Ⅲ	N-10.0°-E
SB67	O-Ⅲ	(2.46)	3.43	11.76	B	北壁東寄り	富士Ⅲ	N-15.0°-W
SB56	O-Ⅰ	(1.34)	2.58	6.66	B	北壁中央	富士Ⅲ-Ⅳ	N-5.0°-W
SB58	N-Ⅱ,O-Ⅱ	2.96	2.45	7.25	A	北壁中央	富士Ⅲ-Ⅳ	N-36.5°-E
SB08	M-Ⅲ	2.89	2.95	8.53	A	北壁中央	富士Ⅳ	N-37.0°-E
SB31	L-Ⅱ	(2.86)	3.18	10.11	B	北壁東寄り	富士Ⅳ	N-14.0°-E
SB50	N-Ⅱ	2.98	2.64	7.87	A	北壁西端	富士Ⅳ	N-30.0°-E
SB54	N-Ⅰ,N-Ⅱ	2.82	2.75	7.76	A	東壁北寄り	富士Ⅳ	N-98.5°-E
SB57	O-Ⅰ	3.74	4.13	15.45	A	北壁東寄り	富士Ⅳ	N-100.0°-E
SB59	O-Ⅱ	(0.62)	(1.78)	-	D	-	富士Ⅳ	N-27.0°-W
SB72	N-Ⅱ	(2.18)	(2.88)	-	D	-	富士Ⅳ	N-38.0°-E
SB83	M-0	(1.47)	(1.55)	-	D	-	富士Ⅳ	N-3.0°-E
SB04	L-Ⅱ	(1.10)	2.72	7.40	B	北壁東寄り	富士Ⅴ	N-15.0°-E
SB17	L-Ⅱ	(2.24)	2.95	8.70	B	北壁中央	富士Ⅴ	N-24.5°-E
SB24	L-Ⅲ	2.57	(2.09)	6.60	B	東壁	富士Ⅴ	N-108.0°-E
SB25	L-Ⅲ	2.10	(2.09)	4.41	B	東壁	富士Ⅴ	N-105.0°-E
SB52	N-Ⅱ	3.08	3.12	9.61	A	東壁南端	富士Ⅴ	N-93.5°-E
SB71	P-Ⅱ	2.64	(1.96)	6.97	B	北壁	富士Ⅴ	N-16.5°-E
SB09	L-Ⅱ	3.03	3.52	10.67	A	東壁中央	富士Ⅴ-Ⅵ	N-120.5°-E
SB03	L-Ⅱ	(1.76)	2.98	8.88	B	北壁中央	富士Ⅵ	N-10.5°-E
SB06	L-Ⅳ	(2.28)	(2.30)	5.76	C	-	富士Ⅵ	N-47.0°-E
SB60	O-Ⅱ	3.30	2.90	9.57	A	北壁中央	富士Ⅵ	N-6.5°-E
SB63	O-Ⅱ	3.44	3.18	10.94	A	東壁北寄り	富士Ⅵ	N-155.0°-E
SB87	L-Ⅲ	(3.03)	(3.04)	9.61	C	-	富士Ⅵ	N-11.5°-E
SB90	L-Ⅰ	(2.47)	(2.54)	6.45	B	北壁	富士Ⅵ	N-47.0°-E
SB01	L-Ⅲ	2.68	2.52	6.75	A	-	富士Ⅵ-Ⅶ	N-10.0°-E
SB02	L-Ⅲ	(0.88)	(1.78)	5.76	C	北壁	富士Ⅵ-Ⅶ	N-0.5°-W
SB16	M-Ⅲ	3.13	2.61	8.17	A	東壁北寄り	富士Ⅵ-Ⅶ	N-124.0°-E
SB74	M-0,M-Ⅰ	(2.83)	(2.25)	9.00	C	-	富士Ⅵ-Ⅷ	N-36.5°-E
SB13	M-Ⅲ	(1.01)	(2.10)	5.76	C	東壁中央	富士Ⅶ	N-83.0°-E
SB38	M-Ⅱ	4.54	(2.83)	20.61	B	西壁	富士Ⅶ	N-48.0°-W
SB14	M-Ⅲ	(2.22)	3.14	9.86	B	北壁西寄り	富士Ⅶ	N-30.0°-E
SB12	M-Ⅲ	2.30	(2.59)	5.96	A	東壁中央	富士Ⅷ	N-88.0°-E



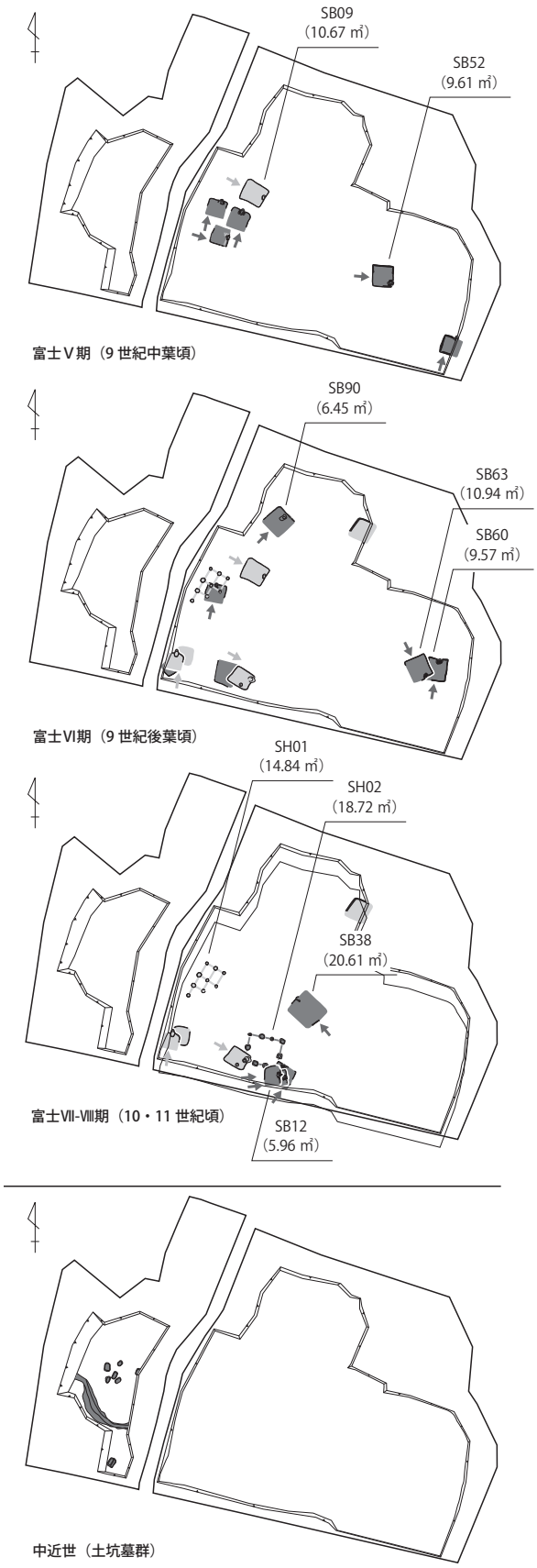
※面積ランク　A：主軸幅、直交幅ともに実測値。B：主軸幅、直交幅の一方が実測値、もう一方が推定値。C：主軸幅、直交幅ともに推定値。D: 主軸幅、直交幅ともに推定不能。
変遷図・ヒストグラム等への時期の振り分け：複数時期が推定されるものは、それぞれの時期へカウントした。



第249図　竪穴建物　面積ヒストグラム比較



第 250 図　宇東川遺跡 F 地区における遺構の変遷（古代～中近世）



第 250 図　宇東川遺跡 F 地区における遺構の変遷（古代～中近世）

想定されることから、同時期に存在した建物は 5 ～ 7 棟程度となり、建物間の距離は 5 ～ 15m 程と考えられる。

富士Ⅴ期　カマドのある竪穴建物 5 ～ 6 棟が存在する。建物面積は 4 ～ 10 ㎡程の小型で占められ、10 ㎡未満の建物が主体となっている。主軸方位は北北東と西～西南西にまとまりがあり、南向きの建物と西向きの建物が拮抗する。SB09 周辺は隣接建物からの建替もあることから、同時期に存在した建物は 3 ～ 4 棟程度、建物間の距離は 5 ～ 20m 程と考えられる。

富士Ⅵ期　カマドのある竪穴建物 6 ～ 11 棟と、当該期の可能性がある掘立柱建物 1 棟が存在する。竪穴建物の面積は 5 ～ 11 ㎡程の小型で占められ、10 ㎡未満の建物が主体となっている。主軸方位は北～北東と南西にまとまりがあり、南向きの建物のほか、西向きや珍しい北西向きの建物がみられる。SB63 など隣接建物からの建替もあることから、同時期に存在した建物は 5 棟程度、建物間の距離は 5 ～ 20m 程と考えられる。

富士Ⅶ・Ⅷ期　カマドのある竪穴建物 4 ～ 8 棟と、当該期の可能性がある掘立柱建物 2 棟が存在する。竪穴建物の面積は 6 ～ 20 ㎡程の小型から中型で、10 ㎡未満の建物が主体となっている。SB38 はこの段階としては異質な規模であり、検出平面形や時期認定に問題がある可能性もある。主軸方位は北西～南西とまとまりにかけるが、SB12 周辺は西向きの建物が集中する。時期設定が広いため、同時期存在の建物の認定が難しいが、せいぜい 2 ～ 3 棟程度と判断される。SB12 や SH02 周辺は竪穴建物→掘立柱建物→竪穴建物という建替になっており、単純に集落が掘立柱建物化したともいえない。

中・近世　土坑墓 7 基と溝状遺構 1 条が存在する。土坑墓の副葬品は、陶磁器類がなく、火打金と火打石、中国銭（六文銭）がみられる。出口遺跡の中近世墓を参考とすれば、同種の墓は 15 ～ 16 世紀頃に比定できそうである。人骨出土例からみると、SK03・09・12 が北～北北東頭位、SK13 は南西頭位となる。東側調査区の SK 遺構のなかにも当該期の土坑墓となるものがある可能性がある。

(2) 集落構造の特徴

集落の長期性・安定性　今回の調査により、宇東川遺跡F地区では、5世紀後半から末頃の安久Ⅰ・Ⅱ期から、10世紀後半から11世紀頃の富士Ⅷ期にいたるまで、連綿と集落が継続する状況を確認することができた。集落の形成初期にあたる安久Ⅰ～Ⅳ期（5・6世紀頃）の建物数が若干少ないものの、沢東Ⅰ～Ⅱ期（7世紀頃）以降については、各時期5～10棟前後のほぼ一定の建物数で推移したものと考えられる。松原川に近接する低地部でありながら、古代以降の堆積層に河川堆積層などは全く確認されておらず、長期間、安定的に集落が継続していたことは明らかである。縄文時代中期後半に松原川の氾濫が頻発していた状況とは対照的であり（本章第1節）、安定的な定住の背景に、古墳時代中・後期から飛鳥時代にかけて、効果的な治水事業が実施された可能性も想定される。

建物規模の均一性　竪穴建物面積の分析からは、集落全体として突出するような大型建物は終始現れず、建物規模における通時的均一性が窺える。安久Ⅰ～Ⅳ期（5・6世紀）までは20㎡以上の中型建物が主体であったものが、沢東Ⅰ・Ⅱ期（7世紀）に10㎡以下の小型建物主体へと変化する現象については、沢東A遺跡や東平遺跡などの古代富士郡域の主要集落における7・8世紀を通じた変化と共通しており（藤村2020b）、地域再編や立評・編戸などの政治的動向も含めた解釈が必要であろう。そうした地域全体における集落動向を勘案しつつも、宇東川遺跡F地区の大きな特徴といえるのが、5～7世紀における中型以上の建物が圧倒的に少ない点である。このことは、丘陵上に展開する宇東川遺跡A地区（久松1991・若林2012）を含めた遺跡全体においても、基本的に同様とみられる。

小家族からなる建物群の継続性　宇東川遺跡F地区において、特に安久Ⅲ期（6世紀前半頃）以降、共時存在とみられる建物の多くは10m以下、離れても20m以下の間隔で近接して建てられており、9・10世紀にいたっても、単独で立地する例はみられない。このように近接する複数の建物は、集落の最小単位である「建物群」（広瀬1989・1994）として評価しうると考えられる。7世紀以降に小型建物が多くなる点を踏まえれば、一建物内に居住した少人数の家族が、血縁や職掌等によるつながりのもとで複数集まり（建物群）、それらがさらに集まって集落を構成するという基本的な集落構造が、10世紀まで安定的に再生産されていたことが推定される。5・6世紀代に建物面積が大きいことは、一建物に居住した人数が7世紀以降と比べて多かったことを示す可能性があるだろう。

郡内中枢集落との差異　沢東A遺跡や東平遺跡などの潤井川下流域の集落では、5～7世紀の建物規模はおおよそ中型にピークがあり、一定数存在する40～50㎡台の大型建物や60㎡以上の超大型建物の周囲に中型・小型建物が展開したことから、大型以上の建物の居住集団が集落経営の中心的な役割を果たしたことが想定される（第249図、藤村2020b）。潤井川下流域の集落は、8世紀の富士郡家・東平遺跡へとつながる地域最大の拠点集落群であり、大型以上の建物が不在となる集落景観であった宇東川遺跡の集団とは、集団の勢力や階層的な差異が大きかったことが想定される。むしろ、特殊なのは潤井川下流域の集落景観であり、宇東川遺跡のような集落景観こそが、富士山南麓地域の一般的な様相であったとも考えられよう。

富士Ⅰ・Ⅱ期（8世紀前葉から中葉頃）以降になると、東平遺跡でも小型建物が主体となっており、宇東川遺跡との規模による差異はかなり解消される。ただ、宇東川遺跡F地区では富士Ⅲ期（8世紀後葉頃）以降に10㎡未満の非常に小規模な竪穴建物が主体化しており、同じ小型建物とはいえ、東平遺跡の建物よりも全体的にさらに小さい。また、東平遺跡周辺で奈良時代以降に増加する掘立柱建物については、宇東川遺跡では非常に少なく、この点も特徴の一つとみられる。集落の終末については、東平遺跡では15地区を除いた多くの地区で富士Ⅵ期（9世紀後葉頃）までに収束する状況にあり、富士Ⅷ期（10世紀後半から11世紀頃）まで安定的に継続した宇東川遺跡とは大きく異なっている。

郡内中枢域と比較すると、宇東川遺跡の古代集落が、あまり大きな建物はないものの、長期・安定的に郡内小地域における居住域の中核を担っていた特徴が浮かび上がってくる。こうした特徴の背景につ

いては、政治情勢に左右され難い居住者集団の性格のほか、根方街道をおさえた立地性や豊富な水資源などからなる自然環境、さらにはすぐ南側に広がる沖田遺跡を中心に展開した浮島沼水運やその西岸部における水田経営（藤村 2017）によって支えられていた点を指摘しておきたい。

3　宇東川遺跡における古代集落の展開

（1）弥生時代後期～古墳時代中期前半

浮島沼水運北西岸の拠点　宇東川遺跡 F 地区の調査では当該期の遺構は見られなかったものの、遺構外出土資料などに若干遺物がみられる（遺構外 -71 など）。台地上の A 地区では、弥生時代後期から古墳時代中期初頭の集落が展開するが（若林 2012）、古墳時代前期を中心とする時期には、吉原の津（中世期の吉原湊）から浮島沼ラグーンをつなぐ水上交通の要衝・沖田遺跡をおさえた「拠点型集落」として成長しており（佐藤 2012、藤村 2017c など）、浅間古墳や東坂古墳などの首長層による浮島沼周辺の政治的・社会的ネットワーク（佐藤 2018c）において、北西岸域の拠点集落としての地位を固めていたことが推察される。宇東川遺跡 A 地区出土の北陸系土器（前期初頭）や、沖田遺跡 133 次調査地点出土の準構造船転用木棺（前期後半）は、外洋と浮島沼ラグーン地帯を中継した、浮島沼北西岸の集落の社会的機能を象徴する資料である。

（2）古墳時代中期後半～後期

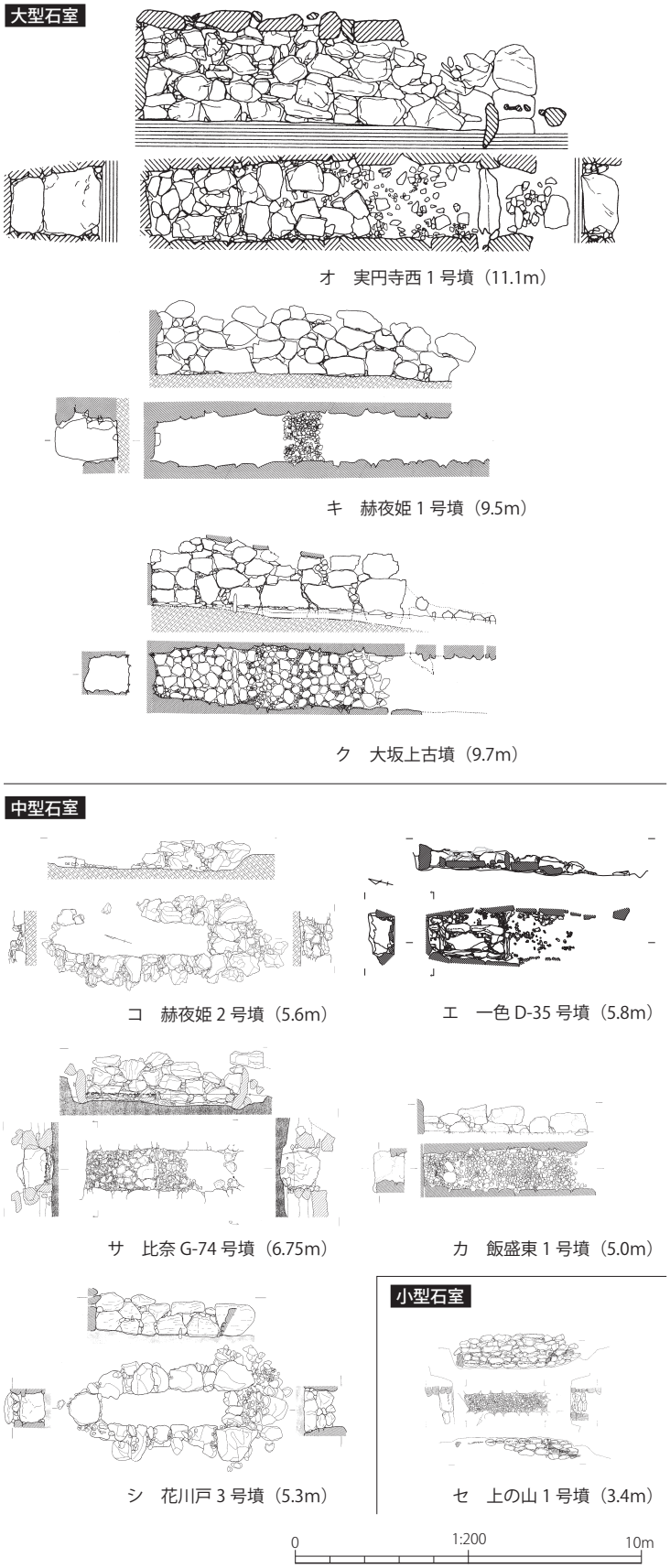
集落再編と低地開発　5 世紀前半以来の富士山の噴火期を経た、駿河・伊豆地域の集落再編期（藤村 2017a･2020a）にあたる 5 世紀後半（安久 Ⅰ・Ⅱ期）には、台地上の A 地区の集落が希薄化する一方で、低地部である F 地区の展開が本格化していく。富士山南麓の潤井川下地域では、沢東 A 遺跡や中桁・中ノ坪遺跡、東平遺跡といった低地部集落が同時期に展開をみせており、宇東川遺跡 F 地区集落の勃興も、低地開発や治水に関わる新しい技術の導入（渡井 2009）によって推進されたものと評価される。駿河・伊豆地域の各小地域に新興の中小首長墳が展開し、カマドや須恵器、石製模造品祭祀が各地の集落で受容されたことも、一連の動向の中で理解されよう。なお、宇東川遺跡 F 地区では 6 世紀代（安久Ⅲ・Ⅳ期）にかけて順調に集落が展開し、台地上の A 地区も再集落化が達成されるほか、沖田遺跡でもこの時期から遺物量が増加する状況が判明している（佐藤 2020）。ただ、潤井川流域の沢東 A 遺跡などでみられる 40 ㎡以上の竪穴建物が非常に少ない点から、集団の勢力や経済力は潤井川流域のそれよりも相対的に低いものであったと考えられる。

（3）飛鳥時代

竪穴建物の階層分化　6 世紀末から 7 世紀代（沢東 Ⅰ・Ⅱ期）には、富士山南麓の集落において 10 ㎡以下の小型建物が増加することで、竪穴建物規模による階層構造が顕著化するが、中型や大型以上の建物に居住した上位集団の割合は、沢東 A 遺跡や東平遺跡の方が高く、宇東川遺跡や中桁・中ノ坪遺跡の方が低い傾向にあり、それが地域集団の勢力や経済力を示しているとみられる。

群集墳の形成と石室規模の階層分化　6 世紀末から 7 世紀後半にかけて富士山南麓地域において大規模に展開した横穴式石室墳をみると、石室全長 10m 前後の大型石室を頂点として、その下位には全長 4 ～ 6m の中型石室が大多数となる階層構造が生まれ、後者はさらに副葬品内容によっても分化するほか、さらに下位には全長 2 ～ 3m 前後の小型石室も少数存在するようになる（第 251 図）。そのような石室による階層構造が河川や谷によって区切られた小地域内で完結している点も当地域の特色であり（菊池 2016・藤村 2016・2018）、それぞれが集団の規範に則った造墓を進めた結果、広域の古墳群（伝法古墳群、一色古墳群、比奈・富士岡古墳群など）を形成しているものとみられる（第 252 図）。

古墳群と集落　宇東川遺跡の北方の松原川から滝川流域の緩やかな谷部には、やや単独的な立地を示す実円寺西 1 号墳（円墳、径 17.5m）を頂点とする一色古墳群が広がり、7 世紀後葉から 8 世紀初頭頃の一色 D-35 号墳の時期まで古墳の築造が継続している。石室の内容が判明している古墳をみれば、ほぼ標高の低い谷の下方や平野部を向いて開口しており、その先にいわゆる墓道（幹道）（水野 1975 など）が存在するとすれば、台地末端や低地部に展開



第 251 図　一色古墳群および比奈・富士岡古墳群　横穴式石室

した宇東川遺跡や沖田遺跡の集落までつながることが推察される。沖田遺跡の微高地上では 7 世紀までに小規模区画水田が整備されたことが 87・92 次調査地点などの調査から明らかになっているほか（藤村 2017c）、古墳時代前期以来の浮島沼沿岸の水上交通や後の根方街道の要衝としても機能していたことが窺われるのであり、一色古墳群の集団の経営基盤が宇東川遺跡や沖田遺跡などの浮島沼北西岸周辺の集落にあった可能性は充分に想定される。

6 世紀後葉から 7 世紀初頭頃には、渡来人を含む新たな集団により、駿河・伊豆地域の各地において須恵器生産や鍛冶生産といった新しい手工業が進展することで、集落再編がさらに進んだほか、群集墳も連動するように展開したことが推定されるのであり（藤村 2017a）、当該期の竪穴建物や石室の規模にみられた階層分化も、群集墳被葬者集団内部の規範とともに形成・表現されていったものとみてよい。

（4）奈良・平安時代

郡家との関係　8 世紀（富士Ⅰ～Ⅲ期）には、潤井川下流域の東平遺跡周辺に駿河国富士郡家が設置されたことで、政治や宗教、産業面において同地を中心とする地域社会の構造が確立する（藤村 2014、佐藤 2018b）。宇東川遺跡周辺では、石製・鉄製の紡錘車を用いた製糸生産が郡家との分業的な体制の中で成立し（佐藤 2018a）、その後 10 世紀まで地域に根付いたことが想定される。郡内には 8 世紀代に集落規模が縮小する遺跡もみられるが、宇東川遺跡は一定の規模を維持して継続する（佐野 2008）。ただし、竪穴建物は小型化が著しく、8 世紀代は 10 ～ 20 ㎡未満の建物、9 世紀以降は 10

第252図　6・7世紀の浮島沼北西岸の集落と古墳群

㎡未満の建物が主体となっており、東平遺跡と比べても建物規模は全体的に小さい。また、8 世紀以降には転用硯、9 世紀以降には石製腰帯具や墨書・刻書土器が郡内集落と比べても集中する傾向にあるものの、やはり、東平遺跡周辺とは確固たる出土量の差がある。植松章八は宇東川遺跡における石製腰帯具や「布」・「寺」墨書土器などの出土から、東平遺跡から宇東川遺跡までの東西に並ぶ集落を郡家関連遺跡として一括する評価をおこなっているが（植松 2002・2003）、これまでにみてきた宇東川遺跡の集落の特徴を看取するならば、律令期以前から存続する伝統的な集落としての側面にも、より注意を向ける必要がある。

浮島沼北西岸の伝統的拠点集落　東平遺跡や国久保遺跡、滝下遺跡、舟久保遺跡は奈良時代以降に急激に集落規模を拡大する点に共通点がみえ、宇東川遺跡の集落とはその動態が大きく異なる。宇東川遺跡の集落の継続性については、時代によって台地上や低地部へと移転を繰り返しつつも、弥生時代中期から平安時代の間、およそ 1,200 年以上という市内でも稀にみる非常に長期間にわたっており、律令期においても伝統的集落という認識が地域内で共有されていたことが想像される。

それに関連して、根方街道から宇東川遺跡の西方へそのまま伸び、東平遺跡の北方へと接続する街道（現在の市道伝法原田線）に沿って、上述した国久保遺跡や滝下遺跡、舟久保遺跡の集落が奈良時代以降に成立していった状況が看取される（第 253 図）。郡家中枢と根方街道の要衝である宇東川遺跡を接続する試みは、その萌芽を 7 世紀の古墳立地や墓道に求めることができる可能性を孕みつつも、少なくとも 8 世紀前葉までには着手されたものとみてよいだろう。

また、この時期には沖田遺跡周辺に条里水田（佐藤・若林 2013）が整備され、浮島沼沿岸部における水田経営が広く実施されたとみられるが（藤村 2017c）、農耕従事者の居住はもとより、水田経営や管理業務についても、沖田遺跡との伝統的なつながりの強い宇東川遺跡の集落が担っていた可能性も想定される。転用硯や墨書土器は、こうした宇東川遺跡の行政的機能に関連する遺物とみる余地がある。

このようにみてくると、律令期の宇東川遺跡の役割については、郡内小地域における伝統的かつ拠点的な集落としての評価を進めるべきと考える。かつて久松義昭は宇東川遺跡 A 地区における「島」ヵ墨書・刻書土器の出土から、宇東川遺跡を平城宮木簡や『和名抄』にみられる富士郡島田郷に比定したが（久松 1992）、傾聴すべき視点であろう。宇東川遺跡以東から赤淵川一帯までの地域に、奈良・平安時代と継続する集落が宇東川遺跡以外にみられない点を重視すれば、赤淵川西岸に比定されることの多い姫名郷の中心的集落と考えることも違和感はない。いずれにしても、宇東川遺跡の集落は律令期に至ってその伝統性や立地的側面が重視され、里（郷）の中心的集落として行政機能の一部も設置された可能性があるが、その後の律令体制の弛緩を経ても解体することなく、11 世紀まで浮島沼北西岸地域の経済や産業の拠点としての地位を維持し続けた点を評価しておきたい。

（藤村　翔）

参考文献

池谷初恵　1995「伊豆国における奈良平安時代土器様相―三島市壱町田遺跡を中心として―」『大場川遺跡群』三島市教育委員会

池谷初恵　1999「駿河伊豆型平底坏について」『東国土器研究』第 5 号　東国土器研究会

植松章八　2002「特論－東平遺跡の成立と展開－」『東平遺跡　第 16 地区（三日市廃寺跡）、第 27 地区発掘調査報告書』富士市教育委員会

植松章八　2003「特論　静岡県の銙帯具」『東平遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会

植松章八　2008「東駿河の奈良・平安時代遺跡と土器」佐藤祐樹編『祢宜ノ前遺跡』富士市教育委員会

小田裕樹　2020「飛鳥の土器と『日本書紀』」『國學院雑誌』第 121 巻 11 号

菊池吉修　2010「駿河」土生田 純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣

木ノ内義昭　2002「須恵器流入以降～律令時代の土師器の様相―主として律令時代富士郡衙推定域の出土遺物から―」『東平遺跡　第 16 地区（三日市廃寺跡）、第 27 地区発掘調査報告書』富士市教育委員会

佐藤祐樹　2010「集落の動態からみた古墳出現前後の富士山南麓」『静岡県考古学研究』No.41・42　静岡県考古学会

佐藤祐樹　2012「高尾山古墳周辺における集落の動態と古墳築造の背景」『高尾山古墳発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書　第 104 集、沼津市教育委員会

第 253 図　8～10 世紀の浮島沼北西岸の集落

佐藤祐樹　2016a「伝法古墳群の展開と地域社会の成立」『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会
佐藤祐樹　2016b「中原 4 号墳出土土師器の様相」『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会
佐藤祐樹　2018a「SB4005 出土の紡錘車の位置づけ」『東平遺跡　第 41 地区』富士市教育委員会
佐藤祐樹　2018b「駿河・伊豆における古代の墨書土器と手工業」『静岡県と周辺地域の官衙出土文字資料と手工業生産』地域と考古学の会・浜松市博物館・静岡県考古学会シンポジウム
佐藤祐樹　2018c「駿河・遠江における古墳出現期の様相―浮島ヶ原における首長系譜を中心に―」『東海地方における古墳出現期の様相 2』第 30 回考古学研究会東海例会
佐藤祐樹・若林美希編　2013『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成 22・23 年度－』富士市教育委員会
佐藤祐樹編　2016『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会
佐藤祐樹編　2018『伝法 東平第 1 号墳』富士市教育委員会
佐藤祐樹　2020「総括」『沖田遺跡　第 155 次調査地点』富士市教育委員会
佐藤祐樹　2021「東駿河における古墳時代の土器様相」『向坂鋼二先生米寿記念論集―地域と考古学Ⅱ』向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会
佐藤祐樹・若林美希　2013「遺跡の環境と条里型水田」『富士市内遺跡発掘調査報告書―平成 22・23 年度―』富士市教育委員会
佐野五十三　2008「駿河国富士郡における 8 世紀代の移住と集住」『静岡県考古学研究』No.40　静岡県考古学会
鈴木一有　2016「中原 4 号墳から出土した生産用具が提起する問題」『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会
鈴木一有　2018「丁字形利器とその系譜」『伝法 東平 1 号墳』富士市教育委員会
鈴木敏則　2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会
中野国雄 1968「富士市かぐや姫古墳（西比奈）G40 号墳発掘調査概報」『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県教育委員会・日本道路公団
久松義昭　1991『宇東川遺跡 A・B・C 地区発掘調査概報―平成 2 年度―』富士市教育委員会
久松義昭　1992「近隣の遺跡から見た東平遺跡の消長―最近の調査から―」『東平遺跡第 3 次調査』富士市教育委員会
平野　修　1992「甲斐型土器の定義」山梨県考古学協会甲斐型土器研究グループ『甲斐型土器― その編年と年代―』
広瀬和雄　1989「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 22 集　国立歴史民俗博物館
広瀬和雄　1994「考古学からみた古代の村落」『岩波講座日本通史』第 3 巻　古代 2　岩波書店
藤村　翔　2014「富士郡家関連遺跡群の成立と展開～富士市東平遺跡とその周辺～」『静岡県考古学研究』No.45
藤村　翔　2016「中原 4 号墳の横穴式石室とその歴史的意義」佐藤祐樹編『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会
藤村　翔　2017a「駿河・伊豆地域における手工業技術の受容と集落動態－ 6・7 世紀を中心に－」『東海における古墳時代の手工業生産の展開を考える』第 28 回考古学研究会東海例会
藤村　翔　2017b「古墳時代から平安時代にかけての富士山の噴火災害と遺跡動態」『一般社団法人日本考古学協会 2017 年度宮崎大会資料集』日本考古学協会 2017 年度宮崎大会実行委員会
藤村　翔　2017c「浮島沼西岸・沖田遺跡の調査からみた湖沼利用の推移」『富士山かぐや姫ミュージアム　館報』第 32 号　富士山かぐや姫ミュージアム
藤村　翔　2018「富士山・愛鷹山南麓の古墳群の形成と地域社会の展開」『境界の考古学』日本考古学協会 2018 年度静岡大会研究発表資料集（鈴木一有・田村隆太郎編 2019『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学･別冊 30、雄山閣　所収）
藤村　翔　2019『富士が見守る交流の道－古代東海道と富士山ジャンクション』富士山かぐや姫ミュージアム第 56 回企画展図録
藤村　翔　2020a「5 世紀の噴火と地域社会」富士山考古学研究会編『富士山噴火の考古学　火山と人類の共生史』吉川弘文館
藤村　翔　2020b「駿河国富士郡域における古代集落の構造と変遷」『古代集落の構造と変遷』古代を考える 1　第 24 回古代官衙・集落研究集会
藤村　翔　2021「駿河国富士郡における土器様相」『向坂鋼二先生米寿記念論集―地域と考古学Ⅱ』向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会
水野正好　1975「群集墳の構造と性格」『古代史発掘 6　古墳と国家の成立ち』講談社
山下孝司　1992「甲斐型坏」山梨県考古学協会甲斐型土器研究グループ『甲斐型土器―その編年と年代―』
山下孝司・瀬田正明　1999「奈良・平安時代の編年」『山梨県史　資料編 2　原始・古代 2』山梨県
山本恵一　1995「静岡県下の 6 ～ 7C の土師器―駿河東部・伊豆北部の現状について―」『東国土器研究』第 4 号　東国土器研究会
山本恵一　1999「駿河の古墳時代中期の土器―東駿河を中心にして―」『東国土器研究』第 5 号　東国土器研究会
若林美希　2012「総括」『宇東川遺跡 A 地区』富士市教育委員会
渡井英誉　1999「中見代式土器小考―大廓式土器から中見代式土器へ―」『東国土器研究』第 5 号　東国土器研究会
渡井英誉　2009「まとめ」『東田遺跡』富士宮市文化財調査報告書第 40 集　富士宮市教育委員会

第 5 章　総括

富士市宇東川西町に所在する宇東川遺跡は、富士山南麓に広がる丘陵の末端部、松原川の河岸段丘面に立地する集落跡であり、本書で報告した F 地区は、松原川に最も近接した、段丘下段に位置する。過去の調査によって、縄文時代、弥生時代後期から平安時代の竪穴建物、古墳時代後期から飛鳥時代の横穴式石室墳など、縄文時代から中近世に至る多くの遺構や遺物が検出されており、水と土地に恵まれた当地だからこそ、市内でも有数の複合遺跡が形成されたものと考えられる。

F 地区の本発掘調査では、竪穴建物 84 棟、掘立柱建物 2 棟、溝 1 条、土坑 20 基、ピット 144 基を調査し、縄文時代から平安時代、中近世の遺物が出土した。以下、時代別に成果をまとめておきたい。

縄文時代

縄文時代中期後半（曽利Ⅳ式期）の埋甕の可能性のある土坑 1 基（SK25）を調査したほか、曽利Ⅳ式・加曽利 E Ⅳ式を主体とする縄文土器や同時期とみられる石器が出土した。縄文時代の遺物包含層の間に河川堆積層を挟むことから、A・Z 地区などと同じく、縄文時代中期後半を中心とする時期において、松原川に起因する水害に度々見舞われていた状況が明らかになった。

弥生時代

宇東川遺跡では初めてとなる、弥生時代中期後葉（有東式Ⅱ～Ⅳ期）の土器片が出土した。当該期の土器は、沖田遺跡や的場遺跡、沼津市・中原遺跡などといった浮島沼沿岸の低地部や砂丘上を中心に出土例がある。富士山南麓地域における本格的な低地進出の画期を考える上で、極めて重要な資料が追加されたことは意義深い。

古墳・飛鳥時代

5 世紀後半から 6 世紀後葉頃の竪穴建物 10 棟、6 世紀末から 7 世紀後葉頃の竪穴建物 19 棟を調査した。5 世紀後半は段丘上段（台地上）の A 地区の集落が希薄となる時期であり、F 地区集落は、潤井川流域の沢東 A 遺跡などと同じく、低地開発や治水に関わる新しい技術の導入によって新たに低地部への進出を果たした開拓集落と考えられる。

6 世紀末から 7 世紀後葉には、富士山南麓の集落において 10 ㎡以下の小型建物が増加することで、竪穴建物規模による階層構造が顕著化する。宇東川遺跡の集落は、沢東 A 遺跡や東平遺跡と比べると、20 ㎡以上の竪穴建物が極めて少ない特徴があり、集団の勢力や経済力が、潤井川下流域の集団よりも相対的に低かったためとみられる。ただし、宇東川遺跡の北方には市内最大級の横穴式石室を有する実円寺西 1 号墳を頂点とする一色古墳群が広がっており、その被葬者集団が、宇東川遺跡や南側の沖田遺跡を経営基盤とした可能性を想定しておくべきであろう。当該期に住居・墓の双方において規模による階層分化が進行したことは、富士山南麓の地域集団の性格や動向を探る上で非常に重要である。

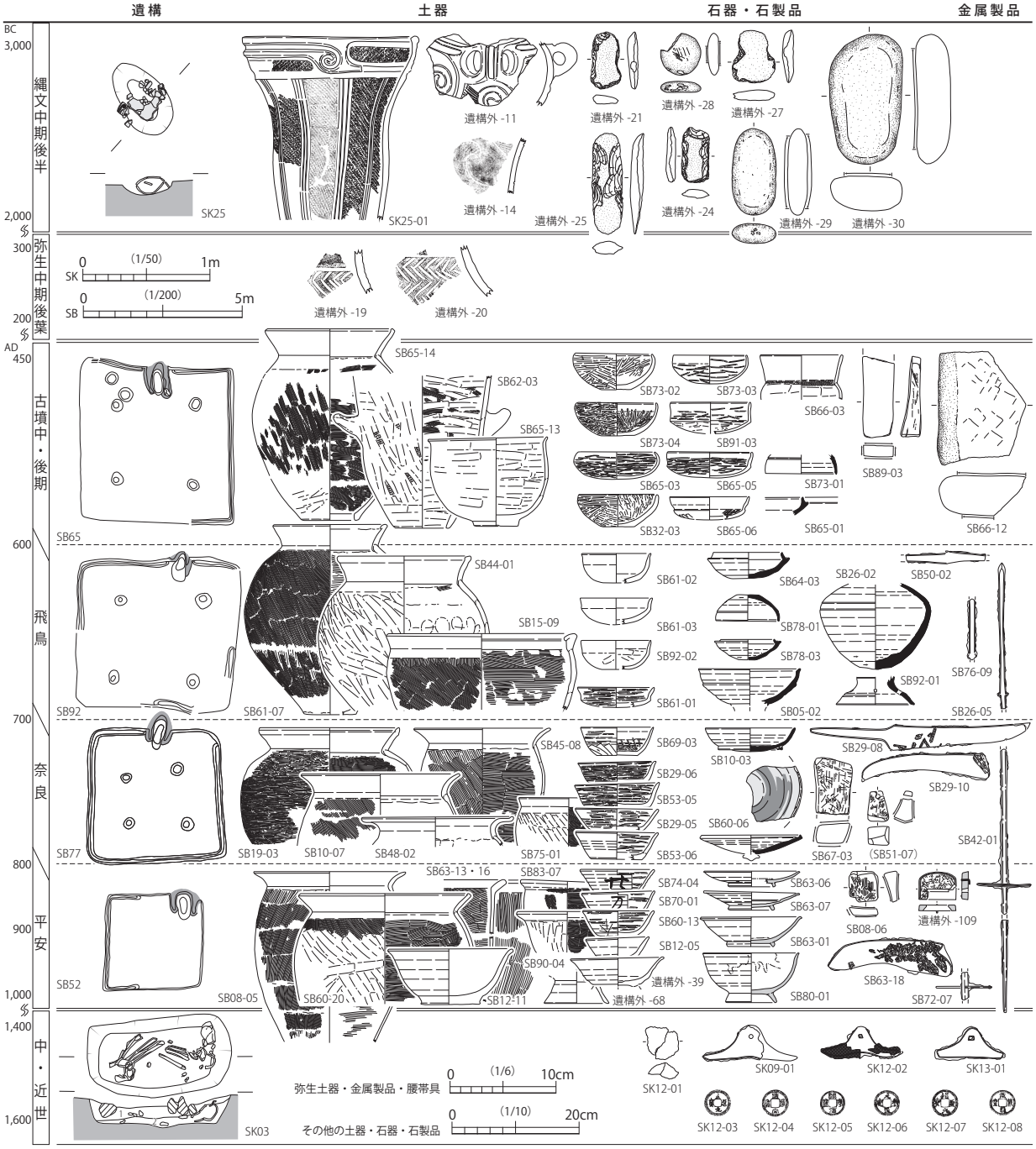
奈良・平安時代

8 世紀前葉から後葉頃の竪穴建物 26 棟、9 世紀前葉から 10 世紀後半頃の竪穴建物 29 棟、掘立柱建物 2 棟を調査した。竪穴建物は小型化が著しく、8 世紀代は 10 ～ 20 ㎡未満の建物、9 世紀以降は 10 ㎡未満の建物が主体となっており、富士郡家比定地である東平遺跡と比べると全体的に小さい。注目すべき遺物としては、8 世紀から 9 世紀後葉頃までの転用硯 5 点、9 世紀前葉から中葉頃の石製腰帯具 1 点、8 世紀後葉から 9 世紀前葉の鉄製紡錘車 2 点、9 世紀前葉から 10 世紀前半頃の墨書・刻書土器 18 点が挙げられる。石製・鉄製紡錘車については、宇東川遺跡や赫夜姫 1 号墳といった松原川・滝川流域に集中して出土する状況から、同地域の製糸生産が 8 世紀から 10 世紀代まで生業として定着していたことを示すとみられる。墨書・刻書土器の出土数は、宇東川遺跡全体で 37 点を数えるようになったが、東平遺跡や中桁・中ノ坪遺跡、宮添遺跡といった富士郡内の主要集落と比べると少なく、浮島沼北西岸の

松原川・滝川から赤淵川までのエリアでは最も多い。本遺跡は、根方街道などの交通の要衝や浮島沼沿岸部の条里水田をおさえた立地性、弥生時代中期以来1,200年以上にわたって長期・安定的に継続した伝統性が重視され、里（郷）の中心として行政機能の一部が設置されたとみられる。さらに、その後の律令体制の弛緩を経ても集落は解体することなく、10世紀後半まで浮島沼北西岸地域の経済や産業の拠点としての地位を維持し続けた点は特筆される。

中近世

中近世とみられる土坑墓7基、溝1条を調査した。土坑墓の副葬品は、陶磁器類がなく、火打金と火打石、中国銭（六文銭）がみられる。出口遺跡の中近世墓を参考とすれば、同種の墓は15～16世紀頃に比定できそうである。A地区の調査でも中近世の土坑墓がまとまって調査されていることから、松原川西岸の段丘面が広大な墓地であった時期が長らく続いていたものとみてよいだろう。　（藤村　翔）



第254図　宇東川遺跡F地区における遺構・遺物の変遷

付　　表

遺構一覧表

出土遺物観察表

・遺構一覧表

竪穴建物

遺構名	掲載頁	図版	遺構の時期	グリッド	平面形	主軸	直交	主軸方位	カマド位置	切合い（古→新）	備考
SB01	16 頁	PL.4	富士Ⅵ - Ⅶ	L- Ⅲ	隅丸方形	2.68	2.52	N-10.0° -E		SB02 → SB01	
SB02	17 頁	PL.4	富士Ⅵ - Ⅶ	L- Ⅲ	隅丸方形	(0.88)	(1.78)	N-0.5° -W	北壁	SB02 → SB01	
SB03	18 頁	PL.4	富士Ⅵ	L- Ⅱ	方形	(1.76)	2.98	N-10.5° -E	北壁中央	SB04 → SB03 → SH01	
SB04	18 頁	PL.3・4	富士Ⅴ	L- Ⅱ	方形	(2.80)	2.72	N-15.0° -E	北壁東寄り	SB31 → SB04 → SB03 → SH01	
SB05	20 頁	PL.5	沢東Ⅱ	L- Ⅳ	方形	(3.39)	(1.76)	N-36.0° -W		SB05 → SB06	
SB06	21 頁	PL.5	富士Ⅵ	L- Ⅳ	方形	(2.28)	(2.30)	N-47.0° -E		SB05 → SB06	
SB08	21 頁	PL.5	富士Ⅳ	M - Ⅲ	隅丸方形	2.89	2.95	N-37.0° -E	北壁中央		
SB09	23 頁		富士Ⅴ - Ⅵ	L- Ⅱ	方形	3.52	3.03	N-120.5° -E	東壁中央	SB43 → SB30 → SB18 → SB11 → SB09 SB36 → SB18 → SB31 → SB09 SB19 → SB20 → SB11 → SB09	
SB10	24 頁	PL.3・6	富士Ⅱ	L- Ⅱ	長方形	3.02	2.57	N-6.0° -W	北壁西寄り	SB43 → SB30 → SB18 → SB11 → SB10 SB19 → SB20 → SB11 → SB10	
SB11	26 頁	PL.7	富士Ⅰ - Ⅱ	L- Ⅱ	方形	2.98	(3.00)	N-10.0° -W	北壁東端	SB19 → SB20 → SB11 → SB10 SB43 → SB30 → SB18 → SB11 → SB09	
SB12	27 頁	PL.5	富士Ⅷ	M - Ⅲ	不整形な方形	2.30	(2.59)	N-88.0° -E	東壁中央	SB14 → SB13 → SB12 → SK17 SH02 → SB12	
SB13	27 頁	PL.5	富士Ⅶ	M - Ⅲ	方形	(1.01)	(2.10)	N-83.0° -E	東壁中央	SB14 → SB13 → SB12、SK19	
SB14	29 頁	PL.8	富士Ⅶ	M - Ⅲ	方形	(2.22)	3.14	N-30.0° -E	北壁西寄り	SB15 → SB14 → SB13 → SB12 SB14 → SK17、SK18、SK19	
SB15	30 頁	PL.9	沢東Ⅱ	N- Ⅲ	方形	(2.16)	(3.34)	N-15.0° -E	北壁中央	SB15 → SB14 → SK18、SK19	
SB16	32 頁		富士Ⅵ - Ⅶ	M - Ⅲ	方形	3.13	2.61	N-124.0° -E	東壁北寄り	SB87 → SB16 → SH02	
SB17	33 頁	PL.3・10	富士Ⅴ	L- Ⅱ	隅丸方形	(2.24)	2.95	N-24.5° -E	北壁中央	SB31、SB36 → SB18 → SB17 → SK01、SK02	
SB18	34 頁	PL.3・9	富士Ⅰ - Ⅱ	L- Ⅱ	方形	3.40	3.59	N-27° -W	北壁中央	SB43 → SB30 → SB18 → SB11 → SB09 SB36 → SB18 → SB31 → SB17 → SK01	
SB19	36 頁	PL.3・9	富士Ⅰ	L- Ⅱ	方形	4.62	(2.65)	N-70.5° -W	西壁	SB19 → SB20 → SB11 → SB10	
SB20	38 頁		富士Ⅰ - Ⅱ	L- Ⅰ	方形	(1.15)	(1.85)	N-27.0° -E		SB19 → SB20 → SB11 → SB10	
SB21	39 頁	PL.9	富士Ⅱ - Ⅲ	M - Ⅲ	隅丸方形	(1.19)	(2.08)	N-0°	北壁中央		
SB24	39 頁	PL.11	富士Ⅴ	L- Ⅲ	方形	2.57	(2.09)	N-108.0° -E	東壁	SB33 → SB35 → SB28 → SB27 → SB25 → SB24 SB33 → SB35 → SB28 → SB26 → SB24	
SB25	40 頁	PL.11	富士Ⅴ	L- Ⅲ	方形	2.10	(2.09)	N-105.0° -E	東壁	SB33 → SB35 → SB28 → SB27 → SB25 → SB24	
SB26	42 頁	PL.11	沢東Ⅰ	L- Ⅲ	方形	2.69	2.58	N-22.0° -E		SB33 → SB35 → SB28、B32 → SB26 → SB24	
SB27	41 頁	PL.11	沢東Ⅱ	L- Ⅲ	方形	(1.10)	2.23	N-24.0° -E		SB33 → SB35 → SB28 → SB27 → SB25 → SB24	
SB28	42 頁	PL.11	沢東Ⅰ	L- Ⅲ	方形	4.02	(4.49)	N-67.0° -W	西壁北寄り	SB33 → SB35 → SB28 → SB27 → SB25 → SB24 SB33 → SB35 → SB28 → SB26	
SB29	44 頁	PL.12	富士Ⅲ	M- Ⅰ M- Ⅱ	やや不整形な長方形	3.73	3.46	N-34.0° -E	北壁東寄り	SB44 → SB29	焼失建物
SB30	36 頁	PL.3	富士Ⅰ	L- Ⅱ	方形	(1.68)	3.26	N-270° -E		SB43 → SB30 → SB18 → SB11 → SB09、SB10	
SB31	47 頁	PL.3・13	富士Ⅳ	L- Ⅱ	方形	(2.86)	3.18	N-14.0° -E	北壁東寄り	SB43 → SB30 → SB18 → SB31 → SB09、SB17 SB31 → SB04 → SB03 → SH01	
SB32	49 頁	PL.12	安久Ⅳ	L- Ⅲ	方形	(1.06)	(1.79)	N-11.0° -E		SB32 → SB26	
SB33	49 頁		沢東Ⅰ以前	L- Ⅲ	方形	(2.50)	(2.55)	N-74.5° -W	西壁	SB33 → SB35 → SB28	
SB35	50 頁	PL.12	沢東Ⅰ以前	L- Ⅲ	方形	3.54	(2.37)	N-93.0° -E	東壁中央	SB33 → SB35 → SB28	
SB36	51 頁	PL.3・14	富士Ⅰ	L- Ⅱ	方形	(3.95)	4.31	N-16.0° -E	北壁東寄り	SB36 → SB18 → SB31 → SB17	
SB38	53 頁		富士Ⅶ	M- Ⅱ	方形	4.54	(2.83)	N-48.0° -W	西壁	SB47 → SB45 → SB38	
SB39	54 頁	PL.15	富士Ⅲ	M- Ⅱ	方形	(2.38)	3.65	N-14.0° -E	北壁中央	SB39 → SK15	
SB40	55 頁	PL.16	富士Ⅱ	M- Ⅰ M- Ⅱ	方形	3.46	(3.16)	N-83.0° -W	西壁中央	SB40 → SB42、SB46	
SB41	56 頁	PL.17	安久Ⅲ	M- Ⅲ	方形	(3.23)	(3.59)	N-70.5° -W	西壁南寄り		
SB42	58 頁	PL.17	富士Ⅲ	M- Ⅱ	不整形な方形	(2.82)	3.49	N-23.0° -E		SB40 → SB42	
SB43	48 頁	PL.3・13	富士Ⅰ以前	L- Ⅱ	方形	(2.21)	(1.56)	N-9.5° -W	北壁	SB43 → SB30 → SB18 → SB11 → SB10 → SB31 → SB09	
SB44	59 頁	PL.17	沢東Ⅱ	M- Ⅱ	隅丸方形	(2.83)	(3.24)	N-3.0° -E	北壁	SB44 → SB29 → SK16、SK06	
SB45	60 頁	PL.18	富士Ⅱ	M- Ⅱ N- Ⅱ	隅丸方形	3.56	3.61	N-30.0° -E	北壁東寄り	SB47 → SB45 → SB38	
SB46	63 頁		富士Ⅱ	M- Ⅰ	不整形な方形	(2.79)	4.42	N-2.5° -E	北壁中央	SB40 → SB46	
SB47	62 頁		沢東Ⅰ - Ⅱ	M- Ⅱ N- Ⅱ	隅丸方形	(1.51)	3.74	N-29.0° -E	北壁	SB47 → SB45 → SB38	
SB48	64 頁	PL.19	富士Ⅱ	J- Ⅲ	方形	3.95	(2.78)	N-22.0° -E	北壁	SB48 → SK03、SK07、SK09、SK12、SK13	
SB49	65 頁	PL.19	富士Ⅰ - Ⅱ	N- Ⅲ	方形	3.79	3.98	N-20.0° -E	北壁中央		
SB50	66 頁	PL.19	富士Ⅳ	N- Ⅱ	方形	2.98	2.64	N-30.0° -E	北壁西端	SB73 → SB50	
SB51	68 頁	PL.3・19	富士Ⅰ - Ⅱ	L-0	方形	3.50	3.52	N-14.0° -E	北壁中央	SB88 → SB51 SB84 → SB91 → SB51	
SB52	69 頁	PL.20	富士Ⅴ	N- Ⅱ	方形	3.08	3.12	N-93.5° -E	東壁南端	SB58、SB73 → SB52	
SB53	72 頁	PL.21・22	富士Ⅲ	N- Ⅰ N- Ⅱ	方形	3.94	4.26	N-10.0° -E	北壁中央	SB68、SB75 → SB53 → SB54、SB58	
SB54	73 頁	PL.22	富士Ⅳ	N- Ⅰ N- Ⅱ	方形	2.82	2.75	N-98.5° -E	東壁北寄り	SB68 → SB53 → SB54 → SB72	
SB55	74 頁		富士Ⅱ - Ⅲ	N- Ⅰ	方形	(2.10)	(2.02)	N-99.0° -E	東壁		

遺構名	掲載頁	図版	遺構の時期	グリッド	平面形	主軸	直交	主軸方位	カマド位置	切合い（古→新）	備考
SB56	75 頁	PL.22	富士Ⅲ - Ⅳ	O- Ⅰ	方形	（1.34）	2.58	N-5.0° -W	北壁中央	SB56 → SB57	
SB57	77 頁	PL.22・23	富士Ⅳ	O- Ⅰ	不整形な方形	3.74	4.13	N-100.0° -E	北壁東寄り	SB56、SB61 → SB57 → SB59	
SB58	78 頁		富士Ⅲ - Ⅳ	N- Ⅱ O- Ⅱ	長方形 （やや不整形）	2.96	2.45	N-36.5° -E	北壁中央	SB75 → SB53 → SB58 → SB52	
SB59	79 頁		富士Ⅳ	O- Ⅱ	方形	（0.62）	（1.78）	N-27.0° -W		SB57 → SB59 → SB60 → SB63	
SB60	79 頁	PL.22・23	富士Ⅵ	O- Ⅱ	方形	3.30	2.90	N-6.5° -E	北壁中央	SB59 → SB60 → SB63	
SB61	82 頁	PL.22・23	沢東Ⅰ	O- Ⅰ	方形	2.69	3.25	N-11.0° -E	北壁東寄り	SB62 → SB61 → SB57	
SB62	83 頁	PL.22・23	安久Ⅳ	O- Ⅰ	方形	4.45	（1.58）	N-8.0° -E		SB62 → SB61	
SB63	84 頁	PL.24	富士Ⅵ	O- Ⅱ	方形	3.44	3.18	N-155.0° -E	東壁北寄り	SB59 → SB60 → SB63	焼失建物
SB64	86 頁	PL.25	沢東Ⅰ	O- Ⅱ O- Ⅲ	やや不整形な方形	（4.72）	4.86	N-9.0° -E	北壁中央	SB69 → SB70 → SB64 → SB67 SB65 → SB64	
SB65	89 頁	PL.26	安久Ⅳ	O- Ⅱ O- Ⅲ	方形	5.28	（5.10）	N-87.5° -W	西壁中央	SB65 → SB64 → SB67	
SB66	91 頁	PL.27	安久Ⅱ	N- Ⅲ O- Ⅲ	方形	4.35	4.20	N-23.0° -W	北壁中央		
SB67	93 頁	PL.28	富士Ⅲ	O- Ⅲ	方形	（2.46）	3.43	N-15.0° -W	北壁東寄り	SB65 → SB64 → SB67	
SB68	95 頁		富士Ⅰ	N- Ⅰ	方形か？	（0.83）	（1.30）	N-10.5° -E	北壁	SB68 → SB53 → SB54	
SB69	96 頁		沢東Ⅰ	O- Ⅱ P- Ⅱ	方形	（4.64）	（3.44）	N-6.0° -E		SB69 → SB80 → SB78 SB69 → SB70 → SB64、SB71	
SB70	97 頁		沢東Ⅰ	P- Ⅲ	方形	（3.24）	（2.51）	N-6.0° -E		SB69 → SB70 → SB64 、SB71	
SB71	98 頁	PL.28	富士Ⅴ	P- Ⅱ	方形	2.64	（1.96）	N-16.5° -E	北壁	SB69 → SB70 → SB71	
SB72	98 頁	PL.29	富士Ⅳ	N- Ⅱ	方形	（2.18）	（2.88）	N-38.0° -E	北壁西寄り	SB53 → SB54 → SB72	
SB73	100 頁	PL.28	安久Ⅲ	N- Ⅱ	不明	（4.90）	（5.50）			SB73 → SB50、SB52	焼失建物
SB74	101 頁	PL.3	富士Ⅵ - Ⅷ	M-0 M- Ⅰ	方形	（2.83）	（2.25）	N-36.5° -E		SB91 → SB74	
SB75	102 頁		富士Ⅱ	N- Ⅰ	方形	2.98	2.64	N-33.0° -E	北壁西寄り	SB75 → SB53 → SB58	
SB76	103 頁	PL.3・29	沢東Ⅱ	L- Ⅰ	方形	（2.83）	4.34	N-12.5° -E	北壁中央	SB88 → SB76 → SB92 → SB77	
SB77	105 頁	PL.3・29	富士Ⅰ - Ⅱ	L- Ⅰ M- Ⅰ	方形	4.30	4.40	N-12.0° -E	北壁中央	SB76 → SB92 → SB77	
SB78	107 頁	PL.29	沢東Ⅱ	O- Ⅱ	不整形な方形	3.75	（2.28）	N-6.0° -E		SB69 → SB80 → SB78	
SB80	108 頁	PL.29	沢東Ⅱ以前	O- Ⅱ P- Ⅱ	方形	3.14	（1.02）	N-11.5° -E		SB69 → SB80 → SB78	
SB81	108 頁	PL.3・29	沢東Ⅱ	M- Ⅰ	方形	（0.91）	（1.67）	N-4.0° -E	北壁	SB92 → SB82 → SB81	
SB82	109 頁	PL.3・29	沢東Ⅱ	M- Ⅰ	方形	（1.97）	（2.56）	N-10.0° -E	北壁	SB92 → SB82 → SB81	
SB83	110 頁	PL.3・29	富士Ⅳ	M-0	方形	（1.47）	（1.55）	N-3.0° -E		SB84 → SB91 → SB83	
SB84	110 頁	PL.3	安久Ⅲ以前	M-0	方形	（0.97）	（2.23）	N-23.0° -W		SB84 → SB91 → SB51、SB83	
SB87	111 頁		富士Ⅵ	L- Ⅲ	方形	（3.03）	（3.04）	N-11.5° -E		ＳＢ 87 → ＳＢ 16	
SB88	112 頁	PL.3・30	安久Ⅱ - Ⅲ	L- Ⅰ	方形	4.95	4.88	N-109.0° -E	東壁南寄り	SB89 → SB88 → SB51、SB76 、SB90	焼失建物
SB89	115 頁	PL.3	安久Ⅰ - Ⅱ	L- Ⅰ	方形	（3.78）	（3.00）	N-41.5° -E	北壁	SB89 → SB88 → SB90	
SB90	115 頁	PL.3	富士Ⅵ	L- Ⅰ	方形	（2.47）	（2.54）	N-47.0° -E	北壁	SB89 → SB88 → SB90	
SB91	116 頁	PL.3	安久Ⅲ	M-0 M- Ⅰ	方形	（4.30）	（5.09）	N-103.5° -W	西壁	SB84 → SB91 → SB51、SB74、SB83、SB92、SK20	
SB92	118 頁	PL.3	沢東Ⅱ	M- Ⅰ	方形	4.62	5.13	N-8.5° -W	北壁東寄り	SB76 、SB91 → SB92 → SB77、SB82、SK20	

掘立柱建物

遺構名	掲載頁	図版	遺構の時期	グリッド	建物平面形	柱穴平面形	主軸（m）	直交（m）	主軸方位	切合い（古→新）	備考
SH01	121 頁	PL.3・30	富士Ⅵ以降	L- Ⅱ L- Ⅲ	総柱建物 南北３間×東西２間	円形	5.3	2.8	N-30.0° -E	SB31 → SB04 → SB03 → SH01	
SH02	122 頁	PL.30	富士Ⅶ - Ⅷ	M- Ⅲ	側柱建物 南北２間×東西３間	円形、 長方形	3.9	4.8	N-12.5° -E	SB16 → SH02 → SB14 → SB12	

溝

遺構名	掲載頁	図版	グリッド	全長（m）	幅（cm）	深さ（cm）	切合い（古→新）	出土遺物	備考
SD01	126 頁	PL.30	J- Ⅲ、J- Ⅳ K- Ⅲ、K- Ⅳ	11.4	58 ～ 188	116			

土坑

遺構名	グリッド	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	切合い（古→新）	出土遺物	備考
SK01	L- Ⅱ	隅丸方形	98	90	8	SB17 → SK01		
SK02	L- Ⅱ	不定形	（210）	147	31	SB17 → SK02		
SK03	J- Ⅲ	隅丸長方形	114	64	19	SB48 → SK03		人骨
SK04	L- Ⅲ	不整形な長方形	191	（74）	28	SB26 → SB24 → SK04		
SK06	M- Ⅱ	楕円形	99	64	18	SB44 → SK06		
SK07	J- Ⅲ	隅丸長方形	84	59	7	SB48 → SK07		人骨

遺構名	グリッド	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	切合い（古→新）	出土遺物	備考
SK08	K-Ⅲ	隅丸方形	99	（52）	19			
SK09	J-Ⅲ	楕円形	101	70	44	SB48 → SK09	SK09-01 ～ 07	人骨
SK11	O-Ⅲ	円形	110	109	12	SB67 → SK11		
SK12	J-Ⅲ	隅丸長方形	125	85	37	SB48 → SK12	SK12-01 ～ 08	人骨
SK13	J-Ⅲ	楕円形	97	60	12	SB48 → SK13	SK13-01 ～ 12	
SK15	M-Ⅱ	円形	106	98	14	SB39 → SK15		
SK16	M-Ⅱ	円形	121	116	16	SB44 → SB29 → SK16		
SK17	M-Ⅲ	不整形な楕円形	92	69	16	SB14 → SB12 → SK17		
SK18	M-Ⅲ	隅丸長方形	132	96	20	SB15 → SB14 → SK18		
SK19	M-Ⅲ	楕円形	79	（55）	27	SB15 → SB14 → SB13 → SK19		
SK20	M-Ⅰ	隅丸長方形	108	80	65	SB91 → SB92 → SK20	SK20-01	
SK21	K-Ⅳ	隅丸長方形	127	64	24	SK22 → SK21	SK21-01	
SK22	K-Ⅳ	隅丸長方形	135	（67）	12	SK22 → SK21		
SK25	J-Ⅱ	楕円形	64	38	13		SK25-01	埋甕？

ピット

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	土層	切合い（古→新）	出土遺物	備考
Pit7	L-Ⅲ	楕円形	U字形	22	18	13	A			
Pit8	L-Ⅲ	楕円形	浅鉢形	22	22	6	A			
Pit9	L-Ⅲ	円形	浅鉢形	54	50	22	A			
Pit10	L-Ⅲ	円形	逆台形	52	48	20	A		Pit10-01	
Pit11	L-Ⅲ	方形	浅鉢形	53	44	13	A			
Pit12	L-Ⅳ	楕円形	浅鉢形	37	34	8	A			
Pit13	L-Ⅳ	円形	浅鉢形	42	40	20	A	Pit14 → Pit13		
Pit14	L-Ⅳ	楕円形	浅鉢形	32	（25）	23	B	Pit14 → Pit13		
Pit15	L-Ⅳ	楕円形	浅鉢形	44	38	20	A			
Pit16	L-Ⅳ	円形	逆台形	39	32	16	A			
Pit17	L-Ⅳ	円形	U字形	22	20	15	B			
Pit18	L-Ⅳ	楕円形	浅鉢形	35	25	17	A	Pit76 → Pit18		
Pit19	L-Ⅳ	楕円形	浅鉢形	63	46	17	A			
Pit20	L-Ⅳ	楕円形	浅鉢形	50	42	23	A	Pit21 → Pit20		
Pit21	L-Ⅳ	楕円形	浅鉢形	44	（22）	18	B	Pit21 → Pit20		
Pit22	L-Ⅳ	楕円形	浅鉢形	32	26	19	A			
Pit23	L-Ⅳ	円形	浅鉢形	51	48	20	A			
Pit24	L-Ⅳ	円形	浅鉢形	45	42	19	A			
Pit25	L-Ⅲ	楕円形	浅鉢形	56	（39）	13	A			
Pit26	L-Ⅱ	円形	浅鉢形	51	47	8	-			
Pit27	L-Ⅱ	楕円形	浅鉢形	50	40	11	-			
Pit28	L-Ⅱ	円形	浅鉢形	50	49	19	-			
Pit31	L-Ⅲ	円形	浅鉢形	38	31	12	A			
Pit35	L-Ⅳ	楕円形	逆台形	40	29	22	-			
Pit36	L-Ⅲ	円形	浅鉢形	23	（22）	13	-	Pit36 → Pit37		
Pit37	L-Ⅲ	円形	浅鉢形	28	27	15	-	Pit36 → Pit37		
Pit38	L-Ⅰ	楕円形	逆台形	68	36	6	-			
Pit39	L-Ⅱ	円形	逆台形	34	34	10	-			
Pit40	M-Ⅱ	円形	浅鉢形	43	41	15	-			
Pit41	M-Ⅱ	円形	浅鉢形	46	44	21	-			
Pit42	M-Ⅱ	円形	浅鉢形	53	50	21	-			
Pit44	L-Ⅲ	円形	-	42	39	-	-			
Pit45	L-Ⅲ	円形	浅鉢形	41	38	-	-			
Pit49	L-Ⅲ	円形	浅鉢形	50	38	19	-			
Pit59	M-Ⅲ	円形	-	42	36	-	-			
Pit60	M-Ⅲ	楕円形	-	67	50	-	-			
Pit61	N-Ⅰ	円形	浅鉢形	46	45	13	D			
Pit62	M-Ⅰ	円形	浅鉢形	27	26	13	C			
Pit63	M-Ⅰ	円形	浅鉢形	38	35	15	C			
Pit64	M-Ⅰ	円形	浅鉢形	41	40	15	C			
Pit65	M-Ⅰ	円形	U字形	40	37	26	C			
Pit66	M-Ⅰ	円形	浅鉢形	38	36	39	A			
Pit67	N-Ⅰ	円形	浅鉢形	45	43	20	A			
Pit68	M-Ⅰ	円形	浅鉢形	43	43	19	C			
Pit69	M-Ⅰ	円形	浅鉢形	38	36	18	C			
Pit70	M-Ⅰ	円形	浅鉢形	57	55	28	C			
Pit71	N-Ⅰ	円形	浅鉢形	47	43	19	C	Pit72 → Pit71		
Pit72	N-Ⅰ	楕円形	浅鉢形	（43）	43	14	D	Pit72 → Pit71		
Pit73	N-Ⅰ	円形	浅鉢形	33	32	20	C			
Pit74	N-Ⅰ	楕円形	浅鉢形	71	47	24	A			
Pit76	L-Ⅳ	円形	浅鉢形	33	（15）	15		Pit76 → Pit18		
Pit84	L-Ⅱ	不整形	-	77	34	-	-			
Pit86	L-Ⅱ	円形	-	70	47	-	-			
Pit88	L-Ⅰ	楕円形	-	60	52	-	-			
Pit89	N-Ⅱ	楕円形	-	64	47	-	-			

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	土層	切合い（古→新）	出土遺物	備考
Pit93	M-Ⅱ	円形	-	33	32	-	-			
Pit97	M-Ⅰ	円形	-	36	36	-	-			
Pit98	M-Ⅰ	円形	-	29	27	-	-			
Pit99	M-Ⅱ	円形	浅鉢形	27	30	22	-			
Pit100	M-Ⅱ	円形	浅鉢形	36	35	27	-			
Pit101	M-Ⅱ	円形	浅鉢形	49	49	15	-			
Pit102	M-Ⅱ	円形	U字形	62	54	31	-			
Pit103	M-Ⅱ	方形	逆台形	64	(32)	5	-			
Pit104	M-Ⅱ	楕円形	浅鉢形	36	31	20	-	Pit130→Pit104		
Pit105	M-Ⅱ	円形	U字形	34	32	37	-			
Pit107	L-Ⅲ	楕円形	-	44	32	-	-			
Pit108	L-Ⅲ	円形	-	32	32	-	-			
Pit109	L-Ⅲ	楕円形	-	39	29	-	-			
Pit110	L-Ⅲ	円形	-	37	30	-	-			
Pit116	M-Ⅲ	円形	-	34	32	-	-			
Pit117	J-Ⅲ	楕円形	浅鉢形	62	40	24	A			
Pit126	M-Ⅱ	円形	浅鉢形	32	29	18	-			
Pit129	M-Ⅱ	円形	浅鉢形	36	32	28	-			
Pit130	M-Ⅱ	楕円形	-	62	37	29	-	Pit130→Pit104		
Pit133	M-Ⅱ	円形	浅鉢形	37	(36)	24	-	Pit133→Pit134		
Pit134	M-Ⅱ	楕円形	浅鉢形	56	38	16	-	Pit133→Pit134		
Pit135	M-Ⅱ	円形	浅鉢形	33	33	12	-			
Pit136	O-Ⅲ	円形	浅鉢形	31	27	36	E			
Pit137	O-Ⅲ	円形	浅鉢形	59	56	33	E			
Pit138	O-Ⅲ	円形	浅鉢形	38	35	20	E			
Pit139	O-Ⅲ	円形	浅鉢形	46	48	30	E			
Pit140	O-Ⅲ	円形	浅鉢形	44	44	19	E			
Pit141	O-Ⅲ	円形	浅鉢形	67	64	15	E			
Pit142	O-Ⅲ	円形	浅鉢形	45	45	22	E			
Pit143	O-Ⅲ	円形	浅鉢形	47	45	28	E			
Pit144	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	68	67	32	E			
Pit145	O-Ⅱ	楕円形	浅鉢形	52	45	17	E			
Pit146	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	(34)	36	11	E	Pit146→Pit147		
Pit147	O-Ⅱ	楕円形	浅鉢形	57	42	12	E	Pit146→Pit147		
Pit148	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	43	38	22	E			
Pit149	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	55	50	15	E			
Pit150	N-Ⅱ	円形	浅鉢形	48	43	22	E			
Pit151	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	50	48	18	E			
Pit152	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	48	41	11	A			
Pit153	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	55	50	29	E			
Pit154	N-Ⅰ	円形	浅鉢形	44	44	13	C			
Pit155	N-Ⅱ	楕円形	浅鉢形	70	37	18	E			
Pit156	N-Ⅱ	円形	浅鉢形	55	46	19	C			
Pit157	N-Ⅱ	円形	浅鉢形	68	60	17	E			
Pit158	N-Ⅰ	楕円形	浅鉢形	81	50	20	C	Pit191→Pit158		
Pit159	N-Ⅰ	円形	浅鉢形	46	43	5	E			
Pit160	N-Ⅰ	円形	浅鉢形	46	44	7	C			
Pit161	O-Ⅰ	円形	浅鉢形	39	37	23	C			
Pit162	O-Ⅰ	円形	浅鉢形	42	35	24	C			
Pit163	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	45	45	11	C			
Pit164	O-Ⅰ	円形	浅鉢形	40	36	12	E			
Pit165	O-Ⅰ	円形	浅鉢形	44	41	13	C			
Pit166	O-Ⅰ	楕円形	浅鉢形	56	44	15	C			
Pit167	O-Ⅰ	円形	浅鉢形	60	55	35	C			
Pit168	O-Ⅰ	円形	浅鉢形	56	51	39	C			
Pit169	O-Ⅰ	円形	浅鉢形	48	43	31	C			
Pit170	O-Ⅰ	円形	U字形	50	49	34	C			
Pit171	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	42	37	17	C			
Pit172	O-Ⅱ	円形	U字形	44	44	30	C			
Pit173	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	39	37	26	C			
Pit174	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	34	32	20	C			
Pit175	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	45	35	28	-			
Pit176	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	47	45	34	-			
Pit179	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	28	23	27	-			
Pit180	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	52	44	27	-			
Pit181	O-Ⅲ	楕円形	浅鉢形	60	38	34	-			
Pit182	O-Ⅲ	円形	浅鉢形	43	35	34	-			
Pit183	O-Ⅲ	円形	U字形	45	38	43	-			
Pit187	O-Ⅲ	円形	浅鉢形	52	49	23	A			
Pit188	O-Ⅲ	円形	浅鉢形	29	25	17	A			
Pit189	O-Ⅲ	円形	浅鉢形	49	48	8	-			
Pit190	N-Ⅰ	円形	浅鉢形	48	45	14	-	Pit191→Pit190		
Pit191	N-Ⅰ	楕円形	浅鉢形	65	58	13	-	Pit191→Pit158 Pit191→Pit190		
Pit192	N-Ⅰ	円形	浅鉢形	46	46	20	A			

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	土層	切合い（古→新）	出土遺物	備考
Pit194	N-Ⅱ	円形	浅鉢形	46	42	19	A			
Pit195	O-Ⅱ	円形	浅鉢形	57	（43）	23	-			
Pit197	M-Ⅱ	楕円形	浅鉢形	50	43	26	-			
Pit205	M-Ⅰ	楕円形	U字形	47	40	62	-			
Pit206	M-Ⅰ	円形	浅鉢形	32	30	10	-			
Pit207	M-Ⅰ	不整形	浅鉢形	74	47	16	-			
Pit208	M-Ⅰ	円形	浅鉢形	24	23	6	-			
Pit209	M-Ⅰ	円形	浅鉢形	22	20	13	-			
Pit210	M-Ⅰ	円形	浅鉢形	37	36	24	-			
Pit211	L-Ⅰ	円形	浅鉢形	32	30	10	-			
Pit214	M-Ⅰ	円形	浅鉢形	21	20	6	-			
Pit216	M-Ⅰ	円形	浅鉢形	18	17	15	-			
Pit217	M-Ⅰ	楕円形	浅鉢形	40	25	6	-			
Pit218	L-0	円形	浅鉢形	46	45	6	-			
Pit219	L-0	円形	浅鉢形	24	22	26	-			

土層注記

A　黒褐色　しまりやや弱、粘性弱。大淵スコリア少量。
B　黒褐色　しまりやや弱、粘性弱。大淵スコリア多量。
C　暗褐色　しまりやや弱、粘性弱。溶岩礫少量。
D　灰色　しまりやや強、粘性弱。粘土多量。
E　暗褐色　しまりやや強、粘性弱。溶岩礫少量。大淵スコリア微量。大沢スコリア微量。

・出土遺物観察表

土器

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R番号	種別分類	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
確認-01	1Tr	第12図	PL.37	R0613	縄文土器 深鉢	-	-	(6.6)	7.5YR5/4（にぶい褐） 5YR4/8（赤褐）	良好 -	
確認-02	2Tr	第12図	PL.37	R0007	縄文土器 深鉢	-	-	(4.8)	7.5YR4/3（褐） 7.5YR4/4（褐）	良好 -	
確認-03	2Tr	第12図	PL.37	R0007	縄文土器 深鉢	-	-	(5.5)	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 -	
確認-04	2Tr	第12図	PL.37	R0007	縄文土器 深鉢	-	-	(5.5)	10YR4/2（灰黄褐） 7.5YR7/6（橙）	良好 -	
確認-05	2Tr	第12図	PL.37	R0005	縄文土器 深鉢	-	-	(4.7)	10YR6/4（にぶい黄橙） 10YR6/6（明黄褐）	良好 -	
確認-06	2Tr	第12図	PL.37	R0005	縄文土器 深鉢	-	-	(6.4)	7.5Y3/1（黒褐） 2.5Y5/6（明赤褐）	良好 -	
確認-07	2Tr	第12図	PL.37	R0005	縄文土器 深鉢	-	-	(5.6)	7.5YR3/1（黒褐） 5YR5/8（明赤褐）	良好 -	
確認-08	2Tr	第12図	PL.37	R0007	縄文土器 深鉢	-	-	(4.9)	7.5YR6/6（橙） 7.5YR6/6（橙）	良好 -	
確認-09	2Tr	第12図	PL.37	R0007	縄文土器 深鉢	-	-	(2.7)	7.5YR6/6（橙） 5YR5/8（明赤褐）	良好 -	
確認-10	2Tr	第12図	PL.37	R0006	縄文土器 深鉢	-	-	(3.9)	7.5YR6/6（橙） 7.5YR6/6（橙）	良好 -	
確認-11	1Tr	第12図	PL.37	R0614	縄文土器 深鉢	-	-	(7.1)	2.5Y3/1（黒褐） 7.5YR7/6（橙）	良好 -	
確認-12	2Tr	第12図	PL.37	R0005	縄文土器 深鉢	-	-	(5.1)	7.5YR5/6（明褐） 7.5YR6/6（橙）	良好 -	
確認-13	2Tr	第12図	PL.37	R0007	縄文土器 深鉢	-	-	(6.3)	7.5YR5/4（にぶい褐） 10YR3/3（暗褐）	良好 -	
確認-14	2Tr	第12図	PL.37	R0007	縄文土器 深鉢	-	-	(5.7)	7.5YR5/6（明褐） 10YR6/3（にぶい黄橙）	良好 -	
確認-15	2Tr	第12図	PL.37	R0007	縄文土器 深鉢	-	-	(8.6)	7.5YR6/6（橙） 10YR6/3（にぶい黄橙）	良好 -	
確認-16	2Tr	第12図	PL.37	R0006	縄文土器 深鉢	-	-	(3.1)	10YR6/4（にぶい黄橙） 5YR5/6（明赤褐）	良好 -	
確認-17	2Tr	第12図	PL.37	R0007	縄文土器 深鉢	-	-	(3.4)	7.5Y5/4（にぶい褐） 2.5Y3/2（黒褐）	良好 -	
確認-18	2Tr	第12図	PL.37	R0005	縄文土器 深鉢	-	-	(3.7)	7.5YR3/1（黒褐） 7.5YR3/2（黒褐）	良好 -	
確認-19	2Tr	第12図	PL.37	R0007	縄文土器 深鉢	-	-	(9.0)	7.5YR4/3（褐） 10YR3/3（暗褐）	良好 -	
確認-20	2Tr	第12図	PL.37	R0007	縄文土器 深鉢	-	-	(6.2)	10YR4/2（灰黄褐） 7.5Y4/2（灰褐）	良好 -	
確認-21	4Tr	第12図	PL.37	R0010	縄文土器 深鉢	-	-	(7.2)	10YR6/6（明黄褐） 5YR5/6（明赤褐）	良好 -	
確認-22	1Tr	第12図	PL.37	R0635	縄文土器 深鉢	-	[11.3]	(7.2)	5YR3/8（明赤褐） 5YR4/8（赤褐）	良好 25%	
確認-23	1Tr	第12図	PL.37	R0640	縄文土器 深鉢	-	8.0	(6.1)	5YR5/6（明赤褐） 10YR4/6（褐）	良好 60%	
確認-24	1Tr	第12図	PL.37	R0638	縄文土器 土製円盤						

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別 分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
確認 -25	3Tr	第 12 図	PL.37	R0008	灰釉陶器 碗	[13.6]	[6.9]	4.9	10YR6/1（褐灰） 10YR6/2（灰黄褐）	良好 60%	
確認 -26	3Tr	第 12 図	PL.37	R0367	灰釉陶器 碗	-	6.6	(3.4)	7.5YR5/1（褐灰） 7.5YR6/1（褐灰）	良好 45%	
確認 -27	1Tr	第 12 図	-	R0633	灰釉陶器 碗	-	[7.6]	(2.45)	2.5Y6/1（黄灰） 10YR6/1（褐灰）	良好 45%	
確認 -28	2Tr	第 12 図	-	R0005	灰釉陶器 碗	-	[8.6]	(1.9)	10YR8/1（灰白） 10YR8/1（灰白）	良好 25%	
確認 -29	4Tr	第 12 図	-	R0012	灰釉陶器 碗	-	[5.35]	(2.5)	2.5YR5/2（暗灰黄） 2.5YR6/2（灰黄）	良好 40%	
確認 -30	4Tr	第 12 図	PL.38	R0011 R0012	須恵器 坏	14.5	7.8	4.1	2.5YR6/1（黄灰） 2.5YR4/1（黄灰）	良好 80%	
確認 -31	4Tr	第 12 図	-	R0012	須恵器 高坏	[13.75]	-	(5.1)	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y7/1（灰白）	良好 20%	
確認 -32	2Tr	第 12 図	-	R0007	須恵器 甕	-	-	(3.9)	2.5Y7/2（灰黄） 2.5Y7/1（灰白）	良好 -	
確認 -33	2Tr	第 12 図	PL.37	R0005	須恵器 長頸壺	-	-	(7.4)	2.5Y7/3（浅黄） 2.5Y7/2（灰黄）	良好 -	
確認 -34	1Tr	第 12 図	-	R0634	土師器 蓋	つまみ 径 2.75	つまみ 高 1.1	(3.25)	2.5YR4/8（赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 30%	
確認 -35	3Tr	第 12 図	PL.37	R0008	土師器 坏	-	-	(2.2)	5YR5/6（明赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 -	刻書
確認 -36	3Tr	第 12 図	-	R0013	土師器 坏	-	[7.2]	(1.6)	5YR4/6（赤褐） 5YR4/4（にぶい赤褐）	良好 40%	
確認 -37	3Tr	第 12 図	-	R0008	土師器 高坏	-	-	(5.1)	2.5YR5/4（にぶい赤褐） 2.5YR4/4（にぶい赤褐）	良好 80%	
確認 -38	3Tr	第 12 図	-	R0013	土師器 甕	-	-	(4.6)	7.5YR7/4（にぶい橙） 7.5YR7/3（にぶい橙）	良好 -	
確認 -39	3Tr	第 12 図	PL.38	R0008	土師器 小型甕	[15.9]	-	(3.3)	2.5YR4/4（にぶい赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 20%	
SB01・SB02-01	SB01・ SB02	第 17 図	-	R0089	灰釉陶器 碗	-	-	(3.0)	10YR7/1（灰白） 10YR7/1（灰白）	良好 -	
SB01・SB02-02	SB01・ SB02	第 17 図	-	R0089	灰釉陶器 碗	-	[6.8]	(2.0)	10YR7/2（にぶい黄橙） 10YR7/2（にぶい黄橙）	良好 30%	
SB01・SB02-03	SB01・ SB02	第 17 図	-	R0088	須恵器 壺	-	-	(3.2)	2.5Y7/1（灰白） 2.5Y7/1（灰白）	良好 -	
SB01・SB02-04	SB01・ SB02 カマド	第 17 図	-	R0299	須恵器 甕	-	-	(5.2)	10YR4/1（褐灰） 7.5YR4/3（褐）	良好 -	
SB01・SB02-05	SB01・ SB02	第 17 図	-	R0069	土師器 坏	-	[6.0]	(1.7)	7.5YR2/1（黒） 5YR5/6（明赤褐）	良好 35%	
SB01・SB02-06	SB01・ SB02 カマド	第 17 図	-	R0300	土師器 小型甕	[10.4]	-	(5.9)	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 30%	
SB03-01	SB03 カマド	第 20 図	PL.38	R0119 R0123	須恵器 坏蓋	[17.4]	-	(3.7)	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 35%	
SB03-02	SB03 床	第 20 図	-	R0126	須恵器 坏蓋	[10.8]	-	(2.3)	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 25%	
SB03-03	SB03 カマド	第 20 図	PL.38	R0119	須恵器 転用硯	-	-	(2.1)	2.5Y7/1（灰白） 2.5Y7/1（灰白）	良好 40%	内面朱
SB03-04	SB03 床	第 20 図	-	R0127	灰釉陶器 皿	-	[6.7]	(1.5)	10YR7/2（にぶい黄橙） 10YR7/2（にぶい黄橙）	良好 30%	
SB03-05	SB03 床	第 20 図	-	R0123 R0127	土師器 坏	[13.9]	-	(3.5)	5YR5/8（明赤褐） 5YR5/8（明赤褐）	良好 35%	
SB03-06	SB03 床	第 20 図	PL.38	R0127	土師器 坏	[14.7]	8.0	5.4	5YR4/8（赤褐） 5YR4/6（赤褐）	良好 50%	
SB03-07	SB03	第 20 図	-	R0043	土師器 壺	-	-	(2.7)	10YR8/4（浅黄橙） 7.5YR7/6（橙）	軟質 -	
SB04-01	SB04 カマド	第 21 図	-	R0138	須恵器 坏蓋	[14.2]	-	(2.7)	10YR6/1（褐灰） 10YR6/1（褐灰）	良好 30%	
SB04-02	SB04	第 21 図	-	R0107	須恵器 坏蓋	-	-	(2.5)	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y7/1（灰白）	良好 -	
SB04-03	SB04 カマド	第 21 図	-	R0138	須恵器 フラスコ瓶	-	-	(6.4)	10YR6/1（褐灰） 2.5Y7/1（灰白）	良好 -	
SB04-04	SB04	第 21 図	-	R0091	須恵器 提瓶 or フラスコ瓶	-	-	(6.9)	2.5Y5/1（黄灰） 2.5Y7/1（灰白）	良好 -	
SB04-05	SB04 カマド	第 21 図	-	R0140	須恵器 小型甕	[9.0]	-	(4.2)	10YR6/1（褐灰） 10YR6/1（褐灰）	良好 20%	
SB04-06	SB04 カマド	第 21 図	-	R0140	須恵器 壺	[8.8]	-	(3.2)	7.5YR4/1（褐灰） 7.5YR4/1（褐灰）	良好 35%	
SB04-07	SB04 カマド	第 21 図	-	R0146	土師器 坏	[11.5]	-	(4.0)	2.5YR3/2（暗赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 30%	
SB04-08	SB04 カマド	第 21 図	-	R0140	土師器 坏	[11.5]	-	4.0	5YR4/3（褐） 5YR4/3（褐）	良好 35%	
SB04-09	SB04	第 21 図	-	R0045	土師器 壺	-	-	(5.8)	7.5YR6/6（橙） 7.5YR6/6（橙）	良好 -	
SB04-10	SB04 カマド	第 21 図	-	R0140 R0145 R0146 R0147	土師器 甕	-	-	(15.1)	2.5YR6/8（橙） 2.5YR6/8（橙）	良好 -	
SB04-11	SB04	第 21 図	PL.39	R0135 R0142 R0156	土師器 小型甕	[13.4]	6.7	11.7	7.5YR4/4（褐） 7.5YR4/4（褐）	良好 55%	
SB05-01	SB05	第 23 図	-	R0462	須恵器 坏蓋	-	-	(2.7)	N5/0（灰） N4/0（灰）	良好 30%	
SB05-02	SB05	第 23 図	PL.39	R0355	須恵器 高坏	[15.9]	-	(5.8)	2.5Y7/2（灰黄） 2.5Y7/1（灰白）	良好 30%	

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別 分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
SB05-03	SB05	第 23 図	-	R0097	土師器 坏	[10.8]	-	(3.9)	2.5YR4/8 (赤褐) 2.5YR4/8 (赤褐)	良好 25%	
SB05-04	SB05	第 23 図	-	R0103	土師器 甕	-	-	(4.5)	5YR4/6 (赤褐) 5YR4/6 (赤褐)	良好 -	
SB05-05	SB05	第 23 図	-	R0096	土師器 甕	-	-	(16.2)	7.5YR4/4 (褐) 5YR2/3 (極暗赤褐)	良好 -	
SB06-01	SB06	第 24 図	-	R0101	須恵器 坏蓋	[13.8]	-	(2.2)	N6/0 (灰) N6/0 (灰)	良好 25%	
SB06-02	SB06	第 24 図	PL.39	R0099	須恵器 壺	-	-	(6.1)	2.5YR8/1 (灰白) 7.5Y6/2 (灰オリーブ)	良好 30%	
SB06-03	SB06	第 24 図	PL.39	R0101 R0327 R0349 R0328	土師器 坏	[11.6]	[7.3]	4.0	5YR4/8 (赤褐) 5YR4/8 (赤褐)	良好 55%	
SB08-01	SB08	第 27 図	PL.39	R0129	須恵器 甕	-	-	(6.0)	10YR4/1 (褐灰) 10YR4/1 (褐灰)	良好 -	
SB08-02	SB08	第 27 図	-	R0129	土師器 坏	[10.7]	-	(4.5)	7.5YR6/6 (橙) 7.5YR6/6 (橙)	良好 30%	
SB08-03	SB08	第 27 図	-	R0129	土師器 小型甕	[12.0]	-	(5.2)	5YR6/6 (橙) 5YR5/4 (にぶい赤褐)	良好 20%	
SB08-04	SB08 カマド	第 27 図	-	R0121 R0129	土師器 小型甕	-	-	(5.5)	7.5YR5/6 (明褐) 7.5YR4/4 (褐)	良好 -	
SB08-05	SB08 カマド	第 27 図	PL.39	R0115 R0121 R0129 R0150 R0151 R0152 R0153 R0155	土師器 甕	[23.5]	-	(26.7)	5YR5/4 (にぶい赤褐) 5YR4/6 (赤褐)	良好 60%	
SB09-01	SB09	第 29 図	-	R0111	土師器 甕	[21.6]	-	(4.7)	2.5YR5/6 (明赤褐) 2.5YR5/6 (明赤褐)	良好 20%	
SB10-01	SB10	第 33 図	-	R0137	灰釉陶器 碗	[13.3]	-	(3.5)	5Y7/3 (浅黄) 5Y7/1 (灰白)	良好 20%	
SB10-02	SB10	第 33 図	PL.39	R0194	須恵器 坏蓋	[14.0]	-	(2.5)	2.5Y5/1 (黄灰) 2.5Y5/1 (黄灰)	良好 25%	
SB10-03	SB10	第 33 図	PL.39	R0182	須恵器 坏身	[14.0]	11.0	3.8	7.5YR7/1 (明褐灰) 7.5YR7/1 (明褐灰)	良好 60%	
SB10-04	SB10 カマド	第 33 図	PL.40	R0190	須恵器 坏身	-	12.0	(2.6)	10YR7/3 (にぶい黄橙) 10YR8/2 (灰白)	良好 85%	
SB10-05	SB10 カマド	第 33 図	PL.40	R0191	土師器 甕	[22.2]	-	(7.7)	2.5YR5/8 (明赤褐) 2.5YR5/6 (明赤褐)	良好 80%	
SB10-06	SB10	第 33 図	-	R0183 R0216	土師器 甕	[21.1]	-	(9.9)	10R4/6 (赤) 5YR3/3 (暗赤褐)	良好 40%	
SB10-07	SB10	第 33 図	PL.40	R0203 R0222	土師器 甕	[24.7]	-	(11.3)	2.5YR6/8 (橙) 2.5YR6/8 (橙)	良好 25%	
SB11-01	SB11 カマド	第 36 図	-	R0206	土師器 坏	[11.8]	[7.8]	3.5	5YR5/4 (にぶい赤褐) 2.5YR5/6 (明赤褐)	良好 20%	
SB11-02	SB11	第 36 図	-	R0144	土師器 坏	-	[6.5]	(2.3)	2.5YR4/8 (赤褐) 2.5YR4/4 (にぶい赤褐)	良好 25%	
SB11-03	SB11	第 36 図	-	R0171	土師器 小型甕	[15.1]	-	(4.1)	7.5YR4/4 (褐) 5YR6/6 (橙)	良好 25%	
SB11-04	SB11	第 36 図	-	R0211	土師器 甕	-	-	(5.9)	7.5YR4/3 (褐) 7.5YR3/1 (黒褐)	良好 -	
SB12-01	SB12 カマド	第 40 図	PL.40	R0158	緑釉陶器 碗	-	-	(3.7)	10Y8/2 (オリーブ灰) 10Y8/2 (オリーブ灰)	良好 -	
SB12-02	SB12 カマド	第 40 図	-	R0158	灰釉陶器 碗	-	[8.2]	(1.7)	10YR8/1 (灰白) 10YR8/1 (灰白)	良好 30%	
SB12-03	SB12 カマド	第 40 図	-	R0158	灰釉陶器 碗	-	6.3	(2.1)	10YR6/2 (灰黄褐) 7.5YR6/4 (にぶい橙)	良好 45%	
SB12-04	SB12 土坑	第 40 図	-	R0784	須恵器 甑	-	[10.4]	(3.0)	2.5Y5/1 (黄灰) 2.5Y5/1 (黄灰)	良好 35%	
SB12-05	SB12 カマド	第 40 図	PL.40	R0158	土師器 坏	9.8	5.0	3.8	5Y6/6 (橙) 5Y6/6 (橙)	軟質 95%	
SB12-06	SB12 西撹乱	第 40 図	-	R0163	土師器 坏	-	-	(3.5)	7.5YR7/4 (にぶい橙) 10YR6/3 (にぶい黄橙)	軟質 -	
SB12-07	SB12 西撹乱	第 40 図	-	R0163	土師器 坏	-	[5.5]	(1.7)	7.5YR6/3 (にぶい褐) 7.5YR6/4 (にぶい褐)	軟質 50%	
SB12-08	SB12 カマド	第 40 図	-	R0158	土師器 坏	-	5.9	(1.7)	5YR7/6 (橙) 5YR7/6 (橙)	軟質 50%	
SB12-09	SB12	第 40 図	-	R0160	土師器 坏	-	[5.5]	(1.5)	7.5YR7/4 (にぶい橙) 7.5YR7/4 (にぶい橙)	軟質 25%	
SB12-10	SB12 カマド	第 40 図	-	R0177	土師器 高台	-	[6.7]	(2.8)	5YR6/6 (橙) 5YR6/6 (橙)	軟質 40%	
SB12-11	SB12 カマド	第 40 図	PL.40	R0158	土師器 鉢	[19.5]	[9.2]	(8.7)	7.5YR8/4 (浅黄褐) 7.5YR8/4 (浅黄褐)	軟質 40%	
SB12-12	SB12	第 40 図	-	R0160	土師器 甕	[19.3]	-	(3.1)	5YR5/6 (明赤褐) 5YR5/6 (明赤褐)	良好 20%	
SB13-01	SB13 カマド	第 41 図	-	R0213	須恵器 壺	胴径 [13.2]	-	(4.3)	10YR7/1 (灰白) 2.5YR7/2 (灰黄)	良好 30%	
SB13-02	SB13 カマド	第 41 図	-	R0213	須恵器 甕	-	-	(9.5)	2.5YR7/2 (灰黄) 2.5YR7/1 (灰白)	良好 -	
SB13-03	SB13	第 41 図	-	R0187	須恵器 高坏	-	-	(3.2)	10YR5/1 (褐灰) 2.5YR6/1 (黄灰)	良好 45%	
SB13-04	SB13	第 41 図	-	R0213	灰釉陶器 碗	[6.2]	-	(1.7)	7.5YR5/4 (にぶい褐) 7.5YR5/3 (にぶい褐)	良好 20%	
SB13-05	SB13 カマド	第 41 図	PL.40	R0214	土師器 坏	[12.8]	5.9	4.0	7.5YR7/6 (橙) 7.5YR7/6 (橙)	軟質 50%	

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別 分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
SB13-06	SB13 カマド	第 41 図	-	R0213	土師器 坏	[14.2]	-	(4.9)	7.5YR7/6（橙） 7.5YR7/6（橙）	軟質 30%	
SB13-07	SB13 カマド	第 41 図	-	R0213	土師器 坏	-	-	(3.6)	7.5YR5/2（灰褐） 7.5YR4/1（褐灰）	良好 -	
SB13-08	SB13 カマド	第 41 図	-	R0213	土師器 坏	-	[5.2]	(2.2)	7.5YR7/4（にぶい橙） 7.5YR7/4（にぶい橙）	軟質 30%	「#」刻書
SB14-01	SB14 カマド	第 44 図	-	R0201	土師器 坏	[9.8]	-	(2.2)	7.5YR8/4（浅黄橙） 7.5YR7/4（にぶい橙）	軟質 30%	
SB14-02	SB14	第 44 図	-	R0195	土師器 高台	-	[9.8]	(2.3)	5YR7/8（橙） 5YR7/8（橙）	軟質 40%	
SB14-03	SB14	第 44 図	-	R0195	土師器 堝	-	-	(2.3)	5YR4/6（赤褐） 5YR3/6（暗赤褐）	良好 -	
SB15-01	SB15 床	第 47 図	PL.41	R0247	須恵器 坏蓋	9.4	-	3.5	5Y6/1（灰） 5Y6/1（灰）	良好 65%	窯記号？
SB15-02	SB15 カマド	第 47 図	-	R0238	須恵器 坏身	[9.2]	-	2.9	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 30%	
SB15-03	SB15Pit05	第 47 図	-	R0250	須恵器 坏身	[8.5]	-	(3.2)	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 40%	
SB15-04	SB15 カマド	第 47 図	-	R0238	須恵器 坏身 or 坏蓋	[10.8]	-	(2.3)	5Y7/1（灰白） 5Y7/1（灰白）	良好 25%	
SB15-05	SB15 カマド	第 47 図	-	R0238	須恵器 坏身	-	-	(3.75)	10YR6/1（褐灰） 10YR6/1（褐灰）	良好 -	
SB15-06	SB15 床	第 47 図	-	R0251	須恵器 坏身	[13.8]	-	(3.5)	5Y6/1（灰） 5Y6/1（灰）	良好 25%	
SB15-07	SB15 カマド	第 47 図	-	R0238	土師器 堝	-	-	(3.5)	5YR5/6（明赤褐） 5YR5/6（明赤褐）	良好 -	
SB15-08	SB15 カマド	第 47 図	-	R0238	土師器 堝	-	-	(3.3)	5YR5/6（明赤褐） 5YR4/6（赤褐）	良好 -	
SB15-09	SB15 カマド	第 47 図	PL.41	R0239	土師器 堝	[29.5]	-	(14.0)	5YR4/6（赤褐） 5YR3/6（暗赤褐）	良好 30%	
SB16-01	SB16	第 49 図	-	R0184	灰釉陶器 碗	[14.9]	-	(3.7)	2.5Y7/1（灰白） 2.5Y7/1（灰白）	良好 20%	
SB16-02	SB16 床	第 49 図	-	R0220	須恵器 埦？	[20.0]		(4.7)	N6/1（灰） 2.5Y5/1（黄灰）	良好 10%	
SB16-03	SB16 床	第 49 図	-	R0188	須恵器 長頸壺	-	-	(2.2)	2.5Y6/2（灰黄） 2.5Y7/1（灰白）	良好 -	
SB16-04	SB16	第 49 図	-	R0184	灰釉陶器 高台	-	[6.7]	(1.7)	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 20%	
SB16-05	SB16 カマド 掘方	第 49 図	PL.40	R0197	須恵器 甕	-	-	(7.6)	10R2/1（赤黒） 10R3/3（暗赤褐）	良好 -	
SB16-06	SB16 カマド 掘方	第 49 図	-	R0197	土師器 堝	-	-	(3.2)	5YR4/4（にぶい赤褐） 5YR4/6（赤褐）	良好 -	
SB17-01	SB17 カマド	第 53 図	-	R0225	土師器 坏	[12.8]	[7.5]	3.9	5YR6/8（橙） 5YR6/8（橙）	良好 20%	
SB17-02	SB17 カマド	第 53 図	PL.41	R0265	土師器 坏	11.5	7.3	3.6	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 80%	線刻
SB17-03	SB17 カマド	第 53 図	PL.41	R0258	土師器 甕	[23.9]	-	(15.0)	2.5YR5/8（明赤褐） 5YR6/8（橙）	良好 20%	
SB17-04	SB17	第 53 図	PL.41	R0223 R0235 R0255 R0270	土師器 小型甕	[13.5]	-	(5.0)	5YR6/8（橙） 5YR5/6（明赤褐）	良好 50%	
SB18-01	SB18	第 55 図	PL.41	R0301	須恵器 坏身	[14.4]	[11.0]	3.7	10YR7/1（灰白） 10YR7/1（灰白）	良好 30%	
SB18-02	SB18	第 55 図	-	R0301	須恵器 坏身	[14.0]	-	(4.5)	2.5Y7/2（灰黄） 2.5Y8/1（灰白）	良好 25%	
SB18-03	SB18	第 55 図	-	R0301	須恵器 高坏	-	-	(5.2)	2.5Y8/1（灰白） 5Y8/1（灰白）	良好 -	
SB18-04	SB18 カマド	第 55 図	PL.41	R0307	土師器 坏	11.5	6.9	3.5	2.5Y4/8（赤褐） 2.5Y5/8（明赤褐）	良好 60%	
SB18-05	SB18	第 55 図	-	R0319	土師器 坏	[14.7]	[7.0]	5.0	7.5YR7/6（橙） 7.5YR7/6（橙）	軟質 40%	
SB18-06	SB18	第 55 図	PL.41	R0301	土師器 甕	-	-	(3.1)	5YR4/4（にぶい赤褐） 2.5Y4/8（赤褐）	良好 -	
SB18-07	SB18	第 55 図	-	R0301	土師器 甕	[20.0]	-	(6.4)	5YR4/6（赤褐） 10YR3/4（暗褐）	良好 40%	
SB19-01	SB19 カマド	第 59 図	-	R0276	須恵器 坏蓋	[12.7]	-	(3.7)	2.5Y7/2（灰黄） 2.5Y7/2（灰黄）	良好 25%	
SB19-02	SB19Pit02	第 59 図	-	R0286	須恵器 坏身	[14.7]	[9.6]	4.3	10YR7/1（灰白） N7/（灰白）	良好 30%	
SB19-03	SB19	第 59 図	PL.42	R0277 R0287 R0289 R0306	土師器 甕	[23.4]	-	(19.6)	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 40%	
SB19-04	SB19	第 59 図	PL.42	R0277 R0279 R0287 R0289	土師器 甕	21.3	-	(14.5)	2.5YR4/4（赤褐） 5YR4/6（赤褐）	良好 40%	
SB21-01	SB21 床	第 62 図	PL.43	R0266	須恵器 坏蓋	14.5	-	(2.1)	5Y5/1（灰） 5Y5/1（灰）	良好 55%	
SB21-02	SB21	第 62 図	-	R0261	灰釉陶器 皿	[18.9]	-	(2.8)	2.5Y7/2（灰黄） 2.5Y8/1（灰白）	良好 30%	
SB21-03	SB21 床	第 62 図	PL.43	R0335	須恵器 転用硯	-	-	(2.6)	5Y7/1（灰白） 5Y7/1（灰白）	良好 60%	
SB21-04	SB21	第 62 図	-	R0261	灰釉陶器 碗	[16.8]	-	(4.8)	5Y7/1（灰白） 5Y7/1（灰白）	良好 10%	
SB21-05	SB21	第 62 図	-	R0336	土師器 甕	-	-	(3.6)	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 -	

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別分類	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
SB24-01	SB24	第 65 図	-	R0267	須恵器 坏蓋	[12.0]	-	(2.7)	2.5Y7/2（灰黄） 2.5Y7/1（灰白）	良好 20%	
SB24-02	SB24	第 65 図	PL.43	R0267	須恵器 ハソウ	-	-	(2.9)	N5/0（灰） 2.5Y5/1（黄灰）	良好 25%	
SB24-03	SB24 カマド	第 65 図	PL.43	R0268	須恵器 壺	-	[5.5]	(3.5)	2.5Y7/1（灰白） 2.5Y5/1（黄灰）	良好 50%	
SB24-04	SB24 カマド	第 65 図	-	R0280 R0281	土師器 甕	-	-	(10.8)	5YR5/6（明赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 -	
SB25-01	SB25 床下	第 67 図	PL.43	R0274 R0385	土師器 小型甕	[13.3]	5.9	10.5	5YR6/6（橙） 5YR5/4（にぶい赤褐）	良好 70%	
SB25-02	SB25 カマド掘方	第 67 図	-	R0295	土師器 小型甕	[15.7]	-	(5.0)	5YR6/6（橙） 5YR6/8（橙）	良好 30%	
SB26-01	SB26	第 70 図	-	R0309	須恵器 坏蓋	-	-	(2.0)	2.5Y6/1（灰白） 2.5Y6/1（灰白）	良好 30%	窯記号「-」
SB26-02	SB26 掘方	第 70 図	PL.43	R0311 R0313 R0354	須恵器 短頸壺	胴径 17.3	4.8	(13.3)	10YR7/1（灰白） 10YR7/1（灰白）	良好 80%	
SB26-03	SB26	第 70 図	-	R0309	土師器 甕	-	-	(3.8)	5YR5/6（明赤褐） 5YR5/6（明赤褐）	良好 -	
SB26-04	SB26	第 70 図	-	R0309	土師器 高坏	-	-	(4.0)	7.5YR6/6（橙） 7.5YR3/2（黒褐）	軟質 -	
SB27-01	SB27	第 68 図	-	R0321	土師器 坏	[10.8]	-	(2.3)	2.5YR7/8（橙） 2.5YR7/6（橙）	良好 30%	
SB28-01	SB28	第 73 図	-	R0381	灰釉陶器 碗	-	-	(3.0)	2.5Y7/1（灰白） 2.5Y7/1（灰白）	良好 -	
SB28-02	SB28	第 73 図	-	R0359	須恵器 ハソウ？	胴径 [11.1]	-	(2.3)	2.5Y5/1（黄灰） 2.5Y5/1（黄灰）	良好 20%	
SB28-03	SB28	第 73 図	PL.43	R0495	須恵器 坏蓋	10.65	-	3.75	2.5Y5/1（黄灰） 2.5Y5/1（黄灰）	良好 40%	窯記号「-」
SB28-04	SB28 掘方	第 73 図	-	R0387	須恵器 坏蓋	[10.95]	-	(3.0)	10YR4/1（褐灰） 10YR4/1（褐灰）	良好 30%	
SB28-05	SB28	第 73 図	PL.43	R0359	土師器 坏	13.8	7.7	3.8	7.5YR8/4（浅黄橙） 7.5YR7/4（にぶい橙）	軟質 50%	灯明皿？
SB28-06	SB28	第 73 図	PL.43	R0354	土師器 鉢	[15.0]	[8.1]	8.3	5YR4/8（赤褐） 5YR4/6（赤褐）	良好 40%	
SB28-07	SB28	第 73 図	-	R0356	土師器 甕	[14.9]	-	(2.7)	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 20%	
SB28-08	SB28	第 73 図	-	R0354	土師器 甕	-	-	(3.1)	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 -	
SB29-01	SB29	第 76 図	-	R0343	須恵器 坏蓋	つまみ 径 3.2	つまみ 高 0.6	(1.8)	10YR7/1（灰白） 5Y8/1（灰白）	良好 45%	
SB29-02	SB29	第 76 図	PL.44	R0315	須恵器 坏身	11.5	7.7	4.8	5Y7/1（灰白） 2.5Y7/2（灰黄）	良好 80%	
SB29-03	SB29	第 76 図	-	R0505	土師器 坏	[11.2]	-	(3.9)	5YR6/4（にぶい橙） 7.5YR6/4（にぶい橙）	良好 20%	
SB29-04	SB29	第 76 図	-	R0340	土師器 坏	[12.5]	4.0	4.3	5YR6/6（橙） 5YR6/6（橙）	良好 40%	
SB29-05	SB29 床	第 76 図	PL.44	R0341	土師器 坏	13.3	9.8	4.0	2.5Y6/8（橙） 2.5Y6/8（橙）	良好 100%	灯明皿？
SB29-06	SB29 床	第 76 図	PL.44	R0342	土師器 坏	12.6	9.5	3.6	2.5Y5/8（明赤褐） 2.5Y5/8（明赤褐）	良好 100%	
SB29-07	SB29	第 76 図	-	R0315	土師器 甕	[21.6]	-	(4.0)	2.5YR6/8（橙） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 20%	
SB30-01	SB30	第 56 図	-	R0320	須恵器 坏蓋	-	-	(1.1)	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y5/1（黄灰）	良好 -	
SB30-02	SB30	第 56 図	PL.45	R0320	土師器 甕	[18.2]	-	(13.5)	2.5YR4/8（赤褐） 10R4/6（赤）	良好 45%	
SB31-01	SB31	第 78 図	-	R0456	土師器 坏	-	-	(2.9)	7.5YR7/6（橙） 5YR6/6（橙）	軟質 -	
SB31-02	SB31 カマド	第 78 図	-	R0458	土師器 小型甕	[12.7]	-	(3.5)	5YR4/6（赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 25%	
SB31-03	SB31 床	第 78 図	PL.45	R0461	土師器 小型甕	14.7	-	(7.0)	2.5YR4/6（赤褐） 5YR4/3（にぶい赤褐）	良好 50%	
SB31-04	SB31	第 78 図	-	R0456	土師器 塝	-	-	(3.5)	2.5YR4/8（赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 -	
SB31-05	SB31 カマド	第 78 図	-	R0463 R0456 R0458 R0459	土師器 甕	[23.5]	-	(19.0)	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR6/8（橙）	良好 45%	
SB32-01	SB32	第 82 図	PL.45	R0322	須恵器 坏身	[11.4]	8.5	4.2	2.5YR6/1（黄灰） 2.5YR7/2（灰黄）	良好 60%	
SB32-02	SB32	第 82 図	-	R0322	土師器 坏	[12.0]	-	3.8	7.5YR5/4（にぶい橙） 7.5YR4/6（褐）	良好 40%	
SB32-03	SB32 床	第 82 図	PL.45	R0442	土師器 坏	12.4	5.0	5.2	5YR6/6（橙） 5YR4/4（にぶい赤褐）	軟質 95%	
SB35-01	SB35 カマド	第 85 図	-	R0390 R0391	灰釉陶器 碗	[14.6]	-	(4.0)	2.5YR7/1（灰白） 2.5YR7/1（灰白）	良好 20%	
SB35-02	SB35 カマド	第 85 図	-	R0394 R0389 R0390	須恵器 甕 or 壺	-	-	(16.1)	5Y6/1（灰） 5Y6/1（灰）	良好 -	
SB36-01	SB36	第 86 図	-	R0360	須恵器 坏蓋	-	-	(4.2)	2.5YR6/1（黄灰） 2.5YR6/1（黄灰）	良好 -	
SB36-02	SB36	第 86 図	PL.45	R0348	土師器 不明	-	-	(1.0)	5YR7/4（にぶい橙） 5YR7/4（にぶい橙）	良好 -	
SB36-03	SB36	第 86 図	-	R0348	土師器 塝	-	-	(4.0)	2.5Y5/6（明赤褐） 2.5Y4/8（赤褐）	良好 -	

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別 分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
SB36-04	SB36 カマド	第 86 図	-	R0361	土師器 甕	-	-	(6.5)	7.5YR4/6（褐） 7.5YR3/4（暗褐）	良好 -	
SB36-05	SB36 カマド	第 86 図	PL.45	R0360 R0361 R0362 R0382	土師器 甕	21.6	-	(17.2)	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 20%	
SB38-01	SB38 カマド	第 90 図	PL.45	R0396	土師器 坏	[14.0]	6.7	4.2	7.5YR6/4（にぶい橙） 7.5YR6/4（にぶい橙）	良好 50%	
SB38-02	SB38 カマド	第 90 図	-	R0396	土師器 坏	[9.0]	[4.5]	3.2	7.5YR7/4（にぶい橙） 7.5YR7/4（にぶい橙）	良好 20%	
SB38-03	SB38	第 90 図	PL.45	R0396	土師器 坏	-	-	(2.4)	5YR7/6（橙） 5YR7/6（橙）	良好 -	線刻
SB39-01	SB39 カマド	第 93 図	-	R0398 R0438	須恵器 坏蓋	つまみ 径 2.8	つまみ 高 1.1	(2.2)	2.5Y7/1（灰白） 10YR6/1（褐灰）	良好 -	
SB39-02	SB39	第 93 図	-	R0398	須恵器 坏身	-	[8.1]	(1.5)	2.5Y7/1（灰白） 2.5Y7/1（灰白）	良好 25%	
SB39-03	SB39	第 93 図	PL.46	R0399	須恵器 坏身 or 坏蓋	[4.7]	-	(1.2)	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 25%	窯記号「×」
SB39-04	SB39 カマド	第 93 図	-	R0398	土師器 坏	-	5.6	(1.0)	2.5YR6/8（橙） 2.5YR6/8（橙）	良好 50%	
SB39-05	SB39 カマド	第 93 図	PL.46	R0397 R0438	土師器 坏	[11.7]	7.7	3.6	2.5YR4/8（赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 60%	
SB39-06	SB39 カマド	第 93 図	-	R0397	土師器 甕	[21.8]	-	(5.0)	2.5Y5/6（明赤褐） 2.5Y6/8（橙）	良好 25%	
SB39-07	SB39	第 93 図	-	R0438	土師器 甕	[13.0]	-	(5.0)	5YR5/6（明赤褐） 5YR6/6（橙）	良好 20%	
SB40-01	SB40 カマド	第 96 図	-	R0440	須恵器 瓶類（横瓶？）	[6.5]	-	(3.8)	2.5Y6/1（黄灰） N5/1（灰）	良好 25%	
SB40-02	SB40 カマド	第 96 図	PL.47	R0451	土師器 甕	[14.9]	-	(9.3)	2.5YR4/8（赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 45%	
SB41-01	SB41 床	第 99 図	-	R0405	灰釉陶器 碗	[13.9]	6.0	3.6	2.5Y7/1（灰白） 2.5Y7/3（浅黄）	良好 40%	
SB41-02	SB41	第 99 図	-	R0404	灰釉陶器 碗	[15.0]	-	(3.4)	7.5YR6/1（褐灰） 7.5YR5/1（褐灰）	良好 20%	
SB41-03	SB41	第 99 図	-	R0408	灰釉陶器 碗	-	[6.7]	(3.0)	2.5Y7/1（灰白） 2.5Y7/1（灰白）	良好 20%	
SB41-04	SB41	第 99 図	-	R0404	土師器 坏	[13.3]	[6.0]	4.3	7.5YR7/4（にぶい橙） 7.5YR7/6（橙）	良好 30%	
SB41-05	SB41	第 99 図	-	R0404	土師器 坏	-	[6.0]	(1.7)	7.5YR7/4（にぶい橙） 7.5YR7/4（にぶい橙）	良好 30%	
SB41-06	SB41	第 99 図	-	R0404	土師器 坏	-	5.0	(3.2)	7.5YR7/6（橙） 10YR8/3（浅黄橙）	良好 70%	
SB41-07	SB41	第 99 図	-	R0404	土師器 坏	-	[6.7]	(2.0)	7.5YR7/3（にぶい橙） 7.5YR7/4（にぶい橙）	良好 20%	
SB41-08	SB41 カマド	第 99 図	-	R0410	土師器 坏	[13.3]	-	(4.2)	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 20%	
SB41-09	SB41 カマド	第 99 図	-	R0418 R0424 R0425 R0427	土師器 坏	[12.5]	[4.2]	4.6	7.5YR7/6（橙） 10YR7/4（にぶい黄橙）	軟質 25%	
SB41-10	SB41 カマド	第 99 図	-	R0414 R0430 R0432	土師器 坏	[11.3]	[4.4]	4.8	5YR7/6（橙） 7.5YR7/6（橙）	良好 45%	
SB41-11	SB41 カマド	第 99 図	-	R0423	土師器 坏	-	[6.0]	(4.4)	7.5YR7/6（橙） 7.5YR7/6（橙）	良好 30%	
SB41-12	SB41 カマド	第 99 図	PL.46	R0419	土師器 壺	[14.3]	-	(8.0)	5YR6/6（橙） 7.5YR7/4（にぶい橙）	良好 20%	
SB41-13	SB41 床	第 99 図	-	R0404 R0405	土師器 甕	[16.0]	-	(5.2)	7.5YR6/4（にぶい橙） 5YR6/6（橙）	良好 20%	
SB41-14	SB41 床	第 99 図	PL.46	R0405	土師器 甕	-	8.2	(23.1)	10YR7/2（にぶい黄橙） 7.5YR6/3（にぶい褐）	軟質 25%	
SB44-01	SB44 カマド	第 104 図	PL.46	R0473	土師器 甕	(20.5)	-	(24.4)	7.5YR5/4（にぶい褐） 5YR6/6（橙）	軟質 30%	
SB44-02	SB44 カマド	第 104 図	PL.46	R0469	土師器 甕	-	8.5	(25.6)	5YR4/8（赤褐） 5YR5/6（明赤褐）	良好 70%	
SB45-01	SB45	第 107 図	-	R0509	須恵器 坏蓋	[9.8]	[3.8]	3.3	10YR6/1（褐灰） 10YR5/1（褐灰）	良好 25%	
SB45-02	SB45	第 107 図	PL.47	R0474 R0480	土師器 坏	12.4	5.5	3.5	10YR7/4（にぶい黄橙） 7.5YR7/4（にぶい橙）	軟質 50%	
SB45-03	SB45	第 107 図	-	R0480	土師器 坏	[13.0]	-	3.6	7.5YR4/2（灰褐） 7.5YR5/3（にぶい褐）	良好 20%	
SB45-04	SB45	第 107 図	-	R0474	土師器 坏	[12.0]	-	(4.6)	7.5YR5/3（にぶい褐） 10YR5/3（にぶい黄褐）	良好 20%	
SB45-05	SB45	第 107 図	-	R0508	土師器 坏	[12.5]	-	(3.6)	5YR5/4（にぶい赤褐） 5YR5/4（にぶい赤褐）	良好 20%	
SB45-06	SB45	第 107 図	-	R0479	土師器 坏？	[17.0]	-	(4.9)	2.5YR6/8（橙） 5YR6/6（橙）	良好 20%	
SB45-07	SB45 床	第 107 図	PL.47	R0484	土師器 甕	[24.0]	-	(16.2)	5YR6/8（橙） 5YR6/8（橙）	良好 80%	
SB45-08	SB45 カマド	第 107 図	PL.47	R0438 R0486 R0479	土師器 甕	[21.4]	-	(18.3)	5YR5/8（明赤褐） 5YR6/8（橙）	良好 30%	
SB45-09	SB45	第 107 図	-	R0475	土師器 小型甕	[17.1]	-	(5.3)	2.5YR5/8（明赤褐） 10R4/8（赤）	良好 25%	
SB45-10	SB45	第 107 図	-	R0475	土師器 甕	-	6.2	(4.3)	2.5Y6/8（橙） 2.5Y6/8（橙）	良好 50%	
SB45-11	SB45 床	第 107 図	PL.47	R0474 R0475 R0484 R0747	土師器 甕	-	6.7	(8.9)	7.5YR6/6（橙） 5YR6/6（橙）	良好 50%	

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別分類	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
SB46-01	SB46	第 111 図	-	R0502	土師器 高坏	-	-	(1.6)	5YR6/6（橙） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 -	
SB46-02	SB46 カマド	第 111 図	-	R0498	土師器 小型甕	[12.0]	-	(3.2)	5YR6/4（にぶい橙） 5YR6/4（にぶい橙）	良好 25%	
SB46-03	SB46 カマド	第 111 図	-	R0498 R0502	土師器 甕	-	[6.8]	(5.9)	5YR6/8（橙） 5YR5/8（明赤褐）	良好 20%	
SB47-01	SB47	第 108 図	-	R0684	土師器 甕	-	-	(3.6)	5YR6/6（橙） 5YR6/6（橙）	良好 -	
SB48-01	SB48	第 114 図	-	R0776	須恵器 長頸壺	-	-	(2.15)	5Y5/1（灰） 5Y3/1（オリーブ黒）	良好 -	
SB48-02	SB48 カマド	第 114 図	-	R0525	土師器 甕	[23.25]	-	(4.5)	5YR7/8（橙） 5YR6/6（橙）	良好 10%	
SB49-01	SB49	第 116 図	-	R0685	須恵器 坏蓋	[14.2]	-	(2.9)	10Y6/1（灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 25%	
SB49-02	SB49	第 116 図	-	R0677	土師器 高坏	-	-	(4.3)	5YR5/8（明赤褐） 5YR6/6（橙）	良好 20%	
SB50-01	SB50 床	第 120 図	PL.47	R0882	土師器 坏	[11.3]	6.8	(4.1)	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR6/8（橙）	良好 80%	格子状 ヘラ描き
SB50-02	SB50 カマド	第 120 図	-	R0829 R0888	土師器 甕	[23.5]	-	(7.85)	5YR6/8（橙） 5YR6/8（橙）	良好 20%	
SB50-03	SB50	第 120 図	-	R0918 R0737	土師器 甕	-	6.5	(2.3)	5YR6/6（褐） 7.5YR4/3（褐）	良好 75%	
SB51-01	SB51	第 122 図	-	R1247	須恵器 坏蓋	つまみ 径 3.05	つまみ 高 1.15	(2.2)	2.5Y8/1（灰白） 10YR6/2（灰黄褐）	良好 20%	
SB51-02	SB51 床	第 122 図	PL.47	R1151 R1263	須恵器 坏蓋	[14.75]	-	(3.2)	2.5Y7/2（灰黄） 2.5Y7/1（灰白）	良好 50%	
SB51-03	SB51	第 122 図	-	R1151	須恵器 甕	-	-	(9.3)	2.5Y5/1（黄灰） 10YR5/1（褐灰）	良好 -	
SB51-04	SB51	第 122 図	PL.48	R0654	土師器 坏	[11.3]	-	3.8	10YR7/6（明黄褐） 5YR6/3（橙）	良好 35%	墨書
SB51-05	SB51	第 122 図	-	R0653	土師器 坏	[11.4]	-	(3.3)	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 20%	
SB51-06	SB51	第 122 図	-	R1151	土師器 甕	-	-	(5.2)	7.5YR7/4（にぶい橙） 10YR6/2（灰黄褐）	良好 -	
SB52-01	SB52	第 127 図	-	R0688	須恵器 坏蓋	[13.9]	-	(3.0)	2.5Y6/1（黄灰） 10YR5/1（褐灰）	良好 25%	
SB52-02	SB52	第 127 図	PL.48	R0688 R0727 R0728	土師器 坏	[13.2]	[4.6]	[4.7]	2.5YR5/6（明赤褐） 5YR6/6（橙）	良好 -	墨書
SB52-03	SB52	第 127 図	-	R0727	土師器 高台	-	7.0	(1.8)	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 50%	
SB52-04	SB52	第 127 図	-	R0985	土師器 坏	[12.4]	-	(2.9)	2.5YR4/6（赤褐） 5YR3/4（暗赤褐）	良好 25%	
SB52-05	SB52	第 127 図	PL.48	R0872	土師器 坏	[11.9]	6.0	4.2	2.5YR4/4（にぶい赤褐） 2.5YR4/3（にぶい赤褐）	良好 45%	
SB52-06	SB52	第 127 図	-	R0827	土師器 甕	-	-	(7.0)	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR5/4（にぶい赤褐）	良好 -	
SB52-07	SB52	第 127 図	-	R0726	土師器 甕	-	[7.2]	(5.1)	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 20%	
SB52-08	SB52	第 127 図	-	R0856	土師器 甕	-	[7.0]	(9.4)	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR4/3（にぶい赤褐）	良好 20%	
SB53-01	SB53 カマド	第 130 図	-	R1122	須恵器 坏蓋	-	-	(1.3)	10YR7/1（灰白） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 20%	
SB53-02	SB53	第 130 図	-	R1157	須恵器 坏蓋	[10.0]	-	(2.2)	5Y6/1（灰） 7.5Y5/1（灰）	良好 20%	
SB53-03	SB53 床	第 130 図	-	R1125	須恵器 坏身	[14.0]	[9.7]	3.6	7.5YR7/1（明褐灰） 7.5YR6/1（褐灰）	良好 65%	
SB53-04	SB53	第 130 図	PL.48	R1133	土師器 坏	-	[6.9]	3.0	2.5YR5/4（にぶい赤褐 ） 5YR4/3（にぶい赤褐）	良好 20%	墨書土器
SB53-05	SB53	第 130 図	-	R0997	土師器 坏	[12.6]	[7.9]	3.5	2.5YR4/8（赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 20%	
SB53-06	SB53	第 130 図	-	R0997	土師器 坏	[12.7]	[7.8]	4.25	2.5YR5/4（にぶい赤褐） 2.5YR4/4（にぶい赤褐）	良好 20%	
SB53-07	SB53	第 130 図	-	R1075	土師器 坏	[10.0]	[6.6]	3.6	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR4/5（にぶい赤褐）	良好 20%	
SB53-08	SB53 床	第 130 図	-	R1110	土師器 甕	[20.3]	-	(3.8)	7.5YR7/3（にぶい橙） 7.5YR7/2（明褐灰）	軟質 25%	
SB53-09	SB53	第 130 図	-	R0657	土師器 甕	-	-	(13.6)	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 -	
SB54-01	SB54 床	第 133 図	PL.48	R1085	土師器 坏	11.0	5.5	4.2	2.5YR4/6（赤褐） 10R4/6（赤）	良好 80%	
SB54-02	SB54	第 133 図	-	R0992	土師器 坏	-	[6.5]	(2.2)	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 30%	
SB54-03	SB54	第 133 図	-	R1023	土師器 甕	-	6.9	(2.2)	10R4/6（赤） 10R4/6（赤）	良好 50%	
SB54-04	SB54 カマド	第 133 図	-	R1027	土師器 甕	[23.1]	-	(4.2)	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 20%	
SB54-05	SB54	第 133 図	-	R0945	土師器 甕	-	[7.4]	(7.3)	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 20%	
SB54-06	SB54	第 133 図	-	R0986	土師器 小型甕	-	7.1	(5.8)	5YR5/4（にぶい赤褐） 5YR5/3（にぶい赤褐）	良好 50%	
SB55-01	SB55 カマド	第 136 図	PL.48	R1156 R1144	須恵器 皿	[16.2]	12.4	3.0	5Y7/1（灰白） 2.5Y7/1（灰白）	良好 80%	

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別 分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
SB55-02	SB55	第 136 図	-	R0943	土師器 坏	[11.7]	-	(3.6)	2.5YR6/2（灰赤） 2.5YR4/2（灰赤）	良好 20%	
SB55-03	SB55 カマド	第 136 図	-	R1153	土師器 甕	-	-	(16.4)	2.5YR6/6（橙） 2.5YR5/4（にぶい赤褐）	良好 -	
SB56・SB57-01	SB56・ SB57	第 139 図	-	R1158	土師器 坏	[11.8]	[6.8]	3.8	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR3/4（暗赤褐）	良好 40%	
SB56・SB57-02	SB56・ SB57	第 139 図	-	R1158	土師器 坏	-	[6.8]	(1.5)	2.5YR4/4（にぶい赤褐） 2.5YR4/4（にぶい赤褐）	良好 40%	
SB57-01	SB57 カマド	第 142 図	PL.48	R1165	土師器 坏	[11.3]	[7.3]	3.7	10R4/4（赤褐） 10R3/4（暗褐）	良好 30%	「己」刻書
SB57-02	SB57 カマド	第 142 図	PL.48	R1161	土師器 坏	10.8	6.0	3.5	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR4/4（にぶい赤褐）	良好 99%	
SB57-03	SB57 カマド	第 142 図	PL.48	R1162	土師器 坏	11.6	6.0	4.2	2.5YR3/2（暗赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 95%	
SB57-04	SB57 カマド	第 142 図	-	R1163	土師器 甕	[24.3]	-	(6.8)	10R5/6（赤） 25YR5/6（明赤褐）	良好 20%	
SB58-01	SB58 床	第 143 図	-	R0887 R0889	土師器 甕	[23.1]	-	(7.0)	5YR7/6（橙） 2.5YR6/6（橙）	良好 20%	
SB58-02	SB58 カマド	第 143 図	-	R0887 R0886 R0919	土師器 甕	-	6.0	(4.1)	5YR4/3（にぶい赤褐） 5YR5/4（にぶい赤褐）	良好 70%	
SB59-01	SB59 カマド	第 146 図	-	R0998	須恵器 長頸壺	-	-	(3.2)	10YR5/1（褐灰） 2.5YR3/1（暗赤灰）	良好 -	
SB59-02	SB59 カマド	第 146 図	-	R0998	土師器 坏	-	[6.5]	(1.0)	2.5YR5/6（暗赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 80%	
SB59-03	SB59 カマド	第 146 図	-	R1167	土師器 甕	-	-	(13.4)	2.5YR5/6（暗赤褐） 2.5YR5/6（暗赤褐）	良好 -	
SB60-01	SB60	第 150 図	-	R1267	灰釉陶器 碗	[18.5]	-	(3.1)	5Y7/2（灰白） 10YR7/1（灰白）	良好 20%	
SB60-02	SB60	第 150 図	PL.49	R0665 R0727	灰釉陶器 瓶類	-	[6.2]	(3.4)	10YR8/1（白灰） 5Y5/2（灰オリーブ）	良好 65%	
SB60-03	SB60	第 150 図	PL.49	R1005	須恵器 甕	[13.5]	-	(6.6)	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 20%	
SB60-04	SB60	第 150 図	PL.49	R1267	須恵器 転用硯（甕）	長径 13.0	短径 8.1	厚 7.0	2.5YR2/1（赤褐） 5YR2/1（黒褐）	良好 -	
SB60-05	SB60	第 150 図	PL.49	R1006	須恵器 坏身	[8.0]	3.2	3.0	N5/（灰） N4/（灰）	良好 75%	
SB60-06	SB60	第 150 図	-	R1168	須恵器 転用硯（坏蓋）	[15.4]	-	(3.0)	7.5Y6/（灰） 7.5Y6/2（灰オリーブ）	良好 30%	
SB60-07	SB60	第 150 図	PL.49	R1178	土師器 坏	-	-	(1.8)	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 -	墨書
SB60-08	SB60	第 150 図	-	R0665 R0727	土師器 坏	[13.0]	[7.2]	3.3	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 20%	
SB60-09	SB60 カマド	第 150 図	PL.49	R1008 R1196	土師器 坏	11.5	5.9	4.3	5YR4/6（赤褐） 2.5YR4/4（にぶい赤褐）	良好 80%	
SB60-10	SB60	第 150 図	-	R1267	土師器 坏	[11.9]	[7.3]	3.8	5YR5/3（にぶい赤褐） 10R5/8（赤）	良好 35%	
SB60-11	SB60	第 150 図	-	R1267	土師器 坏	[10.7]	[6.2]	3.5	2.5YR5/4（にぶい赤褐） 5YR4/6（赤褐）	良好 25%	
SB60-12	SB60	第 150 図	PL.49	R1007 R1168 R1088	土師器 坏	11.0	5.5	4.1	10R3/4（赤褐） 10R3/2（暗赤褐）	良好 85%	
SB60-13	SB60 カマド	第 150 図	PL.49	R1200	土師器 坏	11.0	5.0	4.2	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 80%	刻書「奉」
SB60-14	SB60	第 150 図	PL.49	R1005	土師器 坏	11.6	5.5	4.3	5YR6/6（橙） 5YR5/6（明赤褐）	良好 45%	
SB60-15	SB60 カマド	第 150 図	PL.49	R0943 R1197	土師器 坏	12.0	6.3	5.6	10R5/6（赤） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 55%	
SB60-16	SB60	第 150 図	PL.50	R1168	土師器 小型甕	-	8.5	(9.9)	2.5YR3/4（暗赤褐） 2.5YR4/3（にぶい赤褐）	良好 75%	
SB60-17	SB60	第 150 図	-	R1168	土師器 小型甕	-	-	(5.2)	5YR5/4（にぶい赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 -	
SB60-18	SB60	第 150 図	-	R1168	土師器 甕	-	-	(3.0)	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 -	
SB60-19	SB60	第 150 図	-	R1007	土師器 甕	-	5.3	(2.9)	2.5YR5/6（明赤褐） 5YR4/6（赤褐）	良好 70%	
SB60-20	SB60	第 150 図	PL.50	R1168	土師器 甕	[26.4]	-	(17.5)	2.5YR6/8（橙） 5YR6/8（橙）	良好 25%	
SB60-21	SB60 カマド	第 150 図	-	R1198	土師器 甕	-	-	(18.5)	7.5YR7/6（橙） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 20%	
SB61-01	SB61 床	第 153 図	-	R1187	土師器 坏	[11.9]	-	3.1	2.5YR6/4（にぶい橙） 2.5YR6/4（にぶい橙）	良好 20%	
SB61-02	SB61 床	第 153 図	-	R1188	土師器 坏	[10.7]	-	4.7	2.5YR5/8（明赤褐） 10R5/8（赤）	良好 45%	
SB61-03	SB61 床	第 153 図	-	R1186	土師器 坏	[11.3]	-	4.2	2.5YR7/4（淡赤橙） 2.5YR6/6（橙）	良好 30%	
SB61-04	SB61 焼土	第 153 図	-	R1180	土師器 坏	10.8	-	4.9	5YR7/8（橙） 5YR6/8（橙）	軟質 50%	
SB61-05	SB61 床	第 153 図	-	R1187	土師器 高坏	-	-	(3.0)	2.5YR5/4（にぶい赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 20%	
SB61-06	SB61 床	第 153 図	PL.50	R1187	土師器 甕	19.0	9.0	30.3	5YR4/8（赤褐） 5YR6/8（橙）	良好 65%	
SB61-07	SB61 床	第 153 図	PL.50	R1186 R1185	土師器 甕	[17.6]	[8.2]	[30.0]	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 40%	

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別 分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
SB62-01	SB62	第 154 図	-	R1169	須恵器 坏身	-	3.0	(1.6)	5Y6/1 (灰) 5Y6/2 (オリーブ灰)	良好 20%	窯記号「-」
SB62-02	SB62 床	第 154 図	PL.50	R1189 R1188	土師器 埦？	-	-	(6.8)	7.5YR5/4 (にぶい赤褐) 7.5YR5/4 (にぶい赤褐)	良好 70%	
SB62-03	SB62 床	第 154 図	PL.50	R1188	土師器 甑	-	8.5	(24.0)	2.5YR6/8 (橙) 10R5/8 (赤)	軟質 70%	
SB63-01	SB63 床	第 157 図	PL.51	R1044 R1053	灰釉陶器 碗	15.5	7.0	4.65	10YR6/2 (灰黄褐) 2.5Y6/2 (灰黄)	良好 80%	SB63-02 と同一個体の可能性
SB63-02	SB63	第 157 図	-	R1102	灰釉陶器 碗	[15.0]	ー	(3.65)	10YR7/1 (灰白) 10YR6/1 (褐灰)	良好 20%	SB63-01 と同一個体の可能性
SB63-03	SB63	第 157 図	-	R1091	灰釉陶器 碗	[13.0]	-	(4.25)	2.5Y7/1 (灰白) 2.5Y8/1 (灰白)	良好 20%	
SB63-04	SB63 カマド	第 157 図	-	R1129	灰釉陶器 碗	-	6.0	(2.55)	10YR7/1 (灰白) 10YR7/1 (灰白)	良好 85%	
SB63-05	SB63 床	第 157 図	-	R1043	灰釉陶器 碗	-	6.3	(2.3)	10YR7/1 (灰白) 10YR7/1 (灰白)	良好 45%	
SB63-06	SB63 床	第 157 図	-	R1043	灰釉陶器 皿	[14.75]	[6.95]	2.45	5Y8/1 (灰白) 2.5Y6/2 (灰黄)	良好 40%	
SB63-07	SB63 カマド	第 157 図	PL.51	R1088 R1089	灰釉陶器 段皿	14.9	6.5	2.85	5Y7/2 (灰白) 5Y6/2 (灰オリーブ)	良好 80%	
SB63-08	SB63 カマド	第 157 図	PL.51	R1092 R1094	灰釉陶器 壺	[10.4]	-	(16.6)	2.5Y5/3 (黄褐) 2.5Y7/2 (灰黄)	良好 60%	
SB63-09	SB63	第 157 図	PL.51	R0935 R1000 R1047	土師器 蓋	13.7	[5.1]	2.95	2.5YR4/8 (赤褐) 2.5YR4/8 (赤褐)	良好 75%	
SB63-10	SB63 カマド	第 157 図	-	R1096	土師器 坏	[12.0]	-	(3.75)	2.5YR4/6 (赤褐) 2.5YR4/8 (赤褐)	良好 20%	
SB63-11	SB63	第 157 図	-	R1090	土師器 大型坏 or 鉢	[19.9]	-	(5.75)	2.5YR5/8 (明赤褐) 5YR4/6 (赤褐)	良好 25%	
SB63-12	SB63	第 157 図	-	R1102	土師器 坩	-	-	(2.2)	2.5YR4/8 (赤褐) 2.5YR4/8 (赤褐)	軟質 -	
SB63-13	SB63	第 157 図	-	R1090	土師器 甕	-	-	(8.6)	10R4/4 (赤褐) 10R4/6 (赤)	良好 -	
SB63-14	SB63 カマド	第 157 図	-	R1070	土師器 甕	-	-	(5.9)	2.5YR5/8 (明赤褐) 2.5YR4/8 (赤褐)	良好 -	
SB63-15	SB63 床	第 157 図	-	R0935 R1061	土師器 甕	-	-	(9.95)	5YR4/8 (赤褐) 5YR4/6 (赤褐)	良好 -	
SB63-16	SB63 カマド	第 157 図	-	R1063	土師器 甕	-	-	(10.4)	2.5YR4/6 (赤褐) 2.5YR4/6 (赤褐)	良好 -	
SB63-17	SB63 カマド	第 157 図	PL.51	R1116	土師器 小型甕	[16.3]	-	(10.85)	5YR5/4 (にぶい赤褐) 2.5YR5/6 (明赤褐)	良好 20%	
SB64-01	SB64	第 161 図	-	R0829	須恵器 坏蓋	-	-	(4.4)	2.5Y5/1 (黄灰) 2.5Y5/2 (暗灰黄)	良好 -	
SB64-02	SB64	第 161 図	-	R0714	須恵器 坏蓋	-	-	(3.0)	5Y4/1 (灰) 5Y4/1 (灰)	良好 -	
SB64-03	SB64 床	第 161 図	PL.51	R0822 R0826	須恵器 坏身	10.75	-	4.05	10YR7/2 (にぶい黄橙) 2.5Y7/1 (灰白)	良好 80%	
SB64-04	SB64	第 161 図	-	R0732	土師器 坏	-	-	(3.3)	5YR4/3 (にぶい赤褐) 7.5YR4/2 (灰褐)	良好 -	
SB64-05	SB64 壁溝	第 161 図	PL.51	R0824	土師器 甕	[17.9]	-	(5.8)	10YR5/3 (にぶい黄橙) 5YR6/8 (橙)	良好 40%	
SB64-06	SB64Pit04	第 161 図	-	R0745	土師器 甕	-	-	(10.8)	2.5YR5/6 (明赤褐) 5YR5/6 (明赤褐)	良好 -	
SB64-07	SB64	第 161 図	-	R0714 R0747 R0700	土師器 甕	-	9.0	(4.5)	5YR4/6 (赤褐) 10YR3/2 (黒褐)	良好 55%	
SB64-08	SB64 床	第 161 図	-	R0745 R0746	土師器 甕	[24.5]	-	(4.3)	2.5YR5/8 (明赤褐) 2.5YR5/8 (明赤褐)	良好 20%	
SB64-09	SB64 カマド	第 161 図	PL.52	R0742	土師器 甕	-	[8.2]	(19.8)	5YR6/6 (橙) 5YR6/6 (橙)	良好 25%	
SB64-10	SB64 壁溝	第 161 図	PL.52	R0825 R0714 R0698	土師器 壺？	-	8.0	(16.3)	10R4/6 (赤) 10R3/6 (暗赤)	良好 65%	
SB65-01	SB65	第 164 図	-	R0670	須恵器 坏身	-	-	(2.65)	2.5Y5/1 (黄灰) 2.5Y5/1 (黄灰)	良好 -	
SB65-02	SB65	第 164 図	-	R0690 R0704	須恵器 短頸壺	[19.2]	-	(5.0)	5Y3/1 (オリーブ黒) 7.5Y3/1 (オリーブ黒)	良好 20%	
SB65-03	SB65 床	第 164 図	PL.52	R0852	土師器 坏	12.0	-	4.3	2.5YR5/8 (明赤褐) 2.5YR6/8 (橙)	良好 80%	
SB65-04	SB65	第 164 図	-	R0671	土師器 坏	[12.2]	-	3.65	5YR7/6 (橙) 7.5YR7/4 (にぶい橙)	良好 45%	
SB65-05	SB65 カマド	第 164 図	PL.52	R0846	土師器 坏	13.1	-	4.1	10R5/8 (赤) 5YR7/8 (橙)	良好 85%	
SB65-06	SB65	第 164 図	-	R0670	土師器 坏	[12.4]	-	(3.5)	10R4/8 (赤) 10R5/8 (赤)	良好 25%	
SB65-07	SB65 カマド	第 164 図	-	R0850	土師器 坏	-	-	(3.3)	5YR6/6 (橙) 7.5YR7/6 (橙)	良好 -	
SB65-08	SB65	第 164 図	-	R0715	土師器 坏	-	-	(3.15)	5YR2/1 (黒褐) 5YR5/4 (にぶい赤褐)	良好 -	
SB65-09	SB65	第 164 図	-	R0715	土師器 坏	-	-	(2.05)	5YR6/6 (橙) 5YR6/6 (橙)	良好 -	
SB65-10	SB65	第 164 図	-	R1212	土師器 坏	[11.4]	-	(2.6)	7.5YR7/4 (にぶい橙) 7.5YR7/6 (橙)	良好 25%	

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別 分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
SB65-11	SB65	第 164 図	-	R0671	土師器 坏	[13.0]	[8.9]	3.7	2.5YR4/8（赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 20%	
SB65-12	SB65	第 164 図	-	R0843	土師器 高坏	-	[9.2]	(2.35)	10YR4/2（灰黄褐） 5YR5/4（にぶい赤褐）	良好 20%	
SB65-13	SB65 床	第 164 図	PL.52	R0847	土師器 鉢	18.5	6.8	13.6	10R5/6（赤） 2.5YR6/8（橙）	良好 70%	
SB65-14	SB65 カマド	第 164 図	PL.52	R0843 R0844 R0841	土師器 甑	19.5	8.2	[30.2]	5YR6/8（橙） 5YR7/6（橙）	良好 60%	
SB66-01	SB66	第 167 図	PL.53	R0673	須恵器 甕	-	-	(9.3)	2.5Y4/1（黄灰） 2.5Y3/1（黒褐）	良好 -	
SB66-02	SB66	第 167 図	PL.53	R0683	須恵器 甕	-	-	(12.45)	7.5Y4/1（灰） 7.5Y5/1（灰）	良好 -	
SB66-03	SB66 カマド	第 167 図	-	R0710 R0687 R0713	土師器 小型壺	[12.6]	-	(7.05)	5YR6/8（橙） 5YR6/6（橙）	良好 45%	
SB66-04	SB66	第 167 図	-	R0701	土師器 高坏 or 壺	-	-	(2.8)	7.5YR4/2（灰褐） 7.5YR4/2（灰褐）	良好 -	
SB66-05	SB66 カマド	第 167 図	-	R0692	土師器 小型壺	-	-	(3.85)	7.5YR6/4（にぶい橙） 10R5/6（赤）	良好 25%	
SB66-06	SB66 カマド	第 167 図	-	R0687 R0701 R0681 R0693 R0691 R0712 R0709 R0690	土師器 甕 or 壺	-	6.0	(7.05)	5YR7/6（橙） 10YR5/2（灰黄褐）	良好 55%	
SB66-07	SB66	第 167 図	-	R0683 R0673	土師器 高坏	-	-	(4.75)	5YR5/4（にぶい赤褐） 2.5YR6/8（橙）	良好 -	
SB66-08	SB66	第 167 図	-	R0687	土師器 高坏	-	-	[5.95]	7.5YR6/6（橙） 7.5YR6/4（にぶい橙）	良好 50%	
SB66-09	SB66 床	第 167 図	-	R0693	土師器 壺	-	7.4	9.6	5YR5/6（明赤褐） 5YR6/8（橙）	良好 60%	
SB66-10	SB66	第 167 図	-	R0692	土師器 甕	-	6.6	(3.6)	5YR6/8（橙） 7.5YR7/4（にぶい橙）	良好 70%	
SB66-11	SB66	第 167 図	-	R0859	土師器 甕	-	[7.55]	(2.05)	7.5YR6/7（橙） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 85%	
SB67-01	SB67	第 170 図	-	R0704	土師器 坏	-	[8.4]	(2.3)	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 40%	
SB67-02	SB67 カマド	第 170 図	-	R0722	土師器 甕	[15.0]	-	(5.0)	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 20%	
SB68-01	SB68	第 173 図	-	R1146?	土師器 坏	[12.5]	8.1	3.9	2.5YR5/4（にぶい赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 45%	
SB68-02	SB68 カマド	第 173 図	-	R1136	土師器 甕	[19.0]	-	(7.2)	5YR5/4（にぶい赤褐） 2.5YR4/3（にぶい赤褐）	良好 20%	
SB69-01	SB69	第 175 図	-	R0675	須恵器 坏身	[10.1]	-	3.3	5Y7/1（灰白） 5Y7/1（灰白）	良好 30%	
SB69-02	SB69	第 175 図	-	R1183	須恵器 坏身	[15.05]	[8.0]	4.6	10YR7/1（灰白） 2.5Y7/2（灰黄）	良好 30%	
SB69-03	SB69	第 175 図	PL.53	R1183	土師器 坏	[11.3]	6.4	4.45	5YR6/6（橙） 5YR6/6（橙）	良好 60%	
SB69-04	SB69	第 175 図	-	R1182	土師器 坏	-	-	(3.2)	5YR7/6（橙） 2.5YR6/8（橙）	軟質 -	
SB70-01	SB70	第 177 図	PL.53	R0730	土師器 坏	11.2	6.5	3.9	2.5YR4/8（赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 60%	墨書「万」
SB71-01	SB71	第 178 図	PL.53	R0720	土師器 坏	-	[5.85]	(0.85)	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 50%	刻書「人」？
SB71-02	SB71	第 178 図	-	R0720	土師器 甕	-	-	(4.25)	2.5YR5/6（明赤褐） 5YR4/6（赤褐）	良好 -	
SB71-03	SB71 カマド	第 178 図	-	R0718	土師器 甕	-	-	(8.4)	5YR6/8（橙） 5YR6/6（橙）	良好 -	
SB72-01	SB72 カマド	第 181 図	-	R0871	須恵器 坏身	[12.5]	-	(2.4)	2.5Y4/1（黄灰） 2.5Y4/1（黄灰）	良好 20%	
SB72-02	SB72	第 181 図	PL.54	R0854	土師器 蓋	[12.8]	-	(1.6)	2.5YR3/3（暗赤褐） 2.5YR2/1（赤黒）	良好 20%	
SB72-03	SB72 カマド	第 181 図	-	R0861	土師器 小型甕	[13.5]	-	(8.1)	2.5YR4/4（にぶい赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 25%	
SB72-04	SB72 カマド	第 181 図	-	R0863	土師器 甕	-	-	(3.6)	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 -	
SB72-05	SB72 床	第 181 図	-	R1244	土師器 甕	-	-	(6.2)	2.5YR4/4（にぶい赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 -	
SB72-06	SB72	第 181 図	-	R0855	土師器 甕	-	7.7	(5.1)	2.5YR4/8（赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 30%	
SB73-01	SB73	第 183 図	-	R0987	須恵器 坏蓋	[11.0]	-	(3.0)	N5/（灰） N5/（灰）	良好 20%	
SB73-02	SB73 床	第 183 図	PL.54	R0921	土師器 坏	12.0	4.5	5.6	5YR6/8（橙） 5YR6/8（橙）	良好 75%	
SB73-03	SB73 床	第 183 図	PL.54	R0929	土師器 坏	[11.4]	-	4.5	5YR6/8（橙） 5YR6/6（橙）	良好 60%	
SB73-04	SB73 焼土	第 183 図	PL.54	R0925	土師器 坏	12.5	[5.4]	5.7	5YR6/8（橙） 5YR6/6（橙）	良好 90%	
SB73-05	SB73 床	第 183 図	-	R0924	土師器 高坏	-	-	(8.4)	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 85%	
SB73-06	SB73 床	第 183 図	-	R0926	土師器 甕	-	-	(5.2)	5YR4/2（灰褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 -	
SB73-07	SB73 床	第 183 図	-	R0923	土師器 甕	-	[11.0]	(3.8)	7.5YR7/6（橙） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 45%	

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別 分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
SB73-08	SB73 床	第 183 図	-	R0927	土師器 甕	-	[9.7]	(7.9)	7.5YR6/4（にぶい橙） 7.5YR3/1（黒褐）	良好 25%	
SB74-01	SB74	第 185 図	-	R1172	灰釉陶器 碗	-	[7.0]	(2.1)	2.5Y7/2（灰黄） 2.5Y7/1（灰白）	良好 20%	
SB74-02	SB74	第 185 図	PL.54	R1240	灰釉陶器 碗	-	7.75	(3.9)	2.5Y7/1（灰白） 2.5Y7/1（灰白）	良好 55%	
SB74-03	SB74	第 185 図	-	R1172	須恵器 瓶類頸部	-	-	(4.6)	7.5Y6/1（灰） 2.5Y6/2（灰黄）	良好 25%	窯記号
SB74-04	SB74	第 185 図	PL.54	R0947 R0944	土師器 坏	[11.4]	[6.4]	4.0	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 30%	墨書「廿」
SB75-01	SB75 掘方	第 188 図	-	R0991 R0990	土師器 小型甕	[15.4]	-	(7.6)	7.5YR6/4（にぶい橙） 2.5YR5/4（にぶい赤褐）	良好 45%	
SB75-02	SB75 カマド	第 188 図	-	R0989	土師器 甕	[22.5]	-	(8.5)	2.5YR6/8（橙） 2.5YR6/8（橙）	良好 25%	
SB76-01	SB76 カマド	第 191 図	PL.54	R1001 R1002	土師器 坏	10.6	-	4.1	5YR6/6（橙） 5YR6/8（橙）	良好 70%	
SB76-02	SB76 カマド 掘方	第 191 図	PL.54	R1001 R1002	土師器 坏	[9.85]	[5.0]	3.35	7.5YR7/4（にぶい橙） 10YR7/4（にぶい黄橙）	良好 45%	
SB76-03	SB76 柱穴	第 191 図	-	R1269	須恵器 甕	-	-	(3.7)	10Y4/1（灰） 7.5Y3/1（オリーブ黒）	良好 -	
SB76-04	SB76 床	第 191 図	PL.54	R1191 R1192	土師器 甕	[21.0]	-	(7.2)	5YR5/4（にぶい赤褐） 5YR4/8（赤褐）	良好 40%	
SB76-05	SB76 床	第 191 図	-	R1227	土師器 甕	[21.7]	-	(5.9)	2.5YR4/8（赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 20%	
SB76-06	SB76 床	第 191 図	-	R1190	土師器 甕	[20.0]	-	(22.2)	2.5YR4/4（にぶい赤褐） 5YR3/4（暗赤褐）	良好 60%	
SB76-07	SB76 カマド	第 191 図	PL.55	R1232 R1190	土師器 甕	22.8	-	(15.6)	5YR4/3（にぶい赤褐） 10R4/6（赤）	良好 60%	
SB76-08	SB76 カマド	第 191 図	-	R1190	土師器 甕	-	8.4	(9.3)	5YR5/4（にぶい赤褐） 2.5YR3/3（暗赤褐）	良好 55%	
SB77-01	SB77	第 194 図	PL.55	R1255	須恵器 有台皿 or 大型坏身	-	[15.1]	(1.5)	2.5Y5/2（暗黄灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 55%	
SB77-02	SB77	第 194 図	-	R1255	土師器 坏	-	[5.4]	(3.6)	2.5YR4/8（赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 25%	
SB77-03	SB77	第 194 図	-	R1255	土師器 甕	-	-	(5.1)	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR4/4（にぶい赤褐）	良好 -	
SB78-01	SB78 床	第 196 図	PL.55	R1012	須恵器 坏蓋	9.8	-	4.1	2.5Y5/1（黄灰） 5Y5/1（灰）	良好 97%	窯記号「-」
SB78-02	SB78	第 196 図	-	R1090	須恵器 坏身	[8.0]	-	3.1	10YR6/2（灰黄褐） 10YR5/1（褐灰）	良好 25%	
SB78-03	SB78 床	第 196 図	-	R1013	須恵器 坏身	[8.3]	-	3.2	2.5Y4/1（黄灰） 5Y5/1（灰）	良好 45%	
SB78-04	SB78	第 196 図	-	R1090	土師器 小型壺？	-	-	(3.55)	2.5YR2/1（赤黒） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 -	
SB78-05	SB78 床	第 196 図	-	R1018 R1090	土師器 甕	-	8.25	(5.0)	5YR5/6（明赤褐） 2.5Y5/8（明赤褐）	良好 70%	
SB78-06	SB78	第 196 図	-	R1090	土師器 甑？	-	-	(5.25)	2.5YR4/8（赤褐） 5YR5/6（明赤褐）	良好 -	
SB80-01	SB80	第 198 図	-	R1004 R1098	灰釉陶器 碗	[15.0]	[7.4]	7.8	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 25%	
SB81-01	SB81 カマド	第 201 図	-	R1230	土師器 高坏	[11.0]	-	(3.2)	7.5YR4/2（灰褐） 7.5YR3/1（黒褐）	良好 20%	
SB82-01	SB82	第 202 図	-	R1275	須恵器 甕	-	-	(5.3)	2.5Y5/1（黄灰） 2.5Y4/1（黄灰）	良好 -	
SB82-02	SB82 カマド	第 202 図	-	R1275	土師器 甕	-	-	(5.0)	5YR5/8（明赤褐） 5YR4/8（赤褐）	良好 -	
SB82-03	SB82 カマド	第 202 図	-	R1275	土師器 甕	[20.0]	-	(10.2)	7.5YR4/3（褐） 7.5YR3/4（暗褐）	良好 25%	
SB83-01	SB83 床	第 204 図	-	R1235	須恵器 甕	-	-	(7.0)	2.5Y5/1（黄灰） 7.5Y3/1（オリーブ黒）	良好 -	
SB83-02	SB83	第 204 図	PL.55	R1233	土師器 坏	10.5	7.3	3.5	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 85%	刻書「＃」
SB83-03	SB83 床	第 204 図	-	R1238	土師器 甕	-	-	(8.3)	5YR5/6（明赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 -	
SB83-04	SB83 床	第 204 図	-	R1237	土師器 甕	-	-	(4.0)	5YR6/4（にぶい橙） 2.5YR6/6（橙）	良好 -	
SB83-05	SB83 床	第 204 図	-	R1238	土師器 甕	-	6.5	(3.8)	2.5YR5/8（明赤褐） 5YR5/8（明赤褐）	良好 80%	
SB83-06	SB83 床	第 204 図	-	R1238	土師器 甕	-	[8.2]	(11.2)	5YR6/6（橙） 5YR4/6（赤褐）	良好 20%	
SB83-07	SB83 床	第 204 図	PL.55	R1236 R1257 R1238 R1234	土師器 小型甕	14.5	7.5	11.0	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR6/8（橙）	良好 70%	
SB87-01	SB87 床	第 206 図	-	R0330	灰釉陶器 碗	[14.0]	[5.9]	(5.3)	7.5Y5/1（灰） 7.5Y4/1（灰）	良好 45%	
SB87-02	SB87 床	第 206 図	-	R0331 R0336	灰釉陶器 皿	-	[5.9]	(2.3)	5Y6/2（灰オリーブ） 10YR6/1（褐灰）	良好 30%	
SB87-03	SB87	第 206 図	PL55	R0315	須恵器 転用硯？（瓶類 or 壺）	-	8.9	(1.4)	7.5Y4/1（灰） 7.5Y4/1（灰）	良好 95%	
SB87-04	SB87	第 206 図	-	R0334	須恵器 甕	-	-	(8.7)	10R3/4（暗赤） 10R3/3（暗赤褐）	良好 -	
SB87-05	SB87	第 206 図	-	R0333	土師器 坏	[11.7]	-	(3.8)	7.5Y7/4（にぶい橙） 7.5Y7/4（にぶい橙）	良好 20%	

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別 分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
SB88-01	SB88 カマド	第 209 図	-	R1207	須恵器 坏蓋	-	-	(3.5)	2.5Y3/1（黒褐） 2.5Y5/1（黄灰）	良好 -	
SB88-02	SB88 カマド	第 209 図	-	R1207	土師器 坏	[12.6]	-	(3.5)	10YR7/4（にぶい黄橙） 10YR7/4（にぶい黄橙）	軟質 25%	
SB88-03	SB88	第 209 図	-	R1203	土師器 坏	-	-	(4.4)	7.5YR7/4（にぶい橙） 7.5YR7/6（橙）	良好 -	
SB88-04	SB88 カマド	第 209 図	-	R1207	土師器 甑	-	-	(6.1)	7.5YR6/4（にぶい橙） 7.5YR6/6（橙）	良好 -	
SB88-05	SB88	第 209 図	-	R1285	土師器 甕	[20.9]	-	(9.8)	5YR5/3（にぶい赤褐） 2.5YR4/3（にぶい赤褐）	良好 30%	
SB89-01	SB89 カマド	第 211 図	PL.56	R1209	土師器 皿	13.0	6.3	2.7	5YR5/8（明赤褐） 5YR6/8（橙）	良好 100%	
SB89-02	SB89 カマド	第 211 図	-	R1210	土師器 坏	-	-	(4.3)	7.5YR7/6（橙） 7.5YR7/8（黄橙）	良好 -	
SB90-01	SB90	第 213 図	-	R1147	須恵器 坏蓋	[12.0]	-	(3.7)	2.5Y5/1（黄灰） 2.5Y5/1（黄灰）	良好 20%	
SB90-02	SB90	第 213 図	-	R1215	土師器 坏	-	-	(1.8)	2.5Y5/6（明赤褐） 2.5Y5/6（明赤褐）	良好 -	刻書
SB90-03	SB90 カマド	第 213 図	PL.56	R1222	土師器 皿	13.0	5.9	2.7	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 80%	
SB90-04	SB90 カマド	第 213 図	-	R1217	土師器 鉢	[15.5]	-	(6.3)	5YR6/8（橙） 5YR6/8（橙）	良好 20%	
SB90-05	SB90 カマド	第 213 図	PL.56	R1216 R1218 R1217 R1215 R1225 R1219 R1226	土師器 小型甕	16.8	-	(12.3)	5YR6/8（橙） 5YR6/8（橙）	良好 70%	
SB90-06	SB90 カマド	第 213 図	-	R1226	土師器 小型甕	[15.7]	-	(9.1)	7.5YR5/4（にぶい褐） 7.5YR5/4（にぶい褐）	良好 20%	
SB91-01	SB91	第 217 図	PL.56	R1241 R1253	土師器 坏	[12.8]	[5.1]	4.9	7.5YR7/6（橙） 7.5YR7/6（橙）	良好 40%	
SB91-02	SB91	第 217 図	-	R1253	土師器 坏	[12.5]	-	(5.1)	5YR6/8（橙） 5YR6/8（橙）	良好 20%	
SB91-03	SB91	第 217 図	PL.56	R1241 R1253	土師器 坏	[12.4]	-	[5.0]	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR6/8（橙）	良好 55%	
SB91-04	SB91	第 217 図	-	R1241	土師器 坏	-	-	(4.0)	5YR6/8（橙） 5YR6/8（橙）	良好 -	
SB91-05	SB91	第 217 図	-	R1253	土師器 高坏	-	-	(2.2)	5YR6/6（橙） 5YR7/6（橙）	良好 -	線刻？
SB91-06	SB91	第 217 図	-	R1241	土師器 甕	[19.4]	-	(8.0)	2.5YR7/8（橙） 5YR6/8（橙）	良好 20%	
SB91-07	SB91	第 217 図	-	R1248	土師器 甕	-	[8.4]	(1.9)	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 45%	
SB91-08	SB91	第 217 図	-	R1253	灰釉陶器 碗	-	[7.2]	(1.75)	5Y6/1（灰） 5Y7/1（灰白）	良好 40%	
SB91-09	SB91	第 217 図	-	R1148	灰釉陶器 碗	-	[7.45]	(2.9)	2.5Y6/2（灰黄） 2.5Y5/3（黄褐）	良好 30%	
SB92-01	SB92	第 221 図	-	R1244	須恵器 脚付器種	-	[12.05]	(4.3)	10Y5/1（灰） 10Y5/1（灰）	良好 25%	
SB92-02	SB92	第 221 図	-	R1244	土師器 坏	[10.8]	-	4.6	5YR6/6（橙） 5YR6/8（橙）	良好 20%	
SB92-03	SB92	第 221 図	-	R1244	土師器 坏	-	-	(4.3)	7.5YR6/4（にぶい橙） 7.5YR6/4（にぶい橙）	良好 -	
SB92-04	SB92 カマド	第 221 図	-	R1244	土師器 甕	[18.6]	-	(5.9)	7.5YR3/3（暗褐） 7.5YR4/3（褐）	良好 25%	
SB92-05	SB92	第 221 図	-	R1272 R1274	土師器 甕	-	8.6	(7.5)	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 60%	
SB92-06	SB92 カマド	第 221 図	-	R1244 R1272 R1243	土師器 甕	-	[8.3]	(13.5)	2.5YR5/8（明赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 25%	
SH02-01	SH02	第 224 図	-	R0612	灰釉陶器 碗	-	[6.7]	(1.7)	2.5Y7/1（灰白） 2.5Y7/1（灰白）	良好 40%	
SH02-02	SH02Pit6	第 224 図	-	R0606	灰釉陶器 碗	-	[4.6]	(2.1)	N7/10（灰白） N7/10（灰白）	良好 25%	
SH02-03	SH02Pit3	第 224 図	-	R0603	須恵器 坏蓋	[10.7]	-	4.2	10YR6/1（褐灰） 10YR6/1（褐灰）	良好 40%	窯記号「×」
SH02-04	SH02 北西土坑	第 224 図	PL.56	R0611	土師器 高坏	-	-	(5.7)	5YR7/6（橙） 5YR7/6（橙）	良好 70%	
SK04-01	SK04	第 228 図	PL.56	R0275	土師器 坩	-	-	(4.8)	5YR7/6（橙） 2.5YR6/8（橙）	良好 20%	
SK20-01	SK20	第 232 図	PL.56	R1259	土師器 坏	12.0	5.0	5.3	7.5YR7/6（橙） 7.5YR7/6（橙）	良好 100%	
SK25-01	SK25	第 234 図	PL.56	R0801	縄文土器 深鉢	[26.5]	-	(29.0)	10YR3/2（黒褐） 7.5YR4/3（褐）	良好 55%	
Pit10-01	Pit10	第 238 図	-	R0076	須恵器 坏身	-	-	(3.4)	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 -	
遺構外 -01	K- Ⅱ	第 239 図	PL.58	R0517	縄文土器 深鉢	-	-	(7.2)	10YR4/1（褐灰） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 -	
遺構外 -02	-	第 239 図	PL.58	R0583	縄文土器 深鉢	-	-	(3.9)	5YR6/6（橙） 5YR6/6（橙）	良好 -	
遺構外 -03	-	第 239 図	PL.58	R0592	縄文土器 深鉢	-	-	(5.9)	5YR6/6（橙） 5YR6/6（橙）	良好 -	
遺構外 -04	-	第 239 図	PL.58	R0528	縄文土器 深鉢	-	-	(4.9)	7.5YR5/6（明褐） 7.5YR5/4（にぶい褐）	良好 -	

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
遺構外 -05	-	第 239 図	PL.58	R0646	縄文土器 深鉢	-	-	(4.5)	5YR6/6 (橙) 5YR6/6 (橙)	良好 -	
遺構外 -06	-	第 239 図	PL.58	R0552	縄文土器 深鉢	-	-	(3.6)	2.5YR5/6 (明赤褐) 2.5YR5/6 (明赤褐)	良好 -	
遺構外 -07	-	第 239 図	PL.58	R0534	縄文土器 深鉢	-	-	(4.5)	5YR5/4 (にぶい赤褐) 2.5YR4/4 (にぶい赤褐)	良好 -	
遺構外 -08	-	第 239 図	PL.58	R0798	縄文土器 深鉢	-	-	(4.3)	7.5YR4/4 (褐) 10YR3/4 (暗褐)	良好 -	
遺構外 -09	-	第 239 図	PL.58	R0560	縄文土器 深鉢	-	-	(6.1)	10YR3/2 (黒褐) 5YR5/6 (明赤褐)	良好 -	
遺構外 -10	K- Ⅱ SH02 Pit5	第 239 図	PL.58	R0605	縄文土器 深鉢	-	-	(6.4)	7.5YR4/3 (褐) 7.5YR5/4 (にぶい褐)	良好 -	
遺構外 -11	-	第 239 図	PL.59	R1303	縄文土器 深鉢	-	-	(10.0)	5YR3/4 (明赤褐) 2.5YR4/8 (赤褐)	良好 -	
遺構外 -12	-	第 239 図	PL.58	R0914	縄文土器 深鉢	-	-	(5.7)	10YR3/1 (黒褐) 2.5YR5/8 (明赤褐)	良好 -	
遺構外 -13	-	第 239 図	PL.58	R0645	縄文土器 深鉢	-	-	(9.2)	5YR6/6 (橙) 5YR6/6 (橙)	良好 -	
遺構外 -14	-	第 239 図	PL.58	R0636	縄文土器 深鉢	-	-	(8.8)	7.5YR6/6 (橙) 10YR5/3 (にぶい黄褐)	良好 -	
遺構外 -15	-	第 239 図	PL.58	R0620	縄文土器 深鉢	-	-	(5.0)	7.5YR6/6 (橙) 5YR6/8 (橙)	良好 -	
遺構外 -16	-	第 239 図	PL.58	R0572	縄文土器 深鉢	-	-	(5.0)	5YR5/6 (明赤褐) 5YR5/6 (明赤褐)	良好 -	
遺構外 -17	-	第 239 図	PL.59	R0760	縄文土器 深鉢	-	9.0	(9.1)	10YR6/4 (にぶい黄橙) 5YR5/6 (明赤褐)	良好 70%	
遺構外 -18	-	第 239 図	-	R0536	縄文土器 深鉢	-	[7.5]	(1.6)	10YR6/4 (にぶい黄橙) 2.5YR5/6 (明赤褐)	良好 30%	
遺構外 -19	M- Ⅱ	第 239 図	PL.58	R0113	弥生土器 壺	-	-	(4.2)	2.5YR5/8 (明赤褐) 7.5YR5/6 (明褐)	良好 -	
遺構外 -20	M- Ⅱ	第 239 図	PL.58	R0515	弥生土器 壺	-	-	(5.3)	2.5YR5/8 (明赤褐) 10YR6/4 (にぶい黄橙)	良好 -	
遺構外 -31	F- Ⅲ	第 240 図	PL.59	R0516	土師器 坏	[14.1]	-	(4.9)	5YR6/6 (橙) 10YR7/4 (にぶい黄橙)	良好 40%	
遺構外 -32	M- Ⅲ・Ⅳ	第 240 図	PL.59	R0168	土師器 坏	[13.3]	-	(4.0)	7.5YR7/6 (橙) 5YR7/6 (橙)	良好 45%	
遺構外 -33	L- Ⅲ	第 240 図	-	R0450	土師器 坏	[13.7]	-	(3.9)	5YR6/6 (橙) 5YR6/8 (橙)	良好 20%	
遺構外 -34	L- Ⅲ	第 240 図	-	R0416	土師器 坏	[12.7]	[5.85]	5.0	7.5YR7/6 (橙) 5YR6/8 (橙)	軟質 40%	
遺構外 -35	K - Ⅰ	第 240 図	-	R0014	土師器 坏	[11.0]	-	(4.0)	2.5YR7/8 (橙) 7.5YR7/6 (橙)	軟質 20%	
遺構外 -36	L- Ⅱ	第 240 図	-	R0018	土師器 坏	[9.9]	-	(2.7)	10YR1.7/1 (黒) 10YR3/3 (暗褐)	良好 20%	
遺構外 -37	M- Ⅱ	第 240 図	PL.59	R0471	土師器 坏	[12.2]	-	4.0	2.5YR4/6 (赤褐) 2.5YR4/6 (赤褐)	良好 40%	
遺構外 -38	N- Ⅱ	第 240 図	PL.60	R0317	土師器 坏	11.0	5.2	3.5	2.5YR4/6 (赤褐) 2.5YR4/8 (赤褐)	良好 50%	
遺構外 -39	L- Ⅱ	第 240 図	PL.60	R0018	土師器 埦	[14.6]	-	4.6	5YR6/6 (橙) 5YR6/6 (橙)	軟質 45%	
遺構外 -40	L- Ⅱ	第 240 図	PL.60	R0018	土師器 坏	[12.2]	[6.0]	4.0	5YR7/6 (橙) 5YR6/6 (橙)	軟質 40%	
遺構外 -41	L- Ⅱ	第 240 図	PL.60	R0018	土師器 坏	[12.1]	6.7	3.5	7.5YR6/3 (にぶい褐) 7.5YR5/3 (にぶい褐)	軟質 40%	
遺構外 -42	-	第 240 図	PL.60	R1277	土師器 坏	11.4	5.6	3.3	5YR7/8 (橙) 5YR7/6 (橙)	軟質 100%	
遺構外 -43	M- Ⅲ	第 240 図	-	R0610	土師器 坏	[16.0]	-	(4.4)	5YR6/8 (橙) 7.5YR7/6 (橙)	良好 20%	
遺構外 -44	M- Ⅰ	第 240 図	-	R0020	土師器 皿	[11.6]	[5.5]	2.8	5YR6/8 (橙) 7.5YR6/6 (橙)	良好 20%	
遺構外 -45	L- Ⅱ	第 240 図	-	R0518	土師器 坏	-	[6.3]	(3.0)	2.5YR4/4 (にぶい赤褐) 2.5YR4/6 (赤褐)	良好 40%	
遺構外 -46	表採	第 240 図	-	R1258	土師器 坏	-	-	(4.3)	2.5YR4/8 (赤褐) 2.5YR5/8 (明赤褐)	良好 -	
遺構外 -47	M- Ⅲ	第 240 図	-	R0031	土師器 坏	-	[5.3]	(2.0)	7.5YR7/6 (橙) 7.5YR7/6 (橙)	良好 50%	
遺構外 -48	M- Ⅲ	第 240 図	-	R0030	土師器 坏	-	[5.5]	(2.3)	5YR6/6 (橙) 5YR6/6 (橙)	良好 25%	
遺構外 -49	L- Ⅲ	第 240 図	-	R0415	土師器 坏	-	5.5	(1.4)	7.5YR7/6 (橙) 10YR8/4 (浅黄橙)	軟質 60%	
遺構外 -50	M- Ⅳ	第 240 図	-	R0157	土師器 坏	-	5.4	(1.4)	7.5YR8/4 (浅黄橙) 7.5YR7/4 (にぶい橙)	軟質 80%	
遺構外 -51	L- Ⅱ	第 240 図	-	R0018	土師器 高台	-	[7.6]	(2.5)	5YR6/4 (にぶい橙) 5YR6/3 (にぶい橙)	軟質 45%	
遺構外 -52	P-32	第 240 図	-	R0557	土師器 埦	-	8.0	(2.2)	2.5YR5/4 (にぶい赤褐) 5YR4/4 (にぶい赤褐)	良好 50%	
遺構外 -53	M . Ⅰ -5	第 240 図	-	R0378	土師器 坏	-	[4.4]	(2.0)	2.5YR5/8 (明赤褐) 2.5YR5/8 (明赤褐)	良好 60%	
遺構外 -54	M- Ⅱ	第 240 図	PL.60	R0367	土師器 坏	-	-	(4.2)	2.5YR5/8 (明赤褐) 2.5YR5/8 (明赤褐)	良好 -	
遺構外 -55	N -0、I-5	第 240 図	PL.60	R0490	土師器 坏	-	-	(3.5)	2.5YR4/6 (赤褐) 2.5YR5/6 (明赤褐)	良好 -	墨書

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別 分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
遺構外 -56	M - Ⅰ	第 240 図	PL.60	R0020	土師器 坏	-	-	(3.5)	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 -	墨書「内」
遺構外 -57	M- Ⅱ	第 240 図	-	R0445	土師器 高台	-	[12.3]	(4.2)	5YR7/6（橙） 5YR7/6（橙）	軟質 30%	
遺構外 -58	K・L- Ⅲ	第 240 図	-	R0023	土師器 高台	-	[7.4]	(3.3)	5YR7/6（橙） 5YR6/6（橙）	良好 20%	
遺構外 -59	L- Ⅲ	第 240 図	-	R0303	土師器 高台	-	7.8	(2.4)	10YR6/4（にぶい黄橙） 7.5YR7/2（にぶい橙）	良好 95%	
遺構外 -60	SB03 周辺	第 240 図	-	R0044	土師器 皿	[16.1]	[7.75]	2.4	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR5/6（明赤褐）	良好 20%	
遺構外 -61	M- Ⅱ	第 240 図	-	R0372	土師器 皿	[13.5]	[7.3]	2.2	2.5YR5/6（明赤褐） 2.5YR4/8（赤褐）	良好 25%	
遺構外 -62	F- Ⅲ	第 240 図	-	R0434	土師器 高坏	[19.0]	-	(5.9)	5YR6/6（橙） 10YR7/4（にぶい黄橙）	良好 20%	
遺構外 -63	M- Ⅱ	第 240 図	-	R0514	土師器 高坏	-	12.0	(9.2)	5YR6/6（橙） 5YR6/6（橙）	良好 60%	
遺構外 -64	-	第 240 図	-	R0248	土師器 高坏	-	-	(2.0)	7.5YR7/6（橙） 5YR6/6（橙）	良好 80%	
遺構外 -65	表採	第 240 図	-	R1258	土師器 高坏	-	-	(4.3)	7.5YR6/6（橙） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 55%	
遺構外 -66	F- Ⅲ	第 240 図	-	R0434	土師器 高坏	-	-	(6.9)	2.5YR4/8（赤褐） 2.5YR5/8（明赤褐）	良好 25%	
遺構外 -67	L- Ⅳ	第 240 図	-	R0109	土師器 高坏	-	-	(7.8)	2.5YR6/8（橙） 2.5YR6/8（橙）	良好 80%	
遺構外 -68	L- Ⅱ	第 240 図	-	R0019	土師器 高台	-	[10.0]	(5.1)	7.5YR7/4（にぶい橙） 7.5YR6/4（にぶい橙）	軟質 25%	
遺構外 -69	L- Ⅲ	第 241 図	PL.60	R0106	土師器 小型甕	[12.5]	-	(4.8)	2.5YR5/6（明赤褐） 5YR4/3（にぶい赤褐）	良好 30%	
遺構外 -70	L- Ⅱ	第 241 図	-	R0018	土師器 鉢	[13.2]	-	(5.7)	5YR6/6（橙） 2.5YR6/8（橙）	軟質 20%	
遺構外 -71	L- Ⅲ	第 241 図	PL.60	R0323	土師器 壺	-	-	(2.8)	7.5YR7/6（橙） 7.5YR6/6（橙）	良好 -	
遺構外 -72	K- Ⅱ	第 241 図	PL.61	R0517	土師器 甕	-	-	(6.3)	7.5YR6/6（橙） 10YR6/4（にぶい黄橙）	良好 -	
遺構外 -73	L- Ⅲ	第 241 図	-	R0074	土師器 甕	-	-	(5.5)	2.5YR4/6（赤褐） 2.5YR4/6（赤褐）	良好 -	
遺構外 -74	L- Ⅲ	第 241 図	-	R0450	土師器 甕	-	-	(3.5)	5YR6/6（橙） 5YR6/6（橙）	良好 -	
遺構外 -75	K・L- Ⅲ	第 241 図	-	R0023	土師器 甕	-	-	(2.3)	7.5YR5/2（灰褐） 7.5YR7/4（にぶい橙）	良好 -	
遺構外 -76	M - Ⅰ	第 241 図	PL.61	R0108	土師器 甕	-	6.2	(6.4)	5YR5/6（明赤褐） 5YR6/8（橙）	良好 60%	
遺構外 -77	N- Ⅲ	第 241 図	-	R0039	土師器 甕	-	9.3	(4.9)	2.5YR4/6（赤褐） 7.5YR3/2（黒褐）	良好 60%	
遺構外 -78	L- Ⅲ	第 241 図	PL.61	R0416	土師器 甕	-	[6.1]	(2.7)	7.5YR7/6（橙） 7.5YR4/2（灰褐）	良好 25%	
遺構外 -79	L- Ⅳ	第 241 図	PL.61	R0029	土師器 堝	-	-	(6.4)	5YR4/8（赤褐） 5YR4/8（赤褐）	良好 -	
遺構外 -80	L- Ⅱ	第 242 図	PL.61	R0018	灰釉陶器 碗	[15.1]	[7.1]	4.1	2.5Y7/1（灰白） 2.5Y7/1（灰白）	良好 30%	
遺構外 -81	M- Ⅲ	第 242 図	-	R0030	灰釉陶器 碗	-	[7.6]	(1.7)	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 30%	
遺構外 -82	-	第 242 図	-	R0972	灰釉陶器 碗	-	[7.25]	(2.1)	10YR7/1（灰白） 7.5YR6/1（褐灰）	良好 45%	
遺構外 -83	M- Ⅱ	第 242 図	PL.61	R0445	灰釉陶器 碗	[12.7]	[5.5]	3.7	2.5Y5/1（黄灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 40%	
遺構外 -84	F- Ⅲ	第 242 図	PL.61	R0415	灰釉陶器 碗？	-	[9.0]	(2.3)	2.5Y7/1（灰白） 2.5Y7/1（灰白）	良好 40%	
遺構外 -85	表採	第 242 図	-	R0033	灰釉陶器 碗	-	[5.8]	(2.3)	2.5Y6/2（灰黄） 2.5Y6/2（灰黄）	良好 25%	
遺構外 -86	L- Ⅲ	第 242 図	-	R0304	灰釉陶器 碗	-	[7.5]	(2.0)	10YR7/1（灰白） 10YR7/2（にぶい黄橙）	良好 20%	
遺構外 -87	M- Ⅳ	第 242 図	-	R0157	灰釉陶器 碗	[16.5]	-	(4.8)	2.5Y7/1（灰白） 10YR7/1（灰白）	良好 30%	
遺構外 -88	L- Ⅱ	第 242 図	-	R0035	灰釉陶器 碗	-	[7.7]	(2.9)	2.5Y7/2（灰黄） 10YR7/1（灰白）	良好 20%	
遺構外 -89	L- Ⅲ	第 242 図	PL.61	R0074	灰釉陶器 碗	[14.2]	6.2	5.4	10YR5/1（褐灰） 2.5Y5/1（黄灰）	良好 50%	
遺構外 -90	L- Ⅱ	第 242 図	-	R0035	灰釉陶器 皿	[14.7]	-	(2.2)	10YR7/1（灰白） 2.5Y7/1（灰白）	良好 20%	
遺構外 -91	表採	第 242 図	-	R0033	灰釉陶器 段皿	[17.35]	-	(2.55)	5Y7/2（灰白） 5Y6/2（灰オリーブ）	良好 20%	
遺構外 -92	表採	第 242 図	-	R0040	須恵器 坏身	[7.9]	-	3.3	7.5YR3/2（黒褐） 7.5YR4/1（褐灰）	良好 30%	
遺構外 -93	表採	第 242 図	PL.61	R1124	須恵器 坏身	[10.75]	-	(3.1)	5Y5/1（灰） 5Y6/1（灰）	良好 40%	
遺構外 -94	M- Ⅱ	第 242 図	-	R0447	須恵器 坏身	[11.0]	-	(4.0)	2.5YR6/2（灰黄） 2.5YR6/1（黄灰）	良好 20%	
遺構外 -95	M- Ⅱ	第 242 図	-	R0514	須恵器 坏身	-	4.4	(1.7)	2.5YR6/1（黄灰） 2.5YR6/1（黄灰）	良好 70%	窯記号「-」
遺構外 -96	表採	第 242 図	-	R0994	須恵器 箱坏？	-	[8.3]	(2.1)	2.5Y7/1（灰白） 5Y7/1（灰白）	軟質 30%	

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別 分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調 外面色調	焼成 残存率	備考
遺構外 -97	L- Ⅱ	第 242 図	-	R0018	須恵器 蓋 or 坏	[12.2]	-	(2.9)	2.5Y6/1（黄灰） 2.5Y6/1（黄灰）	良好 25%	
遺構外 -98	-	第 242 図	-	R1304	須恵器 坏蓋	[14.3]	-	(2.1)	2.5Y6/1（黄灰） 5Y6/1（灰）	良好 20%	
遺構外 -99	N -0、I-5	第 242 図	-	R0490	須恵器 高坏	[15.3]	-	(3.9)	2.5Y5/1（黄灰） 2.5Y5/1（黄灰）	良好 20%	
遺構外 -100	L- Ⅲ	第 242 図	PL61	R0449	須恵器 瓶類 or 壺	-	9.0	(2.1)	10YR4/1（褐灰） 10YR6/1（褐灰）	良好 90%	
遺構外 -101	表採	第 242 図	PL.62	R0040	須恵器 フラスコ瓶	-	-	(3.6)	10YR6/2（灰黄褐） 10Y5/2（オリーブ灰）	良好 20%	
遺構外 -102	M- Ⅰ	第 242 図	PL.62	R0001	須恵器 短頸壺	[8.45]	-	6.25	2.5Y7/1（灰白） 5Y5/3（灰オリーブ）	良好 50%	
遺構外 -103	L- Ⅲ	第 242 図	PL.62	R0392	須恵器 甕	-	-	(6.2)	10YR5/1（褐灰） 2.5Y4/2（暗黄灰）	良好 -	
遺構外 -104	M- Ⅲ・Ⅳ	第 242 図	PL.62	R0168	須恵器 甕 or 壺	-	-	(3.4)	10R4/2（灰赤） 7.5R4/4（にぶい赤）	良好 -	
遺構外 -105	M- Ⅳ	第 242 図	PL.62	R0032	須恵器 甕	-	-	(4.9)	2.5Y4/1（黄灰） 10R4/2（灰赤）	良好 -	
遺構外 -106	M- Ⅰ	第 242 図	-	R0511	陶器 鉢？	-	-	(4.5)	2.5YR4/1（赤灰） 2.5YR4/1（赤灰）	良好 -	
遺構外 -107	表採	第 242 図	-	R1258	陶器 蓋？	-	-	(3.2)	10R4/1（暗赤灰） 2.5R4/1（赤灰）	良好 -	

金属製品

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別	分類	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
確認 -42	1Tr	第 12 図	PL.38	R0004	農工具	鑿	(12.5)	(3.3)	(1.0)	105.69	
SB03-08	SB03 カマド	第 20 図	PL.38	R0125	武器	鉄鏃	(6.2)	[0.35]	[0.3]	7.47	茎部
SB03-09	SB03 カマド	第 20 図	PL.38	R0128	煮炊具	鉄鍋	(6.0)	把手部幅 [4.2]	把手部長 2.5	103.33	
SB14-04	SB14 カマド	第 44 図	-	R0210	農工具	鎌	(3.1)	(2.15)	(0.25)	3.38	
SB17-05	SB17 覆土	第 53 図	PL.41	R0254	農工具	刀子	(4.8)	0.8	0.3	3.23	
SB18-08	SB18	第 55 図	PL.41	R0316	武器	鉄鏃	(4.7)	0.55	0.3	3.70	頸部～茎部
SB19-09	SB19Pit02	第 59 図	PL.42	R0285	農工具	刀子	(6.7)	(0.5)	(6.2)	9.88	
SB26-05	SB26 床	第 70 図	PL.43	R0314	武器	鉄鏃	(13.8)	0.7	0.45	13.09	尖根鑿箭
SB29-08	SB29 床	第 76 図	PL.44	R0344	農工具	刀子	(20.4)	(13.4)	7.0	45.11	
SB29-09	SB29 床	第 76 図	PL.44	R0351	農工具	刀子	(7.5)	(2.3)	5.2	7.03	
SB29-10	SB29 床	第 76 図	PL.44	R0351	農工具	鎌	(7.4)	1.5	0.2	24.38	
SB29-11	SB29	第 76 図	PL.44	R0505	鉄製品	不明鉄製品	(7.3)	0.9	0.3	7.65	
SB29-12	SB29	第 76 図	PL.44	R0505	鉄製品	不明鉄製品	(9.2)	0.6	0.4	13.04	
SB29-13	SB29 床	第 76 図	PL.44	—	金銅製品	小型耳環	(1.1)	(1.1)	0.23	0.37	
SB29-14	SB29 床	第 76 図	PL.44	—	金銅製品	小型耳環	1.1	(1.05)	0.2	0.29	
SB39-08	SB39 カマド	第 93 図	PL.46	R0397	武器	鉄鏃	(4.2)	0.7	0.45	3.26	尖根鑿箭
SB39-09	SB39	第 93 図	PL.46	R0397	武器	鉄鏃	(6.2)	0.4	0.25	3.70	頸部
SB42-01	SB42 床	第 101 図	PL.46	—	農工具	鉄製紡錘車	(24.5)	紡輪直径 5.1	紡茎径 0.5	50.12	
SB42-02	SB42	第 101 図	PL.46	—	武器	鉄鏃	(5.3)	0.5	0.45	3.16	頸部～茎部
SB45-12	SB45 床	第 107 図	PL.47	R0485	武器	鉄鏃	(7.4)	[3.3]	0.8	18.74	平根三角形
SB53-10	SB53	第 130 図	PL.48	R1073	武器	鉄鏃	(3.7)	0.6	0.3	2.80	頸部
SB53-11	SB53	第 130 図	PL.48	R1073	鉄製品	不明鉄製品	9.5	1.5	0.15	9.77	
SB63-18	SB63	第 157 図	PL.51	R1301	農工具	鎌	11.7	3.0	0.15	29.76	
SB70-02	SB70	第 177 図	PL.53	R0731	農工具	刀子	(7.5)	(3.8)	(3.7)	9.47	
SB72-07	SB72	第 181 図	-	R0946	農工具	鉄製紡錘車	(2.6)	紡輪直径 [5.2]	紡茎厚 0.5	12.75	
SB76-09	SB76	第 191 図	PL.54	R1150	武器	鉄鏃	(6.25)	0.54	0.47	5.09	頸部
SK09-01	SK09	第 229 図	PL.57	R1302	火打金		(5.7)	(2.95)	(0.35)	7.85	
SK09-02	SK09	第 229 図	PL.57	—	銭貨	威平元寶	2.4	2.4	0.1	2.87	
SK09-03	SK09	第 229 図	PL.57	—	銭貨	景徳元寶	2.4	2.4	0.14	3.85	
SK09-04	SK09	第 229 図	PL.57	—	銭貨	天聖元寶	2.4	2.4	0.12	2.91	
SK09-05	SK09	第 229 図	PL.57	—	銭貨	至和元寶	2.3	2.3	0.13	3.28	
SK09-06	SK09	第 229 図	PL.57	—	銭貨	元豊通寶	2.35	2.35	0.12	3.31	
SK09-07	SK09	第 229 図	PL.57	—	銭貨	元豊通寶	2.45	2.45	0.095	3.00	
SK12-02	SK12	第 230 図	PL.57	R0739	火打金		(7.1)	2.45	0.27	11.69	
SK12-03	SK12	第 230 図	PL.57	R0741	銭貨	至道元寶	2.4	2.4	0.11	3.10	
SK12-04	SK12	第 230 図	PL.57	R0741	銭貨	皇宋通寶	2.45	2.45	0.11	3.02	
SK12-05	SK12	第 230 図	PL.57	R0741	銭貨	熙寧元寶	2.3	2.3	0.13	3.33	
SK12-06	SK12	第 230 図	PL.57	R0741	銭貨	元豊通寶	2.35	2.35	0.12	3.15	
SK12-07	SK12	第 230 図	PL.57	R0741	銭貨	紹聖元寶	2.45	2.45	0.13	3.89	
SK12-08	SK12	第 230 図	PL.57	R0741	銭貨	元符通寶	2.35	2.35	0.12	3.39	
SK13-01	SK13	第 231 図	PL.57	R0787	火打金		6.25	2.75	0.3	13.28	
SK13-02	SK13	第 231 図	PL.57	—	銭貨	開元通寶？	2.4	2.4	0.125	3.26	
SK13-03	SK13	第 231 図	PL.57	—	銭貨	皇宋通寶	2.3	2.3	0.1	2.05	
SK13-04	SK13	第 231 図	PL.57	—	銭貨	熙寧元寶	2.35	2.35	0.11	2.71	
SK13-05	SK13	第 231 図	PL.57	—	銭貨	熙寧元寶	2.35	2.35	0.11	3.33	
SK13-06	SK13	第 231 図	PL.57	—	銭貨	元豊通寶	2.3	2.3	0.12	3.15	
SK13-07	SK13	第 231 図	PL.57	—	銭貨	元豊通寶	2.4	2.4	0.1	3.25	
SK13-08	SK13	第 231 図	PL.57	—	銭貨	元豊通寶	2.3	2.3	0.15	2.58	

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別	分類	全長（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
SK13-09	SK13	第 231 図	PL.57	—	銭貨	元豊通寶	2.3	2.3	0.1	0.94	
SK13-10	SK13	第 231 図	PL.57	—	銭貨	嘉定通寶	2.35	2.4	0.1	2.29	
SK13-11	SK13	第 231 図	PL.57	—	銭貨	洪武通寶	2.2	2.2	0.14	2.87	
SK13-12	SK13	第 231 図	PL.57	—	銭貨	不明	2.3	2.3	0.11	2.84	
SK21-01	SK21	第 233 図	PL.57	R1305	銭貨	元豊通寶	2.6	2.5	0.73	18.26	6 枚が固着
遺構外 -110	-	第 243 図	PL.62	R0676	釘		（10.45）	0.46	0.44	11.33	
遺構外 -111	L- Ⅱ	第 243 図	PL.62	R0002	釘		（4.25）	0.3	0.3	2.05	
遺構外 -112	-	第 243 図	PL.62	R0499	農工具	刀子	（9.4）	（4.45）	4.95	8.06	
遺構外 -113	L- Ⅱ	第 243 図	PL.62	R0022	銅製品	不明銅製品	（1.6）	鋲頭径 0.3	0.07	0.44	
遺構外 -114	-	第 243 図	PL.62	R0897	銭貨	天聖元寶	2.4	2.4	0.11	2.66	
遺構外 -115	-	第 243 図	PL.62	R0898	銭貨	元豊通寶	2.35	2.35	0.085	2.35	
遺構外 -116	-	第 243 図	PL.62	R0896	銭貨	洪武通寶	2.3	2.3	0.14	2.74	

石器・石製品

報告番号	出土位置	挿図番号	図版番号	R 番号	種別	分類	全長（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
確認 -40	1Tr	第 12 図	PL.38	R0004	石製品	砥石	5.5	4.9	2.5	88.0	
確認 -41	3Tr	第 12 図	PL.38	R0013	石製品	砥石	7.5	4.7	2.5	67.5	
SB08-06	SB08	第 27 図	-	R0116	石製品	砥石	4.6	4.5	2.1	53.19	
SB19-05	SB19 床	第 59 図	PL.42	R0284	石製品	砥石	11.9	8.2	5.6	864.3	
SB19-06	SB19	第 59 図	PL.42	R0288	石製品	砥石	13.0	7.4	4.7	735.7	
SB19-07	SB19	第 59 図	PL.42	R1246	石製品	砥石	（9.4）	5.0	4.0	227.4	
SB19-08	SB19 カマド	第 59 図	PL.42	R0287	石器	石錘	12.9	8.1	2.8	482.0	
SB51-07	SB51	第 122 図	PL.47	R1248	石製品	提砥	4.7	3.3	2.9	47.2	
SB66-12	SB66 床	第 167 図	PL.53	R0691	石製品	砥石	17.9	13.7	6.3	2376	
SB67-03	SB67 床	第 170 図	PL.53	R0728	石製品	砥石	10.5	6.0	4.2	292.4	
SB77-04	SB77	第 194 図	PL.55	R1256	石製品	砥石	28.1	11.6	7.4	3740	
SB89-03	SB89 床	第 211 図	PL.56	R1121	石製品	砥石	12.6	5.0	3.2	236.1	
SK12-01	SK12	第 230 図	PL.57	R0740	石製品	火打石	5.1	4.8	3.2	73.6	
遺構外 -21	-	第 239 図	PL.58	R0649	石器	打製石斧	8.8	4.8	1.7	98.7	
遺構外 -22	-	第 239 図	PL.58	R0794	石器	打製石斧	（4.5）	4.1	1.3	26.0	
遺構外 -23	SB48 カマド	第 239 図	PL.58	R0793	石器	打製石斧	8.1	3.9	1.6	59.6	
遺構外 -24	-	第 239 図	PL.58	R0894	石器	打製石斧	8.7	4.4	1.5	84.6	
遺構外 -25	-	第 239 図	PL.58	R0893	石器	打製石斧	15.9	4.7	2.1	193.6	
遺構外 -26	-	第 239 図	PL.58	R0598 R0599	石器	打製石斧	12.0	5.2	2.4	133.2	
遺構外 -27	SB65 カマド	第 239 図	PL.58	R1214	石器	打製石斧	8.2	6.7	1.8	120.4	
遺構外 -28	K- Ⅱ	第 239 図	PL.59	R0517	石器	磨敲石	6.4	6.3	1.7	113.1	
遺構外 -29	SB73	第 239 図	PL.59	R0937	石器	磨敲石	13.1	6.9	3.1	480.9	
遺構外 -30	SB78	第 239 図	PL.59	R1009	石器	石皿	20.5	11.4	5.4	2167.0	
遺構外 -108	M- Ⅱ	第 243 図	PL.62	R0472	石製品	砥石	10.3	4.6	3.5	196.2	
遺構外 -109	L- Ⅱ	第 243 図	PL.62	R0021	石製品	腰帯具	2.55	3.50	5.5	8.37	

報告書抄録

ふりがな	うとうがわいせきえふちく
書名	宇東川遺跡 F 地区
副書名	
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 71 集
編著者名	藤村　翔（編著）・若林 美希（編）・小島 利史・志崎 江莉子
編集機関	富士市教育委員会　（担当課：富士市市民部文化振興課）
所在地	〒 417-8601　静岡県富士市永田町 1 丁目 100 番地　　TEL　0545-55-2875
発行年月日	令和 3 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	地区名	調査期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
うとうがわいせき	しずおかけん ふじし うとうがわにしまち	22210	050	35°　10′　10″ 138°　42′　12″	宇東川遺跡 F 地区	19950206 ～ 19950224	266.10	確認調査
宇東川遺跡	静岡県 富士市 宇東川西町					19950222 ～ 19950323 19950414 ～ 19960328	1344.10	本発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇東川遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳～平安時代 中近世	竪穴建物　84 掘立柱建物　2 溝　1 土坑　20 ピット　144	縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器 灰釉陶器・緑釉陶器 石器 石製品 金属製品	土師器甑 腰帯具 鉄製紡錘車

要　約

富士市宇東川西町に所在する宇東川遺跡は、富士山南麓に広がる丘陵の末端部、松原川の河岸段丘面に立地する集落跡であり、本書で報告したＦ地区は、松原川に最も近接した、段丘下段に位置する。これまでの調査で縄文時代から中近世に至る多くの遺構や遺物が検出されており、水と土地に恵まれた当地だからこそ、市内でも有数の複合遺跡が形成されたものと考えられる。

F 地区の本発掘調査では、竪穴建物 84 棟、掘立柱建物 2 棟、溝 1 条、土坑 20 基、ピット 144 基を調査し、縄文時代から平安時代、中近世の遺物が出土した。縄文時代では、中期後半（曽利Ⅳ式期）の埋甕の可能性のある土坑のほか、加曽利ＥⅣ式、曽利Ⅳ式を主体とする縄文土器や同時期とみられる石器が出土した。また、市内では珍しい弥生時代中期後葉の土器片が出土した。竪穴建物はすべて古墳時代中期後半から平安時代のものであり、5 世紀後半の低地開発を経て、10 世紀後半頃まで長期間・安定的に継続した集落の実態が明らかになった。建物規模は潤井川下流域の集落と比べると全体的に小さいが、奈良・平安時代には転用硯や石製腰帯具、墨書・刻書土器、鉄製紡錘車などが出土しており、浮島沼北西岸地域における、律令体制下の里（郷）の中心的集落の有力候補地として評価できる内容を誇っている。中近世には、松原川西岸一帯が墓地として利用されたようである。

富士市埋蔵文化財調査報告　第 71 集

宇東川遺跡 F 地区

発行年月日　令和 3 年 3 月 31 日

編集・発行　富 士 市 教 育 委 員 会
〒 417-8601　静岡県富士市永田町一丁目 100 番地
TEL 0545-55-2875　FAX 0545-53-0789
E-mail:si-bunka@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本　文光堂印刷株式会社
〒 410-0871　静岡県沼津市西間門 68 番地の 1

（富士市行政資料登録番号　R2-58）